

なんでこうなるの？

とんこつラーメン

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ちよつとした気晴らしで書きました。

読者の皆様も、気軽に駄菓子でも食べるような感覚で読んでくれると嬉しいです。

## 目次

なんでこうなるの？	1
前はプロローグ、ここからが第一話だ	8
早速ピンチになりました	17
一夏ハーレム崩壊の瞬間	29
夢であるように	40
癒し系キャラ	52
甘い!!	61
羞恥プレイか!!	74
頑張れ、男の子	83
生徒会長と女の子の日	96
私の出番が無いっ!?(by弥生)	109
中国から来た少女	120
ご飯ぐらい静かに食べられないの？	131
私にどうしろと？	140
なにがどうしてこうなった？	153
試合開始!	164
逃げろ!逃げろ!逃げろ!	175
守る為の勇氣	187
知らない所で終わった事件	200
また私の出番が無い!?	212
久々の帰省	223
伝説の少女A	234
残酷な現実の一端	247
フランスとドイツからコンニチワ	255

胃薬ください・・・	268
ARCHITECT	278
じよ・・・冗談でしょ？	288
弥生ちゃんの耳かきボイス（一夏編）	298
弥生ちゃんの耳かきボイス（楯無編）	308
弥生ちゃんの添い寝ボイス（ラウラ編）	319
舞台裏の役者達	331
僕だって頑張ってるんだよ〜？	341
知ってたよ？	351
生徒会長大活躍？	362
汚部屋は消毒だ〜！	372
娘の為に、会社の為に	385
和解	395
ここから始まる	404
人の噂も七十五日	415
私のパートナーは誰になる？	425
・・・誰？	436
これが私の初陣です！（前編）	447
これが私の初陣です！（後編）	456
お前は俺を怒らせた	467
大浴場解禁？	478
また気苦労が増える・・・	489
聖母の抱擁と愚者達の末路	500
もうすぐ夏ですね。気取るつもりはありません。	509
ここが一番の勝負時	520

悪い事は出来ないねく	533
今度こそそのんびりと	544
始まりました、臨海学校	554
天災兎と夏の海	565
インドア派だって海は好き	574
今年の夏は今年しかない	584
激闘？死闘？ビーチバレー！	594
旅館での一時	605
夜の女子会？	616
温泉に入ろう	626
天災兎と催眠術師	636
紅い椿と高速の襲撃者	646
角の生えた緑の防人	658
宇宙恐竜大換装	667
宣戦布告	677
それぞれの決意	689
ラブえす	701
板垣弥生の中学生日記（一年生編）	714
板垣弥生の中学生日記（二年生編）	725
板垣弥生の中学生日記（三年生編）	735
夏休みは何をする？	747
一夏の特訓 その1	758
ヒロインズの御宅訪問	768
一夏の特訓 その2	779
板垣家の大掃除	790

一夏の特訓 その3	801
とつても綺麗になりました	812
一夏の特訓 その4	823
夏の思い出	833
一夏の特訓 その5	846
酒は飲んでも飲まれるな	857
一夏の特訓 その6	870
やっちゃまった!!	878
一夏の特訓 その7 (バイト)	890
決戦 〳夏コミ〳	900
交差する物語	913
勉強会と福音の帰還	924
一夏の特訓 その8	935
楽しい夏祭り (弥生編)	944
楽しい夏祭り (一夏編)	954
幕南名物『総理の焼きそば』	963
ラーメン大好き板垣さん	973
特別編 弥生のバレンタイン (前編)	983
特別編 弥生のバレンタイン (後編)	994
ラーメンコンビと夏の花	1004
一夏の特訓 その9	1013
第25回板垣家ペット会議	1020
馬鹿なアイツの意外な成長	1029
パイルバンカーと生徒会	1037
副会長に就任しました	1047

ちいいいがうだろおおおおおっ!! (切実)

これ・・・本当に着なきやダメ?

みんなおいでよ学園祭

文化祭は準備も楽しい

サブキャラ(＋α)全員集合!

忙しすぎだろ!!

サブキャラメドレー再び

最初は同級生組

なんでこうなるの？

あく…どうも。

突然ですが自己紹介します。

私は『板垣弥生』と言う、皆さんもよくご存じの『TS系転生者』って奴です。

因みにこれ、『いたがき やよい』って読むのであしからず。

今は立派な女になってますけど、前世ではちゃんと男をしてました。

今ではもう完全に女としての生活に慣れました…多分。

完全に恥の上塗りなので、転生までの詳しい経緯は今省くけど。テンプレの如く死んでから、これまたテンプレの如く神様に会って、テンプレの如く転生しました。

テンプレだらけの第二の人生を与えられた私は今…非常に拙い事になっています。

「ど…どうした!?! 気分でも悪いのか!?!」

「い…いや…私…はだい…じょう…」

「まあ！ 大変ですわ！」

「聞いて…」

クラスメイトの『篠ノ之箒』と『セシリア・オルコット』がこつちを心配そうに覗きこむ。

誰もそんな事を頼んでいないのに。

この二人を見れば分かると思うが、私は『インフィニット・ストラトス』、通称『IS』の世界に転生した。

この世界がISだと気が付いた瞬間から、私は原作キャラとは一切関わらずモブキャラとして第二の人生を全うしようと思っていたのに…。

「大丈夫？ 保健室にでも行く?」

「そ…そんな…事よりも…私…の事は放…っておい…」

「ほら。僕が背中をさすってあげるよ」

「そうだ！ 軍から支給されている薬が部屋にあった筈。今から取っ



てきて……」

「話を聞いて……」

今度は凰鈴音とシャルロット・デュノアとラウラ・ボーデヴィツヒか。

なんで揃いも揃ってヒロインズが私に構うんだよ!?

私は一人が大好きなボツチ至上主義者だ。

どこぞの目の腐った男子高校生ではないが、一人でいられる時間をこよなく愛している。

前世でもずっとボツチを貫いてきた……と言うよりは、人見知りが激しくヘタレな自分にとって、誰かと一緒にいる事は苦痛でしかない。

大人になって引き籠りにジョブチェンジしてからは、より一層ボツチ主義が強くなった。

自分で言ってる悲しくなってきた……。

と……とにかく! こうして廊下のご真ん中で自分を中心に賑やかにされると、それだけでストレスで胃が痛くなる。

ほら、周囲の皆も何事だと思ってるさっさと見えてるし!

うぐ……! 本格的に腹が痛くなってきたし……!

「や……弥生ちゃん! しっかりして!」

「お姉ちゃん、落ち着いて。下手に騒いだら弥生が困るよ!」

「そう思う……のなら……私を……人にして……」

って言っても、誰も聞いちゃいないんですけどね。

……やべ。マジで限界かもしれない……。

つーか、その更識姉妹は割と本気で黙れ。

「お……おトイ……レに……行って……きます……」

「弥生が心配だから、私も一緒にいて行こう!」

「来な……くて……いい……です……!」

くそ……! おじいちゃん以外の人と話すこと自体が辛いつのに、この期に及んで私の数少ない安息の地であるトイレにまで一緒に来られてたまるか!

でも、私のような根性なしに面と向かってそんな事を言う勇氣は無

いわけで……。

一刻も早くこの場をなんとか切り抜けてトイレに行かないと、私の六法全書並に分厚い黒歴史にまた新たな一ページが刻まれてしまう！！

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「ふう〜……」

ようやく一息つけた。

流石の彼女達も、トイレの個室にまでは入ってこなかった。

お蔭で私の精神ポイントも僅かではあるが回復してきている……

ような気がする。多分。

「おじいちゃん……」

今世における唯一の家族であるおじいちゃん。

このIS学園に入ってから一体何回会いたいと思った事か。

私はとつくの昔にホームシックになっているのですよ。

「………出よ」

いつまでもこんな所にはいられない。

今の私にとって真の安息の地である学生寮の自室に帰って、そこでゆっくりと引き籠ろう……。

自分が座っている便座の水を態と流してから、そつと扉を開けて周囲を確認。

「………いない」

よかつた〜…。

意外だったけど、ここに誰もいないのは本当に有難い。

静かに扉を開けてから個室の外に出て、手を洗う為に洗面場に。  
そこについている鏡に自分の姿が映し出される。

「はぁ……」

全く……こんな私の何処がいいのやら。

本気で理解に苦しむよ。

長い黒髪を太腿の辺りまで自然に伸ばしている私の姿は、確かに傍  
から見れば綺麗に映るかもしれない。

顔だつて自分から見てもかなり整っていると思うし。

でも、その顔の左半分を前髪で覆い隠して、その下には訳あって包  
帯を巻いている。

それに……この体だつて……。

「こ……んな醜い体を持つ……つ私な……んか……」

……ここで落ち込んでいても仕方が無いか。

今は部屋に戻る事を最優先にしよう。

と言う訳で、自分で自分に課した『学生寮にある自分の部屋まで帰  
還せよ!』ミッションを発令させて、気持ちを新たにトイレから出た  
のだが……。

「や……弥生! 大丈夫か!」

な……なんでこいつが女子トイレの前にいるんだよ……!!!!

私の事を心から心配するような顔をして寄ってくるのは、ISの原作主  
人公の織斑一夏。

皆もよく知っている人類史上最高峰の鈍感王だ。

「箒達が弥生の事を話してたの聞いてさ、心配になって後を着けたん  
だ」

「ちよ……」

お前はいつから私のストーカーになったんだ!! ふぎけんな!!

「なんか長い事トイレに入っていたみたいだけど、どこか具合でも悪  
いのか?」

「えっと……」

お前等が私に付きまとうから、そのせいでストレスが溜まって胃が  
痛くなるんだろうが!

って声を大にして言いたいけど、こんな往来でそんな事を言う勇氣は私にはなんですよお〜！ チクシヨ〜!!

「大丈夫だぞ〜！ 弥生は俺が絶対に守ってみせるからな！」

はいきました〜。お得意の『守る』宣言。

こいつのこの発言が大嫌いだから、私はこの男と一切関わらないように心に誓っていたのに……。

「はあ……。」

「溜息？ 何か困った事でもあるのか？ 俺でよかったらなんでも相談に乗るぞ！」

お前がこの場にいる事に困ってるんだよ。

少しは私の『寄ってくんないオーラ』を感じ取って近づこうとするなよ！

ISに乗ってる時は無駄に勘がいくせに、一度降りると馬鹿みたく鈍感になりやがって！

「ちよつと〜！ なに弥生に言い寄ってるんよ〜！ 一夏！」

「げ……鈴。それに皆も……。」

最悪のパターンだ……。

今の私にとってヒロインズと織斑一夏は『混ぜたら危険』な組み合わせなのだ。

本来ならばこの男のハーレムな筈なのに……。

「弥生！ 一夏に何かされてはいないか!？」

「何かってなんだよ？ 俺は別に何もしてないぞ？」

「その言葉を素直に信用できるとお思いで？」

「唯でさえ弥生は体が弱いのに……。」

別に私自身は至って健康体だよ！

ただちよつと運動不足で体力が無くて、後ついでに外に出る機会が少ないから肌が人並み以上に白いだけで。

少なくとも、お前等が私に関わってこなければ、私だつて飲みたくない胃薬とフレンズにならなくて済んだんだ！

ちつとは自覚せんかい！ このチヨロインズが！

「貴様等、トイレの前で何を騒いでいる」

「……この声は……」

ギギギ……と壊れた機械人形のように後ろを振り向くと、そこには私の所属する一組の担任であり、このIS学園に置いて私が勝手に指定した『最重要危険人物』の一人でもある『織斑千冬』だった。

「千冬姉……!」

「私の事は『織斑先生』と呼べと、何回言えば分かるんだ。この馬鹿者が」

「ぶべらっ!」

さ……炸裂した……!

やっぱり目の前で見ると凄い迫力だな……出席簿アタック……。

これがあるからこの人は怖いんだよ……。

「また、お前達は板垣の事で揉めていたのか?」

「それは一夏が!」

「黙れ」

鶴の一声。

彼女の『黙れ』で全員が沈黙した。

私は最初から静かにしてたけど。

「助けようとしている対象を困らせてどうする。少しは落ち着かなか」

「「「「はい……」」」」」

完全に委縮している面々。

こいつ等を黙らせてくれたことに関しては素直に感謝しよう。

それでも警戒は解かないけど。

「板垣。何かあれば私の元に来い、喜んで力になってやる」

「ど……どうも……」

誰が好き好んで、お前みたいなブラコンで身内最悪な暴力系女教師の所に行くか!!

って! 頭を撫でるな! その手で私の脳みそを握りつぶす気か!!

(いつ撫でてても、こいつの髪はサラサラしているな……)

ひっ!? なんか今、物凄い悪寒が背中を走ったんですけど!?

全く……私からは何も特別な事をした覚えは一切無いのに、どうし

てこいつ等は私に構ってくるんだよ〜！

本当にもう……

「なんでこうなるの……っ？」

一体……何がどうしてこんな事になったのか、私には皆目見当がつかないよ……。

## 前回はプロローグ、ここからが第一話だ

転生者くなんて言っても、生前の私自身はどこにでもいるヒキニートだった。

ここで私の事を長々と語っても誰も興味は無いと思うし、それ以前に文字数が勿体ないからバツサリとカットします。

そーゆーのは後から部分的に語っていけばいいでしょ。

私は一人でいるのが好きな『ボツチ』で、他人との会話が苦手な『コミュ症』で、人並みの勇氣も無ければ根性も無い『ヘタレ』。

取り敢えずはこれだけ分かってくれていけば十分だと思う。

私が死んだ切っ掛けも、これまた実にテンプレなのです。

普段は滅多に家から出ようとしない私が、ちよつとした気紛れでコンビニに行こうと軽い気持ちで外出したのが運の尽き。

その途中で居眠り運転の大型トラックに轢かれて見事な人肉のミンチが一人前出来上がりしましたとき。ちゃんちゃん。

その後、私はテンプレその2の真つ白な空間にいて、そこで神を自称する謎の男性と遭遇したのですよ。

その彼が言うには、私は生前に何も成す事無く死亡した為、転生をしてもう一度人生をやり直せ……と言われた。

ぶつちやけ言つて、そんなのは真つ平御免だった。

どこぞのチートゲーマーの兄妹も言っていたじゃないか。

『リアルなんて無理ゲー』だと。

それには私も激しく同意する。

唯でさえ小、中、高を卒業して栄光の引き籠りになるまで苦労したのに、またあの苦労を私にしろつてか？

それはちよつと酷いんじゃないか？

天国……は無いと思うから、とつとと地獄にでも落としてくれない？

……と言えたらどれだけよかつたか……。

人間相手にさえ会話の度に緊張MAXなのに、自称とは言え神を相手にそんな大それた事は絶対に言えない。

言う前に緊張でストレスがマッハになって私がまた死ぬ。

結局、私は何も抗議が出来ずに、流されるがまま転生する事になった。

転生先はランダムで、どこの世界に行くかは全く不明らしい。

少なくとも、生前と同じ世界だけは絶対に無いらしいが。

転生の際に神様は私に転生者のお約束とも言わべき『特典』を授けてくれたのだが、それがまたエライものだった。

一応、よくある『頭脳&身体能力チート』とかじゃない事は明記しておく。

勿論、他の作品のチートな能力とかでもない。

どんな特典なのか、それはネタバレになるからここでは言うのはやめておこう。

因みに、私の女体化は特典ではなくて『罰』らしい。

性別を入れ替えて心機一転頑張れって事か？

このこと自体は特に気にはしなかったけど。

神様は特典の他に私に『設定』も与えてくれた。

これは簡単に言うと、私の存在をちゃんと世界に認識させて『異物』として排除されないようにする処置らしい。

それにより、私に授けてくれた特典もこの設定のお蔭で違和感無く使う事が出来る。

これを怠った連中が俗に言う『踏み台転生者』と呼ばれる連中なんだと。

そりゃ、いきなりポツと出のアホみたいなチート野郎が同じように違和感しかないチートな能力を持っていれば、どんな馬鹿でも速攻で怪しむに決まっている。

それを聞かされて、私はめっちゃ納得した。

もしかして、この神様って本当は凄くいい奴？

なんて思っていた私がアホだったと、転生してから思い知らされた。

神が私に与えた『設定』の全ては知らないが、少なくとも自分の『体』が関係している事は明らかだった。



この体のお蔭で、前世以上に普段の生活を苦勞させてしまった……！

神……絶対に許すまじ……！

まあ……『おじいちゃん』に会わせてくれたことは素直に感謝してるけど。

転生後も色々な事があって、自分がいる世界が『インフィニット・ストラトス』であるを知り、紆余曲折の果てにIS学園に入学する羽目になってしまった。

この時点で、私の考えた第二の人生設計が全てご破算になったの、言うまでもない。

そして、連鎖的におじいちゃん存在自体が私に与えられた特典だと思ひ知った。

何故なら、おじいちゃんとの出会いが私の専用機取得フラグになっていたから。

こうなったら、せめて原作キャラ達と別のクラスになる事を心から祈り、連中には一切近づかずひっそりとモブキャラライフを満喫しよう！

・  
・  
・  
・  
・  
・

なんて思っていた時期が私にもありました。

「はあ………」

どうも、私は今、IS学園の一年一組の教室にて盛大な溜息を吐いております。

何事も無く入学式を終えた私達は、自分達がこれから一年間過ごす

事になる教室へと案内されたのだが、そこが一組なのを知ってリアルに絶望した。

なんでよりにもよって一組なんだよ……。

ここは原作キャラの巣窟じゃないか……。

せめてもの救いは、自分の席が窓側の一番後ろである事か。

今日も天気良くてお日様がぽかぽかだなく♡ あはは♡ (現実

逃避)

少しだけ周囲を見てみると、いるわいるわ……私が知っている原作キャラ達が。

数席離れた場所にはイギリスの代表候補生であるセシリア・オルコットが。

私のいる列の一番前には天災兎の実の妹である篠ノ之箒。

あと、教室で堂々とお菓子を食べている布仏本音もいる。

今更だけど、仮にも名門校であるIS学園の教室でお菓子を食べてもいいのか……？

普通の学校でも怒られて没収されるとおもうけど。

(で、極めつけは……)

教壇の真ん前に位置している席に座って肩身が狭そうになっている男が、原作主人公の『織斑一夏』。

私が一番嫌いなキャラの一人でもある。

こいつにだけは絶対に接触しないようにしないと。

最重要警戒人物の一人に指定しよう。

今とはとにかく、誰にも話しかけられないように極限まで気配を薄くしてジツとしているが吉。

(おじいちゃん……)

入学前におじいちゃんから渡された、左腕に装着している機械的なデザインをした鉛色のリングにそつと触れる。

これだけで少し精神が回復していくようだ……。

っーか、どうでもいいからとつと来てくれないかな？

私にとって学校の教室なんて拷問部屋と同じなんですけど。

(早く帰りたい……)

未だ見ぬ自分に割り当てられた学生寮の部屋を夢見ながら妄想に耽つていると、教室のドアが開く音が聞こえた。

「全員揃ってますね。それじゃあ、今からSHRを始めますよ」  
来た！

入ってきたのは一組の副担任である山田真耶先生。

緑色の髪と眼鏡が特徴的な人物。

この人も原作キャラの一人であるが、私の中では警戒心は薄い。

なんつーか……いい人過ぎて、下手に警戒とかしたら逆に罪悪感で死にそうになる。

(すげー胸……)

山田先生がなんか色々と言っているが、私の視線は彼女の爆乳に向けられていた。

童顔爆乳な美人眼鏡つ子教師とか、ふつーに有り得ない……。

この世界の日本人は色々とおかしい。

主に体のスタイル的な意味で。

「ん……？」

次々と女子達が立って何かを話している。

これは……もしかして自己紹介か!?

ま……不味い!! 私は板垣の『い』だから、織斑一夏の『お』よりも早く来る!

アイツよりも後だったら、有耶無耶になって自己紹介なんてクソ面倒くさいことをしなくて済むのに!

私が密かに焦っている内に、自分の順番が回ってきてしまった。

「では次、板垣さん。お願いします」

「は……い……」

し……心臓がバクバクして振動が体全体にまで伝わってくるみたいだ……!

な……何を話せばいい……?

まずは名前だろ? そして……趣味か? 趣味でも話せばいいのか?

よ……よし! それでいこう! 速攻で言つて、速攻で席に座ろう!

前世でこんな局面、何度だって乗り切ってきたじゃないか！

「ひっ!？」

きよ…教室中の視線が全部こっちを向いてる……!

この視線のレーザーマシンガンは完全に凶器だ……!

「あの……板垣さん？」

「ひゃ…ひゃいっ!？」

「だ…大丈夫ですか？」

と…とにかく! 今はとっとと自己紹介を終わらせる事だけを考えよう!

「い……板垣……弥生……です」

よし言った! 言ってやったぞ!

自分の名前を言えた事に情けなくも感動した私は、自分でも驚くような速度で席に座った。

「そ…それだけですか? 趣味とか……」

「……………」

もう自己紹介は終わったんだから、野暮な事を聞いてくるんじゃないよ!!

私の趣味とかどうでもいいだろうが!!!

(あの感じ……まさか昔、イジメとかにあっていたんじゃない……)

な…なんだ? 山田先生のこつちを見る視線が急に慈愛に満ちてるんですけど?

(板垣弥生さん……。あの子の事はよく見るようにしておいた方がいいかもしれない……)

なんだろう……。

どこかで建たなくてもいいフラグが建ったような気がする……。

私の後も自己紹介は続いていき、遂に織斑一夏の番となった。

しかし、案の定と言うべきか、奴はボケくっとして近くで呼んでい  
る山田先生の事が全く視界に入っていない。

最終的に彼は気が付いたが、自己紹介までの流れは私が知っている通りだった。

「以上ですー!」

はい出た。最初の馬鹿発言。

周りの女子達と同じように呆れながらも内心は爆笑していると、静かに教室の扉が再び開かれて、そこから織斑一夏に匹敵するレベルの最重要危険人物が姿を現した。

奴さんの出席簿の一撃が炸裂し、教室内に実にいい音が響き渡った。

黒いスーツを着た彼女こそが、この一組の担任にして織斑一夏の実の姉でもある『織斑千冬』その人である。

また何か話しているが、私には関係ない事なので無視することに。そんな事よりも、今はこの後に来る事態に備えて予め通販で購入しておいた高級耳栓を装備してっと。

「「「「「キヤ〜〜〜〜〜！！！！」」」」」

し…振動が凄い……………！

耳栓をしてもこの威力かよ……………！

なんか女子共がぺちやくちやと話しているけど、喉が痛くならないのかね？

あ、なんかまた叩かれてやんの。

うむ、実に愉悦。

様子を見て静かになったと判断して、ようやく耳栓を外すことが出来た。

耳栓解除と同時にチャイムが鳴り、教壇の前に立つシスコン暴力女のありがた〜い話があった。

どうでもいいんで普通に聞き流したけど。

しかし、あの女はあれだな。人の皮を被った鬼だな。うん。間違いない。

…………織斑一夏はいつまで立っている気だ？

……………  
……………  
……………

な…なんとか二時間目の授業まで終了した…。

いくらエリート校だからと言って、なにも入学式の日から早速、授業をしなくてもいいと思うんですけど？

まあ、勉強自体は嫌いじゃないからいいんだけど。

昔はやる事が無い時は暇つぶしに勉強してたぐらいだし。

そういや、一時間目の休み時間に織斑一夏の奴が剣道ポニーテール女に連れられてどっかに行ってたな。

ま、どうせ原作通りの事しか話してないんだろ？

二人の会話の内容とか、心底どうでもいいわ。

休み時間は持参したMP3に装着してあるワイヤレスイヤホンを耳に付けて何も聞こえない振りをする。

と言っても、何も曲を聞いていない訳じゃないんだけどね。

音量を小さくして周囲の状況はすぐに察知できるようにしてある。

本当は教室から出て一人になれる場所でのんびりと過ごしたいんだけど、まだ私は校舎の中を完全に把握しているわけじゃない。

だから、初日は否が応でもこんな事をするしかないのだ。

(あ……)

堂々とした歩き方でセシリア・オルコットがワンサマーの方に歩いて行ったぞ。

これはあれか。原作にもある二人のファーストコンタクトか。

あの発言は聞いているだけで不快になるから、ここは音量を上げて本当に聞かないようにしよう。

あ…：やつぱJam projectは最高だわ…。

曲に聞き入っていると、金髪イギリス女が自分の席に戻った。

そのタイミングでMP3のスイッチを切ると、丁度チャイムが鳴った。

ちゃんと時間を計っていたのか、チャイムと同時に担任と副担任が



## 早速ピンチになりました

三時間目が始まると思いきや、織斑先生の提案によりクラス代表を決める事に。

この辺りは原作通りだな。

それじゃあ、私は沈黙を貫きたいと思うので、どうぞ好き勝手に自薦でも他薦でもしてくださいな。

勿論、私を巻き込まない事を前提にして……だけど。

「う……」

なんか少し眠くなってきたかも。

昨夜、緊張してよく眠れなかったからなく……。

えくと、こんな時の為にポケットにブラックミントの眠気覚ましの錠剤があつたと思うんだけど……。

「はい！ 私織斑君を推薦します！」

私が錠剤のケースを探している間に先生の話が終わって、早速誰かが手を上げて鈍感星人を推薦したようだ。

そうそう、その調子で頼みませ。

私の事はそれこそ、そこら辺に転がっている石ころでも思っただちようだな。

全員の関心が織斑一夏に向いている間に、私はブラックミントを一粒パクリとな。

「うぐ……」

うぐ……！

なんか想像以上に効き目があるんですけど……！

あれ？ 前に食べた時はこんな感じじゃなかったような気がするんだけどなく？

女の子になって若返ったから、味覚もそれなりに変化してるのかな？

そんな自覚は全く無いんだけど……。

あ。なんか苦すぎて涙出てきたし。

で……でも、お蔭で眠気はスッキリとしましたよ？





決まりかけていた会議に待ったをかけたのは、イギリス代表候補生のセシリア・オルコット。

長い金髪を靡かせながら立ち上がり、全員を見渡しながら大きく叫びだす。

「そのような選出なんて決して認められませんわ！　そもそも……」  
そこからは、出るわ出るわ……日本や男に対しての罵詈雑言の数々。

無論、それを聞いていた日本出身の女子生徒達は眉間をピクピクさせながら切れかけていた。

約数名を除いて……ではあるが。

勿論、その数名の中には弥生も含まれている。

今の彼女は自分の存在を隠す事に必死な為、既に原作知識として知っているセリフに耳を傾ける余裕は全く無いのだ。

ある程度セシリアが言い終わると、今度は彼女の発言にぶち切れた一夏が反撃開始。

やれ『飯が不味い』だのなんだのと言い始め、遂には完全な口喧嘩に発展。

当人達は全く気が付いていないが、二人がしている事は間違いなく国際問題に発展するレベルに大変な事だ。

知らぬが仏とはよく言ったものである。

この場でそれを正しく認識しているのは千冬と真耶の二人のみ。

故に、千冬は後で二人を呼び出して説教する事を密かに心に決めた。

「決闘ですわ!!」

「ああ！　俺は一向に構わないぜ！　その方がお互いに後腐れが無い！」

結局はこうなるのか。

決闘騒ぎになっても口喧嘩が終わらない二人は、ある意味でいいコンビなのかもしれない。

更にそこからハンデの話になり、女子達に馬鹿にされる一夏であったが、それで少しは冷静になったのか、ハンデは無しと言う事になっ

た。

「さて、話は纏まったな……………」

一先ずの収束を確認した千冬は、手を叩いて全員の視線を自分に向けさせたが、そこでふと、ある事を思い出した。

（そう言えば……………このクラスにはオルコットの他にもう一人、専用機持ちがいた筈。確か名前は……………」

その瞬間、弥生の背筋に悪寒が走り、顔が急速に青くなっていく。  
（な……………なに……………？　なんか猛烈に嫌な予感がする……………！）

その予感の間違ってはいない。

彼女にはシックス・センスでもあるのかもしれない。

「……………私からも一人推薦しようか。板&「織斑先生」……………ん？　なんだ？」

千冬が弥生の名前を呼びかけた瞬間、真耶が彼女の腕を引っ張って教室の隅へと連れて行く。

そこで二人は小さな声で話し始めた。

「あのですね……………。板垣さんを推薦するのは止めた方が……………」

「なんでだ？　彼女も専用機持ちなのだろう？」

「そうですけど……………」

チラツと真耶が弥生の方に視線を向ける。

そこには、涙を流しながら体を震わせている彼女がいた。

「……………アイツが板垣弥生か？」

「はい。先程、自己紹介をした時……………あの子、酷く怯えていたんですよ」

「怯える？　何に？」

「それは分かりませんが……………」

少しだけ視線を下げて、それから千冬の目を真っ直ぐに見た。

「これはあくまで私見なんですけど、板垣さんは過去に人間不信になるような酷い目に遭ってきたんじゃないんでしょうか？」

「イジメなどか？」

「恐らく。多分ですけど、こうした人が沢山いる場所にいるだけでも相当に勇気を振り絞っているんだと思います。その上更にクラス代

表に推薦すると言うのは流石に酷かと……」

「……………」

そう言われて、千冬は弥生の姿を少し観察する。

長い前髪で顔の左半分を覆い隠しており、着ている制服は改造されている。

基本的にI S学園は制服の改造を認めているため、これ自体は決して校則違反ではない。

弥生の制服は極端なまでに肌の露出が少ない。

上は首まで覆い隠していて、スカートに至ってはかなりのロングスカートになっていて、足首まで隠れている。

その上、手には黒い手袋をはめていて、スカートの下も黒いストッキングを穿いているようだ。

余談だが、弥生は箒やセシリアに負けず劣らずのレベルのスタイルをしていて、同年代の女子達と比べても相当にバストは大きい。

本人は全く気にしていないが。

「泣いている……………」

「織斑君とオルコットさんの口論が怖くて泣いているのかも……。体も震えていますし……………」

「かもしれんな……………」

なんとも都合のいい解釈ではあるが、涙の理由は単純にブラツクミントの味が予想以上に苦かっただけであり、体が震えているのは怖いと言うよりも、トイレを我慢しているだけだ。

故に、こうして二人で話していないで、一刻も早く話し合いを終了させて授業を再開させてほしいものである。

主に弥生の膀胱の為に。

「彼女が専用機の所持を認められているのも、そこが関係しているのかもしれないね……………」

「そうだな……………」

千冬とて人の子。

目の前で涙を流して震えている教え子に対して『私が推薦するからクラス代表になれ!』とは言えない。

まあ……本当は彼女達の大きな思い違いなのだが。

少なくとも、弥生はこれまでの人生でイジメには一度も遭っていない。

何故なら、自分から他者との接触を極端なまでに避けていたから。結果として空気のような存在となっていたが、それこそが本人の望みだったので、それなりに満足した学校生活だった……と、少なくとも弥生本人は思っている。

「入学試験の時の実技、アイツのだけ見ていなかったな」

「そうですね。私達が用事で外している間に始まって、戻ってきた頃には終わってましたから」

これも偶然なのか、弥生の専用機は彼女達には見られてはいないよ  
うだ。

ネタバレ防止の読者に優しい偶然である。

「兎に角、板垣の推薦はやめておくことにする」

「それが賢明です。それと……」

「承知している。担任として、アイツの事は注意して見るようにしよう」

自分が与り知らぬ所で危機を脱した弥生であったが、同時に別の不安材料が浮上した事を彼女はまだ知らない。

その後、改めて話を纏めて、一週間後の月曜日の放課後、第3アリーナにて試合をする事になった。

(の……乗り切った……?)

辛うじてではあるが、確かに乗り切る事には成功したと言える。

だが、まだまだ弥生の受難は終わってはいない。

いや、寧ろここからが始まりと言っても過言ではない。

因みに、トイレにはちゃんと間に合いました。

.....

全ての授業が終了し、今は私が待ちに待った放課後タ〜イム！  
顔には決して出さないけど、心は最高にルンルン気分になってま  
す。

なんとか初日を乗り越えた！

今日はもう疲れたから寮に直行するけど、明日からはちゃんと一人  
でまったりできる『ベストプレイス』を見つけに行かないとなく。  
唯でさえ寮生活なんてする羽目になったんだ。

自分の安らげる場所を少しでも多く開拓するのは急務と言える。

(そーいや、ここの食堂のご飯って美味しかったな〜……)

流星は天下のIS学園と言うべきか。

人が無駄に多い事と、食堂のおばちゃん達が無駄にフレンドリーな  
点を除けばパーフェクトだった。  
メニューも凄く豊富だったしね。

(けど、使用するのは昼食の時だけだろうな)

誰が好き好んで、あんなリア充の溜まり場みたいな場所に行かなく  
てはいかないのだ。

昼御飯は仕方が無いとしても、朝御飯と夜御飯は自分の部屋で食べ  
るようにしよう。

確か、購買部で食材も購入可能だったよね？

料理道具も売ってたりするのかな？

それとも、予め部屋に完備してあるとか？

(……実際に行ってみれば分かるか)

入学式の前に渡された紙に自分の部屋の番号が記されている。

これを見ながら行くとしますか？

誰よりも早く教室から出て寮に向かう私だったが、その途中で沢山  
の生徒達が一組に行くのを目撃した。

多分、あの男が目当てな連中に違いない。

本当に物好きと言いますか、暇人と言いますか。

あんな口だけ星人の何処がいいのやら。

私には全くもって理解が出来ない感覚ですな。

けど、そのお蔭で私も校舎内で動き易くなるから、その点だけは感謝してあげよう。

さて、私も早く自分の部屋に行つて、とつとと荷解きをしなくては。

その途中で購買部によつて食材を買つていきますか。

ちよつと緊張するけど、流石にこれは慣れていかないよ。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「思つ…た以上…に品数…が豊富…だった…」

現在、私の右手には鞆が、左手には購入した食材が入ったビニールを持つている。

手に食い込んで痛いけど、これぐらいなら我慢できるもん！女の子だし。

(私の部屋の番号は確か…1026号室だったな)

…あれ？なんだろう…？妙に嫌な予感がまたするんですけど…？

1026ってそんなに不吉な数字だったっけ？

ネガティブな事ばかりを考えても仕方が無い為、今はとにかく部屋に向かう事に。

おじいちゃん…ちゃんとかご飯食べてるかな…？

家じゃ私が家事を担当してたからな…。

(外食とかしてないだろうな？)

前世がヒキニートの分際で何言つてんだと思われるかもしれない

が、ニートだってちゃんと栄養管理ぐらいはするんだぞ？  
何事も健康が第一だからな。

「あ」  
考え事をしながら歩いていると、いつの間にか部屋の前まで来ていた。

ここが今日から私が住む事になる部屋か。  
ちゃんと鍵は預かっているから、鞆の中から取り出して鍵を開けてから扉を開ける。

「お……おおく……」  
これはまたなんとも……。

普通に高級ホテルクラスの内装じゃないですか。  
え？なんで分かるのかだって？

実は、転生してから何回かこう言った場所に泊まった経験があるのですよ。

そこと見比べても遜色無いな、こりや。  
「ちゃん……と荷物が届い……てる……」

部屋の隅に幾つかの段ボール箱が並んで置いてあった。  
これ全部が家から持って来た荷物になる。

と言っても、中身は各種ゲームやパソコン、漫画にラノベとかが大半だけだね。

後は私の外出用の服装や部屋着とかだな。  
私の場合は特に服装に気を付けなきゃいけないから。

「……この『体』を……誰かに……見られる……わけ……にはいか……ないか……ら……」

そう。それだけは例え何があっても絶対に回避しなければいけない。

「……片付け……よ」  
鞆をベツトに置いて、食材を全て設置してある冷蔵庫に収納してから、私は荷解きを開始した。

因みに、基本的にこの寮は二人で一つの部屋を使用するのだが、私  
の場合は『おじいちゃんパワー』で一人部屋になっている。



流石は私のおじいちゃん！　そこに痺れる！　憧れる！

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

荷物の整理が全て終わってから、私は心と体をリフレッシュさせる為にシャワーを浴びる事にした。

しかし、そうすると必然的に自分の体を露出する事になる。

そう……私が最も他人に見せたくない『体』を。

「なんで……こんな体……なんだ……ろうね……」

自分の右手を見つめると、そこには無数の傷跡が刻まれている。

切り傷に刺し傷、打撲の跡もあれば火傷の跡も見受けられる。

この傷は右手限定ではなくて、私の全身に広がっていた。

それこそ、首の部分から爪先までびっしりと。

更に、私が普段から前髪と包帯で二重に隠している顔には、大きく醜い火傷跡が存在している。

この顔の傷は私の体にある傷で最も酷くて、これのせいで左目の視力を完全に失ってしまった。

だから、傷痕と目を隠す意味も込めて包帯と前髪で覆い隠しているのだ。

そうでもしないと、やってられないから。

けど、私にこんな傷を負うような覚えはない。

この全身の傷跡は私が転生した時からあったものだ。

これを見てすぐに、これこそが神が私に与えた『設定』の一部なんだと把握した。

どうやら、神は私を悲劇のヒロインにでも仕立て上げたいようだ。

「今更……怒る気……力も無……いけど……」

したくも無い転生をさせられた時点で、私は神に対する怒りの感情を失っていた。

勝ち目のない存在に怒るよりも、これからどうするかの方が重要だったから。

「って……」

人が折角シリアスモードになっているって言うのに、なんかお隣の部屋が五月蠅いんですけど？

一体何をやっているんだ？

これから長い間、一緒に暮らすんだから、初日から揉め事を起こさうとするなよな。

ちゃんと仲良くしようぜ？ 仲良くね？

「……私が……言って……も説得……力……皆無……だね……」

なんせ私ってばコミュ力ZEROの美少女（笑）ですからね！

はっはっは〜！

……なんか急に空しくなってきた。

もうシャワーを出よう。

しかし、ここで私は完全に油断をしてしまい、史上最大の致命的なミスを犯してしまった。

・

・

・

・

・

「スツキ……りした……」

誰も部屋にいないのをいい事に、私はバスタオルで体を覆った状態で他のタオルを使って頭を拭いていた。

前髪を持ち上げながら丁寧に拭いていると、なにやら廊下からドタ

ドタと音がしてきた。

(……廊下は走るなよ)

もしも、あの暴力女教師に見つかりでもしたら、本気で一卷の終わりだぞ？

勿論、生命の危機的な意味でね。

「た…助けてくれ!!」

いきなり、誰かの叫び声と一緒に部屋の扉が勢いよく開かれた。

そして、そこから入って来た声の主は……

「え？」

私にとって最も接触したくない人物……織斑一夏だった。

空気を入れ替える為に開けておいた窓から風が入って来て、私の体に巻かれているバスタオルを床に落とした。

「……………」

一瞬、私の頭の中は真っ白になってしまった。

「見られた……」

今にして思えば、彼に私の秘密を見られた、この瞬間から私の艱難辛苦のデスロードは始まったのかもしれない。



「げ」

そんな一夏に一人の少女が近づいてくる。

一夏のルームメイトであり、同時に幼馴染でもある少女『篠ノ之箒』だ。

彼女は剣道着を身に纏っていて、その手には木刀が握られていた。

「先程、隣の部屋から出てきたように見えたが？」

「そ…それは……」

気まづくなつて目を逸らす一夏。

彼は自分に与えられた部屋にて、凶らずも箒のあられもない姿を見てしまい、その結果として彼女の怒りに触れてしまつて、つい先程、箒の木刀攻撃から逃げてきたのだ。

だが、逃げた先が最高に拙かった。

「何故に目を逸らす？」

「べ…別に？」

彼の態度に不審なものを感じた箒は、目の前にある扉をノックしてから、軽い挨拶と一緒に少しだけ扉を開いた。

そして、箒の目に映つたのは……

「う……う……う……」

ベッドに顔を埋めて泣き声をあげている弥生の姿だった。

・

・

・

・

・

・

・

・

一夏を部屋から追い出した後、弥生は速攻で部屋着へと着替えた。下着を着た後に二の腕まで覆い尽くす腕袋にニーソックス。

その上から中学時代に着ていた紺色のジャージを身に纏った。

基本的に部屋にいる事が多い彼女にとって、この恰好こそが最も落ち着くのだ。

(見られた……見られた……見られた……見られた……見られた……)

弥生が体の傷を見られなくなかったのは、見られたから嫌われるとか、イジメに遭うとかと言った理由ではない。

(あの偽善が服を着て歩いているような男に見られたら……絶対にこれから先、ずっと付き纏われる……)

これである。

原作キャラと関わらず、その上でボツチ生活を満喫するには、体の傷跡を隠し続けて自分の特異性を秘匿する事が必須事項であると弥生は思っていた。

(それなのに……よりもよってあの野郎に見られてしまうなんて……もうおしまいだ……)

初日から早くも詰んでしまったと半ば絶望していた弥生は、涙を流しながらベッドにうつ伏せながらシーツを濡らしていた。

「う……う……う……」

(最悪だ……完全に終わった……)

そんな時だった。

「失礼する。少しいいか?」

ノックと共に再び部屋の扉が開かれた。

しかし、泣いている弥生はその事に全く気が付いていない。

「な……泣いている……のか?」

部屋に入って来た箒は、弥生の様子を見てただ事ではないと悟った。

普段は気丈な彼女も、目の前で涙を流している同級生を見て、無粋な態度をするような酷い少女ではない。

「見られた……見られた……」

「見られた?」

弥生が発した言葉を聞いて、箒は自分の中で現在の状況を推理する。

(この部屋は彼女の部屋であり、そこから一夏が飛び出してきた。そして、彼女は『見られた』と言いながらここで泣いている……)

瞬間、箒の頭脳に一つの答えが舞い降りた。

「まさか……!」

自分の考えが正しいか確かめるため、急いで廊下にいる一夏の元に戻った。

その際に扉は開いたままになってしまったが、それがまた余計な混乱を招く事になる。

「一夏あつ!!」

「ほ……箒!」

「貴様あ……彼女に何をした……!」

「彼女……?」

「部屋の中で泣いている彼女の事だ!!」

「え……?」

箒に言われて、一夏も立ち上がって部屋の中を覗いてみる。

そこには、未だに泣き続けている弥生がいた。

「あ……」

お人好しが服を着て歩いているような男である一夏にとって、守るべき対象である女性を泣かせるなど論外であるが、現にさつき裸を見てしまった少女……弥生が目の前で泣いている。

いくら鈍感と言えども、流石に一夏の心にも罪悪感が生まれて、室内に気まずい雰囲気の流れ出す。

「ふえ……?」

その時だった。

少しでも涙が収まった弥生は、部屋の中に自分以外の声が聞こえたのを感じ、思わず顔を上げた。

「……………!」

一夏だけでも一杯一杯なのに、その上、箒まで目の前にいる。

弥生の心を追い詰めるには充分すぎる程の状況だった。

(し……篠ノ之箒いいっ!!? なんでもこいつもここにいるのっ!!?)

思わず目を見開いて箒の姿を見る。

(篠ノ之箒と言えば、織斑一夏を常に最優先に考えて、口よりも先に出る剣道を暴力行為に使う女じゃないか!!!)

弥生の中では、基本的に原作ヒロインは一夏をいつも中心に考えていて、彼の気を引いたり、周囲に女性がいったりする時は手段を選ばず暴力を振るう最悪の存在として強く認識されている。

故に、ある意味で弥生にとって一夏以上に近づきたくない存在でもあるのだ。

そんなヒロインの筆頭とも言うべき少女が自分の部屋にいる。

弥生にとって、絶対に有り得てはならない地獄のような光景だった。

(ぼ……木刀持つてる?! って事は……)

弥生の頭の中に最悪の光景が過る。

(『よくも一夏をたぶらしたな! 成敗してくれる! 死ねえええええつ!!!』とか言われて殺される!!!)

剣道（ノ）の有段者（之）が木刀を持って自分に殺意を向けている（と思い込んでいる）のを見て、弥生は激しく混乱した。

「ひ…ひいいいいいい!!」

悲鳴をあげながら尻餅をついた状態で後ずさりをして、壁にぶつかってから頭を抱えて体を震わせながら、また泣き出してしまった。

「お……おいつ?!」

尋常ではない弥生の様子に一夏は心配になって近づくが、声を震わせながら泣いている弥生を見て、その動きが止まった。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいお願いだから打たないで殺さないでおいちゃん助けて……」

一夏が接近しただけで怯えた弥生を見て、箒の堪忍袋の緒が切れた。

「一夏あああつ!!! お前と言う奴は!!!」

「箒……俺……」

鬼の形相で近づいてきた箒に胸倉を掴まれた一夏であったが、それを振り払う事もせず大人しく受け入れていた。

「私の裸を見ただけに飽き足らず、見ず知らずの少女にここまで怯えさせるほどの仕打ち……お前は男として! いや……人として恥ずかしくないのか!!!」



「俺は……」

実際には箒と木刀に怯えているのだが、真実を知らない当人達は弥生の涙の理由を完全に勘違いし、全ての原因は一夏にあると思いついでいる。

ここで余談であるが、この箒と言う少女は昔は確かに一夏に対して恋心を抱いていたが、転校して彼と長い間離れていた結果、その恋心は年月と共に薄れていって、こうして再会した今では完全に冷めきっている。

現在の箒の中での一夏は『昔一緒に過ごした幼馴染』程度の認識でしかなく、少なくとも『数年振りに再会して初恋再び!』なんてことは無いと本人は思っている。

「参考書を捨てたり、自己紹介すらちゃんと出来ない時点でもしかしてと黙っていたが……暫く会わない間にお前はどこまで落ちぶれば気が済むんだ!!」

「ごめん……」

「私に謝ってどうする!! お前が謝るべきは彼女だろう!!」

「そう……だな……」

箒の手が離れて、一夏はまだ体を縮こませて恐怖に震えている弥生の傍に近づいて目線を合わせる為に腰を低くする。

「えつと……その……本当にごめ「何を騒いでいますの?」……え?」

「お前は……」

この部屋での騒ぎに気が付いてやって来たのは、教室で一夏に啖呵を切ったイギリスの代表候補生のセシリア・オルコットだった。

よく見れば、彼女の他にも野次馬と化している生徒達が部屋の前に押し寄せていた。

「……本当に何をやってますの?」

「実は……」

箒はセシリアに（自分がそうと思いついでいる）これまでの出来事を説明する。

話を聞いていく内に、セシリアの心にも怒りが込み上げてくる。

「貴方と言う人はどこまで……!」

ズンズンと部屋に上がり込んで一夏に近づいていくセシリア。

目の前まで行くと、まずは蹲っている弥生を見て、その次に一夏を見た。

「確か……板垣弥生さん……でしたわね……」

「……………え？」

またまた聞き覚えのある声に反応して目だけを動かして声のした方を見る。

(セ：セシリア・オルコットまでいるうううううっ!? アイエエエエツ!? ナンデツ!? イギリス人ナンデツ!?)

三度の乱入者に、もう弥生の頭はパンク寸前。

頭の中がグルグルと回りだし、ネガティブな考えだけが頭を支配する。

(この時期のこいつは女尊男卑で日本人を見下していた筈……。こんな姿を見られたら……)

『なんて無様なお猿さんなんでしょう。目障りだから、せめて苦しませて逝かせて差し上げますわ。慈悲深い私に感謝しなさい……。この薄汚いイエローモンキー風情が!』

(とかなんとか罵倒されながら撃ち殺される!!!)

んなわけねーだろ。

もしかしてそれはギャグで言っているのか?

思わずそうツッコみたくなる程のネガティブシンキングだが、人と言うのは一度でも後ろ向きな考えが始まると、そう簡単には立ち直れない不器用な生き物。

それが人一倍コミュ症でヘタレな弥生ならば猶更だ。

「お願いしますすみませんでした許してください私が悪かったです死にたくありません……」

「なんて可哀想に……こんなにも体を震わせて……」

弥生のイメージとは裏腹に、セシリアは心の底から心配そうに弥生を見つめる。

実は彼女、部屋に戻ってから少し自分の発言を振り返り、冷静に考えた結果、流石に自分が悪かったと反省していたのだ。

故に、今のセシリアは女尊男卑思考はそのままであっても、日本人を見下したりはしていない。

「織斑一夏……貴方と言う人は……！」

セシリアの方を振り向いていた一夏に向かつての全力ビンタ。

バチンツッ！という音が部屋に鳴り響いた。

「恥を知らなさい！ この最低男!!」

この瞬間、セシリアフラグが完全に折れてしまった。

ビンタをされた一夏は、自分がどれだけの事をしてしまったのか改めて思い知り、無言でふらふらと歩いて部屋を出て行ってしまった。

「お……おい！ まだ謝罪が……」

「放っておきなさい。今の状況で下手に謝られては、却って逆効果ですわ」

「そうだな……」

部屋に残ったのは弥生と箒とセシリアの三人。

しかし、まだ弥生は怯え続けている。

それもそうで、弥生にとつての恐怖の対象は箒とセシリアであつて一夏ではない。

この二人が部屋にいる限りは弥生の心に平穏は訪れない。

「一夏が去つても、まだこんなに怯えて……」

「あの男は板垣さんにどんな酷い事をしたんですの……！」

二人の中で一夏の評価が急降下していった。

哀れ原作主人公。

様々な偶然と勘違いの末に、君の嫁候補が二人もいなくなつてしまった。

だがしかし、ここで弥生の精神にトドメを刺す存在が降臨する。

「お前達、ここに一体何をしている……」

我らが偉大なる担任様、織斑千冬先生のお出ましである。

優れた観察眼を持つ彼女は、すぐに部屋の状況を見て何かがあつたと察した。

「……何があつた？」

「その……」

自分が把握している部分だけを事細かに説明していく筈。  
そう……彼女が把握している部分だけを。

「あの馬鹿者が……！」  
思わず頭を抱える千冬。

女子達の中に男が一人混ざるのだから、何かあるとは思ってはいたが、まさか初日から問題を起こすとは予想もしていなかった。

しかも、その当事者である弥生の様子が尋常ではない。

「後で織斑には事情を聞きつつも話をするとして……」

「問題は板垣さんですわね……」

一人の教師として、同じ女として、ここまで怯えている少女を目の前にして何もしないなんてことは千冬には出来なかった。

「板垣……」

出来るだけ優しく千冬は弥生の事を抱きしめた。

最初はビクツ！となっていたが、人肌の温もりを感じて安心したのか、体の震えは収まった。

(この様子……真耶の言った通り、過去に何者かからとても酷い事をされたに違いない……。それも、私達が想像すら出来ない程の所業を……)

そつと弥生の頭を撫でながら、千冬のある決意をした。

(私達教師がこいつの事を全力で守ってやらねば……！ 大人として……いや、教師として教え子の笑顔を守るのは当然の義務だ！)

教師として非常に立派な考えであるが、弥生にとっては最悪のフラグが立った瞬間でもあった。

そんな事はつゆ知らず、彼女は千冬の抱擁を堪能しながら、ある事を思った。

(なんだろう……凄くいい匂いがする……。暖かくて安心するけど……これって誰なのかな……)

僅かではあるが警戒心が溶けつつある弥生。

自分を抱きしめている人物の顔を見ようと顔を上げるが、その顔は一瞬で凍結する事となる。

さて、ここで読者諸君に質問だ。

弥生は全身に傷跡を抱えてはいるが、それでも誰もが認めるレベルの美少女だ。

片目を隠しているミステリアスな雰囲気を抱えた美少女が、自分の胸の中で涙目になりながら上目使いで己の事を見つめてきた。

もしも、そんな状況に遭遇したら大抵の人は一体どうなると思う？

答えは……

「はう……?」

「はうわっ!?!」

こうなる。

ズキーン！　と言う効果音がどこからともなく聞こえてきて、この場にいる三人の心を直撃した。

天使のラツパが鳴り響き、キューピットがハートの形をした矢を三人の胸に突き刺す。

((か…可愛い!!))

一方、当の弥生はと言うと？

(お…織斑千冬ですとおおおおおおおおおおつ!!?　マジで殺されるううう!!)

最大最悪の存在に抱きしめられていると言う事実が弥生の精神に最強の一撃をぶちかました。

その結果、弥生は……

「キュウ……」

ぱたりんこ。

完全に白目を剥いて気絶し、そのまま千冬の胸に飛び込むような形になった。

「大丈夫だ。私はここに居るからな」

とても優しい笑顔で弥生を撫でる千冬であったが、抱きしめられている本人は絶賛気絶中である。

その事に誰も気が付いていないのが、なんとも皮肉な事だ。

(ぷりーず……へるぷみく……)

美少女ヒッキー弥生ちゃんの魅力に取りつかれた三人と、艱難辛苦の毎日が約束されてしまった弥生、色んな意味で不憫な目に遭っている

る一夏。  
彼等、彼女等の明日はどつちく？

## 夢であるように

自分の部屋に戻った一夏は、ベッドに座って一人で静かに考え込んでいた。

そう、一人で……だ。

本来ならいる筈の箒は部屋にはいない。

彼女は千冬に『このまま一緒に部屋で過ごしていたら、今日のよう  
な事がまた起こる可能性があります。ですので、私は部屋替えを希望  
します』と言って、この部屋から出て行った。

色々と言いたい事もあったが、今回は完全に自分に非があると認め  
ているため、一夏は何も言わずに箒を見送った。

千冬からの有り難い説教を受けて、部屋にトボトボと戻ってきたま  
ではいいが、彼の頭の中にあつたのは弥生の体に刻まれた無数の傷跡  
の事だった。

「あの子の傷……」

女は男が守るべき。

そんな前時代的思想に完全に染まっている一夏にとって、弥生の傷  
跡は見るに堪えない物だった。

（あの子に何があつたのか知らないけど……俺のせいで思い出さなく  
もない事を思い出させてしまったのかもしれない……）

確かに意図せず弥生の裸を見てしまったが、彼がした事はそれだけ  
で、それ以外には何もしていない……と思っている。

本当は、一夏が弥生の前に現れたこと自体が彼女にとっては大事な  
のだが。

「あんなにも怯えさせて……泣かせて……くそっ！ 入学初日から何  
やってんだよ俺は……！」

心の中が自己嫌悪に包まれていく。

今でも弥生が怯えながら泣いて自分を見ていた目をはつきりと思  
い出せる。

「最低だ……俺は……」

その自覚があるのはいい事だが、その前に彼にはまずやる事があ

る。

「今日はもう無理かもしれないけど……明日、絶対に謝ろう。例えどんな事をされても謝り続けるんだ。何をされても文句は言えない……俺はそれだけの事を彼女にしてしまったんだから……」

決意は固いようだ。

良くも悪くも真っ直ぐなのが彼の美点ではあるが、それが相手にとってもいい事であるとは限らない。

例えば、こんな風に。

「板垣さん……って言ったっけ。俺は強くなる……強くなつて、君の事を絶対に守って見せる……!」

力強く拳を握りしめて心を決めた一夏。

だが悲しいかな。

弥生はそんな事は全く望んではない。

寧ろ、彼女の事を思うのであれば可能な限り近づかない事こそが正しいのだ。

しかし、守ること大好き人間である一夏は、そんな考えに至る事は無いのであった。

・  
・  
・  
・  
・  
・

「ん……んん……?」

次の日の朝。

弥生は自分のベッドで目を覚ました。

「朝……?」

起き上がりながら頭を押え、少しだけボクツとして頭を起動させる。



「なんか……凄く嫌……な夢を見た……よう……な気が……」

彼女にとつての最悪の状況。

最も恐ろしく、同時に忌むべき存在である原作キャラ達が次々と自分の部屋にやって来るといふ夢。

(そ……そんな訳ないよね？ アイツ等がこぞつて私の部屋に来るなんて、普通有り得ないよね？ 大体、なんの用があつてあいつ等がここに来るんだつて話ですよ)

見事な現実逃避。

弥生にとつては悪夢に等しい出来事であつたため、夢だと思いたいのも無理は無い。

「朝ごは……んの……準備……でもしよう……かな……」

ベッドから降りて、洗面所で顔を洗つて眠気を飛ばしてから備え付けのキッチンに向かう。

(基本的に朝はパンでもご飯でもいいんだけど、今日はなんとなくパんな気分かな)

冷蔵庫を開けて中身を確認。

数秒間見てから、朝ごはんのメニューが決定した。

「よし……」

この学園に来て初めてみせる笑顔を浮かべて、弥生は冷蔵庫から食材を出そうとした……その時だった。

コンコン

「え?」

いきなり、部屋の扉がノックされたのだ。

こんな朝に一体誰が自分の部屋に来ると言うのか。

嫌な予感に苛まれながら、弥生は慎重に扉まで向かってちよつとだけ開いた。

「おはよう! 弥生!」

「おはようございます。弥生さん」

「……………」

扉の向こうにいる人物達を見た瞬間、弥生は速攻で扉を閉めた。

「ええっ!?!」

返事も無く扉を閉められれば、そりやそんな声も出るというもの。

(……………夢じゃなかった)

現実とは非情である。

昨日の事で弥生の事が気になった箒とセシリアは、完全に場所を把握した彼女の部屋まで迎えに来たのだ。

弥生にとつては非常に大きなお世話なのだが。

『弥生さくくん？ ここを開けてくださーい！』

『一緒に朝食を食べに行こう』

(じよ…冗談じゃない！ 何が悲しくてお前達と一緒に朝ごはんを食べなきゃいけないんだよ！)

朝は一人で静かに食べたいと思っていたのに、まさかの介入者によつて折角の爽やかな朝が台無しになってしまった。

(でも、ここで下手に逆らったりしたら…………)

弥生の脳内に頭を木刀で叩き割られて、体を蜂の巣にされる姿が思い浮かんだ。

(今度こそ殺される!!)

もう選択肢なんてあつてないようなものだった。

入学二日目の朝にして、弥生は早くも追い詰められていた。

(行くしかない…………… さもなければ……………私の命が危ない!!)

心を決めた弥生は、再び扉を少しだけ開けて、勇気を出して二人に話しかけた。

「よ…用意をする…から……………少し…だけ……………待ってて……………」

「大丈夫だ。幾らでも待つぞ」

「と言つても、遅刻をしては本末転倒ですから、出来るだけ急いでくださいね？」

「う……………うん……………」

二人はとても爽やかな笑顔を見せるが、その笑顔も弥生にとつては般若の面ににしか見えない。

急いで扉を閉めてから、弥生はこれまでの人生で最高の速度で着替えを済ませて登校の準備をした。

まさか、こんな日々がこれからずっと続く事になろうとは、この時

の弥生は想像もしていなかった……と言うよりも、したくなかった。

・  
・  
・  
・  
・  
・

(思うように身動きがとれない……)

弥生は食堂への道中を、箒とセシリアに挟まれながら歩いていった。本当に機嫌がよさそうにしているが、彼女達の笑顔が何かを企んでいるとしか思えない弥生は、必死に顔に出さないように恐怖心を抑え込んでいた。

「箒さん？ 弥生さんが歩きにくそうにしていますわよ？ もう少し端を歩いてはいかがかしら？」

「それはこっちのセリフだ。お前こそ端の方を歩け。弥生が困っているだろう」

(お前等二人が私から離れれば、万事解決するんですけどね！)

その一言が言えればどれだけいいか。

しかし、オリンピックでヘタレ世界大会があれば確実に金メダルを狙えるレベルのヘツタレさんである弥生に、そんな言葉を発する勇氣なんて、これっぽっちも無い。

結局は、二人に流されるがまま食堂へと歩いて行く。

「あの子ってさ……」

「うん。昨日、寮で泣かされてた子だよね……」

「ちゃんと来たんだ。よかった……」

昨日の事件はある程度の人数には知られていて、それなりに話も広がっている。

その当事者である弥生は、必然的に望んでもいない有名人となっ

た。

(なんか複数の視線を感じるような……。どうして私の事を見るの？  
ちゃんと顔に包帯も巻いたし、腕も足も完璧に隠しきれているよね？)

どこかから自分の傷跡が見えていると思つて不安に思つたが、それ  
に關してはどれだけ急いでいても常に細心の注意を払っている。

だから、なんで自分が注目を浴びているのか本当に分かつていな  
い。

「皆さんも弥生さんの事を心配なさつていたんですのね……」

「当然だ。弥生は完全に被害者なのだからな」

(加害者はお前等だけだな)

心の中でもいいから言わないと、弥生の精神が本当に持たない。

弥生の日課に『心の中でツツコむ』が追加された瞬間だった。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

食堂について、販売機にて食券を購入してから注文をする。

注文した品を受け取つてから、またもや箸達と一緒に移動をする。

(どさくさに紛れて離れられると思つたけど……駄目だったか)

武道を修めている箸と代表候補生であるセシリアの目を盗んで離  
れるのは、普通に考えて無謀でしかないが、それでもしなければいけ  
ない時が人間にはあるのだ。

それが今かどうかは微妙だが。

丁度三人で座れる場所を箸が見つけたので、そこで並んで座る事  
に。

(あれ? この二人ってこんなに仲が良かったっけ?)

仲がいいと言うよりは、二人は弥生の傍にいたいだけだ。少なくとも、現状では仲良しではないだろう。

「あの……弥生さん?」

「本当にその量を食べるのか……?」

「ほえ?」

箸は日替わり定食、セシリアはトーストセット、量は至って普通だ。しかし、弥生は違った。

彼女が注文したのは『かつ丼定食』。

ただし、超大盛りだが。

(そんなに変かな? つーか、小食なんだな……二人って)

超大盛りと言えば簡単だが、単純計算で普通盛りの約5倍近くの量がある。

通常ならば絶対に注文などしないが、弥生にとってはこれが丁度いい量なのだ。

本当に空腹の時は、こんなものではないし。

「と……取り敢えず食べるとしよう」

「そうですね……」

「ん……」

箸を手を取ってからいただきます。

イギリス人のセシリアは流石に違ったが、同じように見よう見真似をしていた。

「ん……美味しいな」

「IS学園は至る所に力を入れていきますからね」

味を噛み締めながら咀嚼する二人を余所に、弥生は食べる事に夢中になって凄い勢いで箸を動かし続けている。

その様子はまるで掃除機、いや……バキュームカーを呼ぶべきか。とにかく、そこにはリアルフードファイターが存在していた。

「見る見るうちにかつ丼が無くなっていく……」

「まるで、早送りの映像を見ているようですわ……」

弥生は基本的に非常に大飯食らいで、同時にアニメやラノベと同じ

ぐらゐに食事が大好きな女の子だ。

食べている間は余計な事を考えずに、只管に食事に集中出来るから。

二人が食べ終わると同時に、弥生もかつ丼を食べ終えた。

「美味し…かった…♡」

「本当に食べてしまった…」

「この小さな体の何処に先程の食事が入るのかしら…」

恐らく、その殆どが胸に行っているのだろう。

かと言つて、弥生が馬鹿と言う訳じゃないが。

因みに、食堂には一夏もいたが、その周囲を彼に興味を持ち、尚且つ昨日の出来事を知らない女子生徒達に囲まれて、弥生の所に行きたくても行けない状況になっていた。

彼女達が食事を終えて食堂を後にした直後に千冬もやって来たが、弥生の姿が見えない事に心の中で残念がっていた。

・  
・  
・  
・  
・

二時間目が終わり、私は素早く教室を出てからトイレに直行した。本当はもつとゆっくりと向かいたかったが、そうでもしないと『あの二人』がついて来てしまう。

全く…どうして私に付きまとう？ 私が一体何をした？

「はあ…」

もう何度目になるか分からない溜息を吐きながら、私はトイレから出て教室に戻ろうとした。

だが、そこにある人物が立ちほだかった。



「そ…そう言うのは…いい…です…から…だから…顔を…上げて…」

「板垣さん…君は…」

うをつ!? 今度は何さ!?

急に立ち上がって私の手を握りしめてきたんですけど!?

「あんな事をした俺なんかを気遣ってくれるなんて…なんて優しいんだ…君は…」

「ちよ…離して…」

強く握りしめすぎだつーの…!

手え痛いんですけど…!

「俺…強くなる。強くなって板垣さんを…弥生を守れるように強くなる!! いや! 絶対に守ってみせるから!!」

「あ…あの…えつと…その…」

そーゆーの本当に結構ですから!!

十分に間に合ってますから!!

「俺はもう…君を泣かせたりしない!! 約束する!!」

「そ…そう…です…か…」

それならまずは私から離れてくれよう!

もしもこんな場面を誰かに見られりしたら…。

「何を…」

「やっていますの…!」

「げ」

言った矢先にこれだよ!!

篠ノ之箒とセシリア・オルコットとか、最悪のタイミングじゃないか!!

私とこいつが手を握り合っている姿とか、絶対に見せちゃいけない場面じゃん!!

「おおくりいゝむうゝらあゝ…!」

「いゝちいゝかあゝ…!!」

こ…今度こそ本当に殺されるううううううっ!!!

「一度ならず二度までも!!」



「貴方は何度すれば気が済むのですか!!」

「い…いや、俺は弥生の事を…」

「問答無用!! あと、弥生(さん)の事を気安く名前で呼ぶな!!」

「えっ!? ちよ…ちよつとっ!?」

物凄い形相でこつちに向かつてくるっ!?

だ…誰か助けてええええええええええっ!!!

「……………え?」

と…通り過ぎた?

「待てええええええええええええええええっ!!!」

「誤解だあああああああああああつ!!!」

……………行ってしまった。

「……………戻ろ」

その後、あの三人は授業に遅れてしまい織斑先生の出席簿アタツクの餌食となった。

まさか織斑一夏は、この出席簿アタツクを態と受ける為にあんな事をしたんじゃない? ……。

そう言えば、結局のところ…織斑一夏は何がしたかったんだ?

私に昨日の事を謝りたかったのは分かったけど、その後の事がインパクト強すぎて謝罪の精神が薄く感じてしまう。

ま…まさか! 私にぶたれて快感を得る事が一番の目的だったんじゃない? ……。

偽善者で、口だけで、女たらしで、おまけに変態かよおおおっ

!?

私……とんでもない奴に目をつけられたのかもしれない……。



## 癒し系キャラ

三時間目になって織斑（フルネームで呼ぶのが面倒くさくなった）の専用機の話が出た。

その一連の会話は原作通りだったので、特に特筆すべき事は無い。唯一違う所があるとすれば、専用機を用意して貰えると聞いた途端に私の方を向いて見事なサムズアップをした事か。

それを見て数人の女子がうっとりとしていたが、それを向けられた私は一体どんな反応をしろと？

他の子達のように顔を赤らめろとでも？

そりゃ無理だわ。

アイツの本性を垣間見た今となっては、もう最初から0だった好感度がマイナス値になってるし。

そんな顔はお前さんのハーレム達に対して向けなさい。

ほら、織斑の顔を見て篠ノ之辺りがうっとりとして……

「馬鹿かあいつは……」

……あれ？　なんか呆れてる？

ま……まあ……彼女ってあんまり人前で色恋沙汰を持ち出すような人間じゃないし、これはこれでいいの……かな？

どっちにしても、私には関係ない話だけどさ。

専用機の話の流れから、篠ノ之があ的那天災の妹であると担任様が暴露して、周囲の女子達の反応にブチ切れて大声で怒り出した。

はつきし言って……めっちゃ怖かったです……。

なんかまた泣きそうになったし……。

うう……やっぱり原作ヒロインはおっかない連中ばかりだよお……。

オルコットもオルコットで休み時間に入った直後に喧嘩を売りに行ってたし。

「よかったですわね。政府から専用機を用意して貰えて」

「お……おう……？」

「これで心置きなく貴方に引導を渡せますわ」

「い…引導…？」

「もうお忘れですか？ 貴方が弥生さんにした所業を…！」

「そ…それは！ さつきちゃんと謝ったよ…！」

「まあっ！ 謝罪した程度で本当に全てが許されるとしても!?」

「ど…どういう意味だよ!?」

「あの時、弥生さんがどれだけの恐怖に震えて泣いて怯えていたか…貴方はほんの少しも理解していないようですよわね！」

「う…！」

「もうクラス代表なんてどうでもいいですよ…。今の私の目的は唯一つ！ それは…貴方をこの手で完膚なきまでに叩きのめし、弥生さんの無念を少しでも晴らす事!!」

「そ…そうはいくかよ！ 弥生は俺が守るって決めたんだ!!」

「どの口が仰るのかしら？ 貴方なんかは弥生さんを守る資格が本当にお有りと思つて？ それ以前に、貴方に弥生さんは相応しくはありませんわ!!」

「勝手に決めんな!! お前になら弥生の隣に立つ資格があるつて言うつもりかよ!？」

「当然ですわ！ 私はイギリスの代表候補生！ 地位、実力、その両方で弥生さんの隣に立つに最も相応しい人間と言つても過言じゃありませんわ！」

「いや、過言だろ」

「ちよ…貴方ねえ！ それと箒さんもしれっと混ざらないでくださいー！」

「弥生の隣に立つ資格は私にだってある筈だ。何故なら、あの時…一番に弥生の事を心配して駆けつけたのが私なのだからな！」

「そ…それは…！」

なんか妙に盛り上がってるな。

私はイヤホンをつけて音楽を聞いているから、あの三人が何を話しているか聞こえないんだけど。

多分、早くも原作キャラ同士で仲良く乳練り合ってるんですよ。

その調子でくつついて、もう私に関わらないでくださいな。

・  
・  
・  
・  
・

昼休みになって私は誰にも気づかれずに食堂へとやって来ることに成功した。

やっと一人でのんびりと食事が楽しめるよ〜♡

この日をどれだけ待っていた事か……。

よし！今日はテンションを上げて、ちよつと奮発しちやおうかな〜？

「こ……これ……」

「はいよ。……本当にこれを注文する気かい？」

「……………？ はい……………」

「そうかい……………分かったよ。ちよつと時間が掛かるから、この番号札を持って席で待っていてくれるかい？ 出来上がり次第、席の方に持っていくから」

「わ……かりました……………」

まあ……………確かに、時間は掛かるかもしれないな。

ここはちゃんと割り切つて、席の方で大人しく待っている事にしよう。

『1』と書かれた番号札を受け取ってから、私は一番端の方にある席へと向かった。

どんな場所でもそうなんだけど、端っここが一番落ち着くんだよね〜。

待っている間は今ハマっているソシヤゲをする事に。

(あ……………もうこのイベント始まつてるんだ……………)

こんな時の為にストックはしてあるから、早速ガチャをしなくては。

上手くSRとかが出るといいなあ……。

私がスマホゲーに夢中になり始めると、すぐ後ろから声が聞こえてきた。

「あ！ かんちゃん、ここが空いてるよ〜」

「ちよつと本音……待ってよ……」

本音？ 本音つてまさか……。

スマホの画面から目を離して後ろを振り向くと、そこには一人のクラスメイトと、この時点では会わない筈の存在が立っていた。

「あ……」

「お！ なんか見た事のある後ろ姿だと思ったら、やよつちだったのか〜」

布仏本音……。

数多くいる原作キャラの中でも、比較的大人しい部類に入る子だったよな……。

性格的に見ても、他の連中とは違って暴力的な描写も無かったし……。

でも、問題はその隣にいる子なんだよね……。

『『やよつち』って？』

「板垣弥生だから『やよつち』だよ〜」

「また勝手に人の渾名をつけて……」

彼女の隣で溜息を吐いている水色の髪の少女は……原作ヒロインの一人でもある『更識簪』じゃないか!!

私の記憶が正しければ、本人は至って大人しい少女だが、問題は彼女の姉にある。

更識楯無。本名『更識刀奈』。

暗部である『更識家』の現当主であり、自由国籍を取得したロシア代表。

そして、このIS学園の生徒会長でもある。

ここまで言えば凄い人物に聞こえるが、その中身は痛々しい程のシ

スコン。

妹に危害を加える存在には敵対心丸出しにして、己の権力を使って色々と脅しをかけて、場合によっては排除すらもしようとする女……！

私の中では織斑姉弟と並ぶ程の危険人物として『弥生ブラックリスト』に記入してある。

「ねえねえ、やよっちく。隣に座ってもいいかな？」

更識簪は言うに及ばず、この布仏本音も生徒会のメンバーだった筈。

ここで下手に断って、あのシスコン会長を敵に回すのだけは絶対に御免だ！

慎重に……慎重に言葉を選ばなくては……！

「ど……どうぞ……」

急いで立ち上がって、二人の分の椅子を引いてあげる。

これぐらいしないと、後でどんな目に遭うか分かったもんじやない。

「お……ありがとね♡」

「ありがとう……」

よし！ まずは第一関門突破！

ここからは大人しくしていれば大丈夫……。

「あ……貴女は昨日の騒ぎの……」

え？ 昨日の騒ぎ？

「大丈夫だった……？」

「な……んとか……」

「そう……よかった……」

私の中じゃ姉に対するコンプレックスの塊ってイメージなんだけど、こうして話せば普通にいい子なんだな……。

本当に……あの会長様が全ての元凶なんじゃないだろうか？

布仏さんは『お茶漬け定食』を、更識簪は『月見うどん』を注文していた。

たったこれだけで本当にお腹いっぱいになるのかな？

「えつと……二人は……」

「あ、そう言えばまだじこしよーかいしてなかったね。うっかりうっかり」

「本音……」

そこ、呆れてあげないであげて。

こればかりはマジで仕方が無いから。

悪いのはあの朴念仁だから。

「私は『布仏本音』。同じクラスだから、仲良くしようね、やよっち〜」

「更識簪……四組……です」

これはこれはご丁寧。

ごごは私も自己紹介をしなくてははいけませんな。

「板垣弥生……です」

完っ璧！ 今回はちゃんと言えたぞ！

「よろしく……板垣さん」

「は……はい……更s「名字で呼ばれるのは好きじゃないから名前で呼んで」ひい……！」

ご……怖え〜!?

なんか急に言葉を遮って睨み付けてきたんですけど〜!?

「かんちゃん〜。やよっちを苛めちゃだめだよ〜」

「別にそんなつもりじゃ……」

「それでも……だよ。昨日の事……忘れたの?」

「あっ……」

な……なんちゅー子だ……。

天然キャラに見えて、その実はちゃんと他者の気遣いが出る優秀キャラだったとは……!?

「……ごめんなさい。少し言い過ぎた……」

「大丈夫……です。こつち……こそ……すみません……でした……」

「はい、仲直り」

布仏さんが私達の手を取って、そつと握らせてきた。

腕袋越しではあったけど、彼女の手はとてもポカポカしていた。

「これで、私達はお友達だね」



「友……達……う？」

私と……彼女達が……友達……？

「うう……」

「や……やよつち!？」

「ど……どうしたの？」

「私……今まで……ずっと……一人(でいる事が好き)で……(相手の方から)友達……て言われた……の(前世も含めて)初め……てで……」

「やよつち……」

「板垣さん……」

くそ……ボツチ道を極めつつ私が……まさか『友達』と言われただけで泣いてしまうとは……。

けど……だけど……なんでか嬉しかったんだ……。

一人が好きなの……一人の方が気楽なの……。

「私はやよつちを一人になんてしないよ。大切な『友達』だから。ね？」

かんちゃん」

「うん。私と板垣さん……いや、弥生は今日から友達」

「二人……とも……」

やば……涙が止まらないや……。

「ありが……とう……」

「……!？」

ちゃんと笑顔……出来たかな？

今にして思えば、この二人って原作でもとてもいい子達だったじゃないか……。

この二人なら心を許してもいいかもしれない……。

少なくとも、第一期<sup>暴</sup>ヒロインズ<sup>カ</sup>の女<sup>女</sup>達<sup>達</sup>のような事はしないだろうし……。

(やよつちの笑顔……とっても可愛かったよ♡)

(え? ちょっと? ……なんで私こんなにドキドキしてるの? ……相手は

同じ年の女の子だよ?)

おじいちゃん……弥生は生まれて初めて、心から信頼出来る人間

……友達が出来ました。

私もとうとうリア充の仲間入りか……。

「おやおや。なんだか楽しそうにしてるじゃないのさ」

「「あ」」

私が注文した品を持ってきてくれた食堂のおばちゃんが、ニコニコしながら大きな木製の桶と熱いつゆが入っている器を私の目の前にドンツ！と置いてくれた。

「それじゃ、確かに渡したからね。無理しない程度に食べるんだよ」

さっきまで置いてあった番号札を代わりに持っていった。

「や…やよつち…?」

「これはなに…?」

「えっと…釜あげ…うどん?」

「いや、それは見て分かるんだけど…」

「量が…」

そんなに驚くような事かな?

木製の大きな桶に並々と入っている熱々のお湯に入っているのは、16人前の釜あげうどん。

普段でも食べられる量ではあるけど、リア充の仲間入りを果たした今の私ならば、余裕で平らげられる自信がある!!

「二人…は食べない…?」

「「あ!」」

忘れてたのかよ…。

「「いただきます」」

簞のうどんは少し危なかったが、それでも何とか食べられた。

本音はなんともスローなペースで食べていて、見ているこつちが心配になってくる。

「「おお〜…」」

「ほうひはひふあ?」

「凄いな〜…」

「美少女フードファイター…」

フードファイターって…私なんてまだまだでしょ。

本職のフードファイターの人は私なんて比較にならないよ。

「人は見かけによらない…」

「だね〜…。それでいて、本当に美味しそうに食べてるよね〜」  
実際に美味しいからね。

あ〜…。マジで麺料理大好き。

うどんも蕎麦もラーメンもどんと来い！

他にもちゃんぽんとかもいいよね〜。

いつか長崎まで行って、本場の長崎ちゃんぽんを味わってみたいな  
〜。

後で知ったんだけど、私の事を追いかけて織斑も食堂にやって来て  
いたらしいが、お約束のように篠ノ之とセシリア・オルコットと遭遇  
して、また追いかけられたらしい。

向こうも向こうでリア充をしてるんだな〜。

早くハーレムを築いて、私の事なんか無視して原作のようなドタバ  
タした毎日を送ってくれたまへ。

私は私で、ここに居る『友達』と充実した毎日を送るからさ。

そういや、本来ならここで織斑が上級生に『ISの事を教えてあげ  
る』って言われていたつけ。

それでもって、それにムキになった篠ノ之が自分の素性を明かし  
て、自らあの野郎の特訓を受け持つ事にしたんだよな。

先輩に誘われなくても、結果的に放課後に一緒に練習をするんだろ  
うな。

…。私には関係無いか。

甘しい!!

放課後になり、一夏は職員室へと向かっていた。

と言うのも、ISの事を殆ど知らず、訓練すらも碌にした事が無い自分では、確実に一週間後の試合で敗北してしまうと思ったからだ。

原作通りならば箒に頼るのだが、昨日の事件によつて箒の中で一夏の株は急降下しており、ちゃんとした会話をする事すら困難で、ISの事を教えて貰う事なんて論外だった。

そんな彼が真つ先に頼ったのが、自身の姉であり一組の担任でもある織斑千冬。

ことISに関してはプロ以上の存在である彼女であれば、きつといアドバイスをしてくれると思つたから。

「で？ 私の所に来たと？」

「うん……」

職員室の千冬の机までやって来て、覇気のない顔で彼女と話している。

「確かに、私ならばお前に色々と助言をする事は出来るだろう」

「じゃあ……」「しかし」……？」

「試合の形式をとつている以上、教師としてお前にだけ肩入れをする訳にはいかない。それは分かるな？」

「あ……あ……」

なんとなく分かつていた答え。

いくら血を分けた姉とは言え、ここでは教師と生徒。

ここで一夏に何かを言えば、間違いなく身内鼻肩と揶揄されるのは明らかだった。

そうなれば、一夏にも千冬にもいい事は何も無い。

「そう落ち込むな。そうだな……」

かと言つて、ここで何もせず放り出す事もしたくない。

千冬は少しだけ考えて、あるアイデアを思い付いた。

「そうだ。板垣にでも教えて貰つたらどうだ？」

「弥生に？」

意外な人物の名前が姉の口から出た事に、一夏はキョトンとなった。

「弥生？ ああ……板垣の事か。その通りだ。普段のアイツの様子からは想像も出来ないかもしれないが、ああ見えても板垣は学年次席なんだぞ」

「次席って……入学試験で二番目の成績だったって事か？」

「そうだ。因みに、主席はオルコツトだ」

「マジかよ……。弥生ってそんなに凄かったんだ……」

「私も後で知って驚いたがな」

その食事量もさることながら、弥生は意外と優等生だったりする。オタク故に、変な部分に知識が偏ってはいるが。

「昨日の事を詫びるついでにダメ元で頼んでみたらいい。真面目に頑張っている姿を見せれば、アイツも少しはお前の事を見直すかもしれないぞ？」

「弥生が俺を……」

弥生と一緒に勉強できる。

それを想像しただけで、一夏の心臓は大きく高鳴った。

「アイツだって、勉強を教えて欲しいと言われて無下にはしないだろうしな。試しに言ってみろ。勿論、その前にちゃんと謝罪をする事は忘れずにな」

「分かったよ！ 弥生に頼んでみる！ ありがとう！ 千冬姉！」

来た時とは打って変わって、テンションを高くして職員室を出て行った。

「私の事は織斑先生と呼べと……まあ……いいか」

なんかかんだ言っただけで、弟には甘い織斑先生なのだった。

（しかし、一夏の奴……板垣の事を言った途端に嬉しそうにしていたな。まさかアイツ、板垣の事を……？ 確かに、シチュエーション的には少し前の恋愛マンガのようではあったが……。もしもそうならば、あの朴念仁にもようやく春が訪れたと言う事か……。仮にあいつ等が両想いになって付き合えば始めて、そこから段々と関係が深まっていき、そして最終的には結婚……。そうなれば、板垣は私の義理の妹

と言う事に？ それには……)

「悪くないな……」

弟の幸せを願っているように見えて、その実は弥生が身内になる事が嬉しい千冬。

そこでちよつとだけ妄想をしてみる。

『御飯が出来ましたよ。千冬お姉さま』

『もう……変な所を触らないでください……』

『きやつ！ こんな事……でも、お姉さまになら私……』

遠い目になりながら、地味に鼻血を流す。

その顔は明らかに二やついていた。

机の上にある不要なプリントの裏に思わず『織斑弥生』と書いてみる。

「織斑弥生……か。悪くないな……」

「せ……先輩？」

後ろで二人分のお茶を持って来た真耶が、苦笑いをしながら見つめていた。

流石の彼女も、まさか目の前の女が妄想の中で実の弟の婚約者をNTRする事を考えてるとは、夢にも思わないだろう。

こうして、またもや弥生の知らぬ場所で彼女の望まないフラグが立ったのだった。

・  
・  
・  
・  
・  
・

放課後の図書室。

私は勉強の為の資料や参考書を借りに来た。

ん〜？ 私だつてちゃんと勉強ぐらいはするんですよ？

唯でさえIS学園は超がつく程のエリート校だからね。

授業に遅れないように普段から勉強は怠らないようにしないと。趣味などはやるべき事をちゃんとしてからすればいいんだから。

「んん……！」

と…届かない……！

あの上の棚にある参考書が取りたいのに、あと少しだけ届かない……！

台……台はどこかにないのか……？

(げ……！)

周りを見たら、台は全部使われてる……。

こうなつたら、自力で取るしかないのか……！

仕方が無い。これだけは使いたくは無かったけど、最終奥義『棚昇り』を使って……。

「ほら。これだろ？」

「あ……」

横から手が伸びて、誰かが私が取ろうとしていた参考書を持って私に渡してきた。

「あ……りが……と……う……う？」

「弥生の為ならこれぐらい、いつでもするよ」

げ！ 織斑一夏!!

図書室とは縁も所縁も無さそうなこいつがなんでここに!?

「弥生は真面目なんだな。放課後に図書室に来るなんて」

「な……んで……？」

「弥生の後ろ姿を見つけて、後からついて来た」

やっぱこいつストーカー!!

私なんかにつき纏つて、何のつもりだよ!

はっ! まさか……あの時の事を利用して、私を脅すつもりか!?

「その……さ。実は弥生にお願いって言うか……頼みがあるんだよ」

矢張りか! な…何を言う気だこのヤロ〜!

「俺にISの事を教えて欲しいんだ!」

「え……………」

ええええええええええつ!?

なんで!? なんで俺にそれを言うの!?

「千冬姉に聞いたらさ、弥生に頼んでみればいいんじゃないかって言ってくれてさ。弥生って学年次席なんだろう?」

ま…マジで!? 私ってそんな好成績を残してたの!?

そんな話、今初めて聞かされたんですけど!?

って言うか、あのバカ姉はなんで余計な事を吹き込むんだよ!

私を巻き込もうとするんじゃないよ!

「頼む! このままじゃオルコットに何も出来ないで負けちまう! それだけは絶対に嫌なんだ!」

「……………」

男としてのプライドってヤツ?

私も元男としてその心境は理解出来るけど、ここで協力するってのは話が別だしな…………。

でも、ここでもしもこいつの頼みを断ったりしたら、間違いなく織斑千冬の逆鱗に触れて、そして…………。

(100%の確率で死亡フラグが立ちますな)

これもう選択肢なんて無くね?

『はい』と『いいよ』しか無くね?

(ここは…………本気で腹をくくるしかないようだな…………)

でも、このまま普通に教えたんじゃ駄目だしな。

ちゃんとこつちから条件を付けないと。

「わ…分かりまし…た…………」

「え? いいのか?」

「…………… (コクン)」

「やった! 本当になりがとな!」

「こらそこ! 興奮して私の手を握るな! つーか五月蠅い!

「(こ)…………図書室…………だから…………静かにして…………」

「あつ…………そうだったな。悪い…………」

バツが悪そうにして手を離すが、それでも嬉しさは隠してくれてない



ようだ。

だって、なんかニヤニヤして気持ち悪いし。

「あれ……織斑君だよね？」

「嬉しそうに手を握ってたって事は……もしかして彼女？」

「マジか……そうだよね……あれだけイケメンなら、彼女ぐらいいるよね……」

ほらあ……なんか注目されてるし……！

それと！ 誰がこいつの彼女か！ そんなの死んでも御免だわ！！

「んじや早速ここで「でも……」どうした？」

「ここです……のは恥ずかしい……から、その……私の部屋でしま……せんか？」

「や……弥生の部屋で……？」

「う……ん……」

こんな大衆の目がある場所で一緒に勉強なんてしたら、間違いなくヒロインズの耳にも入る。

もしもそんな事になれば、別の方面で死亡フラグが立つは必然！  
何が悲しくて死亡フラグを幾つも立てなきやいけないんだつっの。

（や……弥生からのお誘い!? うわ……マジで嬉しい!! 弥生と部屋で二人つきりで一緒に並んで座って勉強か……最高だな）

……絶対に碌な事を考えてないな。

女になってから男のそんな部分に敏感になったから、よく分かるよ。

「わ……たしは先に行ってるから……準備を……して……後で来てくださ……い……。出来……れば誰にも……見られないで……」

「了解だ。任せてくれ」

「そ……それじゃ……」

ここは敢えて分かれて行動しないと、移動中に一緒にいるところを見られたら一巻の終わりだからな！

けど……なんでこんな事になったんだろ……。

・  
・  
・  
・  
・  
・

十数分後。

一夏は勉強道具一式を持って弥生の部屋の前にいた。

と言っても、隣の部屋なのでそこまで言うほどではないのだが。

「な……なんか緊張するな……。前に来た時は俺も弥生も色々と普通じゃなかったしな……」

お互いの考えている事は真逆ではあるが、それでも短時間でここま  
で来れたのは奇跡的だと言えるだろう。

なんせ、二人のファーストコンタクトは最悪に近かったのだから。

「だ……誰もいないよな？」

周囲を見渡して、誰もいない事を改めて確認する。

一夏は弥生が誰にも見られないで来るように言ったのか全く理解してないが、それよりも弥生の部屋に本人の許可を取って入れる事が何よりも嬉しかったので、大して気にはしていなかった。

「えっと……ちゃんとノックぐらいはしなきゃ……だよな？」

疑問形ではなくて、人としての当然のマナーである。

それでも、ノックと言う行動を出来るようになっただけでも、少しは進歩している……のか？

震える手でドアを軽く数回ノックして、室内にいらっしゃる弥生に話しかける。

「や……弥生？ 俺……一夏だけど」

数秒後、少しだけ扉が開いて、その隙間からそっと弥生が顔を覗かせた。

「早く……入って……」

「お……おう……」

彼女が静かに扉を開けて、一夏が中へと入る。

「ここが弥生の部屋か〜」

実家から色々と持ってきているとは言え、弥生の部屋は結構小さくぱりとしている。

本棚には持って来た漫画やラノベが収納してあって、テレビの近くには各種ハードのゲーム機が置いてある。

ソフトはテレビの近くにある収納棚に丁寧に仕舞ってあった。

本当はもつと様々な物を持って来たかったのだが、荷物の都合上、今はこれが限界だった。

弥生は密かに連休の時にでも一度家に帰って、その時にでも持ってこれなかった物を持ってこようと思っている。

「あの……恥ずかしいからあんまり……」

「そ……そうだよな。女の子の部屋をあまりジロジロと見渡すもんじやないよな。ゴメン……」

またまたデリカシーの無さを露呈してしまった一夏。

ここから挽回する事は出来るのだろうか？

「んじや、早速お願いしてもいいかな？」

「は……はい……」

備え付けの椅子を二つ並べて、二人は並ぶように椅子に座った。

本当は少し離れた場所から教えようと思っていた弥生だったが、一夏の視線に負けて渋々一緒に座る事に。

「えっと……どこ……から……？」

「恥ずかしいんだけどさ、その……一番最初から……」

「え……？」

予想だにしていなかった一夏の言葉に、思わず目が点になる弥生。

（最初って……教科書の一番最初って事か？ マジで？ 冗談でしょ？ 確かに原作でも『参考書捨てた〜』って言ってたけど、それでも昨日今日の授業を聞いていれば、最低限の事ぐらいは分かるでしょ？）

まさかの展開に早くも頭と胃が痛くなる弥生。

一夏に勉強を教える事だけでも相当に神経をすり減らしているの

に、その教え子が何も理解していないとなれば、彼女でなくても気が滅入るだろう。

「じゃあ……ここから……」

「よしー」

そこから、弥生主導の一夏の勉強が始まった。

弥生は可能な限り丁寧に関自分の言葉で教えていって、それを一夏は真剣に聞きながら教科書とノートを何回も見ながらペンを走らせていた。

「PIC?」

「パ…パッシブ……イナ…シャル……キャンセラー……の略……で、ISはこのPIC……を搭載……することで……宙に浮いたり……加速や…空中停止……が出来……るんだよ……」

「そ…つか……。これがISの根幹……で事か」

「IS…の根幹……は…ISCコア……で、PICは…あくまで付随して…いる…装置……。IS…が普及…し始めた頃……には、このPICが搭載……されて…なかった……陸上……特化型の機体……も少数だけ……あ…たり……して……」

「成る程なく。そういや、授業でもISCコアは467個しかないって…言…って…た…っけ」

「う…ん…。コア…の製造……方法は……篠ノ之博士……しか知らない……から……」

最初は嫌々でやっていた弥生だったが、時間が経つにつれて普通に勉強を教えていた。

(思ったよりも真面目に勉強するんだな……。ふふ……ほんの少しだけ見直したかも)

弥生の中で僅かに一夏の評価が上方修正された。

(や…弥生の髪からいい匂いがする……。髪をかき上げる姿が凄く綺麗だ……)

だと言うのに、肝心の一夏は間近で見る弥生の姿に夢中になっている。

実際、勉強を教えている弥生の姿は非常に絵になっていて、この光

景を世間の男達に見せれば、間違いなく彼女のファンが爆発的に増える事は確実だった。

「こうして勉強して知識をつけるのはいいけどさ、やっぱこれだけじゃ駄目だよな……」

(へえ〜……ちゃんと分かっているじゃん)

「なあ…弥生。IS学園にはISの訓練機つてのがあるんだろ？ それを使つて実際にISの特訓つて出来ないのかな？」

「それ…は難しい……と思う……」

「なんでだ？」

「この時期……は…訓練機……の貸し出し…は私達…新入生よりも……上級生…が優先される……から……」

「マジか〜……」

「訓練機……の数は限られてる……し…入学したて…の私達…よりも……この時期…の上級生…は色々…大変だから……」

「新参者の俺達の都合で先輩達の訓練の邪魔をするわけにはいかな…  
いって事か……」

「そう言う……事……」

残念そうに俯く一夏。

幾ら接触を避けている相手とはいえ、こうして直接勉強を教えている以上、ここでフォローをしないのは無いと思う弥生は、安心させるように一夏に優しく語りかける。

「で……も……IS……を使つて訓練……するだけが……全てじゃない……から……」

「そうなのか？」

「ISはあくまでスポーツ……だから……まずは体力作りから……始めればいい……と思う……よ……？」

「体力作り……か」

幼少期から剣道をしていた一夏にとって、体力面だけが数少ない長所だった。

それは、筈が転校して剣道を止めた今となっても変わらない……と本人は思っている。

「でも……今は勉強……」

「だな。続きしようぜ」

マンツーマンの勉強会が再会し、二人は再び教科書とノートに視線を向ける。

弥生と一夏の声とペンがノートを走る音、そして時計の針が動く音だけが室内に聞こえていた。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

外がすっかり暗くなり、すっかり体が強張った一夏が思いつきり背を伸ばす。

「う~~~~くん……！疲れたあ~~~~」

「キリがいい……から、今日はここ……まで……」

「りよ〜かい。って……『今日は?』」

「明日も……今日と同じ時間にする……から……」

「マジでっ!?!」

望外の言葉が聞けて、一夏の元気が急速に復活した。

(途中で投げ出したりしたら、それはそれでまた死亡フラグが立ちそうだな……)

本当なら絶対に嫌ではあるが、自分の命には代えられない。

弥生にとっては、原作キャラとの関わり合いの一つ一つが文字通りの死活問題だから。

「で……でも……試合の日まで……だから……ね……?」

「それでもいいよ！ 充分だよ！」

(よっしやああああああああつ!!! また弥生と一緒に勉強が出来る!!)







## 羞恥プレイか!!

一夏が弥生に勉強を教わってから約一週間が経過して、遂に約束の試合の日となった。

あれから一夏は言われた通りに、毎日のように放課後の決まった時間に弥生の部屋に行き勉強を教わった。

勿論、弥生に言われた通り、箒達に見つからないようにして。

それと並行して、空いた時間を使って密かに筋トレを初めとした体力作りを率先してやり始める。

弥生に指摘されたからと言えばそれまでだが、それでもやるべき事をきちんとこなしているのは大きな進歩なのかもしれない。

一方の弥生と言えば、勉強会初日の最後に起きたラッキースケベによってほんの僅かに上がった一夏への好感度がマイナスにまで下がっているせいか、表面上はいつもと変わらないようにしているものの、心の中では完全に『乗りかかった舟』と言う気持ちと『義務感』、それと『いのちをだいじに』の命令を自分に下してから、非常に冷めた気持ちで勉強を教えていた。

最初こそ『自分が教えたのだから、どうせなら奇跡的な勝利を掴んでほしい』と思っていたが、今となってはもう勝ち負けとかどうでもよくなっていた。

それどころか、『最終的には原作通りに負けるんだろ?』なんて考えるようになっていた程。

いくら転生前は男だったとは言え、それでも好きでもない男に押し倒された拳句に胸まで揉まれれば、感情表現が苦手な弥生でもブチ切れると言うもの。

果たして、セシリアとの試合に無事に勝利して、一夏は僅かでも弥生からの信頼を取り戻せるのだろうか?

それとも、テンプレのように負けてしまうのか?

.....

・  
・  
・  
・  
・

翌週の月曜日の放課後。

なんでか私は第3アリーナのAピットに立っていた。

「……妙に浮かれている……いや、自信に満ちている……のか？ とにかく、緊張だけはしていないようだな」

「当然だぜー！ なんせ、この一週間の間、弥生が二人つきりで勉強を教えてくれたり、アドバイスをしてくれてたんだからな！」

「ほう……？」 板垣がなあ……」

お願いだから、ニヤニヤしながら目を細くしてこっちを見ないでください。

私だって、やりたくてしたわけじゃないんですから。

下手に断つたり、中途半端に終わらせれば、次の瞬間にはアンタの手によって私の首が刎ねられる可能性があったから、仕方なくやってあげただけだ。

……一応言っておくけど、これは別にツンデレ発言なんかじゃないからな。

割と深刻な問題なんだからな！

「板垣。一体何をこいつに教えたんだ？」

「い……一応……基本的な……事と……ちよつとした……応用……。後は……試合……までにして……おいたほうがいい……と思つた事を言っただけ……です……」

「成る程な。まあ……この馬鹿にはそれぐらいが丁度いいのかもしれないな。学年次席であるお前が本気で勉強を教えたら、間違ひなくアイツは知恵熱で倒れる」

あゝ……なんとなく分かるわ。

なんと言いますか、容易に想像がつくわ。

学園に来て初めて、この人と意見が合った気がする。

「なんにしても……だ。板垣」

「わふ……！」

あ…頭を撫でられた!?

こ…これはあれか!? ここから必殺のアイアンクローになる流れか!?

そんなことしたら私の脳みそが飛び出しちゃう!!

「私の弟に色々と教えてくれて感謝している……ありがとう。この借りはいつか必ず返す事にしよう」

「は……い……」

お…お礼を言われた? いやいや……ここで早とちりするのは素人のする事。

私は簡単には騙されないから……。

借りを返すとか言いながら、絶対にまた碌でもない事をするに違いない!

それがなんなのかは、私の乏しい想像力じゃ思いつかないけど……。

因みに、本来ならここにいる筈の篠ノ之箒は、今回は観客席に移動している。

その観客席には簪と本音も一緒にいて、本当なら私も一緒に二人と観戦をするつもりだったのだけれど、移動する前に一夏（何度もしつこく『名前で呼んでくれ』と言われて、最終的に弥生が折れた）が私の手を引っ張って、ここに連行してきた。

その際、その場にいた三人は親の仇でも見るような目で一夏を鬼の形相で睨み付けていた。

あの歩くマイナスイオン発生装置である本音ですら、言葉に出来ない顔をしていたし。

「俺の専用機ってまだ来てないのか?」

「今、山田先生が取りに向かっている。もうそろそろ来るんじゃないか?」

なんて適当な……。

「お…織斑君！ 織斑君！ 来ました！ 来ましたよ！」

あやや…ピットの中に山田先生が今にこけそうな駆け足でやって来ましたよ？

「はあ…はあ…つ…疲れましたあ…」

「わふっ」

にや…にやんと!? 疲れてよく前が見えていないのか、山田先生が私に抱き着いてきましたよ!?

実を言うと、私は山田先生の事を基本的に信用も信頼もしている。

何故なら、原作でもこの人は全くと言っていい程に暴力的な描写がされていなかったし、実力も申し分ない。

おまけに、滅茶苦茶いい人だし。

それは実際に何回か話して改めて実感した。

私の中では、山田先生はこのIS学園における数少ない『良心』だと本気で思っている。

残りの良心は簪と本音ね。これゼツタイ。

「おい…何を抱き着いている…!」

「え…? あわわわわ! ご…ごめんなさい! 板垣さん! 別に

そんなつもりでしたんじやなくてですね…」

「だ…大丈夫…です」

「いいなあ…」

寧ろ、私的には役得でした。

あ……なんで日本って同性愛&一夫多妻じゃないんだろう…。

…。  
もしも許されるなら、絶対に山田先生と簪と本音と結婚するの…。

あと、お前だけには絶対に抱き着かれたりなんてされたくないから。

「で? どうしたんだ?」

「そ…そうでした! 来たんですよ! 織斑君の専用機が!」  
やっつとですか。

生で主人公機を見てるのは、地味に興奮するな。

色々と問題が指摘される機体ではあるけど、それも使い手次第なん

だと思っただよなく。

だとしても、普通はトーシロにブレオンの機体なんて与えないと思うけど。

「もう準備は出来ているな？」

「おう」

「ならば……」

織斑先生の視線に山田先生が頷いてから、ピットの搬入口がゆっくりと開かれていく。

その向こう側にあったのは……少しくすんではいるが、実に綺麗な純白の機械鎧だった。

「これが織斑君の専用機……『白式』です！」

「こいつが……」

やっぱり名前の通りに白いんだな。

見た目だけはかなりカッコいいけど、癖が強すぎる上級者向けの機体。

……あの天災兎が手を加えたんだから、これぐらいはまだ生易しいレベルなのかもしれないけどさ。

「あの……私……そろ……そろ……」

「む？ もう行くのか？」

「友達……待たせてる……ので……」

「そうか………残念だな……」

最後、ちゃんと聞こえてたからな。

私に何をする気だったんだよ。

「弥生」

「ん？」

またまた……男らしい笑顔なんて見せてくれちゃって。

これが私じゃなかったら、普通に惚れてたかもね。

「絶対に勝ってみせるからな。だから、見ててくれ」

「う……ん……」

どうぞご勝手に。

勝てるもんなら勝ってみなよ。

でも、代表候補生はそう甘くは無いぞ。

「失礼……しま……した……」

「「あ……」」

その場から逃げ去るようにして、私は簪達の下に急いだ。

最後、山田先生も一緒に声出してなかったか？

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

予め言われていた席まで行くと、そこには本音と簪以外にも別の人物が一緒に座っていた。

「お？ 遅かったな」

なんでこいつ……篠ノ之箒がいるんだよ……。

確かに彼女も観客席に行くとはのめかしていたけど、数ある席の中でどうしてここに来るのかわからず！?

「いや、あのまま別れるのも忍びなかったから、一緒にいるんだ」

「意外と話が合ってた楽しかった」

「私もだ。簪とはいい友達になれそうな気がするぞ」

「こちらこそ」

わ……私の癒しが剣道女に懐柔されてしまったあゝ!!

そんな……どうして……。

「立ってないで、ここに座ったらどうだ？」

「そう……だね……」

んでもって、指定された席も篠ノ之の隣だし……。

人類に逃げ場無し。私にも逃げ場無し。

諦めて、大人しく座った。

下手に導火線に火をつけるぐらいなら、私が流れに従った方がいい。

「はい。やよつちの分のジュースも買っておいたよ」

「ありがとう……」

ううう……本音えく!!

やっぱり私、貴女と結婚するうく!!

(本音がくれたジュース……美味しい……)

市販のジュースでも、本音が渡してくれただけで美味しさが二乗だよく!

「ところで……一夏の奴はどうしていた？」

「張り切ってた……」

「そうか。別に張り切るのいいが、アイツの事だから、変に空回りとかしそうだな」

お? おおお? なんだかんだ言っつて、やっぱり愛しの幼馴染の事が心配なんですなく?

いいぞいいぞく! そのままゴールインしちゃえ!

「織斑一夏……」

「あ……」

そつか……簪はあの男がISを動かした事によつて、専用機の開発を凍結されたんだっけ。

彼女としては、なんとも複雑な気持ちなんだろうな……。

でも、それならなんで試合を見に来たんだろ?

あれか? せめて怨敵の顔ぐらいは見ておきたいってか?

「あ! おりむーが来たよ!」

「それに合わせて、セシリアもやって来たな」

タイミングを計っていたのか?

別にどうでもいいんだけどさ。

(あれがブルー・ティアーズ……)

あつちも遠目とは言え現物を拝めることが出来た。

機体の形状自体は私が知っている通りんだけど……。

(本当に上から下まで真つ青なのな……)

『名は体を表す』とはよく言ったもんだ。

白式も同じ様なもんだけど。

「一夏の機体が白で、セシリアが青か……。対照的な機体だな」  
言われてみれば確かにそうかも。

ん？　なんか二人して話してないか？

『ようやく、この時が来ましたわね』

『ああ……俺も待ち遠しかったぜ』

『ここで貴方を屠り、弥生さんにこの勝利を捧げる……。なんて素敵  
なんでしよう……♡』

『それはこっちのセリフだ！　絶対に勝って、弥生に勝利の報告をす  
るんだ！』

『叶わない夢を語るなんて哀れですわね。何度も言っている通り、  
貴方に弥生さんは相応しくありませんわ』

『それを決めるのはお前でも俺でもない。弥生自身だ』

『言うではないですの……。でしたら……。』

『……………！』

『この場にて弥生さんに証明してみせますわ！　私こそが彼女の伴侶  
に相応しいと!!』

『やってみろ!!』

オルコットの長身のレーザーライフルの先制射撃が炸裂。

一夏は上手く回避出来ずに、胴体部に直撃を受けてしまった。

っーかさ……

(こんな大勢が見てる前で！　弥生弥生弥生って人の名前を連呼する  
んじゃねえよ!!滅茶苦茶恥ずかしいじゃないか!!)

思わず両手で顔を覆って体を縮こませてしまった。

顔が熱い……。私が二人の話していた弥生だって気が付かれませ  
んように……！

「ど……どうした弥生!?　大丈夫か!？」

そこで私の名前を出すんじゃないよ!!　ちっとは空気を読め!!

「あの子が二人の言っていた弥生って子……?」

「そう言えば……前に図書室で一緒にいるところを見たような……」



もうバレてるし〜!

しかも、あの時の事も見られてたのかよ!?

「意外と頑張ってはいるが……」

「防戦一方……」

「だね〜……」

三人の会話を聞いて、指の隙間からチラツとだけステージの様子を見る。

そこには、一本の近接用ブレードを持ったまま、レーザーの雨を前に回避に専念している一夏の姿があった。

## 頑張れ、男の子

一夏とセシリアの試合は中盤に差しかかっているが、近接用ブレードしか装備していない……と言うよりは、それしか武装が無い一夏は思うように攻撃が出来ないでいた。

「どうやら、逃げ回る事だけは一人前のようにすわね」

「お褒め頂いて光栄だよ……!」

「でも、それもここまでの話」

セシリアの顔が急に真剣みを帯びた瞬間、白式の左脚にレーザーが直撃した。

「なっ!?!」

一夏は何が起きたのか理解できていなかった。

確かに視線はセシリアから離していない。

彼女の手にあるレーザーライフルの銃口はこちらに向いていないと言うのに、何故か攻撃が命中した。

「ん……? なにか後ろに浮いている物が少なくなっているような気が……」

「やっとな気が付きましたの? ご自分の周囲を見てごらんなさい」

「ご……これは……!?!」

一夏が自分の周りを見渡すと、そこにはブルー・ティアーズのフィン状のパーツが四つほど自立稼働していた。

「これこそが、私の専用機の第3世代兵装……『ブルー・ティアーズ』ですわ」

「機体と同じ名前の武器かよ……」

この時、一夏は弥生との勉強で教わった事を思い出した。

(これが弥生に前に教えて貰ったイギリスの十八番の『ビット兵器』ってヤツか……! 一夏の攻撃力が低い代わりに、機動性と命中性能は通常のISの比じゃないって言ってたっけ……!)

一夏の額に汗が流れる。

相手が切り札を投入してきたと言う事は、彼女がこちらにトドメを刺しに来たと言う事でもある。

(まだ……まだなのか……！)

白式は、原作同様に初期設定が未だに終了していない状態でいきなり実戦に駆り出された。

思わず焦ってしまうが、だからと言って時間が加速する訳でもない。

目の前に設定終了までの時間が表示されているが、まだ結構な時間があった。

「休憩は終了。さあ……いきますわよ?」

(く……来るっ! 今はとにかく、設定が終わるまで回避に専念するしかない!)

セシリアが空いている左手を高々と掲げたと同時に、四基のビットが一斉に襲い掛かってくる。

青白いレーザーが空を裂き、次々と一夏に向かって殺到する。

その様子はまるで、レーザーの雨。

「くそっ!!」

「あらあら……逃げているだけでは勝負には勝てませんわよ?」

「んな事は俺だつて分かつてるよ!」

分かつてはいても、それを行動に移せなければ意味が無い。

徐々に追い詰められていく中、一夏は自身の得意とする観察眼にて、よくセシリアの動きを覗いていた。

(ビットを操作している時、なんでアイツは攻撃をしてこないんだ?)

……まさか! ビットに命令を出している時はアイツ自身は身動

きが取れないんじゃない?)

ここに来て逆転のチャンス到来か?

SEは心許ないが、それでも自分の勘を信じてみる事にした。

「うおおおおおおおおおっ!!」

今の自分の技量では、飛び回るビットを剣で破壊するなんて絶対に不可能。

だったら、肉を切らせて骨を断つ戦法で、一気に自分の距離にする!

これが今の自分に出来る唯一の策!

「そんなっ?!? 攻撃を受けながらもこちらに突貫してくるなんてっ?!?」

まさかの行動にセシリアが目を見開いて驚愕する。

そして遂に、セシリアの懐に潜り込んだ!

「しまっ……………」

「もらったああああああああああっ!!!」

攻撃を思った以上に受けてしまい、攻撃出来るのはこれが最後。

これが直撃しなければ、一夏の敗北は必至。

「……………なくんて、私が言うつでも思いましたの?」

一夏の剣が命中する直前、セシリアの顔が笑顔に変わる。

明らかにおかしい事ではあるが、今の一夏にそんな事を気にしてい

る余裕は無い。

この攻撃に全ての神経を集中させる!

……………そんな簡単に攻撃を通らせるほど、代表候補生はそんなに甘

くは無かった。

「ぐほっ?!」

突如として、一夏の腹部に衝撃が走る。

反射的に衝撃の原因を見てみると、そこにはセシリアの握っている

レーザーライフルの銃身が突き刺さっている。

「これは……………」

「まさかとは思いますが、私が射撃ばかりをしているからと言って、

近接戦が不得手だと勝手に思い込んだんではありませんでしょうね

?」

「……………」

思い込んでました。

「代表候補生たる者、いついかなる時も、あらゆる状況を想定して訓練

を行うもの。自分が射撃型のISを授かった時から、相手が必ず機体

の弱点である接近戦を行ってくることは予想済み」

ですよね。

「大体、私が本国でどれだけの同胞達と汗水流して訓練をしてきたと思

いますの? 自身の弱点である近接戦を補う技術ぐらい、身に付け

て然るべきだと思うのが当然ではなくて？」

御尤も。

セシリアはレーザーライフル『スターライトMk-III』を棒術使用のように振り回し、一夏の顔を強く殴打して吹っ飛ばした。

「はあああああああつ!!」

「ぐあああああああああつ!!!」

体を回転させながら派手に吹っ飛ばす一夏。

更に、そこに追い打ちをかけるようにライフルとビットの標準を合わせた。

「それともう一つ。私がいっ、ビットと自分との連携が出来ないと言いました?」

「ま……さか……!」

「その通り。ビットしか動かさなかったのは、貴方にそう思わせるため。まさか、ここまで見事に引つかかるとは思いませんでしたけど……ね!」

ライフルの引き金が引かれ、同時に各ビットからもレーザーが発射される。

それらが全て一夏に命中し、そのまま地面に激突した。

「……………」

傍から見ると、これで決着はついたかのように見える。

だが、セシリアの顔は未だに真剣なまま、一夏の落下地点に広がる土煙を見つめていた。

すると、突如として周囲を覆っていた煙が吹き飛んで、そこから純白の機体が姿を現した。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「あれがセシリアの実力か……。悔しいが、見事としか言いようがないな……」

「イギリスの代表候補生は伊達じゃない」

「別にせつしーは隕石を一人で押し戻したりはしないよ？」

そう言う簪だって、栄えある日本の代表候補生でしょうが。

一夏とオルコットの試合は、終始オルコットの優勢だった。

これはある意味で当然だ。

機体性能が幾ら上でも、操縦者の実力と経験に天と地ほどの差がある。

いくら知識を植え付けても、いくら体を鍛えても、経験の差だけは覆しようがない。

「しかし……あんな風に銃を扱って、本当に大丈夫なのか？」

「ISの武装は多少乱暴に扱ったぐらいじゃビクともしないよ。あの程度で壊れていたら、とてもじゃないけど実戦じゃ使い物にならないし。だよね？ 弥生」

「う……うん……」

そこで私に振られても困りますよ？ 簪ちゃんや。

(それにしても、まさかライフルをあんな風にご利用するなんてなく。あれじゃ、スナイパーと言うよりは、まるで中国の映画に登場する棒術使いだ)

簪も言っていたけど、伊達に国の旗を背負ってはいないって事か。

懐に飛び込まれた程度で危機に陥ったり、狼狽えたりしたら、代表候補生なんてやってられないってか？

でも……原作じゃ思いつきりビビってたし、ビットと一緒に動けなかった筈……。

もしかして、私が知らない所でオルコットが成長している……？

「む……？ あ的光は……」

「や……つと……終わった……みた……い……だね……」

「「？」」

三人揃ってハテナマークを浮かべない。  
ステージを見ていれば嫌でも分かるから。

「あ…あれはっ!？」

「まさか……」

「ほえ……」

あの真つ白な装甲……あれこそが白式の真の姿か。  
さて、ここから原作のように負けてしまうのか。

それとも、奇跡の逆転勝利でもしてくれるのか？

普段は両者揃って忌み嫌っているけど、試合の時ぐらいは応援して  
やってもいいか。

別に私の事なんて見てないだろうし。

「がん……ばれ……」

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「矢張りでしたか……」

一人だけ納得したような顔で復活した一夏を見つめるセシリア。

その顔には一切の油断は無い。

「ファースト・シフト一次移行……貴方、初期状態ですつと戦ってましたわね？」

「分かってたのかよ……」

「ええ。幾ら素人が乗っているにしても、専用機にしてはどうも動き  
に精彩が欠けていたように思いましたから」

「それなのに、あの猛攻撃をしたのか……」

「獅子は兎を狩るのにも全力を尽くすものでしてよ？」

得意気に微笑むセシリアではあったが、すぐに笑みが消えて真剣

モードに。

「これで勝負は分からなくなったな」

「本当にそうだといいですわね」

「……どういう意味だ？」

「さあ？」

肩をすくめるセシリアの姿にカチンときそうになったが、ギリギリの所で踏みとどまる。

(待て待て。ここで熱くなったら、それこそ相手の思う壺だ。弥生がアドバイスしてくれたことをよく思い出せ！)

一夏の脳裏に、弥生の言葉が蘇る。

『ど……んな時も冷静……にならなきゃ駄目……だよ？ 冷静さ……を欠いたら……勝てる勝負……も勝てなく……なる……から……。一番いい……のは……頭はクール……に……心はホット……にする事……』

ほんの少しだけ目を閉じて心を落ち着かせる。

(頭はクールに……心はホットに……よし！)

カッ！と目を開いて、手元にある剣：『雪片式型』をしつかりと握りしめる。

(雪片……千冬姉が現役の時に使っていた愛刀……。それ以外にも、俺には弥生から沢山の事を教わった……。俺は今、千冬姉と弥生……二人の想いを背負ってここにいるんだ！)

腰を低くして、いつでも飛び出せる態勢を取る。

「この勝負……絶対に勝つ！ 千冬姉の為に……弥生の為に!!」

「それはこちらのセリフですわ!!」

二人の戦意が高まり、今まで以上にアリーナが盛り上がった。

その時だった。二人の機体のハイパーセンサーが、ある姿を捉えた。

「あ……あれは……!?!」

それは、弥生がこちらに向かって何かを言っている姿。

遠距離故に声までは拾えなかったが、弥生の姿を見つけた時点で二人はセブンスンシズに覚醒しているため、その口の動きだけで彼女が何を言っているのかを理解した。



(弥生が……)

(弥生さんが……)

(俺に！)

(私に！)

(頑張れと言ってくれている!!!)

弥生の何気ないエールが、二人に精神コマンド『愛』を発動させた。

「おっしやああああああああつ!!!  
!!!  
いくぞおおおおおおお

!!!」

「今度こそ完全に息の根を止めて差し上げますわっ!!!」

「こらこら。殺してどうする。

先に飛び上がったのは一夏。

雪片の刀身が展開し、そこから白い光の刃が出現した。

本能と勘で、その刃が危険だと判断したセシリアは、即座にビットに命令を下すと同時に自分も攻撃に参加する。

「そこっ!!」

「当たってたまるかっ!!」

弥生のアドバイスの通り、頭を冷静に保つ事でビットの動きだけでも読むようになっていった。

(オルコットの攻撃は位置的にも正面からしか来ない。今の俺なら避ける事もなんとか可能だ。だから、ビットの動きだけに意識を集中させれば！)

流石に被弾率0とまではいかないものの、確実に回避率は向上していた。

「やりますわね……! ですが!」

(迂闊に近づいても、あの銃身を使った攻撃が待っている! 理想なのは銃身ごと相手を斬る事だけど、そう簡単に上手くいくとは思えない……。どうする……!?)

残念な事実ではあるが、体術に置いてもセシリアの方が何枚も上手であり、武術に対して長いブランクがある一夏では現状、手も足も出ない。

回避をしながら接近を試みてはいるが、こちらの距離に入っても直

撃させられなければ意味が無い。

そうして悩んでいる間にも、徐々に二人の距離は近づいていく。

「こうなったら!!」

「……………!!」

あと少しと言う所で、レーザーの包囲網を掻い潜りながら、一夏が加速を掛けて一気に接近する。

先程と同様に剣が届く場所まで近づく事に成功するが、今回の一夏は少し構えが違った。

「これでどうだああああああつ!!!」

「なあつ……………!?!」

下段から弾き上げるようにして雪片を振るい、セシリアが持っていたライフルを遠くに吹っ飛ばした!

「チャンススツ!! 今度こそっ!!」

そのまま流れるように上段からの唐竹割り!…………となればカッコよかったのだが…………。

「……………え?」

「私が先程言った事…………もう忘れてしまったんですの?」

「それって…………」

「数分前に確かに言いましたわよね? 『あらゆる状況を想定して訓練をしている』と。ならば、何らかの理由で武器が手元に無い場合の訓練もしているに決まっている…とは少しも思いませんでしたの?」

振り下ろそうとしていた一夏の両腕は、セシリアの両手に掴まれてビクともしなかった。

勿論、雪片は彼女の体に触れてもいない。

更に言うと、この時の一夏は白式のSEがリアルタイムで減少している事に全くもって気が付いていなかった。

「……………までの奮闘は称賛に値しますけど…………」

一夏の目の前で、二基のミサイルビットが自分の方に向けて発射態勢になっているのが見えた。

(ミ…………ミサイルっ!?! この距離じゃ避けられないっ!)

「これで……………王<sup>チエック・メイト</sup> 手ですわ」

超至近距離でミサイルが直撃、爆発した。

この距離ならばセシリアにも多少のダメージが入ってしまうが、それでも直撃するよりは遥かに損害は少ない。

黒煙に包まれながら落下していくが、その目はまだ諦めていない。

「まだだ……！」

顔だけをセシリアの方に向けて、そこから体も無理矢理方向転換。

「まだ終われないんだあああああああつ!!!」

その状態から三度の突貫。

セシリアもそれに応戦すべく、近接用ショートブレード『インター・セプター』を逆手に持って構える……が、彼女の警戒は杞憂で終わる。

【試合終了！ 勝者……セシリア・オルコット！】

「……………は？」

二人とも全く状況が飲み込めないまま、決着が付いてしまった。

雪片から放出されている光の刃が静かに消滅し、その装甲もゆっくりと閉じていった。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

試合が終了し、観客席にいた生徒達はそれぞれに戻り始めていた。私も席から立って帰ろうと思ったが、その前に少しだけ寄り道をしようと思った。

三人には適当に誤魔化して、私は先程までいたAピットに足を運んだ。

自分で指導した手前、顔ぐらいは見せないと後で怖いような気がし

たから。

ピットに入ると、そこでは落ち込んだ一夏に教師二人が何か話しかけていた。

多分、原作のように『馬鹿』とか『訓練しろ』とか言われてるんだろう。

彼の手には分厚い本まであったし。

あれって多分、専用機の使用に関する規則が書かれた本だよな？

私も持つてるよ。今では普通に部屋のオブジェクトと化してますけど。

「あ……弥生……」

「板垣か……」

私の存在に気が付いた女教師二人は、顔を見合わせてから頷いて、静かにピットから去っていった……つて！　なんで出て行くのっ!!

いや……別にここにいて欲しいとも思っただけ、それでもこいつと二人つきりでここにいるのはちよつと……。

「……ゴメン……弥生……俺……勝てなかった……」

「一……夏……」

どうやら、人並みには落ち込んでいるようだ。

もうちよつと普通にしていると思っただけ、そんなにもこの試合に意気込んだのか？

「折角……弥生に勉強を教えて貰ったのに……俺……俺……!」

ちよ……ちよつと！　なんでここで泣き出すのさっ!?

お前は私に何を求めているんだ！

「……………」

あ……もうっ!

顔だけを見るつもりだったのに……目の前で泣かれちゃ、私だって何もしないわけにはいかないじゃないか……。

「一……夏……」

「弥生……?」

少しだけ背伸びして、一夏の頭をそつと撫でる。

「一夏……は……頑張った……と思う……よ?　初めて……で……代表……候補生

……と……あれだけ……渡り合え……れば……充分……に凄い……方だよ……」

「けど俺……試合に負けて……」

こいつって、こんなにもウジウジトしたキャラだったっけ？

はあく……仕方が無い奴……。

「負け……を知らずに……一人前……になった人は……いない……。誰……だって……最初から上手くいく……ことなんて……無い……」

「弥生もか？」

「う……ん……。失敗は……成功の母……とも言おうし……この負けを……次に生かせばいい……。そうすれ……。ば……。一夏は……。もつと強くなれる……。よ……」

「弥生……」

涙をISスーツの袖で拭ってから、一夏は目を赤くしながら私の顔を真っ直ぐに見つめた。

「俺……次は負けないから……。絶対……に勝ってみせるから……。だから……見てくれよな……。やつとらしくなったか。」

まったく……。どうして私がいいつを慰めなくちやいけないのやら。

「ん……。頑張れ……。男の子……」

でも……。ずつとこのままでいられるよりは……。少しマシかもしれないな。

この後、一夏と別れてからオルコットの様子も見に行ったのだが、私の顔を見た途端に物凄く興奮して、幼い子供のようにはしやぎながら私に抱き着いてきて、ちよつとだけウザかった。

試合に勝って嬉しいのは理解出来るけど、だからと言って私に抱き着くのは勘弁願いたい。

試合直後の汗が制服について汚れるだろうが。

予備の制服があつて本当によかつた……。

その時の篠ノ之の顔がいつも以上に怖かつたのが忘れられなかつたな……。

割と本気でちびりそうになつた……。

後で本音と簪に癒して貰おう……。

## 生徒会長と女の子の日

一夏とセシリアの模擬戦が行われた日の放課後。

IS学園の生徒会室にて、二人の女子生徒が話をしていた。

片方は水色の髪の子、もう片方は眼鏡を掛けた黒髪三つ編みの少女だった。

制服のリボンの色から、水色の髪の子は2年生、眼鏡の少女は3年生である事が窺える。

「噂の男子君がイギリスの代表候補生と試合……ねえ……」

「見に行かれますか?」

「別にいいわよ。こんな事を言つては彼が可哀想だけど、見る前から勝敗は確定しているわ」

「そうでしょうね。男女云々以前に、彼と彼女とでは余りにも経験と実力の差が大きすぎます。将来的にはどうなるか分かりませんが、現時点では……」

「どんなに足掻いても、イギリスの子が勝つでしょうね。代表候補生はそこまで甘くは無いわ。彼女が慢心でもしない限りは……ね」

ハッキリと非情な現実を言い放つ水色の少女。

手元にある紅茶をクイツと飲んでから、目の前にある書類に目を通す。

「いずれは彼にも本格的に接触しないとイケないでしょうけど、今はまだ様子見程度で問題無いわね。彼には非常に大きな後ろ盾が存在しているから」

「本人はそれを自覚していないでしょうけどね」

一夏の事が書かれた書類を机に置いて、もう一つの書類を手を取った。

「それよりも、現状として私が気にしなくちゃいけないのは……」

「例の『彼女』……ですね?」

「ええ。まさか、『あの人』の義理の娘が入学してくるとは夢にも思わなかったわ。確かにこのIS学園には色んな人間が集まるけど、その中でもこの子はぶつちぎりのVIPよ……」

体を伸ばしてから、首をコキコキと鳴らす。

「この子には比較的早めに近づいた方がいいかもしれないわ」

「護衛をする為……ですか？」

「それもあるけど……」

手に持っている書類を隅から隅まで見ていく。

書いてある事は至って普通のプロフィールだ。

『あの人』の義娘にしては、書いてある事が普通過ぎるのよ。明らかに何かを隠しているとしたか思えないわ」

「何か……とは？」

「それが分からないから、直接本人と会って確かめるんじゃない」

カップに残った紅茶を全て飲み干して、ソーサーに置く。

そこに、眼鏡の少女によって紅茶のお替りが注がれた。

「あまり無茶な事はしないでくださいね？ お嬢様も分かっているでしょうが、彼女は本音や簪様とも非常に仲が良く、完全に友達関係になっていきます。下手に彼女を刺激して入学初日の事件のような事が起きてしまえば……」

「間違いなく、簪ちゃんから軽蔑の眼差しで見られるわね……」

「その程度で済めば、寧ろ御の字だと思いますよ？ 下手をすれば、簪様から敵視される可能性も……」

「やめて……想像もしたくないわ……」

ズーン……と落ち込みながら、司令のポーズをする。

「兎に角、彼女との接触には細心の注意を払うようにする。こっただって、可愛い後輩を下手に怯えさせたりはしたくないし」

「それが賢明ですね」

こうして、また本人の全く知らない所で妙なフラグが立つのであった。

.....  
.....  
.....



次の日の朝のSHR。

そこでは、私が予想していた通りの光景が広がっていた。

「と言う事で、一組のクラス代表は織斑君に決定です。無事に決まっ  
てよかったですね」

一部を除いた女子達は、まるで祭りのように大はしやぎをしてい  
る。

私は昔から、祭りとかでそこまで騒ぐような性格じゃないから、彼  
女達の心境が全く理解できない。

一部例外もあるけどね。夏コミとか冬コミとか新作ゲームの発売  
日とか。

「あ……あの……俺、確か昨日の試合で負けました……よね？」

「そうですね」

は……ハッキリと言うなく……山田先生。

「その俺がどうしてクラス代表になってるんですか？」

「それはですね……」

山田先生が説明をする前に、オルコットが立ち上がって勝手に説明  
を始めた。

「貴方は本当に物覚えが悪いですわね」

「なんだと？」

「もう何回言ったか分かりませんが、もう一度だけ言っただけですわね。私は前にこう言いました。『私の目的は貴方を叩きのめす事。クラス代表なんてどうでもいい……』と」

「あ……」

ふうくん……前にそんな事を言ってたんだ。

なんか意外だけど、無駄にクラス代表に拘るよりは好感が持てるか  
もな。

つーか、一夏は今思い出したんかい。

「分かります？ あの試合に勝利した時点で、既に私の目的は達成されているのです。故に、私は自らクラス代表の座を辞退したのですわ」

「そうだったのか……」

ま、これもある意味で自然の流れだからさ。

大人しく諦めてクラス代表になっちゃいなさい。

「別に、貴方にクラス代表を押しつけければ、弥生さんと一緒にいられる時間が増える上に、貴方を弥生さんから引き離せるなんて事は、これぼっちも考えてはいませんわ」

「いやいやいや！ どう考えたって、そっちの方が本音だろ!？」

「私の事と呼んだく？」

「『誰も呼んでませんよ』」

おう……山田先生を含む、原作キャラ四人同時のツツコミとは……。

なんか貴重なシーンを目撃した気がする……。

「なんか……板垣さんを中心に回ってない？」

「私も思った……。なんで？」

そりゃ私の方が知りたいですよ。

それと、別に誰がクラス代表になっても、私は簪と本音以外と一緒にいる気はないから。

これ、重要だからね。テストに出るぞ。

「あく……お前等。気持ちは分かるが、少し落ち着け」

ここで織斑先生様のお言葉ですか。

と言うか、分かるな。分からないで。分からないでください。

「理由はどうあれ、クラス代表はお前に決定した。これはもう確定した事だ。ここで幾ら吠えても意味は無い。大人しく現実を受け入れろ」

「これが大人の社会か……」

そうだよ。いい勉強になったじゃないか。

学校はある意味で社会の縮図って言われてるからね。

(……………ん?)

な…なんか一夏がこつちを見てるんですけど……。

(いや……逆に考えるんだ。ここでクラス代表として頑張っている姿を弥生に見せれば、彼女も俺を見直すようになって、そして……) またぞろ碌な事を考えてないと見た。

私がこれを言うのもあれだけど、ここは敢えて言わせて貰おう。

(男って……本当に馬鹿ばっか)

転生して、この事を改めて思い知りました。

これはある種の真理ではなからうか？

「兎に角、クラス代表は織斑一夏。誰も文句は無いな？」

「……はいっ!!」「……」

「俺の意思はっ!？」

わく…元気な返事。

私には真似出来なくい。

それと一夏、ここまで来たらアンタの意思とか関係無いから。

こうして、一組のクラス代表は原作通りに織斑一夏に決定しました  
とさ。

ちゃんちゃん♪

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

4月も下旬に差し掛かり、少しだけ春から夏への季節の変わり目とも言うべき時期。

窓から見える青空はとても綺麗で、どこまでも透き通っていた。

(空はこんなに青いのか……)

なんで私は……

「う…………ぐぐぐ……………」

朝っぱらから、こんなにも苦しまなくちゃいけないんだ……………」

(お…お腹が痛い……………！ 猛烈に痛い……………！)

眠りから覚めた途端に、この激痛が私を襲って、一気に目が覚めてしまった。

痛みに苛まれながら思い出したけど、この時期は丁度『あれの周期』に入ってるじゃないか……………！

くそ……………！ ここに来て色んな事が一度にありすぎて、頭の中から忘れかけてた……………！

一応、激痛と戦いながら、血で汚れた下着やパジャマは水を入れた容器に浸してあるけど、そこで私の限界が来て、そこからは這うようにしてベッドまで戻ってきました……………。

言っておくけど、ちゃんと着替えはしたんだからね？

読者の皆が期待しているような恰好じゃないからな。

と言っても……………ズボンまでは履ききれずに、布団の中はショーツだけなんだけど。

寝る時は基本的に腕袋と足を隠しているニーツは外して寝ているから、実際には結構恥ずかしい格好してるよな……………。

(今日はもう絶対に無理だ……………！ なんとかして休む旨を先生に伝えないと……………！)

でも、痛すぎて携帯なんて持てないし、かと言って誰かが都合よく来てくれるわけもない。

普段は呼ばなくても来るくせに、どうして肝心な時には誰も来ないんだよ!!

私の心が痛みに負けそうになっていると、やっと私の想いが世界に伝わったようだ。

「弥生？ 起きてるか？ 起きてるなら、一緒に朝ごはんでも食べに行かないか？」

い…一夏あ〜！ 今日だけはお前が来てくれたことが有難いよ〜！

もうノックはいいから、とつとと入って来てくれ〜！

「返事が無い……?」 弥生、悪いけど勝手に入るぞ」  
待ちに待った瞬間。

一夏が扉を開けて入って来て、真っ先に私の事を見る。

「弥生……?」 弥生っ!? ちょ……マジでどうしたんだ!? 顔が真っ青じゃないか!?!」

「一……夏……それ……とっ……」

「ど……どうすればいいんだ……!?」 ここは千冬姉を呼んで……いや、ここから寮長室までは遠いか……!」

直接呼びに行こうとせずに、普通に携帯使って呼び出せよ!!  
それよりも、その机の上にある薬を取ってほしい……。

「弥生、いるか?」 ……一夏……何故にお前が弥生の部屋にいる?」

「この男はまた……!」

篠ノ之にオルコット……! 天の助けがやって来た〜!

男の一夏ならいざ知らず、同じ女子であるこいつ等ならきつと分かってくれる筈……。

「ほ……筈!」 それにオルコットさんも! 今は俺よりも弥生が!」

「……一体どうした?」

一夏の様子をおかしく思ったのか、二人もこっちまで来てくれた。  
これでなんとかなるかも……。

「あ……ぐううう……!」

「や……弥生っ!?」 大丈夫かっ!?!」

「弥生さん!」 しっかりしてください!!」

「あれ……取って……」

「あれ?」

なんとか頑張って声を出して、目線で机を指し示す。

彼女達の前で生身の腕とか足とか出せないからね。

「これは……まさか……」

「そう言う事ですね……」

薬のパッケージを見て察してくれたか……。

ヤバイ……痛みで朦朧としているせいか、二人に対する好感度が爆上げしてる……。

「一夏。お前は出て行け」

「はあっ!? なんてだよ!? 俺だって弥生が心配で……」

「いいから出て行きなさい! 今回の事は男である貴方に出番はありませんわ!」

「な……なんだよそれっ!? 意味分からねえよ!」

頼むから……ここで騒ぐのだけは止めて……。

普通に五月蠅いから……。

「弥生。一緒に朝ごはんには……」

「……なんで皆がいるの?」

ほ……本命キタ

!!!

簪と本音……君達の登場を心から待ってたよおっ!!

「丁度いい所に来た! 二人とも、こっちに来てくれ!」

「どうしたの……?」

ああ……ある意味で役者が揃った……。

余計な奴も一人いるけど……。

「や……やよっちっ!」

「ど……どうしたのっ!」

「これだ……」

後から来た二人に薬を見せる篠ノ之。

それを見て、納得した顔になった。

「成る程ね……」

「そくゆくことか……」

私の痛みの原因が分かった途端、皆は動いてくれた。

「おりむく? ちよくつと私と一緒に行くかう?」

「え? で……でも……弥生が……」

「聞き分けのない子は……実力行使で追い出しちゃうよ?」

あれ……? とうとう痛みで幻覚まで見えてきちゃったのかな

……?

私の大好きな本音が、手の骨をゴキゴキと鳴らしながら一夏の事を  
凄い顔で脅している様子が見える……。

「ほら……行くよ……?」

「いや……だから俺は！」

「私は先生にやよつちが休む事を伝えてくるね〜」

「お願いね、本音」

本音は一夏の手を無理矢理引つ張って、部屋から出て行った。

その間に篠ノ之がコップに水を汲んできてくれて、背中を支えながら体を優しく少しだけ起こしながら、水と一緒に薬を飲ませてくれた。

「急がなくていいからな。そつと……そつとだ……」

「ん……ん……」

薬を飲んだ事で痛みが幾分か和らぎ、やっと考える余裕が出来た。

(前にコレが来た時って、ここまで痛かったかな……?)

もうだいたい前の事だから、よく覚えてないんだけど。

少なくとも、ここまでじゃなかった気がする。

……成長期だからか？

「大丈夫……」

「ん……。少し……楽……になった……」

「よかったですわ……」

私もそう思うよ。

今回ばかりは本当に彼女達に感謝だ。

少しは見解を改めた方がいいかもしれない……。

「用意はしてあるんですか？」

「そのの棚……にある……」

オルコット……いや、ここは感謝の意も込めて、二人を名前で呼ぶことにしよう。

セシリアが私の言った棚を開けて、中を確認する。

別に見られて恥ずかしい物が入ってないから大丈夫。

「有りましたわ。これなら安心ですわね」

箒がそつと私をベッドに寝かせてくれて、ついでにちよつぴりだけ頭も撫でられた。

「今日みたいな日は、お腹をよく温めてから体を楽にした方がいいんだよ」

「ん……………」

そう言いながら、簪が布団を掛け直してくれた。

簪とセシリアに対する好感度は上がったけど、簪と本音に対する好感度は完全にカンストしちゃったよ……………」

マジで二人と結婚したい。って言うか、もう簪と本音は私の嫁。これ決定。

「私達はもう行かなくてはいけないが、今日は大人しく休んでいるんだぞ?」

「放課後にまた様子を見に来ますわ」

「無理をしちゃ駄目だよ?」

この状態で何かをする程、私は根性無いからモーマンタイ。

それよりも、この場にいる三人に礼を言わなくては……………」

「簪……………さん……………セシ……………リア……………さん……………簪……………」

「えっ?」

「弥生?」

「……………ありがとう」

言えたく……………」

なんか薬を飲んだせいで眠たくなってきた……………」

瞼が重いや……………」

「や……………弥生……………」

「弥生……………さん……………」

「名前と呼んでくれた……………♡」

「注目するのってそこ?」

三人の声が遠くなっていく……………」

私の意識が段々と眠気に支配され、気がついた時には完全に眠りに落ちていた。

……………  
……………  
……………



放課後。

朝の痛みで精神的にかなり疲労したのか、弥生は昼食も食べずにぐっすりと眠っていた。

「す〜……す〜……」

彼女の寝顔はとても安らかで、今朝までの苦しみが嘘のようだった。

そんな安らぎの空間に、一人の侵入者がやって来た。

「うふふ……♡ 弥生ちゃんが戻ってくる前に、部屋の中で待ち伏せしましょうか……。授業が終わって即座にここまで来たから、大丈夫な筈よね？」

ノックもせずに無音で扉を開けて入って来たのは、生徒会室にいた水色の髪の少女こと、IS学園の生徒会長である『更識楯無』であった。

「あ……あれ？ なんか人の気配が……って……」

抜き足差し足忍び足で奥まで進むと、彼女の目に穏やかな寝顔を見せている弥生が映った。

「……今日はお休みしてたのね。仕方が無い……弥生ちゃんと話すのは次の機会に……」

流石の彼女も、病人の睡眠を邪魔するほど馬鹿じゃない。

入室した時と同じように退出しようとしたが、ふと、弥生の額に汗が出ているのが見えた。

「このままじゃ風邪を引いちゃうわね……」

足音を立てないようにしてキッチンまで向かい、そこで備え付けのタオルを濡らしてから絞って、弥生の所まで戻って来てから、そつと額に浮かんだ汗を拭いてあげた。

「あら……首にも汗が……」

少しだけパジャマの首元を緩めてから、同じように汗を拭こうとす

るが、そこで楯無の手が止まってしまった。

「な……なに……これ……」

パジャマの首元を緩めた時に見えてしまったのだ。

普段から弥生がひた隠しにしている無数の傷跡、その一部を。

「き……傷跡……？ それも……こんな……」

見えるだけでも10か所近く傷跡が見えた。

そこから更に、首に大きな傷がついているのが見えた。

「この大きな傷跡は……！」

弥生の首には、横一文字に深く傷つけられた跡があった。

普段は服で首元を隠しているから見えない場所。

見ているだけで悲しい気持ちになってくる。

「んん……」

楯無の手がぐすぐぐつたかっただのか、弥生が寝返りをうつ。

それによって、弥生の生身の手が外に晒された。

「……………!?!」

その手にも首元と同様に無数の傷跡があったが、それ以上に楯無に衝撃を与えた光景があった。

「爪が……無い……?」

弥生の両手の爪は全て無くなっていて、そこには爪の代わりに無残な傷跡があるだけ。

しかも、その爪は自然に剥がれたようには見え、明らかに何者かによって強制的に剥がされたと思われる感じだった。

「どこのどいつが、こんな残酷な事を……!」

誰とも知らない人物に激しい怒りを覚える楯無。

だが、そんな怒りを一瞬で霧散させる存在が部屋にやって来た。

「お……お姉ちゃん……?」

「簪……ちゃん……?」

更識姉妹、弥生の部屋にまさかの邂逅。

非常に気まずい空気が室内に流れるが、夢の世界にいる弥生には関係無かった。

「むにゃ……むにゃ……まだ……まだ……それぐらいなら……食べられる

……よ……？」

楯無、まさかの大ピンチ。

弥生はまだまだ夢の中。

簪は軽く混乱中。

この状況……これから一体どうなるのだろうか？

## 私の出番が無いっ!?(by弥生)

濡れタオルにて弥生についた汗を拭っている時に、偶然にも彼女の痛々しい無数の傷跡を見つけてしまい、更にそこへ追い打ちをかけるようにして、現在進行形で避けられている妹、更識簪と出会ってしまった更識楯無。

両者は互いを見つめ合ったまま、完全に固まってしまった。

「……なんでお姉ちゃんが弥生の部屋にいるの……?」

「そ……そう言う簪ちゃんはなんで……」

「質問に質問で返さないで……と言いたいけど、別にいいか……」

会話だけ見れば簪が妥協をしているように見えるが、その顔は全く許していない。

「私は弥生の事が気になって、授業が終わってすぐにここに来たの。今日は実習が無かったし」

「そ……そうなのね……」

「で? なんでお姉ちゃんはここにいるの?」

「そ……それは……」

『弥生ちゃんに接触しようとして、こっそりと部屋の中で待ち伏せて第一印象を少しでも良くしようと思ってました』なんて、口が裂けても言えない。いや本当に。

もしも言ったら、本当に楯無の口が裂けてしまうかも。

主に簪の手によって。

「はあ……。ここで下手に騒いだら弥生が目を覚ましちゃうから、こっち来て」

「ワカリマシタ……」

下手に逆らったらどんな目に遭うか分からない。

楯無は本能的にそう悟った。

簪の言う事に従って、楯無は大人しく廊下に出た。

その際、ちゃんと弥生の手と首を隠すために布団を掛け直しておいた。

静かに扉を閉めてから、改めて問い詰める事に。

委縮して申し訳なさそうに廊下のご真ん中で正座をしている姉と、それを見下ろしながら目の前で仁王立ちをする妹。

……なんだ、この構図は。

「えつとね……簪ちゃん。私は……」

「下手な言い訳なんていいから。私の質問にだけ答えて」

「ハイ……」

完全に立場が逆転していた。

姉としての威厳も、先輩としての威厳も、生徒会長としての威厳も何も無い。

そこには一人の妹に頭が上がらないヘタレな少女がいた。

「なんで弥生の部屋にいたの？」

「えつと……話せば長くなるんだけど……」

「手短に言つて」

「弥生ちゃんがとあるお偉いさんの娘さんだと分かって、それで……」

「護衛をする為に接触しようとした……と？」

「そう……よ。別に依頼されたわけじゃないけど、だからと言って無視できるような事でもないし……」

「ふうくん……」

「ほ……本当よ？」

彼女の名誉の為に言っておくが、嘘はついていない。

それ以前に、ここで嘘をつけば楯無の今後が大ピンチになる。

「……………分かった。一応はそれで納得してあげる」

「よかった……」

ほつと一安心して胸を撫で下ろす。

これで少しは楯無にも余裕が出来た。

「それじゃあ、さつきは弥生に何をしようとしていたの？」

「最初は私もそのまま踵を返して帰ろうと思ったんだけど、その途中で彼女が汗を掻いているのを見ちゃって、少しでもスッキリさせてあげようと濡れたタオルで汗を拭いて……」

「本当にそれだけ？」

「本当にそれだけよ！ 他には何もしてないわ！」



もう生徒達が知っているカリスマ溢れる彼女はどこにもいなかった。

「弥生はまだぐっすりと寝ているみたいだし、後で皆にも伝えないと取り敢えず、今は安静にさせておいた方がよさそうだって」

「まさかの無視っ!?!」

もう姉には見向きもしないで、簪は寮の入り口へと向かって行った。

これは余談ではあるが、弥生の部屋から皆が退出した後、ちゃんと原作通りに実習は行われ、そこで一夏は見事な犬神家を皆の前で披露し、一人で寂しく自分が作ったクレーターの後始末をしていたそうなの。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

外はすっかり暗くなり、星空が美しく瞬いている。

そんな時刻のIS学園の正面ゲート前に、一人の少女がそこそここの大きさのポストンバッグを持って立っていた。

「ここが天下に名高いIS学園ね……。流石に大きいわね」

長く纏まったツイントールが夜風に舞い、彼女の顔に当たる。

「受付受付……つと。見当たらないわね」

適当に周囲を見渡すが、それらしき施設は見当たらない。

自力で見つけるのを断念した彼女は、ポケットの中から皺だらけになった一枚のメモ紙を取り出した。

「本校舎一階総合事務受付……って事は、少なくとも一階にあるって事よね？」

僅かなヒントを頼りに、少しだけ歩いてみる。  
夜と言う事もあって、流石に人の姿は見えない。  
寮や一部の施設の窓から漏れる明かりが眩しく輝いて、何とも言えない寂しさを演出していた。

「ま、適当に歩いていれば見つかるでしょ。多分」

見事な楽観主義。

それで探し物が見つければ、世の中には警察も探偵も必要ない。

「ここまで来た以上、まずはあいつに会いたいなく……」

彼女がこのIS学園に来た目的は唯一つ。

昔からの想い人に会いたいからだ。

彼女の上の方では全く別の思惑があるのだろうが、彼女はそんな大人の事情には全く興味を示してないし、そもそも自分には関係無いとすら思っている。

「そういや、こっちに来る前に何か言ってたような……なんだっけ？」  
うくん……と頭を捻らせて思い出そうとする。

頭の隅っこの方に行ってしまった記憶であるが、何故かポンツ！と思いつけた。

「そうだ……思い出した。確か、この学園に日本の超偉い人の娘が在学しているから、その子と仲良くなって日本との友好な関係を築く第一歩にしろ……」  
「つて言ってたわね。名前は……忘れちゃった」

肝心な事を忘れては意味が無いだろうに。

だが、当の本人は全く気にしている様子は無い。

「はあ……弥生い……」

「いい加減にその溜息を止めてもらえませんか？　本気でウザいので」

「オルコットさんって俺に対して辛辣過ぎじゃねっ!？」

「その理由は自分の胸に聞いたらいかがですか？」

「ソーデスネ……」

聞き覚えのあるような声。

同時に見えた複数人の人影。

（お？　これはナイスタイミング！　丁度いいから、あの子達に受付



の場所を聞こうつと)

そうと決まれば早速、行動開始。

彼女は声のする方に真っ直ぐに歩いて行き、その姿を視界に入る所まで近づいた。

その時、彼女は自分の目に映った光景に驚いた。

(さつき言った事が現実になっちゃった……)

女子達が集団で前を歩き、その後ろを一人の男子が歩いている。

男子は先程から落ち込んでいるようで、溜息交じりに猫背で歩を進めていた。

「貴方の事を指導してくださった弥生さんの顔を立てる為に、態々貴重な時間を消費して貴方の訓練を仕方なく手伝っていると言うのに、肝心の貴方がそれでは意味が無いじゃありませんの」

「だってよく……弥生の事が心配で心配で……」

「さつき簪も言っていただろう。今日一日は部屋で大人しく安静にしておいた方がいいと。それとも何か？ お前は弥生にしくなくてもいい気遣いをさせて、体調を悪化させたいのか？」

「んなわけねえだろ！ 弥生の体が第一に決まってるじゃねえか！」

「だったら、今日はお前も大人しくしている。私達だって本当は、今すぐにもでも弥生の部屋まで行ってその手を握りしめたり、体を拭いてやったりしたいのを我慢していると言うのに……」

「箒……」

シリアスなシーンのようにも思えるが、よく聞けばとんでもない事を普通に話している。

本人達は全く気にもしていないだろうが。

「そう言えば、今日は食堂でおりむくの就任パーティーがあるんだよ」

「俺の？ なんで？」

「さあ？ 私が考えた訳じゃないし」

「それもそっか。でもなあ……弥生が病気の時に俺だけがパーティー……」

「馬鹿か貴様は。よく考えろ」

「馬鹿って……」

「あの優しい弥生が自分のせいで一夏がパーティーに出られなかったと知ったら、間違ひなく責任を感じて落ち込んでしまうぞ」

「それは絶対に駄目だ！ 俺のせいで弥生が落ち込むなんて……」

「だったら、弥生の為にもパーティーに行くべきだ。分かるな？」

「ああ……そうだな。ところで、三人はパーティーには来ないのか？」

「私は人の多い場所は苦手だ」

「そんな気分にはなれないのでパスで」

「私もかな。今はお部屋でお菓子を食べたい気分」

「夜中に間食したら、後々が大変だぞ？」

「だいじょぶ」

「本音さんのそんな所が少し羨ましいですわ……」

完全に話しかけるタイミングを逃してしまい、集団は彼女の前を通り過ぎていった。

勿論、彼女の存在には全く気が付かないまま。

「……………」

手を前に出したままの恰好で固まってしまった。

数秒後に再起動した彼女は、その後すぐに目的の場所である受付が見つかった。

先程の集団が出てきた場所の近くに、探していた本校舎だった。

「はい。これで手続きは終了です。ようこそIS学園に。風鈴音さん」

人当たりのいい受付の女性の言葉を半ば聞き流しながら、鈴は先程の事を思い出していた。

（なんなのよあれは……！ 当たり前のように女の子達を待らせて！

それに、弥生って何処の誰よ!? まさか……この学園で知り合った女の子の名前!? 一夏の奴……私と言うものがありながら……！）

顔は能面のようにしながらも、その心の中はマグマのように怒りでグツグツと煮えたぎっていた。

「あの……織斑一夏君ってどこのクラスか分かりますか？」

「あ……彼なら一組の筈よ。確か、クラス代表になったって聞いたけ

ど。流石は織斑先生の弟さんって事かしら？ 貴女は二組だから、隣のクラスね」

「ソーデスカ……」

棒読みで返事をする彼女……風鈴音。

相変わらず顔は無表情のまま。

「二組のクラス代表ってもう決まって……？」

「決まってるけど……それがどうかしたの？」

「いえね……ちよつと頼みごとをしたいと思いますって……」

「た……頼みごと……？」

後に受付の女性はこう語った。

この時の風さんの背後には怒りに染まった仁王が垣間見えたと……。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

本音の言った通り、夕食後の自由時間に食堂で一夏のクラス代表就任パーティーが行われていた。

パーティーの主役である一夏は、あまり気乗りしてはいなかったが、途中で箒に言われた事を思い出して、作り笑いを浮かべてパーティーを乗り切っていた。

一夏が精神的にもキツくなってきた時、一人の上級生がボイスレコーダー片手にやって来た。

「どもども。こちら新聞部です！ 噂の新生の織斑一夏君にインタビューをしましたく」

「イ……インタビュー？ 俺に？」

「そうだよ。君はこの学園で一番の有名人だからね。あ、私は二年の黛薫子。新聞部の副部長をやつてます。これ名刺ね」

「はあ……。俺が有名人ねえ……。なんで?」

「そりゃあ、君はこの学園で唯一の男子生徒だし、あの織斑先生の弟さんだしね」

「やつぱりそこっすか……」

分かつてはいてもやりきれない。

いくら姉を通して見て欲しくないと思つていても、彼が千冬の弟である事実は覆せない。

その事に納得していないのは本人だけ。

「最初に君に聞きたい事があるんだけど、いいかな?」

「な……なんですか?」

「前に君が図書室にて、とある女の子と一緒にいるところを目撃したつて情報があるんだけど、それつて誰なの?」

「図書室……? 弥生の事か?」

「弥生?!? それが女の子の名前!?!」

「しまった……」

ふと漏らした迂闊な一言が薫子に聞かれてしまった。

一夏は気まずそうに顔を逸らして苦笑いになる。

「それでそれで? その弥生ちゃんとはどんな関係なの? まさか、

彼氏彼女の仲だったり?」

「いやいやいや! 俺が弥生の彼氏なんてそんな……。弥生は俺なん

かとは違つて頭もいいし、凄く美人だし……。俺は弥生に勉強を教わつてばかりで、何もお礼を返せてないし……」

「勉強を教わつたつ!?! もしかしてマンツーマンで!?!」

「それは……」

「ここまで来たら、もう誤魔化せない。

さつきから墓穴を掘つてばかりの原作主人公だった。

「くはあく! 入学して早速、青春してるわね〜! んじゃ、これからの事に関して何か抱負とかつてある?」

「抱負……」

抱負なんて言われても、すぐに思いつくようなもんじゃない。

しかし、一夏は少しだけ考えた後に口を開いた。

「やっぱ……弥生の隣に立つに相応しい男になる事……ですかね？」

「それ最高！ 捏造なんてしなくてもいい一言頂きました！」

興奮がMAXになる薫子に対し、周囲の女子達は少し残念そうになった。

「板垣さんが織斑君の彼女候補か……」

「確かに、あの子って美人でスタイルもいいけど……」

「私達にもワンチャンないのかな……」

知らぬが仏とはよく言ったもので、一夏は弥生が最も嫌う事の手伝いをしてしまっていた。

これを弥生が知った時、一体どんな反応をするのやら。

この場にどこぞの激辛マーボー神父がいれば、最高の笑顔を浮かべたに違いない。

「織斑君に勝ったセシリアちゃんにも色々聞きたいと思っただけど、ここにはいないんだね……。適当に捏造……をしたら、なんかヤバイような気がするから、止めておこうかな……」

好奇心の塊である彼女も、流石にイギリスの名家である『オルコツト家』を敵に回す勇氣は無かったようだ。

最後に集合写真を撮ったが、一夏の顔はずっと固いままだった。

・  
・  
・  
・  
・  
・

最後に、今までずっと出番が無かった弥生はと言うと……

「お腹が……空いた……よ……」

昼間にずっと寝ていた為に夜に全く寝付けず、おまけに昼食をしな

かった為、空腹に襲われていた。

体が万全ならば普通に料理をするのだが、今の体調で料理をするのは無謀すぎた。

結果、朝になるまで待つしかない弥生だった。

弥生の部屋には一晩中お腹の虫が鳴き続けて、先程までとは別の意味で苦しんでいた。

「ご飯……ぷり〜ず……」

## 中国から来た少女

弥生がまだ『あの日』の痛みから完全に解放されていない日の夜。楯無は一人、自分の部屋で思案に耽っていた。

「まさか、簪ちゃんがあんなにも弥生ちゃんの事を大事に思っていたなんてね……。羨ましいやら、妬ましいやら……」

なんて事を言いつつも、楯無の中に弥生に対する黒い感情は無い。それよりも、今は気になる事があるから。

「私が偶然にも見てしまった、あの弥生ちゃんの傷跡……。あれはどう考えても普通じゃない」

楯無は、さつきからずっと弥生の傷跡の事ばかりを考えていた。

暗部の人間としてもそうだが、それ以上に後輩の女の子があんなにも凄惨な傷を無数に負っているのを見て、言葉では言い表せないような気持ちになっている。

「簪ちゃんの様子から、他の子達はあの傷の事は知らないようだし……。普段から彼女が肌を露出しないような改造制服を着用しているのは、間違いなくあの体の傷を隠す為でしょうね。きっと、あの体の事で幼い頃に嫌な目に沢山あってきて、それで……」

人間とは、少しでも自分達と違う部分を見つけると、途端に排他的になる生き物だ。

中には違いを受け入れてくれるような殊勝な心を持つ者もいるが、世の中はそんな人間ばかりじゃない。

大半は、集団から排除しようとする動きをするだろう。

「……………決めた」

普段は滅多に見せない『暗部』としての顔を覗かせて、スツ…と目を細めた。

「私に出来る全力で、弥生ちゃんの『過去』に何があったのかを突き止めよう…。その上で、私もあの子の味方になってあげないと……」

生徒会長として、先輩として、何より、同じ女として、弥生の力になつてあげたい。

これは、楯無の純粋な思いだった。

しかし、弥生本人すらも知らない『空白の過去』を調べる事によって、彼女は知る事となる。

この世の中には、己の欲望を満たす為だけに他人の全てを踏みにする、最低最悪とも言える『吐き気を催すような邪悪』が確かに存在していると言う事実を。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

次の日の朝。

私の体調はすっかりとよくなって、いつものように、本音と一緒に教室へと足を踏み入れた。

すると、入った途端に私の方に駆け寄ってくる一団がいた。

「や…弥生っ!! 大丈夫なのか? もう苦しくないのか?」

「弥生…元気になってよかった…」

「ええ…本当に…本当に良かったですわ…」

ちよ…ちよっど? このお三方は何をそんなに声を荒げているんですか?

一夏は無駄に顔が近いし、箒とセシリアに至っては、何故に涙ぐむの?

「私達も女故に、あの時の弥生の苦しみは共感できるが、それでもベツドの上で顔を歪めていたお前を見た時は生きた心地がしなかったぞ…」

「そうですね。今回の事は流石に仕方が無かったですけど、今後はご自分の体調管理にもお気を付け下さいませね?」

「う…うん…分かった…よ…。心配かけ…て…ゴメン…ね



…?」

「もういいんだ……。弥生が元気になつてくれれば、それだけで……」  
「でも、無理は禁物ですわよ? 時期はまだ完全には過ぎ去った訳ではないですからね?」

「そう……。だね……」

心配してくれることは本当に有難いと思うけど、私の事を思うのなら、その過剰な反応はやめて欲しい。

罪悪感で逆にストレスになるわ。

「それだけ、皆がやよつちの事を心配してくれてたつて事だね」

「そう言う本音だつて、凄く心配していたじゃないか」

「あの後、とても狼狽えていて、今にも泣きそうにしていましたわよね?」

「うう……。それは言わないでよお……。」

恥ずかしそうに俯く本音の顔、頂きました!

朝からあざーす! これで今日も一日頑張れるぞ!

「なんか……。俺だけ女子の輪に入り損ねてるんだけど……」

それはしようがないんじゃない?

女子つて何気に閉鎖的な所があるからね。

それから、私は本音に手を引かれながら席へと向かった。

(そういや、教室の中が妙に浮かれているような気が……。この時期つて何かあったかな?)

うくん……。思い出せん。

女子達はしきりに『転校生』とか『中国』とか言っている。

ん? 『中国』の『転校生』? それつてまさか……。

「どうしましたの? 弥生さん」

「な……。んでもない……。よ。少しお腹……が減った……。だけ」

「やよつち、今朝は少ししか食べなかつたもんね」

「少しつてどれぐらいだ?」

「卵粥……。10人前……」

「確かに少ない」

「10人前?! しかも、それで少ないのかよ?!」

やっぱり、病み上がりにはお粥が一番いいよね。

でも、念の為に無理しないように食べる量を減らしたけど、あれだけじゃ物足りない……。

お昼まで持つかな……。

(ん？ なにか教室の入り口に見慣れない誰かが立ってこっちをを見るような気が……)

あんな奴、この学校にいたっけかな？

ここからじゃよく姿が見えないけど。

(あ。教室の喧騒でよく声は聞き取れないけど、なんか言ってるっぽい)

……別に気しなくてもいいか。

なんて思っていた私が馬鹿でした。

入口にいた少女は、なにやらこちらに向かって一直線にズンズンと大股開きで歩いてきた。

「ちよつとっ!! いい加減に気が付きなさいよ!!」

「なあっ!？」

「あら?」

「ん?」

「誰だ?」

「あ……」

「……このツイントールの少女は……まさか……!」

「お前って……鈴か?」

原作ヒロインの一人にして、中国の代表候補生でもある『凰鈴音』じゃないかっ!?

そうだった……! 確かこいつはこの時期に隣のクラスに編入してくるんだ……!

アレの痛みを乗り越える事に必死になって、すっかり忘れていた!

「そうよ。アンタのよく知っている凰鈴音よ。久し振りね、一夏」

「おう! 本当に久し振りだな! でも、なんでお前がIS学園にいるんだ?」

「今のアタシは中国の代表候補生……って言えば、大体は分かるん

「じゃない？」

「いや全く」

まさかの即答。

せめて考える姿勢ぐらいは見せて欲しかった。

「あ…あんだねえ…。一体ここで何を学んでるのよ…。」

「そりゃ、ISに関する事全般？」

「それなのに即答って…。呆れを通り越して感心するわ…。」

あゝあ。登場早々に頭を抱えちゃったよ。

気持ちは分かるが、まあ…ご愁傷様。

(な…なんだ？ 彼女の視線がこつちを向いている？)

凰鈴音…もう普通に鈴って心の中では呼ばせて貰おう。

その鈴が私達全員を舐め回すように見渡していた。

「ふうくん…。」

「お前はどこを見ている？」

心なしか、少し視線が下を向いているような…。

(揃いも揃って、一夏が侍らせている女の子全員が巨乳ですって？)

ふぎけんじゃないわよ！ なにか？ これは私に対するあてつけか

!？ それとも、一夏もやっぱり胸が大きい子の方が…)

急にこつちを睨み付けてきたと思ったら、今度は溜息交じりに落ち

込みましたし。

睨まれた時はかなり怖かったけど、この哀愁溢れる姿を見せられた

ら、何も言えなくなる…。

「」「あ」「」

「え？ なによ？」

志村！ 後ろ！ 後ろ！

早く気が付いて！ 貴女の後ろに出席簿を手にした最強の刺客

がいますよ！

「おい貴様…。」

「あ？ アタシの邪魔をしないでくれ…。」

彼女が振り向いた途端、教室の中の時が凍りついた。比喻でなく。

「他の教室に入って何をしている」

「ち……千冬さん……？」

あつ！ それは……

「織斑先生だ。ちゃんとけじめをつけろ、馬鹿者が。とつと自分のクラスに戻れ」

「す……すみませんでした……」

恐怖に屈した鈴は、あつという間に教室から出て行った。

気持ちは分かるけど、廊下は走るなよ……

にしても……しゅ……しゅごいプレッシャー……！

こ……怖い……本気で怖いよ！！

泣いていい？ 私ってばすつごく頑張ったから、もう泣いていいよね？

「つたく……。織斑と言い、アイツと言い、公私のけじめぐらいちゃん  
とつけられないのか……」

「え？ なんで俺が引き合いに出されてるの？」

完全なとぼっちりですな。ざまあww。

「板垣」

「ひゃ……ひゃいつ!!」

な……なんだっ!! やるのかこのヤロウ!

今なら速攻で五歳児のように泣き喚く事が出来る自信があるぞ!

「昨日のお前の事は聞いている。幸い、今日は外での実習は無いが、それでもあまり無理をせずに大人しくしておけ。いいな？」

「は……い……」

ま……また頭を撫でられた……？

なんだ……この人は……。

あれか？ 所謂『飴と鞭』ってやつか？

いや違うな。この人の場合は寧ろ『砂糖一粒と核弾頭』だろう。

箒とセシリアに関しては少しだけ見直したけど、この女教師はまだまだ油断は禁物だ。

次の瞬間に何をしてくるか、全く予想が出来ないからな……。

「なんか……千冬姉って弥生には甘いよな……」

「何か言ったか？」

「ナンデモナイデス……」

またプレッシャーが……。

全然甘くななんて無いよ！ 激辛だよ！ 超激辛だよ！

辛いのは食べ物だけで沢山だよ！

「二度目は無いからな」

「りよ……了解……」

こうして、私の爽やかな朝は一瞬にして恐怖に染まってしまい、また一日が始まる。

これ……本気で胃薬を買う事を考えないとな……。

・  
・  
・  
・  
・  
・

お昼休み。

私は本音と一緒に簪と合流して、一緒に食堂に向かう事にしたが、そこに箒とセシリアが乱入、更には一夏が後ろから勝手について来た。

因みに、授業中に余計な事を考えて出席簿の餌食に……なんて事は無かった。

てつきり一夏と鈴との関係を考えて集中出来ないと思ったんだけど、どうやら私の思い違いだつたみたいだ。

そうだよな。あの人の授業で馬鹿な真似をするような勇者はいないよな。

「それにしても、朝に来た彼女はなんだったんでしょうか？」

「一夏の知り合いのように見えたが？」

「知り合いつて言うよりは、鈴は……待ってたわよ！ 一夏！……噂をすればなんとやら……」

「だね〜」

「この子が……」

野生の凰鈴音が現れた！

どうしますか？

逃げる

土下座

泣く

↓ 一夏に丸投げ

「私達は先に行ってるぞ」

「どうぞごゆつくり」

「んじゃね〜」

「……………」

「え？ ちよつとつ?!? みなさ〜んっ?!?」

鈴は一夏にべったりだったので、ここは彼に全てを任せてから、私達はお昼ご飯としゃれ込む事に。

「あ…あれ？ なんで?」

何がだよ。それじゃ、お幸せにく。

販売機の前行って、何を食べようか考える……けど、実は最初から今日の昼食のメニューは決まっていたので、それを迷わず選択。ポチつとな。

「弥生は決まったの?」

「う……………」

「それじゃ、早く並ぼ〜」

カウンターの列に並びながら、置いてきた二人を見る。

「あんたってばまた背が伸びた? もう頭に手が届かないんですけど」

「成長期だしな。お前も本当に久し振りだよな」

仲良さそうで、なによりなにより。

今度こそ、私から離れてくれると助かるよ。

「弥生さんは何を頼んだんですの?」

「ちよつと……………ね……………。後で行く……………から……………先に行つて……………」

「？ 分かった……」

皆を先に行かせてから、私はカウンターの向こうにいるおばちゃんに食券を手渡す。

「お？ お嬢ちゃんかい？ 今回は何を食べるんだい？」

「こ……れ……」

「ほうく？ これはまた……よし！ 少しだけ待つてな。すぐに用意してあげるよ」

「お願い……しま……す……」

ちよつとだけ列から離れて、おばちゃんを待つことに。

「あれ？ アンタなんでまだ……」

「注文待ちか？ 弥生」

「そんな……と……こ……」

「何を頼んだの？」

「すぐに……わかる……よ……」

待つている間に一夏と鈴がやって来て、同じように食券をカウンターに置いていった。

二人が注文している間におばちゃんがやって来て、大きな台車に私の注文した物を乗せてきてくれた。

「はいよ、お待ちどうさま」

「ありがと……う……ご……ご……ます……」

「これぐらい別に構いやしないよ。アンタの食いつぷりは見ているこつちも気持ちがいいからね。いくら量が多くても、作り甲斐があるつてもんさ」

おおく……なんて良いおばちゃんなんだ……。

食堂なんて昼食以外に使わない！ って思ってたけど、今後も積極的に利用させて貰おうかな……。

「や……弥生……それ……」

「私……のお昼……ご飯……」

おばちゃんから台座を引き継いで、簪達の待つている席に行くことに。

鈴は向こうを向いていたから、私の昼食を見ていない。

早く席に行って食べたいな〜♡

・  
・  
・  
・  
・  
・

席まで行くと、皆が私の持って来た食事を見て呆気にとられていた。

う〜ん……今回は少し多かったかな？

でも、今の私はこれぐらい食べたんだよね〜。

「や…弥生……？ その灰色の山は一体……」

「うわあ〜……」

台座に置かれた巨大なざるを体全体で持ち上げて、テーブルの上に置いた。

「よっ……こいしよ……つと……」

「い……意外と力もあるんだな……弥生は……」

そう？ 至って普通だと思っけど？

「こ……これはなんですか……？」

「ざる蕎麦……」

「一応聞けど……何人前？」

「20人前……」

「「20人前っ!」」

テーブルの中央を完全にざる蕎麦が陣取って、圧倒的な存在感を示していた。

そばつゆは5つくらい用意してあって、その全部にたっぷり注がれてあった。

「……この山を見て、弥生がここにいるってすぐに分かったぜ……」

「ちよっ……! なんなのこれっ!？」



あ、私のざる蕎麦がデコイになって一夏と鈴を呼び寄せてしまった。

態々ここに来なくてもいいのに。

二人で向こうにでも行つて、ゆっくりしていつてね。

そんなでもつて、ゆっくりりボイスで実況でもしてもらえ。

「なんでここに来るんだ？」

「何よ？ あたしたちがどこで食べようと、アタシ達の勝手でしょ？」

「少しは空気を読んで欲しいものですわ……」

「大方、その男にほだされたんでしょ？」

「なんで俺が悪者になつてるんだよ……」

こつちの了承を得ないまま、鈴は勝手に席に座つて、一夏もそれに続くように席に座つた。つて……なんで一夏は私の隣に座るんだよ。他にも席は空いてるだろうが。

「んな訳で、失礼するわよ」

「強引に割り込んでこないでくださいな……」

「礼儀がなつてないぞ」

「うっさいわね……つて、一夏！ どうしてその子の隣に座るのよ！

座るならアタシの隣に座ればいいじゃない！」

「いや……それこそ俺の勝手だろ……」

なんか場の空気が険悪になつてきたんですけど……。

こんな時は食事だけに集中して、食べている間だけでも現実逃避をしよう！

頼むから、暴力沙汰だけは勘弁してくれよ……？

「ご飯ぐらい静かに食べられないの？」

ある程度は予測していた、凰鈴音の昼食時の乱入。

頼むから、騒ぎだけは起こさないでくれよ？

食堂を出禁になるとか、割とマジで洒落になってないからな？

「そういや、鈴はいつ頃こっちに戻ってきたんだよ？一言でも連絡くれれば、出迎えぐらいはしてやったのに」

「しょ…しょうがないでしょ。こっちだって色々急だったんだから……」

「ふう〜ん」

「そ…それよりも！ そっちこそ、なにISを動かしちゃってるわけ？ テレビの緊急速報を見た時、本気で驚いたわよ？」

「俺に言われても困るっつーか……」

このざる蕎麦……美味しい！

つるつるで喉越し爽やか！ 味も申し分ないし、これなら20人前と言わず、この倍は軽く食べられる気がするぞ！

このつゆもコクが合っているし、ネギや山葵との相性も抜群！

口に入れた時の鼻にツーンってくるのが最高なんだよね〜♡

「ここでイチヤつくのは構わないが、もうそろそろ彼女の事を教えてくれないか？」

「そうですね。別に彼女の事はどうでもいいですけど、朝からあんな風に登場されては、名前ぐらいは知りたくなりますもの」

「私も別にどうでもいいかな」

「おいしくね〜♡ ん？ 何を話してるの？」

あ〜……もう4分の1も減ってしまった。

やっぱり、昨日何も食べてないのが今日に響いてるな。

「べ…別にイチヤついてなんか……。って言うか、サラツと傷つくような事を言わなかった？」

「別に？」

「??？」

つゆが薄くなってきた……。

ちゃんとおばちゃんから替えのつゆを貰ってきて正解だったな。

「まあ、簡単に言えば、鈴は俺の幼馴染だよ」

「幼馴染……？」

「おや？ 少し視線を向けてみれば、なにやら険悪なムードになってませんか？」

箒は普通にハテナマークを浮かべているだけだけど、鈴の方は凄い形相で一夏の事を睨んでいる。

「いつもの私ならば、ここでガクブルしていただろうが、今日は違う！」

私の目の前には絶品のざる蕎麦があるのだからな！

これを食べていれば、嫌な現実とは少しの間だけおさらばよ！

「ん？ なんでこつちを睨む？」

「別に！」

「さてさて。こちらに飛び火しない間に、私も食事タイムに戻りましょうかね。」

あ、山葵が薄くなってネギも少なくなってきた。

予備のヤツから追加しないと。

「もしや、小学生の時に私が転校した直後に小学校にやって来たのか？」

「お！ よく分かったな！ そうなんだよ。鈴は丁度、箒と入れ替わるようにして中国から転校してきたんだ」

「そうだったのか。成る程な」

「そうよ！ って……なんかリアクション薄くない？」

「そうか？ 別に普通だと思うが？」

「ええ……？」

なんか盛り上がってますなあ。

まだまだ余裕だな。

「そーいや、ここってわんこ蕎麦とか出来ないのかな？」

「前から一度やってみたかったんだよ。」

一杯の量が非常に少ないから、軽く1000杯はいける自信あるけど。

「こいつが篠ノ之箒。前に話した事があっただろ？ 小学校からの幼馴染で、俺や千冬姉の通っていた剣道場の娘」

「あ〜……アンタが」

やば。無呼吸で蕎麦を食っていたから、軽い呼吸困難に陥りかけた。

いくら美味しいからって、息ぐらいはしないとな。

「初めまして、凰鈴音よ。今後ともよろしく」

「そうか。まあ、適当に頼む」

「……あれ？ それだけ？」

「それ以外に何か？」

「えつと〜……」

(ちよ…ちよつと？ これってどういう事？ てつきり火花を散らした睨みあい発展すると思ってたのに、なんかかなりフラットなんですけど？ どうして?)

ん？ なんか鈴が困惑してないか？

つーか、早く食べないとラーメン伸びちゃうぞ〜。

「それで、そっちのアンタは……」

「イギリス代表候補生のセシリア・オルコット。別に覚えなくてもよろしくてよ？ 私も貴女には大して興味はありませんので」

「それってどういう事かしら？」

「そのままの意味ですわよ？」

「アンタ……アタシに喧嘩売ってんの？ それとも、同じ代表候補生として、アタシに負けるのが怖いとか？」

「強いとか弱いとか、勝つとか負けるとか、そんな目先の小さな事柄に對してのみ興味を示せない時点で、貴女と私は相容れませんわね」

「……なんですって？」

「確かに、ISの操縦技術を向上させて自分の故国に貢献するのは大事な事ですが、今の私にはそれよりもっと重要な事がありますの。私にとってある意味で人生すらも賭けた大勝負が……」

「そ…そう……」

(あ…あれ〜？ なんかこの金髪もアタシが予想してたようなりアク

シヨンじゃないんですけど〜？ 私的に思いつきり正面から喧嘩売られると覚悟してたんだけど……）

うあ〜……もうかなり無くなってきちやったよ〜。

これはもう、夕食もタップリと食べる事確定ですな。

「えつと〜……眼鏡を掛けたアンタは……」

「四組の更識簪。以上」

「終わりっ!?! 他には!?!」

「趣味は読書と音楽鑑賞。これでいい?」

「適当過ぎる!」

（この子は……別のクラスだから警戒しなくてもよさそうね……）

またつゆが薄くなってきた。

こりや、食べ終わるまでに後数回は継ぎ足さなくちゃ駄目だな。

「布仏本音だよ〜。よろしくね〜リンリン〜」

「リンリン言うな! あたしやパンダか!」

「おお〜…ナイスツツコみ」

一時の清涼剤として、我が嫁である簪と本音の顔を見よう。

ああ……本当に癒されるな〜……。

鋼鉄の拳がいつ飛んでくると知れない環境において、二人の存在は私の宝だよ〜。

「ねえ……このさつきからずっと山盛りのざる蕎麦を食べまくっている子は……」

「この子は板垣弥生。俺と同じ一組で、ある意味で俺の恩人なんだ」

「お……恩人?」

「おう。前に色々勉強を教わって、勉強以外にも沢山のアドバイスを貰ったよ。弥生がいなかったら、俺は今も授業についてこれなかっただろうな……」

「へ……へえ〜……そう〜なんだ〜……」

（この子が昨夜、一夏が話していた『弥生』ね。この細身で大飯食らいなのは本気で驚いたけど、見た限りは大人しそうな子よね。でも、一夏と凄く仲がよさそうだし、勉強も教わったって……。まさか!? この子の部屋で二人つきり!? それってモロに部屋デートじゃないの

!?)

な…なんだ？ 背中に未だ嘗て体験した事が無いような悪寒が走ったような気が……。

(間違いない！ この弥生って子こそが最大のライバル！ アタシから見ても相当な美少女だし、スタイルだつて凄くいい……。くつ……！ なんか自分で言つてて惨めになってきた……)

なんか……鈴がこつちをジツと見てるんですけど……。

え？ 何？ 私つてば何もしてないよね？ 普通に食事をしてただけだよな？

「よろしく、板垣弥生さん。アタシは凰鈴音。鈴つて呼んでくれていいわ。私もそつちの事は弥生つて呼ばせて貰うから」

「よ……よろ……し……く……」

なんか握手を求めてきたんだけど、ここで断れば絶対に報復が待つてるよな……。

かと言つて、素直に握手に応じれば、その瞬間に手を握りつぶさそうだし……。

少しだけ悩んだ結果、私は意を決して握手に応じた。

握力は普通だったけど、彼女の目は全くもって笑つていなかった。

(これから長い付き合いになりそうね……この子とは)

！) ……なんだ……!?! この脊髄に氷柱を入れられたような感覚は……

言葉に出来ないプレッシャーを感じ、即座に手を離して食事を再開。

怖い事はお蕎麦を食べて早く忘れよう……。

(初対面で早くも弥生の事を呼び捨てだど!?)

(なんて暴挙を……！ 許せませんわ……！)

(私の嫁である弥生を本人の許可なく呼び捨てするなんて……！ 排除すべきか?)

(むく……。やよつちと握手するなんて……リンリンズルいなく……)

気のせいかな？ 私の目の前にいる四人から殺意の波動が垣間見え

たような気がしたんだけど……。

んな訳ないよな？ 箒やセシリアならともかく、私の嫁達がそんな物騒な事を考える筈ないもんね。

うん、気のせい気のせい。

「しっかし、弥生の食事風景を始めて見たけど……本当によく食べるんだな……。これだけ食べて、このスタイルだろ？ 一体どうなってるんだ？」

「ずるるる……。ぐくん。お……お蕎麦……は消化にいい……から……」

「いやいや。これだけ食べれば消化がどうか関係無いからね？」

私の事はどうでもいいから、お前は自分の食事をしろっつーの。

お昼時間だつて無限じゃないんだぞ？

「もう4分の1ぐらいになってるわよ……。これだけの量をお腹に入れて、尚且つこのスタイル……」

なんでまたこっちを見る？

（絶対に全ての栄養がああ胸に行ってるわね。じゃないと説明がつかないわ）

またスゲー目で睨み付けてくるし……。

怖いから、私の事は放置して、好きなだけ隣のキングオブ鈍感とチヨメチヨメしてろよ。

それが私の望みでもあるんだからさ。

「ねえ一夏。ちよつと小耳に挟んだけど、アンタってクラス代表をしてるんですって？」

「そうなんだよ……。なんか、気が付いたらなつてた……」

「へえ……」

あと少し……。あと少しで本当に終わってしまう……！

こんな事なら、天ぷら（20人前）も一緒に注文しておけばよかった。

天ぷら蕎麦、最高だよね？ 私大好き♡

「じゃあさ、アタシがISの操縦の訓練とか見てあげよつか？」

「うーん……。俺としては助かるんだけど、それっていいのかな？」

「ど……どういう事？」

「いやさ。鈴は二組で、俺は一組のクラス代表な訳だろ。それってつまり、今度あるクラス対抗戦ってやつで試合相手になるわけじゃないか。対抗戦が終わった後ならともかく、この時期に他のクラス代表から教わるのはいかなるものかと……」

「い……一夏の癖に妙に頭が回るじゃない……」

（まさか……これも弥生の入れ知恵？ くそ……！ まさか、こんな形で先手を取られるなんて！ 可愛い顔して侮れないわね……）

ああ……あと数口で終了してしまう……。

すつごく美味しかったよ……お蕎麦さん。

絶対にまた食べるからね……。

（チツ！ 一夏め……余計な知恵を身に付けおつて！ これでこの中国女とくつつけば、晴れて弥生に付き纏う余計な存在が合法的に排除出来たものを！）

（ですが、これはチャンスでもありますわね……。織斑一夏が彼女に気を取られている隙に私が弥生さんと……エへへへ……）

（弥生の名残惜しそうにしている顔も、また可愛い……。♡ そうだ、携帯で撮ってちゃんと保存しておかないと……）

（なんだろう……あの顔を見ていたら、むしよくにやよつちにご飯をあげたくなっちゃうね）

終わってしまった……私の至福の時間が……。

麺一本残さずに胃の中へと流し込んで、ついでに薄くなったつゆもゴクゴクと全部飲み干す。

それでもつて、手と手をちゃんと合わせて御挨拶。

「ごちそうさま……でした……」

満腹満腹……♡

でも、これも数時間後には無くなるんだよね……。

「本当に全部食べちゃった……」

「しかも、この短時間に……」

少しお腹が物理的に膨れてしまった。

妊娠しちゃった♡ テヘペロ♡

……誰かツツコめよ。ここは笑う所だぞ。



「これぐらい、弥生さんならば普通ですわ」

「そうだな。私達はもう、この光景は見慣れてしまった」

「弥生の胃袋はブラックホール」

「世界の舞台に立ってるフードファイターだよね」

慣れって怖いもんですね。

でも、下手に何か言われるよりは、慣れて貰った方がずっと楽ちん。

こっちも気軽に食事を楽しめるからね。

「一……夏……」

「ん？ どうした？」

「食べない……の……？」

「え？」

おいおい……話すのに夢中になってご飯を食べてないとか、小学生じゃないんだから……。

すっかりしようよ。お前はもう高校生なんだぞ？

「お……俺だけ？ 皆は……」

「私ならもう食べ終わったぞ」

「私もですわ」

「右に同じ」

「お腹いっぱい♡」

「言つとくけど、アタシも終わってるわよ」

「マジで俺だけかよ……」

一人だけ取り残されての食事とか、普通に悲しすぎだろ。

って言うか、虚しい。

「早……く食べない……と……お昼……の授業……に……間に合わ……ない……よ……」

「弥生の言う通りだ。もしも食事が遅くて遅刻しました……なんて事が織斑先生に知られでもしたら……」

「間違いなく、あの出席簿が光って唸り、輝き叫びますわね」

「シャイニング出席簿」

「IS学園校則第一条。頭部を破壊された者は退学となる？」

「退学以前に普通に死ぬわ!!」

流石にこのまま放置するのは可哀想と言う事になったので、一夏が食べ終えるまで待つことに。

こいつが一人で食べている間、私達は女同士の会話に花を咲かせていた。

と言つても、私が喋っていたのは主に簪と本音だけだけど。

他のメンバーからは話を振られた時に返事をする程度。

その後、一夏はなんとか食べ終わって、急いで教室に戻ったお蔭で遅刻はせずにすんで、彼はシャイニング出席簿からは逃れられた。

けど、今度もし遅刻でもしたら、その時は真っ赤に燃えるゴツド出席簿か、東西南北中央不敗なダークネス出席簿が炸裂するに違いない。

それを避けるためにも、今後は私も遅刻しないように気を付けないとな。

私にどうしろと？

放課後になり、私は一夏達が向かった第3アリーナではなくて、それとは真逆の場所にある第2格納庫へと足を向けていた。

と言うもの、実は私：既に簪から専用機の事を色々と聞いていたりします。

話を聞く限りは、原作と全く同じようになっていて、一夏がISを動かしたせいで彼女の専用機の開発が凍結、未完成だけど機体はあげるから、欲しけりや自分で勝手に作ってちよ！ ってな感じに半ば放置に近い形で機体を受領したらしい。

原作知識で最初から分かっていたとしても、当事者から直に話されると、なんとも言えないもどかしさを感じた。

確かに一夏がISを起動させてしまった事が原因かもしれないが、彼とて意図して動かしたわけじゃない。

一応は『偶然』的な感じに言われてはいるが、偶然で本来動かない機械が動けば苦労は無い。

ISは精密機器の塊、技術の結晶とも言うべき存在だ。

故に、そこには必ず何かしらの『原因』が存在し、その『原因』にこそ誰かの『意思』が介入している……と考えるのが普通だ。

ま、その『誰か』についてはおおよその見当がついてるんだけどね。敢えて誰とは明言しないけど。

仮に分かった所で、私に出来る事なんて何も無いんだし。

この事の一歩の問題は、これには明確な加害者が存在しない事なんだよなあ……。

ある意味では、一夏だって巻き込まれた側になるんだし。

そして、簪は完全にそのとぼちちりを受けた事になる。

(こればっかりは……時間が解決するのを待った方がいいの……かな  
……)

簪の為ならなんだってする覚悟は出来ているけど、ならば何をすればいいんだと言われれば、言葉に詰まってしまふ。

(……馬鹿の考え休むに似たり。今はこの手にある『差し入れ』を一刻

も早く持って行ってあげよう)

少しだけ歩くスピードを速めて、簪達がいる格納庫へと急ぐことに。

暫くして、目的の格納庫前まで辿り着き、全自動式の扉がプシュッと言いながら空くのを待って、恐る恐る中へと入る。

「し…失礼…しま…す…す…」

一応、挨拶はしておく。

他にも誰かいるかもしれないしね。

「あ！ やよつち♡」

「弥生…今日も来てくれたんだ…」

「う…ん…」

少し離れた場所に陣取っているのに、私の事を見つけるや否や、即座にこつちを振り向いた二人。

あれですか？ 二人は『気』とか『小宇宙』とか感じちやう人ですか？

どこぞの次回予告みたいに、小宇宙を感じた事があるのか？

「これ…持って…きた…よ…」

「やよつちい♡」

「ありがとう…♡」

二人の傍まで歩いて行って、この手に持っているバスケットに入れたきた、二人分のスポーツドリンクとおしぼりを手渡す。

勿論、スポドリは人肌の温度にしてある。

簪達がスポドリを飲んでる間に、私は目の前にあるハンガーに固定された簪の専用機『打鉄式』を見上げる。

所々にまだむき出しの内部が見え隠れしていて、素人の私にも分かるぐらいに、完成には程遠いと感じた。

(でも、これがちゃんと出来上がれば、きつとカッコいいんだろうなあ…)

自己満足かもしれないが、私も早くコレが大空を翔る姿を見てみたいもんだ。

「スッキリした…」

「やよつちがいてくれて、本当に助かるよ〜」

「わ…たしには…これぐらい…しか手伝え…ないから…」

「そんな事無いよ〜!」

うおいつ!? びつくりした〜……。

「やよつちが一緒にいるだけで、私達はとつても嬉しいんだよ!」

「うん。こうして弥生がドリンクとか持ってきてくれるから、本当に助かってる」

「だから、そんなに自分を卑下しないで……」

本音……簪……。

「そ…そう言って…貰える…と…私…も…嬉しい…♡」

これは、偽りなき私の心からの言葉だ。

こんな私でも何かの役に立てるのなら、こんなに嬉しい事は無い。

「私も…二人…の作業…が終わるまで…一緒にいる…ね…?」

「うん!」

と言っても、流石にこのまま棒立ちでいるのは嫌だから、少しでも手伝う為に、必要な道具を持ってきたりとか、休憩時に肩を揉んであげたりとかしてあげた。

なんでか肩を揉むと、二人とも顔を真っ赤にするんだよな……。

そんなにすぐつたかったのかな?

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

結局、あれから外が暗くなるまで作業は続いた。

格納庫の使用時間が来たため、続きは次に回す事に。



聞こえた気がしたもん。

「……………大丈夫……………夫……………?」

「……………(コクン)」

最終的に私は自分の安全と、これを無視した時に起きるであろう悲劇を天秤に掛けて、自分の安全を取ってしまった。

いや……………こうでもしないと、本気でどうなるか分からないからね?

「……………部屋……………来る……………?」

「行く……………」

あゝあ……………やっぱりこうなるのかあ……………。

部屋まで行く途中、なんでか鈴は私の制服の袖を抓んで離そうとしなかった。

服が伸びるから、純粹に止めてほしいんだけどな。

……………

……………

……………

……………

……………

自分の部屋まで鈴を案内してから、彼女を椅子に座らせる。

はあ……………これから何をやらされるのやら……………。

「へえ……………これが弥生の部屋なのね。まさか、アイツの隣だったとは思わなかったけど」

アイツとは……………聞くまでも無いよな。

一応、彼女は客人ではあるので、もてなしとしてコーヒーでも出す事に。

私は砂糖とミルクを適量入れて、鈴のはまだブラックのまま。

どれぐらい入れれば分からないから、砂糖の入った瓶とミルクの入った小ぶりの容器を持っていった。

「コーヒー……砂糖……とミルク……は自分……で好きなだけ……入れて……」

「あ、ありがとね。弥生は気が利くわね。あのバカとは大違いだね」  
早速、始まりましたよ。

きつと、この愚痴を延々と聞かされるに違いない。

「できー！ 聞いてよー！ 一夏ったらマジでムカつくのよー！」

「どう……した……の……？」

「……実はね……アタシさ、小学生の時に一夏とある約束をしていたのよ」

「約……束……」

それって……

『アタシの料理の腕が上がったら、毎日酢豚を食べてくれる？』……  
そう言ったの」

やっぱりいー！

で、それをあのバカが間違えて記憶していて、それに激怒した鈴が部屋から出て行った……だろ？

言わなくても分かるっつーの。

でもさ、昔の約束なんて、正確に覚えているのは難しいと思うんだけどな。

小学生の時の約束なら猶更でしょ。

それに、鈴の言い方も悪いと思うんだよね。

あの鈍感男に、そんな遠回しな言い方じゃ通用しないでしょ。

言うなら、もっとストレートに言わないと。

つまり、今回は一夏にも少しは情状酌量の余地があるって事だ。

「んで、そしたらアイツ……なんて言ったと思う？」

はいはい。ちゃんと聞いてあげますよ。

なんて言っただんですか？

『そんな約束なんてしたっけ？』って言ったのよ!! 信じられるっ  
!？」

……ゴメン。流石にこれは弁護できないわ。

「忘れ……た……？」



「そうなのよ！ あのバカ一夏だったら、アタシとの約束を完全に忘れてたのよ！ 覚え間違いくらいなら、まだなんとか許せるけど、記憶に無いってどういう事よ!?」

私に言われても。

それにしても……まさかの忘却とは予想が出来ませんでしたな。

流星は一夏。私の予想を遥かに上回る事をしてくれる。

勿論、悪い意味でな。

「全く……そもそも、アイツは昔っから……」

そこから先は、まあ出るわ出るわ、鈴の口から一夏に対する愚痴が壊れた蛇口のように吐き出された。

コーヒを飲みながら、まるで酒に酔ったOLのように私に絡んでくる。

……マジでコーヒで酔ったりはしてないよね？

でも、これも時間の経過と共に次第に惚気話へと変化していくんですよ？

はつきりわかんだね。

「それで、女の子に告白された後、あのバカってばなんて答えたと思う？」

「さ……さあ……う？」

『どこに付き合うんだ？ 荷物持ちなら幾らでも付き合うぞ！』ですって！ ふざけてんじゃないわよ！ どこをどう解釈したら、そんな言葉が飛び出すのよ!!」

あれえ〜？ いつまで経っても惚気話へと移行しませんよ〜？

どこまで行っても愚痴しか出てこないんですけど〜？

「はあ〜……折角、一夏に会いに態々ここまでやって来たのに……。なんでこうなっちゃうんだろ……」

今度は落ち込んだりじゃった。

別に落ち込むのは勝手だけど、出来れば自分の部屋で落ち込んで、自分のルームメイト相手に愚痴を零してほしかった。

「……なんかゴメンね。聞きたくもない愚痴なんか聞かせちゃって」

「気にし……ない……で……」

「弥生って本当に優しいわよね……。そんな所にアイツも惚れたのかも……」

「ん……？」

最後の方、なんて言った？ よく聞き取れなかった。

「ねえ……なんで弥生はアタシに優しくしてくれるの？ アタシ達って今日初めて会ったばかりなのよ？」

お前があからさまに私を呼んだからだろうか！

なんて言えば、次の瞬間には鋼鉄の拳によって赤い血と共に壁に埋まって愉快なオブジェクトになるんだらうな……。

ここはどんな風に応えるのがベストだ？ うーん……。

そうだ！ こんな時こそ、困った時の『アニメ・漫画・ゲームの名言集』の出番じゃないか！

「泣いて……いる……誰か……を助ける……のに……理由……が……いる……の……？」

「弥生……アンタって子は……なんで……」

『ファイナルファンタジー9』の主人公、ジタン・トライバルの名言を私風にアレンジしてみました。

って……どうした!? 急に立ち上がって私の方に来たぞ!?

「幾らなんでも……優しすぎよ……」

「鈴……!?!」

だ……抱き着かれたっ!? なんでもどうしてっ!?

「弥生は……暖かいわね……」

「そ……う……」

腕を思いつきり体に回されてるから、動きたくても動けないんですけど……。

と言うかですね、私の胸に顔を埋めるのは止めてもらえませんか？

「あの……鈴……？」

「なに……？」

「一夏……もね……IS……を動かして……から……本当……に色々あった……みたいで……覚える事……も一杯あった……から……きつと……一時的……にど忘れ……してるだけ……だと思っ……よ……っ……」

「ど忘れ？」

「う……ん……。少し……だけ……。時間……を置いて……。冷静……になれば……思い出す……。かも……。しれない……。」

「本当に弥生は……」

ここで険悪になり過ぎて、関係が修復不可能になられたら、こつちが困るからな。

なんせ、鈴は一夏とくつつく可能性がある女の子の一人だから。

主に私の平穩の為にも、ここは一夏をなんとかしてフォローしておかねば。

(あそこまで一夏に関する愚痴を聞かされたのに、こんな言葉がすぐに出せるなんて……。やつぱり、一夏と弥生は両想いなんだ……。じやなきや、あんなセリフなんて到底言えないわよ……。最初からアタシの介入する余地なんて無かった……。アタシは……。遅すぎたんだ……)

ひいつ!? またもや背中がゾクってした!?

うう……。気持ち悪いなあ……。。

(なんでかな……。こうして弥生に抱き着いていると不思議と落ち着くよね……。優しく、気が利いて、可愛くて、おまけに包容力もあるなんて……。もしもアタシが男だったら絶対に惚れてたな……。いや……。別に同性でも……。好きに……。なって……。も……)

おっと。鈴の頭が丁度いい位置にあるから、つい自然と頭を撫でてしまっていた。

私ってこんなキャラだったかな？

……。あれ？ 鈴さくん？ おくい？ もしもくし？

「すう……。すう……。」

「寝てる……。の……。?」

おいおいおいっ！ 冗談でしょ!?

なんでここで寝ちやうかな!?

「泣き……。疲れた……。の……。かな……。?」

このままには……。しておけないよねえ……。。

私も寝ることが出来ないし。

(しゃーない……)

起こさないようにしながら鈴をお姫様抱っこして、ベッドにそつと降ろして布団をかけてあげる。

鈴……ちよつと軽すぎじゃない？

(今度こそシャワーを浴びてスツキリしよう……)

彼女をベッドに残したまま、私はシャワーを浴びて一日の疲れを取る事に。

私……今夜はどこで寝ればいいのかな？

床で寝たら痛そうだし……かと言って一緒に寝るのは……大きさ的には可能んだけど、向こうが嫌がるだろうしなあ……。

後で土下座でもすれば、許してくれるかな……？

・  
・  
・  
・  
・

次の日の朝。

アタシは瞼越しに網膜を刺激する光を感じて目を覚ました。

「ん……？」

そつと瞼を開けると、目の前には弥生の寝顔があった。

「……………!？」

思わず声が出そうになったけど、ギリギリの所で踏み止まった。

(危なく……。弥生の事を起こしちゃうところだった……)

自分の体に布団がかけられているのを見て、自分の最後の記憶を探る。

(昨夜は……弥生の部屋に誘われて、そこで一夏の愚痴を聞いて貰って、それで……)

あ。あれからアタシは弥生に抱き着いて、そのまま寝ちゃったんだ。

って事は、あれから弥生がベッドまで運んでくれたって事？

(食堂の時も思ったけど、弥生って見た目に反して力があるわよね……)

この細い腕の何処に、あれだけの筋力があるのかしら？

「んん……」

こうして近くで見ると、弥生って本当に美人よね……。

顔が整っているのは当然だけど、髪もサラサラしてるし、肌もスベスベ、おまけに睫毛も長くて唇もプニプニ……。

「はっ!? アタシは何をして……」

目の前で寝ている女の子の顔を触るなんて、普通に変態じゃない! どうしちやったのかしら……? アタシってこんな事するような人間だったっけ?

「腕……」

ふふ……寝ている時も腕に付けている袋を外さないのね。

理由は敢えて聞かないけど、いつか弥生から話してくれるのを待ちましようか。

(そう言えば、昨夜からずっとアタシって弥生と二人きり……なのよね……)

この部屋にはアタシ達以外には誰もいない。

しかも、もう一人の住人である弥生は目の前で夢の中だ。

つまり……

「弥生……」

弥生の寝顔に吸い込まれるように、アタシは自分の顔を近づけていく。

アタシの視線は弥生の唇に釘付けになって、それが自分の唇と重なって……

「や・よ・い・さあ〜ん♡ (´▽`)一緒に朝食でも……」

「お……おい……奥を見ろ……」

「あ……あれは……」

「嘘……」

……………終わった。

そして、今ハッキリと分かった。

この四人も弥生の事が好きなんだ。

……四人”も”？

「アタシ……も……？」

いやいやいや……いくら優しくされたからって、アタシってそんなに惚れっぽいわけ……。

(一夏の時は虐められている所を助けられて、それで……)

あ。アタシ、かなりチョロいわ。

「りくんくさくん？」

「弥生と一緒にベッドで寝て……何をしようとしていた……？」

「って言うか、そもそもなんで弥生の部屋にいるの……？」

「やよつちの唇……やよつちの寝顔……」

完全に四人の目が逝ってる……！

このまま、ここにいたらアタシの命が危ない!!

こうなったら、ジョースター家に伝わる伝家の宝刀を使うしかない

！

「逃げるのよ〜！」

「「「待てええええ〜っ!!!」」」

待つわけないでしょ〜が!

ったく! 折角、弥生の寝顔を堪能してたのに〜!

「お代わりぷり〜ず……むにやむにや……」

こんだけ騒いでるのに起きないの!?

なんか可愛い寝言も言ってるし!

ま、弥生と話したお蔭で、今のアタシがしたい事がハッキリと決

まったんだけどね!

まずは、今度あるクラス対抗戦で一夏の馬鹿を全力でぶっ飛ばす!!

それから、改めてアイツと話してみよう……。

そんな訳だから、首を洗って待ってなさいよ! 一夏!



なにがどうしてこうなった？

鈴が転校して来てから暫くが経過して、今はもう五月に突入。

私が鈴の愚痴を聞いてからというもの、彼女の私に対する態度が完全に一変した。

例えば朝。

「弥生！一緒に朝ごはんを食べに行きましょう！」

例えば昼休み。

「やくよ〜い♡ よかったら一緒にお昼食へに行かない？」

そして、放課後。

「ねえ〜弥生〜。実は少し分からない問題があつてさ、ちょっと教えてくれない？」

トドメは夜。

「……………今日もここに泊まっていい？」

ここまで過剰に接触してくれば、流星の私でも理解出来る。

……………完全に懐かれた……………。

なんで？ どうしてなの？ 別に何も特別な事ってしてないよね？

それとも、私なんかに愚痴を聞いて貰った事が、そんなによかったの？

正直に言うとね、別に仲良くなるのは構わないんだ。

でも、ここまでグイグイと来られると、却って落ち着かないんだよね。

少しずつ改善（？）はされてきているとは思うけど、それでもまだ私の中じゃ……………

第一期原作ヒロイン⇨導火線に火の着いた爆弾

のイメージが完全に払拭出来ないんだわ。

いくら性格がよくなっても、ふとした拍子でいつ私に向かって爆発するか分かったもんじゃないし。

つーわけで、可能であればこれ以上は私に近づくな……………とは言わないけど、少しは接触を控える事を覚えて欲しい。



じゃないと、本気で私の方がヤバいから……。

いっつも冷や冷やしながら会話してき、その度に胃がキリキリ言うてるんだよ？

お蔭で、私の部屋には『あの日の薬』以外にも胃薬君が新たなルムメイトになってしまった。

昨日早速、私は胃薬君のお力を借りてしまったよ……。

いつの日か、胃に穴が開いて吐血……なんて事にならなきやいいんだけど……。

現状、それが最大の心配事です……。

.....

.....

.....

.....

.....

「やくよい♡ 今日も一緒にお昼食べに行こう？」

まくた教室に呼びに来ましたよ……。

お昼休みに突入した途端に速攻で呼びに来るから、逃げられないんだよな……。

ここで断れる勇気があれば、こんな事にはならないんだろうけど……。

あくあ……私って本当に駄目だなあ……。

こんなんじゃないつか、本当に詐欺で騙されて莫大な借金とか作りそう……。

「鈴さん！ いい加減にしつこいですわよ！」

「なによ。別にアタシが誰とご飯を食べようと勝手にしょ？」

「それでも限度と言うものがありますわよ！ 毎日毎日、弥生さんと仲がよさそうにくっついて……！」

「あれ？もしかしてアンタ……アタシに嫉妬してんの？」

「そ…そうですね！ 悪いですかっ!？」

否定しないのかよ。

「いや…そこは普通、否定しなさいよ……」

考えが同じだった。

なんちゅーシンクロ。

「大体！ 織斑一夏はどうしましたの!？」

「あく…アイツ？ うん、今は別にどうでもいいかな？」

「なんですのそれ……」

そうなんだよ。

なんて言うか…一夏に対する態度が『不機嫌』とかじゃなくて『無関心』って感じがするんだよ。

原作があれだけ激おこプンプン丸だったのに、一体彼女に何があったんだ？

私にこれだけベタベタするのと何か関係があるのかな？

「一々気にしていたら身がもたないぞ。それよりも、行くんだろ？」

「そうよ。気にしたら負けよ？ 箒も偶にはいい事言うじゃない」

「偶には余計だ」

まあ、場の流れに逆らう発言力も無い私には、ここで皆と一緒に行くと言う選択肢以外ないわけで。

せめてもの救いは、本音や簪とも一緒に行ける事か。

それが無かったら、もう普通に学校にも胃薬持ってきてるわ。

「そう言えば、おりむぐがないね」

「アイツなら、さつき織斑先生に呼ばれていたぞ。恐らく、クラス代表としての雑用じゃないのか？」

「ププ……」夏さまあww

ここら、人の仕事を笑うもんじゃないぞ。

例え雑用でも、クラス代表の立派な仕事なんだから。

「んじゃ、早く行きましょ？ 座る場所が無くなっちゃう」

おっと、それは普通に大変だ。

生徒数が多いから、少しでも出遅れたらすぐに込み合ってしまう。そうなれば、座る席を探すだけでも困難になる。

「つて、何をしれつと弥生さんの腕に抱き着いているんですの!」

「私がこうしたいから、こうしてるだけだけど?」

「あー言えばこう言う……!」

「なんとでも言つてちよくだい」

あああああ……なんかもうセシリアの顔に血管が浮き出てるんですけど?!?

「私もリンリンの真似っこする〜♡」

「ちよつ!? 本音さんまでっ!」

「早くしないと置いて行くぞ」

「なんで箒さんは、そんなに落ち着いてるんですの!?!」

「ふっ……大人の余裕と言うやつだ」

「貴女は私達と同じ年でしようっ!」

あの〜……私の周りでコントをするのは止めてくれませんかね?

ほら……一組まで来てくれた簪が冷めた目線でこつちを見るから……。

「何やってるの……?」

「私……に……聞かない……で……」

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

食事をして教室に戻ろうとしている途中の帰り道、廊下にある掲示  
板にクラス対抗戦のトーナメント表が大きく張り出されてあった。

とつくの昔に確認したんだけどね。

「まだこれ貼られてるのね」

「少なくとも、来週のトーナメントが終わるまでは貼られているだろ

う」

「それもそっか」

「そういや、トーナメントって来週だったね。」

今回、最も重要な一年生の部のトーナメントの第一試合は、1組V S 2組と言った組み合わせで、私的には捻りの何も無い組み合わせだった。

だって、モロに原作通りじゃん。

「っーことは、当然のように『アレ』も介入してくるんだよな……？」

「はあく……」

「弥生？ 何か悩み事でもあるの？ アタシでよかったらいつでも相談に乗るわよ」

「ありが……とう。でも……大丈夫……夫だか……ら……」

「そう？」

「言えるわけないだろ？ 君と一夏の試合に無粋な奴が乱入してくるなんて。」

「もしも来たら、私は即座に避難する方がいいだろうな。」

「私なんて戦力になるわけないんだから。」

「やっぱり、鈴さんに付き纏われてうんざりしてるんですわよ。ねえ？ 弥生さん？」

「んな訳ないじゃない。だって、アタシと弥生の仲だもんね？」

「悪いが、ここはセシリアが大正解だよ……」

「君にはスーパー弥生ちゃん人形を差し上げたい。」

「5つ集めて、自腹でハワイ旅行にでも勝手に行ってきてくれ。君なら楽勝だろ？」

「あ……弥生。それに皆も」

「一……夏……」

「廊下のだ真ん中で会うなんて、もしかして今から昼御飯か？」

「あの……鈴」

「なに？」

「えつと……俺……」

「ああ……別に今は謝罪とかはいいから」

「い…いや、でも…」

「約束とか謝罪とかより前に、まずは今度のトーナメントであなたの事をぶっ飛ばす事にしたから」

「ぶ…ぶっ飛ばす…?」

「そ。精々、アタシのストレス発散に付き合っ頂戴」

「俺はお前のサンドバックか…」

「今のままじゃそうですわね」

「ここでセシリアの援護攻撃。」

「女の敵には相応しい末路」

「俺…君に何かしたか…?」

「社会の敵が何か言ってる」

「しれっとランクアップしてるし!」

「それじゃあ、日本の敵にしてあげようか?」

「なんで出身国と敵対しなくちゃいけないんだよっ!」

「仕方が無い…んじゃ、もう世界の敵でいいじゃん」

「別に俺は世界征服とか目論んでないんですけど!」

「最終的には宇宙の敵に」

「凄いやけど普通に嫌だ!!」

か…簪が一夏と漫才をしてるだと…!?

よもや、生きてる内にこんな光景にお目にかかろうとは…。

「廊下のだ真ん中でコントをするな」

「別にしてない。唯のストレス発散」

「君もかよっ!」

「悪い?」

「そこで開き直られても困るんだけど…」

容赦にないなあ…簪も。

「一夏。今から食事か?」

「そうなんだよ。千冬姉ってば、俺を思いっきりこき使いやがって

…」

「姉弟水入らずでいいじゃないか」

「仕事中に色々と言われなきやな…」

色々って……一体何を言われたんだよ…。

『板垣とはどこまで行つたんだ?』とか『知り合いに聞いた、いいデートスポットでも教えてやろうか?』とか……肉体よりも精神的に疲れ  
たよ……』

「」「織斑先生……」

あの暴力教師はく! よりにもよつて、私と一夏をくつつけようつて魂胆なのかつ!?

残念だがそうはいかんど! 私はもう簪と本音の二人を娶るつて決めてるんだ!

既にネットで式場とかも探してるんだぞ!

後はなんとか法律改正すれば問題無し!

「油断ありませんわね……」

「よもや、あの人がそんな風に動いているとは……」

「まさかの伏兵……」

「織斑せんせ……」

「それでも、アタシは負けるつもりとかないけどね」

その自信はどこからくるんですか……。

「ところで、こんな所で呑気に話してていいのか? 早く食べないと、

午後の授業に遅刻してしまうぞ?」

「そ……そうだった!」

「あの人の事だ。どんな言い訳も通用しないだろうな……」

「お昼を抜けばオールオッケー」

「それだけは御免だ! それじゃ!」

あちら……いくら時間が無いからつて廊下は走つちや駄目でしょう。  
。

もしも先生に見つかったら、その時点でアウトですよ?

「何を走っている?」

「ち……千冬姉……!?!」

ほら、言わんこつちやない。

「廊下は走っていけないと言う事も理解できないのか? 今時、小学生でもちゃんと守っているぞ?」

「いや、それはクラス代表としての仕事で時間が押して……」

「言い訳をするな」

「きらっ!？」

い……痛そく……。

普段は心の中でほくそ笑むんだけど、今回だけは本気で同情するわ……。

「それと……」

「あすらんっ!？」

一二発目っ!？」

「私の事は『織斑先生』と呼べ。お前は何度言えば分かるんだ？」

「ずびばぜんでじだ……」

「分かればよろしい。とつとと行け」

「ばい……」

一夏……哀れな奴。

前のクラス代表決定戦の時みたいに、ほんの少しだけ優しくしてやってもいいかもしれない……。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

またまた時間は過ぎ去って、あつという間にクラス対抗戦当日。

既に開会式は終わり、後は第一試合の開始を待つばかり。

あれからもずつと鈴は私に付き纏い、それはついさつきまで続いていた。

『アタシの勇姿、ちゃんと目に焼き付けてよね!』ってウインク付きで言われたら、そりゃ私も見学に来ざるを得ないわけですよ。

私は今、今から試合が行われる第2アリーナの観客席の一番前に座っている。

隣には本音と箒、その向こうにセシリアもいる。

4組のクラス代表である簪はここにはいなくて、既に待機場所に移動しているとメールを貰った。

「最初は鈴さんと織斑一夏との試合ですわね……」

「アイツには悪いが、勝敗はする前から決まっているだろう」

「ほんの一ヶ月ちよつとの努力で代表候補生と互角に渡り合えたら、誰も苦勞とかしないよね」

全くもって本音の言う通り。

仮にも国を背負ってここにいるんだ。

それに、鈴はかなり短い時間で代表候補生まで上り詰めた逸材。

努力の鬼でもあるんだろうが、それ以上に秘めていた才能も開花したに違いない。

元から才能を持っている者が必死に努力をすればどうなるのか。

ある意味で、鈴はその体現者なのかもしれない。

「同じ負けるにしても、せめて無様な姿だけは晒さないでもらいたいな。普通に一組の恥になるから」

「私も箒さんに同感ですわ。いくら経験を積むためにクラス代表になったとは言え、すぐに負けてしまつては意味が無いですもの」

「このポップコーン美味しく♡」

箒とセシリアは辛辣な意見で、本音に至っては興味の範囲外……と。

「弥生さんはどう見ますか？ 今回の試合は」

「私……は……」

どうと言われてもな……。

専門家でもない私の意見なんてなんの参考にもならないでしょうよ。

それでもいいなら言わせて貰うけど。

「私か……ら見ても……一夏……の勝ち目は薄い……とは思……う……。白式……には遠距離……の武装……が無いから……離れた位置……で射撃戦



……に……持ち込まれたら……危ない……。仮に……チャンスがある……とするなら……白式……の高い……機動性……と運動性……を利用した攪乱……戦法……が有効……。け……ど……それ……は……一夏……が白式の……性能……をフル……に発揮……する事……が前提条件……になるけど……」

「攪乱……。白式のスピードで相手を翻弄し、隙を狙って渾身の一撃を叩き込む……と？」

「う……ん……。攻撃……の時に……イグニッション瞬時……ブースト加速……を使えれ……ば……もつといい……。確……か……練習して……るのを……見た……から……」

「成る程な……。弥生の言う通り、もしも一夏が勝ち目を狙えるとしたら、それぐらいしかないな……」

「で……でも……鈴……の事……だから……瞬時加速……を使つ……ても……普通……に対応……してみせる……可能性……が高い……」

「そうですね……。悔しいですけど、私から見ても鈴さんの実力は紛れも無く本物。普段の動きを見ていれば、嫌でもそれが分かりますわ」

「私もそれは分かった。なんと言うか……歩き方一つとっても、隙が無かったな。あれは間違いなく武芸者の動きだ」

え？ そうだったの？ 私には普通に見えたけど……。

「流石は弥生さん！ 見事な分析ですわ！」

「そうだな。弥生も私達と同じように、普段の動きから鈴の秘められた実力をきちんと理解していたに違いない」

な……なんか過大評価しすぎてない!?

私は自分が思った事を言っただけであって、別に鈴の隠された実力とか全然分からなかったからね!?

彼女の実力が分かったのは、単純に『原作知識』と言う予習をしていたからだよ!?

「あ！ おりむーとリンリンが入って来たよ！」

「遂に始まるのか……」

「精々、頑張ってほしいものですわね」

「がんばれ〜」

「ん……………」

アリーナのステージに、真っ白なISと紅色のISが入場してきた。

あれが鈴の専用機の『甲龍』シエンロンか……………。

これ、絶対に読み方間違えてるよな？

私としては、心情的には鈴を応援したいけど、一応は一組の生徒である以上、自分達の代表である一夏の応援もしなくてはいけないと思うわけでした。

つまり、この場で私は二人を平等に応援しようと考えてるのです。

「鈴……………一夏……………二人……………とも……………頑張れ……………」

例の奴がやって来るまでには試合が終了する事を祈るよ。

割と切実に。

試合開始！

第二アリーナのステージにて、お互いに専用機を纏った一夏と鈴が試合開始を前に向かい合っていた。

(すげー人の数と歓声だな……)

今までの人生の中で、これまでの数の人間に見られるのは初めてな一夏にとって、この状況はなんとも新鮮だった。

(弥生も観客席でこの試合を見てくれている……。絶対にカッコ悪い姿は晒せないな……)

たった一人の女性の為に戦う。

お前はいつから、そんなに偉くなったのか。

「もうすぐ試合開始ね。一夏」

「そうだな」

何気なく返すが、心の中では初の大舞台に緊張をしていた。

このぶつきらぼうな返事は、それを隠すためのポーズだ。

(あれが鈴の専用機か……。白式と同じように、接近戦に強そうだな……)

鈴の手にしている二振りの青龍刀のような武器を見て、即座にそう判断した。

(だからと言って、俺に出来る事なんて限られてるんだけどな)

そう。一夏の白式にある武装は『雪片式型』のみ。

否が応でも近づくしか、彼にダメージを与える術はない。

「丁度いい機会だし、ここらで弥生にあたしの実力も知って貰おうかしら」

「俺を踏み台にして……か？」

「あら。鈍感な一夏にしては鋭いじゃない」

「誰が鈍感か」

お前だ、お前。

他に誰がいると言うのだ。

「もしかしてとは思うけど……一夏、あたしに勝つ気でいる？」

「当然だろ？ 何を今更……」

「ふうん……。セシリアとの試合に負けたって聞いてたけど、どうやら、全然懲りてないみたいね」

「懲りるって……。何がだよ?」

「あんたの、その上から目線の事よ」

「は? 俺がいつ上から目線になったって言うんだよ?」

「現在進行形だよ。あんたさ、専用機を手にしたからって、ちよつと調子に乗ってるんじゃない?」

「べ…別に調子になんて……」

「乗ってるわよ。じやなきや、特例で専用機を受領した程度で代表候補生に本気で勝とうだなんて、そんな思い上がった考えは普通は出来ない筈だもの」

「……………」

鈴の目は全く笑っていないかった。

彼女は本気で怒っている。

「あたし達代表候補生はね、文字通り血の滲むような努力を必死にこなしてきて、それで今の場所に立って専用機を手にした。それを、男だから……。特別に専用機を手に入れたから……。世界最強の弟だから……。そんなふざけた理由で……」

鈴の怒りのボルテージが上がっていつている途中でアナウンスが聞こえ、同時に試合開始のブザーがアリーナ全体に鳴り響いた。

「あたし達のこれまでの努力を全否定されちゃ!! たまんないのよ!!!」

「なっ!!?」

試合開始と同時に、鈴の姿が一瞬で一夏の視界から消え去った。

「ど…どこに行ったっ!!?」

「(ハ)よ」

「!!!」

後ろから声が聞こえ、急いで振り向くと、そこには既に青龍刀を振りかぶった鈴がいた。

「しまっ……」

「遅いっ!!」

雪片でガードしようとするも、時すでに遅し。

咄嗟に動いた一夏よりも、最初から攻撃態勢に入っていた鈴の方が圧倒的に早く、ガードが間に合わずに、そのまま斬撃を胴体に受けながら派手に吹っ飛んだ。

「ぐあああああああつ!!」

「はい。まずはファーストアタックいただき。これはハンデよ」

「ハ…ハンデ?」

なんとか体勢を整えた一夏が、疑問符を浮かべながら構える。

この時、本来ならセシリアから事前に習った『クロス・グリッド・ターン三次元躍動旋回』が使えればよかったのだが、彼はまだ完全に習得していない。

「こう言った試合はね、基本的に先制攻撃をしてしまった方が不利になるの。何故なら、自分の手の内を相手に早々に曝け出してしまいうから」

「つつても…いきなり過ぎて何が何だか分からなかったぞ…」

「つまり、それがあんたの今の実力って事よ。ここでそこそこの成績を取ってる連中なら、今を見ただけでも多少の分析は出来るでしょうね。弥生ならきつと、もうこの甲龍の基本スペックまで割り出してるんじゃないかしら?」

「弥生なら本当に出来そうだ…」

二人の弥生に対する評価は上がる一方。

試合中故に二人の会話は観客席からはよく聞き取れないが、もしも本人が聞いていたら、間違いなく顔を真っ赤にして悶絶していただろう。

それはそれで見てみたい気もするが。

「来なさい。今度はアンタに攻撃させてあげるから」

「ちくしょう…舐めやがって…!」

「いや…普通に舐めるでしょ」

それもそうだ。

ISに乗り始めて一か月で、知識も技術も未だに素人の領域から抜け出せてしない。

そんな相手に、どうして本気になれようか。

以前にセシリアは『獅子は兎を狩るのにも全力を尽くす』と言ったが、生憎と鈴は『獅子』ではない。

今の彼女は紛れもない『龍』。

弱者を嫌い、強者を友と呼ぶ気高き存在。

そんな龍が、己の部も弁えない弱者に、己の全力を尽くして戦うだろうか？

答えは否。断じて否である。

(悔しいけど……鈴は強い。俺よりもずっと……！ でも、だからと言って……何も出来ないまま終わるのだけは御免だ！ もう……あの時の二の舞だけはしたくないんだ！)

その決意は本当に立派だ。

そこに実力が伴えばもつとよかったのだが、今の彼にそれを求めるのは余りにも酷と言うもの。

「せめて……」

「ん？」

腰を低くしてから、一気に加速して鈴に接近。

そこから雪片式で斬りかかる！

「一撃ぐらいは当ててやるよ!!」

「はぁ……」

雪片式の刃が鈴に近づくが、彼女はそれをジツと見据えてから、徐に両手に持った大型ブレード『双天牙月』を上空に大きく投げ飛ばした。

(な……なんだっ!?)

意味不明な行動に一瞬だけ警戒するが、もう振り下ろし始めた刃は止まらない。

このまま相手を攻撃するまで、全力を尽くすのみだ。

だが、そう簡単に事が上手く運べば、誰も苦勞はしない。

「がはあっ!?!」

いきなり、一夏の腹部に強い衝撃が走った。

目線だけを下にやると、鈴が腰を低くした状態で一夏の懐に潜り込み、この腹に掌底をぶちかましていた。

「アンタって……真正の馬鹿ね」

そこから更に、顎に向かったの掌底！

「ぐっ……！」

一夏の脳が大きく揺さぶられ、一時的に体が麻痺してしまった。

ISの操縦者保護機能によって、すぐに回復はするが、それでも確実に数秒間のラグが存在する。

実戦における数秒間の隙は、間違いなく致命的だ。

「真正面から馬鹿正直に突っ込んできて！」

動けない一夏の胸に肘打ち！

「そんなの！」

更にそこからの膝蹴り！

「あたしに『どうぞカウンターをしてください』って言ってるようなもんじゃない！」

トドメの顔面に向けての正拳突き!!

「があああああああつ!!」

再び吹っ飛ばされる一夏。

試合を開始してから、まだ10分程しか経過してないが、試合の流れは完全に鈴の方に向いていた。

一夏がステージの壁に激突した直後に上に投げた双天牙月が戻ってきて、それをナイスキャッチ。

「弥生に勉強を教わって、その上であいつ等に訓練して貰ったって聞いてたから、もう少しぐらいは善戦すると思ってたけど……流石に高望みしすぎたわね」

「なん……だって……！」

いくらISとは言え、操縦者に向けられる衝撃や痛みは緩和出来ない。

フラフラとしながら浮かび上がり、なんとかして雪片を握りしめて鈴と対峙する。

「まさかとは思うけど、あたしが中国でISの操縦だけをひたすらに頑張ってきた……とか、アホな事を考えてたんじゃないでしょうね？」

「……違うのかよ？」

「弥生が教えてくれなかった？　ISは体面上は『スポーツ』って事になってるのよ？　スポーツにおいて最も重要で基礎的な事は何か……流石の一夏でも分かるでしょ？」

「それは……」

その時、一夏の脳裏に弥生から教えて貰った事が頭をよぎった。

『ISはあくまでスポーツ……だから……まずは体力作りから……始めれば……と思う……よ……？』

一筋の汗が一夏の頬を伝って地面に落ちた。

「理解した？」

「あ……ああ……」

鈴は、中国にて何か武道のようなものを会得して帰ってきた。

一夏はそう推測した。

「セシリアも言ってたんじゃない？　代表候補生たる者、あらゆる状況を想定して訓練を行っているって」

「言ってた……」

「それはあたしだって例外じゃないって事。まあ、もうすぐ終わる一夏には関係ないでしょうけど」

「なんだ……ぐあつ!？」

一夏が言葉を言いかけた時、甲龍の肩部アーマーがスライドして、その中心部にあった球体が発光した瞬間、彼は三度吹っ飛ばされた。

「はあ……はあ……。見えない何かに殴られた……？」

「どう？　不可視の龍の咆哮ブレスの威力は？」

ニヒルな顔で笑った後、またもや見えない一撃を受ける。

「ぬあああああつ!!」

今度は壁ではなくて地面に叩きつけられる。

衝撃と痛みが全身に走り、白式のSEを確実に削っていた。

(やばい……これは冗談抜きでヤバイ……！)

一夏、男の見せどころである。



・  
・  
・  
・  
・  
・

あゝらら。

見てられないぐらいにボコボコじゃないのさ。

まさか、ここまでの実力差があったとは思わなかったな。

「一夏の奴め……言った矢先にこれか……」

「いくら鈴さんが実力者とは言え、もう少し攻めようがあるでしょうに……」

「おりむくの動きって、まるで猪さんみたいだね」

「猪……突猛……進……って……こと……?」

「そうそう。ちよとつもくしん」

ちやんと意味を分かってて言ってるのか……?

「あれならばまだ猪の方がマシだ。あれの全力の突進の威力は本当に凄まじいからな」

「おまけに立派な牙もありますしね」

ありやりや。遂には一夏が猪以下の存在に格下げされてしまった。

「しかし……まさか本当に鈴が武道を修めていたとはな。道理で普段の生活の中からも隙が見当たらない訳だ」

「彼も昔は剣道をしていたのでしょうか？ それなのに、武道家相手に真正面から何の策も無しに突っ込むなんて……」

「ワンパターンだよな」

言われてるぞ、原作主人公。

にしても、もうちよつとどうにかならないもんか？

少し冷静になって考えれば、策の一つや二つぐらいは思いつきそう  
なもんだけど。

少なくとも、私はすぐに対策が一つ思いついたよ。

「それよりも、あの一夏を吹き飛ばした一撃はなんだ？　まるで見えない拳に殴られたようだったけど……」

「あ……それは……衝撃砲……だよ」

「衝撃砲？」

本音と箒がこつちを向いて小首を傾げる。

そうだよ。衝撃砲なんて普通は聞き慣れないよね。

「衝撃……砲……は……空間自……体に……圧力……を……かけて……から……砲身……を……形成……して……その……余剰……で……生み……出され……た……衝撃……を……砲弾……にして……発射……する……んだよ……」

「おお……」

な……なんか照れるな……。

箒と本音だけじゃなくて、周囲の子達からもパチパチパチと拍手を貰ってしまったし。

「よ……余談……だけ……ど……あの……衝撃……砲……は……射角……の……制限……が……殆ど……無い……ら……しく……て……その……気……に……なれば……正面……を……向いた……まま……真後ろ……を……攻撃……する……事……も……可能……みたい……」

「それはもう……普通にチートじゃないのか？」

「そうでもありませんわよ？　衝撃砲の威力と射程は精々、アサルトライフルと同程度ですから」

「一長一短だね」

セシリアが補足をしてくれて、なんだか本人は嬉しそうだ。

そんなに皆に褒められたかったのだろうか？

「おりむ……勝てるかな……」

分かんないけど、このままじゃ難しいだろうな。

・  
・  
・  
・  
・  
・

「意外と粘るじゃない。てつきり、すぐにやられると思ってたわ」  
「男の意地つてもんがあるんだよ……!」

などと強がってはいるが、機体も本人も満身創痍だった。

白式のSEは風前の灯で、衝撃砲の雨に晒されて思うように接近できず、攻撃を当てる以前の問題になっている。

そのもどかしさと悔しさと焦りで、一夏(一夏)の精神はガリガリと削られていった。

「男の意地……ね。意地だけで勝負をひっくり返せたら、どれだけいか」

「うっせ」

頭をフル回転させて、なんとかして逆転の策を考えていた。

(なんとかして攻撃を当てないと、本当にこのまま終わってしまう……!　いくら目を凝らしても全く見えないし、見えない以上は回避も出来ない……。もう少しSEに余裕があれば、多少のダメージなんか無視して無理矢理にでも自分の距離にするのに……!)

雪片を握る手に力が籠る。

(現状で俺が一発逆転することが出来る方法があるとすれば、『これ』しかない……)

白式の最強にして唯一の切り札。

『バリアー無効化攻撃』の効果を持つ、自らのSEを消費して放たれる一撃必殺の攻撃。

それこそが、白式の『唯一使用能力』ワンオフ・アビリティである『零落白夜』。

かつて千冬の愛機だった『暮桜』と全く同じ能力だ。

(これも弥生が教えてくれたっけ……。攻撃力は間違いなく最強だけど、その代償が大きいと……。だけど、これを完全に使いこなせたからこそ、千冬姉は世界一にもなれたんだって……)

因みに、その際に射撃戦について少し聞いてみたが、見事に完全論破されてしまい、それ以降は射撃戦でなんとかしようと言う考えは捨てた。

(いくら不利でも、気持ちで負けたら本当に終わりだ……!　某有名

バスケット漫画でも言ってたじゃないか! 『諦めたら、そこで試合終了だよ』つて!」

折れそうにある心を奮い立たせて、頭を切り替える。

「へえ〜……やっといい目になったじゃない」

「そりやどーも。……ここから捨て身でいくからな」

「捨て身……ね」

一夏にトドメを刺すために衝撃砲が放たれるが、それを偶然にも間一髪で回避。

それに動揺すること無く鈴は再び衝撃砲を発射しようとするが、その一瞬の隙を狙って、一夏は習得したばかりで成功率も2割にも満たない技術『イクニツション・ブースト瞬間加速』を奇跡的に発動成功させる。

「これは……!」

これまで余裕の表情を崩さなかった鈴が、初めて真剣な顔になる。凄まじいスピードで迫ってくる一夏を迎撃しようと双天牙月を連結させて構える。

「この一撃でええええええええええええええええええええええええ!!」

「その気合は認めるけど……どれだけ速度があっても、発動の瞬間と軌道が丸見えなら、全くもって意味が無いっつーの!!」

一夏にとつて最後の一撃。

これが決まらなければ、彼の敗北は決まったも同然。

しかし、実力差と言うものはどこまでも非情に立ちはだかるものであつて……。

「そ……んな……」

「まるで闘牛士にでもなった気分ね」

一夏の渾身の一撃を、鈴は体を横にずらしたただけであっさりと回避。

「んじゃ、終わりね。ご苦労様。敢闘賞ぐらいはくれてやるわ」

「くそ……!」

鈴のフィニッシュ・ブローが一夏に迫る。

その刃が白式の装甲を無情にも切り裂く……瞬間。

「な……なにつ!」

「あれは……!?!」

突如として、アリーナ全体をつんぎくような衝撃と音が走り、二人の背後……ステージ中央付近から土煙とも違う煙がアリーナの上まで立ち上っている。

「なんなのよ……あれは……」

動きを完全に止めた鈴は、いきなりの出来事に戦慄し、一夏は思考停止していた。

そして、この時の出来事が様々な者達のターニングポイントになるうとは、この時は誰もが予想すらしていなかった。

そう、原作知識を持っている弥生でさえも……。

逃げろ！逃げろ！逃げろ！

クラス対抗戦、一年の部の第一試合。

鈴と一夏の試合は、鈴の圧倒的な強さによって一夏が追い込まれ、絶体絶命のピンチに陥っていた……のだが……。

「なん……ですの……？ あれは……」

突如として、二人の試合に割り込むような形で謎の物体がアリーナの上を覆い尽くしているシールドをぶち破って落下してきた。

（いきなりの事で皆が呆然としている……。無理も無いか……。いきなり、こんな事が起きれば、誰だって普通は混乱する……）

原作知識を持ってしている私だって、こうなると分かってはいても、やっぱり大なり小なり驚きは隠せない。

「い……いきなりなんなんだ……？」

しかし、謎の物体は落下してから沈黙していて、アリーナ全体が完全に静まりかえっている。

耳が痛くなる程の静寂……。これが却って不気味さを演出しているように感じる。

「……………っ!？」

土煙の中で……何かが光った……？

まさか……あれはっ!?

思わず立ち上がって、ステージ中央で土煙に包まれた『ソレ』を凝視する。

「やよつち……っ？」

手が……手が震える……！ くそ……！

分かっている……分かっている……怖いものは怖い！

「あ……危……ない!!」

「「えっ……」」

次の瞬間、一筋の真紅のビームが発射されて、それを鈴と一夏がなんとか回避。

だがしかし、回避されたビームはそのまま二人の後ろまで直進し、あろうことか、強固に守られている筈のアリーナのシールドを易々と

貫通した！

「くっ……………」

「そ…そんなことが……………」

爆音と閃光がこっちまで迫り、反射的に腕で顔を隠す。

数秒の無音状態の後、この場にいる皆は自分達が置かれた状況をようやく理解し、その恐怖心が一気に爆発した。

「「「「きやあああああああああああああああつ！！！！」「」」」

全員が一斉に観客席の出口へと殺到する。

皆は一種の恐慌状態に陥っていて、誰もが我先にと他の人間を押しつけて先に進もうとしている。

「私が先よ！！ そこだきなさいよ！！」

「うっさい！！ あたしが先に来たんだから、大人しく後ろに下がれ！！」

「私は二年生よ！！ 分かったらさっさとどいて！！」

「早くっ！！ 早く行ってえええええっ！！」

「死にたくない！ 死にたくないよおおおっ！！ お母さああああああんっ！！」

仕方が無いと言えばそれまでだけど、見られない…………。

全員が完全にパニックになって、精神状態が普通じゃなくなってる……………！

「ど…………ど…………どうしよう…………やよっち…………」

「本…音…………」

完全に怯えている本音を少しでも安心させる為、彼女の手をぎゅつと握りしめる。

「け…煙が…………晴れる…………」

レーザーの発射の余波で煙が吹き飛ばされて、その姿が白日の下に曝される。

「あ…………それは…………」

そこには、私がよく知っている無人機の姿があった。

異常なまでに両腕部が長く、肩部と頭部が融合しているようなデザイン。

最も特徴的なのは、全身を完全に覆い尽くしている『全身装甲』<sup>フルスキーン</sup>の

姿。

二次創作などのオリ主の専用機などは大抵がアレと同類になるが、この異様なまでの不気味さは普通じゃない……………!

アレはまるで、最初から敵対する相手を畏怖させることが目的でデザインされたような感じだ……………。

「くっ……………」

悔しそうに顔を歪めながら、セシリアは行動を開始する。

「箒さん！ 弥生さんと本音さんを連れて、急いでここから脱出を！」

「お…お前はどのような気だ!?!」

「代表候補生として、成すべき事を成すだけ……………ですわ」

「せっしー……………」

うわあ……………不謹慎だと分かっているけど、今のセシリア……………ちよつとカツコいい……………。

「まずは管制室まで行って、織斑先生達と合流をしながら通信で状況把握をしますわ。皆さんは一刻も早く避難を！ 先程のように、今度はこちらにあの強力なビームが来るやもしれません！」

「わ…分かった！ セシリアも気を付けろよ！」

「勿論ですわ！」

強気な笑顔を見せたセシリアは、彼女の専用機の待機形態であるイヤークラスに手を当てながら皆とは逆方向に向かって走り出した。

「……………私達も急ぐ。走れるか?」

「う……………ん……………」

「だ…だいいじよーぶだよ！」

「よし！ なら、逸れないように気を付けながら行くぞ！」

私は空いている方の手で箒の手を掴んで、一緒にこの場から避難するために走り出した!

(大丈夫だと信じたいけど……………気を付けてね……………皆……………!)

何も出来ない無力な私ではあるが、それでも皆の無事ぐらいは祈りたい。

例え疎ましく思っても……………大事な人達である事には違いのないのだから……………。



・  
・  
・  
・  
・  
・

同時刻。

試合に向けて待機していた簪も、いきなりの乱入者に驚き、周囲の混乱に巻き込まれていた。

「これじゃあ先に行けない……！ 弥生たちの事が心配なのに……！」

彼女が待機場所として使っていた更衣室に備え付けられたモニターの向こう側では、謎の機体と鈴が交戦をしていた。

一夏は端の方で大人しくしている。

「下手にこの人込みに突っ込めば、どこに流されるか分からないし……。どうすれば……。」

焦る気持ちだけが募っていく。

こんな時に自分の専用機が完成していれば……。

無駄だと理解していても、そう思ってしまう。

「セシリアと一緒にいるから、多分大丈夫……だよね……？」

セシリアの代表候補生としての実力は簪も十分に認めている。

頭脳明晰な彼女ならば、きっと皆をきちんと避難させている筈。

「……私は私で、自分に出来る事を探そう……！ 私だって更識の人

間で……日本の代表候補生なんだから……！」

自分で自分を鼓舞して、簪も覚悟を決める。

もうそこには、姉にコンプレックスを抱いていた気弱な少女はいなかった。

今いるのは、己の役目を全うしようと奮起している一人の選ばれし少女だった。

「必ず駆けつけるから、それまで無事でいてね……弥生……皆……！」

・  
・  
・  
・  
・  
・

「な……んなのよ……あの威力は……！」

「冗談……だろ……!?!」

自分達に向かつて放たれたビームの威力を見て、唾然とする鈴と一夏。

「アリーナを守っているシールドは、基本的にISと同じように出来ている。それを易々と貫通してここまで来た拳句、あんなバ火力なビームを見せつけられるなんてね……！」

間違いなく強者である鈴でさえも、冷や汗を隠しきれない。

鈴でそうならば、素人である一夏は……？

「一夏。取り敢えず試合は中止よ。つて……流石に言わないでも分かるわよね？」

「当たり前だ！ それよりもアレは……！」

どうやら、素人すぎて逆に正しく状況判断が出来ていないようだ。彼は驚きこそすれ、それ以上の感情は抱いていないようだ。つた。

「なっ!?!」

少し話した際に、二人は相手によってロックオンされた。

白式と甲龍が警告音とメッセージを発信し、二人に危険を促す。

「アンタは急いでピットに戻りなさい！」

「はあっ!?! この状況で何言っただよ！ そもそも、お前はどうかする気だっ!?!」

「決まってるでしょ……！」

苦笑いを浮かべながら、鈴はその手に双天牙月を握りしめる。

「なんとかして、アンタと観客席の皆が逃げる時間と、先生達がやって来る時間を稼ぐのよ」

「ひ…一人でかつ!？」

「そうよ。なんか文句ある?」

「当たり前だ! 女を一人置いて男の俺がおめおめと逃げるなんて、そんな情けない真似できるかよ!!」

「アンタ本気で馬鹿じゃないのっ!? 実力も無い! 体力も無い!

SEも無い! 無い無い尽くしな上に碌な状況判断すらも出来ないアンタが、この場に残って一体何をするって言うのよ!!!」

「それ……は……」

はい論破。

一夏は急に黙りこくってしまった。

「ちっ! のんびり話もさせて貰えないっての!？」

「ちよ……うわあああつ!？」

再び放たれたビームを一夏を蹴飛ばしながら自分も回避。

蹴り飛ばされた一夏はアリーナの壁にぶつかり、そこで尻餅をついていた。

「今ので本当にSEも底をついたでしょ? 分かったら、大人しくここで先生達が来るのを待ってなさい」

「ま…待てよ! 鈴!!」

一夏の言葉に耳を貸さず、鈴は謎の機体の前にせり出た。

そこに、管制室からプライベート・チャンネルで通信が入ってきた。  
『凰さん! 織斑君! 無事ですかっ!? 無事なら、一刻も早くそこから脱出してください! すぐにでも先生達がISで駆けつけて鎮圧しますから!』

「それが出来れば苦労しませんよ! 向こうは完全にこっちをロックしてるし、先生達が駆け付けるまでここを無人には出来ないでしょう? そうしたら最後、それこそアイツは縦横無尽に暴れますよ?」

『それは……そうですけど……』

「心配しないでください。アタシだって、出来る事なら一秒でも早く

こんな所からおさらばして、弥生の胸に飛び込みたいんですから」

『凰さん……』

「代表候補生として、こんな状況で人命を無視する事なんて出来ませんからね。可能な範囲で時間を稼いでみせます。だから……」

『分かりました！ こちらも急いで先生達をそちらに送るようにはしますから！ ですから、くれぐれも十分に気を付けてくださいね！』

「了解です！」

器用にビームを回避しながら、真耶と通信越しに会話をする。

口では強がっていたが、実際は鈴も焦りを隠しきれないでいた。

（意味不明な状況な上に、正体不明のIS……。マジでどうなってるのよ！ ああ……。今、猛烈に弥生に会いたい……。会ってからギュツて抱きしめて貰いたい……）

愛しい彼女の事を思いながら、必死に避ける事に専念する。

（でも、ここでこいつを食い止めるって事は、弥生の事を守る事に直結するのよね……。そう思うと、なんだか元気が湧いてきた！）

迷いに満ちていた鈴の目が生き返った。

「さあ……。来なさい！ 中国代表候補生、凰鈴音！ そう簡単にこの首を取れるとは思わないことね!!」

回避をしながら、着実に自分の距離へと近づいていく。

そんな鈴の顔は笑っていて、八重歯が眩しく光っていた。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「お嬢様!! 早くこちらに来てください！ 私達だけではもう耐えられませんか!!」

『分かっているわ！ 私も急いでそっちに向かっているから、もう少しだけ待ってて!!』

生徒会書記にして、本音の実の姉でもある『布仏虚』は、生徒会役員の一人として、教師達と一緒に避難をしている生徒達の誘導を手伝いながら、通信機で生徒会長である楯無と連絡を取っていた。

「このままでは暴動も起きかねない……! それに、こんな状況では先生達も鎮圧に向かうことが出来ない……!」

まさに八方塞な状況だった。

生徒達もそうだが、教師達も段々と精神を疲弊させていた。

「こんな感じじゃ、いつまで経っても避難が終わらないわ!」

「でも、だからと言ってここを離れる訳にはいかないでしょ!」

「ほらほら! 押さない駆けない喋らないを守って!」

これは避難訓練ではなくて、本当の危機的状況である。

混乱の渦にある生徒達に『お・か・し』を守る精神的余裕など、あるわけも無かった。

「本音……お願いだから無事でいて……!」

生徒達を避難させながら、虚は密かに妹の事を案じていた。

それは、この場で彼女の許された唯一の自由だった。

・  
・  
・  
・  
・  
・

箒と本音と一緒に避難をしていると、案の定と言うべきか、私達は圧倒的な人込みに巻き込まれていた。

「絶対に離すなよ! ここまで逸れたら終わりだぞ!!」

「分か……ってる……!」

「うう〜……！」

凄い奔流だ……！ 万が一にでも足を崩したら、大怪我じゃ済まないぞー！

下手をしたら、本当に死んでしまいかねない！  
先程まではしっかりと握りしめていた手も、今では離れる寸前になっっている。

力を込めて離さないようにしないと、冗談じゃ済まされない！

(ここはどの辺りなんだろう……？ かなりの距離を歩いたようにも思えるし、少ししか進んでいないようにも感じる……)

時間の感覚が無くなってきたかも……。

これは普通にヤバいな……。

『……ジジ……ジジ……』

なんだこれ……？ 上から聞こえる……放送？

『助け……！ 腰が抜……て歩……な……』

途切れ途切れに聞こえる……。

まさか、まだ中継室にまだ誰かが残されているのか!?

(こんな状況じゃなければ、助けに行ってもよかつただけ……)

助けに行くどころか、碌に身動きすら出来ない。

寧ろ、こっちの方を助けて欲しい。

そんな風に考え事をして油断をしていたせいで、ノロノロとしていた歩みが急に早くなった事に追いつけなかった。

「ぎゃああああつ!?! やよっちー! しののんー!」

「本音っ!?!」

しまった!! 本音と手が離れてしまった!

彼女の姿が人込みに飲まれて消えていく!

「くっ! 本音えええええっ!!」

(なんで……なんで手を離れたんだよ!! 私は!!!)

今、初めて自分の事を憎いと思った……!

こんな時に……こんな時に限ってなんで私は無力なんだ……!

「わ……私達も流される!?!」

「く……ああああ……!」

「せめて弥生だけでも……!」

箒の手が先程よりも強く握りしめられた。

少し痛いぐらいだが、今はこれぐらいが丁度いい。

次第に端の方に追いやられ、壁にぶつかりそうになる。

このままじゃ……!」

「弥生!!」

「きゃあああああつ?!」

箒が私を庇うように抱きしめて、そのまま私達はどこかに入るように投げ出された。

強い衝撃が体に走って、痛みで僅かに心が冷静になる。

(床……に転がっている……のか……?)

人込みが無い……。ここは廊下じゃない……?

「や……弥生……大丈夫か?」

「なん……とか……」

「そうか、よかった……」

二人一緒に起き上がって、今いる場所を確かめる。

「ここは……?」

床に座りながら怯えている女子生徒達がいる。

一人は泣きながら頭を抱え、一人は端っこの方で震えていて、もう

一人は虚ろな目で只管に『お母さん……お母さん……』と呟いている。

この場にいる全員が、恐怖によって精神が壊れかけてる……!

「ここは……?」

「中継……室……?」

すぐ傍に放送機器が転がっている。

と言う事は、さっきの放送はここから聞こえてきたのか……。

「なんで避難をしようとしななんだ……?」

「まさか……!」

急いで立ち上がって、中継室の扉に手を掛けた。

「やっば……り……!」

「ど……どうした?」

「このド……ア……壊れ……てる……!」





「えっ!?!」

なんでっ!?

別に筈はマイクを使って大声なんて出してないのに!?

「はっ!?!」

恐る恐る設置されているマイクを見てみる。

(冗談……でしょ……?)

中継室のマイクのスイッチが入ったままになっている!?

これがこの子達の叫び声を拾ってしまったのかっ!

(アイツのビーム砲がこちらに向かつて……!)

ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイ!!

どうするどうするどうするどうするどうするどうするどうするどうするどうする!!

(やるしかない……のか……!)

自分の腕にある鉛色のリング。

私の『専用機』の待機形態。

専用機なんて言うのも憚られるような代物だけど、それでも……!

(今……なんとか出来るのは私しかない……!)

覚悟を決める時が来た……のかもしれない……。

「私……は……!」

## 守る為の勇氣

弥生達が中継室に閉じ込められてしまう数分前。

セシリアは人込みを避けながら、やつとの事で千冬達がいる管制室へと辿り着いた。

「織斑先生!! 山田先生!!」

「オルコットさん!」

「やつと来たか」

いきなりの訪問者に真耶は驚いて、千冬は予め想定していたかのような反応をした。

「ハア……ハア……早速……現在の状況を教えてください……」

「それもいいが、まずは水でも飲んで落ち着け」

「あ……ありがとうございますわ……」

千冬からペットボトルに入ったミネラルウォーターを貰って、それを一気飲みする。

よっほど喉が渴いていたのだろう。

「プハッ……」

「落ち着いたか?」

「はい……。それで、状況は?」

「これを見ろ」

千冬が真耶に目配せをして、彼女がコンソールを操作してモニターに映像を出す。

「現在、凰が一人でなんとか頑張つて教師部隊が来るまでの時間を稼いでいる」

「鈴さんが一人で……!? 織斑一夏は……」

「あのバカなら、今は端の方で大人しくしている。あの機体も織斑の事は眼中にすらないようで、完全に無視をしている。こちらとしてはありがたいがな」

余計な事をして被害が増えるよりは、ああして大人しくしていた方が賢明だ。

行動する事がいつでも事態を好転させるとは限らない。

「避難状況は芳しくないな。生徒会と他の先生達が避難をさせているが、未だに半分以上の生徒がアリーナから出られていない」

「あのパニックですからね……。無理ありませんわ」

「板垣と篠ノ之、布仏はどうした？ 一緒にいたんだらう？」

「弥生さん達ならば、こちらに来る前に急いで避難するように言っておきましたわ。箒さんが一緒にいるから大丈夫だとは思いますが……」

「そうだな。いざという時の行動力はあるからな」

昔馴染みとして、箒の能力は高く評価している千冬。

決して身内鼻肩と言う訳でなく、一人の人間として見た評価だった。

「オルコット。分かっているとは思うが、いくら嵐でもいつまで持ち堪えられるか分からない。だから……」

「はい。今すぐでも増援に行く準備は出来てますわ」

「よし。ならば早速……」

千冬がセシリアを送り出そうとした……その時、真耶の表情が急変した。

「お……織斑先生!! 大変です!!」

「どうした!?!」

「しゃ……遮断シールドのレベルが3から4に上がって、アリーナ内の扉が順にロックされていきます!!」

「な……なんですってっ!?!」

おおよそ考えられる中で最悪の事態。

まだ避難が終わっていない状況での扉のロック。

間違いなく今まで以上の混乱が起きる事が予想されるだろう。

「くっ……!?! これでごちらに制限時間が出来てしまった……!?! 真

耶! 緊急事態として政府に救援の要請を!」

「今やっています! 今の総理は『あの方』ですから、連絡が届き次第、すぐにでもやって来るかと……」

「そうだな……」

現在の内閣総理大臣を心から信用している様子の二人。

セシリアは現在の日本の政府の内情をよく理解していないので、その心情はよく分からないが。

「それから、三年生の精鋭達が自己判断でシステムのクラックを実行しているみたいです!」

「流石は三年……! こちらが何も言わなくてもいい仕事をしてくれる!」

少しだけ希望が見えてきて心にも若干の余裕が生まれた千冬は、改めてセシリアの方を振り向いた。

「ここは私達に任せて、お前は隔壁が全て降りてくる前に風の元へと向かえ!!」

「了解です!!」

力強く頷いてから、セシリアは再び全力疾走で管制室を後にして、鈴の元まで急いだ。

「これでなんとか……」

と思ったのもつかの間、事態はまた急変する。

『いやあああああああああああああああああつ!!!!』

『出してえええええええええええつ!!! ここから出して

よおおおおおおつ!!!』

『助けてえええええええええええつ!!! 助けてえええええええええええつ!!!』

えええつ!!!』

スピーカーから、突如として謎の悲鳴が聞こえてきた。

「な……なんだこれはつ!」

「えつと……これは……どうやら中継室からのようです!!」

「中継室だつ!」

「はい! ……そんなつ!」

「今度はなんだ!」

目を見開いた真耶が、冷や汗を掻きながら千冬に信じたくない状況を報告する。

「ちゅ……中継室に……まだ五人程生徒が取り残されています……。しかも、扉は完全にロックされていて……閉じ込められているみたいです……」

「なん……だと……!?」

密室に閉じ込められた生徒達。

唯でさえ精神をガリガリと削るようなシチュエーションだと言うのに、今そんな目に遭えば、最悪の場合はPTSDになりかねない。「しかも……その中の二人が……板垣さんと篠ノ之さんのようです……!」

「なっ……!?」

よりにもよって、閉じ込められたのが色んな意味でこの国の重要人物達の身内達。

間違はなく、状況は最悪と言える。

『お……おい！　なんか奴がこっちを向いているぞ!』

『えっ!?!』

スピーカーから聞こえてくる箒と弥生の声。

それを聞いて千冬と真耶もモニターに注目する。

すると、そこに映し出されたのは……謎のISがその腕に固定された銃口を中継室へと向けている光景だった。

「まさか……!?!」

それを見て全てを理解した千冬は、機材を使ってセシリアに通信を送る。

「オルコット!!　急げ!!!」

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

一方の鈴サイド。

彼女と一夏も、当然のように先程の叫び声を聞いていた。





「弥生いいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい  
!!!!」

箒の慟哭が木霊する中、弥生の体が眩しく光り輝き、その光に中継室の壁を破壊したビームが直撃した……かに思えた。

「く……くああああああ……っ!!!」

光が止み、その中心にいた弥生は、その体に自らの専用機を身に纏ってからビームを辛うじて防いでいた。

「弥生……なのか……?」

その体は、必要最低限の装甲に覆われていて、お世辞にも強そうには見えない。

肘と膝を覆うパーツも、他のISと比べて非常に小さく、背部には何も設置していない。

灰色に染まったその機体は、ISと言うよりは軽装の鎧と言った方が正しいかもしれない。



それ程までに、弥生のISは弱々しい印象を与えているのだが、それを全て払拭する要素が他にあった。

まず、弥生の着ている紺色と黒のISスーツは他の生徒達が多用している物とは違い、額や耳の部分を通過して、そこから下の全ての体を覆い尽くすボディースーツのような構造になっていて、顔以外の肌を全く露出していない。

それに加え、両肩や腰の部分に青白いクリスタルが設置してあって、不思議なアクセントとなっていた。

「頑……張って……！ インパクト……ナツクル……！」

両腕の装甲に追加として装備されている巨大な機械の腕『インパクト・ナツクル』の手を広げて、それを盾のようにしてビームを防御しているが、そのパワーの前に徐々に押され始めていた。

「ひ……ひいいいいいっ!?!」

目の前で起きた非現実的な現象に恐怖し、箒以外の女子達が全員、入り口の方まで尻餅をつきながら後ずさりをした。

ハイパーセンサーでそれを確認した弥生は、心の中で少しだけ安心した。

(これで……少しだけ無茶が出来るようになった……!?)

思い切り歯を食いしばり、本当ならばしたくない命令を自分の愛機に下す。

「インパクト……ナツクル……出力……最大……!!!」

インパクト・ナツクルの各部から煙が吹き出て、その黒い装甲が真っ赤に赤熱する。

それと同時に、弥生が一步步前に踏み出した。

(怖いままでもいい……!?)

ビームの熱量がアーキテクトのSEを少しずつ削っていく。

(臆病なままでもいい……!?)

だが、自分のダメージなんてお構いなしに、弥生は自らの歩みを止めようとしなない。

(それ……でも……!?)

インパクト・ナツクルの手甲部がビームに耐え切れずに融解し始め



「……ぶっ潰す……!!」

鈴の顔が一気に憤怒に染まり、強烈なまでの殺気が体を覆った。急激な鈴の変化を感じ取ったのか、ISはこの場から撤退しようとして宙に浮く。

だが、そんな事を見逃すような彼女ではない。

「どこに行くのよ?」

ISの逃走経路に一瞬で回り込み、そのカメラアイを能面のような表情で見つめる。

「あんなだけの事をしておいて……五体満足でいられるなんて思っただけじゃねえよ!!!」

鈴の怒りの拳がISの顔面に直撃し、地面に勢いよく叩きつけられ、綺麗なクレーターを作り上げた。

「よくも……よくもあたしの大事な人達を殺そうとしたわね!!!」

迷わず追撃し、今度は急降下からの蹴りが炸裂!

「弥生はね……弥生はね……!」

拳と蹴りのラッシュが放たれ、先程まで優勢だった筈の敵機が一気に追い込まれていく。

「ちよつと臆病で……ちよつと人見知りで……でも!!」

いつの間にか鈴の目にも涙が溜まっていて、それが攻撃の度に撒き散らされる。

「誰にでも凄く優しくして!! とても思いやりのある女の子なのよ!!!」

全力のストレートが直撃し、壁に叩きつけられる。

「アンタが何処の何とか、そんなのどうでもいい……!」

体中から火花を散らして起き上がろうとするISだが、ダメージが相当に深刻なのか、思うように動けないでいた。

「あたしは……お前を絶対に許さない……!」

辛うじて右腕を動かしてビームを撃とうとするが、それすらも鈴の背後から発射された青いレーザーによって右腕を撃ち貫かれて不発に終わった。

「私も同じ気持ちですわ……!!」

「セシリア……」

鈴の後ろから飛んできたのは、同じように怒りに満ちたセシリアだった。

その体には既にブルー・ティアーズを纏っていて、いつでも戦闘可能状態になっている。

「弥生さんは……」

右手だけでレーザーライフルを支えて、それをISに向けて発射。

一陣の閃光は真つ直ぐに進んで、満身創痕となったISに無情な一撃をお見舞いする。

「アナタのような無粋な輩が無遠慮に傷つけていいようなお方ではないのです!!!」

レーザーの次はビットを射出し、ISにトドメを刺していく。

複数の細いレーザーがISを蜂の巣にして、身動きすら出来なくなる。

「オラアツ!!!」

セシリアの攻撃が一旦止んだと同時に、鈴は自身の双天牙月をISの肩の関節部に突き刺し、そのまま壁に縫い付けた。

「鈴さん」

「セシリア」

二人は互いに目を見て頷き、衝撃砲とレーザーライフルを最大出力で連続発射した!

「これで!!」

「終わりですわ!!」

二人の攻撃をまともに受けて、あつという間に原型すら留めない程に見るも無残な姿となった。

全てのSEを使い切る直前まで攻撃した結果、敵ISは文字通り、完全完璧に沈黙。

全身から紫電を散らすだけで、もう攻撃は愚か、身動き一つしなくなつた。

「お……おいー!」

「ん？」

全ての怒りを吐き出した二人に後ろから話しかける一夏。  
その顔はかなり焦っているようだった。

「そいつにムカつくのは分かるけど、そこまでする必要はないんじゃないか?!? 中の人が死んじまつたら……」

余りにも場違いな発言に、鈴とセシリアは再び顔を見合わせて大きな溜息を吐いた。

「アンタねえ……。これは無人機よ？」

「はえ？」

「この機体が無人である事は、かなり早い段階で気が付いていましたわ」

「な……。なんで……？」

まさかの答えが返って来て、目が点になる。

「挙動に機体のデザイン。他にも色々あるけど、あたしはそこから辺で分かったわね」

「現在、様々な国で無人で動くISの研究は行われています。恐らく、コレもその研究で生まれた試作機の一機なんでしょう」

「多分、何らかのバグで暴走でもしたんじゃない？ 完全に鉄屑になっちやったから、よく分かんないけど」

「……………」

『あんな事をした直後なのに、なんか冷静すぎやしないか?』と思う一夏だったが、それが代表候補生と言うものである。

因みに、国家代表はもつと凄い。己の姉を見ていればよく分かるであらう。

「それよりも！ 今は弥生の所に急がないと！」

「そうでしたわ！」

二人は機体に残されたごく僅かなSEを使って、急いで弥生と箒達がいる壊れた中継室へと向かった。

「ちよ……。待ってくれ！」

一夏も急いで後を追おうとするが、その直後に白式が強制解除されて、地面に転がってしまう。

「くそ……！ こんな時に限って……！」

だが、往生際の悪さだけには定評のある一夏君は、この程度では諦めない。

彼はすぐに立ち上がり、弥生の元まで全力ダッシュで向かう事にした。

「待っててくれ!! 弥生いいいいいいいいいいいい!!」

誰もいないアリーナを走る一夏の姿は、何とも言えない哀愁を漂わせていた。

## 知らない所で終わった事件

「ん……………」

なにやら人工の灯りが私の瞼を貫通して、直接眼球を刺激する。その感覚で私は重い瞼を開けた。

「……………」

視界の先には清潔そうな天井が見えていて、全身に感じる柔らかかな感触。

私はどうやらベッドに寝ているらしい。

と言う事は、ここは…………

「見た事…………も無い天J」「何を言ってるのよ…………」…………え？」  
起きて一番のボケに誰からかツツコまれてしまった。

誰だと思っただけを動かすと、そこにはいつもの原作キャラ達が勢揃いしていた。

あ、山田先生はいないけどね。

「みん……………」

あれ？　なんで揃いも揃って心配そうにこつちを見るの？

「や…弥Y「やよっちい〜!!」ぬあっ!？」

箒が喋ろうとした瞬間、それを遮って傍にいた本音が私にいきなり抱き着いてきた。

うん。いい匂いがする上にプニプニな二つのお山がたまりません。

え？　自分にも立派なものがついてるじゃないかだって？

それはそれ。これはこれだよ。

「よかった…………よかったよお……………」

「本音……………」

『よかった』は私のセリフでもあるんだけどね。

人込みの中で逸れてからどうなったか、本当に心配していたから。

「弥生…………自分がどうなったのか…………覚えてるか？」

「え……………」

自分がどうなったかかって言われてもな…………。

えくと…………確か…………。

(例の無人機のビームを防ぐために、止む無くアーキテクトを起動させて、それから……)

あ、もしかして私……気絶しちゃった？

「思い出したか？」

「気絶……する前後……が……少し曖昧……だけ……ど……」

「そうか……」

お……おお？　なんか箒が妙に大人しいぞ？

どうした？　何かあったのか？

また一夏に裸でも見られたのか？

「弥生っ!!」

「わぶ……」

今度は箒が本音とは反対側から抱き着いてきたし！

ぬおお……！　彼女の日本人離れた二つのメロンが私に当たっ

ててて……！

「ありがとう……本当にありがとう……！　弥生は間違いなく私の

……私達の命の恩人だ……！」

命の恩人……ね。

まさか、この私がそんな風に言われる日が来るなんて……。

って言うか、私って今は制服を着た状態でベッドに寝てるから、こ

んな風に抱き着かれると制服が皺になるんですよね？

ちよつと、分かってます？

「怪我……は……無い……？」

「私よりも自分の事を心配しろ！　あれから大変だったんだぞ！」

た……大変とな？

一体、私が気を失ってから何があったって言うのさ？

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・



弥生が敵のチーム攻撃を身を挺して防いでくれた後、鈴とセシリアが二人がかりで敵機を撃破してくれた。

その直後だった。私達がいた中継室に救助がやって来たのは。

「弥生!!」

「弥生ちゃん!! 皆!! 大丈夫!?!」

固く閉ざされた扉を破壊してやって来たのは、ISスーツを着た簪と、似たような容姿の上級生、それからリヴァイヴを纏った複数の先生達だった。

後で聞いたのだが、彼女は簪の姉であり、この学園の生徒会長でもあるらしい。

その生徒会長が、自らの専用機で扉をこじ開けるようにして救出に駆け付けてくれたんだ。

「か…簪!! 弥生が…弥生が!!」

「分かったから、まずは落ち着いて」

「ひつく…ひつく…」

柄にもなく泣いてしまった私の事を宥めてくれた簪は、弥生の容体を会長と一緒に見てくれた。

「体に熱が籠ってるけど…」

「見た限りでは、これと言った外傷は無いみたいね…よかったわ」

二人が言うには、弥生は単純に精神と体力の限界が来たから気絶してしまっただけであって、命に別状はない…らしい。

詳しくはちゃんと調べてみないと分からないが。

「弥生…頑張ったね…」

簪も今にも泣きそうな顔で弥生の頭を優しく撫でていた。

本当は自分も私みたいに泣きたいだろうに、きつと我慢していたんだろうな…。

私ももつと精進しなくては…。

それからすぐに鈴とセシリアも駆け付けてくれて、皆の手で弥生を保健室まで運んだんだ。

それと、私達の他にいた生徒達は、先生達にちゃんと保護されていた。

かなり精神が疲弊していたようだったが、彼女達は大丈夫だろうか……。

・  
・  
・  
・  
・  
・

「そう……だったん……だ……」

なんか、思った以上に皆に助けられたんだな……。

なんと言いますか……感謝の言葉しか出ないな……。

「その……会長……さん……は……」

「お姉ちゃんなら、まだやる事があるからって、先に行っちゃった」

「そう……」

図らずも、私は更識楯無に助けられた。

出来ればこの場でお礼を言いたかったけど、本人がいないんじゃないや仕方が無い。

いつか機会を作って、直接生徒会室まで足を運んで礼を言うしかないな。

おじいちゃんの子供として、礼節を重んじるのは当然の事だ。

幾らヘタレとは言え、感謝の気持ちすら忘れるような外道には成り下がりたくない。

「本当に……弥生が無事でよかったわ……」

「そうですわね……。目の前で気絶している弥生さんを見た時は肝を冷やしましたわ」

「ここら。仮にもお嬢様が『肝』なんて言うもんじゃないぞ？」

「どころで……」

「な……に……？」

なにやら、皆の視線が私の腕輪……アーキテクトの待機形態に集まっているような……。

「弥生も専用機を持っていたのね。驚いたわ」

「ええ。あの時はISを展開しておらず、遠目でしたのでよくは分かりませんでしたけど……どこかで見た事があるような気がしましたわ……」

セシリアの見解は間違っていない。

私の専用機『アーキテクト』は、ISに詳しく携わっている人間ならば、誰もが必ず一度は目にする筈だから。

「あ………板垣」

「先……生……」

「ここで我らが担任様のご登場です。

後ろから悠然と現れましたよ。

「一応……な。……この教師として、お前が専用機を所持している以上は、お前の機体を調べなければいけないのだが……問題無いか？」  
確かに。

スペック不明のISとか普通に学園側も容認しにくいだろう。

「分か……りまし……た……」

私は自分の腕から腕輪を外すと、織斑先生へと手渡した。

「済まん。それと……」

ほわ……。

またこの人に頭を撫でられたよ……。

これで通算何回目だ？

「教師としてはあまり無茶をするなど言いたいが、ここは敢えて一人の人間として言わせて貰おう」

な……何をでっしやるか？

「本当によく頑張ったな……弥生。お前の勇気によって助かった命がある。弥生のような生徒を教え子に持てた事を、私は心から誇りに思うよ」

な……名前と呼ばれたですとおっ!?

あ…あれ？ 私……なにかこの人の好感度を上げるような事をしましたか!?

全っ然見当もつかないんですけどっ!?

「凰とオルコットもよくやった。まさか、教師部隊が到着する前に倒すとは予想もしなかったぞ。流石は代表候補生だな」

「い…いえ…。私は当然の義務を果たしただけですわ…。」

セシリアは照れくさそうに髪を弄っていて、鈴は…。

「ち…千冬さんに褒められた…? 明日は雪かしら…。」

「それはどういう意味だ? そうか。今からグラウンド100周した  
いのか。それは感心感心」

「すいませんでした!!!」

はい。速攻土下座。

鈴には『口は災いの元』と言う言葉を贈ろう。

「では、私はこれで失礼する。お前達も、あまり長居せずに早く戻れよ」

「あの…私…は…。」

「板垣は念の為、今日一晩はここで寝た方がいい。保健の佐藤先生も  
そう言っていた」

「分かり…まし…た…。」

保健室でのお泊り。

なんだかワクワクしますね。

私、結構ホラー物とかって好きですよ?

「そういや、さつきからずっと一夏が一番後ろで黙りこくっているけど、大丈夫なのか?」

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

千冬が保健室を後にする直前、去り際に一夏がそつと彼女に話しかけていた。

「千冬姉……」

「……なんだ」

いつもならば『先生と呼べ』と指摘するが、一夏の様子がおかしいため、敢えて何も言わないでいた。

「俺……弱いのかな？ 調子に乗ってたのかな……？」

「……」

心の中で密かに溜息を吐く。

やつとその事に気が付いたのか……と。

姉として、一人の教師として、ここはハッキリと言う事にした。

「そうだな。お前は弱い。恐らく、この学園で最弱と言っても過言じゃない」

「最弱って……」

「少なくとも、お前よりも布仏のほうが強いぞ」

「マジかよ……」

まさか、いつも『のほほん』としている本音よりも弱いと知って、愕然とする。

「板垣は言わずもがなだな。私もまだ完璧に把握しているわけではないが、それでも専用機を所持し、今日のあの局面での動きを見れば、あの程度の腕前は分かる」

「そうか……」

流石はブリュンヒルデ。

一度は世界の頂点に君臨したのは伊達ではないようだ。

「俺……何も出来なかった……。倒れた弥生の元に駆け付ける事すら……」

「……」

「……は黙って聞く事に。」

「それで？ お前はどうしたいんだ？」

「俺は……」

ここで初めて、一夏の中に『迷い』が生じた。

いつもは二言目には『守る』と言う筈の彼が。

「分かんなくなっちゃった……。誰かを守るような人間になりたい  
と思っただのは本当だけど、それだけでいいのかなって……」

「ふう……」

ようやく『迷う』事を覚えた弟に対し、姉は一言だけ告げた。

「ならば、思う存分迷う事だな。強さへの道に正解のルートなんても  
のは無いし、強さへの答えもまた一つではない。私だって、昔は散々  
迷いに迷った」

「千冬姉も……?」

「だから」

軽くポン…と出席簿で頭を叩いて、保健室の扉を開ける。

「お前はこれから沢山迷え。迷った分だけ大人になれる。それが青春  
と言うものだ、一夏」

自分の頭を触りながら、一夏は去り行く姉の背中を見ていた。

「迷った分だけ大人になれる……か」

織斑一夏、成長の時。

ここから彼は変わっていく……のかもしれない。

・

・

・

・

・

千冬が保健室から出ると、そこに待ち構えていたように白衣を着た  
黒髪の女性が立っていた。

彼女こそが、先程の話にも出てきた保健教員の佐藤である。

「千冬。ちよつと時間ある?」

「今からか？」

「うん」

かなり真剣な顔をしている彼女を見て、ただ事ではないと察した千冬は、携帯で真耶に少し遅れる旨を伝えた。

「大丈夫だ」

「じゃあ、こっちにきて」

そう言っつて、千冬を先導するようにその場を移動する。

「ここでは出来ない話か？」

「まあね。これはあの子の担任である千冬にしか話せない」

「私にしか……？」

佐藤が言う『あの子』が弥生の事を指しているのは分かったが、それが何故自分にしか話せないのかが分からなかった。

彼女について行った先は、普段は生徒や客人と内密な話をする際に使用する『面談室』だった。

佐藤は密かに持っていた面談室の鍵を使って扉を開けて、千冬と一緒に中へと入った。

供えられたテーブルに向かう合うように座り、白衣のポケットからある物を取り出してテーブルの上に置いた。

「説明するよりも、まずはこれを見て」

「これ……は……」

テーブルの上に置かれたのは、一枚の写真。

そこに写されていたのは、無数の傷跡に晒された少女の腕。

「これは……あの板垣弥生ちゃんの腕よ」

「……………っ!!」

見せられた瞬間に少しだけ予想していた事。

しかし、面と向かって言われると、千冬と言えども動揺は隠しきれない。

「腕だけじゃない。こんな傷跡が体中に無数に存在しているの。それこそ、顔の下から爪先まで……ね」

「そんな……」

普段から弥生が肌を決して出そうとしない理由が、ここでようやく

判明した。

「この体にある無残なまでの傷跡を隠す為だったのだ。」

「しかもね、これだけじゃないのよ……」

次の写真を出そうとポケットの中を探る。

「彼女には悪いとは思うけど、私も保健室を任されている以上は、ちゃんとした精密検査ぐらいはしなくちゃいけないし、何かあった時はこうして資料として写真等を残しておかないといけない……つと、あった」

二枚取り出したが、まずはその内の一枚を千冬に見せた。

「彼女の爪……全部剥がされてた。手だけじゃない、足の爪も……」

「くっ……！」

見たくも無い現実。

だが、弥生の担任教師である以上、ここで目を逸らす訳にはいかない。

「これね、自然に剥がれたような感じじゃなかった。明らかに誰かによつて無理矢理剥がされた痕よ」

「なんて惨いことを……！」

顔も知らない何者かに、激しい怒りを覚える千冬。

その拳が強く握られて赤く滲む。

「けどね、一番酷いのは……これ」

佐藤自身も本当に辛そうにしながら、もう一枚の写真を見せる。

それを見た途端、千冬は思わず手で口を覆った。

「彼女の顔……左半分が酷い火傷を負っていたわ。髪や包帯で隠していたけど」

「なんでだ……なんでなんだ……！」

「それはこっちが聞きたいわよ。……この火傷によつて板垣さんの左目ね……完全に機能を失っているの」

「失明している……のか……」

「そうなるわね。まだ右目があるから生活には支障は無いんでしょうけど」

「ここに来て知られてしまった弥生の体の真実。」



千冬は、これまで全く知ろうともしなかつた自分を心の中で激しく責めた。

（私は……私は何をやっていたんだ……！ アイツがこんな傷を背負っているなんて……全然知らなくて……！ 担任失格じゃないか……！）

悔しさと悲しきで思わず涙が零れそうになる。

「ねえ……あの子って本当に何者なの？ 体の傷と言い、顔の火傷と言い、明らかに普通じゃない。どう考えても、現代日本の女子高生が負うような傷じゃないのだけど？」

「……………」

その問いには答えられない。

正確には、その答えを千冬は持ち合わせていないのだ。

「その様子じゃ、アンタも知らないのね……」

「済まん……」

「別に責めてるわけじゃないわよ。でも、一度ちゃんと調べた方がいいと思う。これは……放置しておくには余りにも問題が大きすぎる」「分かっているさ……」

ゆっくりと立ち上がりながら、千冬は面談室から出ようとする。

「悪いが……そろそろ行かせて貰う」

「そう……。引き止めて悪かつたわね」

「いや……。いずれは必ず向き合わなければいけない問題だ。いい機会だったよ……」

暗い空気を漂わせる千冬の背中を見て哀れに感じた佐藤は、諭すように話しかけた。

「別に千冬が責任を負う必要は無いんだからね。勿論、板垣さんも悪くない。こんな傷、誰だって隠そうと思うわよ」

「そうだな……」

「一番悪いのは、彼女をこんな目に遭わせた腐れ外道。どんな奴かは知らないけど、そいつは紛れも無く最低最悪の人間ね……」

佐藤も辛いのだ。

なにせ、この傷跡を実際に目の前で目撃してしまったのだから。

医学を志す者として、決して見逃してはいけない事例だった。

「板垣さんのこの傷はかなり古いもので、いくつかは治療する事も可能だけど、全部は……」

「そうか……」

言われなくても分かっていた。

あの顔の火傷など、素人目で見ても普通に治る事は無いと理解出来る。

「教えてくれて感謝する……。板垣の事……頼んだ」

「任されたわ。あの部屋にいる以上は私がちゃんと面倒を見るから」

「ああ……」

ガチャ……と扉が閉まって、室内には佐藤一人だけ。

「……彼女って無駄に責任感が強いから、変に気負ったりしなけりやいいんだけど……」

時期尚早だったかもしれない……と、全てを話してから密かに後悔する佐藤だった。

「これ……轡木さんにも報告すべき……よね？ はあ……また同じ事を話さなきゃいけないと思うと、気が重いわ……」

思わず胸ポケットから煙草を取り出して火をつける。

煙草の煙が天井まで昇って、すぐに霧散した。

また私の出番が無い!?

弥生達が保健室でワイワイしている頃。

生徒会室では楯無と虚が様々な事後処理に追われていた。

「よかったのですか？ 簪様と一緒にいなくて」

「……私の方がまだ心の準備が出来てないから。それに……」

「それに？ なんですか？」

「弥生ちゃんが休んでいる所にこれ以上人間がいたら、彼女だって休むに休めないでしょう？」

「お嬢様にもそんな気遣いが出来たのですね……」

「それどういう意味っ!？」

「そのままの意味ですが？」

(前に簪ちゃんが言ってた事って……もしかして本当に……?)

自分に対する周囲の評価が妙に気になってしまいう楯無だった。

「……今日の子達は本当にお手柄だったわ」

「そうですね。流石は代表候補生と言うべきでしょうか」

「それもだけど……」

「弥生さんの事……ですね？」

楯無は無言で頷き、パソコンを操作する指を速める。

「自分の身を挺して他者を守る……。こんな事、普通はやりたくても出来ないわよ……」

「いくら自分が専用機を所持しているからと言って、それでも危険な事には変わりないですからね……」

「弥生ちゃんは文字通り『人命』を救った。これは紛れもない善行よ。場合が場合なら感謝状とか勲章が貰えたかも」

「本人は自覚していないかもしれないかもしれませんが」

「かもね。本音ちゃんから話を聞く限りじゃ、自分の事には本当に無頓着みたいだし」

少し苦笑いを浮かべて、小休止の為に手を止めて体を伸ばす。

「……なんであそこまで優しい子に、あれ程の非道な事が出来るのかしらね……」

「狂人のやる事なんて、私達のような人間には到底理解できませんよ」  
「そうね……」

紅茶を飲みながら心をリラックスさせて、指をポキポキと鳴らす。  
「さて……と。弥生ちゃん達の頑張りに報いる為にも……」

「今は私達が頑張りましょう。そして……」

「必ずや弥生ちゃん達の傷の事を判明させてみせるわ」

「前当主様にもご協力を頼んだと聞きましたか？」

「一応ね……。私の権限だけじゃ可能な事はどうしても限定されちゃうから……。お父さんの事だから、来月初頭辺りに調査結果は出ると思うけど……」

「それに甘んじることなく、我々は我々で調べられることを調べましょう」

「当然！　それが……私が今、弥生ちゃんに出来る唯一の事だから……」

その日、夜遅くまで生徒会室の灯りは消える事は無かったと言う。

・  
・  
・  
・  
・  
・

バンツ！　と言う音と共に、理事長室の扉が開かれた。

「来ましたか……」

轡木十蔵。

普段は学園の用務員を装っている老人の男性だが、その正体はIS学園の頂点に君臨する理事長その人である。

彼は覚悟を決めた顔で机に座って佇んでいた。

「十ちゃん!!　弥生が倒れたとはどういう事じゃ!!!」

必死の形相で入室してきたのは、白髪をオールバックにして黒縁の眼鏡を掛けたスーツ姿をした初老の男性。

「すまない……平ちゃん……」

「謝罪はいい！ どういう事が説明してくれ!!」

「分かった……」

十蔵は心から申し訳なきそうにしながら、事の経緯を詳細に説明した。

「謎のISがいきなりやって来て、それから他の生徒を護る為に弥生が……」

「ああ……。我々大人がついていながら……本当に不甲斐ないと思っ  
ているよ……」

「いや……。それを言うなら、大事な義娘の危機に対し、真っ先に駆け  
付けられなかった私も同罪じゃ……」

メガネの男性は落ち込みながら備え付けのソファに座った。

「だが……彼女には本当に感謝しているんだよ。あの子がいなかった  
ら、間違いなくあの場にいた生徒は死んでいた……」

「そうじゃな……」

入室当初とは違い、今は少しだけ嬉しそうにしている男性。

その顔は僅かではあるが笑っていた。

「それにしても、あの弥生が自分から誰かを守るために行動するとは  
な……」

「そんなに珍しいことなのかい？」

「そうじゃな……。弥生は基本的に他人と余り関わろうとはしない。

小学校、中学校でも基本的には一人でいる事が多かったようじゃ」

「そうなのか……。私が聞いた話では、彼女は多くの友達と一緒に過  
ごしているらしいが……」

「弥生に友達が……?」

これまでの弥生の事を知っている身としては到底信じられず、思わ  
ず目頭が熱くなる。

「矢張り……弥生をIS学園に入学させたことは間違いじゃなかった  
のかもしれない……」

「それを言って貰えると、私もこれまで頑張った甲斐があると言うものだよ」

彼に釣られるように、十歳もニコニコ顔になる。

二人の老人が笑いあうと言う、なんとも言えない光景ではあるが、不思議と変な感じはしない。

「あの専用機は平ちゃんが用意を？」

「一応はな。私にも独自の伝手があるからのう。勿論、弥生に手渡す前に私の手で細かい調整や改造は施しておいたがの」

「だと思った」

全てを納得したように頷き、背もたれに体を預ける。

やっと安心できたといった顔だ。

「彼女なら今は保健室にいる筈だが、顔でも見て行くかい？」

「いや……今はやめておこう。下手に会ってホームシックにでもなったら大変じゃし、弥生の療養の邪魔はしなくはない」

「そうか……」

「さて……と。そろそろ私はお暇させて貰うとするかの。いきなり押しかけて済まなかったな」

「いや……平ちゃんの行動は当たり前だよ。寧ろ、来なかったらこっちから直接国会まで謝罪をしに行くつもりだったぐらいだ」

「相変わらず、妙な所で律儀じゃの」

「それはお互い様じゃないのか？」

「確かに」

はっはっはっ……と笑い声が理事長室に木霊した。

彼らの友情は、幾つになっても不動のものらしい。

ある意味で、最も理想的な関係かもしれない。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

屋上。

真つ赤な夕焼けが水平線に沈もうとしている景色を見ながら、一夏と鈴は向かい合っていた。

「で？ こんな場所まで呼び出して何の用？ わたしもクタクタだから、部屋に戻って休みたいんだけど」

「そんなに時間は取らせない」

「そ。ならいいけど」

鈴の態度はともそつけない。

嫌っているわけではないが、かと言って好意的とも言い難い。

「俺……さ。ついさつき思い出したんだ。前にした鈴との約束ってヤツ」

「今更？」

「ああ……今更だ」

約束を思い出してしまったからこそ、一夏は先程以上に落ち込んでいた。

自分がした事がどれだけ酷い事なのか理解してしまったから。

『あたしの料理が上達したら、毎日酢豚を食べてくれる？』……だったよな？」

「アンタにしては上出来じゃない。正解よ」

「そっか……」

思い出したと言っておきながら、自分の記憶力にいまいち自信が無かったのか、正解だと聞いて心からホッとしていた。

「でもさ……これってどういう意味なんだ？ 毎日酢豚って……」

「はあ……。んな事だと思っただわよ」

「え？」

この男は……。

約束を思い出しても、その意味を正しく理解していなければ全く意味が無い。

やっぱり、朴念仁はどこまで行っても朴念仁なのだった。

保健室でのやり取りを考えると、三歩進んで二歩下がる……と言った感じか。

「もういいわよ。ぶっちゃけ、約束の事とか意味とか、マジでどうでもいいから」

「そ…そうなのか？」

「そうよ」

あれだけ怒られたのに、想像以上に鈴のサツパリした態度に、一夏の方が逆に驚いてしまった。

「それよりも、一夏に聞きたい事があつたのよね」

「なんだ？」

「アンタさ…弥生の事をどんな風に思ってるの？」

「や…弥生の事?!？」

弥生の名前が出た途端、一夏の顔が夕日のように真っ赤に染まる。

「ああく…やっぱいいわ。その顔見ただけで分かったから」

「え…えええ？」

「自覚ないの？」

「はあ…？」

どうやら、この朴念仁は自分の気持ちにすら鈍感なようだ。

彼が恋愛をする日は本当に来るのだろうか？

「言つとくけど…あたし、負けないから」

「お…おう？」

この宣戦布告をどんな形で受け取ったのか。

それは彼だけが知っている。

この日から、一夏と鈴は昔のような友人関係から、別の意味で一歩進んだ『好敵手』<sup>ライバル</sup>関係にランクアップした。

それは、別の少女達にも言える事なのだが、一夏はその事を全く自覚していないだろう。

ライバルは、彼が思っている以上に多い。

・・・



・  
・  
・

IS学園の地下50メートルに存在する空間。

そこはレベル4の権限を持つ者しか入室を許可されない、特別な場所だった。

千冬はそこに暗い表情のまま入ってきた。

「織斑先生ですか？」

「遅くなつて悪かつたな……」

「い……いえ……大丈夫ですよ？」

普段は凜としている千冬が落ち込んでいるのを見て、途端に焦りを見せる真耶。

「い……板垣さんはどうでした？」

「元氣そうにしていたよ。少なくとも、『今回のこと』でこれと言った外傷は無かつたみたいだ」

「それはよかつたです……。私も本当はお見舞いに行きたかつたんですけど……」

「後で様子ぐらい見てきてもいいだろう。それよりも……」

「はい」

仕事の顔になった二人の教師は、目の前の台に鎮座している残骸と化したISに視線を向ける。

「凰さんやオルコットさんの見解通り、これは無人機で間違いないです」

「矢張りか……」

千冬も、無人機の動きを見た時点である程度の予想はしていたが、こうして改めて解析結果として見せられると、不思議と納得してしまう。

「二人の攻撃によって機能の中枢が完全に破壊されていますから、修復などは不可能だと思います」

「コアの方は？」

「未登録のコアでした。念の為にコアナンバーから調べてみたんですけど……」

「いや。未知のコアだと分ければ、それでいい」

未登録のISコア。

その存在が、千冬にある人物の顔を思い出させていた。

「……真耶」

「なんですか？」

「後で時間があれば、佐藤先生の所に行ってくれないか？」

「佐藤先生？」

「……副担任として、お前も知っておくべきだと思ってな……」

「はあ……」

こんな事を言っているが、実際は真耶にも自分と同じ物を背負ってほしいと思っているのかもしれない。

彼女が知ってしまった真実は、一人で抱えるには余りにも重すぎるものだったから……。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

某所にあるとある施設。

一人の女性が顔からバイザーのような物を取って、シミュレーターのような機材から出てきた。

黒く長い髪と目元に装着している不気味な目が描かれたバイザーが特徴的な美女だった。

スタイルが非常によく、大人の女性と言った雰囲気だ。

「ご苦勞様でした。姉さま」

「……………」

それを出迎えたのは、白髪ショートヘアの褐色肌の少女で、彼女は逆に控えめなスタイルで、少し幼さが残っている。

「……………」

「そうですか。いくら不完全な遠隔操作をしていたとは言え、姉さまが遅れを取るなんて……。代表候補生と言う存在を甘く見ていたかもしれません。各国の候補生と代表の評価を上方修正しておきましょう」

『姉』と呼ばれた黒髪の美女は一言も喋っていないが、それでも意思の疎通は出来るようで、普通に会話が成立していた。

「……………」

「はい。それに関しては問題無いかと。我々の技術によって精密に複製しましたから、こちらの仕業とバレる可能性は限りなく低いでしょう。その代わり、あの『天災兎』が全ての罪を被ってくださいすよ。なにせ、あの『ゴレム』のオリジナルは彼女の作品ですから」

手に持っていたドリリンクを手渡し、美女はそれを無言で飲む。

「上の命令とは言え、こんな下らない事をさせられるなんて……。いくら私達姉妹が『彼女達』の後釜とは言え、雑事にかまけている暇は無いのに……」

「……………」

「分かっています。この騒ぎを聞きつけて『姉さま』もこちらに気が付いて動いてくれればいいですね」

手に持ったタブレットを操作しながら椅子に座り、その灯りで顔が照らされる。

「あの時、姉さまの攻撃を防いだ少女……。彼女は一体……」

そう呟く彼女のタブレットには、アーキテクトを装備した状態でビームを必死に防いでいる弥生が映し出されている。

誰も知らない場所で、闇の胎動はとつくの昔に産声を上げていた。

・  
・  
・  
・  
・  
・

「かくして、漆黒の破壊者は勇気ある少女達によって倒され、学園には再び平和が戻った……と言ったところですか」

目の前の食事を食べ終えた、とある金髪の美女が口元を拭きながら静かに呟いた。

「それ……なんスか？ 詩かなにかですか？」

「そんな所です。私は吟遊詩人ですから」

自分の所持品である豎琴を見せながら、傍にいる赤い髪の少年に微笑んだ。

「つーか、マジでいたんですね……吟遊詩人って。てつきりゲームや漫画の中だけの存在だと思ってたよ」

「そうでもないですよ？ 日本にはいないでしょうが、北欧などに行けば意外というものです」

「マジっスか……」

感心するように頷きながら、食べ終えた皿を片付け始める。

「そーいや、お姉さんも外国の人ですよね？ 日本には観光か何かで来たんですか？」

「観光……と言うよりは、妹達に会いに来た……んですかね」

「妹さんスか……。ここら辺に住んでるんですか？」

「いえ。正確には『会えるかもしれない』と言った方が正しいんです」

「……詳しくは聞かない方がいいみたいですね」

「すみません」

「いえいえ！ お客さんのプライベートに踏む込むような事をした俺こそすんませんでした」

「お気になさらず。私は別に気にしてませんから」

にっこりと微笑んだ彼女の笑顔に、少年は思わず照れてしまう。

「それでは、お会計をお願いしましょうか」

「はい。んじやこっちに……」

少年の後ろを着いていき、会計を済ませる女性。

笑顔をやささぬまま、優美に店を後にした。

「ありがとうございます！」

少年の定型文を聞きながら、彼女はふと後ろを振り返って店の看板を見る。

「五反田食堂……ですか。また機会があれば訪れたいですね」

去り行く女性の姿は、まるで女神のように美しく、道行く人々を全て魅了し尽くしていた。

「IS学園……か。少しマークしておいた方がいいかもしれませんね……」

## 久々の帰省

6月初頭の日曜日。

私、板垣弥生は久方振りに実家へと帰省していた。学園を出る際に一悶着あつたけど、それは一先ず横に置く。

(たった数か月の事なのに、随分と懐かしく感じるんだな……)

門の前で家……と言うよりも屋敷と言った方が正しい目の前の建築物を見上げる。

私の住んでいる家である『板垣家』は、非常に大きい屋敷と同じ位大きな敷地を持っている。

簡単に言うと、敷地だけで東京ドーム丸々一個分ぐらい。

屋敷はそれを少しだけ縮小したぐらいの広さがある。

この屋敷は4階建て(地下一階と上に三階)の和風建築で、家の殆どの場所に木材が使われているのが特徴。

畳の部屋も結構多くて、私はかなり気に入っている。

私の部屋はフローリングだけど。

他にも色々で紹介したいけど、それは入ってからする事にしよう。「え……つと……」

門の柱の所にある特殊な機器に自分の手を翳す。

すると、そこから近赤外線が放射されて、私の静脈を検知、これで門が開く仕組みになっている。

因みに、この機械に登録されているのは、私とおじいちゃんを除けば、他にはおじいちゃん-knowの知り合いの人が少数だけ。

それ以外の人間では門を開く事すら叶わない。

もしも無理矢理にでもここを乗り越えようとしてもすれば、次の瞬間には超強力レーザーにて灰になる。

実際に被害に遭った人間は一人もいないけど。

門をくぐって石畳の上を歩いて行くと、屋敷の玄関が見えてきた。

大きな木製の扉で、これを見ると帰ってきたんだな〜って実感する。

「ただい……ま……」

扉を開けて玄関をくぐると、私の大好きな木の匂いが鼻孔を擦る。これだよ！ これ！ これこそ我が家の匂い！

「ワンワン！」

「あ……」

私が靴を脱いで上がったのと同時に、奥から一匹の雌の柴犬が走ってきて私の目の前で座った。

「ただ……いま……外務……大……臣……」

「ワン！」

このワンコこそが、おじいちゃんの愛犬にして我が家の数あるペットの筆頭格である『外務大臣』だ。

名前こそアレだが、つぶらな瞳とふわふわの尻尾がたまらないんだよね♡

私が外務大臣の頭を撫でていると、スマホにおじいちゃんからメールが来た。

「すまん！ 本当は私も家に帰ろうと思っていたんじやが、急な仕事が入ってしまった！ 本当にすまん！ この埋め合わせは必ずする！ 必ずじゃ!!」

まあ……仕方が無いよね。

なんせ、おじいちゃんはこの国で一番忙しい人だから。

【気にしないで。それよりも、お仕事頑張つてね】

これでいいだろう。

家に入った時におじいちゃんの出迎えが無い時点で、なんとなく予想はしてたけど。

（他の皆の事も見なくなつたな……）

ここには外務大臣以外にも、複数のペットがいて、それら全てがおじいちゃんの大事にしている存在だ。

でも、おじいちゃんも私もない時、おじいちゃんの知り合いの人達がこの子達の世話をしてくれるから、その点に関しては問題無い。

外務大臣と一緒に自分の部屋（二階の一番端）まで行って、荷物置いてから私服へと着替えて、念の為に携帯と財布をポケットに入れてから部屋を出る。

そして、そのままこの家に一緒に住んでいる大事な『家族』達の顔を見に行くことに。

まずは、縁側でポカポカと日向ぼっこをしていた猫の『財務大臣』。アメリカンショートヘアの雄で、おじいちゃんと同じくらい私に懐いてくれている。

私も猫好きだから、この子を見ているだけで心が癒されていく。

「ただ…いま……」

「ニャ〜オ」

一回だけ鳴いて、私の足にすり寄って来た。

ああ〜…可愛いなあ〜…♡

「おい……で」

「にやう」

私の腕までジャンプしてきた財務大臣を腕に抱きながら、次の場所に移動開始。

お次に来たのは、屋敷の端の方にある大きな部屋で、そこには多くの設備と一緒に非常に大きな水槽が設置してある。

その水槽の中にいるのが、なんでかおじいちゃんがこの家で飼っているマグロの『農林水産大臣』

一体何処でこの子を手に入れたのか、冗談抜きで謎。

最初見た時は、余りの迫力におしっこちびりそうになったっけ。

今では大事な家族になってるけど。

「帰ってきた……よ……」

おう……。こつちに向かって口をパクパクしてますよ。

餌が欲しいのかな？

「うんしょ……つと」

備え付けのバケツを持ちながら脚立を昇って、農林水産大臣の餌であるお魚（名前は知らない）を一匹ずつ投げ入れた。

彼がすぐに魚に反応し、あつという間に食べてしまった。

「また後……で……ね……」

彼に手を振って、最後の一匹の所に行こうか。

財務大臣、いつも思うけど、ジツと農林水産大臣の事を見るのは止



めなさい。

あの子、地味に怖がつてるよ？

今度は裏口にあるサンダルを履いて、そこから屋敷の裏にある少し開けた牧場のような場所に行く。

そこに、おじいちゃんの愛馬である雄のサラブレッドの『文部大臣』がいる。

休みの日とかは、よく文部大臣の背に乗って乗馬を楽しんでいる。

因みに、私も少しだけなら乗馬できますよ？

おじいちゃんに習ったからね！

外務大臣と財務大臣を柵の外で待たせて、私だけが柵の中に入り、のんびりと過ごしている文部大臣の傍まで近寄る。

「帰った……よ……文部……大……臣……」

私が来た途端、彼は僅かに頭を低くして、私に合わせてくれた。

「ん……」

彼の頭を撫でると、サラサラの体毛が気持ちいい。

夏休みとかになったら、また彼に乗ってみるのもいいかもな……。

その後、いくつかニンジンを食べさせて、そこを後にした。

屋敷に戻った私は、中庭にて外務大臣と財務大臣にも食事を与えて、その様子を静かに縁側から眺めていた。

「美味……しい……っ？」

「ワンツッ！」

「ニャ〜ウ」

返事してくれたし。

まさか、人の言葉が分かる……わけないか。

（私もお腹空いたな……）

外務大臣の散歩がてら、私も外に食べに行こうかな……。

広い屋敷で一人で食事つてのも、なんだか味気ないし。

それに、前々から行ってみたい場所もあったし。

（……そうしよう。外務大臣のリードってどこにあったっけ……）

この子達の食事が終わり次第、私も出かける準備をして、外務大臣と一緒に少し早い昼食に向かう事にした。

・  
・  
・  
・  
・  
・

「はあく……」

「人の家に来るなり、溜息ばかり吐いてんじやねえよ」

「はあく……」

「だめだこりゃ」

俺、織斑一夏は現在、休みの日を利用して中学からの親友である『五反田弾』の家まで遊びに来ていた。

あの無人機事件から色々とおつたが、なんとか事態は収束した。

事件自体は学園側から箝口令が敷かれて、表向きは何も無かったことにされた。

それで全て解決……とは流石にいかなくて、新入生の内の十数人が自主退学をしてしまった。

幸いな事に、俺が所属する一組からは一人もいなかったが、鈴のいる二組や更識さんがいる四組は数人、三組に至っては十人近くが辞めたらしい。

それを聞いて、俺は改めて、あの事件がどれだけ大変なものだったのか実感した。

気晴らしにと思って、こうして弾の家まで来たが、やっぱり色々と考えてしまう。

「そーいやメールでも言ってたけどよ、鈴も転校してきたんだって？

どうよ？」

「どうって言われてもな……」

なんて言えはいいのか迷うな……。

変わってないと言えば変わってないし、変わってる所も多々あるし……。

「お前……また何かやらかしたな？」

「またって何だよ、またって」

「自覚ねえのかよ……」

なんなんだよ、勿体ぶった言い方しやがって……。

「にしても、お前の溜息って、まるで恋煩いみたいだな」

「……!!」

こ……恋煩い……。

なんで、その言葉を聞いた途端に弥生の顔が思い浮かんだんだ……？

「………凶星かよ。適当に言ったのに……」

「凶星って言うか………なんか気になる女の子ならいる………かも」

「マジでっ!!? ど……どんな子だ!!? 写真とかあるのか!?!」

「一応、携帯になら……」

俺は密かに携帯で撮影した弥生の写真(本人未許可)を弾に見せた。

「え………?」

………なんでそこで黙る?

「おいおいおいおいおい! これ………マジで言ってるのか!?!」

「いや………何が?」

「だって………この子………」

「弥生の事を知ってるのか?」

弥生と弾に何か接点があるのか?

………なんか面白くねえな。

「お前覚えてないか? 俺等が中学の時に、隣町にある学校にクールビューティーな超絶美少女がいるって噂!」

「そんなのあつたか?」

全然知らないぞ?

「………お前は昔から、その手の話には無関心だったもんな………」  
「うっせ」

余計なお世話じゃ。

「まあ……簡単に説明するとだな。隣町に超セレブな子しか通えない超お嬢様学校、名前は確か……『聖<sup>セント</sup>マリアンヌ学園』……だったかな？  
があつて、そこに……」

「弥生が通ってたつて？」

「そうなんだよ！」

「こら、こつち指差すな。」

聖マリアンヌつて……昔のアツチ系の漫画に出てきそうな学校名だな……。

そんな場所に弥生は通ってたのか……。

「あれ？」

そうになると、弥生つて実は超がつくほどのお嬢様？ マジで？

(俺……とんでもない子に勉強を教わってたのかも……)

お……俺……何か失礼な事をしてないよな……つて、思いつきりしてるじゃん！

裸を見たり、押し倒したり！

(あはは……オワタ)

弥生が優しくなかったら、今頃どうなっていたんだろう……。

「前に俺も噂を確かめる為に、数馬と一緒にそこまで行つたし」

「お前等……」

呆れるつつか……暇人だなく……弾も数馬も。

因みに、数馬つてのは、もう一人の俺の男友達である『御手洗数馬』の事だ。

「いや……ぶつちやけ、一目見ただけでスゲーつて思っちゃったね。スタイルは抜群だし、顔も申し分なし。クールな表情がまたよくて……」

中学時代の弥生か……俺も見てみたいな。

俺も誘つてくれればよかったのに。

「しかも、かなりのエリート校であるにも関わらず、成績は常にトップクラスで、裏でかなりの人気があつたみたいだぞ」

それはなんとなく分かる。

弥生の成績は今でもトップクラスだし、箒達を筆頭にかんりの人気

がある。

噂では『弥生ちゃんを愛で隊』なる存在があるとか無いとか。

「そんな子とテメエはお近づきになりやがって……!」

「お近づきって……。一緒のクラスなだけだって」

「嘘つけ!! 学校中の人間から揃って朴念神とまで言われたお前がそこまでお熱になる程の相手だぞ!! 絶対に何かあったに決まってる!!」

「勝手に決めつけんなよ。あと、勝手に人を神にするな」

「いいから話せ! ほれ!」

「暑苦しいから離れろって……」

弾の奴、いきなり首に腕を回してきやがって。

俺はソツチの趣味は無いぞ。

「……別に特別な事なんてしてねえよ。弥生の部屋で勉強教わって、その時に役に立つアドバイスも貰って、俺が試合に負けた時は慰めて貰って……」

そうだ。俺と弥生の関係なんて、所詮はその程度。

俺は彼女に何もしてあげられなかった。

病気で寝込んだ時も、体を張って箒達を守って倒れた時も……。

「うおっ!」

弾が無表情のまま血涙を流している!?

「リア充爆発しろ!! もしくは死ね!!」

「全力で断る!!」

冗談抜きで意味が分からんわ!!

「こんな超セレブ系美少女と二人っきりで勉強会をした挙句、慰めて貰うとか……! お前は世のモテない男子全員に喧嘩売ってんのか!!!」

「別に売つとらんわ!!」

「生まれてこの方、一度も女子と二人っきりの空間で勉強とか教わった事なんて無いのに……! 羨ましいやら、妬ましいやら……!」

「中学の時に鈴と一緒に勉強したじゃねえか」

「あの頃はお前や数馬も一緒だったろうが!! あんなの問答無用で

ノーカウントだ!!」

こいつの価値基準が全く理解できない……。

なんで弾はここまで切れてるんだ？

「負けてたまるか!! 俺も絶対に可愛い彼女を作るぞおおおおおおおつ!!」

「が…頑張れ……」

と言うか、こんな場所で大声とか出すなよ。

そんな事したら……

「お兄!! さつきからずつとお昼が出来たって言ってるじゃん!!  
ちゃんと返事してよ!! それと、普通に五月蠅い!!」  
ほらな。

部屋の扉を蹴破つて、弾の妹である『五反田蘭』が入ってきた。

歳は一個下の中学3年生。

タンクトップとショートパンツを着ているけど、家では思ったよりもラフな格好をしてるんだな。

「い…一夏さん?! 来てたんですか……」

「おつす。邪魔してる」

蘭とこうして会うのも久し振りに感じるな。

「全寮制の学校に通ってるって聞きましたけど……」

「その通り。今日は外出届を出して、家の掃除をしたついでにここに立ち寄ったんだ」

「そうだったんですか……」

久々の家の掃除も大変だった。

思った以上に埃が溜まっていたからな。

「蘭、せめてノックくらいは「それよりも! なにやら気になる事が聞こえたんですけど!」……俺は無視かい」

気になる事? なんだ?

「い…一夏さんが気になる女性がいるって……」

「ああ……弥生の事か?」

「や…弥生……さん?」

一応、さつき弾に見せた写真も蘭にも見せる。

「す…凄い美少女……」

「ほら、前にお前にも話しただろ？ 噂のクールビューティーなセレブ系美少女の事」

「昔、お兄がウザいくらいに熱く語ってた、あの……？」

「そうだ！ この子がその美少女だ!!」

蘭にも話してたのかよ……。

この話、どこまで広まってるんだ？

「終わった……」

「あらゆる面で向こうの方が上だよな……」

それを具体的に説明したら、お前の命が危ないぞ。

だから、絶対に言うなよ？ 絶対だぞ！

「上ってどこが？」

「そりゃ……胸t「ら…蘭！ さつき昼飯が出来たって言ってたよな

!?! 早く行こうぜ！ 俺もすっかりお腹空いちまったよ!」い…一夏

……」

速攻でフラグ回収してんじゃねえよ！

俺がフォローしなかったら、間違いなくお前はあの世行きだったぞ

!?!

「そ…そうですね！ ほら、お兄!」

「お…おう……」

なんとか誤魔化せたか……。

一緒に部屋を出て、階段を下りて店舗になっている一階に向かう。

「お兄」

「なんだ？」

「ちゃんと聞こえてたからね……」

「うぐ……!」

「一夏さんに感謝しなよ……」

「ハイ……」

ん？ 二人してなにひそひそ話してるんだ？

……

・  
・  
・  
・

俺達が一階に降りた直後、店の扉が開かれて、一人のお客さんが入ってきた。

蘭は途中で自分の部屋に戻って着替えてくるって言って、今はここにいない。

「いらつしやいませ〜」

二人の母親である蓮さんが挨拶をして、お客さんを出迎える。

優美な感じで礼をして、とても絵になる。

だが、それとは反対に、入ってきたお客さんを見て俺達は絶句してしまった。

「嘘……だろ……？」

「お……おおく……！」

五反田食堂に入ってきた客とは……私服を着た弥生だったから。



## 伝説の少女A

いきなり五反田食堂にやって来た弥生の姿に、俺は言葉を失った。純白のワンピースに薄紅色のカーディガン。

腕にはいつものように腕袋をつけて、その足はストッキングによって隠されている。

肌を露出しない恰好はいつもの通りだが、普段は決して見る事のない弥生の私服姿に、俺は初めて女性を『美しい』と思った。

「す……すげー美人……。こうして近くで見ると、改めてそう思うわ……」

隣にいる弾も、弥生の姿に口をポカ〜ンと開けている。

それは、食堂にいる他のお客さんも同様で、弥生が中に入ってきただけで、店の雰囲気が一気に変わった。

「なんて言うか……ここだけ別の空間になったみたいだ……」

少しだけ周囲をキョロキョロとしてから、弥生は誰も座っていない端の方にある席に座った。

それを確認した蓮さんが弥生に近寄ってから注文を聞いた。

「何になさいますか？」

皆の視線が弥生の口元に注目される。

彼女は何を頼むつもりなんだろうか？

「そ……れじゃあ……」

ゴ……ゴクリ……」

「…………『友情セット』…………を一つ……」

…………友情セット？ なんじゃそりゃ？

この食堂にそんなメニューあったか？

「マ……マジかよ……」

「え……………」

え？ 弾？ 何をそんなに驚いてるんだ？

蓮さんも珍しく動揺してるし……」

俺が状況が分からず声も無く狼狽していると、いきなり厨房にいる

厳さんの表情がキツ！ っとなった。

あ、厳さんって言うのは、弾のお爺さんの事で、この食堂の料理全般を受け持っている人だ。

俺の料理の師匠的存在だったりもする。

「おい……その嬢ちゃん」

厳さんの声がいとも以上に低くなってる……。

なんか……すげえ迫力……。

「悪い事は言わねえ。冷やかしのつもりなら大人しく帰んな。どこでその事を知ったのか知らねえが、適当につついて金だけ払うつもの物見遊山ならハッキリ言って迷惑だ」

「ちよ………」

幾らなんでも言いすぎじゃないか!?

なにもそこまで言わなくても……。

「そもそも、『友情セット』ってなんなんだよ？ 今まで聞いた事もないぞ?」

「そうだろうな……。なんせ、友情セットってのはこの五反田食堂の裏メニューだからな」

「そんなのあったのかよ……」

裏メニューなんて初耳だ……。

「俺も蘭も実際にこの目で目撃した事は無いんだけどな。母さんの話じゃ、この食堂を始めた頃に話題作りで始めた、所謂『大盛りメニュー』って奴らしい」

「大盛りメニュー……」

それが一体どんな大盛りなのかは知らないが、超大食いな弥生には最高の食事なんだろうな……。

『友情セット5000円。ただし、30分以内に完食した場合は無料』……これが一応の概要だ」

「5000円……」

なんだろう……。

弥生なら、普通に金払ってでも食べそうな気がする。

「別……に……遊び……で頼ん……では……いません……」

「ほう?」

「私…は…『お昼ご飯』を食べに来た…だけ…です…」  
「お前…」

普通の女子高生は、お昼ご飯に大盛りメニューなんて頼まねえよ…。

(あの目…間違い…! あれは今時のチャラついたガキ共の目じゃねえ…! 幾多の戦場<sup>食堂</sup>を制覇しながらも、まだ見ぬ強敵<sup>大盛り</sup>を求めてさ迷い歩く戦士の瞳!!)

え…え? なんか食堂全体の空気が心なしか燃えるように熱いんですけど?

「ふっ…」

笑った…?

「恐れを知らないのは若者の特権…か。いいだろう。作ってやるよ…『友情セット』をな」

注文通ったし!?

「ただし、こいつは作るのにちつとばつかし時間が掛かる。大丈夫か?」

「問題無い…です。既に前菜…は食べてきま…したか…ら…」

ぜ…前菜!! ここに来る前にも何か食べてきたのかよ!?

「テメエ…」

げ…巖さんの目に火が着いた!?

「ん?」

なんだ? 店の電話に着信か?

巖さんが直接電話に出たけど。

「もしもし?」

『ご…五反田の旦那かつ!』

「おう。その声は中華料理店『泰山』の言峰に世話になってる青髪か。どうした? そんなに慌てて。お前らしくもねえ」

『大変なんだよ! とうとうこの街にも例の『伝説の少女A』が来たんだよ!』

「な……なんだと……!?」

厳さんが驚いている？

今日は珍しいものが沢山見れる日だな……。

『数多くの店の大盛りメニューをことごとく打ち破ってきた伝説の少女A……。奴が遂にこの街の食事処までターゲットに定めやがった！ 早速ウチもやられちゃった……。!』

「お……お前の所の『超大盛り激辛麻婆豆腐』がかつ!？」

『ああ……。軽く10分でペロリとな……。食べ終わってから、五反田食堂の方に歩いて行くのを目撃したからよ、一応知らせておこうと思つて……。!』

「……そいつの特徴はなんだ……?」

『見た目は至つて普通の女子高生つて感じた。ただ、長い前髪で顔の左半分を覆つてたな……。!』

「!!!」

うおっ!? 厳さんの顔がめっちゃ渋くなった!?

なんかクワツ!つて効果音が出そうな顔つきだ。

『ど……どうした?』

「そいつな……。今、ここにいるぞ……。」

『マジかよっ!? クソ……。一足遅かったか……。!』

「心配すんな。この俺がそう簡単にやられるかよ」

『んな事は分かつてる。でも、油断すんなよ。アイツは俺等の想像の遙か上に行く存在だぜ……。!』

「おう。任せとけ」

『……。健闘を祈る』

あ、電話が終わった。

「……………」

受話器をそつと置くと、静かに厨房の奥に消えていった。

「もしかしたら、今日は歴史的な日になるかもしれないな……。!」

なんか弾まで変な顔になってるし!?

「お待たせ……。つて、なにこれ?」

後から着替えを済ませてやって来た蘭が、この空気に目が点になつ

ていた。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

既に用意されていた俺達の昼食を食べながら、横目で友情セットを待っている弥生を見る。

彼女の方も俺の事に気が付いたが、すぐに目を逸らしてしまった。

(なんで一夏がここにいるんだよ!! って、確か休みの日に五反田弾の家に遊びに行っている場面があったっけ……。まさか、今日がその日だったとは……。迂闊だった……)

どこまでも真剣な表情の弥生。

俺には分からないが、弥生にとってこれは紛れもない『勝負』なんだろう。

……凛々しい弥生も可愛いな……。

「あの……」夏さん?」

「なんだ?」

「後ろに座っている人が例の『弥生さん』なんですよね?」

「そうぞぞ」

蘭が弥生の事をそつと見た。

なんか顔が赤くなってるけど、暑いのか?

(生で見ると物凄い美人さんじゃん!! スタイルも最高だし……一夏さんと同じクラスで勉強を教えて貰う仲だって言うし……)

「はあ……」

今度は溜息。

蘭って表情豊かだよな。

「奥から何かを焼くような音が聞こえるんだけど……なんだろう?」  
「さあ……。母さんは知ってるんだろ?」

「一応ね……。でも、口で説明するよりは直接見た方が早いと思うわ」  
百間は一見に如かず……。か。

俺達三人が昼食を食べ終わった頃に丁度完成したみたいで、厳さんが厨房から出てきて、出来上がった『ソレ』を巨大な皿に乗せてやって来た。

その皿に乗っている代物を見て、俺は我が目を疑った。

「はいよ! 友情セット一つ! おまち!!」

ドンツ! と弥生の前に置かれたソレは、恐ろしく大きなお好み焼きだった。

この食堂にお好み焼きがあるのも驚きだが、それ以上にこのサイズのお好み焼きがこの世に存在する事が信じられない。

「な……なんなのあれ!」

「あれがこの五反田食堂の裏メニューの『友情セット』よ」

「なんで友情……?」

そのネーミングセンスは普通に謎だが、そんな事すら些細に感じる程に存在感がある……!」

「見た目は普通に美味しそうだよな……」

「ソースの香りが溜まらないわね……。食欲ないけど」

「仮にあっても、あれは無理だろ……」

その威容だけで他を圧倒している……。

弥生……本当にやれるのか……!?

「で……は……」

徐にポケットから一本のリボンを取り出して、それで後ろ髪を結んでポニーテールにした。

それも凄く可愛い……。

「制限時間は30分だ。分かってるな?」

「は……い……」

厳さんもいつの間にかその手にストップウォッチを握りしめてるし。

割り箸をパチンと割ってから、両手を合わせた。

「……いただきます」

「始め!!」

挑戦が始まった直後から、弥生は割り箸で力強く好み焼きを切り取って口に入れる。

その大きさはそこまでじゃないが、それでも彼女は迷わず口に入れていく。

「美味……」

「感想まで言う余裕があるか……やるな」

その後も弥生は黙々と好み焼きを胃の中に放り込んでいく。

一口一口は小さいのに、食べるペースが半端じゃなく早い。

前にも見た光景だが、何度見ても信じられないな……。

これを普通と感じている筈達を今更ながらに凄いと思うよ。

「なにこれ……」

「あつという間に減っていく……」

「しかもあの子、全く水に手を付けてないぞ!」

言われてみれば。

普通は水を飲んで流し込もうとするんじゃないのか？

「こいつ……こういう時の食べ方を熟知してやがるな」

「え?」

「普通に考えれば、水分を取って一気に流し込もうと思うだろうが、それは素人の浅知恵だ。水分つてのは、思っている以上に腹に溜まるんだ。最悪の場合は水分だけで胃が満たされちまう。だから……」

「敢えて水を飲まずに食べ続けている……」

「そう言うこつた。それに、あの食べ方も見てみな」

「食べ方? 俺には至って普通に食べているように見えるけど……」

「あまり大きく切り分けずにして、更に口をお好み焼きの大きさがギリまでしか開かない。ああする事によって、胃の中に無駄な空気が必要以上に入らないようにしているのさ」

「空気?」

「そうだ。人つてのはな、食べる時に無意識の内に食べ物と一緒に空

気まで胃の中に入れてるのさ。麺類とかをすすする時は特にな」

すするって行為は確かに息を吸うようにして食べるから、嫌でも空気が腹に入ってしまうのか……。

これからの人生で全く役に立たないと思うけど、勉強にはなるな  
よ。

「お兄……。あの人、もう半分以上を食べ終わってるんだけど……」

「大食い女子ってジャンルは確かに存在するけどよ……。あんな清楚なお嬢様があんなに食うなんて、誰が予想するかな……」

なんて話している間にも、弥生は着々と食べてるんだよな。

しかも、その顔が心の底から美味しそうにしてるから、この子の事を別の意味で末恐ろしいって感じてしまう。

いつもは滅多に見られない弥生の満面の笑みを見られるから、俺的には役得なんだけど。

「まだまだ時間にはかなりの余裕がある……。だが……」

だが……だよなあ……。

もう少しで食べ終えてしまいそうな勢いだ。

「おいおい……冗談だろ……!?!」

それから数分の後、弥生は皿の上にある超巨大お好み焼きを平らげ  
てしまった。

「タ……タイムは……」

「どうなの……おじいちゃん……」

震える手で蓮さんにストップウォッチを見せた。

そこに刻まれた数字を見た途端、蓮さんの表情が固まった。

「嘘……でしょ……?」

「真実だ……」

無性に気になった俺は、弾達と一緒にストップウォッチを除き見  
た。

「「えあっ!?!」」

じゅ……13分20秒っ!?

制限時間を半分以上残して完食だっつ!?

「これは……現実なのか?」



「凄すぎ……」

五反田兄妹も驚愕のあまり、空いた口が塞がらないみたいだ。

「「「うおおおおおおおつ!!!」」」

うわっ!! びっくりした……!!

他のお客さんが一斉に騒ぎ出したぞ!?

「すげえじゃねえか! 嬢ちゃん!!」

「あの見た目であの食べっぷりかよ……!! 感服した!!」

「俺は……俺は今! 猛烈に感動している!!」

僅か十数分の間に、弥生のファンが一気に増加したな……。

「み……見事だったぜ……嬢ちゃん。流星は伝説の少女Aだな」

「「伝説の少女A?」」

なにそれ? 弥生の渾名か?

「……………」

案の定、弥生自身も何の事だか分からないって顔してるし。

「おじいちゃん……。これってさ、他にも制覇した人っているの?」

「二人程な。その時はお前等が学校に行っている時だったから知らないだろうが」

「それって誰だよ?」

「一人は紫の髪に頭に妙な物をつけてる女だったな。機械で出来た兎の耳……だったか?」

その条件に該当する人物を約一名だけ知ってるんですけど……まさかね……?」

「もう一人は?」

「千冬の嬢ちゃんだ」

「千冬姉っ!」

俺が知らない所で何やってんだよ!?

「二人とも、タイムはギリギリだったんだが、まさかそれを大幅に上回る記録を叩きだす人間がいたとはな……」

俺的には、これを制覇した人間が揃いも揃って俺の知ってる人である事実が一番驚いてるよ……。

「実に見事な食べっぷりだったぜ。名前を聞かせてくれねえか?」

「板垣弥生……です」

「弥生……か。よし、覚えた」

早いな!?

「そろそろ……行こう……かな……」

本当に昼飯を食べに来ただけなんだな……。

俺達には衝撃的な姿だったけど。

「それ……じゃあ……」

急に立ち上がって、髪を結んでいるリボンを解きながら振り返り微笑を浮かべた。

「ごちそうさま……でした……」

出口の隙間から漏れる陽光に包まれた姿は、まるで女神のように美麗で、秀麗で、繚乱だった。

「ちよ……待ってくれよ弥生! 悪い弾! 俺ももう行くわ! んじゃな!」

「い……夏っ!?!」

俺は外に向かう弥生の後を追って、一緒に店の外に出た。

「素敵……♡」

「「は?」」

最後の一言、蘭が言ったのか?

それから俺は、弥生と一緒にいくことにしたが、俺の驚きはまだまだ終わらなかった。

「まだ……お昼……は……終わってない……」

「ど……どういう意味だ?」

「食後……のデザート……がある……」

「デザートとなっ!?!」

次の店で弥生は超巨大パフェを分殺して、それでようやく彼女の昼食は終わりを告げた。

そーいや、彼女の連れていた犬の『外務大臣』に妙に吠えられたけど、俺って何かしたかな?。

別に嫌われるような事をした覚えはないんだけど。

そして、弥生を彼女の家の前まで送り届けて、俺は三度驚かされた。

「なんじやこりやあああああああああああああああつ  
!？」

弥生の家って超豪邸じゃねえか!?

俺の想像なんか軽く月までぶっ飛ぶレベルのお嬢様だったんです  
けどおおおつ!?

余談だが、その日の夜に弾から電話があつて、蘭がIS学園に進学  
するって言い出したそうさ。

弾は猛反対していて、俺としても微妙な気持ちだったが、本人の意  
思を尊重したいから、『家族で相談してから決めれば?』って言つてお  
いた。

大切な事は家族で話し合うのが一番……だよな?

・  
・  
・  
・  
・  
・

とある場所にある暗闇に包まれた空間。

そこにある光源はモニターからの光だけで、それ以外には何も無  
い。

床には多くのコードが散らばっていて、足の踏み場もない。

「へえ……この子、面白いねえ……」

モニターを見ながら、一人の女性が嬉しそうに呟く。

紫の髪に機械的なウサ耳。

まるで不思議の国のアリスを彷彿とさせる恰好は、どこか不思議な  
奇妙さがあつた。

彼女こそが、世界的な有名人であり、ISを作り出した張本人であ  
り、千冬の親友でもあり、箒の実の姉である『篠ノ之束』である。

「箒ちゃんの事を命懸けで守ってくれるなんて、感謝感激雨霞だね。  
にしても、どこのどいつが私のゴーレムを真似したんだろう……?」



「うそおっ!?! 私やちーちゃんが苦戦した超巨大お好み焼きをたった13分足らずで!?! やつちゃんって本当に何者なのっ!?! しかも、その後に同じぐらい大きなパフエを食べてるし! ええい! やつちゃんの胃袋は化け物か!?!」

ある意味で、超人二人を軽く超越した弥生だった。

## 残酷な現実の一端

6月初頭の日曜日の更識家の屋敷。

その一室にて、更識楯無と彼女の父親である先代楯無が正座をした状態で向かい合っていた。

「お前が言っていた少女の調査が一通り終わった」

「……！ 本当なの!？」

「こんな事で嘘を言ってしまう。だが……」

「……？ どうしたの?」

先代の表情が急に曇り、楯無が心配そうに顔を覗く。

「調査対象の少女の名前は……板垣弥生……だったか」

「そうだけど……?」

「いや……ちよつとな……」

何か思うところがあるのか、先代の顔色は暗いままだった。

「板垣……か。偶然と言うには、余りにも出来過ぎだな……」

「お父さんは弥生ちゃんのことを知っているの?」

「そうじゃない。ただ……な……」

いつもは何事にもハッキリと言う父が、今回に限ってもどかしい態度を取っている。

それが普通じゃないと思った楯無は、これ以上追及する事を止めた。

「お前も独自に調べていたようだが、首尾は……言うまでもないか」

「ええ……。私と虚ちゃんだけじゃ、やっぱり限界があつたわ……」

「だろうな。彼女の過去には、それ程の闇が潜んでいた」

「闇……ですって?」

「そうだ」

先代は自分の懐から、一枚のディスクを取り出して、楯無の前に置いた。

「これは?」

「今回の調査で我々が押収したVTRだ」

「押収? 押収って? それにVTRって……」

眉間に深い皺を作りながら言うべきか考えたが、先代は敢えて言う事にした。

「お前は知らんと思うが……スナツフムービーと言う物がこの世にはある」

「スナツフムービー？」

『ムービー』と言われるからには映画の類と想像するが、これはそんな甘っちょろいものではない。

『スナツフ』とは……日本語で『殺害』と言う意味だ」

「殺害……!?!」

予想外の単語が飛び出した事で、楯無の目が開かれる。

「ちよつと待ってよ……。なんで弥生ちゃんの事を調べようとして、そんな物騒な物が出て来るわけ!?!」

「お前も分かっているんじゃないのか？」

「……………」

信じられなかった。否、信じたくなかった。

だが、眼前にあるディスクと父の言葉が、己の希望的観測を全て否定する。

「スナツフムービーとは、どこからか拉致してきたり人身売買で購入した子供を殺害する現場をカメラで撮影した映像だ」

「それに……弥生ちゃんが……」

「何故彼女がそんな事に……そこまでは調べる事が出来なかった。かと言って、ここで調査を中断する訳にはいかない。全てが明らかになるまで、可能な限り調査は続行するつもりだ」

「……そうしてくれると助かるわ」

先代の目には決意が宿っていて、それは嘗て、幼い頃に楯無がよく見ていた現役時代の彼の顔だった。

「肝心な部分は作り物だと言う噂もあるが、そんな事は我々の誰もが信じてはいない」

「でしようね……」

ディスクを手に取りながら、それを見つめてカバーに反射する自分の顔を見る。

「それを見るかどうかはお前の意思に委ねる。私としては見て欲しくないがな……」

「そう……」

「それでも見ると言うのなら、自分の部屋で見てください。その際は部屋の外に音が漏れないようにイヤホンでもした方がいい」

「分かったわ……」

憂鬱になりそうな心をなんとか奮い立たせて、楯無は立ち上がる。

「刀奈」

「なにかしら……?」

「昼飯で部屋を汚すなよ」

いきなり自分の真名を呼ばれ、少しだけ驚いたが、次の瞬間には笑みを浮かべた。

「大丈夫よ」

強がってみせたが、それが根拠のない自信である事は自分自身がよく分かっている。

その証拠に、楯無の手は僅かに震えていた。

それを先代の目は見逃さなかった。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

自分の部屋にてパソコンにディスクを入れて、映像を再生しようとしている楯無の脳裏に、父から話して貰ったスナッフムービーの説明が過った。

(被害者は主に乳幼児から15歳ぐらいの未成年者だ。彼等、彼女等はまず軽いドラッグを投与されて緊張を解される。その後男女問わず、多数の男達に長時間に渡って凌辱されて、最終的に多種多様な



拷問を受けることになる)

イヤホンをつけて、いつでも見れるようにする。

マウスを動かす手に汗が滲み、思わず唾を飲む。

(両手足の爪を全て剥がされて、各部の骨を折られ、場合によっては指も切断される。全身を色んな道具で傷つけて、嘗ての面影すら完全に無くなったら、最後に殺害される)

震える指でマウスをクリックし、映像を再生する。

(チェーンで殴ったり、ロープで首を絞めつけたり……バイクや車で轢き殺すんだ)

自分のパソコンのディスプレイに、父が言っていた光景がまざまざと映し出されている。

ただし、その対象は名も知らぬ子供ではなく、彼女がよく知っている妹の親友である後輩の少女の幼い姿だった。

(一応、我々もこれを見たが、何人かは余りの凄惨さに耐え切れずに数日間だけ休みを要請してきた)

目を逸らしたい。けど、自分にはこれを見る義務がある。

自分にそう言い聞かせて、精神をすり減らしながら映像に視線を集中させる。

(刀奈。私はな……お前にこの世の『闇』に関わってほしくなかった。だから、お前が更識家の当主となった今でも、仕事をそれなりに選んできたつもりだ。ハッキリ言って、お前にこの稼業は不向きだ。何故なら、お前は幸せに育ちすぎている。この世の中と人間と言う存在を心のどこかで善いものと信じてしまっている)

強烈な吐き気が込み上げてきて、涙が流れて止まらない。

耐え切れなくなった彼女は、イヤホンを耳から取ってからゴミ箱まで這い蹲って、そこに顔を突っ込んでから、胃の中のを全て吐き出した。

(こんな事をして喜ぶ人間がいると、こんな映像を見て興奮する人間がいると、こんな人間を人間とすら思わない残酷すぎる事件が世の中に星の数ほど行われていると、お前は想像すら出来ないだろう?)

文字通り、胃の中の昼食を全て出した後も、酸っぱい胃液がゴミ箱

に溜まっていく。

(これが、お前を『こつち側』に来させたくない理由だよ。だからと言って、お前を当主の座から降ろそうとは思わないがな)

部屋にはイヤホンから僅かに聞こえる音声と、楯無の泣き声だけが響く。

「もう止めて……もう止めてよおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!!」

精神が我慢の限界に到達した彼女は、思い切り泣き叫んだ。

だが、そんな彼女の訴えなんて聞くはずも無く、映像は淡々と進んでいく。

「お……お嬢様っ!? 一体どうしたんですか!?!」

「虚……ちゃん……」

楯無の叫びを聞いた虚が、慌てて部屋の中へと入ってきた。

因みに、簪は外に外出していて屋敷内にはいない。

ある意味で不幸中の幸いだった。

「だ……大丈夫ですか!?!」

「ううう……。止めて……止めてよお……」

「止める……?」

楯無を抱き留めながら背中を擦っていると、パソコンに映っている映像が目に映った。

「こ……これは……!?!」

「や……弥生ちゃんの……」

「皆まで言わなくて結構です……」

弥生の名が出た時点で大方の予想はついた。

映像の中では、妹と仲良くしている後輩の少女の幼少期と思われる人物が、大勢の男達によって残酷な仕打ちを受けている。

虚も思わず目をギュツと瞑って視線を逸らす。

「これは……現実なのですか……?」

「そうよ……。認めたくないけど……これが弥生ちゃんの隠された過去の一端……」

虚は全てを見た訳ではないので、辛うじて嘔吐はしていないが、そ

れでも猛烈な気持ち悪さを感じている。

「なんでよ……なんでこんなことが出来るの……？ 弥生ちゃんがあなた達に何をしたらって言うの……？」

「お嬢様……」

「あんなに優しく……誰からも好かれている子に……どうしてこんな……」

映像の最後に、見るも無残な姿になって完全に動かなくなった彼女の体をどこかへと運んでいく。

「なんとと言う事を……！」

普段は滅多に怒りの感情を見せない虚が、ソレを見た途端に怒りを露わにした。

何故なら、運ばれた場所とは……ゴミ捨て場だったからだ。

この映像を撮影した連中は、あろうことか彼女の事を死んだものと判断し、その体をゴミのように捨てたのだ。

全身が鮮血に染まった彼女が多数のゴミ袋の山に埋まった直後に映像は終了した。

「虚ちゃん……この事は……」

「承知しています。簪様や本音には決して……」

「お願いね……」

ようやく涙は止まったが、それでも楯無の精神が回復する事は無かった。

「ねえ……虚ちゃん……」

「なんですか？」

「今日はここに泊まっていつてくれない……？ 一人でいたら……またさっきの事を思い出しそうで……」

「私も同じ事を考えていました……」

その日、虚は楯無の部屋にて一緒に寝ることにした。

だが、どれだけ寝ようとしても寝る事は出来ず、結局は一晩中、布団の中で起きていた。

勿論、あんな物を見た直後に食事なんて出来る筈も無く、楯無と虚は揃って夕食を抜いた。

・  
・  
・  
・  
・  
・

「ふ げ る

なああああああああああああああああああああああつ!!!!」

束の憤怒に満ちた叫び声がラボの中に響き、周囲には彼女が暴れた後と思わしき残骸が散らばっている。

「私のやつちゃんによくもこんな事を……! こいつ等だけは絶対に許さない!! 全員纏めてぶっ殺してやる!!!」

他人の事でここまで束が怒るのは本当に珍しい。

それだけ、弥生の事を気に入っている証拠なのか。

「いや……殺すだけじゃ生温い……。こんな事をしてしている連中だから、当然……自分達が同じ事をされる覚悟もあるってことだよな？」

だって、あの有名なアニメの仮面の主人公も言ってたもん。『撃つていいのは、撃たれる覚悟のある奴だけだ』って」

かなり物騒な事を呟きながらハイライトのない目で見ている先にあるのは、先程、楯無達が見ていた映像と同じ物だった。

彼女達とは違い、束はこれを見て、気持ち悪さよりも先に怒りの感情が全てを支配したようだ。

「やつちゃんは私の希望なんだ……だから……」

抱き着くようにモニターに近づき、うつとりとした顔で映像に映っている現在の弥生の姿を見る。

「君は必ず私が守ってあげるからね……やつちゃん……♡」

言葉だけは優しく聞こえるが、その目にあるのは間違いなく『狂気』だった。

一体何が彼女をそこまで駆り立てるのか、それは本人にしか分からない。

「それじゃあ早速……明日にでもこの馬鹿な連中を文字通りの生き地獄に送ってこようかな？ この世に生まれてきたことを後悔させてやる……！」

彼女の事を止められる人間はここにはいない。

いや、この世界に篠ノ之束と言う人間を止められる存在はどこにもいないかもしれない。

『天災』とは即ち『天』の力。

一度でも発生した荒れ狂う嵐を人の手で止める術は……無い。

## フランスとドイツからコンニチワ

フランス デュノア社ビル 社長室。

そこで二つの人影が向かい合い、なにやら話をしていた。

一つは少し小柄で子供のようで、もう一つの影は大柄で、大人の男性を彷彿とさせる。

「なんででしょうか……『社長』」

「お前を呼んだのは他でもない。まずはそこにある書類を見る」  
「分かりました」

淡々とした返事で、小柄な影が机の上にある書類を手に取って確認する。

「これは……?」

「私がお前に与えた仕事は、日本に行き、例の少年の生体データを入力、あわよくば専用機も共に強奪すること……」

「承知しています」

「だが、それとは別に、お前にはもう一つ仕事を与える」

「もう一つ……?」

「手にある書類をよく読んでみる」

「はい………こ……これは……!?!」

小柄な影の人物は驚愕した。

その書類には、本来のターゲットと同等か、もしくはそれ以上の存在の人物の情報が書かれていた。

「IS学園には今、現在の日本における最大級の重要人物の家族が在籍している。下手をすれば、例の少年なんぞ霞むレベルのな」

「ぼ……僕にどうしろと……?」

「簡単だ。その少女と接触し、関係を持って」

「関係……」

「別に肉体関係を持つとは言っていない。その少女と仲良くなり、彼女の警戒心がとけた所で……」

「この子の親と接触しろ……と?」

「そうだ。上手く行けば、フランスと日本の友好関係を更に強固なも

の出来る。それに貢献できたとなれば、例の少年の生体データなんぞ無くともデユノア社は安泰だ」

男の方は嬉しそうにしているが、それとは裏腹に小柄な方は渋い顔になっている。

「その少女は例の少年と同じクラスだと聞いている。こっちにとつては実に都合がいい。お前も同じクラスになるように手配をしておいた。首尾よく接触しろよ？ 無論、怪しまれる事が無いようにな」

「心得ています……」

「よし。ならば、さっさと出発の準備を済ませろ。明日には出国するんだからな」

「了解です……父さん」

「ここでは社長と呼べ」

「はい……社長」

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

ドイツ 某所に存在する特殊部隊の基地。

その司令室に、軍服を着た一人の少女と、一人の軍人の男が向き合っている。

少女は銀色の髪と左目にある眼帯が特徴的で、男の方は幾つもの勲章らしきものを制服の胸ポケットにつけている事から、相当な地位にいる事が窺える。

「いきなり呼びだして済まないな。少佐」

「いえ！ 問題ありません！ 准将閣下！」

ビシッ！ と敬礼をして応える少女。

その姿は実に様になっている。

「日本行きの準備は進んでいるかね？」

「はい！　もう既に完了しており、後は明日になるのを待つばかりであります！」

「そうか。それは丁度いい」

准将と呼ばれた男は、自分の机の引き出しから一枚の書類を取り出して、机に置いた。

「今回、少佐をここに呼んだのは他でもない。まずはこの書類に目を通してくれたまえ」

「はっ！　失礼します！」

少女は机まで近づき、置かれた書類を音も無く手に取った。

「そこに記載されている少女は、これから少佐が行くことになっている日本において、最も重要なポジションにいる人物の娘だ」

「重要……とは？」

「下までよく読んでみたまえ」

そう言われて、少女は書類を隅から隅まで読んでみる。

全てを見終わってから、顔には出していないが、心の中では驚愕していた。

「……このような少女が何故……？」

「さあな。だが、彼女がIS学園に滞在する生徒の中において、トップクラスのVIPである事は確実だ。……私が何を言いたいか……分かるな？」

「はい。これから行くIS学園にて、彼女の護衛をするのですね？」

「そうだ。別に日本から直々に依頼があつた訳ではないが、かと言って、これをそのまま無視するのは出来ない」

准将は少し椅子に座り直し、軽く咳払いをした。

「我々、軍人の本分は民間人を守る事にある。だが、何事にも『優先順位』と言う物があるのもまた事実。実に嘆かわしい事だがな」

足を組み直し、背もたれに体を預ける。

「故に、少佐には学園にて彼女と接触して貰い、その護衛を命じる」

「はっ！　了解であります!!」



「よろしい。では、下がっていいぞ」

「はっ！ 失礼いたします！」

綺麗な歩き方で少女は退出し、彼女が完全にいなくなった事を確認してから、准将はポケットから葉巻を取り出して口に咥え、火をつけた。

「ふうく……。彼女には少し悪い事をしたが、ああでも言わなければ、少佐は向こうで孤独になってしまうからな」

窓の向こうに見える青空を見上げながら、葉巻を口から取り出す。「ブリュンヒルデ……。君は感謝しているが、君が本当に教えたかった事は少佐には全く届かなかったようだ……。それを、あの少女と触れ合う事で学んでくれればいいのだが……」

そつと目を瞑ってから、物思いに耽るようにして肩の力を抜く。

「ボーデヴィツヒ少佐……。生まれがどうであれ、君は軍人である前に一人の少女なのだ……。日本にて、彼女に『友』が出来る事を祈ろう……」

・  
・  
・  
・  
・  
・

次の日の月曜日。

私はいつものように自分の部屋で目を覚めますが、部屋の様子がいつもとは違う。

と言うのも、私が日曜日に家に戻った時に持って来た、沢山の私物があるからだ。

量的な問題で持って来れなかった他のゲームや漫画やラノベの数々。

他にも、各種ゲーム機が多数並んでいる。

これでこそ私の部屋……私の楽園……♡

「で……も……」

一つだけ懸念している事がある。

昨日の夕方に学園の寮にある自分の部屋まで戻って来た時、何故か私の部屋に本来無い筈のもう一つのベッドがいつの間にか設置してあった。

見た時、意味不明過ぎて自分の時が少しガチで止まってしまった程。

このベッドは間違いなく、何かの暗示だと考えている。

(この時期と言えば確か……)

フランスとドイツから『彼女達』がやって来る頃か？

(……まさかね)

よりにもよって、そんな事は無いでしょう。

ちよつと色々とありすぎて、考えがネガティブになり過ぎてるな。うん。

こんな事じゃ、また胃薬君のお世話になってしまう。

君は掛け替えのないフレンズだが、だからと言って世話になり過ぎるのもどうかと思う。

こんな時は、私の嫁達（簪と本音）の顔でも見て癒されようつと♡

そうと決まれば、早く登校の準備をすませようつと♡

•••••

•••••

•••••

•••••

•

食堂までの道のりにて、いつものように簪と本音の二人と合流。

三人で並んで歩いていると、そこに箒とセシリアと鈴がやって来

て、一緒に食堂まで行くことに。

これがいつもの朝の流れになっている。

場合によっては、ここに一夏も加わるんだけど、今日はどうやらないみたい。

寝坊でもしてるのかな？

昨日は結構、連れ回してしまったしなく。

「弥生さん。もうお体は大丈夫なんですか？」

「う……ん……。昨日……。も……家……。まで行ってきて……。帰り……。に食事  
もして……。きたから……」

「やっぱり、お外でもやよつちは一杯食べるのかな？」

「普通に有り得るな……」

なんでそこで呆れる？

つーか、もうリハビリは大丈夫でしょ。

別に大した怪我をしていた訳じゃないんだし。

「弥生の家か……」

「興味あるわね。どんな家なの？」

「えつと……」

なんて言えがいいのかな？　あまり説明って得意じゃないんだよなく。

「……和風……。の大きな……。家……。？」

「情報が少なすぎるわね……」

「和風……。私の家と同じかな？」

そういや、簪もお嬢様だったね。

まだ見た事は無いけど、案外、似たり寄つたりのデザインかもしれない。

そんな事を話している内に食堂に到着。

ルーチンワークのように食券を購入し、カウンターに置く。

「お？　今日もまた食べるね〜！」

当然。朝食は一日の糧になるからね。しっかりと食べないと。

そんな訳で、私の朝ごはんは超大盛りの親子丼。

ふわとろ卵の黄色い山が目の前に形成されています。

「いい匂いだね〜♡」

「親子丼か……」

「ほんと、弥生の食欲って底を知らないわよね」

「それが弥生クオリティ」

「ですわね」

なにそれ？

(女子達は噂話とかしてないんだな……)

原作では、女子達が一夏の事についてある噂を流していたけど、今見る限りではそんな事は発生していないみたいだな。

ま、これはこれでいいんじゃない？

自分の知らない内に景品扱いにされてるとか、普通に同情するし。

「あ……あの！ 板垣さん！」

「ふあい……？」

誰だ？ 私の数少ない楽しみを邪魔するのは？

「お前達は……あの時の……」

あ。私に話しかけていた、この三人の女子は……

(無人機騒動の時に中継室に閉じ込められていた子達?)

あれから地味にどうなったか気になってたんだけど、この様子を見る限りは大丈夫そうだね。

「えつと……その……」

なんですか？ 御用があるなら手短かにお願いしますよ？

「二あの時は助けてくれて、本当にありがとうございまして!!!」

うおっ?! いきなり大声を出すなよ!?

普通にびつくりしたぞ……。

「あの事件の時、板垣さんがいなかったら私達……今頃……」

だろうな。敢えてどうなるかは言わないけど。

「本当はもっと早くにお礼を言うべきだったんだろうけど……」

「私達、あれからずっと、この学園に残るべきか話してたんです……」  
成る程な。

無理ないよ。あの事件以降、自主退学した子達が結構いるって聞いたし。

「気にして……ない……よ……」

「でも……」

「あんな目……に遭えば……心……を落ち着かせる時間……も必要……  
だって思う……から……」

「なんたつて、命の危機に陥ったんだ。」

「場馴れしていない子達に即座に復帰しろつてのは、流石に酷な話だ。」

「『板垣さん……♡』」

「……なんで潤んだ目でこつちを見る？」

「何回もここから退学しようつて思っただんですけど……」

「命の恩人である板垣さんに、何も恩返しが出来ないまま自主退学なんて絶対に出来ません！」

「だから、皆で一緒に在学し続けようつて決めました！」

「恩返し云々はともかく、ここで『逃げる』と言う選択肢を選ばなかったのは本当に偉い。」

「それだけでも賞賛に値するつて思うよ。」

「これからは、板垣さんに恩返しをする為に頑張ります！」

「そ……そう……」

「彼女達の気持ちを無下にはしたくないんだけど……別に恩返しをしなくても良かったんじゃないんだよ……」

「あの時は無我夢中だったけど、単純に見捨てられなかったんだよね。」

「なんでかは知らないけど、どうしても命が消えようとする事が許せなかった。」

「また増えたな……」

「こればかりは仕方が無いでしょ。実際に自分の命を目の前で救つて貰ったら、誰だつてこうなるわよ」

「こうなる？　こうなるつてなによ？」

「ほら。そんな所に突っ立ってないで、折角だし一緒に食べましょうよ」

「い……いいんですか？」

「いいに決まってるじゃない？　ねえ？　弥生？」

「そう…だ…ね…」

ここで断ったら普通に外道だし、私としても断る理由は無い。

「「ありがとうございますー！」」

こうして、今日の朝食はいつも以上に賑やかになった。

一人で静かな食事でも悪くないけど、こんな風に皆と一緒に食べるってのもいいかもな……。

こんな事を考えるようになるなんて、私も少しずつ変わってきてるのかもしれない…。

．．．．．

．．．．

．．．

．

朝食を食べ終えて、恩返し三人組と別れた後、私達はそれぞれの教室に向かった。

え？　一夏？　彼なら私達と入れ違いで食堂に入っただよ。

今頃は超特急でご飯を食べてるんじゃないかな？

「あらっ？」

「何を話してるんだ？」

教室はISスーツの話題で持ち切りになっていた。

皆でパンフレットを見ながらワイワイと話していて、この間の事件が嘘のように学園に『日常』が戻ってきている。

「そう言えば、あの時見た弥生のISスーツはどこで製作されたんだ？」

「箒さんは見たんですのよね？　どんなスーツでしたんですの？」

「なんと言うか……全身を覆うような感じだったな。私もうる覚えで詳しい形状までは記憶してないが」

箒の言う通り。私のISスーツは特別製なのだ。

なんとたつて、普通のISスーツ着たら、モロの体に傷跡が丸見えになっちゃうからね。

それを隠すために、首元まで完全に覆い隠すようなデザインになっているのです。

「私……のスーツは……おじいちゃん……が作った……んだよ……」

「なんと！ 弥生の祖父殿の手作りなのか!？」

「ISスーツを一着製作するのにもかなりの金額が必要な上に、相当な技術力と素材が必要なのに……」

「やよつちのおじいちゃんは凄いなだね〜!」

当たり前だ。おじいちゃんは私の誇りであり、世界で一番大好きな自慢の家族なんだから。

それから、山田先生が教室に入つて来て皆にスーツの説明をしてくれたが、すぐに皆にからかわれてしまった。

親しみやすくはあるんだけど、見た目的にも教師とは思えないと言いますか……。

それでも、私にとっては貴重な癒し系女子である事には違いないんだけどね!

「あ！ 板垣さん!」

こつち来たし。

歩き方が今にもコケそうなんですけど……。

「何か困った事があれば、いつでも言ってくださいね！ 喜んで協力しますから!」

「あ……ありがとうございます……ごい……ま……す……?」

急に手を握ってきて、どうしたと言うんですか?

山田先生の手……プニプニしてるな〜……♡

(佐藤先生に教えて貰った板垣さんの体の傷……。なんであんな傷跡が体中にあるかは分からないけど、この腕や足の服装は間違いなく傷を隠すためにしてるんだらう……。そんな彼女のフォローをするのも、教師として立派な役目よね!)

いつまで手を握っているつもりなんだらう……。

こつちとしては嬉しいけど、なんか視線が集まってるんだよね……。

「いつまでそうしているつもりだ？」

「はっ!？」

「お？ 私の心を代弁してくれる人の登場か？ って……。

「全く……。板垣」

天下無双の担任様じゃないですか！ ヤダ〜!

「回復したとは言え、お前はあまり体が丈夫な方とは言えない。だから、無理だけはするなよ」

「は……。はい……。」

なんでこの人はいつも私の頭を撫でてくるの？

あれか？ 私にナデポでもしたいのか？

(あんな事を知ってしまった以上、もう弥生の事を普通には見れない……。これからは教師として以上に、一人の人間としてこいつを助けていこう……。にしても、こうして弥生の頭を撫でていると本当に癒されるな……。よし、これから弥生の頭を撫でる事を私の日課にしよう。そうしよう)

ひうつ!?! なんでまた私の背中に悪寒が走ったの!?

また何か悪い事がある前兆か!?

「む？ そう言えば織斑はどうした？」

「一夏なら……。」

まだ食べてるのか？

先生が来ている以上、どう足掻いても遅刻確定なんだけど……。

「うつしや！ セーh「な訳ないだろ」わたるっ!？」

教室の扉を勢いよく開けながら入ってきた一夏だったけど、普通に遅刻だったから、毎度の如く出席簿の一撃によって教室の床に沈みましたとき。

「時間ぐらいちゃんと守れ。バカ者が」

「目覚ましが電池切れになって……。」

「言い訳するな。ちゃんと目覚ましの電池残量ぐらい把握しておけ」

……。一夏って、何気にプチ不幸に見舞われる事が多いよな……。



大きな不幸じゃない所が地味に辛いだろうに。

「山田先生。あいつ等は……」

「ちよつと待つてください」

山田先生が教室の扉まで行って、廊下を除き見た。

「大丈夫です。二人とも今来ました」

「そうか。ではホームルームを」

「はい。皆さん、席についてください」

そう言われて、私達は急いで自分達の席に座った。

一夏。早く座らないと、また出席簿が頭上に降りてくるよ。

「ホームルームの前に私から連絡事項がある。よく聞くように」

連絡事項……なんだろう？

「本日から本格的な実践訓練を始めていく。訓練機とは言え、ISを使用しての今年最初の授業になるから、各々気を抜かないようにすること。それぞれに注文したISスーツが届くまでは学校指定の物を使う事になるから忘れるなよ？ 仮に忘れたりしたら、スーツの代わりに学校指定の水着で訓練をしてもらうからな。それすらも忘れた場合は……下着でいいか」

よくねえよ!! 下着で授業受けるとか死んでも嫌だよ!!

「……………」

で、箒とセシリアと本音はどうしてこつちを見てるの？

「……………」

そこの教師二人もこつち見るな!!

(弥生の下着姿……)

んで、その男子は私をイヤらしい目で見るな。

そう言うのって、女子は敏感に分かるんだぞ。

「んん……………」 山田先生、続きを」

「あ！ はい！」

ワザとらしく咳払いをしても意味無いですからね？

「そ……それですね！ 今日は何と転校生を紹介したいと思います

！ しかも二人！」

とうとう来たか……。

分かっているとは言え、いや……分かっているからこそ緊張するな……。

普通ならここで『なんで二人？ 分散させたりしないの？』とか考  
えるんだろうが、そんなの幾ら考えたって意味が無い。

だって、それが『流れ』なんだから。

教室の扉が開かれ、そこから二つの人影が入ってくる。

一人は金髪、もう一人は銀髪。

見た目からして対照的な二人だが、片方は明らかに私達とは恰好が  
違う。

何故なら……男子の制服を着ていたから。

こうして、第一期原作ヒロインが勢揃いした。

胃薬ください・・・

遂に原作における全てのヒロインが揃ったか……。  
にしても……

「初めまして。僕はフランスから来た『シャルル・デュノア』と申します。こうして日本に来たのはこれが初めてで、色々ご迷惑をおかけするかもしれませんが、どうかよろしくお願いします」

……先入観を持っているせいか、見れば見る程、女にしか見えない……。

他の皆は知らないが、もう私には彼女が男には見えないよ……。

「お…男の子……？」

おっと。早く密かに通販で購入した『英雄王印の最強の耳栓（特価4000円）』を装着しなくては。

私の推測が正しければ、ここで……

「はい。こちらに僕と同じような境遇の人がいると聞いて、本国から転入をして……」

く…来るぞ！ 総員！ 対ショック防御!!

「キャ……」

ガクガクブルブル……。

「「「「きやああああああああああああああああああ」」」」

うにやあああああああああああああああああああつ!?

この耳栓を持ってしても、完全に音を防ぎきれないだ  
とおおおおおおおつ!?

それから、女子達が盛りのついた動物のように騒ぎ出して、教室  
内が阿鼻叫喚状態になった。

箒やセシリアは普通に指で耳を防いでいるだけで平気そうにして  
いた。

さ…流石は剣道全国王者と代表候補生……!?

この程度じゃビクともしないのか……。

「♪」

で、本音に至っては耳を全く防御していないにも関わらず、普通に

お菓子を食べていた。

この状況でそんな事が出来る君を本気で尊敬します……。もし仮に簪や鈴がここにいたら、同じ様に平気でいられるのかな……。？

だとしたら、暗部と代表候補生ってパネエ……。

「騒ぐな！　まだ自己紹介は終わっていないぞ！」

「そ……そうですね！　静かにしてください！」

教師二人の声にてようやく教室に静寂が戻った。

感謝しますぜ……お二人さん……。

(弥生が耳栓のような物をつけるのを見たが、それでも全く効果が無かったみたいだな。全くこいつ等は……)

(板垣さん……大丈夫でしょうか……?)

そう言えば、隣にいる『あの子』も平気そうにしているね。

軍人って耳まで鍛えているのかしらん？

「はあ……悪いな」

「いえ。私は大丈夫です」

すげ〜……。軍人すげ〜……。

「では、次はお前が挨拶をしろ」

「了解しました、教官」

敬礼をしながら『了解』って……。

「最初の一回は特別に許すが、二度目は無いぞ？　ここでは私は教官ではなくて一教師であり、お前も一生徒にしか過ぎない。だから、これからは私の事は織斑先生と呼ぶように」

「はっ！」

本当に分かっているのかな……。

「ドイツから来た『ラウラ・ボーデヴィツヒ』だ」

……………それだけかい！

いや、私も人の事は全然言えないけどさ。

あ、それを言うなら一夏もか。

「あ……あの……それだけですか？」

「これ以外に何か？」

「いえ……なんでもありません……」

山田先生がラウラの眼光に負けて引っ込んでしまった……。ちよっぴり可哀想かも。

名前を言ったって事は、次に来るのはアレか？

「む？ 貴様は……」

やるか？ やるのか？ バチコ〜ンってやっちゃうのかい!?

「な……なんだよ?」

トコトコと一夏に近づいて、大きく手を振り上げてか〜ら〜の〜?

「……はっ!」

ん? なんか目が合ったんですけど。

「チツ……! あの方の前で無様な真似は出来んか……」

「はえ?」

と…止まった? なんで?

あ…あれ? 今度はこっちに來てる? どうして?

「危うく忘れるところだった…。今はこのような男に構っている暇は無いのだった」

「このようになって……」

あろうことか、一夏ガン無視!? マジで!?

原作じゃ見ていて気持ちいいぐらいのビンタをブチかましたのに!?

「間違いない……」

「え……?」

何が『間違いない』の?!

「私の名はラウラ・ボーデヴィツヒと申します! この度は上官からの命令により、今日から貴女様の護衛をする事になりました! よろしくお願ひします! 『姫』!」

……………なんだって?!

「……はあああああああああああああああああつ!」「……」

ひ…姫ええええええええつ! 私か姫!? どういうこっちや!?

本気で意味不明なんですけどおおおつ!?

「お…おい! 板垣が『姫』とはどういう事だ!」

「クラリツサが言っていました。彼女のような立場にいる方は一般的に『姫』と呼ばれるのだと」

「あの似非日本バカめ……!」

クラリツサって……ラウラの副官の人……だったよね？

なんでそんな事を言うのかな!?

(確かに弥生は『あの人』の義娘であるから、『姫』と呼称されても不思議ではないが……)

(それを堂々と言うなんて……)

なんか皆がこつちに注目してるしく!

ほらあく! さっきまで話題の中心にいたシャルル君(笑)が完全に置いてきぼりになってますよ! あの子にも構ってあげてく!

「え? ええ? これってどういう事?」

「板垣さんって、もしかして凄い立場の人?」

「そう考えて見ると、なんだか高貴な雰囲気があるような……」

そんなものないよ! あるわけないでしょ!

「どういたしました? もしや! あの男が何か不埒な事をして……!」

「ち……違う……よ……?」

いや、ある意味では正解だけど。でも、今は違うから!

「ひ……姫……は止め……て……」

「何故ですか!」

「なんで……でも……」

「むう……」

そんな悲しそうな顔をしないでよ!

なんかこつちが悪いみたいじゃないのさ!

「では、なんとお呼びすれば?」

「好きに呼べ……ばいいと思う……よ……?」

「では矢張り『姫』d「それだけはやめて」……そうですか……」

珍しく途切れることなく言えたよ……。

あれなの? この子は天井が好きなの?

「ならば『お嬢様』と呼ばせて貰うのはどうでしょうか?」

「それ…は誰か…と被る…から…アウト…」  
「被る？」

「どこぞの生徒会長さんと被って紛らわしくなるから、それだけはダメ。」

「普通…に名前…で呼ぶのはダメ…なの…？」

「私は軍人であり、貴女様はそうr」「それ…は言わな…いで…！」むぎゅ…」

あ…危なかつた…。

『あの事』がバレたら、絶対に私の平穩が御臨終してしまう！

それだけは絶対に避けなくては！

「で…では、『弥生様』でよろしいですか？」

「もう…それでいい…よ…」

本当は様付けも嫌だけど、この辺で妥協しないと、延々と続きそうな気がする…。

「もういいか？」

「はっ！ 大丈夫です！」

「そうか…」

なんか織斑先生も疲れた様子。

気持ちちは分かりますよ、ホント。

(にしても、なんで私の護衛なんて話になってるんだ？ まさかおじいちゃんが？ いや…基本的におじいちゃんは私を必要以上に束縛するような事は絶対にしないしな…。だからこそ、私に『アーキテクト』を持たせてくれたんだし)

うくむ…本気で意味分からん。

上官って言ってたけど、ドイツの軍人さんが私の護衛をしろってこの子に言ったのかな？

「はあ…。では、これでHRを終了する。お前達はすぐにISスーツに着替えてから、第2グラウンドに集合する事。今回は2組と合同でISの訓練をする事になっている。では、解散！」

まだ朝のHRが終わっただけなのに、もうかなり疲れたよ…。

うぐ…！ 久し振りに胃に痛みが走って…！

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

実習がある時は、一人しかいない男子である一夏が更衣室を使用し、女子は教室で着替えている。

私もそれは例外ではなく、皆と一緒に教室でISスーツに着替えなくてはいけない訳で……。

(普通なら、ここで間違いなく詰んでしまう場面だが、こんな時こそ専用機持ちとしての最大の利点を利用して貰う！)

頭の中でイメージを固めて、自分がISスーツを着用している姿を想像する。

すると、あら不思議。あつという間に私の体が光に包まれて、制服から特性の全身を覆うISスーツになったではありませんか。

自分の専用機の『パーソナライズ』が完了していると、ISの拡張領域内に自身のISスーツが自動的に内臓されるようになって、展開時に機体と一緒にスーツも着用出来るようになる。

と言っても、ISとスーツを同時に展開すると、それなりにエネルギーを消耗するから、普段はスーツ↓ISの順番で装備するのがベターだ。

前の時は緊急時だったから同時に展開したけど、そのせいでSEの消耗が早かった。

「あれが板垣さんのISスーツ？」

「肌は露出してないけど……」

「体のフォルムがモロに出てるから、逆にエロいよね……」

え？ そうなの!? 全く自覚無かった……。

そう言われたら、急に恥ずかしくなっちゃうな……。

でも、これはおじいちゃんが私の為に用意してくれた物だから、使



わないなんて選択肢は無いし……。

(ここは私が我慢すればいいだけの話か)

心の中で密かに決意をしていると、私と同じようなやり方でISスーツを着ているセシリアとラウラがいた。

着替える時間は本当にすぐだから、凄く便利だよ。

だからと言って、箒や本音を置いて行くって事はしないんだけど。本音はともかく、箒はここで下手に置いて行ったりしたら、どんな事態に発展するか分からないしね……。

「情報の通り、弥生様も専用機を所持しているのですね」

「い……一応……ね……」

私のアーキテクトは専用機って言っているのか分からないんだけどね。

……どこで私の事に関する情報を入手したとか、聞かない方がいいんだろうな……。

「姫……弥生が姫か……」

「お姫様姿の弥生さん……」

「可愛いんだろうね♡」

本音はいいとして、その二人。

私で変な妄想はしないでくれますか？

「え？ 板垣さんって専用機持ちなの？」

「ま……まあ……」

仕方が無かったとは言え、こればかりは流石にバレるか。

実習がある以上、避けては通れない道だから、別にいいんだけどね。

「代表候補生でもないのに専用機持ちって事は……」

「実は相当な実力者なのか。それとも……」

「ボーデヴィツヒさんが言ってた通り、凄い立場にいるお嬢様なのか……」

「案外、どっちも正解だったりして」

立場はともかく、私の実力なんて大したことないよ。

機体と同じように、貧弱を絵に描いたような人間ですよ？

「あ……時間……」

「「げっ!?!」」

お喋りは楽しいかもしれないけど、早く行かないと私達も一夏と同じように出席簿の餌食になってしまう。

私は一夏のような石頭じゃないから、一度でも直撃を食らえば頭蓋骨骨折しちゃう!

時計を見た瞬間、この場にいる女子達の気持ちは一つになって、急いで第2グラウンドへと向かった。

因みに、一夏はシャルル君(便宜上、今はそう呼ぶことにする)を連れて更衣室へと向かったけど、何もしてないだろうな?

アイツの事だから、彼女が女だって気が付かないでナチュラルにセクハラしてそうだ。

・  
・  
・  
・  
・

グラウンドに到着すると、既に2組の皆が整列していて、その前に織斑先生がジャージ姿で立っていた。

見た感じ、まだ一夏達は来てないみたいだ。

「来たか。……それが板垣のISスーツか?」

「は……はい……」

教師として気になるのは分かるけど、ジロジロと見ないでほしいな……。

(成る程。肌が露出しないようなデザインになっているのか。だが……これはこれでまた、別の意味でエロいぞ……)

あ、鼻血出てる。

「おっと」

……どうして鼻血が出たとか、聞かない方がいいよね。  
主に織斑先生の名誉の為に。

先生の事は取り敢えず放置して、私達は2組の隣に整列する事に。  
「そ……それが弥生のISスーツなのね……。凄いピッチリしてるじゃない……」

「幾らなんでも体にフィットし過ぎな気がするが……」

「弥生さんのお尻……弥生さんの胸……弥生さんの腰……弥生さんの太腿……」

「セクシくだよね♡」

おいこら。本音以外のその三人も、何気に鼻血流してるんじゃないよ。

「貴様等。姫様をイヤらしい目で見る事は、この私が許さんぞ」

いつの間にか私の隣に陣取っていたラウラが、私の前に庇うように移動した

「……なに？ この子」

「今日来た転入生の一人だ」

「ああ……一組にいきなり二人も来たって、皆が騒いでたっけ。で、何故に姫？」

「姫様は姫様だ」

「名前……で呼んで……って言った……よね……？」

「す……すいませんでした！ 姫様！ ……はっ!？」

ついさっき言った事だよな？ もう忘れちゃったの？

ほら……2組の子達も私の方を見だしたし……！

「姫様？」

「どういう意味だろう？」

「さあ……？」

……アーキテクトの拡張領域に水筒と胃薬ってあったっけ……？

あ、どっちとも部屋に置きっぱなしだわ。

「別に『姫様』でいいんじゃない？ あたしは結構似合ってるって思うけど」

「プリンセス弥生……いいですわ……♡」

セシリアって、こんなにも妄想する女の子だったかな？

イギリス貴族としての矜持はどこに消えた？

「む？ もう一人もお出ましてみたいだぞ」

やっと来たのか……って、なんか一夏だけ息切れしてない？ なん  
で？

「遅いぞ！ 今まで何をやっていた！」

「ろ…廊下が混んでいて……」

「だとしたら、別の部分で急ぐようにしろ！ いいな！」

「で…でも……毎回毎回あんな風に道を塞がれたら……」

バチコロン！ ……と、青空の下に実に気持ちのいい音が響きまし  
たとさ。

「い・い・な？」

「わ…わかりました……」

今回の一撃で、一夏の脳細胞ってどれだけ死滅したのかな？

このまま行けば、一夏がデフォルト以上に馬鹿になりそう……。

「ならば、二人共とつとと並べ」

「二は…はい……」

転入初日に早くも伝統の出席簿アタックを目の当たりにして、シヤ  
ルル君が完全に怯えてますがな。

無理も無いと思うけどね……。

そう言えば、私ってこれが初めての実習訓練じゃない？

前は『アレの日』で休んじやったし。

そう思うと、ちよつとだけドキドキしてきましたよ？

## ARCHITECT

「それでは、今からISの起動及び歩行訓練を開始する」

「「はいー」」」

遂に始まりました、弥生ちゃんの初めてのIS実習。

実況はこの私、板垣弥生でお送りします。

今日は一組だけじゃなくて二組の皆もいるから、返事一つだけでも結構な迫力があるね。

と言っても、二組の生徒の数は一組に比べて僅かに少ないけど。

こうして見ると、改めて退学者が出たんだなって実感する。

「マジで痛い……」

「だ…大丈夫？」

「なんとかかな……。これが初めてじゃないし……」

「初めてじゃないんだ……」

だよ。呆れますよね。

そのお気持ち、よく理解出来るよ。

「まずは目の前で実戦でもして貰おうか。丁度、専用機持ちがいることだしな」

あ、これはアレですね。山田先生の大活躍するヤツですね。

私も早く山田先生の勇姿を見たい。

普段は可愛い人がふと見せるカッコいい姿って、かなりキュンってするよね。

これも立派なギャップ萌え。

「そうだな……。オルコット、それから凰。二人共前に出る」

「はい」

はい。ご指名入りました〜！

「あの……実戦って、私達でするんですか？」

「別に私はそれでも構いませんけど……」

「そう慌てるな。お前達の相手はちゃんという。もうそろそろ来ると思うんだが……」

ど…どこから来るんだ？

やっぱり、上空からの自由落下？

「ん……う？」

この耳を劈くような音は……？

「わ……きやああああああつ!? そ……そこをどいてくださ……い!!」

急いで上を見ると、来ましたよ！ 山田先生が緑色のIS：『ラファール・リヴァイヴ』を纏った状態で絶賛落下中!!

早く一夏の傍から離れないと……あれ？ なんか方向が違くない？

なんか慌てている山田先生と目が合って……って！ 私の方に落ちてきてない!?

「姫様!!」

「弥生!!」

「弥生さん!!」

「やよつち!!」

皆が私の名を叫ぶ中、私自身は恐怖のあまり、足が竦んで動けなくなり、思わず目をギュツと瞑ってしまった。

「弥生いいいいいいいい!!」

その時、眩い光と共に私の体が誰かに抱えられて、少し離れた所に行った。

「あ……あれ……？」

「大丈夫か？ 弥生……」

「い……一……夏……？」

いつの間にか白式を纏っていた一夏が私をお姫様抱っこをして、ホッと一安心していた。

「怪我は……無いみたいだな。よかった……」

こ……怖かったあ……(泣)

今のは割とマジで怖かったよお……!

「嘘でしょ……？」

「一瞬でISを展開して、弥生さんを救出するなんて……」

「そんな馬鹿な……」

ド……ドキドキしたあ……。

まだ心臓がバクバクしてるよお……。

「あ……！」

ん？ 一夏がこつちを見てる？

(急いでいたから、思わず弥生の事を抱きかかえちまったけど……弥生の体って細くて軽いんだな……。あ、ISを装着してるから軽いのは当たり前か)

出来れば早く降ろしてくれませんか？

皆が私達に注目してるんですけど。

(ヤ……ヤバイ……。俺……今すっごくドキドキしてる……。顔を赤くしている弥生って滅茶苦茶可愛いな……。それに、このスーツもとてもセクシーで……。俺、やっぱり弥生の事を……)

少しだけ向こうを覗き見ると、ついさつき落下してきた山田先生は、見事に地面にクレーターを形成していた。

勿論、皆はちゃんとその周囲から退避している。

あ……先生がこつちに来た。

「いつまでそこでイチャついているつもりだ」

「ぐえっ!？」

うわあ……！ まさかの出席簿を縦にした一撃が炸裂した……。

これはISで守っていても痛そう……。

「無事か？ 板垣」

「は……はい……なん……と……か……」

「そうか」

やっと私は一夏の腕から降ろして貰えた。

まさか、こいつに助けられるとは思わなかったな……。

「しかし……」

ん？ なんか織斑先生が微笑んでいる？

「先程の動きは悪くなかった。よく板垣を助けたな」

「え？ あ……ははは……」

で、一夏は一夏で珍しく照れてるし。

学校ではアレでも、やっぱり弟の事は心配なんだな。

素直じゃない大人だ。

(でも……家族を大事にする人は嫌いじゃないかな)

その気持ちは私もよく理解出来るしね。

うん。家族は大事。これ絶対ね。

列まで戻ると、ラウラを含めたいつものメンバーが急いで寄って来た。

「ひ…姫様！ お怪我はありませんでしたか!？」

「う…うん……。大丈夫……だよ……」

「よかったですわ……」

「やよっちい〜!」

「にしても……」

白式を解除して戻ってくる一夏を一瞥する。

「まさか、あの一夏があんな動きを見せるなんてね……」

「少し驚いたぞ……」

もしかして、今の一夏が一夏の秘めた潜在能力の片鱗なのかもしれないね。

これを機にやる気が出ればいいんだけど。

「山田先生。今回は偶然にも誰も怪我などが無かったからよかったものの、次からはこのような事が無いようにしてほしい」

「はいい〜……本当にすみませんでしたあ〜……」

背中を丸めてシユン……となっている様子からすると、本当に反省しているみたい。

確かに今回は危なかったけど、次回から気を付けてくれれば十分だと思います。

「さて、時間もあまりない事だし、早く始めるか」

「は…始める?」

「それってまさか……」

「そのまさかだ。お前達の相手は山田先生だ」

「わお……」

「なんかその反応酷くないですか!？」

二人仲良く同じリアクション。



そりや、数秒前に目の前に墜落した人間と試合をしろって言われたら、誰だつて似たような反応するわな……。

「五月蠅いぞ。とつととしろ」

「は……はいー」

セシリア、鈴、山田先生はこれ以上もたついで織斑先生の逆鱗に触れる前に、急いで上昇して試合を開始した。

「さて……あの三人が試合をしている間に……そうだな。デユノア、山田先生が使用しているISの説明を頼む」

「わ……分かりました」

私達の頭上で繰り広げられている試合を眺めながら、シャルル君が丁寧に説明を始めた。

この辺は教科書に書いてある通りの説明だったから、ここで言う必要は無いと思うから割愛する。

え？ それでも知りたい？ だったら自分で調べるがよろし。

三人の試合は思っている以上に拮抗していて、原作のようにセシリアと鈴の代表候補生コンビが圧倒される……なんてことは無かった。

山田先生も地味に慌てている様子だし。

「あれがああの山田先生か……？」

「まややん先生……すごいね……」

「ほう……。最初見た時はどうかと思つたが、どうしてなかなか……。それに、あの二人もやるな……」

おお？ ラウラが彼女達を褒めてる？ これはまた珍しい。

「はあああああああああああああああああつ!!!」

セシリアのレーザーライフルの銃身が山田先生の顔面に突きつけられて、同時に山田先生が両手に持つている二丁のアサルトライフルがそれぞれにセシリアと、背後から斬りかかろうとしている鈴の眼前に向けられていて、鈴の近接ブレード『双天牙月』の刃が山田先生の首元に当たる直前で静止していた。

「……………」

三人が三人共動けなくなった状態で完全に硬直。

私達もその空気に当てられて、誰も言葉を発しない。

「そこまで！」

織斑先生の一言によつて、ようやく時間が流れ出す。

試合をしていた三人はゆっくりと降りてきて、列の傍に着地した。

「凄かった……」

「山田先生……カツコよかった……！」

「うんうん！　なんか見直しちゃったかも！」

どうやら、織斑先生の目論見は大成功みたいだ。

この人、山田先生の試合を見せて、普段からちよつと生徒達に舐められている彼女に対する態度を改めさせようと考えたんでしょ？

多分、私だけじゃなくて、実際に相手をしたセシリアと鈴もその事は分かってたんじゃないのかな？

だからこそ、二人も本気で試合をしたんだと思うし。

「これぐらいは出来て当然だ。これでも山田先生は元日本の代表候補生だったからな」

「候補生止まりでしたけどね……」

「何を言う。お前は私の補欠だったじゃないか」

「「補欠っ!?!」」

えつと……補欠って事は、万が一にで試合の前に織斑先生が怪我をしたり体調不良に陥った場合は、代わりに山田先生が試合に出ていた可能性があるって事？

「山田先生って……」

「実は、物凄い人だった？」

「あはは……」

皆の前で色々と暴露されたから、照れくさそうに頭を掻いている。

まあ……可愛いからよし！

「では次に……」

「おや？　織斑先生がこちらを見てる？」

……こんな時は大抵が碌な事じゃない……。

でも、授業中のこの人に逆らうなんて、素手でマジンガーZEROに挑むのと同じぐらいに無謀な行為だ。

だから、私は流れに身を任せます。それが一番だと信じて。

「板垣。少しいいか？」

「は……い……？」

案の定、今度は私をご指名ですか。

はいはい、行けばいいんでしょ、行けば。

「一度、お前の専用機の事も全員に見せておいた方がいいと思っとな。構わないか？」

「それぐ……らいなら……別……に……」

「ならば、早速展開をしてくれ」

「分かりま……した……」

心を集中させて……！

(来て！ アーキテクト！)

私が頭の中で念じると、すぐにアーキテクトの待機形態である鉛色の腕輪が反応し、自分の体に装甲が展開、装着されていく。

「出来ま……した……」

「展開まで約0.4秒程か。見事だ」

「ど……どうも……です……」

何かある度に頭を撫でるのは止めませんか？

「あ……あれ？ ちょっと待ってよ。弥生のその機体って……」

「嘘……ですわよね？」

「これって……」

「なんと……」

予想通り、代表候補生組はこれを見て驚きを隠せないか。

他の皆は『なんのこっちゃ』って顔をしている。

本音だけは例外で、一人だけ唸り顔でこつちを見る。

「これが板垣の専用機。機体名は『アーキテクト』だ」

「「「やっぱり……」」」

四人でハモったし。

「ど……どういう事だ？ 鈴達は弥生の専用機のことを知っているのか？」

「知っているって言うか……」

「なんて言えばいいのでしょうか……」

言葉に迷っている感じ？

私が説明をしてもいいけど、それだと時間が掛かっちゃいそうなんだよな。

「ふむ……ボーデヴィツヒ」

「はっ！」

「板垣の機体について説明してみせろ。無論、お前が分かる範囲で構わん」

「了解であります！」

ラウラが列から一步前に出て、皆に説明を始める。

「アーキテクト。正式名称は『アーキテクト・フレーム』と呼称される代物で、普段はISの基本フレームとして使用されています」

「き…基本フレームだと？ 弥生のISはちゃんとしたISではないのか？」

「本来ならばな。だが、見た限りだと、姫様のアーキテクト・フレームには本来ならば無い筈の装甲が幾つか追加されている。恐らく、これらの増加装甲はフレームを本格的なISとして使用するにあたって後付けで装備されたんだろう」

「やんと。その慧眼の通りだよ、ラウラ。」

「流石は軍人さんだ……。見事な目をしているね。」

「フレームと言っても、この状態でもちゃんとISとしての最低限の機能は備わっている。絶対防御やシールド・エネルギー、PIC等がな」

「それじゃあ、板垣さんの機体でも、ちゃんと他のISみたいに空中飛行は可能なの？」

「無論だ。ただし、他の専用機や訓練機とは違って、そこまで速度は出ないと思われるが、増加装甲を見る限り、他の機能も何らかの形で強化されている可能性があるな」

「これまた大当たり。」

この『アーキテクト』は、フレームとして使われている他の『アーキテクト』とは違って、おじいちゃんの手によって強化改造が施されている。

そこまでずば抜けた魔改造は流石にされてはいないけど、IS学園に配備されている訓練機よりも僅かに上……ぐらいの性能はあると思う。

「この『アーキテクト・フレーム』は現状、全てのISに共通規格として正式採用されていて、第1世代、第2世代、第3世代の全てに使われている」

「って事は、オルコットさんのティアーズも、凰さんの甲龍も、織斑君の白式も、一度装甲を外せば板垣さんが纏っているヤツと同じ物が出て来るって事？」

「そうなるな。それと、これはあくまで噂ではあるが……」

ラウラが一息入れてから、再度話し出す。

「このアーキテクト・フレームは、全てのISの元祖とも言える『白騎士』にも使用されていた……と言う話もある。本当かどうかは不明だがな」

ほえく……私も知らないような情報が次々と飛び出してきたし。

にしても、ラウラが普通に説明をして、皆と話している光景が信じられない。

この子もある意味でコミュ症じゃなかったっけ？

「……………もういいぞ。よくやってくれた」

「はっー」

来た時と同様に敬礼をして、ラウラは列に戻っていった。

「これでお前達も板垣の機体がどのような物かは理解した筈だ。他のISとは毛色が違うからと言って、決して変な目で見ないように。いいな？」

「「「はっー」」」」

うおっ!? ここから皆の返事を聞くと、凄い迫力だな……。

耳がキーンってした……。

「武装は……今はいいか。時間がない」

よかった……。

ここから更に武装まで展開してみろって言われたら、どうしようかと思っただよ。

このアーキテクトには、前に見せた『インパクト・ナツクル』以外にも多数の装備が拡張領域内に格納されている。

拡張領域の大きさだけなら、全IISの中でもトップクラスじゃないのかな？

だって、実際にかんりの数の武装があるからね。

例えば、インパクト・ナツクル専用の換装装備とか。

「さて、では今から各班に分かれてIISの実習を行う事にする」

あゝ……あの、面倒臭そうなアレね。

確か、専用機持ちがグループリーダーをするんでしょ？

それって私も該当するのかな？

仮にする羽目になったとしても、私のグループに集まる人なんて一人もいないだろけど。

じよ・・・冗談でしょ？

山田先生と鈴、セシリアとの模擬戦が終了し、その後に私の専用機を紹介してから、本格的な実習が始まった。

「これから専用機持ちをグループリーダーにしてから実習を行う事にする。確か・・・織斑にオルコット、凰にデュノアにボーデヴィツヒ、それから板垣の6人か。ならば、各グループにつき8人・・・は無理そうだから、5〜6人ごとのグループになってから実習をする事にする。では、早速分かれろ」

・・・やっぱり、私もするんですね・・・。

まあ・・・何気に人気がある一夏や噂の転入生であるデュノア君、代表候補生としての実績があるセシリアと鈴に現役軍人であるラウラの所には皆は来るだろうが、私みたいに専用機を持っているだけの女の所に来るような酔狂な奴なんて一人もいる訳が・・・。

「よろしく頼むぞ！ 弥生！」

「わ〜い！ やよつちと同じグループだ〜！」

いきましたよ・・・。

箒と本音が真っ直ぐに私の所にやって来ましたよ・・・。

「私達も来たよ！ 板垣さん！」

「何気に板垣さんって成績優秀だし、期待してるよ！」

「うんうん！」

あ・・・あれえ〜？ なんてかな〜？

いつもつるんでいる二人はともかく、他の子達が私の所に来る理由が分からないですよ〜？

(って言うか、成績だけならセシリアの方が上なんですけど)

色々と言われているけど、私はあくまで学年次席。

つまりは二番目、ナンバー2に過ぎないんだよ？

オリンピックで言えば銀メダル。

金メダルと銀メダルの間には山より高く海より深い隔たりがあるのですよ？

試しに他の所を見てみると、意外や意外、思ったよりも皆が均等に

分かれていた。

「さっきの織斑君、カツコよかったよ！」

「デュノア君！ 丁寧に教えてね！」

「セシリアなら大丈夫でしょ」

「鈴、お願いね！」

「さっきの説明、丁寧に分かりやすかったよ！ ボーデヴィツヒさん！」

な…なんと言う事でしょう……。

まさか、織斑先生に何か言われるよりも前に皆がやるべき事を成してしまった……。

これはもう、やるしかない流れになってますな……。

「よし、ちゃんと分かれたな」

「それじゃあ皆さん、これからグループリーダーさんが訓練機を1班につき1機ずつ取りに来てくださいね。機体は『打鉄』と『リヴァイヴ』がそれぞれ3機ずつです。どちらでも好きな方を班の皆で決めて取りに来てくださいね。一応言っておきますけど、早い者勝ちですからね」

……だ、そうだ。

さて、やると決めた以上は、中途半端な事はしたくない。

どっちの機体にしようかな？

念の為、他の皆の意見も聞いておこうか。

「み…皆…は…どっちが…いい…？」

「私はどちらでも構わないぞ」

「私も」

「私達も」

どっちでもいいと言うのが一番困るんですよ？

(行つてから決めるか)

こんな時は、適当に決めてしまおう。

別に今から試合をするわけじゃないんだ。

細かい機体性能なんて気にする必要は無いか。

テクテクと訓練機が置いてある場所まで歩いて行くと、もう既に何



体は無くなっていた。

今あるのは打鉄とリヴァイヴが一機ずつ。

「あ、板垣さん。どちらにしますか？」

「え……つと……」

訓練機の隣に立っていた山田先生がにこやかに訪ねてくる。

言い方がまるで店員さんみたいだけど、学生時代にコンビニとかでバイトをしていた経験でもあるんだろうか？

「こつち……で……」

「リヴァイヴですね。分かりました」

実は私、リヴァイヴみたいな無骨な機体が好きなんだよね。

機体色が緑色なのも私的にポイントが高い。

なんか、ミリタリーっぽいから。

「あ、大丈夫ですか？ ちゃんと運べますか？」

「なん……とか……」

いくらインドア派だからと言って、これぐらいは運べますよ？

重そうに見えるけど、IS自体はタイヤがついた移動式のコンテナの上に乗ってるわけだし、コンテナ自体にもある程度の自走機能は搭載してあるから。

つーわけで、ゴロゴロと皆がいる場所まで運んできました。

「お待た……せ……」

コンテナの上からリヴァイヴを降ろして、地面の上に置く。

勿論、これも簡単な操作で自動的に行われる。

「誰から……にす……る……？」

「出席番号順でよくない？ その方が分かりやすいし」

確かに。

こつちとしても、そのほうが有難い。

「じゃあ……出席……番……号……で……」

そんで、このメンバーの中で一番早いのは誰よ？

「んじゃ、まずは私だねー」

そんな訳で、私指導の下で行われる実習が開始された。  
ちゃんと教えられるか不安だけど、やるっきゃない！

「と……取り敢えず……は……装着……をしてから……起動して……少しだけ歩いてみ……ようか……？」

「うん！ りよ〜かいです！」

意気揚々と最初の子がコックピットに乗り込んで、装着、起動、歩行と順調にこなしていく。

「上手……だね……」

「そ……そう？ 前に授業で乗った事があるから……って、あの時は板垣さんは休んでいたんだっけ……」

「うん……」

因みに、あの時、私が休んでいた理由は一夏以外の皆が知っている。

同じ女子と言う事もあって、あの苦しみは女なら誰しもが共通して必ず体験する事だから、敢えて知らせておいた……と、後で織斑先生から聞かされた。

「また何かあったら遠慮なく言っただけ？ アレに関しては、ここにいる皆（一夏は除く）が関係しているんだから」

「そう……だね……」

なんて優しい子なんでしょ……。

名前は知らないけど。

一人目の子が終了し、二人目の子に移る。

二人目の子も一人目の子を見習って、何の問題も起こさずに装着から歩行までを済ませていった。

「ちゃんとやっているな」

おや、織斑先生がやって来た。

見回りでもしているのかな？

「少し見ていたが、矢張り板垣は人に教えるのが上手だな」

「そうかも。板垣さんの教え方ってすっごく分かりやすかったし」

そ……そこまで褒められると……少し照れる。

「板垣の教えに関する才能は、織斑の一件でなんとなく分かっていたが、こうして直に見せられると、改めて実感する」

「そう言えば、前に弥生は一夏にも勉強を教えたことがあったな」  
「マジで!？」

そんな事もあったね〜……って言ってるけど、実は何気にあれってまだ続いてるんだよね。

アイツってば、流石に部屋まで押しかけるような事は無くなったけど、それでも授業で分からない所があれば真っ先に私に聞いてくるんだよ。

お蔭で、私の貴重な休み時間がパーですよ。

「私は他の連中の所を見回る。その調子で続けていくように」

「二「はい！」」

ははは……元気だね。ホント。

言われた通り、調子を崩さないようにしながら実習を続けていくと、箒の番になった時にちよつとしたトラブルが起きてしまった。

「あー！ しまったー！」

なんと、三番目の子が立った状態のまま装着解除をしてしまったのだ。

基本的にISは降りる時には膝立ちとかして姿勢を低くしないといけない。

そうしないと、コックピットが高過ぎて次の人が乗る事が出来ないから。

「ご……ごめんなさい……。これどうしよう……」

「弥生、どうする？」

ムッフッフツツ。

心配ご無用なのですよ、御兩人。

普通ならば原作のようにISを展開してお姫様抱っこ……的な展開になると思われるかもしれないが、こんな事もあるのかと！ 実は密かにこのような時の対策に関する勉強をバッチリとしてきているのですよ！ ニヤツハツハツ〜！

「任せ……て……」

え〜つと……私の記憶が確かなら、この辺りの装甲に……

「あった」

見つけましたよ〜。

脚部にあるこのハッチを開けてから、そこの緊急用のタッチパネル

をピピピ……とな。

すると、あら不思議。

さつきまで立っていたリヴァイヴがゆっくりとしゃがんだじやありませんか。

「「「おお〜！」「」」

むふふ〜……驚いてる驚いてる。

頑張つて勉強をした甲斐があるつてもんですよ。

「す…凄いですね〜…。まさか、緊急用のタッチパネルを使うなんて……」

おっと。いつの間にか傍まで来ていた山田先生に褒められた。

「緊急用？」

「そうです。ISには緊急用の対策として、普段は使えないタッチパネルが設置してあるんです。今回みたいに、立った状態での装着解除などをしてしまった場合、ほんの少しではありますが、これを使って外部からコントロールをして、ISを動かす事が可能なんです」

私が勉強してきたことを全て言われてしまった。

流石は山田先生。そこに痺れる！ 憧れる〜！ ……つて、これ前にも言わなかった？

「板垣さん。どうしてコレの事を知っていたんですか？」

「いぎ……という時…の為…に……勉強……していたんです……」

「ええっ!? これって、習うのは3年生になってからですよ!？」

「「「はあっ!?!」「」」

え……マジ？

私、普通に勉強しちやっただけですけど……。

「はわ〜……板垣さんって本当に勉強熱心なんですね〜……」

「そ…これほど……でも……」

しまったなく……。

まさか、そこまで先の事を予習してしまっていたとは。

これは完全に予想外。

「板垣さんって……」

「うん……。私達が想像している以上に凄い子なのかも……」

「普通に尊敬しちゃうな……」

尊敬しないで！ しなくていいから！

「弥生はやっぱり凄いな……♡」

「やよつち……♡」

はいそこ！ 目をハートマークにしてないで、さっさとやるよ！

じゃないと、織斑先生の雷ならぬ出席簿が落ちるからね！

「次……は箒……だよね……？」

「おっと、そうだったな。では、よろしく頼む」

「ん……」

箒もここで遅れればどんな目に遭うかは分かっている為、素早く丁寧にやってくれた。

勿論、降りる時はしゃがんでくれた。

「最後……は本音……」

「よし！ がんばるぞ〜！ お〜！」

この掛け声だけで不安になってしまおうが、実際にはそんな事は無かった。

「うんしょ……うんしょ……」

こちらの想定以上の動きをしてくれて、今まで一番早く終わった。

「終わり〜！」

「早……」

「本音ちゃんって、こんなにキビキビした動きが出来たんだね……」

「意外な一面を垣間見た感じがする……」

コラコラ。そんな事を言うもんじゃないぞ？

気持ちには理解出来るけど。

本音のお蔭で、私達の班が一番早く終わることが出来た。

これは余談だが、原作では険悪なムードを漂わせていたラウラの班だったが、ここでは……

「そうだ。その調子だ」

「よし……と。これでいいのかな？」

「よくやった。では次！」

この通り。私の心配が杞憂であった事を思い知らされた。

もしかして、このラウラは私が知っている彼女よりも『いい子』なのでは……？

・  
・  
・  
・  
・  
・

「では、午前の実習はこれで終了にする。午後からは今回使用した訓練機の整備の実習を行う予定なので、昼休みが終わり次第、教室ではなくて第1格納庫へと直接集合するように。猶、専用機持ちは訓練機と自身の専用機の両方の整備をしてもらうから、そのつもりで。……解散！」

全ての起動テストを終わらせた私達は、使ったISを格納庫に戻してから、またグラウンドに戻ってきた。

私達以外の班も比較的順調に終わらせたから、時間に余裕を持って格納庫に置いてくれた。

先生コンビは連絡事項を言い終えてから、そそくさと去っていた。

(そう言えば……まだ私、一夏にお礼言っただけだったな……)

形はどうであれ、一夏に助けられたわけだし。

お礼位は言っておいたほうが……。

(いや……それだけじゃ物足りないかも)

もしも一夏が動かなかったら、絶対に重傷、下手をすれば死んでいたかもしれない。

礼を言うだけで終わりって言うのは、流石にどうだろう。

(もうちょっとちゃんとした礼をして……)

でも、何をすればお礼になるのかな？

一夏が喜ぶような事と言えば……。

(……さっぱり分からん)

いかに一夏が鈍感大魔王とは言え、一応は男にカテゴライズされる存在だ。

ならば、一般的に男が喜ぶような事をしてあげればいいのではないか？

(男が喜ぶ事……男が喜ぶ事……)

……なんだろう？

前世が男だったから、私が昔されて嬉しかったことをしてやれば……

(前世の私ってば最強クラスのボツチだったじゃねえか!! 女の子と付き合ったことは愚か、手も繋いだことも無いよ!!)

いや……何かある筈だ! よく思い出せ! 私!!

(………そうだ)

『アレ』なら喜んでくれるかもしれない。

元男だから分かるけど、男ってのは大抵が馬鹿ばかりだからな。女が大した事ないって思っているような事でビツクリするくらいに喜んだりするんだよ。

(よし! そうと決まれば早速、一夏に……)

「弥生? ボツツとしてどうしたの?」

「……!? な……なんでもない……よ……」

顔を覗きこむようにして、いきなり鈴に話しかけられてビツクリした……。

授業が終わったのに、ここでジツとしているのはよくないよな。うん。

キュゥ……

「」「」「あ……」「」「」

「ううう……」

このタイミングでお腹の虫が鳴るし〜!

これはかなり恥ずい……。

「空腹なのですか!?! ならば、急いで食堂に急ぎましょう! 姫様!」

「そ……そうだ……ね……」

「私達もお腹が空きましたわね。早く着替えて行きましようか？」  
「だな」

今はとにかく、お昼の事に集中しようか。

一夏へのお礼はその後って事で。

(あれ？ この辺りで箒から屋上で弁当食べよう的なお誘いがあるんじゃないかったっけ？ 何も言われなかったな……)

別に、何も無いなら私はいいんだけど。

その方がこっちには都合がいいし。

(今日は何を食べようかな？)

午前で色々と疲れたし、ガッツリとしたものを食べたいよな。

多分、ラウラも一緒に来るよな……。

でも、そうなるとシャルル君は？



## 弥生ちゃんの耳かきボイス（一夏編）

お昼になって、私達はいつものように食堂に向かうが、今日は少しメンバーが違っていた。

「ぼ…僕も一緒によかったのかな？」

「気にすんなって。どうせ、これから嫌でもここには何回も通う事になるんだし。場所を覚えるついでに、こうして皆と少しでも交流出来る。一石二鳥じゃないか」

「そう…かもね」

まず、例の二人目の男性IS操縦者（仮）ことシャルル君が同行。

それに加え、私の隣には例の如くドイツからやって来た可愛い護衛さんが座っている。

一夏の事はやっぱり毛嫌いしているみたいで、彼もそれを察してか、ラウラからは離れた場所に座っている。

「その金髪は一夏が誘ったにしても、なんでアンタまでいるのよ……」

「私は姫様の護衛。姫様の行く所に私ありだ」

「そこまで堂々と言われると、逆に納得してしまいそうですわね……」  
結果として、私達が座っている席には合計で9人もいることになる。

なんだ、この個性に溢れまくったグループは……。

明らかに目立ちまくっている……。

「と……と……と……」

「ん？ どうした？」

「その……板垣さんの目の前に置いてあるソレは……」

「」「」「あぁ……」「」「」

え？ 私のお昼ご飯がどうかした？

なんで皆して納得したような顔になってるの？

「ひ……姫様……。本当にその量を食べるのですか……？」

「そう……だ……けど……？」

今日の私のお昼は、超大型のハンバーグ5段重ね。

ジュージューと言う音が食欲をソソリ、ナイフで切ればたつぷりの肉汁がジワァ〜と滲み出てくる。

このデミグラスソースの香りが最高だよね〜♡

「弥生さんのお食事には早めに慣れた方がよろしいですわよ?」

「もうこの光景は日常茶飯事」

「IS学園の名物の一つになりつつあるわね」

嘘でしょ? 私は普通に食事をしているだけだよ?

「ほらほら。早く食べましょ」

「そ…そうだね……」

「う…うむ……。姫様の食事に口出しをするなど言語道断だしな」

口の中が涎で一杯になつてきた……。

もう辛抱たまらん! いただきま〜す♡

「はむ……♡」

んん〜♡ 美味し〜♡ なんてジュージューなんですよ!

さくさくとナイフとフォークが進んでいくよ〜!

「ええ〜!?」

「なんと言う食べっぷりか……。はっ! そうか! 姫様は有事の際

に備えて、こうして日頃から栄養を蓄えているのか!」

んなわけねえだろ。

単純に普通の量じやお腹いっぱいにならないだけだよ。

「いつ見ても、弥生の食事風景は凄いわよね〜」

「見慣れてくると、清々しさすら感じてくるな」

「やよっちは本当に美味しそうに食べるからね〜」

実際に美味しいからね。

食事をしながら、初めて顔合わせをした簪が自己紹介をしていた。

そうだ。後で一夏を呼びださないといけないんだった。

皆の目を盗みつつ、私はテーブルの下に携帯を隠して、密かに一夏の携帯にメールをしておいた。

これを食べ終えたら、まずは購買部に行かないと。

.....

・  
・  
・  
・

昼飯を食べ終えた後、俺は弥生に屋上へと呼びだされた。

俺から行くことはあっても、彼女の方から俺を呼ぶことはこれまで一度も無かった。

だからだろうか。

俺は心臓をバクバクさせながら屋上へと向かっていた。

(女の子から呼び出されて、その場所が屋上……。このシチュエーションは……まさか……)

違うと頭で理解していても、どうしてもソツチの妄想が先走ってしまふ。

自然と足が速くなっていき、すぐに屋上へと続く扉に到着した。

「ぼ……僕の名前は織斑一夏……」

緊張のあまり、何故か自己紹介をしてしまった。

震える手でドアノブを握りしめて、そつと扉を開ける。

昼の太陽が眩しく照りつけて、俺の目に直撃する。

腕で目元を隠しながら歩いて行くと、そこには……

「やっと来た……ね……」

髪を美しく靡かせながら優美に佇んでいる弥生がいた。

冗談抜きで、彼女の姿に見惚れてしまった。

「ど……どうし……た……の……？？」

「えっ？？ あ……ははは……」

あ……あれ？ どうしちまつたんだ俺？

頭が沸騰して、思考が上手く回らないぞ……。

「ど……どうして俺をここに呼んだんだ？」

「お礼……をした……くて……」

「お礼？」

俺、何かしたっけかな？

「さつき…の授業……で……」

「あ……」

山田先生が落ちて来た時の事か。

確かにあれは危なかったよな。

「こつち……来て……」

「お……おう……」

弥生の手招きに応じて近づくと、彼女は屋上に備え付けてあるベンチに座った。

「……座って……」

ポンポンと自分の隣を叩くので、俺はそつと弥生の隣に座った。

「な……何をする気なんだ？」

何であつても、弥生にする事なら俺は全てを受け入れるけどな。

「じつと……してて……ね……」

「ん？」

や…弥生さん!? 俺の顔に手を添えて何をなさるおつもり!?

ま…まままままままままさか本当に!?

(俺は……俺は遂にやっちゃまうのか!?! やっちゃうのか!?!)

心臓の鼓動が最高潮になっていく。

顔も凄く熱くなって、きつと真つ赤になっているに違いない。

よく見たら、弥生の顔も赤くなっている。

彼女も緊張しているのか？

「うんしょ……つと」

「ぬわっ!?!」

いきなり顔を持っていかれて、視界が反転する。

気がついた時には、俺の顔は横になっていた。

(あれ……? この側頭部に感じる柔らかな感触は……)

弥生の顔が上に……つて、胸に隠れてよく見えないし!

弥生の胸ってこんなに大きかったの!?

(これは……膝枕か!?)

弥生の膝枕……だと……!?

これは本当に現実なのか……？

「動かない……でね……？」

弥生の手に握られているのは……耳搔き棒？

「男の人……が喜びそう……な事って分からね……くて……」

「それで耳かきを？」

「う……ん……」

弥生に膝枕をされながらの耳かき……。

なんだこの天国は!?

俺は一生分の幸運をここで全て使い果たしてしまったんじゃないのか!?

「い……痛かった……ら……言って……ね……」

「わ……分かったよ……」

ある意味、さつき以上に緊張してるよ!!

ヤバイ……! 動悸が激しくなっていく……。

「お……」

弥生の耳かき棒（意味深）が俺の耳に入ってくる……。

「まず……は……手前……から……」

き……気持ちがいい……♡

女の子にしてもらう耳かきって、こんなに気持ちがいいものだったのか……。

弾……俺は今、間違いなく新たな境地に立った気がするよ……。

「思ったより……も……溜まって……る……ね……」

最後に自分で耳掃除をしたのっていつだっけ？

一々記憶してないしな。

（最高だ……最高すぎる……! 今日間違いなく、今までの人生で最良の日だ……!）

耳から直接聞こえる音を聞きながら、弥生のしてくれる耳かきの快楽に溺れていく。

こんなに気持ちのいい事が、この世の中に存在したのか……。

……

一夏が弥生から耳掃除をして貰っている場所から少し離れた場所に、複数の影が見えていた。

「弥生の様子が少しおかしいと思っていたら……！」

「や……やややややや弥生さんがあの男に膝枕をををを……！」

「なんて羨ま……げふんげふん。けしからんことをしているのかしらね……！」

「私の嫁に耳掃除をしてもらうなんて……！ 許さん……！」

「私も頼んだらしてくれるかな……？」

屋上のドアから顔を覗かせているのは、弥生に好意を抱いている女子達。

その顔は様々な色に染まっていて、怒りや嫉妬、果ては純粋に羨ましがっている者も。

「おのれ……！ なんで姫様はあのような男に……！」

「って言うか、どうして僕まで連行されてるのさ……！」

そして、今日やって来た転入生組も一緒にいた。

ラウラも他の女子達と同様に怒りを露わにし、シャルルは明らかに疲れている。

「ちよつと待て皆。ここはひとつ、冷静に考えようじゃないか」

「そ……そうですね。ここで弥生さんが織斑一夏に好意を抱いていると考えるのは早計ですわ……！」

「確かに、動揺しすぎて冷静さを欠いていたわね」

「深呼吸をして……ス……ハ……！」

箒とセシリアと鈴と簪が揃って深呼吸。

傍から見れば、なんじやこれな光景である。

「まず、なんで弥生が一夏にあんな事をするに至ったかを考えよう」

「ええ。恐らくですけど、今日の午前の実習で助けられたのが直接の原因でしょうね」

「弥生って優しいだけじゃなくって義理堅くもあるしね。助けられた以上はちゃんと相手にお礼をしなくちゃ……って考えたんじゃないかしら？」

「何があったかは知らないけど、それなら納得」

恋する乙女の推理力は凄まじい。

この瞬間だけ、彼女達の頭脳はコロンに匹敵しているかもしれない。

「姫様……いくら助けられたとはいえ、あのような男にすら慈愛の心をお与えになるとは……。なんと優しい人なんだ……。まるで聖母のようなお方だ……」

「それはちよつと大袈裟なんじゃ……」

この場にて貴重な常識人枠のシヤルル。

しかし悲しいかな。彼（彼女？）の言葉は誰に届いていない。

「もしもあの時、おりむー以外の方が助けてたら、あそこには別の人がいたのかな？」

「「「はっ!」」」

本音の何気ない疑問に、箒とセシリアと鈴と簪とラウラの五人に雷が落ちた。

「や……弥生の耳かきか……。それは素晴らしいな……♡」

「弥生さんの耳かき……。弥生さんの耳かき……。弥生さんの耳かき

……」

「や……ちよ……ダメよ♡ そこは耳じゃないつてば♡」

「なんで私は別のクラスなんだろう……」

「ひ……姫様からの耳かき……。だと……! して……ほしいな……」

箒は頭がお花畑になり、セシリアは完全にオーバーヒート。

鈴は妄想の世界に入り込み、簪は別クラスである事に絶望。

ラウラは純粋な心で弥生からの耳かきを求めていた。

「一夏と板垣さんって……。もしかして付き合ってるの?」

「「「あ?」」」」

シャルルの迂闊な発言をしつかりと聞き取った面々は、言った本人に向かって全力のメンチを切る。

「ひいつ!?」

己の発言が彼女達の逆鱗に触れるどころか、思いつきり正拳突きをかましてしまった事を瞬時に理解したシャルルは、速攻で謝った。

彼女達がコント染みた事をしている間も、弥生と一夏の耳かきタイムは続いていた。

・

・

・

・

・

・

「(っ)……に……大きい……のが……」

お……お……お……!

頭が別の意味で痺れてきた……!

「……取れた」

耳から耳かき棒を抜いてから、先端についている耳垢を傍に敷いているティッシュの上の置く。

俺の脳内フィルターには、その様子すら眩しく見えて仕方が無い。

「仕上げ……にこの……反対……のフワフワ……で……」

「はふ……」

フワフワ（名前は知らない）で耳の中をかき回される感触もまた……。

「最後……に……フ……」

「ひゃうっ!?」

み……耳に息を吹きかけられた!?

弥生は俺を萌え殺す気か!?

「くす……ぐった……かった……?」



「す…少しな」

嘘です。最高に気持ちよかったです。

「逆……向い……て……」

「おう……」

少しだけ頭を浮かせて、顔を逆向きにする。

「………!?!」

ちよつと待てよ……反対側に向くって事は、つまり……。

(弥生の方を向くってことじゃないか！ や…弥生の匂いが直に!?)

吸い込め！ 肺一杯に吸い込め俺！ しかも、顔の近くに弥生の腰とかががががが……)

ぬおおおおおおおおつ!!! 沈まれ！ 沈まれ我が分身よ!!

ここが一番の頑張り時だぞ!!

「いく……よ……」

さつきとは逆側の耳の中に棒が優しく侵入してくる。

手つきが丁寧で、全く痛みとか感じないんだよな……。

今までも誰かに耳掃除をしてあげた事があるんだろうか？

「一…夏……」

「なんだ？」

「ありがとう……」

……なんでもない一言の筈なのに、その言葉が俺の心に深く響いた。

これが胸キュンってやつか……。

「一夏……が助けて……くれな……かったら……どうな……っていた……か……分……か……ら……な……か……つ……た……」

「あれぐらい、どーってことないって。寧ろ、俺の方が礼を言いたいくらいだよ。弥生にはいつも勉強とか教えて貰ってるし……」

弥生にはどれだけ礼を言っても言い尽くせない。

それなのに、恩返しをされているのは俺なんだよな……。

おほ………♡ そこ………そこ………いい………。

「それ………そ………気にしな………くても………いい………。勉強………を教えている………のも………お礼………をしている………のも………私………が勝手………に………」

してる……だけ……だから……」

弥生……お前はどれだけ……。

「本当に優しいんだな……」

「そんな……事は……ない……よ……」

そして、どれだけ謙虚なんだよ……。

俺だけじゃない。箒達も弥生に感謝しまくってるんだぞ？

「あ……」

余りにも気持ちがよくって、なんだか眠気が……。

「眠い……の……？」

「みたいだ……」

弥生が俺の頭を優しく撫でてくれた。

「午後……も忙しく……なりそう……だから……少し……仮眠……すれ……ば……？ 時間……になった……ら……私が……起こす……から……」

弥生の目覚ましか……最高だな。

「おや……すみ……」

弥生の声を聞きつつ、耳から感じる気持ちよさを堪能しながら、俺は重たくなった瞼を素直に閉じることにした。

今、この瞬間だけは……俺は間違いなく世界一の幸せ者だ。

だって、自分が惚れた女の子に耳かきをして貰って、その上、その膝枕で眠る事が出来るのだから……。

君の事を好きになったのは……間違いじゃなかった……。

## 弥生ちゃんの耳かきボイス（楯無編）

放課後になって、私は本音に頼んで、ある場所へと連れて行ってもらった。

「やよつちく。生徒会室に何の用があるの〜？」

「お礼……を言おう……と思って……」

「お礼って？」

「この間……の事件……の……」

「ああ……あの時の……」

そう、私はまだ更識楯無生徒会長に、無人機事件の時に助けて貰ったお礼を何もしていない。

一夏の方が先になってしまったのは皮肉だが、同じクラスの間と上級生では、会う機会も必然的に限定されてしまう。

だから、今はこうして時期を窺ってこつちから訪問するしか会う方法が無い。

本音は生徒会の役員だから、こうして一緒に来てもらった……と言う訳だ。

因みに、簪は私が生徒会室に行くのと知ると、途端に難色を示して、いつものように格納庫に行ってしまった。

別にそれに関しては何も言わない。

時期的に考えて、まだ更識姉妹の仲はお世辞にも良好とは言えないと思うから。

でも……

「なん……で……一緒……に来た……の……？」

「私は姫様の護衛！ 姫様の行く所と同行するのは当然の義務です！」

「そ……そう……」

なんでかラウラも私達について来た。

これと言って邪魔じゃないから、来ること自体は私も構わないんだけど……。

「ラウラウは偉いね〜」

「ふっ……。これぐらい、軍人として当然だ」

ニヒルな表情をしているが、傍から見れば背伸びをしている幼女にしか見えない。

ちよつぴり微笑ましい。

生徒会室は、学園にある他の施設や教師とは少々、趣が違う。

なんと云えばいいのか……。昔懐かしの学校を彷彿とさせると言いますか……。

とにかく、そんな感じ。分かる人には分かる……。と信じたい。

「ノックしてもしもし？」

本音が申し訳程度にノックをするが、次の瞬間には一切の躊躇なく扉を開けた。

「ノックをした意味が無い!？」

ラウラ、ナイスツツコみ。

「しつれ〜しま〜す♡」

仕方なく、私達も本音に続く形で生徒会室へと入っていくことに。

初めて入る生徒会室には、大きなテーブルが中央にデン！と置かれていて、そこには……

「いらっしやい……」

IS学園のパンフレットにも顔写真が載っていて、以前に入学式で顔を見かけた更識楯無が疲れた顔で座っていた。

・  
・  
・  
・  
・  
・

「お嬢様。本当に大丈夫ですか？」

「なんとかね〜……」

結局、私は昨晚は一睡も出来なかった。

あんな映像を見た直後に熟睡出来る人間がいるとすれば、そいつは間違いなく人としての心が無い存在だろう。

眠る事が出来なかったのは虚ちゃんも同様で、彼女の目の下にも見事な隈が出来ていた。

「あまり無理をしないで、早く部屋に戻って休まれた方がいいのではないですか?」

「この状態で寮に戻るのはちよつとね……」

仮にも生徒達の長である私が体の不調を見せていれば、それだけで皆が不安がる。

本当は、目の下に隈が出来ている姿なんて他人に見せたくはないんだけど。

だから、今日の授業は目の下の隈を誤魔化すために、伊達眼鏡を掛けて受けた。

なんでか受けはよかったけど。

「今日は書類仕事とかも無いし、もう少しだけここで休んでから寮に戻る事にするわ……」

「ならば、私もお付き合います」

「ありがとうございます……」

肉体的にと言うよりは、精神的に疲れ果てている。

知りたくなかった真実。私の理想の全否定。

正直言って、これはかなり堪える……。

コンコン

『ノックしてもしもし?』

あら? この声は……本音ちゃん?

「あの子が自分から来るなんて珍しい……」

虚ちゃんの言う通り。

普段は虚ちゃんに引つ張られながら来るのに、今日は自らの足でここに来た。

何かあったのだろうか?

「あ」

こつちが返事をする前に開けちゃった。

あの子らしいと言うか……。

「いらっしやい……」

……あれ？ 本音ちゃんの後ろに誰かがいるような……。

「失礼……しま……す……」

「失礼する」

ええええええええっ!? 弥生ちゃん!? なんで!? どうして彼女がここに!?

それと、その隣にいるのドイツから来たって言う転入生のラウラちゃん!?

あの二人がどうして一緒に来ているの!?

「かいちよく? 目の下に隈ができてるよく?」

「あはは……ちよつとねく……」

流石に、本音ちゃんにはアレの事は言えないわよね……。

この子には刺激が強すぎるから……。

「あ……あの……」

「ああ……貴女の事はよく知ってるわ、板垣弥生さん」

「え?」

「何気に貴女って結構な有名人になってるもの」

「そ……うなんです……か……?」

学年次席で、学園で一番の大飯食らいで、あの織斑君と仲がいいって。

他にも、代表候補生達の子達といつも一緒にいるから、必然的に目立つちやうのよね。

それに……この子は簪ちゃんの大事なお友達だから……。

「私は更識楯無。IS学園の生徒会長よ」

「は……初め……まし……て……」

「ええ。初めまして」

彼女と話すのはこれが初めてだけど、噂通りの礼儀正しい子みたいね。

伊達に『あの人』の義娘って訳じゃないみたい。

「私はドイツの代表候補生の「ラウラ・ボーデヴィツヒちゃん……でしよう。」……最後まで言わせろ……」

あらら、拗ねちゃった。ちよつと可愛いかも。

「それで、こっちの子が……」

「本音の姉で、この生徒会でお嬢様……会長の補佐をしている布仏虚と言います。初めまして、板垣さん」

「ど……うも……はじめまし……て……。本音……にはいつ……もお世話……に……な……つて……て……」

「いえいえ。こちらこそ、妹がご迷惑を掛けてませんか？」

「もう……お姉ちゃん……」

……まるで、ご近所に住む奥様の井戸端会議みたいな会話ね……。

「あの……体調……が優れない……んです……か……？」

「あ、これ？ 大丈夫よ。ちよつと寝不足なだけだから」

「寝不足だと？ 感心せんな。私が聞いた情報では、IS学園の生徒会長は自由国籍を持つロシアの代表だとも聞く。それ程の人物が寝不足とは、どういう事だ？」

あはは……このちつちやな現役軍人さんは痛い所をついてくるわね……。

「代表ともなると、休みの日も色々忙しいのよ……」

「むう……。それを言われるとこっちも言葉に詰まるな……。確かに、国家の代表ともなれば、我々のような代表候補生とは比較ならぬい程に忙しいだろうな……」

よかった……なんとか誤魔化せたっぽい？

「お邪魔……だった……です……か……？」

「べ……別に気にしてないわよ！ これと言って何かをしていた訳じゃないしー」

「でも……その隈……」

「寝不足程度、どうって事無いわよ！ ほらー！」

なんて言いながら、少しだけ強がってみる。

我ながら、似合わない事をしているって自覚はあります……。

「で？ 弥生ちゃんはここに何の御用があったのかしら？」





だって」

「どういう意味？」

「他にも何かお礼がしたいって言ってるんだよ。ね〜？」

「う……ん……」

「そんな……。別にそこまで気にしなくてもいいのよ？ あの時の私は、殆ど義務感でしたようなものだし……」

「それで……も……助けられた……のは事実……ですか……ら……」

弥生ちゃん、なんていい子！

伊達にあのお嬢様学校に通っていただけはあるわね……。

「そ……うだ……」

「ん？」

弥生ちゃんが端の方にあるソファーに移動して、そこに座った。

なんでそんな場所に？ 座るなら椅子の方に座ってくれればいいのに。

「ごっち……に来て……くれま……すか……？」

「何かしら？」

うくん……無表情だから、弥生ちゃんの意図が全く読めない。

この子は何がしたいのかしら？

「ご……に座って……」

「うん？」

言われた通りに彼女の右隣に座ったけど……。

しれっとラウラちゃんと本音ちゃんも、弥生ちゃんの左側に座ってるし。

「頭……を……に……つと……」

「ふあ!？」

弥生ちゃんにそつと頭を掴まれて、そのまま彼女の膝まで一直線。

「やよつち……また……」

「うう……姫様あ……」

また？ またって何？

って言うか、これってもしかしなくても膝枕!?

「眠気……で辛そう……に見えた……から……。人肌……に触れていれ

…ば……少し……は寝やすくなる……かもしれ……ない……です……よ……？」

「弥生ちゃん……」

「どうして……どうして貴女はそこまで他人に優しくできるの……？」

「一番辛い目に遭っているのは、間違いなく弥生ちゃんなのに……。私の頭を弥生ちゃんが優しく撫でてくれる。」

「久しく誰かに頭を撫でられた事なんて無かったから、不覚にも胸が高鳴った。」

「ついで……だから……」

制服のポケットから、弥生ちゃんが耳かき棒を取り出した。

「え？ 私に耳かきをしてくれるの？」

「ごうし……て……耳かき……をしていれ……ば……眠気……も促進……される……かも……」

「そう言うと、弥生ちゃんは徐に私の耳に耳かき棒を入れてきた。」

「綺麗……にしてま……すね……」

「そ……そう……？」

「そう言われちゃうと、なんか照れちゃうわね……」

「んん……♡」

「気持ちいい……♡ 弥生ちゃんの耳かき……いいわあ……」

「また姫様の耳かきが……」

「いいなあ……」

「さつきから気になってたけど、他にも弥生ちゃんに耳かきをして貰った子がいるの？」

「なんか羨ましい……って！ なんでそんな事を考えてるの!？」

「どうで……すか……？」

「うん……上手ね……」

「それほど……も……」

「ボソボソと聞こえる音に紛れて、弥生ちゃんの『ん……』とか『……』とか聞こえる。」

「この手付き、まるでお母さんみたい……」。

(そっか……。弥生ちゃんって、母性に溢れてるんだ……)

この暖かさは、誰にも真似出来ることじゃない。

成る程な……。弥生ちゃんが皆に好かれる理由……。なんとなく分かった気がする……。

「右……が終わった……から……。今度……は……」

「ん……」

右側の耳がスッキリした時点で、私はかなり眠くなっていた。

弥生ちゃんに促されながら、私は体ごと動いて顔を逆向きにした。

「ごつち……。もそこま……。で……。汚れて……。ない……」

私も女の子ですもの。

いくら忙しくても、手入れは怠ったりはしないわ。

「いきます……。ね……」

左耳にも耳かき棒が入って来て、あの気持ちよさが再びやってくる。

「外側……から……。順に……」

コリコリと音が聞こえ、それが段々と奥に近づいてくる。

痛みは全く無く、なんと说不い気持ちよさだけが耳全体に広がる。

(これは……。いいかも……)

さつきまで段階的にきていた眠気が、ここにきて急激に襲ってきた。

「弥生ちゃん……。私……」

「寝てもいい……。ですよ……。？」

「そう……。させて貰うわね……」

さつきまでは、少しでも寝たら最悪な悪夢を見てしまうと思っていたけど、今は……。今だけは……。きつと、最高の夢が見れそうな気がする……。

「おやす……。み……」

微睡に身を任せながら、私は弥生ちゃんの温もりに包まれながら目を閉じた。

.....

.....

.....

.....

.....

「あら？」

暇潰しに書類整理をしていたら、急に静かになった。

板垣さんがお嬢様を膝枕して耳かきをしていた筈なのに。

「す〜……す〜……」

板垣さんの膝の上で、お嬢様が静かな寝息を立てていた。

「よかった……」

あの映像を見てからこつち、お嬢様はずっと眠れないでいた。

あんな凄惨な光景を、画面越しにとは言え目の当たりにすれば、誰だつて眠れなくなつて当然だ。

事実、私だつて昨日から碌に寝ていない。

本音に心配を掛けさせないようにしてはいるが、それでもいつか限界は来る。

「ん？」

よく見たら、板垣さんの隣にいる本音とボーデヴィツヒさんも、彼女に寄りかかるようにして眠っていた。

「うふふ……」

そして、耳かきをしている本人もいつの間にか夢の中に入っている。

その手に握られている耳かき棒は手から離れて、ソファアの上に零れ落ちた。

「こんな風に目の前で寝られると、こちらも眠たくなってしまうわね……」

まさか、事態の中心にいる板垣さんにお嬢様が心を癒されるとは、

なんだか皮肉ね……。

「さて……と」

奥の部屋から四人分のブランケットを取ってきて、彼女達の体にかけておいた。

「お嬢様がいるから、ここは大丈夫でしょう……」

猛烈な眠気に勝てなくなってきた私は、念の為に扉の鍵を閉めた状態で生徒会室を後にして、寮の部屋へと戻る事にした。

「よい夢を……」

今ならば、私も悪夢を見る事だけはなさそうな気がする……。

感謝します……弥生さん。

因みに、生徒会室の扉は内側から鍵を開けられるので御安心を。

## 弥生ちゃんの添い寝ボイス（ラウラ編）

まさか、生徒会室で寝落ちしてしまうとは……。

我ながら情けないと言いますか……。

楯無さんが辛そうに見えたから、少しでも癒し効果になればいいと思つて耳かきをしてあげただけだけど、彼女の眠気に釣られて私まで眠ってしまった。

しかも、私の隣ではラウラと本音まで一緒に寝ている始末。

いつの間にか虚さんはいなくなっているし、結局、生徒会室にはソファで眠っている私達だけが取り残された。

「不覚……。よもや、あのような形で眠ってしまうとは……」

で、起きた頃にはもう外が暗くなりかけていたから、急いで部屋まで戻ってきたわけだけでも……。

（まさか……ラウラが私と同じ部屋になっているとは……）

いやね？ この部屋にいつの間にかもう一台のベッドが運び込まれていた時点で、なんとなく想像はしていたんだよ？

でもさ、希望的観測してしたくなるもんじゃない？

部屋に戻る前に偶然出会った山田先生曰く、『キチンとした部屋割り完了するまでは、一時的にラウラを私と同じ部屋にしてほしい』……とのこと。

ラウラがこっちに来ているって事は、シャルル君は一夏の部屋にいる訳か。

でも、彼の部屋って隣だよね……？

つまり、転入生が二人揃って同じ方角に来たのか……。

「少し遅れましたが、これから暫くの間、ご一緒させていただきます。どうか、よろしくお願ひします！ 姫様！」

「う……うん……よ……ろしく……」

暫く……ね。

それがどれだけの間、続くかは未定だけど。

「しかし、これで姫様の護衛もしやすくなります。姫様をお守りする為には、常日頃からご一緒するのが一番ですから」

それはアレか？ 私の前で堂々とストーカー宣言ですか？

(……同じストーカーでも、一夏よりかは遥かにマシか)

いくら顔がよくても、向こうは男。

私だって、付き纏われるなら、男よりもラウラみたいな美少女の方がずっといいに決まっている。

(にしても、ラウラの荷物……少ないなく)

今、この部屋の中にあるラウラの荷物は、彼女が持ってきたキャリーケースに入っている物と、少し大きめなギターケースのような入れ物だけ。

「荷物…はそれだ…け…なの…?…」

「はい。必要以上に荷物を持ってきて、いぎという時に身動きが取れないなど論外ですから」

あら、素敵な考えですこと。

「持って来たのは、学園から所持を許された幾つかの銃火器と、後は制服の予備と軍服……後は普段から使用しているノートパソコン等の機器ぐらいいですね」

うん。見事なまでに娯楽系の荷物が皆無です。

それに、着替えが制服の予備と軍服って……私服は無いんかい。

(これは……私の想像以上の世間知らずかもしれない……)

ラウラが来た事によって、私はヒツキーから苦労人に性格変更ですか？

別に特殊な本なんて読んでませんけど？

って言うか、それは本来、隣にいるシャルル君(仮)の役割なんじゃないんですかね？

「ところで、姫様はお食事はどうなされますか？ 今からでは食堂も開いていないと思われませんが……」

その通り。

窓から見える空はすっかり暗くなってきていて、この時間帯になると食堂は閉まってしまふ。

こればかりは完全に私達の自業自得だから、誰も責める事は出来ないんだけど。

「適當……に作る……よ……」

「姫様は料理が出来るのですか？」

「一応……ね……」

料理と言っても、殆ど我流なんだけどね。

少しはネットや本とかで調べはしたけど、基本は自分の匙加減で作ってるかな？

「すぐに作る……から……ちよつと待って……て……ね……？」

「え？ まさか、私の分も……？」

「う……ん……。一人分……も……二人分……も……作る量……は大して……違わない……から……」

「あ……ありがとうございます……」

はい。いい返事いただきました。

と言うか、ラウラの事だから、軍から支給された栄養補助食とか普通に夕食として食べそうなんだよね。

そんなものを食べているのを横目に食事なんて出来ないでしょ。

だったら、私の手で食事管理をすればいいだけの話。

私がいる限りは、彼女にちゃんとした食事をさせますよ！

さて……何を作ろうかな？ エプロンエプロンと……。

・

・

・

・

・

「ぐちそうさま……でし……た……」

「ぐ……ちそうさまでした？」

食事を終えて、ラウラが見よう見まねで私と同じように手を合わせる。

「実に美味でした……。姫様は勉強や指導能力があるだけでなく、料



理も出来るのですね」

お口に合ったようであり。

私が作った夕飯は、ラウラに合わせてオムライスにした。

彼女の好みが分からなかったから、万人受けするオムライスをチョイスしてみました。

そうしたら、彼女は喜んで食べてくれた。

私？ 私は勿論、自分用に超巨大オムライスにしたけど？

お蔭で買い込んでいた食料が一気に無くなってしまった。

また機会を作って買いに行かないと。

「ん？」

ラウラの口の周りにケチャップがついている。

本人は気が付いていないようだ。

「じつと……して……」

「は……」

ティッシュを一枚取ってから、ラウラの口についたケチャップを拭いていく。

「す……すみません……」

顔を真っ赤にして俯いてしまったラウラ。

軍人として堂々たる立ち姿を見せていた彼女から一変、まるで年相応、いや……それ以下の少女のような表情を見せた。

(……あれ？ この子ってこんなにも可愛かったっけ?)

いや……ラウラが美少女なのは認めるけど、こんなあどけない顔つて見た事が無いような気が……。

(もしかして、ラウラは私次第では原作のような暴力キャラから脱却出来るのでは?)

ラウラは生まれた時から軍の中で育ってきたせい、良くも悪くも世間を知らない。

謂わば、彼女は真っ白なキャンパスのような存在なのだ。

このまま原作のような道を歩めば、原作のような性格になるかもしれないが、ここで私の手によって少しでも普通の女の子のようにしていけば、あるいは……

(可能性はある……よね?)

幸いな事に、なんでか彼女は私に凄く懐いてくれている。

私も嫌な気分はしないし、特別な事をせずに今みたいな普通の生活を継続していければ……。

(よし！ これはもうやるっきゃない！)

上手く行けば、原作のようにセシリアと鈴に暴力を振るう事も無くなるかもしれない。

今日見た感じでも、二人とは普通に話していたし。

(そうと決まれば、早速……)

食べ終わった後のお皿洗いだ！

え？ 食事の後に片づけをするのは当然でしょ？

考え事をして忘れかけていたけど。

「お皿……を洗って……る間……に……シャワー……を浴びてきてい……よ……」

「そ……そんな訳には！ 皿ならば私が洗います！ 姫様がお先にどうぞ！」

「ラウラ……は転入したて……で疲れている……でしょ……？」

「しかし……」

「いいか……ら……ね？」

彼女の頭を少しだけナデナデしてあげると、ラウラは観念したのか、大人しく荷物の中からタオルなどを取り出してシャワーへと向かった。

ラウラがシャワーを浴びている間に、パパッと終わらせませますか。

……あれ？ そう言えばあの子……着替えはちゃんと持ってたよね？

・  
・  
・  
・  
・  
・

ここ最近で割とマジで慌てた。

だって、シャワーから戻ってきたラウラが一糸纏わぬ姿になって出てきたから。

本人的にはOKなのかもしれないが、日本では…と言うか、どこの国でも普通はアウトだよ！

だから、私は急いで彼女に私の持っている服を適当に着させた。

「夕飯を作って頂いただけでなく服まで……。姫様にはお世話になってばかりで申し訳ございません……」

「き……気にしない……で……」

善意と言うよりは、私が普通に耐えられなかっただけだから。

いくら同性とは言え、越えてはいけない一線ぐらいは弁えているつもりだよ？

寧ろ、同性だからこそ超えてはいけないと言いますか……。

因みに、彼女に渡したのは「タ〇リの音楽は世界だ」と書かれた白いTシャツ。

どこで手に入れたかは………忘れた。

流石に下着は履かせたから、今のラウラはTシャツと下着だけという、世の男子を欲情させるような格好になっている。

「次……は私……が行ってくる………ね？」

「はい。……ゆっくりどうぞ」

別にこんな時まで敬礼をしなくてもいいのよ？

ラウラがいるから、シャワーを浴びた後も腕袋や靴下とかを忘れないようにつけないとな。

・  
・  
・  
・  
・  
・

姫様がシャワーを浴びている間、私はベッドに座って今日の事を振り返っていた。

(まだ初日だと言うのに、色々な事があったな……)

忌々しいと思っているあの男を見つけた矢先に、姫様の姿を発見して、すぐさま挨拶に行った。

あの方は驚いていらしたが、無理も無いだろう。

しかし、護衛の任を受けた以上は、必ずやり遂げる！

それがドイツ軍人としての生き様だ！

資料にもある通り、姫様は間違いなく、この国における重要な位置におられる人物。

故に、私が姫様の事をなんとしてもお守りしなくては！

姫様は単純に上流階級に属する人物であるだけでなく、様々な才能にも溢れている人だった。

午前の実習で見せた教練の上手さ。

食事の時も気を抜かずに大量にエネルギーを補給し、あの男にすら優しさを見せる広い心。

そして、放課後に生徒会室で見せた義理堅さ。

トドメに、先程の調理スキル。

……どれも、私には致命的に欠けているものばかりだ。

更には、姫様は非常に多くの交友関係を持っていた。

いや……あの方ほどの人物となれば、あれぐらいは当然かもしれないな。

あの人ぐらいなものだろう。各国の代表候補生達とああも親しくなれるのは。

昼食時も、あの男も一緒にいたと言うのに、姫様がいただけで不快さが消えていた。

それどころか、いつの間にかアイツの事を頭の中から忘れていたほどだ。

「なんなんだろうな……これは……」

姫様と一緒にいると、不思議と胸がポカポカしてくる。

この服を着させてもらった時や、頭を撫でて貰った時は、何故か本当に嬉しかった。

こんな気持ちは今まで感じた事が無い。

教官にすら抱いた事のない気持ちだ。

「けど……不快じゃないな……」

寧ろ、心地がいいと言うか……。

クラリツサなら、この感情がなんなのか知っているのだろうか？

「ふう……」

私が物思いに耽っている間に、姫様がシャワーから戻ってこられた。

姫様は青いジャージを上下に着て、タオルで頭を拭きながら出てきた。

よく見たら、その手にはシャワーを浴びる前と同じ腕袋が装着されていて、それは足も同様だった。

首元までジャージのチャックが閉められているから、事情は知らないが、姫様は人前にあまり肌を晒す事を好まないようだ。

そういえば、ISスーツも肌を露出しない全身を覆うタイプだったな。

タオルで長い髪を纏めながら、姫様がこっちに寄って来た。

「髪……は乾かし……た……？」

「あ……」

そう言えばまだだった。

考え事に夢中ですっかり忘れていたな。

「後ろ……向い……て……」

「は……はい……」

言われた通りに後ろを向くと、なにやら温かな風が吹いてきた。

「ジツとして……ね……」

ドライヤーで私の髪を乾かしてくれているのか……。

また胸がポカポカしてきた……。

本当になんなのだ？　これは……。

暫くして、すっかり乾いた私の髪を数回触って『よし』と呟いた後、今度はタオルを外して自分の髪を乾かし始める。

い…いや、ちよつと待て！　私だけが乾かして貰って、姫様に何もしないなんて有り得んぞ！

「ひ…姫様！　姫様の髪は私が乾かします！」

「え……？」

「大丈夫です！　お任せください！」

「ん……」

姫様は黙って私にドライヤーを手渡してくれた。

これは、私の事を信じてくれたと言う事か……。

ならば、絶対にヘマだけは出来ない！

恐る恐るドライヤーのスイッチを入れて、姫様の髪を触りながら乾かしていく。

(なんて触り心地がいい髪なんだ……)

濡れているせいもあるのか、姫様の黒曜石のように黒光りする髪は、部屋の灯りに美しく反射していて、その肌触りはスベスベで素晴らしかった。

貴重な芸術作品を扱うように、慎重に髪を乾かしていく。

私の乾かし方に何か不備は無いだろうか……。

今はそれだけが心配だ。

「……………」

姫様は気持ちよさそうに目を閉じたまま微笑を浮かべていた。

なにも問題は無い……と見てよさそうだ。

「お…終わった……」

初めての事だったので、かなりの時間が掛かってしまったが、それでもどうにかして姫様の髪を乾かす事に成功した。

ここまで緊張したミッションは久しぶりだ……。

私がドライヤーを使っている間、姫様は何も言わずにずっと私に体を預けてくれた。

それが何故か嬉しくて仕方が無かった。

「ありが…とう…ね…」

美しく微笑みながら、また私の頭を撫でてくれた。

今度はポカポカだけでなくドキドキもした。

おかしいな……。なんだか顔が熱いぞ……。

「少…し早い…けど…今日…は疲れた…から…もう休もう…か…」

そう言われて時計を見てみると、もう21時を回っていた。

「了解しました」

流星は姫様。

早寝早起きは生活の基本だからな。

教官もいつもそう仰っていた。

だが…なんでだろうな……。

もつと姫様のお側にいたいな……。

「あ…あの！ 不敬を承知でお願いしたい事があります！」

「ん…？ どうし…た…の…？」

「そ…その…」

どうした私！ しつかりしろ！ 一言言えばいいだけじゃないか

！ 簡単な事だ！

「い……」

「い？」

「私も姫様とご一緒に寝てもいいでしょうか!？」

言った…言ってしまった……！

なんて答えられるだろうか……。

やっぱりダメ…かな……。

「ふふ……」

「姫様？」

姫様が微笑みながら私を手招きしている。と言う事は……。

「いいよ……。一緒…に寝よう……？」

「……………はい！」

嬉しくなった私は、早足で姫様のベッドまで向かって、そのまま彼女が入っているシーツの中へと潜り込んだ。

これが姫様の温もりか……。

「電気……消す……ね……？」

「はい」

リモコンを使って姫様が室内の灯りを消す。

途端に部屋が真っ暗になるが、それでも姫様の温もりは消えていない。

「おやすみ……」

「おやすみさない……姫様……」

お互いに向き合うように寝て、暗闇の中で姫様はそつと目を閉じた。

普段から夜目に慣れているお蔭か、この暗さの中でも姫様の顔がよく見える。

少しして、姫様から穏やかな寝息が聞こえてきた頃を見計らって、私は思い切って姫様の体に静かに抱き着いた。

(最高の温もりだ……♡)

生徒会室でも寝たと言うのに、こうして姫様の事を直に感じているだけで、瞬く間に二度目の眠気がやってくる。

その本能に逆らおうとせず、己の睡眠欲に意識を委ねた。

今日は……いい夢を見れそうだ……。

・

・

・

・

・

ラウラが抱き着いてきた直後。

実は弥生はまだ起きてきて、いきなりの事に心の中で驚いていた。

(う……うわあ……。え？ なに？ マジでこの子が可愛いんですけ



ど?)

ラウラの純粹無垢な寝顔に、心臓をバクバクさせていた。(もしかして私は、本音に簪、山田先生に続く第4の癒し系キャラに出会ったのかもしれない……)

まさか、原作第一期のヒロインの一人に癒される日が来るとは、流石の弥生も完全に想定外。

そつと弥生の方からもラウラの事を抱きしめて、お互いの温もりを肌で感じながら、深い眠りへと落ちていく。

抱き合いながら眠る弥生とラウラは、まるで本当の姉妹のように仲睦まじく見えた。

## 舞台裏の役者達

更識家屋敷 夜

宵闇と静寂に包まれている屋敷内に、一際大きな男の声が聞こえてくる。

「先代様!! 先代様!! 大変でございます!!」

「どうした?」

黒服を着た声の主は、急いだ様子で楯無の父親である先代楯無がいる部屋へと入ってきた。

「はあ……はあ……あ……あの連中が……」

「何があったのかは知らんが、まずは落ち着け」

「は……はい……」

数回の深呼吸の後、男は汗を垂らしながら静かに報告した。

「先代様……。我々が拘束していた例の映像を撮影していた連中が、何者かによって拉致されました……」

「なんだと!」

普段は冷静沈着を地で行く先代が、目を見開くほどに驚いた。

「……一体何処の馬鹿がそんな事をした? あそこは我らの中でも特に手練れの連中を警備として回していた筈だが……」

「それが……」

黒服は少しだけ言い淀んでから、素直に話し出す。

「襲ってきたのは……ISです」

「ISだと……!?!」

予想外の襲撃者の正体に、驚きばかりが続く。

「どこの機体だ?」

「漆黒の体躯に異常なまでの腕の長さ……。機体の特徴が一致している事から、以前にIS学園を襲撃したと言う例の無人機の同型機だと思われま……」

「無人機か……!」

無人の機体ならば、仮に捕える事に成功したとしても、口を割らせることは不可能。

機体の解析ぐらいならば出来るかもしれないが、そう簡単に処を分からせるとは到底思えない。

「分かった……。で？ 怪我人などはいるのか？」

「いえ……。それが、ISはこちらには殆ど見向きもせず、施設だけを破壊して連中を捕縛、そのまま逃走をしました。僅かに軽傷者がいますが、それだけです。少なくとも、死傷者は誰一人もいません」

「不幸中の幸い……か」

ISに襲撃を受けて誰も死なずに済んだ。

普通ならば『運がよかった』とか『奇跡的』と喜ぶところだが、先代はそんなにも樂觀的な性格はしていなかった。

（間違いなく、襲撃者の目的は連中の拉致だけ。それ以外の事は眼中にすらなかつたと見るべきだ。しかし、それだけの事を易々とやってのける奴とは……一体何処のどいつだ……？）

現役時代の眼力を見せて思案し始める先代に、黒服がある物を差出した。

「それと、現場にはこんな物が落ちていました」

「なんだこれは……兎？」

黒服が見せたのは、黒いカードに白い兎が書かれた物だった。

「この事はお嬢様には……」

「いや。報告はしなくてもいい」

「よろしいのですか？」

「構わん。そもそも、アイツはこちらが連中を確保していた事すら知らないんだ。ならば、黙っていた方が賢明だろう。他の連中にも箝口令を出しておけ。いいな？」

「しよ……承知しました。では、失礼します……」

丁寧なお辞儀をした後、黒服は静かに部屋を退出していった。

「例の無人機と同型に兎の書かれたカード……。まさかな……」

……

・  
・  
・

「よしよし……作戦大成功！ 流石は東さん！ ブイ！」

篠ノ之束の移動式ラボ。

その研究室にて、束が一人で飛び跳ねながら作戦の成功を喜んで  
た。

「や〜つとゴーレムが役に立ったよ〜。どこかの無粋な馬鹿がレプリ  
カなんか作ったせいで、活躍の場が無くなっちゃからね〜」

彼女の背後では、まるで守護者のように無人機『ゴーレム』が鎮座  
していて、その真紅のカメラアイが怪しく暗闇の中で光っていた。

「束さま」

「お？ お疲れ様〜クーちゃん」

奥の方から銀髪のを髪を持つ幼さを醸し出す、束が『クーちゃん』と  
呼んだ少女である『クロエ・クロニクル』がやって来た。

「あの蛆虫共はちゃんと飛ばした？」

「はい。束さまの言いつけ通りに、あの連中は段ボール箱に詰め込ん  
でから、束さまが暇潰しで製作なされた使い捨ての片道限定のロケッ  
トにて、各国に点在している様々な違法研究所に送りました。勿論、  
『実験台としてどうぞ』と書いたメモと一緒に」

「お〜！ よくできました〜！」

嬉しさを全身で表現しながら、クロエの頭を撫でまくる。

「飛ばされる寸前、あの男達は泣きながら何回も『助けて』と訴えてき  
ましたが、それを聞く道理は全く無い為、無視しておきました」

「それが正解だよ。あいつ等は人命を無視どころか、自分達の性欲の  
発散させる道具ぐらいにしか思っていないからね」

笑顔でそう言う束だったが、その心の中はマグマのように憤怒に染  
まっていた。

「それならば、殺した方がよかつたのでは？」

「ノンノン。クーちゃんは分かってないね〜」

「……………？ どういう意味ですか？」

疑問符を頭に浮かべながら小首を傾げるクロエ。

それを見て、自分の指を指揮棒のように振るいながら説明をする。  
「あ〜んな糞虫連中の血で自分達の手を汚すなんて絶対に嫌じゃん。それに、あいつ等には死なんて生温すぎるよ。連中は私の大事なやつちゃんに人として最低最悪の事をしたんだよ？ だったら、同じような目に遭わせないと気が済まないじゃん」

嬉々として話す束の目にはハイライトが無く、完全に狂気が宿っていた。

その目を見て、少しだけ束が恐ろしくなったクロエ。

「そう……………ですね。あのような輩には、もはや人権など必要ないでしょう。この世に生を受けた事を後悔しながら、永遠に生き地獄を味わったほうがよろしいかと」

「うんうん！ クーちゃんも分かってきたじゃない！ えらいぞ〜！」

本当は分かった振りをしているだけなのだが、それも時間の問題かもしれない。

「早くやつちゃんに会いに行きたいなく。箒ちゃんに負けず劣らずの美少女だし、オツパイも大きいし……………グへへ……………」

「束さま。顔が思いっきりド変態です」

「だってだってだって〜！ このモニターで見る限りじゃ、やつちゃん的女子力と言うか母親力って半端ないよ？ もしも、やつちゃんのお胸にフワツ……………って抱きしめられたら、私でも思わず『お母さん』って呟いちゃうかも」

「それはちよつと大袈裟じゃ……………」

「そんな事無いって。クーちゃんもきつとやつちゃんの母親力の虜になっちゃうから」

「そうでしょうか……………？」

クロエから見ても、確かに件の少女……………やつちゃんこと弥生は魅力的な少女だが、束のほめ言葉は過剰な気がした。

(いずれにせよ、直に遭えば分かる事ですか……)

東とクロエが弥生と出会う日は何時になるのか。

それは誰にも分からない。

因みに、クロエによって放り出された『糞虫達』は、二人の思惑通りに違法研究所に掴まり、そのまま未来永劫、実験動物として生きることとなった。

これから先、彼らは死ぬことすらも許されず、人の姿を失い脳髓だけになっても猶、永遠に人体実験に使用され続けるだろう。

永遠に……永遠に……。

.....

.....

.....

.....

.....

「……………」

机の上にあるパソコンのディスプレイから漏れる光だけが室内を照らし出す。

褐色肌の少女はショーツだけを穿いた格好で椅子に座り、マウスを動かしながらボくつとしていた。

その後ろでは、彼女が『姉』と呼んでいた黒髪の美女がベッドの中で横になり、寝息を立てている。

「おや?」

突如、パソコンにメールが来た。

「これは……諜報部? もしかして、前に依頼していた例の少女の事が分かったのでしょうか……」

メールに添付されていたファイルを開くと、そこには彼女が望んでいるデータが表示されていた。

「流石は諜報部。仕事が早い」

机の引き出しの中から棒付きキャンディーを取り出して、口に咥えて、画面を下へとスクロールさせていく。

「名前はヤヨイ・イタガキ。なんとなく予想はしていましたが、やっぱりジャパニーズでしたか」

目を動かしながら、画面に映し出される情報を一字一句漏らさずに読んでいく。

「現在はIS学園の一年一組に在籍。ほう……？ 担任はチフユ・オリムラ……ブリュンヒルデですか。これはまた……」

キャンディーを舐めながらマウスを動かしていく。

「同じクラスにはイギリスの代表候補生に天災兔の実妹、更には噂に聞く男性操縦者君も一緒……と。最近になってフランスとドイツからも転入生が……。ドイツの方は例の黒兎部隊の隊長が……。これは別に問題は無いですが、フランスの方は……」

マウスをクリックして、シャルルの情報を画面全体に表示する。

「どっからどう見ても女でしょう……。こんなお粗末な男装でどうにかなると本気で思っているのならば、私はデュノア社の社長に脳を検査した後、即座に入院を勧めますね」

思わずジト目になる少女。

彼女がそうなるのも無理は無いが、先程までのシリアスが一時的にどこかに去ってしまった。

「つと、今はこんなバカの事はどうでもよかったんだ。どうせ、遅かれ早かれバレるでしょう。どうなったとしても私には関係無いですから」

確かにその通り。

画面を元に戻してから、スクロールを再開する。

「なんと……。どこかで聞いた名だと思ったら、彼女は彼の娘でしたか。いや……。よく見たら養女でしたね。しかし、血の繋がりは無くても娘は娘。重要人物である事には違いない」

更に下へと進んでいくと、そこで彼女が無表情になった。

「……成る程。納得しました。この情報が確かならば、彼女が姉さまの攻撃を砕いた事も頷ける」

啜っていたキャンディーを無意識の内に噛み砕く。

破片が膝や机の上に落ちて、少しだけ散らかった。

「ヤヨイ・イタガキ……。これが貴女の『正体』ならば、間違いなく彼女こそが我々の最大の障害になる確率が高い。それに……」

最後に啜っていた棒も、口から吐き出してゴミ箱へと直行させる。

「裏切り者の『雨』と『秋』もきつと近いうちに動き出すでしょうね。

一応、私達は彼女達の粛清も命じられていますが、そんなのは二の次です」

一番下まで画面を動かして、彼女の顔が怪しい笑顔に変わる。

「専用機の情報までは探れませんでしたか。ま、見ただけでなんとなく分かるからいいんですけど。それよりも……」

まるで得物を見つけた獣のように目を細めて、ペロリと舌なめずりをする。

「どうやら、面白い経歴の持ち主のようです……。これはいいカードを手に入れましたね……」

『姉さま』が寝返りをうち、それを見て彼女が微笑んだ。

「少し気分を変えましょうか。念の為にデータをコピーして……つと」

パソコンにUSBを挿し込んでからデータのコピーを開始する。

それを見届けてから、彼女は裸になって姉が寝ているベッドに潜り込んだ。

パソコンが静かに動く中、二人の女性の艶めかしい喘ぎ声が室内に響いていた。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・



都内某所にあるビジネスホテル。

その一角にある部屋にて、二人の女性が話し合っていた。

「その情報は確かなのか？ スコール」

「間違いないわ。信用出来る情報屋から教えて貰ったから」

バスローブを着た金髪の見目麗しい女性『スコール』が真剣な顔で対面している女性の顔を見る。

「『あの子』がずっと探していた『彼女』はIS学園に在籍している」

「その担当が千冬とはな……。皮肉っつーかなんっつーか……」

「気持ちは分かるけど、言っちゃ駄目よ。オータム」

「わーってるって」

スコールに『オータム』と呼ばれた女性は、苦笑いを浮かべながら手をひらひらさせた。

「いつ動く？ 出来れば早い方がいいと思うけど……」

「慌てちゃ駄目よ。下手に行動すれば、間違いなくアイツ等も動き出す」

「……だな。連中は裏切り者であるアタシ等を殺す事に躍起になるからな」

手に握っていた缶ビールをグイツと一気飲みして缶を握りつぶすオータム。

そのまま潰れた缶はゴミ箱へとポクイ。

「おし！ ……で、アイツにも知らせるのか？」

「一応ね。言わなかったら、絶対に後で面倒くさい事になると思うから」

「……だな」

今度はテーブルの上にある煙草の箱を手にとってから、一本だけ取り出して火をつける。

「プハ……。アタシ等の後任って……」

「『R』と『A』の二人らしいわ」

「あのレズ姉妹か」

「レズの部分に関しては、私達もあまり人の事は言えないけどね……」

この二人も立派なレズビアンだった。

「けど、近いうちに接触する必要はあると思う。そうしないと五月蠅そうだし」

「同感」

煙草を口から出して灰皿に押し付ける。

「けどよ、そうすれば確実に連中も動き出すんじゃないか？」

「かもね。その時は私達で迎撃すればいいだけじゃない？」

「簡単に言うなよ……」

げんなりしながら缶ビールをもう一本取ってからプルタブを開ける。

「タイミングを計る必要はあるでしょうね。念の為に『レイン』に連絡して『あの子』と接触して護衛みたいなきことをさせておこうかしら？」

「それがいいかもな。仮にもアメリカの代表候補生なんだし、それぐらいは楽勝だろ」

「IS学園の3年生でもあるしね。……普通に可愛い後輩として食べちゃう可能性もあるけど……」

「アイツもそれぐらいの分別はある……と信じてたい」

「そのセリフだけで、貴女がレインの事を普段からどう思っているのかが丸分りよ」

「本人には言うなよ？」

「はいはい」

そこからは、普通に雑談をしながら二人っきりの時間を楽しんだ。

この穏やかな時間が、逆にこれから起こる出来事の前触れである事を、この時の二人は知る由も無かった。

・  
・  
・  
・  
・  
・

IS学園を遠くから見渡せる高台。

そこに、美しい金髪を風に靡かせながら佇んでいる一人の『吟遊詩人』がいた。

「今はまだ……『その時』じゃない。ですが、時が来ればいずれは……」  
ポロン……と豎琴を奏でて、空を見上げる。

「少女達よ。今だけは一時の日常を楽しんで、その心の中に沢山の『幸せ』を溜めこんでください。いずれ来る『その時』に備えて……心が折れてしまわないように……そして……」

踵を返し、吟遊詩人が歩き出す。

その顔にはどこか決意が満ちていた。

「必ずや貴女達の事を止めてみせる。間違った道を歩む『妹達』を止めるのは……『姉』として当然の義務ですから……」

彼女の穏やかな顔からは想像も出来ない程に真剣な顔。

こうして、彼女達が知らない所でも、舞台は止まることなく進んでいく。

この世界の行く末は……誰にも分からない。

例え……『神』であつたとしても……。

僕だつて頑張ってるんだよ〜？

僕が転入して来て、もう五日が経過して、今は土曜日の放課後。

日本では週休二日制とやらになつてゐる筈なんだけど、このIS学園だけは例外みたいで、土曜日も普通に授業がある。

と言つても、授業があるのは午前だけで、午後からは基本的に自由な時間となつてゐる。

自由なんて、僕には最も縁遠い言葉だけどね……。

「つまりね、一夏がオルコットさんや凰さんに勝つことが出来ないのは、シンプルに射撃武器の特性をちゃんと把握してない事にあると思うんだよ」

「それ、前に弥生にも言われた事があるな〜。俺的にはきちんと理解しているつもりなんだけど……」

自由と言つても、このIS学園では、殆どの生徒達がこの時間を実習に当ててゐる。

下級生、上級生に関わらず、実習を重ねて少しでも腕を向上させることは大切だしね。

『『つもり』じゃダメだよ。上辺だけ知つていても意味無いよ？ 実際、さつき僕とやった模擬戦じゃ、殆どと言つていい程に間合いを詰められなかったでしょ？』

「ハイ……ソノトウリデス……」

一応、念の為に彼の實力を測る為に模擬戦を行つてみたが、結果は僕の圧勝。

いくら近接武器だけしか装備してゐないとは言え、一夏の専用機である『白式』の圧倒的な機動力と運動性があれば、いかようにも攻めることが出来たと思うんだけどなあ〜……。

「こう言つちやなんだけどさ、僕が攻撃してゐる最中に真正面から突つ込むのはどうかと思うよ？」

「んなこと言つても……。まだ上手く機体を操れないし、瞬時加速の成功率もまだまだ伸びないしな……」

「ん〜」

あれ？ ちょっと待ってよ……？

「ね…ねえ……そこにいる皆さん？」

「なによ？」

「なんですか？」

「なんだ？」

ある意味で最も有り得ない事を、僕は後ろで見ている三人に向かって聞いてみた。

「もしかしてさ……一夏つて、専用機を受理する前に訓練機を使った実機訓練とか一度もしなかったの？」

「「あ」」

ちよつと!? その顔を見ただけで分かっちゃうんですけど!?

「あの頃は訓練機も今みたいに使用出来なかったしな」

「一応、弥生さんに言われて体力トレーニングぐらいはしていたみたいですけど……」

「ぶっちゃけ、アイツが訓練機で練習している姿なんて、一度も目撃してないわね」

「やっぱり!?!」

そうハッキリと言われると、流石に驚くよ!?

「え……えつと……訓練機で練習しとかないとヤバいのか……？」

「ヤバいって言うか……」

この場合、なんて説明すればいいのかな……？

「えつと……。今の一夏は、運転免許を取得してすぐにF-1を運転しているようなもの……つて言えば分かるかな？」

「え？ マジで？」

「うん」

よかった……理解してくれた。

ちよつと幼稚な説明かもって思ったけど。

「あ……あのさ……鈴やセシリアも専用機の前は訓練機を使って特訓とかしてたのか？」

「「当然」」

「「デスヨネ」」

そりやそうでしょ。

僕だってそうしてたし。

「訓練機でISの操縦に関する基礎的な事を全てマスターして、そこから実力を認められた一握りの人間に専用機が特別に与えられるんだよ」

「うぐ……！　そう言われると、途端に罪悪感が……」

「で……でも、一夏のソレは、名目上はデータ取得の為に貸し与えられているんでしょ？」

「そうだとしても……な……」

一夏の顔色が一気に悪くなった。

なんでかお腹も押えてるし。

「けど……一夏って板垣さんから色々と教わってたんだね」

「ま……まあ……。弥生からは本当に沢山の事を教わってるよ。あの子がいなかったら、今頃は授業にすらついていけなかったと思う……」

「そこまで言うんだ……」

確か、板垣さんって学年次席になる程に優秀で、学園内でも密かに人気があるって聞いてるけど。

「その板垣さんは今日も来てないんだね？」

「弥生はあまりこう言った訓練には参加しないわよ」

「運動は得意な方じゃないらしいからな。かと言って、決して訓練を怠っているわけじゃないが……」

「時折、ジャージを着てトレーニングルームで運動をしている姿を見かけますわ」

僕の『目的』の一つに、板垣さんと接触して交友関係を持つ事があるけど、今のところは全くと言っていい程に接点が無い。

同じクラスだから、幾らでも話しかける機会はあると思っていたけど、今の彼女には僕と同じ時期に転入してきたドイツの子がいつもピッタリとくっついてるし、なんでかすれ違う事が多い。

一緒に行動する事があっても、その時に限って他の皆も一緒にいるから、どうしても板垣さんと二人つきりで話す事が叶わないし。

「今日は確か、簪さんや本音さん、ラウラさんと一緒に格納庫に向かつてましたわ」

「弥生の専用機もかなり特殊なものね。大方、簪や本音に整備の仕方でも教わってるんじゃない？」

「ラウラはその付き添いだろう。最近では完全に弥生に懐いて、後ろからチョコチョコとついていくのが日常風景と化しているからな」

同じ転入生なのに、どうしてこうも違いが出るのかな……？

あの子は板垣さん経由ですっかりクラスにも馴染んでいるし……。

一方の僕は、遠目から色んな人が見ていたり、物珍しげに話しかけてくる人が大多数。

いや……こんな格好をしていれば当然か……。

「え……えつと……なんか話が逸れちゃったね」

そこからは、一夏の白式の事（後付武装が無い事や、単一使用能力の事）を聞いて、使用許可を出した僕のアサルトライフルを使つての射撃訓練を実際にやってみた。

どうやら、白式には本来ある筈のセンサーリンクが存在していないみたいで、徹底的に近接戦だけを考えて造られた事が窺えた。

一夏の射撃の腕はお世辞にもいいとは言えなくて、止まっているのにすら当てるのに一苦労していた。

因みに、単一使用能力の事は既に板垣さんから教わっていたみたいで、僕が聞いた時はスラスラと答えてくれた。

板垣さんは一体どんな風に勉強を教えたんだろう……？

「そう言えば、板垣さんの実力つてどれぐらいなの？ 仮にも専用機を持つているって事は、それなりの腕は持つているって事だよな？」

これは『目的』云々に関係無く、僕の純粋な興味だ。

あの大人しそうな彼女に、どれだけの実力が秘められているのか。

僕だって代表候補生の端くれだ。

他の専用機持ちの実力を知りたいって気持ちぐらいはある。

「弥生の実力か……」

「弥生さんが試合をしている場面は一度も見た事がありませんわね……」

「あの弥生が武器を持って戦っている姿なんて、あまり想像出来ないけどね」

「あ、それは俺も思った。弥生には武器よりも、なんつーのかなく……生け花とか似合いそうな気がする」

「「それ同感」」

三人が同時に頷いたし……。

そっかく……誰も彼女の實力を知らないのか……。

ちよつとだけ残念かも。

それから、マガジンの中にある全部の弾を使い切るまで一夏に射撃をさせてあげた。

その後で少しだけ僕の専用機である『ラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡ』について説明をした。

「おい。貴様等」

「「「ん?」」」

いきなり上から声が?

「あ……アイツは……」

よく見ると、ピットからボーデヴィツヒさんが制服姿で顔を覗かせていた。

「いつまでもそうしていいいいのか?」

「ど……どういう意味だよ?」

なんだかピリピリとした空気になってきたな……。

「周囲を見ても分からないのか?」

「は?」

あ……あれ? さっきまで僕等と同じように訓練をしていた子達がいなくなっている??

「もうすぐアリーナの使用時間が終わるぞ? 早く撤収準備を開始しろ」

「「「ああ!!」」」

完全に忘れてた!! 僕としたことが……!

「あまり姫様達を待たせるなよ」

そう言うと、ボーデヴィツヒさんはピットの中へと引っ込んでいっ



た。

「姫様と言う事は……弥生も来ているのか!？」

「い…急ぎましょう! 弥生さんをお待たせするなんて論外ですわ!」

「ほら! アンタ等も急ぎなさい!」

「は…はい!」

なんでか、今の彼女達に逆らってはいけないような気がする!

僕等は急いで準備をして、ピットへと急いだ。

・  
・  
・  
・  
・  
・

ピットから更衣室へと入っていくと、そこには人数分のタオルとスポーツドリンクを持ってきていた板垣さんと更識さん、布仏さんとさっきのボーデヴィツヒさんがいた。

「お…疲れ…さま…」

「皆の分のタオルとスポドリを持って来たよ!」

「ちゃんと適度な温度にしてあるから」

気が利いてるな。

「さっすがはアタシの弥生! 気が利いてるわね!」

あ、同じ事を言われちゃった。

「勿論、皆さんにも感謝してますわ。ありがとうございます」

で、ここでオルコットさんがさりげなくフォローを入れるつと。

「タオルもスポドリも、姫様が態々ご用意してくださったのだ。有り難く使えよ。特に織斑一夏」

「なんで俺だけ名指しなんだよ……」

「ははは……」

理由は不明だけど、一夏って彼女に目の敵にされてるよね。

露骨な敵対意識は持たれてはいないっぽいけど、かと言って親しい訳でもない。

毛嫌いしているって言えばいいのかな？

「あ……」

このタオル……すっごくフワフワでいい匂いがする……。

「あく！ 生き返るわ〜！」

「本当だな。弥生が用意してくれたと思うと、猶の事そう感じる」

「このタオル……頂いてもよろしいかしら……？」

なんでオルコツトさんはタオルに顔を当てながら真っ赤になってるの？

「さて……と。汗も拭いて水分補給も済んだ事だし、早く着替えましょうか？」

「それがいいな。ならば、我々は向こうの更衣室に行くでしょう」

き……着替えか……。

なんでか一夏って僕と一緒に着替えたがるんだよね……。

しかも、部屋でもだらしなく上半身裸の状態でシャワーから出てくるし……。

本当に心臓に悪いんだよ……。

「んじや、俺等も着替えようぜ」

「えっと……僕はあっちのロッカーで着替えるよ……」

「え〜？ なんでだよ？ 一緒に着替えようぜ〜？」

またこれだよ……。

ちよつとは僕の身にもなつてよ！

「一夏……」

「弥生？」

板垣さん？

「男……の人……でも……肌を見られる……のが嫌……な人もいる……から……無理強い……はよくない……よ……？」

「その通りですわ。全くこの男は……」

ナイスフオロー！

うう……板垣さんって本当に気遣いが出来ていい子だなあ……。  
よく見れば見た目も可愛いし、凄く魅力的な女の子だよ……。  
例え命令されなくても、この子とは普通に友達になりたいよ。

「で……でも……」

「まだ言うか、お前は」

「まだ食い下がるの？」

「一夏もしつこくない？」

「日本……とフランス……とでは……文化の違い……もあるし……誰に  
だって事情……がある……んだよ……？」

「や……弥生にそこまで言われたら、何も言えないな……」  
「やつとか……」

「貴様はあれだな。『デリバリー』が足りないな」

「デリバリー？ 何を言ってるの？」

「ラウラウ。それを言うなら『デリバリー』じゃなくって『デリカ  
シー』じゃない？」

「そう！ それが足りんのだ！」

「ちゃんと分かってる？」

「ボーデヴィツヒさん……完全な天然キャラだ。」

「そして、板垣さんとセットになってる姿に違和感が無い……」

「なんか悪かったな、シャルル。しつこくてさ」

「べ……別に気にしてないよ」

「本当は凄く気にしています。」

「これからはもう少し自重してくれると助かるな……」

「それじゃあ、僕はあっちに行くから」

「おう」

板垣さん達がここから去っていったから、僕は一夏が今いる場所か  
ら遠く離れた一番端にあるロッカーまで行って着替え始めた。

「はあ……」

ほんと、着替えの度に過剰なまでに気を使うよ……

下手に無下にすれば学園での生活にも支障が出るし、丁度いい塩梅  
が見つからないんだよね……。

(今回は本当に板垣さんに助けられたな……。彼女がいなかったら危なかったかもしれない……)

これを切っ掛けにして、板垣さんとお近づきになれたらいいんだけどなく。

一夏の事もそうだけど、板垣さんの事もなんとかしないといけないし……。

僕等が着替え終わったタイミングで、山田先生が更衣室へと入って来て、一夏に大浴場が使用できるようになった事と専用機に関する書類について話して、先生と一緒に一夏は行ってしまった。

先に部屋に戻る旨を伝えてから、僕は一足先に行かせて貰う事にした。

・  
・  
・  
・  
・  
・

途中まで板垣さんとボーデヴィツヒさんと一緒に移動して、部屋の前で別れることに。

「それじゃあ、お疲れ様」

「うむ」

「し……っかり休ん……でね……」

部屋に戻ってからは、まずは着替えて、それから……

「……あれ？」

さつき……あの二人、隣の部屋に入っていかなかった？

「ま……まさか……!」

板垣さんって僕達の部屋の隣だったの!?

「なんで今の今まで気が付かなかったんだよ……僕……」

自分の不甲斐無さ加減に、思わずその場にへたり込んでしまった。

(今思えば、彼女達と僕等っていつも部屋から出る時が全く被ってなかった……。だから、必然的に向こうが部屋から出る瞬間を目撃出来なかったんだ……)

これってもう偶然じゃ片付けられないでしょ……。

だって、もう五日だよ？ 五日間もずっと寮内で出会わなかったの？

そんなのって有り得るの？

「もう……考えるのやめよ……」

これ以上考えたら、増々自分が情けなくなる……。

「シャワーでも浴びて、気分転換しよ……」

この時の判断が、僕のこれからの運命を大きく変えることになった。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

その後の事を簡単に説明すると、僕がシャワーを浴びている時にボデーソープが無くなっていて、思わず予備の詰め替え用パックを取りに行こうとシャワー室から出ようとする………いつの間にか部屋に戻って来ていた一夏に裸を見られました。

僕の人生……最大のピンチ到来です。

板垣さん……もう一回たしゆけて……。

知ってたよ？

なんつーかさ、あれだよね。

女子ばかりがいる中で数少ない男子同士だから、仲良くしたいって気持ちは理解出来るけどさ、だからと言って最初からグイグイ行くのはどうかと思うのよ。

何事にも段階つてもものがあるわけで、それを無視して一足飛びに行こうとするのはさ、よくないと思うんだよね。

特に、あの子みたいに特殊な事情を抱えている子はさ。

「〜♪」

なんて言っている私が今何をしているかと言うと、机の上にノートパソコンを広げて作業をしているラウラの後ろに座って、彼女の髪を自分の櫛で梳いています。

毎回毎回思うけど、本当にこの子の髪ってツヤツヤサラサラなんだよね。

同じ女として、普通に羨ましく感じる。

え？ 仮にも軍人であるラウラの作業している所を後ろから見ると、ような真似をしてもいいのか？

ああ〜……大丈夫大丈夫。

だって、ディスプレイに表示されているのって、全部ドイツ語なんだもん。

当然だけどさ、私にドイツ語なんて読めるわけないじゃん。

私が読めるのは精々、日本語と英語ぐらいだって。

(姫様に髪を梳いて貰いながら仕事をしていると、不思議と効率が上がるような気がする……。胸の方はさつきからドキドキしっぱなしだと言うのに……)

あ〜……ラウラもマジで癒される〜♡

自制心が無かったら、今すぐにでも後ろからギュツって抱きしめたいぐらいだよ♡

「お？…なんだ？」

徐にラウラが机の下に潜って、何かを手を取った。

「これは……？」

何か小さな物を持つてるけど、何を見つけたんだ？

「姫様。机の下にこのような物が……」

「これ……は……？」

彼女が持つて来たのは、私もラウラも持っているIS学園の生徒手帳だった。

「なん……で……これ……が……？」

「中身を見てみますか？」

「一……応……」

念の為に中身を拝見すると、そこには私達が知らない名前と顔写真があった。

「書いてある年月日を見る限りでは、卒業生の物みたいですね」

「うん……」

なんでこんな物が私の机の下に？

前にこの部屋を使っていた卒業生の先輩さんが忘れちゃったのかな？

何気なくペラペラとページを捲っていると、あるページで私達の間が見開かれた。

「……これは……！」

「……！！！」

……そっか……そうだったんだ……。

まさか、こんな事が現実にあるなんて……。

でも、冷静に考えて見れば納得できるかも……。

ドンドンドン！

「ん？」

こんな時間に尋ねてくるなんて、どこのどなたかしらん？

『や……弥生！ いるか?! いたら返事をしてくれ！』

この声は……一夏？

なんでアイツが来る？

(あ……もしかして……)

バレたのか？ 彼女の正体が。

この時期に一夏が慌てた様子で来るなんて、今のところはそれ以外に考えられないし。

(でも、正体がばれたって事は……)

見たんだな……また……。

「ちっ……！ あいつめ……私と姫様の至福の時間を邪魔しおって……！」

「ラウラ怖い！ 気持ちには理解出来るけど、その怖い顔だけは止めて！！」

完全に目が据わってるから！

(まずは出てあげるか……)

話はそれからだな。

「少……し……待って……て……」

「あ……」

今度は見捨てられた小動物みたいな目をしないでください。

それだけで私の罪悪感が半端ないから……。

「どうし……たの……？」

ガチャッと扉を開けて顔を覗かせると、一夏はかなり慌てた様子で私の手を取った。

「た……頼む！ 今は何も聞かずに俺の部屋まで来てくれないか！」

「え？ え？」

事情は把握しているけど、そんなに急かされると流石に引く。

「私も一緒に行こう」

「お……お前も？」

いつの間にかラウラも近くまで来ていて、一夏の方を見ている。

「なんだ？ 私が一緒では不都合な事でもあるのか？」

「そ……それは……」

「もしや……自分の部屋まで連れ込んで、そこで姫様に何かするつもりではあるまいな……！」

「んなことしねえって！」

「貴様の言葉はいまいち信用に欠ける」

「俺の信頼度ゼロ!?!」



「セシリア・オルコットや凰鈴音、篠ノ之箒達が色々教えてくれたからな」

「お　　いいいいいいいいいい！！　　　　　あ　　い　　つ

らああああああああああああ！！！！」

あ…あの三人…私が知らない所でラウラに何を吹き込んだんだ…？

「とにかく、何もやましい事が無いのであれば、私が一緒に着いて行っても何も問題はあまるまい？」

「うぐぐ……」

見事に論破されてるし……。

そもそも、性格上、一夏に腹芸なんて無理なんだから、大人しく諦めればいいのに。

(実は、私もラウラと一緒に来ることには賛成なんだけどね)

幼く見えても、ラウラは立派な現役軍人。

きつと、私以上に何かいいアイデアを出してくれる可能性が非常に高い。

「私……から……もお願い……。ラウラ……も一緒に連れて……行つて……」

「や……弥生まで……」

秘技！　涙を溜めた状態での上目使い！！

実は普通に目薬を使ったただけなんだけどね。

「わ……分かったよ！　ただし、絶対に内緒にしてくれよな！」

「それは行ってみてからだ」

そんな訳で、私とラウラはすぐ隣にある一夏とシャルル君の部屋まで行くことに。

……まずはどんな言葉を掛けたらいいのかな……。

……  
……  
……  
……  
……



「ああ」

「そ…そんな…」

相当にショックだったのか、シャルル君はその場に膝をついてしまった。

「い…板垣さんも…？」

「そうだ。と言うよりも、一番初めに気が付いたのが姫様らしいぞ」

「ど…どうして…？」

「仕草…と体型…。それ…から…声…」

「こ…声？」

「男の子…にして…は…声音…が高過ぎ…る…。それ…に…喉仏…が無かつ…た…」

「で…でも！ 男子でも声が高い人や喉仏が無い人だっているじゃないか！」

「それ…でも…そこま…で高く…はない…よ…？ 喉仏…は…無い…じゃなく…て…見えにくく…なってる…だけ…で…ちやんとある…」

ハイ論破。

少し考えれば分かると思うけど。

「一応言っておくが、我々だけじゃなくて、恐らくは他の連中も気が付いていると思うぞ？」

「他の連中って…？」

「いつも姫様と仲良くしている者達だ」

「箒達って事か…」

いぐざくとりく。

よくできました、一夏君。

「オルコットや嵐、更識などは代表候補生だから、それぐらいは当然だろう。特にあいつ等ほどの実力者ともなれば猶更だ」

「箒…は…武道…をしている…から…体…の…こと…に関して…は…詳しい…と思う…」

「布仏は確か整備班だったな。私から見てもアイツの観察眼は目を見張るものがある。口には出さなくとも、その目は確実にお前が女であ

ることを見抜いていたに違いない」

「……………」

完全に空いた口が塞がらない状態に陥ったお二人さん。

「まさかとは思うけど……周りでシャルルの男装に全く気が付いていなかったのって……」

「一夏……だけ……」

「マジかああああああああああ……」

超盛大な溜息を吐きながら、今度は一夏が床にへたり込んだ。

そんなにシヨックだった？

「流石に他の女子共は分からなかったかもしれないが、我等の目は誤魔化せん」

「ははは……。言われてみればそうだよね……。僕も代表候補生をちよつと甘く見ていたよ……。僕自身も代表候補生なのにね……」

とうとう、生気のない顔で乾いた笑いをするようになったシャルル君。

うーん……こんな顔を見せられたら、少し哀れに感じてしまう。

「事情……は話して……貰える……の……?」

「そうだね……。ここまで完膚なきまでにバレてしまっちゃ、もう隠す必要も無いよね……」

そこから彼女は静かに語りだした。

自分の父親がデユノア社の社長であり、その命令で男装してI S学園まで来た事を。

自分が愛人の子で、お世辞にもいい扱いをされなかった事。

そして、経営危機に陥ったデユノア社をなんとか立て直すために、広告塔になると同時に一夏に少しでも接近しやすくする為に男装した事を。

「そんな……そんな事って……」

「……………」

予め知ってはいても、本人の口から直接聞かされると、それなりに心にくるものがあるな……。

「……姫様。一つよろしいですか?」

「何……？」

さっきの話で何か分からない事でもあったのかな？

『愛人』とはなんですか？」

「「うぐ……」」

そんなピュアな目でそんな単語を口にしないで！

返答にマジで困るから！

「……なんで三人して目を逸らす？」

言えない……言えるわけないよ！

教えてあげたいのは山々だけど、教えたら教えたで純粹無垢なラウラが汚れるような気がするから言えない！

「もう……ちよつと……大きくなった……ら……わかる……よ……」

「むう……姫様がそう仰るのならば仕方が無い……」

分かってくれたか……

頬を膨らませるラウラ、激カワです。

「デュノア社の経営が最近になって傾きつつあったのは知っていたが、わからんな……」

「なに……が……？」

「まず、白式のデータを手に入れた所で、そう簡単に状況が好転するものでしょうか？」

言われてみれば確かに……

データの解析にもそれなりに時間が掛かるだろうし、その間も経営は傾いたまま。

それって意味あるのか？

「それに、お前の格好だ」

「僕の？」

「そうだ。仮にもデュノア社は世界的に有名な会社だ。そのデュノア社が本気で自社の社運を賭けてのスパイをするのならば、入念に準備に準備を重ね、情報収集も数年前から徹底的に行い、その上で完全完璧な変装をさせる筈だ。それなのに、実際は……」

「すぐにバレてしまった……」

ラウラの指摘は実に的を得ている。

この点は私も前世で原作を読んだ際に感じていた疑問だ。

「お前が変装としてしていたのはどんな事だ？」

「えっと……コルセットで胸を隠して、それから男物の服を着て……」「いや……幾らなんでも舐めすぎだろ。それでは変装を通り越して仮装だぞ」

「だよね……。今更ながらに、僕も思えてきたよ……」

あ、薄々自覚はあったのね。

「同じ部屋にいなながら、そのお粗末な変装に全く気が付く様子すら見せなかった男もいるがな」

「お願いだからもう止めてください！ 俺の精神ポイントはもうゼロよ!!」

死者に対して平気で鞭を打つような真似をするんだな……。

でも、敢えて私はこう言わせて貰う。

いいぞ、もっとやれ。

「あ……あのさ……。これからシャルルはどうなっちゃうんだ？」

「それは、こいつにもよる」

「ど……どういう事だ？」

「別にスパイ自体は否定もしないし肯定もしない。問題はそれを実際に行動に移したかだ」

「それって……」

「未遂ならば、まだ情状酌量の余地はあるって事だ」  
「!!」

ラウラの言葉を聞いた途端、さつきまで意気消沈していた一夏とシャルル君の顔に明るさが戻った。

「シャ……シャルルはまだ何もしてないよな!? な!」

「う……うん……。データを取る前に見つかっちゃったからね……」

どうやら、少しずつではあるが光明は見えてきたようだ。

「とは言え、お前が経歴詐称をしていた事実だけは覆しようがないから、その辺りはなんとかしないといけないだろうな」

「そ……そっか……」

一難去ってまた一難。

スパイ疑惑が晴れても、他の部分でまた問題が発生するんだよね。ほんと、シャルル君は難儀な星の元に生まれた子だよ。

「どうしたらいいんだ……?」

「我々だけで話し合っても結論は出ないだろうな」

「それなら……」

携帯を出してピポパ……ってな。

「姫様? 何をして……?」

「頼り……になりそう……な人……に心当たり……がある……から……少し来て……もらう……よう……に言っ……て……みる……」

「頼りになりそうな人?」

「もしや……?」

何回かのコール音の後に、その人は通話に出てくれた。

『もしもし! 弥生ちゃん!』

「こ……こんばん……わ……」

こつちが何か言う前にもしもしって言われちゃったし。

『まさか弥生ちゃんから電話を掛けてきてくれるなんて! はっ!? もしかしてこれは愛の告白!』

「違います」

何をどう判断したら、そんな話に繋がるんだ?

「実……は……相談したいこと……があつて……」

『相談? 何かしら? 私と弥生ちゃんの結婚式場の場所とか?』

「なんでやねん」

おっと。思わず関西弁でツツコんでしまった。

「詳しい話……は……部屋で話す……ので……出来れ……ば……今か……ら……こつち……に……」

『今から弥生ちゃんの所に!? 行く行く! 超特急で行くから待って

て頂戴!』

「いや……別……にゆつくり……で……」

この間会った時はもうちよつと落ち着いた雰囲気だったのに、なんでこうなったんだろう……?

「愛しの弥生ちゃんに声に導かれて、更識楯無ここに参上!!!」

「早っ!?!」

さっき話してからまだ10秒も経ってないんですけど!?

って言うか、まだ通話中なんですけど!?

部屋の扉を勢いよく開きながら来たのは、このIS学園の生徒会長である更識楯無だった。

ロシア代表であると同時に暗部の長である彼女ならば、必ずや力になってくれる筈だ。

性格に少々問題はあるけど……。



## 生徒会長大活躍？

楯無さんが来てくれたのは普通に心強いんだけど、マジで来るの早すぎじゃない？

まだスマホから楯無さんの声が出てて、なんか二重に聞こえるんですけど。

「で？ これはどういう状況なのかしら？」

「私……が説明しま……す……」

スマホの通話を切つてから、彼女にこれまでの事情を説明する。

「かくかくしかじか……」

「かくかくうまうま……」

あくまで私が把握している範囲だけど、大丈夫だよな？

この人は鋭いから、多少なりとも情報に不備があつても問題無いと思う。

「ね……ねえ……一夏」

「なんだ？」

「日本人って、情報の交換をする時はいつも、あんな風に話しているの？」

「いや……違うんじゃないかな？ 少なくとも、俺は『かくかくしかじか』なんて言った事ないし……。それにほら、あれ見てみるよ」

「あれ？」

……なんでラウラは私の隣で納得顔をして頻りに頷いているの？

「なんかボーデヴィッツヒさんが満足気に頷いてる……」

「ドイツ軍人だから、ああ言った暗号めいた言葉も即座に理解出来るのかな……？」

そんでもって、その二人組はひそひそ話をしているし。

「ふむ……流石は姫様と生徒会長……。私にすら理解不能な暗号でここまで会話を成立させるとは、素直に感服するな……」

いや……別に暗号じゃないよ？

普通に話しているだけなんですけど？

「成る程ね……。大体の事は理解したわ」

「あの会話で!？」

「うん」

「そこまで驚くような事？」

「ま、実は私もシャルル君の正体が最初から男装をした女の子で、その目的が織斑君の専用機のデータ、もしくは実機の強奪だって事は分かっていたんだけど」

「この人にも……」

楯無さんに関しては、驚くような事じゃない。

代表、暗部の長、生徒会長。

三足の草鞋を穿いていて、それらを立派にこなしているような人物ならば、これぐらいは楽勝だろう。

「普通に調べただけだね」

眼力とかじゃないんだ……。

まあ……それでも十分に凄いなだけ。

「や……弥生……。さっきからずっと気になってただけど、この人って誰だ？ リボンの色から察するに、上級生なのは分かるんだけど……」

「「「え?」」」

今ここでその発言をぶちかますの？ 嘘でしょ？

「一……夏……。この人……は……更識楯……無さん……って言って……二年生で……ロシ……アの国家代……表……で……I……S学園……の生徒……会長さん……だよ……」

「そして！ 弥生ちゃんの将来のフィアンセよ！」

余計なこと言うな。

「最後の一言は取り敢えず置いといて……」

「置いておくんだ……」

それが賢明だ。

「この人が生徒会長……？ しかも、ロシアの代表って……」

「なんだ貴様。この学園に在籍していて、全く知らなかったのか？」

「あ……ああ……」

……これには普通に呆れる。

少し調べれば簡単に分かる事なのに……。

「一夏……。これは僕でも擁護出来ないよ……」

「なんで!？」

「IS学園のパンフレットに顔写真と一緒に簡単なプロフィールは掲載されてるし、同じような内容は学園の公式サイトにも載ってるよ?」

「どっちも見た事ありません……」

少しは自分がいる学校の事を知ろうとは思わないのかよ。

いくら普段の生活が大変だからって、それはよくないと思うぞ?

「私の事についてはこれから知ってもらおうとして……」

大して気にしてない風を装って、楯無さんはシャルル君の方を見る。

「今は彼……いや、彼女の事が先決よね」

「だな」

さつきまでとは完全に打って変わって、かなり真剣な表情になる。

「スパイは未遂だから、まだ大丈夫だとしても……性別を偽って入学したのは少しヤバいかもしれないわね」

「そ……そうなんですか!？」

「唯でさえ、ここはISなんて言う世界的に貴重な存在を取り扱っている稀有な学園なのよ? IS学園は、一皮剥けばそこら中に最重要機密がゴロゴロと転がっているの。だからこそ、ここで働く教師達や入学する生徒達の情報や動向は凄く注目されている。そんな場所に経歴詐称で入学しました……なんて言った日には、普通に捕まるわよ?」

「そんな!？」

一夏が焦りながら立ち上がる。

その顔には若干の汗も滲んでいた。

「でも……」

……? どうしたのかな?

「ラウラちゃんの疑念も理解出来るのよね。なんでそんな、すぐにバレルような変装でスパイなんて危険な行為をさせようと思ったのか」

「それは……会社がピンチで焦っていたから？」

「だからこそ、変装には細心の注意を払うんじゃないかしら？」

「う……………」

一夏、瞬殺。

「それにね、もう一つ気にかかる事があるの」

「なん…で…すか…?」

「シャルル君、貴女のご両親についてよ」

「僕の両親？」

シャルル君の親がどうかしたの？

原作通りの話で、何もおかしな点は見受けられなかったけど……。

「確認の為に聞くけど、貴女のご両親……特に継母の方はシャルル君の事を憎んでいた様子だったのよね？」

「は…はい……。思いつきりビンタされた事もあります」

だよね？ どこが気にかかるって言うんだ？

「この際だからハッキリ言うけど、もしも本当にシャルル君の事が憎くて疎ましく感じていたのならば、君の事を間違いなく殺害している筈よ」

「さ…殺害…?!」

ちよ…ちよつと?! なんか話が急に物騒な事になってるんですけど!?

「デュノア社程の大会社の社長夫人ならば、幾ら経営が傾いていても、いかようにも処理する方法はあるわ。例えば、事故に見せかけて殺したり、プロの殺し屋を雇ったり……ね」

「……………」

シャ…シャルル君が顔を青くしてから黙って俯いてしまった。

これは流石に見ていられない……。

「い…いや！ そんな奴がいるのかよ?! そんな……実の子を殺すよ  
うな奴が！」

「いるのよ。この世にはね、私達が想像すらも出来ないような腐れ外  
道が至る所に蔓延ってるの。君が知らないだけでね……」

「……………」

今度は一夏も黙ってしまった。

シャルル君に至っては今にも泣きそうだ。

で、なんで楯無さんは悲しそうな目で私を見るの？

「大丈夫……夫……？」

「板垣さん……？」

彼女を少しでも安心させる為に、その頭を撫でてみる事に。

気分が悪い時こそ人肌ですぜ。

「気分を害してゴメンなさいね。でも、さっき言った通りにシャルル君をいつでも殺せるはずなのに、実際に行った事と言ったら、君に対して直接的な暴力を振るってからの適当な変装をさせてのIS学園入学。これは幾らなんでもおかしいわ」

「ど……どこが変なんだよ？」

「分からない？」

……なんとなくだけど、私にも想像がついてきたかも……。

「そうか……」

「その顔、弥生ちゃんとラウラちゃんにも分かったみたいね」

「一応……ではあるが……」

「え？ ええ？」

一夏……結構ヒントは出てるよ？

ちよつと脳みそコネコネすれば分かる問題だよ？

「分からないようなら、私達が教えてあげようか？」

「お……お願いします」

「……これから話すのはあくまでも私達の想像……と言うよりは推理ね。それでも聞く？」

「念を押さなくても大丈夫です……。例え推理でも、僕はあの人達の真意が知りたい……」

「……いいわ。話してあげる」

張りつめた空気の中、私達による推理ショーが始まった。

「まず最初に、シャルル君は何者かにその身を狙われていた。けどそれは、君の両親じゃない」

「あの人達じゃない……？」

「そうだ。恐らくだが、お前の両親はお前の身柄の安全を確保する為に、敢えてIS学園に送ったのだろう。その『何者か』から少しでもお前を遠ざける為にな」

「け……けど！ だったらなんで男装させてスパイなんかを……」

「普通……に日本……に送るだけ……じゃ……相手……も普通に来てしま……う……。だか……ら……IS学園……に入学……させ……る……『大義名分』……が必要……になる……」

「大義名分って……」

一夏も徐々にはあるが全貌が見えてきたようだ。

ホント、日常生活ではニブニブ星人なんだから。

「会社の為に男性IS操縦者の専用機、または操縦者自身のデータを入手すること。つまりはスパイをするって事よ。シャルル君の事を狙っている連中の真の目的は、何らかの理由でデユノア社を手中に収める事」

「その為にデユノアを人質にして、会社の経営権を譲渡するように迫ったとしたら……織斑、お前ならばどうする？」

「そりゃ……護る為に何かを……はっ!？」

「分かつ……た……?？」

一夏の顔に汗が溢れて、それを袖で拭う。

「相手の目的は会社で、その会社の為って名目なら、敵も容易には手を出せない……?？」

「正解。更に言えば、適当な変装をさせた理由は、最初からシャルル君の正体がばれる事を前提にしていたんだと思われるわ」

「不必要に暴力を振るつたのも、その為だろうな。お前の口から自分達の悪辣な部分を喋らせて、自分達を必要悪とする為に」

「必要悪……」

シャルル君は信じられないような顔で、静かに私達の言葉に耳を傾けている。

「両親……から暴力……を振るわ……れて……会社の為……に無理矢……理スパイ……をさせ……られて男装……をしてい……た……女……の子……。そん……な事情……があれ……ば……学園側……も人道的……な見地……か

ら見て…無下……にはしない……から……ほぼ确实……に保護され……る……」

「そうしてシャルル君の当面の安全が確保されたら、その間に自分達の手で会社と娘を狙った輩をなんとかしようとする。最悪の場合は、自らの命を賭けて……」

「お父さん!」

わっ!? な…なんですか!? 急に叫んだりして……。

私はビツクリサプライズが苦手なんですよ?

「落ち着いて……」

「僕は……僕は何にも知らないで……僕は……」

暴れようとした彼女の体を押える為に、その頭に腕を回してギュツと抱きしめた。

恰好的に私の胸に顔を押しさえつけているようになっちゃったけど、地味に窒息とかしてないよね?

(弥生のハグ……)

(いいなあ……。私も弥生ちゃんのオツパイに顔を埋めて、その匂いを堪能したいわ……♡)

(なんだ……このモヤモヤとした感じは……)

落ち着いた……かな?

「大丈夫……?」

「うん……」

……何気に手を私の背中に回さない。

離れられなくなっちゃったじゃない。

「……これだけは覚えておいて。本当に大切だと思うものはね、自分達から一番離れた場所に置いておくものなのよ」

実感が籠ってるな……。

楯無さんにとつての『大切な存在』って、やっぱり簪の事……だよ  
ね……。

「それと、お前に暴行をしたのは、もう一つの意味があったと思われる」

「もう一つ……?」

「娘のお前と両親との関係が不仲だと分かれば、向こうもお前に人質としての価値を見出さなくなる……かもしれない。可能性の話だな」

「シャルルの両親は、シャルルを護る為に何重にも作戦を考えてたんだな……」

「自分の身を犠牲にしてまで娘を助ける……ここまで出来る人はそういないわ。間違いなく、貴女はご両親に愛されている」

「う……うとう……」

抱き着いたまま、遂にシャルル君が涙を流す。

ここで『制服が汚れる〜!』とか言ったら、間違いなくぶっ飛ばされるな。

「会社と娘を天秤に掛けられた時、かなり苦しんだでしょうね……」

目を伏せながら楯無さんがそっと呟く。

「……と、私達の推理はここまで。事の真相は本人に直接聞いた方がいいでしょうね。緊急連絡用の直通の通信機ぐらいは持つてるんでしょ?」

「はい……」

あ……やつと私から離れてくれた。

地味に手が痺れました。

「でも、その前に織斑先生にも報告しておくべきでしょうね。君達の担任だし」

「それには私も賛成だ」

右に同じ。

「い……いや……千冬姉には……」

「言わないつもり?」

「その……千冬姉には迷惑を掛けたくないって言うか……」

……成る程ね。

道理で、真っ先に私の所に来たわけだ。

「織斑君。それは織斑先生……君のお姉さんの事を馬鹿にしてるわよ」

「は……はあ!? なんて!? 家族に迷惑を掛けたくないって思っただけ



で……」

「それを馬鹿にしているって言うの」

いつにも増して楯無さんの口調が厳しい。

怒ってるのか？

『迷惑を掛ける事』と『困った時に相談する事』は全く違うわよ」

「どこが違うってんだよ……」

「全然違う。……織斑君。もしも織斑先生に何か困った事があって、それを君に一言も相談せずに勝手に色々決めて、君が知らない場所で全てを解決してしまつたら……どう思う？」

「それは……」

言葉にしなくても、その表情が全てを語っているよ……一夏。

「今の君は、それと同じ事をしようとしているのよ」

「俺は……そんなつもりじゃ……」

「それと」

さつき以上に強い口調で一夏を睨む。

「家族には迷惑を掛けたくないって言いながら、他人である弥生ちゃんやラウラちゃんには迷惑を掛けていいの？ それってちよつとふざけてない？」

「そんな事は無い!!」

全力否定ですか。

でもね、今の一夏の言葉には、あまり説得力は無いよ。

「だったら、別に話しても問題無いわよね？」

「………はい」

「よろしい」

全く……世話がかかる男だよ、こいつは。

でもね、そんな辛気臭い顔をされると、こっちも迷惑なんだよね。

「一夏……」

「弥生……俺は……」

「大切……に思っている家族……に頼られ……て……迷惑……に思う人……はいない……と思う……。一夏……は織斑先生……に頼ら……れて……迷惑……に思った……りする……の……？」

「いや……思わない……」

なら、ちやつちやと顔を上げろっつーの。

「私……には血……の繋が……った家族……がない……から……そんな風……にいつで……も相談……出来る家族……がいる……のは羨ましい……な……」

「え……？」

ったく……贅沢な事で悩みやがって。

世界中の孤児達に謝れっつーの。

「いや……おじいちゃんがいるって……」

「弥生ちゃんは……養子なのよ」

「そう……だったのか……」

やっぱり、それぐらいは知ってたんですね。

いや、この人なら当たり前か。

「姫様もですか……。私も訳あって血縁者はいません」

「お前も……」

「軍事機密故に詳しい事は話せんがな」

因みに、私は知っているよ。

ここでは話さないけどね。

「はいはい。シリアスな空気はここまで。織斑先生の所に行くわよ」

「は……はい」

「了解」

「は……い……」

そういや、織斑先生の部屋に行くのって初めてだな。

噂通り、汚部屋になっているのだろうか？

……お腹が空いてきた。

食堂……間に合うよね？

汚部屋は消毒だ〜！

楯無さんの提案で、私達は織斑先生の部屋まで行くことに。

誰かに見られたら大変なので、シャルル君は再びコルセットを装備してから廊下に出た。

「千冬姉……大丈夫だろうな……？」

「大丈夫？ 何の事を言っている？」

「……………行けばわかるよ」

一夏のこの反応……やっぱり、私の知識通りの、とんでもない汚部屋なんだろうか……。

そう言えば、こうして織斑先生の部屋……つまり、寮長の部屋に行くのはこれが初めてな気がする。

だって、普段は特に用事とか無いしな。

私に一夏にラウラに楯無さんにシャルル君。

なんとも言えない奇妙なパーティー構成で進んでいるが、偶然なのか、誰にも遭遇する事無く無事に(?)寮長の部屋に到着することが出来た。

「千冬姉……いるかな？」

つて……おい!? なに普通にドアを開けようとしてるの!?

「織斑君。幾ら気心の知れた家族とは言え、女性の部屋に入る時にノックの一つもしないのは、普通にマナー違反だと思わよ?」

「あ……そうだった」

この野郎……! 前にそれで大失敗(私の裸を見た)した事をもう忘れたのか?

あれから、ちゃんと誰かの部屋に入る前にはノックするようにって、私達全員で教えたじゃないか!

「もういいわ。私がするから」

半ば呆れながら、楯無さんが私達の代表としてノックをしてくれた。

「もしもし? 織斑先生……いらつしやいますか?」

数秒の後、部屋の扉がそつと開かれて、そこから織斑先生が顔を覗

かせてきた。

「こんな時間になんだ？」

あ、よく見えないけど、なんかジャージを着てる。

あれがこの人の部屋着なのか……。

ちよつとだけシンパシーを感じるな。

「つて、なんだこの大所帯は……」

私達の顔を一つ一つ見ていく。

「一夏に更識姉にラウラにデュノア、それから弥生も……」

ん？ 私やラウラ、一夏の事を名前で呼んだ？

名字と名前で使い分けるのが、織斑先生流の公私の使い分け方なのか？

「実は、織斑先生にお話したい事がありました」

楯無さんの真剣な顔に、織斑先生も同じ様に真剣な顔で応える。

「どうやら、何かあったようだな。いいだろう……立ち話もなんだ。部屋に入って……」

と、そこで一旦言葉が止まって、彼女が振りきながら自分の部屋を見る。

「……いや、やはりここは弥生の部屋辺りで……」

「千冬姉」

「うぐ……」

急に私の部屋を指名した直後、一夏がジト目で睨みながら低い声を出した。

「また……やっちゃったのか？」

「い……いや……そんな事はないぞ？ うむ……断じてない」

「なら、別に俺等が入っても問題無いだろ？」

「そ……それは……」

お……おおく……。

あの一夏が織斑先生に押し勝っている……。

「ちよつとだけ見させてもらおうぞ」

「ま……待て！」

先生が静止するよりも早く、一夏はドアの隙間から部屋の中を覗き

見た。

「……………更識先輩、シャルル」

「ど…どうしたの？」

「今から少しだけ、ボーデヴィツヒの目を逸らして貰えませんか？」

「なんで…って、聞いただけ野暮かしら？」

「はい。…弥生」

「な…何…？」

い…いつにも増して真剣な表情……。

こんな時だけカッコいい顔をして…なんなんだよ……。

「少しだけ…手伝ってくれないか？」

「手伝…う…？」

「頼む」

一夏がこれだけ言うのは珍しい。

どうやら、部屋の中は私の想像を遥かに凌駕しているようだ。

「千冬姉…いいよな？」

「あ…ああ……」

一夏の眼力に負けて、渋々と言った感じで先生は首を縦に振った。

「んじゃ…行くぞ」

「ゴ…ゴクリ……」

思わず唾を飲みこみながら、私は一夏と一緒に部屋の中へと入る事に。

「(…これ…は…！)」

部屋の中に入った私の視界に映り込んだのは、文字通りの足の踏み場もない部屋だった。

一体、何をどうすればここまで人は部屋を散らかせるのだろうか……。

これが俗に言う『片付けられない女』って奴なのか……？

「は…うい。ラウラちゃんはお姉さん達とこつちを向いてみましょうね」

「むおっ!?! こつちを向くと言いなながら、私の目を塞いでいるではないか!? これでは何も見えないぞ! 私だって教官の部屋が見たい

！」

「いや……ボーデヴィツヒさんは見ない方が……」

「なんでだ!？」

（（確実に幻滅するからだよ））

この時、初めて私達の心が一つになったような気がした。

「とつととやっちまおう。そんな訳で、片付けるまではモザイク処理な」

「私の部屋はそんなに酷いのか!？」

「……………」

「や……弥生く！ 頼むから、私の事をそんな可哀想な人を見るような目で見ないでくれく！」

はいはい。先生は少し廊下に出ててくださいな。

まさか、報告前にこんな難関が待っているとはな……。

流星は織斑千冬……伊達じゃないぜ。

・

・

・

・

・

しばらくお待ちください

・

・

・  
・  
・

「終わったく……」

「つ……疲れ……た……」

私自身、別に掃除自体は嫌いじゃないけど、それでも今回のコレは最強クラスの難敵だった。

掃除に掛かった時間は僅か十数分に過ぎないが、私にとってはその十数分が無限にも等しく感じた。

「……これが私の部屋……か……」

流石に隅々まで……とはいかなかったけど、最低限、人を入れても大丈夫なレベルには片付いたと思う。

「感謝するぞ！ 弥生！ 一夏！」

と言いながら、しれつと私に抱き着くのは止めて頂きたい。

「これからは小まめに片付けるようにしてくれよう」

「善処する」

先生？ それは『しません』って言っているのと同義ですよ。

「ほら、お前達も入れ。好きな所に座っていいぞ」

「「あ、はい」」

これでやっと話が先に進むよ……。

なんで本題に入る前から、ここまで疲れるんだ……。

・  
・  
・  
・  
・  
・

「で？ 何の用で私の元まで来たんだ？」

「……その前に……」

「ん？ どうした？」

「なんで弥生ちゃんを後ろから抱きしめてるんですか？」

「そうなんです。」

ようやく本格的な話に入れると思いきや、いきなり私の事を背後から抱きしめてきて、そのままベッドに座ったんですよ、この女教師は。 「気にするな。 それよりも用事を言え」

「……………分かりました」

ここから動きたくても、恐怖と物理的な力が強くて、身動き一つ出来ないうんですよね。

でも、私の腕の中にはラウラも同じ様に座っているから、これぞなんとか相殺している感じ。

彼女がいなかったら、きつと普通に気を失ってたと思う。

(まあ……私は弥生ちゃんに耳かきして貰ったから、いいんだけどね) 最初は羨ましそうにしている、次の瞬間にはいつも通りの余裕の顔に戻ってから、さつきまで話していた事を事細かに先生へと伝える楯無さん。

「かくかくしかじか。 かくかくうまうま」

「またそれ!」

「成る程な……そう言う事か」

「伝わった!」

その二人、さつきから息の合ったツツコミしてるね。

もう、いつその事くつついちゃえば？

「実を言うとな、デュノアが女であることは、私も最初から看破していたぞ」

「最初からと言うと……」

「まず、お前に関する書類を見た時に違和感を感じて、実際に姿を見てからは、その違和感が確信に変わった」

「まあ……千冬姉の目は誤魔化せねえよな……」



仮にも一度は世界の頂点に輝いた人だからね。

その観察眼は私達とは次元が違うでしょ。

「ついでに言うと、山田先生も分かっていたぞ」

「でしょうね……。見かけによらず、あの人の実力は相当ですから」  
楯無さんが褒めている……。

山田先生が凄い事は知っているつもりだったけど、真の実力はそれ以上なのか……？

「僕の正体が分かっている、それでも黙っていたのって……」

「お前が明確な行動をしなかったからだ。私達だって、疑惑があるだけでは動きたくても動けないしな」

確かに。そんな事になれば、色んな機関が黙ってないだろう。

「お前のお粗末な変装では、いつか必ずボロが出るとは思っていたが、まさか……このバカがまたやかすとはな……」

「それに関しては弁明のしようがありません……」

掃除をしている時の強気な一夏はどこかに行ってしまったのか、今は完全に肩身を狭くしている。

「ちゃんと謝ったんだろうな？」

「あ……」

謝ってないのかよ!?

「ご……ゴメン！　なんかタイミングが掴めなくて謝り損ねてたけど……ホントにゴメン！」

「いや……今更になって謝られても、逆にこっちが困るって言うか……」

だよね、分かる。

「話を戻すぞ」

「は……はい」

少しだけ緩みかけた部屋の空気が、再び引き締まる。

「私から見ても、更識姉と弥生とラウラの推理は間違っていないと思う。そうでもないと言明がつかない事が多いからな」

「教官もそう思いますか……」

これは増々、私達の考えが正解に近づいてきた？

「なあ……俺さ、少し思ったんだけど……」  
「どうした？」

「生徒手帳に記載されている『特記事項第22』を使えば、どうにかなるんじゃないのか？」

特記事項……ね。

原作でも言っていた『アレ』の事か。

「特記事項の22と言えば……」

『「本学園……における……生徒……は……その在学中……において……ありとあらゆる国家……組織……団体……に帰属し……ない……。本人……の同意……が無い場合……それら……の外的介入……は原則として……許可されない……ものとする……」』

「流石は姫様……。見もしないで一字一句全てを暗記していらっしやるとは……」

これでも、昔から暗記物は得意だったんだよ。

だからかな、古文や歴史のテストでは常に満点を取ってた。

「弥生が全部言っちゃまったけどさ、これさえあれば、少なくとも三年間は大丈夫なんじゃねえのかな？」

「……………一夏」

「な……なんだよ……千冬姉……」

溜息を吐きながら、織斑先生は一夏の考えを一蹴した。

「その考えは幾らなんでも甘すぎるぞ」

「え？　なんで？」

「まず、事は確実に日本とフランスの国家間の話にまで発展する。僅かでも何かが食い違えば、戦争になる可能性すらある」

「せ……戦争!？」

「そうだ。それにな、国家同士の問題がたった3年足らずで解決する訳がないだろう。最低でも、その倍以上の時間は必要になる」

「倍って……それじゃあ……」

「卒業と同時に全てが終わりだ。時間稼ぎにすらならないし、問題の先延ばし以前の話になる」

「……………」

論破1……ってか？

「それとな、デュノアが代表候補生である時点で、先程の特記事項は適応されないぞ」

「な……なんでだよ!？」

「先程の特記事項は、簡単に言えば『この学園にいる間は他の国や組織等からの介入は基本的に許されない』と言う内容だが、代表候補生は入学前から既に国家に所属している。オルコットはイギリスに、鈴は中国に、ラウラはドイツに、更識妹は日本に、そこにいる更識姉も自由国籍でロシアに所属している。無論、フランスの代表候補生であるデュノアはフランスに所属している。それなのに、どうして代表候補生や国家代表が入学出来ると思う?」

「……………」

「答えは簡単だ。IS学園が特別に入学を許可したからだ」

だよね。

複雑そうで、実はめっちゃ簡単な答えでした。

「逆に言えば、IS学園はイギリス、中国、フランス、ドイツ、ロシア、日本の学園への介入を認めていると言ってもいい」

「なんだよそれ…………」

「そう思うのも無理は無いが、規則なんてそんなものだ」

そう言われちゃ、身も蓋もない。

私の記憶が正しければ、他には上級生にアメリカとギリシャの代表候補生もいるよね？

アメリカとギリシャの介入もOKって事なのかな？

「ついでに、もう一つだけ付け加えてやる」

ラウラ？ 何を言う気なの？

「姫様。先程部屋で発見した『アレ』を見せてもよろしいでしょうか?」

アレって…………あの『生徒手帳』の事？

「うん…………。私…………も見せた方…………がいい…………と思う…………」

「了解です」

制服のポケットから、ついさつき見つけた生徒手帳を取り出して、

一夏に向かつて放り投げた。

「うおっと」

慌ててそれをキャッチする一夏。

その顔は困惑していたけど。

「その中を見てみる」

「中……う？」

見た目は何の変哲もない普通の生徒手帳。

でも、その中身は……？

「その生徒手帳の、特記事項が書かれているページだ」

「えくつと……」

ペラペラとページを捲っていくって、ラウラが指定した場所を見つけ  
たみたいで、そこで一夏の動きが止まった。

「別に俺が持っている生徒手帳と変わらないけど……」

「もつとよく見る」

「はあ……」

目をジィくつと動かして、一文字一文字読んでいく。

すると……突然、一夏の目が見開かれた。

「あ……あれ……う？　なんかおかしいぞ……う？」

「どうしたの？」

「これ……足りない」

「足りないって？」

「特記事項が一つだけ少ないんだよ！　本当は全部で55個ある筈なのに、ここには54個しか書かれてない！」

「それって……」

「ほう……」

一夏の言葉だけで、私達が見せた生徒手帳の正体が分かった様子の  
楯無さんと織斑先生。

「それに、さつき弥生が言ってくれた特記事項22が別のものに置き  
換わってる……。なんで……」

「簡単だ。その生徒手帳は去年のものだからな」

「去年って……」

そう。去年までは私が説明した『特記事項22』は存在していなかった。

でも、今は確かに存在している。それは何故か？

これもまた簡単な答えだ。

「『今年…の特記事…項22』…は…今年…に入ってから…作られた…」

「……正解よ」

楯無さんが私達の考えが正しいと言ってくれたし。

「さつき弥生ちゃんが言った特記事項22はね、織斑君が入学する事が決定した時に、急遽、決められたものなの」

「俺が入学する時に……？」

「分かりやすく言えば、この新しく作られた22番目の特記事項に該当するのは、織斑君だけって事」

「な…なんで俺だけ……」

「そんなの考えるまでも無いだろう。お前は世界で唯一の男性IS操縦者。研究の為と言う名目でお前の身柄を狙っている奴が世界中にいる。仮にIS学園に入ったとしても、それで100%の安全が保障されたとは言い難い。ならばどうすればいいか」

「新し…く…一夏…を守る…特記事項…を作…て…それ…を…世界…に公表…すれ…ばいい……」

そうすれば、あら不思議。

あつという間に、IS学園は一夏君を守る鉄壁（笑）のシェルターに早変わり。

それでも穴は沢山あると思うけどね。

「一応、これは他の一般生徒も該当するようにはしてあるけど、基本的には織斑君の為にだけに存在するものなの」

「それだけお前の存在は世界的に見ても非常に重要視されていると言う事だ。いい加減に自覚しろ」

「……………」

一夏が完全に意気消沈してしまった。

でも、私がこうして織斑先生に抱き着かれている以上、今は何も出

来ないんだよね。

「もしも、誰にも相談せずにこのまま突っ走っていたら、間違いなく取り返しのつかない事になっていたかもね」

「考えうる限り、最悪のパターンだな……」

実際、想像もしたくないけどね。

「だが、真っ先に弥生やラウラに相談したのは上出来だった」

「え……？」

流石にこのままでは不憫と思ったのか、ここで実姉からのフォローが入りました。

「普段のお前ならば、誰にも相談せずに猪の如く自分の考えを貫いていただろうしな。それこそ、『皆に迷惑を掛けたくない』とか言う下らん理由で」

「下らんって……」

「下らん。実に下らん。私や弥生が誰かからの相談事を迷惑に感じるような冷血な人間に見えるのか？」

「んなことねえよー」

「だったら、アホな事は考えず、遠慮無くいつでもなんでも相談しろ。

私はお前の姉であり、たった二人の家族なんだからな」

「千冬姉……」

プライベートじゃ、普通にブラコン全開ですね。

セリフだけを聞けばいいシーンなんだけど……

(この首筋から匂う弥生の香り……たまらん!!)

サラッと私の頭を撫でながら、うなじに鼻をくっつけなくてくれませんかねえく？

普通にキモイんですけど？

いいシーンが根っこから台無しだよ。

それでいて、誰もツッコもうとしないしね。

「なんか、話が完全に逸れてませんか？」

「おっと、そうだったな。今はデュノアの事を話しているんだったな。

弥生が可愛すぎて、すっかり忘れていた」

それは全然関係無い!!

「取り敢えず、まずはデユノアが持っている通信機で直接話してみてもいいからだな。デユノアを道具としてしか見ていないような人間なのか、それとも、こいつを護る為に敢えて道化を演じた人物なのか。それを見極めない限りは、こっちも対策のしようがない」

「そうですね。シャルル君、お願い出来るかしら？」

「は…はい」

着ているジャージのポケットの中から、小型の通信機と思われる機械を取り出して、それをテーブルの上に置く。

すると、そこから投影型のモニターが表示された……んだけど……。

『シャル……シャルロット……？』

そこに映し出されたのは、白人の中年男性。

彼がシャルル君のお父さんなんだろうけど……。

(なんで、凄く呆けた顔でこっちを見てるの?)

完全に脱力した状態で椅子に座っている彼を見て、私達も状況が把握できず、部屋の中が微妙な空気になりながらの沈黙に包まれた。

……なんなの？ この状況……。

## 娘の為に、会社の為に

フランスにあるデュノア社の社長室。

そこに、シャルルの父親であり、このデュノア社の社長でもある『アルベール・デュノア』が、妻と一緒に緊張感と苦痛に満ちた顔で椅子に座っていて、その隣には彼の妻が寄り添うように立っていた。

外はすっかり暗くなっていて、街には所々に明かりが灯っている。

「今日……なのよね……」

「そうだ……」

両手を握りしめながら、その手に滲む汗を己の着ているスーツで拭う。

「あの子は無事に『例の少女』に接触できたかしら……」

「きつと大丈夫だ。シャルロットは基本的に人と仲良くなる事が上手い」

「そうね……」

『シャルロット』

それがシャルル・デュノアの本名。

彼女の事を話す夫婦はとても穏やかで、そこからは全く負の感情は読み取れない。

「シャルロットとデュノア社……。その両方を護る為なら、例え命さえ惜しくは無い……!」

机の引き出しをそつと開けると、そこには黒光りする一丁の拳銃が。

「あなた……それは最後の手段でしょ?」

「分かっている……分かってはいるが……」

前向きに考えようと思っても、どうしても最悪の事態が頭をよぎる。

手は震えて汗は止まらない。

心臓だつて先程からバクバクと激しく鼓動している。

「すまない……。本当なら、お前を巻き込むつもりはなかったのに……」



「今更何を言っているの。貴方と夫婦となって、シャルロットと共に守るって決めたその時から、私は最後の瞬間まで一緒にいるつもりよ。その覚悟はとつくの昔に済ませてきてるわ……彼女の墓前でね……」

「そう……だな……」

夫婦の決意。

それは、己の身を犠牲にしても大切な娘を絶対に守る事。

今は亡き、シャルロットの産みの母親の墓の前で二人が誓った事だ。

「あの子を守るためとはいえ、我々は親として間違いなく最低の事をした。だが、例え後世の人間達に鬼畜にも劣る『賊』の烙印を押されようとも、我々が愛した娘と、祖父と父が必死に守ってきたデユノア社だけは、何が何でも死守してみせる。両方とも、あのようなテロリスト達の好きにさせてはいけないんだ……!」

「そうね……!」

何かを護る為に何かを犠牲にしなくていけないのが世の理ならば、この夫婦は娘と会社を天秤に掛けられた瞬間に、即座に自分達を犠牲にする事を決めた。

その為に、夫婦は敢えてシャルロットに辛く当たった。

彼女には自分達に対する人質としての価値が無いと思わせる為に。

コツ：コツ：コツ：コツ：コツ……

扉の向こうから複数の足音が聞こえる。

どうやら、『招かれざる訪問者』がやって来たようだ。

「来たか……!」

「念の為に、全ての社員を定時よりも早めに退社させてよかったわね……」

「そうだな……。これは我々の問題。彼らを巻き込む訳にはいかな  
い」

この夫婦にとって、娘と同じぐらいに社員達も大切な存在だ。

『会社は家、社員は家族』

それがデユノア社の社訓である。

無音で社長室の扉が開かれて、そこから二つの人影が現れた。

「貴方がデュノア社の社長であるアルベール・デュノア氏ですか？」

「そうだが……」

正直、夫婦は驚きを隠せないでいた。

何故なら、今日の前にいるのは、彼らが全く知らない二人組の女性だったからだ。

片方は褐色の肌に白いショートヘアの年端もいかない少女。

もう一人は、黒く長い髪を靡かせて、サングラスを掛けているスレンダーな女性。

なんとも異質な雰囲気を漂わせている二人だった。

「ああ……。もしかして、本来だったらここに来るはずだった人物じゃなくて、驚いてます？」

「う……。うむ……」

相手に自分達の反応を読まれないために、必死でポーカーフエイスを作る夫婦だった。

優れたビジネスマンのであるアルベールは、普段からポーカーフエイスをする事に慣れてはいるが、この女性達の前では何故か意味が無いように思えた。

「……………」

「そうですね。何も事情を話さずに、いきなり本題と言うのは、ちよつと礼を欠いていますね。分かりました」

黒髪の女性は何も言っていないのに、何故か会話が成立している。

この奇妙な光景を見て、夫婦の警戒心は更に高まった。

「まずは自己紹介から。私の名は『アトロポス』。こちらが私の敬愛する姉である『ラケシス』姉さまです」

簡単に名前を話す。

これは間違いなくコードネームの類だと判断した。

もしくは、この場で自分達を殺害する算段があるのか。

自らをアトロポスと名乗った少女は、悠々と語りだした。

「今回、私達は本来なら来る筈だった者の代わりにここに来ました」

「だろうな……。そうでなければ、この時間帯のこの場所に、女性二人

で訪れる理由が無い」

「御尤も」

どこまでも余裕の態度を崩さないアトロポスとは逆に、先程からプレッシャーで押し潰されそうになっている夫婦。

完全に真逆の心境になっていた。

「前に彼らが言った事は覚えていますか？」

「覚えているとも……忘れるわけがない……！」

飄々と言葉を発する彼女を見据えながら、怒りで拳が震えるアロール。

「どれだけ脅されようとも、我々は絶対にこの会社の経営権を渡したりはしない!! 無論、資金提供なんでもってのほかだ!!」

「それとね! 貴女達が人質として使おうとしていたシャルロットは、今は日本のIS学園にいるわ!! あそこにはブリュンヒルデもいるし、ミスターイタガキの御息女も在籍している!! そう簡単に手が出せるとは思わない事ね!!」

「御息女……。ヤヨイ・イタガキの事ですか？」

「……!! 彼女の事を知って……！」

「当然です。我々の情報網をあまり舐めないでくださいね？」

まるで先読みをしているかのように話すアトロポスに、心臓が握られたような感覚に陥る。

「チフユ・オリムラとヤヨイ・イタガキ……。確かに、現状である二人を同時に相手にするのは得策とは言えませんね」

『フ……』と息を吐きながら腰に手を当てるアトロポス。

少しだけ顔を伏せてから、夫婦の顔を真つ直ぐに見据えた。

「じゃ、別にいいですよ？　資金も経営権も渡さなくても」

「……………は？」

いきなりの事で頭が真っ白になる。

彼女は何を言った？

金も会社もいらなと言ったのか？

「ど…どういう事だ…？」

「ま、いきなりこんな事を言われても困惑しますよね。では、一から説明致しましょう」

アトロポスは、どこから出したのか、紙パックのジュースを取り出してストローを挿し、それをチュクチュクと飲みながら説明を始める。

「確かに最初はこのデュノア社の事を狙ってはいましたが、交渉の途中から上の方が別の事を思いついたようで、いきなり計画が変更になったんです。全く……私達も自分達が中間管理職であることの自覚はありますが、だからと言って上司からの命令で振り回される方は溜まったもんじゃありませんよ……」

心底疲れてますと言った感じで肩を竦ませながら顔を振る。

まだ幼さが残る少女とは思えない程に、疲れ切った顔だった。

「それだと言うのに、最初にデュノア社との交渉を任されていた担当さんが功を焦つたみたいで、上の命令を完全に無視して貴方達の事を脅していたようです」

「な……ならば……」

「はい。本日、私達がやって来たのは、もうこの会社からは手を引くと言う事をお教えする為です。よかったですね」

「は……はは……」

余りの出来事に、脱力しながら椅子に体を預ける。

妻の方も、ポカーンと口を開けながら呆然となっていた。

「そうそう。今までお二人を脅していた男ですけど、命令違反と言う事で、ここに来る前にラケシス姉さまがちゃんと殺処分をしておきましたから、御安心を」

「あ……ありが……とう……？」

「どういたしまして」

思わず礼を言ってしまったが、それが正しかったのかは分からない。

「それとですね、彼の腹心の部下が貴方達の御息女を密かに狙って日本に行こうと空港にいたのですが、我等の手で見つけた後で、コンクリート詰めにして海に沈めておきました。ですので、もう娘さんが狙われる事はありませんよ」

「シャ……シャルロットが……」

「よかった……」

この言葉を簡単に鵜呑みにするのはどうかとも思ったが、この時の夫婦は疑惑よりも安心感が勝ってしまい、頭の中に発生した疑いを頭の隅に追いやってしまった。

「し……しかし……何故いきなりデユノア社から手を引こうなどと言いつ出したんだ……？」

「うくん……一応は機密事項なのですが……お二人になら別にいいでしょう。今まで無用に脅し続けてしまった詫びもありますし、どうせ遅かれ早かれ世間に伝わる事ですから」

「テ……テロリストの類の割には、意外としっかりしてるんだな……」  
「当たり前じゃないですか。慈善事業でやっているわけではないとは言え、今回の事は完全にこちらの不手際で起きた事。ならば、人として詫びを入れるのは当然の事では？」

「た……確かに君の言う通りだ……」

よもや、テロリストに常識的な事を言われる日が来るとは、この夫婦も夢にも思わなかっただろう。

「実はですね、こちらの方で別の金づるを見つけたんですよ」

「別の金づるですって？」

それを聞いた途端、すぐに思い浮かんだのは『別の会社を自分達と同じように脅しているのではないか？』と言う疑問だった。

もしもそうであれば、諸手を上げて喜ぶ事は出来ない。

「別に、貴方達が危惧しているような事はしていませんよ」

「なんだと……？」

まるで心の中が読まれたような事を言われて、怪訝な顔になる。

「会社の類を脅したりしなくても、いるじゃないですか。無駄に金ばかりを持っていて、更には世界中でアホみたいに威張り散らしている『表側の悪』とも言うべき、ある意味で私達以上に質が悪い連中が」

「表側の悪とは……まさか……！」

「はい。我々が標的にしたのは『女性権利団体』の連中です」

女性権利団体。

ISの誕生と同時に発足し、それ以来、その名の通りに様々な女性

の権利を訴えている団体……と言えは聞こえはいいが、実際には『女性こそが至高の存在』と言うバカげた考えの元に男性を社会から追いやって私腹を肥やし、同時に束と千冬の事を過剰なまでに神聖視していて、世間的に見ればまごう事無き『悪』でしかなかった。

「ウザいこと極まりない蛆虫共を堂々と駆除出来る上に、下手に会社を脅すよりも遥かに大金が手に入る。確か、これをジャパンの諺では『一石二鳥』と言うのでしょうか?」

淡々と語るアトロポスだったが、話している内容はとても恐ろしかった。

実際、デユノア夫妻もニュースや新聞などを見て、最近になって各国にある女性権利団体の各支部が何者かによって襲撃されて、次々と壊滅しているのを知ってはいたが、まさかそれが『組織』の仕業だったとは思ひもしなかった。

最悪の場合は、『組織』と『女性権利団体』は手を組む可能性すらあったからだ。

「実際、こちらに来る前にも女性権利団体のフランス支部を物理的に壊してきまして、そこからたんまりと活動資金は貰いましたから。ぶっちゃけ、デユノア社の数年分の儲けと同じ金が金庫に眠ってましたよ?」

いくら落ち目になってきているとは言え、まだまだデユノア社の儲けは相当な額になる。

その数年分と言えば、日本円にすれば間違いなく、少なくとも数億、多ければ数十億になる。

フランスの支部だけでそれだけの金を隠し持っていたのだ。

世界中の支部を壊滅させて、そこから金を奪っていけば、デユノア社を脅すよりも圧倒的な額の金が手に入る。

経営者として優れた実力を持つが故に、彼女達の言葉には何とも言えない説得力を感じてしまうアルベルだった。

「そんな訳で、もう我々はデユノア社に対してなんにも手出しする事はありません。それとですね、我々とこうして対面した事は誰かに話しても構いませんよ? 流石に名前を出されると困りますが、それさ

え言わなければ、先程の話の内容は全部公開しても構いませんし、娘さんに話してもいいです。まあ、流石に娘さんの誤解を解くためには、否が応でも話す必要はあると思いますけどね」

この二人はどこまで知っているのだろうか？

普通に佇んでいる二人の事を、今更ながらに恐ろしく思ってしまう。

「それと、これは私個人としての詫びの品です」

アルベールの前まで行き、机の上にUSBメモリを置くアトロポス。

「これは……？」

「私が独自に開発した第3世代型ISの設計データが入っているUSBです」

「なんだって!？」

現在のデュノア社が喉から手が出る程に欲しているデータが、まさかテロリストの少女から提供された。

本人としてはなんとも複雑な心境である。

「このデータを使うかどうかはそちらに任せますが、これだけはお忘れなきよう。このデータはあくまで『私個人の詫び』ですので、そこまで気に病む必要はございません。デュノア社の技術力ならば、きつとコレを有効活用が出来ると思います」

震える手でUSBを掴んで、思わず彼女達を見る。

いくら詫びの気持ちがあるとは言え、何故に彼女達がここまでしてくれるのか。

それがアルベールには全く理解出来なかった。

「それじゃあ、私達はそろそろ行きますね。この後も予定が立て込んでますので」

「……………」

「姉さまがこう仰っています。『これでフランスも【イグニッション・プラン】に再び参加できるな』……………」

「……………」

世間が知らないフランスの内情すらもこの姉妹は把握している。



ラケシスとアトロポスに隠し事は出来ないと確信した瞬間だった。「では、夜分遅くに申し訳ありませんでした。これからもどうか、ご家族で仲良くお過ごしください。では、おやすみさない」

丁寧な物腰と会釈をして、二人は静かに去っていった。

「……一度に色々起きすぎて、頭が追いつかないな……」

「私もよ……」

本来ならば、ここで警察に通報でもするべきなのだろうが、ここで警察を呼べば、必然的にデユノア社が今まで脅されていた事なども話さなければいけなくなる。

そうなれば、今度こそデユノア社は終わりかもしれない。

だからこそ、二人はあの姉妹を大人しく見送るしかなかった。

もしかしたら、ここまで計算していたのかもしれないが。

二人が精神的に極限まで疲労している時、突如としてシャルロットに渡していた緊急用の通信機の投影型モニターが机の上に現れた。

モニターには当然のようにシャルロットの姿が映っているのだが、今の彼等にはモニター越しの再会を喜ぶような気力は残されていないかった。

「シャ……シャルロット……？」

出来る事と言ったら、辛うじて残されている気力を振り絞って娘の名前を呼ぶ事ぐらいだった。

こうして、日本とフランスの物語が交錯する。

## 和解

シャルル君が出した投影型モニターに一番最初に映ったのは、高級そうな背広を着た白人の中年男性が椅子に座った状態で呆けている姿だった。

彼がシャルル君のお父さん……なの？

「お……お父さん……？」

あ、やつぱりそうなのね。

よく見ると、鼻の辺りとか少しだけ似ているような気がするし。

『シャル……シャルロット……？』

あれ？ 向こうも彼女が通信を送ってきたことに驚いてる？

これが緊急用だからか？

『こ……この通信をしたと言う事は、何か急を要するような事が起きたのか……？』

「そうじゃない……けど……」

通信越しに親子の対面だけど、二人共めっちゃ困惑してる。

私達もどうすればいいか分からないから、今は黙っているしかないけど。

『まさか……正体がばれたのか？』

「は……はい……」

怯えながらも肯定する。

その背は少し震えていた。

「あ……あの……」

「分かっている。傍に行つてやれ」

お……おおく……。

私が何も言っていないのに、こちらがしたい事を分かっているらしい……。

「やはり、姫様はお優しい……」

織斑先生の拘束から解放されて、その場にラウラを置いてからシャルル君の近くまで寄っていく。

「大丈夫……？」

「板垣さん……」

取り敢えず、彼女の頭に手を置く。  
すると、彼女の体の震えが止まった。

『か…彼女は……!』

え? 私が何か?

『そうか……無事に彼女に出会えたのか……』

いやだから! まるで私を知ってる風な反応は止めてよ!?

こつちからしたら不気味この上ないから!

『ミス板垣に見破られたのか?』

「いや……彼女だけじゃなくて……」

チラつとこつちを向いてから、モニターを部屋全体を見渡せるように体をどかす。

『なっ……!?! 例の男性操縦者にミス・織斑、他にもドイツの代表候補生とロシアの国家代表まで……!?!』

「僕の変装じゃ、この人達は誤魔化せませんでした……」

『と、言う事は……?』

「はい……。僕の男装は、最初から見抜かれていたようです……」

『……………』

黙りこくつた。怒ってるのかな?

『ハ……ハハハ……! 見抜かれていた……か……』

「お…お父さん?」

今度は急に笑い出した?

この人本当になんなの?

『いや……すまない。別にお前の事を怒っているわけじゃない。流石はブリュンヒルデに国を背負った代表と候補生。そして、ミスター板垣の御息女……ですな』

この人……おじいちゃんの事を知っている?

「お父さん……」

『なんだ?』

「貴方に聞きたい事があります」

『……何を聞きたい?』

シャルル君……いや、シャルロットが唾を飲む音が聞こえた。

「まず、僕の変装は最初からバレることを想定していたんですか？」

『ああ……』

まずは私達の推理が一つ当たった。

それから、彼女は私達が推理した事を一つ一つと社長さんに確認していった。

彼は、その全てを頷きながら肯定した。

『……シャルロット』

「なんですか……？」

『私達は親として、お前に最低の事をしてしまった。これは、どんな言い訳をしても、決して許される事ではない』

どんな言い訳をしても……か。

私的には、その言い訳にもよると思うけどね。

『だが、これだけは言わせてほしい……！』

モニターに社長さん以外にも、もう一人、悲痛な顔をしたスーツを着た妙齢の女性が現れた。

『私達は！ ただの一度でもお前の事を憎んだ事も疎ましく思った事は無い!!』

『私達の事はどれだけ恨んでくれても構わない!! でも！ 私達は貴女の事を心から愛しているわ!!』

涙を流しながら、必死に言葉を紡ぐ夫婦。

この二人からは、微塵も悪意も虚偽も感じない。

「……」

私達も、彼らの言葉を黙って聞いていた。

「……」

そして、シャルロットは無言で涙を流しながらモニターの向こうにいる両親を見つめている。

「……お父さん……義母さん……」

『お前……今……』

「話して……くれますか……？」

『……無論だ。お前には、それを聞く権利がある』

そこから、夫婦はゆっくりと語りだした。

二人が、娘を致し方なく蔑にしてしまった理由を。

『デュノア社は……とある『組織』に狙われていた』

「狙われて『いた』？ 過去形？」

『そう……過去形だ。私達も未だに驚きを隠せないでいるが、知らぬ間にデュノア社は助かっていたんだ……』

は？ 知らない間に助かっていた？

『組織の事は私達もよくは知らない。だが、私たち夫婦は、その組織のエンジニアを名乗る男から、会社の経営権と全ての資産を譲るように脅され続けていたんだ……』

「もしか……して……彼女……の事……も……？」

『ミス板垣の予想通りだ。場合によっては娘……シャルロットの事を人質にして、私達を意のままに操ろうと企んでいたようだ。シャルロットの体を使って金儲けをさせるとも言っていた』

……！！ それって……まさか……！！

「外道が……！」

「どこにでも、性根が腐っている輩っているものね……！」

他の皆も私と同じ考えに至ったようで、その顔は一堂に怒りに満ちていた。

『だからこそ……我々はお前に人質としての価値を無くさせる為に、苦渋の思いでお前に絶対に許されない仕打ちを……！』

『ごめんね……本当にゴメンね……』

あれは心の底から悔いている涙だ。

嘗て、同じ涙を私は見た事があるから、よく分かる……。

「僕は……嫌われてなかったの……？」

『当たり前だ（よ）！！』

よかったね……。本当に良かった……。

『自分が産んだ訳ではないとは言え、貴女は私の一番の親友が産み、愛した子供……。私は、シャルロットの事を自分の子供のように大切に思っているわ……』

『私もだ……。お前は彼女の忘れ形見である以上に、掛け替えのない

私の娘……。例え何があろうとも、私達はお前の事を守ると決めた……！ その結果、お前に嫌われようとも……。お前が幸せであるならば、我々はそれだけで十分なんだ……』

『私達はね、貴女のお母さんの墓前で、それを誓ったの……。』  
「お母さんの……」

生半可な覚悟じゃないのは物凄くよく分かる……。

子供の為に命を賭けられる親が、悪人な訳がない。

「ねえ……さつき、知らぬ間に助かったって言ってたけど、それってどういう意味なの？」

『ついさつきの事なんだが、私達を脅していた連中とは別の人間達がやって来て、いきなり『デュノア社から手を引く』と言い出したんだ』  
「え？」

ちよ……ちよつと本当にいきなりだね……。

ついさつきって事は、私達と通信が繋がる前……ってか、直前？

『全く見た事も無い二人組の女性達だった。褐色肌に白髪の少女と、サングラスをつけた黒髪の女性達で、二人は姉妹だと言っていた』  
「名前は？」

『褐色の少女は「アトロポス」、黒髪の女性は「ラケシス」と名乗っていた。簡単に名乗り、それを他言する事を許した時点で……』

「偽名。もしくはコードネーム……」

『でしようね……』

ギリシャ神話に出て来る運命の三女神……。

どう考えても本名じゃないでしょ。

「でも、どうして今まで狙っていたデュノア社から手を引くなんて……」

『シャルロット、それに君達も最近のニュースで知っているんじゃないか？ 女性権利団体の各支部が謎の襲撃者によって次々と壊滅していると言う事件を』

それ……知ってる。

おじいちゃんもその事で凄く頭を悩ませていたし、ネットの中でも最近はその話題で持ち切りになっている。

根も葉もない噂が所狭しと飛び交ってるけど。

「もしか……して……」

『そう。そのもしかして……だよ、ミス板垣。彼女達、正確には彼女達が所属している組織が襲撃の主犯らしい』

らしい……ってことは、確定事項じゃないんだな。

それは無理も無いか。碌に証拠も無い情報をすぐに信じるのは愚の骨頂だ。

『なんでも、権利団体の連中は、密かにかなりの金を隠し持っているらしいわ』

『彼女達は権利団体の事を【表側の悪】と言っていた。堂々と駆除出来るともな。恐らく、【組織】とやらにとっても権利団体の事が目の上のタンコブだったに違いない』

裏と表の【悪人】同士の潰しあい……か。

なんとも醜いもんだな。

いい気味と言えばそれまでだけど。

『それと、彼女達から【詫び】としてこんな物も貰ったよ』

社長さんがUSBメモリを見せてきた。

それがどうかしたの？

『この中に、彼女達が開発した第3世代型ISの設計データが入っているらしい』

「ちよ……大丈夫なの!? 明らかに怪しいよね!」

『無論、後で中身をちゃんと確認してみるつもりだ。私達とて、裏の人間からもたらされた代物を簡単に信じる程、馬鹿じゃない』

約一名、私は簡単に信じそうな人間に心当たりがあるけどね。

そこにいる鈍感大魔神とか。

「ね……ねえ……。僕はもう……スパイをしなくてもいいの……?」

『勿論だ。と言うか、それ以前にお前はスパイとしての知識も技術も身に付けていないだろう?』

「た……確かに……」

変装も『アレ』だったしねえ。

『これからは、堂々と女子として学園に通うといい。私達も、政府には

『代表候補生が一人、IS学園に向かった』としか報告していないしな。何か目立つ事をしない限りは、向こうはお前がどんな格好をしているも気にも止めないだろう』

「いやいやいや!? そんな簡単な報告だけでいいのかよ!」

それで日本行きを易々と許可したフランス政府も大概だけどさ!

「もう僕は……皆を騙さなくてもいいんだね……」

『何度も言うが、本当に済まない……。したくも無い男装をさせて、同級生を騙すような真似をさせてしまつて……』

「ううん……。男装自体はそれほど気にしてないよ。これもある意味でいい機会だと思うし、それに……」

ん? こつちを見てどうした?

「この恰好をしていたからこそ、知り合えた人達もいるしね」

『……どうやら、いい友人達に恵まれたようだな』

「うん!」

なんとも眩しい笑顔ですな。

……私には一生かかっても無理だ。

『織斑教諭』

「なんででしょうか?」

『明日からでも娘を女子として再編入させることは可能でしょうか?』

「すぐに……となると、少々難しいかと。しかし、急げば来週にはなんとか……」

『そうですか……』

「あ。僕、女子の制服持つてない」

「すぐに用意するのも難しいしな……」

スリーサイズとかも新たに調べないといけないしね。

しかも、今日は土曜日で明日は休み。

発注会社だつて、休みの日に注文されても困るだろうし。

「制服が届くまでは誰かのやつを借りればいいんじゃないか?」

「それは……」

おい。そこでどうして皆の胸を見る?



「ふむ……。弥生や更識では胸のサイズが大きいし、ラウラでは逆に小さい。この場にはない連中に借りる訳にもいかんしな。こればかりは仕方があるまい」

「なんか複雑ですけど、そうですね……」

私と楯無さんは苦笑いをするしかないけど、ラウラは全く気にしてない。

まだまだ、色気よりも食い気なのかもしれないな。

「こちらの方でも準備だけはしておく。制服が到着するまでは男子のまままでいて貰うが、それでもいいか？」

「こればかりは仕方が無いですからね。わかりました」

なんか妙な空気になってるけど、一応はこれで無事解決……かな？

『シャルロット。長期の休みになったら、いつでも帰って来なさい。その時は、家族水入らずと一緒に食事でもしようじゃないか』

「うん……！ その時を楽しみに待ってるね！」

家族水入らず……か。

私もおじいちゃんと一緒にご飯が食べたいな……。

「あ……あのさ、もう二つほど聞きたい事があるんだけど……」

『なんだ？ ここまで来たら、なんでも答えてやろう』

「僕や会社を狙って父さんたちを脅していた人達はどうなったの？」

『彼ならラケシス達が『殺処分』をしたと言っていた。多分、読んで字の如くだらうな』

当然の末路……だけど、なんとも物騒な世の中ですな。

「さ……殺処分って……」

「その部分に関しては考えるだけ無駄よ。織斑君」

だな。この世にはお前が知らなくてもいい世界があるのだよ。

「じゃあ、どうして僕に『板垣さんに接触しろ』って言ったの？ あの時に言った事が真実じゃないんでしょ？」

『それは、彼女の義父殿が日本において非常に重要な人物だからだ』

「重要な人物？」

『そうだ。詳しくは書類にも書いていなかったから分からないだろうが、少なくとも、彼女と仲良くなっていれば、その繋がりで、日本に

おけるお前の安全が確保されると思つてな』

あゝ……成る程な。

おじいちゃんに認められれば、確かに日本では大丈夫だな。

「弥生のおじいちゃんってマジで何者なんだ……？」

「すご〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く偉い人よ」

「その一言に尽きるな」

「ですね。だからこそその姫様ですから」

「分かるような、分からないような……」

割と簡単かつ重要なヒントを出してるけど、これでも分からないのか？

いや……答えが簡単すぎて、逆に分からないパターンかも。

『シャルロット。こつちの事は私達に任せて、お前はそつちで思う存分に青春を満喫しなさい。お前にはその権利がある』

『そして、いつか一緒に貴女のお母さんのお墓参りにでも行きましょう？ 彼女もきつと喜ぶわ』

「うん……」

『ではな……。私達はお前が元気にいてくれることを何よりも願っている』

『それじゃあね。いつの日か、貴女の母親に相応しい女になってみせるわ』

最後は満面の笑みを浮かべながら、夫婦は通信を切った。

「ありがとう……お父さん。お義母さん……」

涙を流しながらも、笑顔で両親に向かって挨拶をする彼女の事を……私はとても可愛らしいと思つた。

これで暴力的な部分さえなければ、普通に友達としてもいいと思うんだけどな……。

ここから始まる

無事に両親との和解を果たしたシャルロットを横目に、私はそつと彼女の近くから離れようとした。

けど、シャルロットが急に私の服の袖を掴んできて、それを許さなかった。

「あ……あの……もうちよつとだけ傍に……」

「ん……」

このような場合、私にある選択肢は『はい』か『いいよ』しかない。だって〜！ 彼女達が怒った時の事を考えると、普通に怖いんだもん!!

え？ ラウラ？ あの子は私の癒しですが何か？

「しかし、あの二人の話を聞いている限りでは、私達のやったことは余り意味が無かったように思えるな」

「そうね〜」

「は？ なんでだよ？」

お……おい……。

あのご両親の話、ちゃんと聞いてたの？

「はあ……いいか？ あの二人はこう言っていた。『知らぬ間にデュノア社は助かっていた』と。つまり、彼等でさえ預かり知らぬ所で事態は急速に動いていて、その結果としてデュノア社とデュノア家の平穏は守られた」

「仮に私達が何もしなくても、近い内に向こうからシャルル君……じゃなくてシャルロットちゃんの方に直接連絡があつて、そこでさつきみたいなやり取りがされた筈よ」

「つて事は……」

「私達……がした事……は……その話し合い……のタイミ……ング……を早めた……だけ……」

「マジかよ……」

そう。その通り。

私達がした事は、完全に『余計なお世話』だったのだ。

だって、私達がした事を総合的に振り返ってみると……

一夏がシャルロットの裸を見て、  
その一夏が私とラウラを部屋に呼び、  
その後に私が楯無さんと呼びつけて、  
そこから軽く話した後の推理大会。  
念の為に織斑先生に話をしに行つて、  
後はモニター越しの親子直接対面。

……私達つて、少しでもデュノア家の仲直りに貢献した？  
ハッキリ言つて、微塵もしてない。

唯々、皆で話し合つただけで終わっている。  
一夏に至つては、その話し合いにすら碌に参加してないしね。  
つて事は、こいつつて普通に女の子の裸を見ただけ？  
うん、ギルティ。

「取り敢えず、今回の事は私から真耶の方にも報告しておく。アイツ  
もお前の正体に気が付いていた人間の一人だし、私だけでは色々と面  
倒だしな」

おい、最後の方に本音が漏れてるぞ。

(呼んだ〜?)  
呼んでないよ?!

つて言うか、今確かに本音の声でした!?

「流石に今すぐに……とはいかないが、それでも来週には必ずお前の  
再転入の手続きと制服の手配は済ませておこう」

「あ……ありがとうございます!」

「気にするな。教師として生徒の面倒を見るのは当然の事だ。なあ  
……弥生?」

「そう……で……すね……」

なんでそこで私に振る?!

「私の方でも少し手伝います。そうすれば、少しは早まるでしょうか  
ら」

「それは助かるが、いいのか？ この時期は生徒会も忙しいだろうに」  
「大丈夫です！ 虚ちゃんが頑張ってくれますから！」

哀れ……虚さん……。

今度、割と真面目に生徒会に差し入れでもしようかな……。

「それに……」

「きやあああつ!？」

い……いきなりなにをするだあああ!？ 許さん!!

楯無さんや！ なんで私の体に抱き着いて鼻をヒクヒクさせる!？

「弥生ちゃんの香りがあれば、私は後10年は戦えます!!」

お前はどこのジオン軍の将校だ。

あれか？ この人も骨董品とか集めるのか？

「弥生の香り……」

そこの男子。何を想像している。

「弥生の香りか……確かに素晴らしかったな……」

この女教師ももうダメだあああああつ!？

「姫様の香り……」

別にラウラならいつでも大歓迎だよ？

って言うか、毎日一緒に同じベッドで寝てるんだから、もう何とも思っていないでしょ？

「ところでシャルロットちゃん？」

「な……なんですか？」

お？ なんだ？ 楯無さんはまだ何か聞きたい事があるのか？

流石は暗部の長。ふざけてはいても、ちゃんと最後まで気は抜かないみたいだ。

「さつきから何回も弥生ちゃんに抱き着かれたり、頭を撫でて貰っていたけど……ぶつちやけどうだった？」

「ええええつ!？」

周囲に聞こえないように小声で話しているせいかな、私には何を言っているのかサツパリだ。

シャルロットの叫び声はよく聞こえたけど。

「な……なんか……いい匂いがして……とつても軟らかくて……」

「それで？」

「ドキドキ……しました……♡」

「でしょうね……分かるわ」

なにを大きく頷いてるの？

傍から見ると、なんか変だよ？

「それに……凄く落ち着いて……まるでお母さんに包まれているような感じがしました……」

「そうよね……。やっぱ、弥生ちゃんの母性って半端ないのよね……」

おくい。その女子二人がなんか顔を赤くしながらヒソヒソ話してるんですけど。

誰も止めなくてもいいんですか？

「ところでお前等、もう夕食は終わったのか？」

「あ……」

そうだった！ 私にとって夏コミ&冬コミと同じぐらい大事なライフワークをすっかり忘れていた！！

ぐおおおお……！！ 板垣弥生……一生の不覚……！！

意識すると、途端にお腹が空腹に苛まれて……。

「まだならば、早く行ってこい。この時間帯なら食堂は開いている筈だ」

「早く……行こう……！！」

「おう……。弥生が珍しく燃えている……」

「それだけ姫様は空腹と言う事なのだろう」

「それじゃ、お姉さんも一緒にしようかしら」

となると、流れる的に彼女も誘わないとダメですよ。

「行……こう……？」

「え？ 僕も一緒に行つていいの？」

「当……然……」

と言うかですね、ここでシャルロットだけハブるとか、普通に鬼畜だから。

いくら私が彼女達を警戒しているからと言って、さっきの今で何も

しないような奴じゃないですよ？

「教官はどうされるのですか？」

「私ならばとつくに食べてきた。お前達だけで行け」

「了解です！」

はい。綺麗な敬礼だけど、ベッドの上に座っている状態では普通に可愛いだけだから。

そんな訳で、皆仲良く一緒に夕食タイムと洒落込む事になりましたとき。

さくて……今回はいつも以上にお腹が空いてるから、ガッツリとしたものを食べたいにゃ♡

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

食堂に向かつて並んで歩いていると、なにやら生徒達の視線がこっちに向いている事に気が付いた。

「なんか……俺達、見られてないか？」

「そりゃね。これだけ学園の有名人が一緒にいれば、普通に注目するわよ」

それもそっか。

一夏は勿論のこと、楯無さんは生徒会長でロシア代表、ラウラだつてドイツの代表候補生。

更に、シャルロットは便宜上、まだ皆の中じゃ二人目の男性IS操縦者って認識だしな。

私を除けば、皆が皆、学園じゃなくても普通に街行く人が振り返るレベルの有名人ばかりだ。

そう考えると、私の周りって凄いなだなく……。

「この中でも断トツで有名なのは勿論……」

一夏か楯無s……

「二(弥生(ちゃん)(姫様)(板垣さん))」

なんで満場一致で私!?

こんな時だけ見事にハマリやがって!

「弥生ちゃんは今や『IS学園の聖母』『IS学園の良心』とかって呼ばれてるものね」

なにその羞恥心全開の黒歴史を彷彿とさせる異名は!?

呼ばれている私が初めて聞いたんですけど!?

っーか、聖母って何!?! 私はアレか!?! 処女なのに天使から受胎告

知されなきやいかんのか!?!

「それなら僕も聞いた事あるかも……」

「私もだ。それを聞いた時、不思議と誇らしくなったな……」

転入生の二人にも既に知られてるの!?

どんだけ学園に広まってるんだよ!?! その異名は!?!

「ま、始めに言い出したのは新聞部の薫子ちゃんだけけどね」

薫子って確か……新聞部の副部長をしているって言う二年生か。

私の記憶の中じゃ、クラス代表就任パーティーの時に一夏にインタビューをしていた場面が印象的だけど、私自身は実際に会った事は無いんだよね。

だって、その時って丁度、ベッドの上で悶え苦しんでましたから。

(取り敢えず、黛先輩さんにもしも出会う機会があれば、その顔面にキツイ一撃をお見舞いしてやろう……インパクトナツクルで)

鼻の骨が折れるかもしれないけど、是非もないよね!(意味不明)

今になって明らかになった新事実に辟易しながら歩いていると、私達の進行方向から見覚えのある5つの影が歩いてきた。

「ん? 弥生?」

「あら……」

「一夏も一緒か……」

「お姉ちゃんも……」



「おおく……そくそくたる顔ぶれだね」

箒にセシリアに鈴に簪に本音。

今回の事に関わらなかつたメンバーが見事に揃っていた。

(こつちも5人、向こうも5人。なんとも不思議な構図だな)

まるで、今からチーム戦の競技がありそうな場面だ。

「そつちから来たと言う事は、今から夕食に……?」

「その通りだ。お前達はもう食べ終えたのか?」

「え……ええ……そうですわ……」

んん? なんか五人共……焦ってる?

(くっ……抜かった……!)

(私達で先に食堂に向かって弥生さんを出迎えようと思っていましたのに……)

(余りにも遅いもんだから、先に食べちゃったのがここで仇になるなんて……)

(お姉ちゃんも一緒に……ユルスマジ……!!)

(うくん……今回は仕方が無いかなく……)

三者三様ならぬ、五者五様の表情だな。

見ていてちよつと面白い。

「お腹……空いた……」

「「「はっ!?!」」」」

早くそこをどいてくれると嬉しいな。

もうさ、お腹と背中がくっつきそうなんですよ。

「ど……どうぞ、弥生さん! 今ならばきつと席も空いている筈ですわ!」

「そ……そうよ! ほら、行った行った!」

「ありが……と……」

出来れば、夜の事も考えて腹持ちがいい料理を食べたいな。

そんな事を考えながら、どいてくれた五人の横を通り過ぎようとすると、楯無さんが簪に、一夏が箒とセシリアと鈴に腕を掴まれて立ち往生していた。

「お姉ちゃん……」

「ど……どうしたの？ 簪ちゃん……」

「アトデハナシガアルカラ……」

「あ……はい……」

か……簪？ 気のせいか、目が光ってない？

「一夏……」

「もしも弥生さんに不埒な真似をしたら……」

「……… 振り切るわよ」

「どこを!？」

あの二人は何をしているのやら。

行かないのなら置いてくよ？

「姫様。我々是我々で先に行っていきましょう」

「だね……」

ラウラの提案に従って、私達とシャルロットは先に食堂に向かう事に。

「ね……ねえ……」

「どうした？」

「二人ってさ……いつもそんな風に手を繋いでるの？」

「そうだが？ それがどうかしたか？」

「いや……なんでもない」

私達が歩く際に手を繋ぐのは、もう普通にデフォになりつつある。

だって、こうしておかないと、すぐにどっかにフラフラと行っちゃ

いそうなんでもん。

(姉妹って言うよりは……完全に親子だ……)

なんでシャルロットを含めた周りの皆が生暖かい笑顔でこっちを見てるの？

妙に空気がほんわかしてますよ？

皆の反応は私達が食堂に辿り着くまで続いて、一夏と楯無さんは少しだけ遅れてやって来た。

時間的には、割とギリギリな感じだったから、急いで注文をする事に。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

私が注文した『超大盛りカツカレー（23人前）』に舌鼓を打っていると、私の左隣に座ってカルボナーラを食べているシャルロットが話しかけてきた。

「あ……あのさ……」

「ん？」

「その……なんで板垣さんは部屋に呼ばれた時、僕の話の黙って聞いてくれたの？」

「なんでって言われてもね……」

私的にはあそこで即座に退出なんて事は出来なかった……と言うよりは出来ない（したらどうなるか想像できない、したくもない）から、あそこでは大人しく話を聞く以外の選択肢が無かったわけだけども……。

（そんな事を言ったら、私の危険がピンチになるのは明白。だったら……）

「ここは適当に誤魔化しますか。」

「……放っておけなかった……から……」

正確には『放置したらどんな目に遭うか分からなかったから』が正解だ。

……まあ、原作知識を持つ者として、普通に見過ごせなかったってのもあるけれど。

「板垣さん……」

んんっ!? このカツ……サクサクしてて美味しい♡

カレーのルーとの相性も抜群だよ♡

(板垣さんは養子だって言ってた……。ある意味では僕よりも辛い目に遭ってきたのかもしれないのに、それでも僕の事を心配してくれて……)

あら、右隣でハンバーグを食べているラウラの口元がソースでベトになつてる。

「ラウラ……こつち……向……いて……」

「姫様？… んん……」

テーブルの上に備え付きになつてる紙で口元を拭いて……。つと。これでよし。

「あ……ありがとうございます……」

「ん……」

ラウラの頭を一撫でしてから、食事再開。

「……本当にお母さんみたい……」

んあ？… 何か言った？

「そうよね～……。私も弥生ちゃんにお口拭き拭きしてほしいわ～……」

いや、それは流石に遠慮します。

そもそも、楯無さんが食べてるのってきつねうどんじゃないですか。

そこまで口元は汚れないでしょうに。

「ね……ねえ……。僕も板垣さんの事を名前で呼んでも……いいかな？」

私の事を名前です？… 別に、そんなの私に一々許可なんて取らなくても、普通に呼ばばいいじゃん。

名前で呼ばれた程度で何かを思うほど、私は繊細な人間じゃないから。

もしも私が繊細だったら、こんな体な時点で即効アウトですから。主に精神が。

「いい……よ……」

「やった！… じゃ……じゃあ……弥生？」

「な……に……？」

「ふふふ……なんでもないよ♡」

なんじゃそりゃ。

その後も私達は人の少なくなった食堂で食べ続けたが、なんでかシャルロットは終始、笑顔のまままで食事を続けていた。

食堂に残っていた数名の女子達が、私がラウラの口元を拭う度にはほんわかとした顔をしていたのが不思議だった。

今日は精神的に疲れたから、たつぷりと熟睡出来るだろうなく。

部屋に戻ったら、すぐにシャワーを浴びて、それからラウラを抱きしめてお休みしましょうかね！

でも、何か大切な事を忘れているような気が……なんだっけ？

## 人の噂も七十五日

なんやかんやで、人知れずデユノア家の問題が解決した次の週の月曜日。

私はラウラ、一夏と一緒に教室へと向かっていた。

シャルロットは一緒にやなくて、一夏が言うには、休みの内に再転入の手続きが早くも終了して、彼女は朝早くに部屋を出て織斑先生や山田先生の元に向かったらしい。

となると、原作よりもかなり早めにシャルロット再転入ですかにや？

「そ…それは本当なの!?!」

「嘘じゃないでしょうね!?!」

「いや…まさかそんな事が…」

「それは聞き逃せない…!?!」

「いいなあ…!?!」

…:…なんか、教室の中から聞き覚えのある声が聞こえてきたんですけど?!

つーか、約2名、他のクラスの子が混ざってない?

「なんででしょうか?」

「さあ?」

そんなの私を知るわけがない。

ラウラの純粹に疑問を感じている顔を眺めながら、私達は教室へと入っていくことに。

すると、入った途端に奇妙な話が耳に入ってきた。

「うん。私も風の噂で聞いた程度なんだけど、なんか変な噂が学園中に広まっているのは事実だよ」

「なんでも、今度開催されるって言う学年別トーナメントで優勝すれば、何故か板垣さんから耳かきをして貰え…!?!」

んん? 気のせいかな? 私の名前が聞こえた気がするぞ?!

「おい貴様等。何を話している?」

「「「きやあああああああつ!?」「」」

声デカツ!? 朝から元気あり過ぎでしょ……。

「ラ……ラウラさん!」

「弥生に一夏も!」

「い……いつの間に教室に……」

「も……もしかして聞かれてた……?」

「かもね〜」

少しだけなら聞こえたけどね。

私がどうのとか、耳かきがどうのとか。

細かい部分は流石に聞こえなかったけど。

「なんか弥生の事を話して無かったか?」

「そ……そうかしら!? 気のせいじゃない!?」

「そ……そうですわ! 若いのに白昼夢を見るなんて、貴方も困った人ですわね!」

「白昼夢って……今はまだ朝なんだけど」

「なら寝ぼけていたって事で」

「なんでそうなる!」

明らかに何かを誤魔化そうとしている?

……。  
そういや、この時期って言えば学年別トーナメントがあつたよな……。

来る途中に廊下にイベント告知の張り紙もしてあつたし。

(あれ? 学年別トーナメントって事は……)

原作では、女子達がある噂で持ち切りだったっけ。

確か……『学年別トーナメントの優勝者は一夏と交際できる』……  
だったよね?

でも、さつきは一夏の名前なんて少しも出てきてないし……。

(……これってどゆこと?)

うーん……分かん。

(あ、トーナメントと言えばもう一つ大変な事があつたじゃん!)

ラウラのIS『シユヴァルツェア・レーゲン』に密かに仕込まれていた『VTシステム』の起動と暴走。

大抵の事は『原作パワー』でなんとかなると思つて楽観的になるけど、こればかりは別問題だ。

今や、ラウラは私の中で簪や本音と同じぐらいに大切な存在へと格上げされている。

そんな彼女が危険に晒されるなんて、私は絶対に看過できない。

出来れば起動の阻止を。無理ならば起動してから意地でも救出してみせる。

今回ばかりは、マジでいかせて貰うよ……！

「姫様？… どうされました？」

「なんで… もない… よ… ……」

「??？」

可愛らしく小首を傾げる彼女を見て改めて決意する。

いざとなったら、アーキテクトにまた無理をさせるかもしれない。

でも、私は信じてる。アーキテクトならば必ず私の想いに応えてくれると。

「あ… あたしはそろそろ二組に戻るわね！… じゃー！」

「私も四組に戻る。またお昼にね、弥生」

「ん」

鈴と簪が脱兎のように一組の教室を出て行く。

ま、このままいたんじや、織斑先生の出席簿の餌食になるのは目に見えてるから、当然の行動だけど。

「なんだったんだ… ……」

「「さあ？」」

「このやり取り、二回目じゃね？」

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・





約数名、箒とセシリアと本音だけは『やっぱりな……』って顔をしていたけど。

「えっと……シャルル・デュノア改め、シャルロット・デュノアです」  
「実はですね、彼女は国やお家の都合でどうしてもほんの一時だけ男子として過ごさなければいけなかった理由があるんです。その理由についてはここでは言えませんが、少なくとも、彼女は悪意があつて皆さんを騙そうとしていた訳じゃないと言う事だけは理解してあげてください」

そりゃ、ここでは言えないよね。

両親が謎の存在に脅されていて、自分も密かに命を狙われていて、それをなんとか躲すために男装していたなんて。

裏の世界を全く知らずに今まで過ごしてきた彼女達には、余りにも話が重すぎる。

「皆さん……本当に申し訳ありませんでした！」

シャルロットの心の底からの謝罪を見て、クラスの皆が少しだけ静かになる。

「大丈夫！ 別に気にしてないよ！」

「え？」

一人が言い出した事を切っ掛けに、次々とシャルロットを労わるような言葉が飛び出していく。

「噂の転入生の正体は美少年じゃなくて美少女だった……ね。いいんじゃない？」

「そうよね。男装女子なんて、今の世の中、そこまで珍しくないし」

「だよね。寧ろ、それって一種の個性じゃない？」

「それ言ってる！」

誰一人として責めるような意見は無い。

お人好しと言えばそれまでだけど、この年頃の少女達にしては珍しいと思う。

それとも、運よく1組にはそんな風なメンバーが集められただけか。

「皆……ありがとうございます……！」

涙ぐみながら礼を言うシャルロット。

もうそこには、友情とスパイの二重苦に悩まされていた少女はいなかった。

私達の前に立っているのは、同じクラスの仲間のシャルロット・デユノア、それだけだ。

「あれ？ でも確か、デユノアさんと織斑君って同じ部屋だったよね？ それで気が付かないって事は……」

「そ……それは……」

「い……いや！ シャルル……じゃなくてシャルロットはさ、俺に勘付かれないように上手に立ち回っていたから、一緒の部屋にいる俺でも全く分からなかったんだよ！」

一夏、必死すぎて逆に怪しい。

「……そっか。そうだよね。簡単にバレちゃったら男装の意味無いもんね」

え？ まさかの納得？ それでいいの？

結局、真実は隠蔽されて、一夏は今の今までシャルロットの正体を知らなかったことになった。

もしも嘘がバレていたら、即座にクラスの女子全員から『制裁』が与えられただろうな。

勿論、その制裁には私も加わるけど。

「話は終わったか？」

「織斑先生」

おっと、丁度いいタイミングで織斑先生の降臨ですか。

もしかして、廊下で話が終わるのを待ってたりする？

「はい。つい先程」

「そうか……」

山田先生とは違って、織斑先生は疲れた様子を見せていない。

元世界王者は伊達じゃないって事かしら？

「お前等も聞いたと思うが、これからもデユノアの事を今まで変わらないように接してやれ。いいな？ 分かったなら返事!!」

「!!」「はい!!」

うん。モロに軍隊方式です。

そして、私にそんなに大きな声は出せません。

もしも出したら、喉が破裂しちゃう。

「デュノア、お前の席は今まで通りだ」

「はい」

シャルロットが先週まで男子として座っていた席に座ると、そこで山田先生と織斑先生の立ち位置が交代する。

「では、これより朝のSHRを始める。今日の連絡事項は……」

こうして、本人からすれば大きな、全体的に見れば小さな変化があつて、またいつもと同じ一日が始まる。

今日こそが、シャルロットにとって本当の意味で初めての学園生活の始まりなのかもしれない。

・  
・  
・  
・  
・  
・

「二「本当にゴメンなさい!!!」」

「え……えつと……」

一時間目が終わった後の休み時間。

私は、以前に無人機騒動で知り合った例の三人組の少女達に屋上に呼び出されて、開口一番いきなり謝られた。

ぶつちやけ、訳が分からないよ。

「あの……今、学園に広まっている噂って知ってますか？」

「私……が耳掻きをする……とか……って言う……?」

「そう、それです！ 実はその噂……」

「広まった原因、私たちかもしれないんです……」

ん？ それはどういう事かな？

「あれは先週の事でした。校舎の廊下を生徒会長が嬉しそうにスキップしながら歩いていました」

「おい生徒会長。生徒の長たる者が廊下をスキップするとは何事か。で、会長は誰に話しているわけでもなく、一人で嬉しそうに呟いていたんです。『弥生ちゃん耳かき最高だった』って」

あゝ……そこまで聞かされた時点で、なんとなくオチが読めた。

「それを聞いた私達は羨ましくなって、『今度の学年別トーナメントで、私達の中で一番いい成績を取った子が板垣さんに耳かきしてもらえるように頼んでみようか』って話になったんですよ」

「恐らくですけど、その時の話を誰かに聞かれていて、それに色々な尾ひれ背びれが着いていった結果……」

「最終的に『学年別トーナメントで優勝した子は板垣さんから耳かきをして貰える』なんて噂に発展していたんだと思います……」  
成る程ね。

確かに、噂なんてものは、いつの間にか大きくなっていった時には最初の話の原型すら無くなる程に変貌する事が往々にしてあるからね。

特に、それが学園なんて言う『閉鎖社会』ともなれば猶更だ。

年頃の少女達の噂好きのレベルは、世間一般の人達が想像しているよりもずっと上だから。

「まさか、ここまで話が大きくなるなんて想像もしなくて……」

「本当にすいませんでした……」

謝罪の気持ちは受け取るけど、そこまで気にしなくてもいいと思う。

噂が学園中に流れても、誰も本気にはしないでしょう。

それに、私の耳かきなんて興味無いだろうし。

それ以前に、上級生には私の事を知っている人なんていないでしょう。

「大丈夫……だよ」

「「え？」」

「人の噂も七十五日……だよ。放っておけ……自然消滅する……と思う……」

「そんなもんでしょうか……」

「そんなもん……だよ」

年頃の女子高生なんて、熱しやすく冷めやすいのが常だ。

一カ月もすれば、別の話題で持ち切りになって、彼女達の頭から綺麗サツパリと消え去る……と思う。

「それ……に……」

ポケットから専用のケースを出して、そこから耳かきを取り出して見せる。

「耳かきぐらい……なら……いつで……もする……よ？」

「……い……板垣さあくん……」

うええええっ!!? なんでそこで泣きそうになるの!?

そんなに私に耳かきされるの嫌だった!?

「で……でも、ここで板垣さんの好意に甘えたら、却って駄目になりそうな気がする……」

「うんうん」

「……よし……」

何が『よし』なの？

「最初の話の通り、私達の中で一番の成績を取った子が板垣さんの耳かきを体験できることにします!」

「賛成!!」

結局、元の鞘に納まるってことね。

本人達がそれでいいなら、私としては何も言えないけど。

「もうそろそろ休み時間が終わるかも」

「早く行かないと授業に遅刻しちゃう!」

「それじゃ、私達は行きますね! 板垣さん、お話に付き合ってくれてありがとうございますございました!」

あ……行ってしまった。

「……私……も行かない……と……」

次の授業は織斑先生だった筈。

私も急がないと、本気で遅刻してしまう。

屋上から早歩きで教室まで急いだ結果、なんとかギリギリで教室には辿り着いた。

教室に入った直後にチャイムが鳴った時はかなり焦ったけど。

私のパートナーは誰になる？

IS学園校舎の一階廊下の一番右端。

お世辞にも人通りが多いとは言えない場所で、千冬とラウラが対面をしていた。

「……教官に少し、お聞きしたい事があります」

「……なんだ。言ってみろ」

いつもならばここで『教官ではなく織斑先生と呼べ』と言うやり取りがあるのだが、今の千冬はその事を全く指摘しなかった。

ラウラの纏う雰囲気がとても真剣に感じたからだ。

ここで下手に何かを言うのは逆効果だと考えたのだろう。

「教官は何故、この極東の地……いえ、IS学園に教師として留まっているのですか？」

「私にはやらなければいけない事がある。唯それだけだ」

「……やはりですか」

ここで千冬は少しだけラウラの態度に疑問を持った。

彼女が知っているラウラならば、ここで何かしらの文句に近い事を言ってくると思っていたからだ。

なのに、実際に彼女の口から出てきたのは、落ち着き払った納得の言葉。

(ラウラも……変わってきているのだな……)

嘗て、千冬は教官としてラウラに自分の持つ技術を教えはしたが、彼女が実際に出来たのはそこまでで、そこから先の最も大事な部分……人としての心や仲間を思う気持ちなどは何一つ教えられなかった。

結果として、千冬がドイツを去る際には冷徹で非情な勝利至上主義な少女がいたのだが、今のラウラからは当時の冷たい雰囲気は全くもって感じない。

千冬が最も望んでいたラウラの変化の原因は、少なくとも彼女が考える限り一つしかない。

(弥生と同じ部屋にした事は、どうやら間違いではなかったようだな



……)

弥生の持つ生来の優しさと母性が、ラウラの凍てついた心を溶かし、彼女を一人の少女にしてくれた。

その事に、千冬は心の中で感謝をせずにはいられなかった。

「……教官。貴女程の方がここにいる理由とはズバリ……姫様ですネ!?!」

「……………は?」

いきなりの事で、千冬が目が点になる。

「日本政府が極秘裏に姫様の護衛と教練を教官に依頼し、それを遂行する為にIS学園にて教師をしている……違いますか?」

「そ……それは……………」

実際には、たった一人の家族である一夏をこれ以上一人にはしていないのと同時に、IS委員会から半ば強制に近い感じでIS学園の教師にさせられた……が正解である。

教師になる際、千冬は委員会から無理矢理、教員免許を渡された。本人には全く教師としての知識は無いから、免許を貰ってから必死に教師としての勉強をしたと言う、なんともあべこべな経歴を持つていたりする。

千冬も何気に苦労人なのだ。

(どうする? ……ここで真実を言うか? いやしかし……最近では私の中で弥生の事が一夏と同じぐらいに大きくなってきているのもまた事実……ならばここは…………)

腕を組んでから、敢えてラウラの目を見ながら、それっぽい事を言ってみた。

「まあ……近からずも遠からず……と言ったところだ」

「いつもは毅然としている教官がハツキリと明言しないと言う事は、私の予想通りに政府から内密な任務が……。教官と姫様ならば、それも納得できる……………」

千冬がぼかした言い方をしてしまったせいで、ラウラは勝手な解釈の後に、勘違いをしたまま自己完結してしまった。

しかし、千冬も千冬で『どうせバレないだろうから、ここで黙って

いても問題は無いか』と樂觀視していた。

「ところで、板垣とは仲良くしているか?」

「はい!・ 姫様は私等には勿体ないぐらいに素晴らしいお方です。いつも後ろから髪を梳いて貰ったり、一緒に寝たりしています」

(な…なんだと…!?)

ここに来て明らかになった弥生のラウラの生活の一部。

それを聞いて、大人げなくも嘗ての教え子に嫉妬をしてしまう織斑千冬24歳独身。

(弥生に髪を梳いて貰うなど…私もしてほしい!! それに、弥生と一緒に寝ているだと…!?! こいつめ…なんて羨ましい事をしてるんだ…!!)

もしもここが自室で、いるのが千冬一人だったならば、間違いなく彼女は唇を噛み締めながら血の涙を流していただろう。

「そ…そうか…。仲が良さそうでなによりだ…」

「はい…」

歳相応の少女のように無邪気で明るい笑顔。

千冬がラウラに一番なつてほしかった姿になっているのは本当に嬉しいが、同時にこれが弥生とのイヤイヤ生活によって齎されている事実にも、なんとも言えない心境の千冬。

「そ…そろそろ授業が始まる。教室に行け…」

「はっ!・ では、失礼します!」

綺麗な敬礼をしてから、ラウラは早歩きで去っていった。

残されたのは千冬のみ。

「…少し強引に行けば、私にも髪を梳いてくれたり、耳かきをしてくれるだろうか…」

最近になって学園に流れている噂を聞いていた千冬は、その場に少しだけいて、自分が弥生に耳かきをされる光景を妄想していた。

彼女の顔がにやけている中、校舎内には次の授業を知らせるチャイムが鳴り響いた。

・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
・

放課後の第3アリーナ。

自分達の専用機を纏ったセシリアと鈴が並んでステージに入ってきた。

授業が終わってから一番に着いたせいか、彼女達以外の人影は見当たらず、見事なまでの貸し切り状態だった。

「やっぱ……アンタも例の噂を気にしてるクチ？」

「その話題が出ると言う事は、もしかして鈴さんも？」

「まあね。ここで馬鹿みたいに取り繕ったって意味無いし。それに……」

甲龍のハイパーセンサーを使って、アリーナの観客席の壁に貼り付けられている学年別トーナメントの張り紙を見る。

「ここに来る途中で見た、トーナメントの新しいルール……知ってるんでしょ？」

「ええ。『より実戦的な戦闘状況を再現する為に、ツーマンセルでの参加を必須とする』……でしたわね」

『ペアが出来なかった場合は抽選でランダムに選ばれた生徒同士でペアを組む事にする』が抜けてるけど、大体はそんな感じよね」

ペア……この単語が出てきた時、瞬時に二人が思い浮かべたのは弥生の顔だった。

「アンタさ……弥生とペア組みたいと思ってるでしょ？」

「当然。貴女もですわよね？」

「当たり前じゃない。きっと、私達だけじゃなくて箒や簪、本音も同じ事を考えてるでしょうね」

「それに……彼女も」

「ああ……シャルル……じゃなくてシャルロットね。薄々勘付いては

いたけど、ああも堂々と女宣言されると、流石に呆気にとられたわ」「私もですわ。昼食時に少しお話しましたけど、本人は本当に申し訳なさそうにしている、何も言う気が起きませんでした……ある一点を除いては」

「……いつの間にか、弥生と仲良くなつてたわね」

他のクラスである鈴と簪も、後にシャルロットの一件を知らされたのだが、その時にシャルロットが弥生の近くに立っていた事に驚きを隠せないでいた。

自分達が見ていない間に、一体何があつたのか。

勘ぐらずにはいられない二人だった。

「貴様等。そんな場所で何をしている?」

「あ」

二人が駄弁つていると、そこに黒い専用機『シユヴァルツエア・レーゲン』を纏ったラウラが姿を現した。

「なにやら姫様の名前が聞こえたような気がしたが……」

「う……うん。まあね」

弥生の事を話していたのは本当の事だったので、適当に誤魔化した。

「二人はトーナメントに向けての訓練か?」

「一応ね。そっちもでしょ?」

「ああ。強敵である代表候補生が僅かしかいないとは言え、油断をしていい理由にはなりえないからな」

「獅子は兎を狩るのにも全力を尽くす……ですわね」

「そう言う事だ」

ここに居る三人は、いずれも国の威信を背負った代表候補生。

弥生を巡つてのライバル以上に、同じ代表候補生として負けられない戦いがそこにはある。

「ところで弥生は? 一緒じゃないの?」

「姫様ならもうすぐ来るぞ。今日は一緒に訓練をする約束をしているからな!」

鼻息荒く腰に手を当てて胸を張るラウラ。

ある意味で同じ身の上の立場故に、鈴はその姿を微笑ましく見ている。

「弥生さんもご一緒出来るなんて……自然といつも以上に頑張れそうな気がしますわね」

「アタシも。今日はちよつと張り切っちゃおうかしら」

なんて事を話している間に、アーキテクトを纏った弥生がステージ内へと入ってきた。

「お待た…せ……」

「弥生（さん）!!」

弥生が来るや否や、すぐに彼女の傍まで行く鈴とセシリア。

その目的は勿論一つだけ。

「廊下とかに張り出されてるトーナメントの新ルールの事は知ってるわよね？ アタシと組みましょー!」

「いえいえー! ここは是非とも、このイギリスの代表候補生であるセシリア・オルコットとタッグを組みませんか!? 私と弥生さんが組めば優勝間違いなしですわ! そして、その後は弥生さんと二人きりで一緒に……グへへ……」

「ええ……」

余りの勢いとセシリアの最後に見せた表情にドン引きする弥生。

そこに待ったをかけるように、ラウラが声を掛ける。

「姫様ならば、もうとつくに私と組んでるぞ?」

「まさかの先制攻撃!」

この事態は想定していなかったのか、二人仲良く後ろを振り返る。

「ここに来る前に、私達で職員室に寄ってペアの申請書を提出してきた。私達は一緒に部屋だし、作戦も立てやすい。何より、私は姫様の護衛! 姫様と敵対するなど絶対に有り得ん!!」

「そ…そんなあ…」

完全に希望がついた二人は、先程までとは打って変わってしよんぼりとしてしまった。

「(何を落ち込んでいるんだ?) 姫様。姫様はあまり訓練をなさらないので、今日は軽く体を動かしつつ、近接と射撃の訓練を行いましょう」

か？」

「うん……」

弥生の訓練が見れる。

それを知った瞬間、落ち込んだ二人のメンタルが復活した。

「弥生の実力……」

「とても興味がありますわ……」

興奮する二人を余所に、弥生はラウラの隣で準備運動をした後に拡張領域からインパクトナックルを取り出し両腕部に装備、試しに何回か腕を動かしてみる。

「でっかいアームパーツよね……」

「あれを使った近接格闘戦は、かなり強力でしょうね」

二人が眺める中、弥生はラウラのアドバイスを聞きながら訓練を続けていった。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

弥生達がアリーナにて訓練をしている時、一夏と箒と簪とシャルロットの4人は、一緒に彼女達の元へと向かっていた。

「ツーマンセル……か。いきなり言われてもなあ……」

「確かにな。誰とペアを組むかで勝敗は大きく分かれてくるぞ……」

「個人戦じゃない以上、張り紙が出た時点で戦いは始まっていると言っても過言じゃないかも」

「そうだね。自分の長所を生かせるようなパートナーを選ぶか、それとも、短所を補ってくれるような相手を選ぶか」

なんて思案をしている振りをしているが、実際には頭の中で共通の事を考えていた。

((ペアは弥生がいいなあ……))

知らぬは仏とはよく言ったもので、この4人が既に弥生のパートナーがラウラに決定している事を知ったらどんな反応をすることやら。

「あー！ いたよ皆!!」

「織斑くん!!」

「お？ なんだあ？」

自分の名を呼ばれて後ろを見るが、そこには廊下を埋め尽くすほどの女子達が一夏の事を見て目を光らせていた。

「「「私と組んでえええ!!」」」」

「なんでさあああああああああつ!!」

ドドドドドドドドドドド!! つと地響きを唸らせながら女子達は一夏目掛けて一直線に突っ走ってきた!

「そこの横道に隠れるぞ」

「了解」

あっさりで見捨てられた一夏は、そのまま追いかけられながら廊下の向こうに消えていった。

「一夏、骨だけは拾ってやるから、安らかに眠れ」

「いやいやいや。まだ死んでないからね!」

「時間の問題じゃない？」

「そう思うなら助けようよ……」

男装をしなくなっても、相変わらず常識人枠のシャルロットだった。

「ところで本音はどうした？」

「本音なら、今日は虚さんに引つ張られて生徒会室に連行された」

「本音の姉である三年生……だったな。きつと、気苦労が絶えないだろうに……」

どこことなく虚に同情してしまう筈。

同じ様に、自由人な身内を持っているが故の共感なのかもしれない。

人込みが完全に無くなってから、三人は横道から出てきた。

「そう言えば、シャルロットは今、どこの部屋にいるんだ？ 流石に一

夏と同じ部屋ではないだろうか？」

「うん。男装を解いてからは、年頃の男女が同じなのは倫理的にも良くないって判断されたみたいで、僕はすぐに偶然にも一人部屋だった人の所に住む事になったよ」

「幾ら一夏の存在が貴重とは言え、学園にも世間体と言う物があるからな。これが普通だろう」

「学園側がちゃんと警備や警護をちゃんとしていれば、彼と誰かを一緒にする必要は無い」

「全くだな」

女三人寄れば姦しいとはよく言ったもので、三人は再びアリーナに向かつて歩きながら仲良さげに話していた。

この後、一夏が女子達の追跡を振り切れたかどうかは分からない。少なくとも、足腰は人並み以上に鍛えているから大丈夫だろう。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

第3アリーナにて弥生達が訓練をしている姿を、観客席から遠めに見つめている二つの影があった。

(あれがスコール叔母さんの言っていた例の弥生って奴か……)

ワザと制服を肌蹴させて胸元を露出させている金髪の女子生徒。

彼女の名は『ダリル・ケイシー』

アメリカの代表候補生にして、IS学園の三年生である。

「運動不足な部分は否めないっポイけど、筋は悪くないな……。一かちちゃんと鍛えれば、将来的に大化けするかもな」

大国アメリカの代表候補生をしているだけあって、彼女の实力は他の候補生達とは頭一つ分飛び出している。

その彼女の言葉には不思議な説得力があった。



「……で？ お前はそこで何をしてるんだ？」

「それは私に言っているのかな？」

ダリルの隣で穏やかな笑顔を浮かべている金髪ショートヘアの少女が、ステージにいる弥生をジッと見つめていた。

「そうだよ。オランダ代表候補生のロランツィーネ・ローランディ  
フィルネイ」

「フツ……」

ニヒルな笑顔を浮かべると、その齒に陽光が反射してキラッと光った。

ロランツィーネ・ローランディフィルネイ。

オランダの代表候補生であり、ロランの愛称で呼ばれている。

歌劇では男性役を演じる事が多く、彼女自身も女性が好きな典型的なレズビアン。

その点ではダリルと共通しているが、ロランの場合は99人の同性の恋人がいると噂されているらしい。

俗に言う『男装の麗人』的な少女である。

「私は唯、噂に聞いた少女を見に来ただけさ」

「少女って……板垣弥生か？」

「ああ。こうして直に見て噂が真実だったとよく分かったよ」

「ふくん……」

弥生に関する噂自体はダリルも聞いていた。

やれ母性が強いとか、やれ無駄に優しすぎるとか。

あと、ミステリアスな美少女とも。

「板垣弥生……噂に違わぬ美しさだが、それ以上に彼女からは並々ならぬ母性を感じられる……」

「ま……まあ……な……」

言葉を濁してはいるが、実は弥生の容姿はダリル的にも結構好きだったりする。

もしもここにロランがいなかったら、彼女と同じ様に興奮していたかもしれない。

そんな意味ではロランには感謝である。

「……決めたぞ」

「何を？」

「私は彼女を……板垣弥生を100人目の彼女にする!!」

「はあああああああつ!!」

いきなりの爆弾発言に、流石のダリルも呆氣にとられる。

「そうと決まれば、まずは彼女の同じクラスの友達から弥生の情報を収集して、趣味嗜好を知る事から始めなければ! 善は急げだ!!」

「あつ!? ちよ……ちよつと待てよ!!」

ダリルの声を完全無視して、ロランは走り去ってしまった。

「……こりや……別の意味でオレもうかうかしてられないかもな……。つていうか、しれつとアイツの事を呼び捨てにしてんじやねえよ……。まだ本人と会話すらした事も無い癖に……」

叔母からの頼みと自分の中の良心が組み合わさった結果、ダリルはロランの魔の手から弥生を守ろうと心に誓う。

「つーか、あんな純情そうな子がロランの奴に墮とされる光景とか、普通に見たくねえし」

ぶつちやけ、弥生に対する感情的にはロランと同じなのだが、ダリルはあそこまでぶつ飛んではない。

ダリルはもうちよつと健全な関係を望んでいたりする。

「可愛い後輩の為に、少しは先輩らしいことでもしますかね……」

こうして、またまた弥生の全く知らない所で不穏なフラグが立つと同時に、楯無、虚に続き、また上級生の味方が増えたのであった。

この日の夜、弥生は言葉に出来ない悪寒を感じて、密かに購買部に予備の胃薬を買いに行ったらしい。

……誰？

徐々に運命の学年別トーナメントが近づいてくる毎日。

本日もパートナーのラウラと一緒にトレーニングに励む……とは限らない。

確かに訓練も大切だけど、元々が超インドア派な私がいきなりドイツ軍隊式のラウラブートキャンプをこなすのは流石に無理がある。

時には休息も立派な訓練になる……とは本人の弁だ。

そんな今日の私達はと言うと、静かな図書室にて勉強会をする事に。

私とラウラの他には、簪と本音も一緒に同行している。

「文武両道をきちんとこなす……か。言うには簡単だが、それを実際に出来ている人間はかなり限られているだろう。やはり姫様は凄いな……」

「褒めら……れるよう……な……こと……じゃない……と思う……けど……」

「ううん。私も凄いと思うよ？ だって、世の中にはそれが出来てない人だって沢山いるんだし」

そう言いながら机に体を預けながらダラ〜ンとしている本音を見ないであげて。

あれはあれで可愛いんだから。

「図書室はなんだか眠たくなっちゃうね……」

その気持ちは理解出来るけど、かと言って実際に眠ったら、カウンターで仕事をしている図書委員の人達に怒られるよ？

「箒達が言ってたけど、結局、二人は正式なルームメイトになったんだって？」

「うむ。最初は正式な部屋割りが決定するまでの暫定的なものだったらしいが、このままでも問題無いと学園側でも判断をしたらしく、このまま姫様と一緒に部屋に住む事になった」

私が説明しようと思っていた事をラウラに全部言われてしまったけど、つまりはそーゆーこと。

私としても異論は無いし、寧ろ大歓迎でもある。

癒しが普段から傍にある生活……最高じゃね？

「やよつちはラウラウとペアを組んだんだよね〜？」

「そう……だよ……」

「で〜、かんちゃんはそののんと組んで〜、せしりんとリンリンがチームになって〜」

「織斑一夏がシャルロットと組んだ……だったな」

あれから、皆も皆でそれぞれにペアを組み始めた。

まず、互いに気が合うと言う事で箒と簪がコンビになり、以前に一度、授業中にペアを組んだ経験があると言う事から、セシリアと鈴がペアになった。

そして、原作通りに女子の大群に追われた一夏は、元ルームメイトのよしみでシャルロットがコンビを組んであげたらしい。

シャルロット曰く『あのままでは流石に不憫だったから』と言っていた。

「以前に助けようと思っていた相手に逆に助けられる羽目になるとは……なんとも情けない話だ」

「それ以前に、剣だけしかない猪剣士とペアを組んで十全に力を発揮出来る人なんて、かなり限定されると思う」

「それには同感だ。相棒が近接戦しか出来ないとなると、嫌でも作戦が絞られてくるからな」

それについては激しく同感。

原作通りのコンビではあるが、そこに至るまでの経緯が全く異なるからね。

あれは間違いなく、シャルロットが無駄に突っ込む一夏をフォローする形になると思う。

……胃薬のおすそ分けでもしてあげようかな？

「あ……」

私を取りたいと思っっている本が、手の届かない場所ギリギリの高さにある……！！

前にもこんな状況があったっけ……。

「弥生、あれを取りたいの？」



など……無礼ではないのか？」

おっと、私の隣で大人しくしていたラウラが激おこポンポン丸ですよ〜？

私の為に怒ってくれたのは普通に嬉しいけどね。

「姫……？ 姫か……」

お……お〜い？ ラウラの怒りは無視ですか？

「言われてみれば、弥生の美しさは『姫』と呼ばれても不思議じゃないな……。よし、ならば私も彼女に見習って弥生の事を『姫』と呼ばせて貰おうか」

なんでやねん!! ラウラなら幾らでも呼ばれてもいいけど、何が悲しくて初対面の女の子に姫って呼ばれないといけないんだよ!?

「それにしても……」

「な……なんだ……?」

「ふふ……私の姫は随分と可愛らしい従僕を連れているんだね?」

「従僕……じゃない……」

「ん?」

なんか言い方が気に入らないな。

私にとってラウラや簪、本音はそんな下らない存在じゃ決してない。

私にとって三人は……

「彼女達……は……私の大切……な人達……」

だから、従僕なんて言い方は絶対に止めてほしい。

「弥生……♡」

「姫様……私は……」

「やよっち……♡」

そもそも、この人って何が目的でここに来たんだ?

まさかとは思うけど、私じゃないよな?

「……どうやら、これは私が失礼だったようだね。悪かった」

「あ……はい……」

素直に謝ってくれた……?

ま……まあ……自分の過ちをちゃんと認められる人は嫌いじゃない

けど……。

「君達も済まなかった。ドイツのラウラ・ボーデヴィツヒ少佐に日本の更識簪さん」

「私達の事を知って……？」

「同じ代表候補生だからね。軽いプロフィールぐらいは把握しているさ」

彼女の場合、別の目的で覚えているような気がする。

「そして、その君もな」

「私は気にしないよ」

本音は本当にそよ風みたいな子だなく。

どんな事も軽く受け流す感じ。

「お詫びと言ってはなんだが、君達の勉強会が終わってからで構わないから、一緒に夕食でもどうだろうか？ なんなら、姫の為に今から一番いい席を予約して……」

「なにしろっとナンパしてやがる」

ぬおっ!? 私の後ろから手が伸びてロランさんにアイアンクローをした!?

アイアンクローと言えば織斑先生だけど、彼女の声じゃなかったし……。

「いきなり随分なご挨拶じゃないか……! アメリカ代表候補生のダリル・ケイシー先輩……!」

「ご丁寧な紹介どうも」

ダリル・ケイシー? その名前どこかで聞いたような気がする……。

この人も原作キャラの一人だったような気がするけど、どんな人物だったっけ?

しかし……随分と大胆な格好をしている人だな……。

制服が肌蹴て胸の谷間が完全に見えるし。

「別に話しかけるなとか、仲良くなるなどは言わねえけどよ、こんな子までテメエの毒牙にかけようとするんじゃないやねえよ」

「毒牙とは失礼だね……。私は純粋に姫と親しくなりたいと思っただ

けであつて……」

「99人の同性の恋人がいるって自称してる癖に、何言つてやがる」

きゅ……99人の同性の恋人!?

「オランダに矢鱈と女の子に手を出す代表候補生がいるって噂で聞いた事があるけど、この人だったんだ……」

「ふふ……照れるな」

「照れる場面じゃねえだろ……」

ダリル先輩はロランさんの首根っこを掴んでから、そのまま引きずるようにして図書室を出て行こうとする。

「お前等の勉強の邪魔をして悪かったな。この馬鹿はオレが責任持つて連れて行くから、安心して勉強会を続けてくれ」

「ははは……モテる女は辛いな……」

「アホなこと言つてないで、とつとと行くぞ」

行つてしまった……。

いきなり現れて、いきなり去つていつてしまった……。

「……なんだつたんだ?」

「わかんない……」

私も同じく、本気で意味不明でした。でも……

(ダリル・ケイシー先輩……ちよっぴりカッコよかったかも……)

姉御肌のアメリカ人女性の先輩……か。

今までいなかったタイプだから、少しだけ胸がドキドキした……。

……

……

……

……

……

図書室での驚きの邂逅以来、ロランさんは私の行く先々に現れるようになった。



食事時に私が座ろうとしている席に先回りしていたり、一度廊下に出れば一番で出くわすし、放課後にも即座に一組の教室の前で待ち構えていたりするし……。

このパターン……私に懐き始めた頃の鈴と全く同じだ……。

あれがまた繰り返されると言うのか……！

私と一緒にいる時にはラウラ達にもニコニコ笑顔で接するが、逆に一夏には全く興味を示さず、それどころか存在自体を完全無視している感じ。

男にはとことん関心がないんだな……。

それでもって、私がロランさんの事で困っている時に、時折ダリル先輩が助けに入ってくれる。

先輩の威厳と言いますか、この人は頼りになるという認識が私の中で生まれた。

私の知っている2年生には何とも言えない人間がいるのに、虚さんやダリルさんのような3年生は本当に尊敬できる人達だ。

たった一年しか学年が違わないのに、この差は一体何処から生まれるのだろうか……。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

今日も私はラウラと一緒にアリーナで体とISを動かして訓練を行った。

まだまだ改善するところは一杯あると思うけど、それでも一応の形にはなってきた。

ピットに入りながらISを解除し、ラウラと一緒に更衣室に向かう。

「姫様のアーキテクトは想像以上に武装が豊富ですね。これならば、作戦の幅もかなり広がります」

アーキテクトに搭載されている武装は殆どがおじいちゃんセレクトなんだけど、私自身も全ての装備を把握しているわけじゃない。

まだ使った事も無い武器が沢山あるからね。

いつか機会を作って、全部の武装を試射とかしないと。

「お疲れ様。私の麗しのプリンセス」

「またか……」

この子は本当に懲りないな。

ダリル先輩からアイアンクローだけじゃなくて、頭グリグリの刑や脳天拳骨まで喰らっておきながら、微塵もめげる事無く来るんだから。

オランダ人ってこんなにも根性がある人達だったっけ？

「障害があればあるほど、愛はより一層燃えがるものさ」

私の心を読むように返事をしないでほしい。

「それよりも、ほら」

ロランさんが手渡してくれたのは、私達の分のタオルとスポドリ。

これもまた前にあった状況と酷似してるな……。

マジで歴史が繰り返しているみたいだ。

「あ……ありが……とう……」

「ふん……感謝はしておく」

「礼を言われる程のことじゃないさ」

どうして、この気遣いだけで終わってくれないんだろうか？

これだけを見れば、普通に友達になれそうなのに……。

「私としては、姫のISスーツ姿を間近で見られれば、それだけで十分すぎるからね」

これだよ！　すぐにこんな風になるから、素直に感謝出来ないんだよ！

っーか、今すぐにその鼻血を拭け!!

いくら容姿が整っていても、鼻血を出しながらの笑顔は普通に変態だよ!!

「あ。勿論、君のスーツ姿も素敵だよ。ラウラさん」

「別に何も言っていないだろう……」

ラウラが本気で呆れている。

割と冷静な子であるラウラがこんな顔を見せるのは珍しい。

「ほら、顔から流れている汗を拭いてあげよう」

私がおかを言う隙も与えず、有無を言わずこっちの顔を拭こうとする。

決して強引じゃないから、逆に振りほどけないんだよね……。

(何も抵抗せずに私のタオルを受け入れている!?! これはもしかや、遂に姫が私に心を開いたのか!?)

あゝ……スポドリ美味し〜。

体が潤ってきますにや〜。

「ひ…姫……」

「は……い……?」

もう姫って呼ばれても何にも思わなくなってきた自分がいる……。

なんか悲しい……。

「キスをしてもいいかい?」

「絶対に駄目です」

またかよ……。これで何回目だ?

私が時折、彼女のする事を黙っていると、すぐにキスをしようとせがんでくる。

最初は私も皆も驚いたけど、二回目以降は完全にハッキリと断る事にした。

このやり取りも何回目になるのかな……。

「懲りない奴だ、全く……」

チュ〜チュ〜とスポドリを両手で持って飲んでいるラウラ可愛い  
♡

ロランさんがいなかったら、今すぐにでもギュ〜ってハグするのに  
な〜♡

「私はそう簡単にはめげたりはしないよ。何故なら、私は愛の為なら

どこまでも頑張れるからね」

その情熱をもつと別の方向に向けられれば、彼女は凄い人物になれるだろうに。

「む？…この気配は……」

いきなり遠くの方を見てどうした？

そつちには何も無いよ？

それとも、ロランさんは人には見えない『何か』が見える人？

「心残りではあるが、今日はこの辺でお暇させてもらおうとしよう。では、また会おう。私の愛するプリンセス♡」

別れ際にしれっと前髪で隠れていない方の頬にキスをしようとしてきたので、それを手で防ぐと、ロランさんは笑いながら更衣室を後にした。

それを入れ替わるようにして、ダリル先輩がやって来た。

「ん？ お前等だけか？」

「それはどういう事ですか？」

流石のラウラも、二つも上の上級生には敬語を使う模様。

この辺はしっかりしてるんだよね。

「なにやら、猛烈に嫌な予感がしたから急いでここまで来たんだけどよ……オレの気のせいだったか？」

「いや……その予感間違いではないかと」

「って事は……さつきまでいたな？」

「はい。別の出口から出て行きましたが、つい先程まで確かに」

「はあ……」

なんて大きな溜息。

ダリル先輩も苦労人系の人と見た。

「何もされなかったか？」

「これと言って何も。タオルとドリンクを持って来たまではよかったです。それからはいつものように理解不能な発言を繰り返してました」

「そつか……。ま、お前等は理解しなくてもいいよ。つか、理解出来るようになったら、ある意味終わりだ」

正確に言うと『理解したくない』が正しいけど。

「なんかあつたら、すぐにオレに連絡しろ。その為に番号交換もしたんだからな」

「了解であります」

私達は密かに携帯の番号を交換して、いつでも連絡が取れるようにしておいた。

勿論、ロランさんとは交換してない。

したらどうなるか、容易に想像が出来るから。

「んじゃ、しっかりと汗を拭いて体を冷やさないようにな」

私とラウラの頭を交互に撫でてから、爽やかな笑顔と共にダリル先輩も去っていった。

「……………」

「三年生で大国アメリカの代表候補生、ダリル・ケイシー……。何回か話して思いましたが、どうやら彼女は信頼に値する人物のようですね。姫様」

「そう…だね……」

これからの学園生活において、頼りになる上級生が増えるというのは本当に嬉しい。

困った時は相談とかしてもよさそうだ。

……ダリル先輩に頭を撫でられた時、少しだけ胸キュンしたのは内緒。

これが私の初陣です！（前編）

ロランさんとダリル先輩と出会ってから少しだけ時間が経ち、今日は遂に学年別トーナメント本番。

私とラウラは一緒にAブロックの第一試合に出場する選手が着替えをする更衣室に移動して、そこで出場の為の準備をする事に。

私達以外にも沢山の子達がいるが、この場に私達が知っている顔は見当たらない。

と言うのも、タッグになった事で選手の数も相当な事になってしまい、いくつかの場所に分けて待機して貰っているから。

因みに、セシリアと鈴は第2ブロック、簪と箒は第3ブロックになっっているから、ここにはいない。

と言う事は、必然的に『あの二人』が私達と同じブロックにいる訳で……。

「姫様。こちらは準備完了しました」  
「ん」

ISスーツに着替え終わったラウラが毎度のように敬礼をする。

もう見慣れた光景を見ながら、私も既に着替え終わった自分のISスーツを少しだけ整えてから最終確認をする。

更衣室に設置してあるモニターには、アリーナの様子が映し出されていた。

「凄い……ね……」

「はい。各国政府の関係者に研究員、果ては企業のエージェント等もやって来ているようです」

IS学園のイベントって、一つ一つが凄い規模だよね。

つくづく、自分がいる場所が特別なんだと実感させられる。

「三年生にはスカウトが、二年生は去年の成果の確認を、一年はまだそれほど注目はされていないでしょうが、このトーナメントで上位に入賞すれば、間違いなく注目はされるでしょう」

そうだよね。

今回のトーナメントには代表候補生も数人混ざっている。

そんな中で上位に入れば、そりゃ色んな人達が放置はしておかないだろう。

(おじいちゃんは……来てないだろうな)

もしかしたら、強引に来ている可能性も否定出来ないけど、それは『あの人達』が許さないだろうから、それは無いと思う。

「もうそろそろ、対戦表が発表される頃でしょう」

「うん……………」

対戦表……………ね。

なんとなくだけど、私には最初の対戦相手は予想出来てるんだよね。

「我々はAブロックの一回戦の第一試合。よもや、一番最初になるとは夢にも思いませんでした」

「けど……………：番最後……………よりはマシ……………と思う……………」

「かもしれない。トリは嫌でも皆が注目するでしょうからね」

ぶっちゃけ、私はどっちでも緊張はするんだけど、一番最後よりは一番最初の方がずっといい。

だって、嫌な事が早く終わるから。

……………今回の場合は少し話が違ってくるけど。

「む？ 出ました」

「あ……………」

案の定、モニターに表示された私達の対戦相手は……………

【板垣弥生&ラウラ・ボーデヴィツヒVS織斑一夏&シャルロット・デュノア】

「よもや、アイツ等が私達の最初の相手とは……………」

ある意味で、原作通りの組み合わせだった。

……………  
……………  
……………  
……………  
……………

第一試合が行われるアリーナの観客席。

その一角に、ダリルと並んでもう一人、長い黒髪を三つ編みにした小柄な少女が立っていた。

リボンの色から見て、どうやら二年生のようだ。

「ダリルが気にしている弥生って子、どうやら一番最初の試合みたいツスね」

「らしいな。一番最初とか、オレだったら普通に嫌だな……。お前もそうだろう？ フォルテ」

「そうツスね。無駄に緊張するツスからね」

彼女の名前は『フォルテ・サファイア』

ギリシャの代表候補生であり、楯無のクラスメイト。

そして、ダリルの恋人でもある。

「にしても、ちよつと嫉妬しちゃうツスね」

「何が？」

「ダリルが私以外の女の子を気に掛けている事が」

「はあく……。それに関しては何度も説明したろ？ あのナンパなレズ女に傷物にされないようにしてるだけだつて」

「それは聞いたツスよ。それでも、簡単には納得できないツス」

「気持ちは分かるんだけどな……。」

頭をボリボリと掻きながら、ダリルは自分の言葉で話す事に。

「冷静になつてよく考えてみてくれ。何も知らない純情無垢な後輩の

女の子が、目の前で毒牙に掛けられそうになっているの見て、お前は

見て見ぬ振りが出来るか？」

「それは……。無理ツスけど……」

「だろ？ オレも同じだよ。あいつ等の先輩として、ちゃんと守って

やらないとな」

「こんな時だけ先輩面しても、なんか説得力に欠けるツス」

「なんだとく？ このヤロ！」



急にフォルテの体に手を伸ばして、コチヨコチヨと擦っていくダ  
ル。

たまらず、フォルテは嘔き出してしまふ。

「にやははははははははは！　ちよ…ちよつと！　こんな所でやめるツ  
スよ〜！」

「い〜や！　絶対に止めない！　オレが好きなのは後にも先にもお前  
だけだつて分からせるまではな！」

「分かった！　分かったから〜！」

　楽しそうにじやれる二人の元に、無粋な乱入者がやって来た。

「随分と楽しそうだね。お二人さん」

「げ」

　二人が話していた件の人物、ロランだった。

「ん？　どうかしたのかな？　フォルテ先輩？」

「い…いや…別に何も…」

「そうかい？　貴女のような可憐な美少女に見つめられたら、私も照  
れてしまうよ」

「あ〜……」

　この一連の会話で全てを悟ったフォルテ。

「ダリル……なんとなく、気持ちがあつたツス……」

「だろ？」

「あれは……後輩ちゃん達には毒つ気が過ぎるツスね……」

　この瞬間から、フォルテもダリルを手伝って後輩達をロランの魔の  
手から助けようと決意をする。

「お？　どうやら両者がやって来たようだよ」

　ロランの言葉に反応し、二人もステージの方に注目する。

　そこには弥生とラウラ、一夏とシャルロットの両コンビがISを  
纏って出場してきていた。

・  
・  
・  
・  
・

アリーナのステージにて、両タッグが静かに対峙している。

ラウラはジツと一夏を見据えていて、一夏はラウラと弥生を交互に見る。

弥生は緊張のあまり顔を強張らせていて、シャルロットはそんな彼女を見て少しだけ苦笑い。

「織斑一夏」

「なんだよ」

「IS学園に来た当初、私はお前の事を憎いと思っていた」

「なんで……って聞くのは野暮か」

「その様子だと、大方の見当はついているようだな」

「まあな。『あの時』の事だろ？」

「そうだ。お前に会ったら、まず最初にその顔を殴ってやろうと考えていた」

確かに、ラウラは出会い頭に一夏に向かって暴力を振るおうとした。

その直後に弥生の顔を見て、それは未然に防がれたが。

「だが、今は不思議とお前に対して負の感情は一切無い」

「どういう事だ？」

「つまり、私の中ではもう憎しみを抱いていないと言う事だ。自分でも不思議だが、何故か姫様と一緒にいると、それだけで余計な事が忘れられるんだ」

「ああ……」

ラウラは弥生と共に過ごす事で、その心に巣食っていた憎しみを自ら浄化することが出来た。

故に、今のラウラは一夏に対して真っ白な感じなのだ。

「これだけは言っておく。私はこの試合、一切手を抜いたりしない。例えばお前が素人だとしてもな」

「そんなの、こっちから願い下げだ。弥生の前でハンドェなんかつけられてたまるかよ」

「それには同感だ」

二人が話している間、弥生はずっと試合開始の時間を刻々と待っていた。

(弥生……いつもとは違ってなんて真剣な顔なんだ……。話によれば、弥生は今まで公式戦は愚か、模擬戦すら一度もした経験が無いって話だし、人生初めての試合をするにあたって、色々と頭の中で考えているんだろうな……)

しかし、実際の弥生の頭の中は……

(うぎゃあああああああああああつ!? なんだよこの人の数はあああああああつ!? 外から見るのとステージから見るとじゃ、迫力が段違いなんですけどおおおおおつ!? うごごごご……! 今更ながらにめっちゃ緊張してきた……。部屋を出る前に吐き気止めを飲んできて正解だった……。じゃないと、間違いなくここでオエ〜ってなってたし! こんな大衆の面前で女子高生の嘔吐シヨ〜をするとところだったよ! でも、今度は緊張でお腹が痛くなってきた……。)

もうぶつちやけ、試合どころじゃなかった。

でも、いざ試合が始まるとスイッチが切り替わるのが板垣弥生と言う少女。

色々と言いつつも、彼女は本番にこそ強いタイプだったりする。

「それでは、これより学年別トーナメントAブロック一回戦の第一試合を始めたいと思います!」

アナウンスが聞こえ、四人共がそれぞれに構える。

アリーナの喧騒が一瞬で静寂に変わり、張りつめた空気がアリーナ全体を支配する。

弥生の頬を伝う汗が一滴、彼女の顔から落ちて、地面に落ちた。

【では……試合開始!!】

始まりの合図と共に、四人が一斉に動き出す。

「うおおおおおおおおおおおおおつ!!」

「矢張りか……!」

一夏は真つ直ぐにラウラの方へと向かい、シャルロットも両手にアサルトライフルを装備して、弥生の方へと向かっていく。

(姫様の予想通り、こいつ等はまず私達を分断する事を考えたか!)

これが一夏達の作戦。

現役軍人と言う事もあり、ラウラは間違いなく現一年で最強クラスの実力を持つと思われる、弥生の実力は完全に未知数。

そんな二人を同時に相手にするのは今の自分達には無理と考えた一夏達は、弥生達を各個撃破する事にしたのだ。

しかし、それを実行するには一夏がラウラを釘付けにする必要がある。

だからこそ、彼は敢えて愚直なまでに突っ込んだのだ。

流石の一夏も、もう突貫だけが最善とは考えてはいないが、それでも、ラウラの視線を自分に向けさせるにはこれが一番だと思った。

(だがな……その程度の事は姫様も予想していた!!)

そう。原作知識を持つが故に、弥生は一夏達の行動をおおよその予想を立てていた。

それが100%正しいとは思わないが、それでも、かなり高い確率でそれを実行してくると考えたのだ。

「姫様!!」

「ん!!」

一夏達の分断作戦に全く怯むことなく、逆にそれに対応してきた。

ラウラはレーゲンの第三代兵装『アクティブ・イナーシャル・キャンセラー』、通称『A I C』を使って一夏の斬撃を防ぎ、弥生も両腕にインパクトナックルを装備して、それで自分の体を覆うようにしてシャルロットからの銃撃を防いでみせた。

「なっ!?!」

「貴様等が各個撃破を狙うであろうことは、予め予想済みだ!」

「マジかよ……!」

ラウラの高い実力と、弥生の頭脳と原作知識が組み合わさった結果、一夏達の先制攻撃を見事に無効化してみせた。

「これが慣性停止結界ってヤツか……!」

「ほう? お前がこれを知っているとは驚きだな?」

「お前が来る前に、弥生から教わったからな」

「成る程な……。凶らずも、姫様のご厚意によって知識を得たと言う事か」

「そーゆーこった!」

次の瞬間、ラウラに向かってアサルトライフルの攻撃が飛んできて、すぐさまA I Cを解除して回避した。

「ちっ……!」

「この試合はタッグなんだよ……」

「……っ!? シャルロット!!」

「え?」

シャルロットが一夏を助ける為に援護攻撃をした一瞬の隙を狙い、弥生が素早くインパクトナックルを収納し、なにやら見覚えのない武装を装備してシャルロットに標準を合わせていた。

彼女に向かって、一筋のビームが発射される。

「くっ!」

「……………!!」

咄嗟に回避するが、見た事も無い武器にシャルロットは困惑を隠せないでいた。

三連装のマシニングガンと、長い銃身が一緒に取り付けられた両手持ちの武器。

少なくとも、そんな形状の武装は今まで聞いた事も見た事も無い。

「それは……」

「チェンジリングライフル……」

銃身が上下入れ替わり、今度はビームマシニングガンがシャルロットを襲う。

「タイムラグ無しでマシニングガンとビーム砲を入れ替えられるなんて!」

「それ…がこれ……の特徴…だか…ら……!」

チェンジリングライフルを両手で固定し、横移動をしながらシャル

ロツトを狙っていく。

その攻撃を回避しながらも、僅かな隙を狙って二丁のアサルトライフルの弾幕を厚くしていく。

そんな二人の攻防を横目に、ラウラと一夏は再び睨みあっていた。

「どうした？ お得意の零落白夜は使わないのか？」

「こつちを挑発しても無駄だぞ。あれが諸刃の刃だったのは俺が一番よく分かってんだからな」

「そうか」

一夏の唯一無二の切り札である『零落白夜』

どんなISでも、直撃すれば致命傷。

掠っただけでもかなりのダメージが入ってしまう。

全てのISの中でも間違いなく最強クラスの攻撃力を持つが、その唯一の懸念材料は、それを使用しているのが素人である一夏であると言う事。

いかに攻撃力が最強でも、その攻撃自体が命中しなければ全く意味が無い。

それは使用者である一夏が最もよく理解していたし、これまでに何度も弥生によつて指摘された事でもあった。

一番いいのは斬撃の瞬間だけ発動させることだが、そんな器用な事が一朝一夕で出来るようになれば誰も苦勞はしない。

事実、一夏は練習だけはしたものの、それを完全に習得は出来なかった。

(仮に奴が零落白夜を使って攻撃してきても、こちらにはちゃんと対策がなされているのだがな……)

それもまた弥生が考えついた事。

原作知識と言うアドバンテージは、現状の弥生によつて唯一の強み。

今回、彼女はそれを最大限に使用してきた。

試合の流れはまだ、どちらにも傾いていない。

これが私の初陣です！（後編）

アリーナの管制室。

普段は教師だけが入室が許可された場所にて、千冬と真耶が試合の様子を観戦していた。

「思ったよりも板垣さん、いい動きをしてますね〜」

「確かにな。これまでアイツの試合を見た事は無かったが、案外、ISの操縦者としていい素質を持っているのかもしれない」

モニターには、代表候補生であるシャルロットと互角の戦いを繰り広げている弥生の姿が映っていた。

「織斑君も頑張っていますけど、いかんせん、苦戦をしているみたいですね」

「これは単純に相手が悪いな。ボーデヴィツヒと織斑とでは実力もそうだが、操縦者としての経験値が違いすぎる。これは他の候補生達にも言える事だがな」

少し前までISの事を殆ど知らなかった少年と、生まれた時から軍の中で育ち、ISに触れてきた少女。

この差は想像以上に大きく、決して一夏に勝ち目が無いわけでは無いが、そう簡単にダメージは許してくれない。

「それに、織斑達は上手い具合に板垣の『策略』に嵌っているな」  
「策略？」

「そうだ。板垣も経験値などに関しては織斑と大差無いが、アイツとは違って決定的に勝っている部分がある。それが何か分かるか？」

「頭脳……ですか？」

「正解だ」

臆病で戦いを好まない弥生が戦える理由。

それは、アーキテクトの性能と、彼女が持っている原作知識が大きい。

最初から相手の特徴や癖、戦法の殆どを把握しているが故に、それに対する対抗策を考えることが出来たのだ。

「観客の殆どが織斑や代表候補生達にばかり目が行っているかもしれない

ないが、この試合の主導権を握っているのは間違いなく板垣だ。その  
事実が気が付けるのは果たして何人いるかな……」

自分が気に掛けている少女と、自分のたった一人の弟。

二人の勇姿を眺めながら、千冬は静かに微笑を浮かべていた。

・

・

・

・

・

(思うように踏み込めない……！　これが弥生の実力……！)

チエンジリングライフルを装備した弥生の弾幕に阻まれて、シャル  
ロットは苦戦を強いられていた。

二人はステージを移動しながらの銃撃戦を繰り返しているが、それ  
をリードしているのは弥生だった。

(あのライフルがかなり厄介だよ……！　武器を切り替える事無く、  
マシンガンとビームライフルを使用出来るなんて！)

マシンガン形態で牽制攻撃を仕掛け、僅かでも隙が見えればビーム  
ライフル形態で一撃を狙う。

このコンビネーションは傍から見ている以上に厄介なようで、シャ  
ルロットは額に冷や汗を掻いていた。

(でも、どれだけ万能だったとしても、所詮は射撃系の武器！　なんと  
か懐にさえ飛び込めれば!!)

多少のダメージは覚悟の上で一気に突貫をする決意を固め始める。  
しかし、その考えすらも、弥生にはお見通しだった。

(シャルロットにはお得意の『高速切替』ラビッド・スイッチがある。

少しでも懐に潜り  
込まれたりしたら、その瞬間に必殺のパイルバンカーをお見舞いされ  
てしまう。けど、それを予め分かっていたら、幾らでも対処のしやう

はあるんだよ！)



シャルロットには高速切替以外にも、もう一つの特技がある。

それが『砂漠の逃げ水』ミラーシユ・デ・デザートと呼ばれる技術で、常に一定の間合いと攻撃リズムを保ちつつ、攻防において非常に高いレベルで安定した戦法……なのだが、その事も転生者である弥生は既に知っている。

だから、ここでは敢えて『砂漠の逃げ水』を逆に利用させて貰う事にした。

他の戦法の例に漏れず、砂漠の逃げ水も使用の際には多大な集中力を必須とされる。

しかも、そこに高速切替まで加えれば猶更だ。

弥生は敢えてシャルロットに射撃戦を挑み、『砂漠の逃げ水』を使わざるを得ない状況に誘い出したのだ。

そうなれば、シャルロットは一夏の援護が不可能になってしまい、必然的にラウラと一夏の対一の状況が生み出される。

無論、この作戦は弥生がシャルロットを釘付けに出来る程の実力を持っている事が前提となる。

さもなければ、原作での箒のように秒殺される事は想像に難くない。

だからこそ、弥生は普段ならば絶対にしない特訓をラウラと一緒に行ったのだ。

彼女と一緒に戦う試合を惨めなものにしない為に。

(弥生の回避率もそうだけど、なんと言っても、アーキテクトが小さすぎて今までと同じ感覚でしていたら当たる攻撃も当たらない！)

専用機と言えば聞こえはいいが、アーキテクトは結局のところ、ISの基本骨格に過ぎない。

余計な外装が無い分、防御力は無に等しいが、そのサイズは通常のISと比べてもかなり小柄である。

本来ならば命中する筈の攻撃であっても、アーキテクト相手には当たりはしない。

無論、弥生はこの事も計算に入れている。

「こんのおおおおおおおおおおおおっ!!!」

遂にシャルロットがここで弥生に本格的な攻撃を仕掛ける。

左右にジグザグと移動しながらも、確実に弥生に接近してくる。

その際にチェンジリングライフルのダメージが入るが、そんな事にはお構いなしと言わんばかりに、瞬時加速で一気に飛び込む！

完全に狙いを定めた直後、シャルロットは手に持っていたアサルトライフル二丁をショットガンに切り替える……が、ここである事に気が付いてしまった。

「え……？」

(弥生の手……チェンジリングライフルが無い!?)

そう。彼女の手にはいつの間にかチェンジリングライフルではなくて、銃口が二つ付いた黒光りするライフルが握られていた。

「それは……読んでいた……よ……」

「!!?」

体勢を低くしながら、弥生は自分が新たに装備した『ショットガン内蔵式ビームライフル』でシャルロットの腹部を撃ち抜いた！

「ぐはあっ!」

その一撃に耐え切れず、後方まで吹き飛ばされる。

なんとか倒れる事無く足を踏ん張ったが、それよりも精神的なダメージの方が大きかった。

(弥生は……僕が瞬時加速を使って接近する事も読んでいたの!? 僕は一度も弥生に瞬時加速を使えるなんて話した事は無いのに!)

これもまた原作知識の恩恵。

シャルロットが瞬時加速を使用可能な事は知っていたし、それに気を付けるようにラウラにも予め注意喚起を促していた。

これはシャルロットも言っていた事だが、どれだけ早くても、最初から来る場所が判明していれば、素人でも対処は十分に可能だ。

ビームライフルを収納してから、今度は長大で巨大な両手持ちの銃火器を取り出す。

横に折りたたまれていた銃身を展開し、それを体全体で支えるように持つ。

「セレクターハウザーライフル……。当たると痛い……よ……」

「ヤバイ!!」

次の瞬間、その銃口からつんぎくような轟砲がアリーナ全体に鳴り響いた。

・  
・  
・  
・  
・  
・

弥生がシャルロットを自分のペースに巻き込んでいる頃、ラウラは一夏を相手に優位に試合を展開していた。

「どうしたどうした!? そんなに離れていては、お前の剣は一生届かないぞー!」

「んな事は分かっているっつーの! くそー!」

レーゲンに装備されたリボルバーカノンの砲撃に晒されながら、一夏はラウラに近づく事が出来ないでいる。

弥生の時とは違い一撃の攻撃力が桁違いな為、『肉を切らせて骨を断つ』戦法は通用しない。

一発でも直撃を食らえば、それだけで致命傷になるのは見たただけで分かった。

(しかし、アイツも存外、回避するのが上手いな……。このままではジリ貧になってしまい、姫様に申し訳がない。ここは、姫様にお貸し頂いた『アレ』を使って、その後例の作戦を実行に移すか……)

ラウラは態とりボルバーカノンをリロードせず、そのまま発射しようとした。

当然、その銃口からは弾丸は発射されず、乾いた音だけが聞こえた。

「しまったー!」

「隙あり!!」

これまでの特訓で完全に習得した瞬時加速を迷わず使用し、一気に

ラウラの懐まで近づき、そこで必殺の零落白夜を発動！ 一気に勝負を決めにきた！

「……なんてな」

「なっ!?」

しかし、そんな簡単に攻撃を通させてくれる程、代表候補生は甘くない。

一夏の放った光の刃は、ラウラが一瞬で左腕に展開した縦長の盾によって阻まれた。

派手な装飾と中央に赤い宝石のような物が埋め込まれているが、それ以外には何の変哲もない普通の盾。

鉛色をしたその無骨な盾の名は、ズバリ『鉄の盾』。

「姫様が言っていた」

「弥生が……?」

『零落白夜は間違いなく反則級の攻撃力を持つてはいるが、その攻撃力が通用するのは、あくまでIS相手だけだ』とな」

ラウラの言葉を実証するように、彼女が装備した鉄の盾には全く傷がついていない。

完全に零落白夜の攻撃を防いでいた。

「零落白夜はあらゆる光学兵装を対消滅させる効果を持つ。それはISの持つSEも例外では無く、だからこそ、その攻撃力は規格外とも言うべき威力を誇っている。しかし、逆を言えば零落白夜はそれ以外の兵装、実体がある武器防具の類には悲しい程に無力。だからこそ、姫様はお前の相手をする予定だった私に、この『鉄の盾』を貸してくれたのだ」

「弥生の作戦勝ちって事か……!」

「その通り。この『鉄の盾』は一切の特殊な効果が無い普通の盾。だが、その防御力はISが装備出来る盾の中で最高だと聞いている。そして!」

何も持っていない右手に89式5.56mm小銃を展開し、一夏に銃口を向けた。

「自身の弱点を補う為にパートナーから使用権限を解除された武器を

貸して貰ったのは、貴様達だけではないぞ!!」

「ちっ!」

急いで零落白夜を解除してその場からの離脱を計ろうとするが、それよりもラウラが引き金を引く方が早かった。

「くうううっ!!」

銃撃に晒されながらも、なんとか後方に下がる事に成功はした。

だが、その行動パターンも弥生は計算していた。

「姫様!!」

いきなり、ラウラはあさつての方向へとワイヤーブレードを飛ばした。

突然の奇行に一夏は目を丸くするが、すぐにその顔が青く染まる事になる。

「お待…たせ…」

「いつ!?!」

引き寄せたワイヤーブレードには弥生が巻きつかれていて、彼女はその両手にパーツ換装したセレクターミサイルランチャーを構えていたからだ。

「フアア!!」

弥生のミサイルランチャーとラウラの小銃とリボルバーカノンの同時攻撃。

この攻撃が通れば、専用機と言えど唯では済まない。

「一夏!!」

ここでシャルロットが瞬時加速で駆けつけての援護防御。

パイルバンカー内蔵式の物理シールドを使って、なんとかダメージを最小限に抑えようと試みる。

「くうううううううう!!」

凄まじい衝撃が二人を襲い、一瞬にして辺りが煙に覆われる。

「やったか…?」

「ラウラ…それは言っ…ちや…ダメ…」

煙が晴れると、見事にラウラのフラグ回収が成功して、まだ立っている一夏とシャルロットの姿が現れた。

「チツ……」

思わず舌打ちするラウラに、少しだけ苦笑いの弥生。

そんな二人とは対照的に、一夏とシャルロットは肩で息をしていた。

「まさかとは思うけど……弥生はここまで計算していたの……？」

「は？ 計算？」

「そう……。僕が瞬時加速を使う事も、一夏の零落白夜に対してその盾を用意した事も、僕が一夏の援護防御をする事すらも……」

「……………ぶい」

「やっぱり……」

一番想像したく無かったこと。

二人の性格と技量とスキル。専用機の性能から長所、短所まで、原作知識をフル動員して考えた作戦だった。

「本当にしてやられたよ……。しかも、弥生達の一斉射撃で僕の切り札もパーになっちゃったし」

弥生達の同時攻撃を全て受け止めたシールドは見るも無残な姿になって、その内部に隠されていたパイルバンカー『グレー・スケール灰色の鱗殻』も罅だらけになっていた。

「僕等を一か所に集めて一網打尽にする。もしもそれで撃破出来なくても、こつちの切り札を一つ潰す。弥生はどれだけの状況を想定していたのさ……」

「どっちにしてもこつちが不利になるような試合展開だったって事かよ……」

「しかも、僕が自分の銃を一夏に対して使用許可を出している事も想定した……でしょ？」

「ん」

嬉しそうに頷く彼女を見て、一夏は弥生と言う少女の実力を末恐ろしく感じると同時に、誇らしくも思った。

まるでこの試合そのものが弥生と言う指揮者によって導かれているかのように、ことごとく自分達の行動が裏目に出る。

これはきつと、莫大なまでの状況予想が出来なければ不可能な芸当

の筈。

自分の惚れた少女は、これ程までにずば抜けた頭脳の持ち主なんだと、改めて実感した。

「しかも、本来なら攻撃用のワイヤーブレードを移動に使うなんて、普通は考えつかないよ。恐らく、ボーデヴィツヒさんにA I Cを多用しないように言ったのも弥生なんでしょ？」

「そうだ。コレを多用すれば、必ずA I Cの弱点を突かれて隙が生じてしまうと言われてな」

I 体Iでは無敵に近いA I Cではあるが、その無敵性は相手が複数になった途端に弱点へと変化する。

多大な集中力と意識を一点に向けなければいけない為、否が応でも多方向に対する注意が疎かになる。

そこに何らかの攻撃が加われば、途端にA I Cは解除されて、僅かながらに隙が生じてしまう。

それを懸念した弥生は、ラウラを説得してからA I Cを緊急時の防衛以外に使用しない約束をしたのだ。

「正直、弥生の事を完全に見縊っていたよ……。知略と戦略だけで、こっちの戦術を完全に上回ってみせるなんてね……」

「姫様の頭脳は貴様等が想像した以上だったと言う事だ」

巻きついたワイヤーブレードを解除して、弥生が地面に降り立つ。それを見て、一夏達も構え直すのが、明らかに両者の間で空気が違った。

「ここから巻き返す……と言いたいけれど、戦況は僕等が圧倒的に不利だね……」

「だな……。ラウラの実力は間違いなく本物だし、そこに弥生の頭脳が加われば……」

「凄い事になるよ……。もしかしなくても、あの二人つて優勝候補なんじゃないの？」

実はそうだったりする。

密かに裏で生徒達にされたアンケートによると、一年の部で優勝すると思われる一番のタッグは弥生とラウラのコンビだったりす

る。

勿論、当の本人達は全く知らないが。

「姫様、完全に流れは我々に向いています。このまま一気に決めましょう」

「うん。でも……」

「分かっています。ボーデヴィツヒ少佐、ミッション終了する最後の瞬間まで油断をしません」

少しだけ緩んだ空気が再び張りつめる。

「一夏！ 今から僕は後方援護に集中する！ 弥生に対して下手な作戦は自分の首を絞めることになるから！」

「合点!! 俺は只管に突っ込む！ やっぱ、俺にはこれが一番性に合ってる!!」

「シンプル・イズ・ベストと言う事か！ だがな！ それで私と姫様を倒せると思ったら大間違いだ!!」

「終局……の時……!」

四者がそれぞれに武器を構え、両タッグが三度激突する!……と思われたが、突如としてラウラの動きがピタリと止まった。

「な……なんだ……これは……!」

「ラウラ……?」

「姫様……お……お逃げください……」

次の瞬間、シュヴァルツエア・レーゲンから紫電が迸った。

「うあああああああああああああああああああああああああああああああつ!!!」

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・



「駄目だな」

「全くもって駄目だ」

「感情レベルが必要値にまで達しない」

「機体のダメージも殆ど無い」

「なにより、本人が全く『ソレ』を望んでいない」

「このままでは我々の研究が……」

「仕方が無い」

「こうなれば、試験体に多少の損傷が出る事は承知の上でするしかあるまい」

「致し方ないな」

「やるしかあるまい」

「では、やろうか」

「VTシステム、強制発動」

お前は俺を怒らせた

「うああああ あああああああ あああああ あああああ あああああ  
あああああああつ!!!」

突然のラウラの悲鳴に、全員が動きを止めて目を見開く。

「な…なんだよあれは!?!」

「この現象は一体…!?!」

「な…んで…!?!」

ラウラの専用機であるシユヴァルツエア・レーゲンに突如として紫電が迸り、その装甲がまるで何かによつて溶かされたかのように融解していく。

あまりにも現実離れた光景に、一夏とシャルロットは戦慄し、この現象の原因を知っている弥生は、二人以上に驚愕していた。

次第にその原型が無くなっていき、数秒でレーゲンは完全な液状と化し、操縦者であるラウラを取り込もうと動き出す。

「ラウラ! ラウラ!!」

「弥生!! 行っちゃダメだ!!」

思わず傍まで駆け寄ろうとした弥生を、後ろから羽交い絞めにして食い止めるシャルロット。

弥生の余りにも悲痛な顔に、彼女もまた心を痛めていた。

だが、ここで誰もが予想だにしていけない出来事が発生する。

「く…うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおつ  
!!!!」

なんと、ラウラが裂帛の咆哮と共に体に力を入れて、己を取り込もうとする何者かに抗ってみせたのだ。

「私は…私はあああああああああああああああああつ!!!!」

…  
…  
…

・  
・

受け入れよ。それが汝の運命さだめなり。

(ふざけるな！ 勝手に私の運命を決めるな!!)

これこそが最強の力。全てを凌駕する絶対の力。

(こんな物が……こんなふざけた物が最強だと!?)

そうだ。汝、変革を受け入れよ。より強き力を欲せよ。

(うるさい!! 私はそんなものは望んではない!!)

そんな筈はない。汝は強者になる事を望んでいた。

(確かに昔はそうだった。私は弱く、それ故に誰にも屈さない力を欲した事がある。それは認めよう。だが!!)

だが……なんだ？

(今の私はそんなものを全く欲してなどいない!! もしも私が力を欲すると言うのであれば、それは……)

それは？ なんだ？

(それは……!)

・  
・  
・  
・  
・  
・

「姫様をお守りする力

だあああああああああああああああつ!!!」

その瞬間、ラウラを覆い尽くそうとしていた黒い液体が弾け飛び、彼女の体がゆらりと力なく倒れ込んだ。

「ラウラ!!」

「弥生っ!？」

シャルロットの拘束を振りほどいて、弥生はラウラの元まで行って、その体をダイビングキャッチ。

そのまま、その場に座り込んでからラウラの体をしっかりと抱きしめた。

「ラウラ……大丈夫……?」

「姫様……」

疲弊はしているようだが、それでも外傷が見当たらないのを見て、弥生は涙を流しながら喜んだ。

「よかった……本当に良かった……」

「すみません……私……のせいで……」

「うん……。ラウラ……は何も悪く……無い……よ……」

慈しみと母性に溢れたその表情は、まさに聖母と呼ぶに相応しかった。

だが、無粋にもそんな二人に水を差す存在がまだそこにいた。

「弥生!! ボーデヴィツヒさんを連れて早くこっちに!!」

「うん!」

ラウラを横抱きにしてから、急いでシャルロットがいるところまで移動する。

そうしてから後ろを振り返ってみると、そこには不完全な状態で変態した嘗てのレーゲンの成れの果てが、そのドロドロに溶けかかっている腕を弥生とラウラの方に伸ばしていた。

「なんなのさ……アレは……」

「多……分……VTシステム……」

「VTシステム!? あれは開発や研究が全て禁止された禁断の技術じゃ……」

「ダメ……と言われれば……言われる程……人はやりたがる……」

「その気持ちは分かるけど……それでも……」

やっていい事とダメな事がある。

しかし、それを正しく理解していない人間がいることもまた事実なのだ。

「まるで出来損ないのゾンビみたいだね……。あんな奴が出て来る映画を前に見た事があるよ……。でも、アレって何かに似ているような気が……」

「きつと……織斑先生……。あの手……にあるの……雪片……に少しだけ似てる……」

「言われてみれば確かに……。つまり、あれは織斑先生を模倣するつもりだった……と……」

「でも……失敗した……」

「ボーデヴィツヒさんの頑張りだね」

二人が話している間も、ドロドロのISは徐々に距離を詰めていく。

その手が再び弥生達に触れそうになった……。その瞬間、その腕が切り裂かれた。

「なにやってんだよ……」

「一夏……?」

それは、怒りに満ちた顔を浮かべている一夏の斬撃だった。

彼は三人を庇うように前に立ち、雪片式式の刃でISの腕を斬ったのだ。

「なにやってんだよ teme は!!!」

「一夏っ!?!」

半ば崩壊寸前になっているISに向かって行き、何回も斬撃を浴びせるが、その度に斬られた部位が再生していく。

液状であるが故に、生半可な攻撃ではビクともしない。

『非常事態宣言発令!! トーナメントの全試合は中止にし、状況をレベルDと認定!! これより事態鎮圧の為に教師部隊を送り込む! 来賓と生徒は直ちに避難すること! 繰り返し!』

アリーナ全体に緊急放送が聞こえ、生徒達は急いでアリーナの出口から避難しようとする。

しかし、今回は以前のように混乱はしておらず、全員が並んで出口に向かっていった。

恐らく、前回の無人機騒動の時の教訓が生かされているのだろう。

一部の生徒達が率先して避難誘導にも当たっていて、その中には嘗て弥生が体を張って命を救った少女達もいた。

「一夏！ 僕達のやる事はもう無いよ！ 早くここから避難しよう！」

「行くなら先に行ってくれ。俺はこいつを片付けないと気が済まない」

「なに言ってるのさ！ 幾ら動きが遅くても、危険である事には違いないんだよ！」

「んな事は俺だつて分かってる！ でもな……どうしても許せないんだよ!!」

「一……夏……」

シャルロットの言葉を一切聞き入れず、一夏は依然として眼前の融解したISと対峙している。

そんな彼の姿を見て弥生も触発されたのか、彼女は徐にアーキテクトの武装欄を表示して、なにか操作をし始めた。

「これで……」

「弥生？ 一体何を……」

ピッ！つと何かを押した後、弥生の手に鞘に入った一本の刀が展開された。

「一夏!!」

その刀を一夏へと向けて思いっきり投げ飛ばし、一夏もそれを見て慌てて受け取る。

「もうSE……少ない……でしょ……？ それ……使って……」

「これは……？」

「私……の武器……の一つ……。ちゃ……んと使用権限……は解除した……から……」

ビシッ！つとISを指差して、弥生は全力で叫んだ。

「そいつを……やっつけちゃって!!」

少女の叫びを聞き、少年は威勢よく親指を立てる。

「任せとけ!!!」

・  
・  
・  
・  
・  
・

俺は今、人生で一番怒っている。

折角の試合を滅茶苦茶にされて許せない。

千冬姉が鍛え、磨いてきた技を機械如きで簡単に再現できると思われた事が許せない。

ラウラの事をまるで道具のように取り込もうとしたことが許せない。

皆を怯えさせたことが許せない。

そして、何よりも……

(弥生を悲しませたことが一番許せない!!!)

ラウラが取り込まれようとした瞬間、弥生は誰よりも悲しそうな顔を浮かべていた。

涙を流して、必死に助けようともがいていた。

弥生にそんな顔をさせたこいつがどうしても許せない！  
前に俺が弥生を泣かせてしまった時から誓った事。

もう二度と、弥生の事を悲しませたりしない。

彼女の笑顔を絶対に守ってみせる。

それなのに、俺はまた弥生が悲しむ姿を見てしまった。

俺は、そんな自分自身にも怒っていた。

俺は知っている。

弥生とラウラは本当に仲が良くて、傍から見ていると本当の姉妹のようだった！

皆も俺も、そんな二人を見ていつも心が温かくなる感覚を感じていた。

どこのどいつがラウラのISにこんな物を仕込んだかは知らないが、お前が余計な事をしたせいで、二人の事を引き裂こうとしたんだぞ!!

(惚れた女を目の前で泣かされて、ブチ切れない男がいるかよ!!!)

弥生に託された一本の刀を見て、徐に鞘から引き抜いてみる。

その刀身を見た瞬間、俺は息を飲んだ。

俺の手の中にある刀は、とてつもなく美しく、一瞬で俺の心を冷静にしてくれた。

あまり刀に詳しくない俺でも分かる。

これは間違いなく名刀中の名刀だ。

まるで、本来の持ち主である弥生の美しさを体現したかのような刀だ。

(コレの名前は……『ガーベラ・ストレート』……か)

日本語に訳すと『菊一文字』。

勿論、これは本物じゃないだろうけど、それでも相当に凄い代物である事は一発で看破できる。

「弥生に託されたこの刀で……」

ガーベラ・ストレートを正眼の構えで持ち、まるで誕生したばかりの巨神兵のようなISをジッと見据える。

「お前をぶった斬る!!!」

本体は俺よりも大きく、その動きは非常にスローだ。

これならば、俺にだって!

「そんな鈍亀みたいな動きなら……」

両手を全力で振りかぶり、そのまま真っ向唐竹割り!!!

「俺でも余裕で当てられる!!!」

渾身の一撃はヤツの体を縦一文字に斬り裂き、同時に何か固い物を斬るような手応えを感じた。

ドロドロの体がゆっくりと縦に切り開かれ、その直後に大きく破裂して四散した。

「ハア……ハア……ハア……」

何かの装置のような物が真っ二つになった状態で地面に落ちて、そ



の傍には元に戻ったラウラのISが横たわっていた。

損傷はかなり酷いが、致命的な事にはなっていないようで安心した。

「お前は……俺を怒らせた……」

刀身を鞘に納めながら、俺は弥生の元まで戻っていった。

それからすぐにISを装備した先生達がやって来た。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

あれからすぐにラウラは気を失って、彼女は急いで保健室へと運ばれていった。

私達もそれに同行し、私だけが保健室に残ってから、彼女が保健の先生である佐藤先生がラウラの体を診ている様子を少し離れた場所から眺めていた。

「外傷は特になし。恐らく、気を失ったのは精神的疲労が原因でしょうね。一晩ゆっくりと休めば、明日にはいつものようになってくる筈よ」

「よかった……」

ベッドの上で静かに横たわっているラウラを見ながら、私は安堵の息を吐いた。

(にしても、なんでVTシステムが急に発動したんだろう……？　ラウラが試合中に負の感情を持ったようには見えなかったし、今の彼女は無闇矢鱈に力を欲するような女の子じゃないと思うんだけど……)

考えれば考える程に原因が分からない。

(……今は止めておこうか)

疲れた頭で幾ら考えても答えは導けないだろうし、今はラウラの無事を素直に喜んだ方がいい。

「ボーデヴィツヒの容体はどうだ？」

「千冬」

腕組みをしながら織斑先生もやってきた。

いつもと同じ仏頂面だが、心なしか安堵しているようにも見える。

「彼女なら心配ないわ。疲れて眠っているだけ」

「そうか……」

一言だけだが、その顔は明らかに喜んでいいる。

嘗ての自分の教え子だしね。そりゃ、心配して当然だよな。

暴力教師っぽい一面もあるけど、この人だって人の子なんだ。

自分が手塩を掛けて色々とお教えたこの子の身を案じるのは当たり前か。

「板垣達はとうだった？」

「この子達も問題無しよ」

念には念を……と言う事で、私達も軽く検査をして貰ったけど、特に怪我などは無かったから、すぐに解放された。

でも、どうして佐藤先生は私の体の怪我の事を知っていたんだろう？

私の事を見査する時に、皆を廊下に追い出していたし。

「ボーデヴィツヒのISに起きた現象の原因が判明した」

「それは……私達も聞いていい話？」

「板垣は当事者だし、お前にも聞いて貰った方がいいだろうな」

「……分かったわ」

原因……ね。

まあ、VTシステムなのは間違いないだろうけど。

「ボーデヴィツヒのISに、VTシステムが内蔵されていた」

「VTシステム……。正式名称は『ヴァルキリー・トレース・システム』、過去のモンドグロツソにおけるヴァルキリーの動きを機械的に再現する装置……だったわよね？」

「そうだ。あらゆる企業や国家などにおいて研究や開発が禁止されて

いる筈……なのだがな……」

「ドイツには色々ときな臭い話も多いしね。今まで潰された違法研究所の殆どがドイツにあつたつて言うぐらいだし」

マジで!? ドイツつてそんなにも危険な国だったの!?

怖いわ……。なんか印象がガラリと変わるな。

「でも、あれの発動には操縦者の精神状態に加え、機体の蓄積ダメージと、何よりも操縦者自身の意思が揃わなければ発動しない筈なんじゃないの?」

「それなんだがな……」

ん? あの織斑先生が口ごもるなんて珍しい。

「織斑が叩き切った装置を詳しく分析した結果……外部から強制的にシステムが発動された形跡が発見された」

「!!」

外部から強制的つて……それつて……。

「第三者……の誰か……が無理矢理……システムを……」

「そうなるな……クソツッ!」

なんだよそれ……! ふざけるなよ……!

なんでそんな事が出来るんだよ!! ラウラが何をしたつて言うんだ!!

あんなに素直で、凄く真面目で、とても優しい女の子の事を……どうして使い捨ての道具みたいにするんだ!!

「お前は……優しいな」

「先……生……?」

もう何回目になるか分からない、織斑先生の頭ナゲナゲ。

でも、この時ばかりは不思議と安心できた。

「自分の為じゃなくて、誰かの為に怒ることが出来る。そんなお前だからこそ、ラウラの頑なな心を開く事が出来たんだろうな……」

この状況で褒めるのは……ちよつとズルいと思います……。

なんか……照れるから……。

「そろそろ一夏達の元に行くといい。アイツ等もお前やラウラの事を心配していたからな。ちゃんと報告してやれ」

おっと、その通りだ。

いつまでもここにいて休んでいるラウラの邪魔をするわけにはいかない。

「織斑先生……は……？」

「私はもう少しだけここに残る。佐藤先生と話す事もあるからな」

担任である以上、保健教師である佐藤先生にもうちよつと詳しい検査結果を聞く必要があるんだろう。

教師って大変だ。

「分かっているとは思うが、ここで私が話した事は重要案件である上に機密事項だからな。誰にも話すなよ？」

「はい」

大きく一回頷いてから、私は保健室を後にして、食堂で待っていると言っていた皆の元に急ぐ事にした。

んじゃ、ラウラの事は一先ず織斑先生達に任せて、私は皆に元気な姿でも見せに行きましようかね。

## 大浴場解禁？

保健室からこっち、私は皆が待っている食堂へと向かう事に。

割とマジでお腹も空いていたので、夕食を何にしようか考えながら食堂へと入っていくと、すぐさま嫌な予感が体全体を過った。

「弥生!! 大丈夫だったか!？」

「むぎゅっ!？」

一瞬で私の視界が真っ黒になった。

同時に、何か柔らかい物が顔に当たっている。

「ああ……私の大事な弥生……」

「く……苦しい……」

この声はロランさんだな!？」

多分、この人の事だから、皆と同じように私の事を心配してくれたのだろうが、いきなり抱き着くのだけは勘弁してほしい。

普通に驚くし、なにより息苦しい。

「君の身に何かあったらと思うと、私は食事も喉を通らないよ……」

「嘘つけ。さつき堂々とナポリタンを食ってたじゃねえか」

ダリルさんの声が聞こえたと思ったら、視界が明るくなってきて、目の前に声の主であるダリル先輩と一緒に、見知らぬ女子生徒が立っていた。

リボンの色から察するに二年と思われるが、それにしても小柄な子だ。

これなら、下手をすると小学生にすら間違われかねない。

「ああ……この子が例の……」

「そ」

例の？ なんのこと？

「確かに、これはほつとくとソイツみたいな連中に目をつけられそうっすね」

ソイツを指しているのがロランさんだって事だけは分かった。

「初めまして。私は二年でギリシヤの代表候補生をしている『フォルテ・サファイア』って者ツス。よろしくツス」

「ど…どうも……」

この名前も原作で見た事があるような気がする。

ダリル先輩とセツトだったような……？

「君の事は、ダリルと一緒にちゃんと見ているから、安心するツス！」

「はあ……」

いきなり言われても意味が分からない。

でも、なんかいい人だったのだけは、なんとなく分かる。

「なんか大変だったっぽいな？ 怪我とかはしてないか？」

「はい……。私…はなんともない…です……」

「そっか。じゃあ、早くクラスメイト達の所に行ってやりな。アイツ等も凄く心配してたからな」

「分かりま…した……」

「ならば、私も一緒に同行しよ」「板垣さん!!」「ぶふおっ!!」

ロランさんがしれっと私の肩に手を伸ばそうとした瞬間、例の三人娘達がいきなりやって来てロランさんを吹っ飛ばした。

「大丈夫でしたか!？」

「お…お怪我などはございませんか!？」

「何か困った事があればなんでも仰ってくださいー!」

お…おふ……。

なんかいつも以上にグイグイ来るじゃないか……。

「ははは……愛は強し……か」

「んな恰好で言っても全くもって響かねえぞ」

「全くツス」

傍にあつた観葉植物に頭から突っ込んでいるロランさん。

そんな状態でも笑顔を出せるアンタを少しだけ見直したよ。

「えっと……お腹空…いた…から……食券…を取りに行き…たいん…だけど……」

「「お供します!!」」

「完全に舍弟になつてるし……」

あ、それ私も思った。

一昔前の不良漫画とかにありそうなシチュエーションだよね。

「この子達は全く悪い子達じゃないけど。」

「こいつの事はオレ等に任せて、とつとと行け。腹空いてんだろ？」

「はい」

そんな訳で、何故か女の子三人を引き連れて販売機とカウンターまで行く羽目に。

お蔭ですつごく目立ってました……。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

注文した『超大盛りトルコライス』を持って、予め見つけておいた皆がいる場所まで移動する。

勿論、あの三人も一緒だ。

私の姿を見た皆が、立ち上がりながら心配そうに話しかけてきた。

「や……弥生さん！」

「怪我とかは無い!? どっか擦り剥いたりとか！」

「だ……大丈夫……だよ……?」

もうそれ何回聞くんだよ……。

「弥生! ラウラの奴は……」

「あの子……も大丈夫……。気を失った……のは……精神的疲労……が原因……らしい……よ……」

「そ……そっか……」

「今……は保健室……のベッド……で寝てる……。織斑先生……もいる……から……心配ない……と思う……」

「千冬姉も一緒か。なら問題無いな」

自慢の姉だからか、全幅の信頼をしているみたいだな。

家族を信頼するのは私もよく分かる。

「色々大変だったけど、誰にも怪我とか無くて本当に良かったよ……」

「これこそ、不幸中の幸いだな」  
全くだね。

「弥生は今から夕食なんだよね？ だったら、ここに座ってもいいよ」  
「私とかんちゃん隣の隣だよ」

おお。それは有難い。

もうお腹ペコペコで、口の中は密かに涎で一杯だったですよ。

「私達も運ぶの手伝います。二人共、そっち持つてくれる？」

「了解！」

あ……私が運ぼうとする前に彼女達によって夕食の超大盛りトルコライスがテーブルの上に……。

簪と本音の隣に座ってから、備え付けの割り箸を手に取り食べようとしたら、またまたあの人がご登場。

「弥生。ここは私が食べさせてあげよう」

「二うわあっ?!」

どっから出てきたんだよ彼女は!?

いきなりのロランさん再登場の巻。

今回は本気でビビった……。

「わりい……不覚にも逃しちまった……」

「中々に曲者ツスね……あの子……」

後から疲れた顔をしたダリル先輩とフォルテ先輩がトボトボとやって来た。

つーか、代表候補生二人を振り切るってどんだけ!?

「もうロランに関しては多少の事は諦めるしかないんじゃないかしら？」

ちよつと鈴?! 諦めたらそこで試合終了だよ!?

「そんな事よりも、弥生はトーナメントの話は聞いたか？」

「話……?」

「さっき学食のテレビで言ってただけど、トーナメント自体は中止になったんだけど、今後の個人データの指標と関係するからって事



で、全ての一回戦だけはする事になったみたいだよ」

「やっぱそうなるか。仕方が無いって言えばそれまでなんだけどな」

「そこら辺は原作通り……か。」

まあ、このまま何もせず中止にしたら、それはそれで皆が可哀想だしね。

「妥当な判断と言えるかもしれない。」

「ふふ……弥生に私の勇姿を見せるいい機会だな」

あく……はいいい。ソーデスカ、ヨカツタデスネ。

「でも、中止になったのなら、噂になっていた優勝賞品(?)の弥生の耳かきはどうなるんだろう?」

「別にお流れでもいいんじゃないか? 私達ならばいざ知らず、他の生徒達はそれほど食いついてはいなかったんだし」

「そうですね。いざとなったら個人的に頼めばいいだけですし、おすし……」

おい。なんか今、セシリアがイギリス人らしからぬ事を口走らなかつたか?

「そう言……ええ……楯無さん……は……?」

「お姉ちゃんなら、今は生徒会室で事後処理に追われてる。多分、虚さんに激を飛ばされながら泣き泣きやつてるんじゃない?」

・  
・  
・  
・  
・  
・

「うわあ~~~~ん!! なんてこんなにも忙しいのよ~~~~!!?」

「お嬢様!! 今は口よりも手を動かす!!」

「虚ちゃんのエジワル〜!! 少しぐらい小休止してもいいじゃない〜!!」

「そんな暇はありません!! 早く終わらせないと、今日は生徒会室に泊まる羽目になりますよ!?!」

「それだけはマジで嫌あああああああつ!! 弥生ちゃん〜ん!! お姉ちゃんを癒して〜〜〜!!」

・  
・  
・  
・  
・  
・

なんだろう……容易に想像が出来てしまう自分がいる……。

生徒会って本当に大変なんだな……。

「あー! 織斑君! ここにいたんですね!」

もぐもぐ……。

おや? いつの間にか食堂に来ていた山田先生が嬉しそうにしながらこつちに來ますよ?

この人も事後処理で忙しいんじゃないの?

「俺がどうかしましたか?」

「はい。実はですね、本日から男子の大浴場の使用が解禁されました!」

「おお〜! マジですか!」

「マジです!今日はトーナメントの裏でボイラーの点検が行われていて、最初から生徒が使用できない日になっているんですけど、折角ならいつもは使えないでいる織斑君に使って貰おうって話になったんです」

ボイラー業者の方々……ご苦労様です。

「大浴場の鍵は私が持ってますし、後は織斑君の準備が済んだら、いつ

でも入浴できますよ」

「分かりました。んじや、今から部屋に戻って色々取ってきます」

「私は大浴場の前で待ってますから」

一夏は嬉しさを隠しきれないようで、私達に軽く言ってから、ニコニコしながら食堂を後にした。

「子供だな」

「同感」

「童心……なんででしょうか？」

「普通にガキっぽいだけじゃない？」

「あはは……」

わふ……。

今日の最大の功労者であるにも関わらず、一夏には相変わらず辛辣なのね……。

本人がこの場にいなくて本当に良かった。

「あの一年坊主も苦勞してんだな……」

「学園唯一の男子ツスからね。私達には分からない苦勞も沢山あると思っツスよ」

先輩方……なんて氣遣いの出来る方々！

そこに痺れたり憧れたりはないけど、普通に尊敬は出来る。

「そうだ。板垣さん、ちよつといいですか？」

「ふぁい？」

もぐもぐ……ごつくん。

山田先生が私に用事とか、なんでしよう？

手招きされたので、少しだけ席を立てて離れた場所に行くことに。

「あのですね、いい機会ですから、今日は板垣さんも大浴場を使いますか？」

「私も……？」

「はい。板垣さん、まだ一度も大浴場を使った事ありませんよね？」

な……なんでそれを知ってるんだ……？

「一応、使用記録は残ってますから」

流石はIS学園！ 風呂一つとってもセキュリティは完璧ってか

!?

「えつと……ですね。あなたの体の事は訳あって知っているんです。私だけじゃなくて織斑先生や佐藤先生も」

マ：マジですか!? いつだ!? いつ知られたんだ!?

もしかして、無人機騒動の時に私が保健室に運ばれた時か!?

私が内心で混乱していると、山田先生が私を安心させるようにこっちの手を握りしめてくれた。

「大丈夫。この事は他の先生達は知りませんから。私達だけの秘密にしてあります」

それは安心……していいのかな？

山田先生の優しい笑顔のお蔭で、なんとか落ち着く事は出来たけど。

「織斑君が大浴場を出たタイミングでお知らせに行きますから、食事が終わったら準備をしておいてくれませんか？」

うゝむ……他ならぬ山田先生の折角の御好意だ。

これを無下にするなんて私的には論外だし、ここは素直に先生の優しさに甘える事にしよう。

「分かり……ました……」

「よかった……。それじゃあ、私はもう行きますね。これから、何か困った事があれば何でも相談してください。私はいつでも板垣さんの味方ですから!」

な……なんて眩しい笑顔……。

そんな顔されたら……惚れてまうやろ〜!

山田先生も笑顔を浮かべながら食堂を後にした。

私が大浴場を使う事は……皆には内緒にした方がいいかもしれない。いな。

さて、早く戻って食事を再開しますか。

いつか……皆にもちゃんと説明しないといけないかもしれないね……私の体の事を。

特に、ラウラには隠し事はあまりしたくないから……。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

夕食を食べ終わってから、私は一人で部屋に戻ってからお風呂に入る準備をした。

……少し前までは一人でも平気だったのに、ラウラと一緒に過ごしたせいかな……。

途端にこの部屋が広くて、寂しく感じてしまうよ……。

少しだけ灌漑に耽っていると、部屋の扉がノックされた。

「板垣さくん？ 準備は出来ましたか？」

山田先生だ。

どうやら、一夏が大浴場から上がったみたい。

「はい……。出来て……ます……」

バスタオルや着替え等を手に持ってから、急いで扉を開ける。

「それじゃあ、行きましようか。こっちですよ」

そのまま、山田先生の先導で大浴場へとれつつらぐ。

初めての場所だから、ちよつとだけドキドキしてます。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「はふうく……」

体と頭を洗ってから、私は大浴場の中央に位置している一番大きな湯船に首まで浸かっている。

勿論、後ろ髪はタオルで纏めてある。

改めてグルリと見渡すと、これ以外にも色々な種類の風呂があるけど、私にはどれも珍しくないんだよね。

(だって、家にはこれと同じぐらいの大きさの檜風呂が普通にあるし) この大浴場も様々な風呂を完備しているけど、その全てに他の場所で入った経験がある。

だから、これと言った真新しさは特に感じなかった。

さっきまでのドキドキをどうか返してほしい。

(今日は今年で1・2を争うぐらいに疲れたんじゃないかなろうか……)

因みに、もう一つの筆頭候補は無人機騒動の時。

私、気絶しちゃったからね。

「あ〜……」

このまま何も考えずにボクツとしていたい……。

そして、願わくば一刻も早くラウラの元気な姿を見て、彼女をギョツとハグしたい。

(今日は一人で寝るのか……)

ここ最近はずつとラウラと一緒に寝てたからなく……。

今夜、ちゃんと寝れるといいんだけど……。

僅かな間だけ目を瞑って湯の温もりに全てを委ねていると、なにやら遠くから大浴場の扉が開くような音が聞こえた気がした。

でも、私はすぐに「気のせいだ」と思って、その音の事を無視した。その事が、私と一人の少女の関係を少しだけ変える切っ掛けになる事も知らずに。

ちよつと逆上せてきたので、もうそろそろ上がるのかなと思いはじめた時、先程の扉の開く音が私の真後ろで聞こえてきた。

流石にこれは無視出来ないから、思わず扉の方を振り向くと、そこには意外な人物がタオル片手に立っていた。

「えへへ……来ちゃった♡」

「シャ…シャル…ロツト…?」



また気苦労が増える・・・

な……ななななななななでシャルロットがここにいるんだよ!?

確かに原作でも大浴場に乱入するシーンはあったけど、あれは一夏に対してでしょ!?

君のお目当ての一夏君なら、とつくに上がって自室に帰ってますけど!?

「えつと……そつちに行ってもいいかな?」

「!!?」

私は反射的に顔の下半分までをお湯の中へと沈めた。

え……えくと……何か考えろ私……!

「そ……その前……:……お湯……で体……を流し……た方がいい……:……よ……:……」

「あ。それもそうだね。ごめん」

よし! これです少しは時間を長引かせて……

(……いや。これって全くもって根本的な解決になってないじゃん)  
事態の先延ばしをするなんて、私はいつから一夏のような思考になった?  
アイツに私も毒されてきたかな?

私が頭の中で思考を巡らせていると、視線の先でシャルロットがお風呂椅子に座ってから洗面器に溜めたお湯で体を流している光景が映った。

(……綺麗な肌をしてるな……)

私とは雲泥の差だ。

同じ女子として、なんとも羨ましい限り。

「流したよ。今度こそそつちに行ってもいい?」

なんかもう断れない空気になってるんですけど……!

ここで下手に断つても後々が怖いし……。

「う……ん……」

ここは敢えて返事をして、その後で彼女から離れば無問題!

案の定、シャルロットは湯船に入る際に私の傍に来たけれど、さすが私は前方を向いた体勢のまま移動を開始。



1mぐらい離れた位置に行き、そこでいつ上がるかとタイミングを計る事に。

(丁度いいのは彼女が余所を向いている時なんだけど……)  
ちよこつとだけシャルロットの方に視線を向けると……

「思ったよりも熱いんだね……。でも、これぐらいなら大丈夫かな？」  
私から視線を逸らす気ZEROなんですよね。

もうなんつーか、こつちのことを射抜かんと言わんばかりに凝視してまんがな。

「……なんで弥生は僕から離れるの？」

「別……に……」

こつちにはこつちの事情があるの！

君は気遣いが出来るいい子でしょ!? お願いだからそれぐらいは悟って!!

このままなんとかしてシャルロットが出るのを待とうと思うけど、その前に私が逆上させてしまいそう……。

早く根負けして欲しいと言うのが素直な気持ちだ。

(つて!? なんでこつちに来る!?)

そんな私の願いも空しく、シャルロットは湯に浸かったままで私の方に向かってきた。

勿論、こつちだつてそのまま黙っているわけじゃない。

彼女に動きに合わせて私も移動して、着かず離れずの謎の競争が始まった。

「なんで近づいて来てくれないの!？」

「なんで……でも……」

そつちこそ、なんで私に近づきたがる!?

そんな攻防戦を繰り返していると、いつの間にか私は角まで追い詰められていた。

「もう逃げられないよね〜?」

「うう……」

まさか、彼女がここまで執念深かったとは……。

精神的な面だけで言えば、地味にスパイ向けだったりするんじゃない

いのか？

ジリジリとこつちに距離を詰めてくるシャルロット。

どうするどうするどうする!?」

頭の中で必死に打開策を考えている間に、もう目と鼻の先まで来ていた。

「そんなに逃げなくてもいいの……に……っ？」

ああ……とうとう見られてしまった……。

ここまで近づけば、嫌でも分かるよね……。

「や……弥生!! この沢山の傷はどうしたのさ!？」

「……………」

その問いに対する答えを私は持ち合わせてはいない。

何故なら、この傷に関する記憶が無いから。

「あ……ゴメン。僕は別に弥生を責めるつもりじゃ……」

「気にして……ない……」

この傷を知った大抵の奴が同じような反応をする。

一夏なんかがいい例だ。

「この傷……について……は私……もよくは知らない……の……」

「どういう事?」

「私……はおじいちゃん……に拾わ……れた子……供……だから……」

「拾われた……!?!」

「うん……。拾われる前……の事は……全然覚え……てなく……て……、この無数……の傷跡……はその時……からあった……って聞いて……る……」

「聞いてるって?」

「当時……の事……は曖昧……にしか……覚えてない……から……」

「そっか……」

あの頃はまだ私も幼い幼女にしか過ぎなかった。

誰だって、自分の幼少期の詳しい出来事なんて事細かに覚えていないでしょう?」

それと同じだよ、きつと。

「弥生の肌はとても綺麗なのに……どうしてこんな……っ!?!」

シャルロットが私に手を取りながら悲しそうに俯くが、その指先を

見た途端に息を飲んだのが分かった。

「これ……爪が……」

「うん……全部剥がれ……てる……んだ……足の爪……も……」  
爪切りいらずのこの体ってか？

最初は私も驚いたけどさ、慣れればどうって事無いんだよね。  
いざとなれば付け爪とかすればいいし。

それ以前に、私はネイルアートとか微塵も興味無いんだけど。

「もしかして……普段から前髪で隠している顔も……」

「分かつちゃう……よね……」

ここはお風呂だから、私も全ての前髪をかき上げている。  
今まで顔半分が見えていなかったのは、位置的な問題だ。

だから、私は自分の『素顔』が見えるように正面を向いた。

「醜い……よね……これ……」

顔の左半分が完全に焼け爛れて、左目はその機能を失っている。

故に、私は右目だけでしか物を見る事が出来ない。

これにもすっかり慣れてしまったけど。

「目は……」

「見え……ない……」

こんな気色悪い物をいつまでも年頃の少女に見せるのは忍びない。

少し水分でべたつくのは承知の上で、前髪だけを元に戻した。

(嫌われたかな……。いや、これがきつと正しいんだ。私は少しだけ  
自分の身の安全を保障されて、彼女も愛しの一夏の方に行く。これで  
よかつたんだよ、うん)

こうして全てを見られてしまった以上、ここに長居をする理由は無  
い。

早く上がって部屋でのんびりしよう……と思っていると、なにやら  
ポタポタと水面に水滴が落ちている音が聞こえた。

「う……う……う……」

「え……ええ……う……」

な……なんでシャルロットが泣いてるの!?

私は別に彼女を泣かせるような事はしてないよね!?

「どうし……て泣いて……」

「弥生が泣かないからだよおお……」

は？ 意味不明ですけど？

「グス……弥生は女の子なんだよ……？ 十代の女の子が全身にこんな傷跡を持つていたら、普通はどうにかなつちやうよ……。それなのに、どうして弥生はそんな風に笑っていられるのさあ……」

え？ 私……笑ってた？ 自覚無かつたわ。

「片目が見えなくて、爪も無くて……。しかも拾われたって……。弥生の方が僕よりもずっと酷い目に遭つてるじゃないか……」

「そう……かな……」

少なくとも、今の私は幸せな方だと思うんだけど。

おじいちゃんに拾われて、学園ではラウラや本音や簪達もいる。

普通に考えて、これだけでも充分でしょ。

「泣いていいんだよ？ こんな体なんて嫌だつて言つていいんだよ？ 滅茶苦茶に悲しんでもいいんだよ？ 誰も何も文句なんて言わない。それなのに……。どうして弥生はそんなにも……」

どうしてと言われましても。

今更になつて悲観するとか、したくても出来ないんですけど。

ほんと、慣れてつて恐ろしいね。

「他にコレを知つてる人つているの……？」

「織斑先生……と山田先生……。それと……。保健……の佐藤先生……。後は

……」

「後は？」

「一夏……」

「一夏も!？」

驚くよね、うん。分かるよ……その気持ち。

「なんで男子である一夏が弥生の体の事を知つて……。ハッ!? まさか……」

ん？ いきなり犯人が分かつた名探偵みたいな顔をしてどうした？

(僕の時と同じように、ラッキースケベで弥生の裸を見たんじゃ……)

お…おお……シャルロットの顔が段々と険しくなっていくんです  
けど……。

「弥生……僕、決めたよ」

「何……を……？」

「僕、弥生の体の事を誰にも話したりしない。お墓まで持つていくよ」

いきなり凄い事を言い出したんですけど!!

それって死ぬまで言わないって事だよね!?

いや…私としては嬉しい限りだけどさ、いつかは皆にも話さなく

ちやいけないと思ってるわけでした……。

「そして、弥生が僕の事を助けてくれたように、今度は僕が弥生の事を  
助けるから!」

「そ……う……」

としか言えないです。はい。

「弥生の辛い事は……僕も一緒に背負っていくから……」

「あ……うん……」

泣きながら裸で抱きしめられると、なんにも出来ないんだよね  
……。

と言うか、今、私達の体って大変な事になってる自覚ある?

私とシャルロットの胸が互いに押し潰しあってるんだよ?

「ん………!」

ち…乳首同士が擦れ合って……!

なんか暑苦しくなってきたから、割とマジで離れてく!!

・

・

・

・

・

「あ……ははは……そのく……ごめんね?」

「だい……じよぶ……です……」

嘘です。

実は密かに乳首で感じちゃいました。

「あの……」

「ん？ なに？」

「どうし……て……大浴場……に……？」

「そう言えば、まだ言っただけじゃなかったね」

こつちも地味にパニくってたから、ここに来た理由とか経緯とか聞くのをすっかり忘れてた。

「さつき寮の廊下で弥生が山田先生と一緒に大浴場に歩いて行く姿が見えたからさ、慌てて部屋に戻って準備をして後を着けたんだ」

お前もストーカーさんにジョブチェンジですか。そうですか。

よく山田先生に気が付かれなかったな……。

「まだ弥生にちゃんとお礼を言っただけじゃなかったって思って、それでここまで来たんだけど……」

お礼……ね。別に礼を言われるような事って何もしてないじゃん。

あの問題に関しては、私達が関与しなくても自然と解決していたみたいだし。

「僕がお父さんの事で取り乱しそうになった時、弥生は僕の事を優しく抱きしめてくれたよね……」

そんな事もありましたね。

「その後も、僕がお父さんたちと話している最中もずっと傍にいてくれて、頭まで撫でてくれた……。あの時さ……凄く嬉しくて、安心してんだ……」

アレは私も自然と『そうしなくちゃ』と思ってやったことだからなあ。

あの程度の事で喜んで貰えたなら、こつちとしても嬉しい限りだけだ。

「本当にありがとう……。弥生達がいってくれたから、僕はお父さんたちと仲直りが出来た……」

「どう……いたしまし……て……？」

お礼を言いながらもシレっと私にまた抱き着いてくるのは勘弁して貰えませんか？

しかも、今度は私の胸に顔を埋めるような格好で。

「こうしてるとき……なんだか凄く心が安らぐんだよね……。まるで、お母さんにギュツてされてるみたい……」

「同級生……なんで……すけ……ど……」

「分かってるって。ふふふ……」

少なくとも、私はこんな大きな子供を持った覚えはありません。

子供を持つならラウラだな、うん。

いや、同時に本音や簪のような子供も一緒に欲しいかも……。

あの三人のお母さんなら喜んでなるね！

因みに、山田先生はお姉さん梓ね。これは確定。

「ボーデヴィツヒさん……ラウラともいつもこうして寝てるの？」

「一応……」

「そっか……羨ましいな……」

そんな事を言われても困るんですけど。

これが本音や簪なら寧ろ大歓迎なんだけどね。

「そう言えば、今日の試合……想像以上に弥生って強かったよね？」

「どこかの施設とかで本格的な訓練とかしてたの？」

「そう……じゃない……けど……基礎的……なことな……ら一通り……は……」

「入学前……に勉強……した……程度……だよ……」

「って事は、今日は真正銘の初めての試合だったんだ？ それにし

ては動きが滑らかだったような気がするけど……」

「ラウラ……との訓練……の成果……が出てるお蔭……かも……。それに……」

「……簡単……な護身術……を習ってる……から……」

「成る程ね……。ちゃんと基礎が出来てるから、応用も簡単に出来る

んだ。弥生の頭脳なら楽勝だろうね」

前々から思ってたけど、いつの間にか私って皆の中で『秀才キャラ』

になってない？

いやね、自分でも人並み以上に勉強を頑張っている事は認めるけど、そこまでずば抜けて頭がいいわけじゃないから。

今回の作戦だって、原作知識があつて初めて成立したようなもんだし。

それが無かったら、今頃は原作みたいになつてたに違いないよ、きつと。

「あの……そろそろ……」

本格的に頭がボクツとしてきた。

これは割と本気でヤバいのでは？

「そ…そうだね！ そ…それじゃあ頭とか洗っちゃおうかな!？」

慌てて湯船から立ち上がったシャルロットは、ギクシヤクしながらお湯から出た。

なんだか足元を滑らせそうで心配だよ……。

「ちゃんと待ってて…よね？」

「ん……」

はいはい。ちゃんと待ってて上げるから、早く洗ってしまいなさいな。

私は体を少しだけ出して半身浴モードになるけど。

それからシャルロットはキッチンと体と頭を洗って（途中から私に頭を洗ってほしいとお願いしてきた）、更に10分ぐらいだけ湯船に浸かってから、大浴場を後にする事にした。

頭を洗ってあげてるとき、シャルロットが満面の笑みを浮かべてたんだけど、そんなに誰かに頭を洗って貰う事が嬉しかったのかな？

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

頭と体をちゃんと拭いた後、私達は一緒に着替えてからホコホコの



状態で大浴場の更衣室を出て、廊下を窓を開けて夜風に少しだけ当たる事に。

「ラウラが保健室にいるって事は、今晩は部屋に弥生一人だけって事？」

「そうな…るね……」

寂しいけど、こればかりは仕方が無いのよね。

まあ、一晩だけの辛抱だ。

「そ…それじゃあさ……」

「??？」

なんだかイヤ々な予感がするけど……。

「今日だけ……僕が弥生の部屋に泊まりに行ってもいい……かな？」

なんとなく、この発言を予想出来た自分が嫌いです……。

どうしてそんな風な発想に至るんですかね……？

「ぼ…僕の部屋のルームメイトもさ……今日は別の子の部屋に泊まりに行ってるんだよね。だから……その……」

分かったよ……分かりましたよ。

完全にデジャビユってるけど、このようなパターンにおける私に与えられた選択肢は大体が『YES』 or 『ハイ』しかない訳で。

「……先に部屋……で待ってる……から……」

「う…うん！ 急いでいくね！」

そこまで急がなくてもダイジョーブですよ。

その後、シャルロットはデフォルメされた動物が描かれた可愛らしいパジャマを着てから、嬉々とした顔で部屋までやって来た。

なし崩し的に互いの髪をドライヤーで乾かしあってから、何故か一緒にベッドで寝ることに。

……一人で寂しく寝るよりかはずっとマシだけど、どうして私に抱き着いてくるのかな？

君はそんなにもハグが大好きな女の子だったか？

……人肌と疲れの相乗効果もあってか、気持ちよくぐっすりとお熟睡出来た事は否定しないけどさ。

そこだけは私も感謝してるよ……シャルロット。



## 聖母の抱擁と愚者達の末路

次の日。

私は流れてシャルロットと一緒に登校する事になった。

その途中でいつものメンバーと合流したのだが、その時の彼女達の顔が本気で怖かった。

なんと言いますか……今にもシャルロットを呪いそうな顔で睨みつけてたから。

当の本人は勝ち誇ったようにドヤ顔をしてたけど。

教室に入ると、昨日の騒動の熱がまだ完全に冷めきっていないように、入った途端に

一夏とシャルロットと私、つまりはVTシステム事件の関係者に皆が集中して詰め寄ってきた。

「ね……ねえねえ！ 昨日のアレってなんだったの!?!」

「ボーデヴィツヒさんは大丈夫なの!?!」

「織斑君と板垣さんの連携、カッコよかったよ〜!」

いきなりグイグイ来られても困るだけなんだけど……。

こんな所でぐずぐずしていたら、先生達がやって来ちゃうよ？

「ちよ……皆！ まずは落ち着いてくれって!」

「僕達も昨日の事については詳しくは知らされていないんだよ！ 一応、箝口令が出るんだから!」

シャルロットの『箝口令』と言う単語を聞いた途端に皆は大人しくなり、散り散りになっていった。

「ナイスだ、シャルロット」

「弥生が困ってたからね。これぐらいは当然だよ」

「そうだよな……え?」

あれ〜? 何かが聞こえたような気がしたけど、気のせいだったのかな〜?

「……………本格的に増えたね」

「理由は敢えて聞きませんが……」

「あれはあれで強力なライバルの出現かもしれない……」

その三人も、早く席に着いた方がいいと思いますよ？

私が危惧していた通り、すぐに予鈴が鳴って、皆はあつという間に自分の席へと移動した。

全員が座り終えたナイスタイミングで織斑先生と山田先生がラウラを引き連れて教室へと入ってきた。

「ラウラさん、元気になったようですね？」

「ん……」

近くの席にいるセシリアがそつと私に話しかけてくれた。

私も、元気そうなあの子の顔を見て嬉しいよ。

「ひ……姫様……」

織斑先生が背中を軽く押す事で、ラウラは今にも泣きそうになりながらも、私の席の近くまでトボトボとやって来た。

「す……すみませんでした……。私のせいで姫様の御身を危険に晒してしま……」

全部を言い終える前に、私は立ち上がってラウラの事を思い切り抱きしめた。

「おかえり……ラウラ」

「ひ……ひ……ひ……」

限界まで目尻に涙を溜めてから、ラウラはその涙腺を崩壊させた。

「姫様あああゝゝゝ!!! ごめんなさあああゝゝゝ!!!」

「ん……私……は気にしてない……よ……」

泣き叫ぶラウラの頭を優しくナデナデしながら、そつと背中も擦ってあげた。

「ヒクッ……！ 皆も済まなかった……。折角のトーナメントを台無しにしてしまって……」

うん。ちゃんと謝ることが出来たね。偉い偉い。

「わ……私達もそこまで気にしてないよ！」

「だ……だから、もう泣かなくても大丈夫だよ！」

「うんうん！」

「って言うか、泣いてるボーデヴィツヒさんを見てたら、微塵も責める気とか失せるんですけど……」

「ここで何か言ったら、それこそ真正の外道でしょ……」

ちやんと分かっているじゃない。

やっぱ、可愛い正義なんだね！

「しっかしさ……」

「うん……だよね……」

何？　なんで皆してしたり顔で頷いてるの？

「『板垣さんって、やっぱりお母さんだよね』」

やっぱりって何!?　やっぱりって！

私はまだ未婚の16歳だよ!!

皆と同じ高校一年生だよ!!

「もはや、弥生の聖母説は不動のものとなりつつあるな……」

「弥生が母親か……。子供は男の子と女の子が一人ずつがいいか……?」

箒、勝手に不動のものにしないでくれますか？

そして一夏！　お前も勝手に私と自分の将来設計をするな!!

その妄想が実現する事は絶対に無いからな!!

「お前達、クラスメイトが無事に復帰したのを喜ぶのはいいが、早く静かにしろ。朝のHRが始められんだろうが」

織斑先生の鶴の一言で喧騒が静まり、私とラウラはそれぞれに席に戻る事に。

席に行く際の彼女の名残惜しそうな顔に罪悪感が抉られた。

(私も何か切っ掛けがあれば、ああして抱きしめて貰えるのだろうか

……?)

ひゃあっ!?　また背中を凄まじい悪寒が走ったんですけど!?

か…風邪でも引きかけてるのかな……??

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

ドイツ某所にある違法研究所。

入口と思われる場所は完全に破壊されていて、高級感溢れる多数の機器も見ても無残な姿を晒している。

床には白衣を着た大勢の研究者と思わしき連中が気絶した状態で転がっていた。

そこに、二つの人影が現れた。

「全く……！ 幾ら人手不足であるとは言え、どうして仮にも幹部である私達がドイツくんだけ来なくてはいけないんでしょうか……」

「……………」

「……分かっていきますよ、ラケシス姉さま。与えられた仕事に愚痴を零していても何も始まらない……ですよね？ だったら、早く終わらせてホテルでゆっくりとしたいです」

褐色の少女と無口な美女。

そう、ラケシスとアトロポスの姉妹が破壊寸前になっている研究所に訪れていた。

「しかし、この様子を見る限り、どうやら先客がいるようですね……」  
アトロポスの勘は正しかった。

電気系統が完全にショートしているのか、全体的に真っ黒になっていて、破壊された壁や天井の隙間から漏れている光が光源となっている空間の奥から、誰かが歩いてくるような足音が響いてきた。

「任務完了……ってか。意外と楽な仕事だったな………ん？」

「貴方は……！」

歩いてきたのは、肩に黒いベルトを装着した白いシャツを着たアフロヘアーの男で、その手には研究所の重要なデータが入っていると思われるUSBメモリが握られていた。

「コウスケ・ヤハゲ……！ 吉六会のナンバー2である貴方が直々にこの場に来ているなんて……！」

「ラケシスにアトロポス。またお前等か」

アフロの男、矢禿康介は呆れながらも溜息を吐き、二人を見つめる。

「どうして幹部であるお前等が……って、それは聞くだけ野暮か」

「それはこちらのセリフです。でも、これで納得できました」

「何がだよ？」

周囲をぐるりと見渡して、足元で倒れている研究員の一人を軽く蹴ってから、改めて矢禿を見据える。

「嘗て、女性権利団体のモンゴル支部をたった一人で完全壊滅させた貴方ならば、この研究所を単独で制圧する事も容易でしょう。大方、私達がここに来る前に潰そうと思っていた権利団体のドイツ支部を先に潰したのも貴方の仕業でしょう？ ミスターヤハゲ」

「そうだと云ったら？」

互いの視線が絡み合い、まるで時が静止したかのような静けさが辺りを支配する。

「別に何も。私達が潰しても、貴方が潰しても、別に違いはありませんからね。それに、支部のお金はちゃんと頂きましたから」

「俺の目的は別に金じゃなかったからな。でも、お前等に塩を送るような真似をしちまったのも事実か……」

苦虫を噛んだような顔で頭をガリガリと掻き毟る。

自分のミスで敵対組織に金を与えてしまった事が許せないようだ。

「出来ればそのUSBも頂けたら嬉しいのですが？」

「そう言われて大人しく渡すとも思ってるのか？」

再びの睨み合い。

今度はラケシスも少しだけ腰を低くして、いつでも飛びかかれるようにしている。

「……いえ。悔しいですが、ここで貴方と戦う事は得策じゃありません。私達の『専用機』は現在オーバーホール中。生身でもそこら辺の連中には無双できる自信はありますが、それが貴方相手となると話は別になる」

「……………」

「はい。この男の実力は、私達二人がかりでも敵うかどうか……。この場にISを持ってきていない時点で、選択肢は嫌でも限られてきま

す」

何かを悟ると、アトロポスはラケシスを伴って元来た道を戻り始める。

「悔しいですが、ここに到着するのが遅れた瞬間から、私達の負けは確定していたようです。ここは大人しく撤退するとしましよう」

「逃げられると思ってるのか？」

「思ってますよ」

「このアマ……！」

飄々としたアトロポスの態度に少しだけイラついたのか、矢禿は自分の頭に手を掛ける。

「だったら……お前等の目がくらんでいる内に捕縛させて貰う!!」

なんと！ 矢禿は自分のアフロ（実はカツラだった！）を大胆にも取り外し、その磨かれた頭を前方に向けた！

「くらえ!! 太陽拳!!」

矢禿フラッシュ

全てを覆い尽くす閃光が周囲を照らし、全ての者の視界を奪い去る！

その隙に矢禿は突進し、二人を捕まえようと試みる！ だが……「なっ!？」

閃光が収まった時、その場には二人の姿はどこにも無かった。

「消えた……？」

慌てて自分が破壊した出入り口から外に出て周囲を見渡すが、どこにも彼女達の姿は無かった。

「チツ……！ 逃がしたか……！」

八つ当たり気味にその辺にあった壁を蹴ると、その衝撃で壁が粉々に砕け散る。

「一応、あの二人に会った事も含めて、全てを『元締め』に報告しなくちゃ駄目だろうな……」

その手に握っているUSBをポケットに仕舞いこんでから、矢禿は反対側のポケットからスマホを取り出して、どこかに電話を掛け始めた。

「あく……警察ツスか？ どこにでもいる善良な日本の観光旅行者なん



ですけど、今から言う場所にVTシステムの研究をしていた非人道的なクソ共の違法研究所があるツスよ」

その場から矢禿が去ってから数十分後、大勢の警官隊が瓦礫の山と化した違法研究所に駆け付けて、その場にいた全員を見事に逮捕した。

研究者達は全員が裁判にて終身刑を言い渡されたいらしい。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

夜。ドイツのどこかにある某高級ホテル内にあるライトアップされた完全貸し切り状態の屋外プールにて、水着を着たラケシスとアトロポスが気持ちよさそうに泳いでいた。

因みに、ラケシスはかなりセクシーな黒のビキニ、アトロポスは反対に真っ白なビキニを着用している。

「今回は本当に焦りましたね。まさか、あそこでコウスケ・ヤハゲと出くわすとは……。唯でさえ吉六会の連中は厄介だと言うのに、そのナンバー2が来ているなんて、事前情報にありませんでしたよ……。つたく……」

「……………」

「……承知していますよ。彼らの事ですから、私達に居場所を特定されないように入国、出国するなんて事は簡単に来るでしょうね」

優雅に背泳ぎをしながら話すアトロポスとは対照的に、ラケシスはプールサイドにてのんびりとデツキチエアに凭れ掛かって、ジュースを飲んでいた。

その時だった。

もう一つのデツキチエアに置いてあるアトロポスのスマホにいきなり着信が来た。

「無粋な……。私と姉さまの至福の一時を邪魔するなんて、万死に値します」

などと文句を垂れつつも、素直に着信には出るアトロポスだった。

「はあ……はい？ どなたですか？」

電話の向こうの相手と話しながら、タオルで自分の髪を拭いている。

「はい……はい。そうです。それは先程送った報告用のメールの通りです。吉六会幹部の Kouzuke・Yahage に完全に先を越されています。VTシステムの研究データは全て持っていかれたかと。私達はそこから撤退するだけで精一杯でした。なにせ、相手はあの男だったのですから」

アトロポスの報告に一応の納得はした通話相手は、次の話題に移行した。

「……え？ 次はアメリカ？ どういう事ですか？ 詳しく説明してください」

次の瞬間、言われた一言にアトロポスは目が点になってしまった。

「アメリカとイスラエルが共同で開発した軍用ISの強奪をしろですって？」

物語は加速する。

一人の少女を中心にして。

もうすぐ夏ですね。気取るつもりはありません。

空が暁に染まる頃。

某所にある小さくもしつかりとした一戸建ての家に、一人の少女が帰宅した。

彼女の名はシャルロット・デユノア。

現在、シャルロットとはある少女達と一緒に暮らしている。

「今日も疲れたな〜……」

首をコキコキと鳴らしながら自宅の扉を開ける。

「ただいま〜!」

ご近所に迷惑にならない程度の大声で家の奥へと叫ぶと、キッチンの方から誰かが歩いてくる複数の足音が聞こえてきた。

その足音は次第に近づいてきて、その主達が姿を現す。

「おかえり……」

「おかえり!」

「うん。ただいま、弥生、ラウラ」

玄関までやって来た、長い前髪で顔の半分を隠してエプロンを着用している少女こそが、シャルロットがこの世で唯一愛する存在、板垣弥生その人だった。

長い付き合いの末に二人は同棲生活を初め、今ではまるで本当の夫婦のような関係になっていた。

弥生の傍にいる銀髪の少女はラウラ・ボーデヴィツヒ。

彼女は弥生の養女であり、シャルロットにとつても弥生と同じぐらいに大切な存在だ。

「ご飯……にする……? お風呂……にする……? そ……れと……も……」

いきなり弥生はエプロンを外し、少しだけ服をずらして肌を露出する。

「わ・た・し……?」

……

・  
・  
・  
・

「僕はいつでも弥生一択だよ!!!」

カーテンの隙間から朝日が漏れて、窓の外からは小鳥の鳴き声が聞こえる。

今まで何度も見てきたIS学園の朝の光景だ。

「……………夢オチ?」

正解。

そこまでまだ話はぶっ飛んでいない。

幾らなんでも展開が早過ぎである。

「そんなあああ……………」

朝一からシャルロットの口から盛大な溜息が零れる。

新しい朝が来た、希望の朝だと言うのに、なんとも景気の悪い顔をするフランス人である。

「まさか、弥生と一緒に暮らす夢を見るなんて…………。にしても、なんでラウラが子供役で出演してるの…………?」

普段のイメージが如実に表れている夢だったが、それでも妄想が過ぎる夢だった。

ここまで自分の欲望を忠実に再現した夢もまた珍しい。

「…………朝から元気ね〜」

泡立った歯ブラシを口に啣えたままジト目で洗面所から顔を出している同室の少女が、起床してからのシャルロットの一連の行動を見て呆れていた。

彼女の日常は、今のところは順風満帆のようだ。

・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
・

今日は珍しく二人揃って携帯のアラームよりも早く起床してしまった。

最初は少しだけ損をした気持ちになったが、日本には『早起きは三文の徳』と言う諺も存在する。

時にはこんな日も悪くは無いだろう。

そんな訳で、私とラウラはいつもよりも時間に余裕を持って朝の準備をしていた。

「♪♪♪」

テレビをつけて朝のニュースを見ながら、私は椅子に座ったラウラの綺麗な銀色の髪を櫛で梳いていた。

毎度の事ながら、この子の髪は本当にサラサラ艶々で、こうしているだけで地味に楽しい。

……私も随分と乙女チックな性格になってきたな。

まだまだアニメやラノベは大好きだけどね。

「日本は本当に平和な国のようですね。ニュースの殆どがのんびりとしたものばかりだ」

「治安…はいい…から…ね…」

「道端一つとっても凄く綺麗で、他の国では考えられません。これほど美しい国で生まれ育ったのであれば、姫様や教官がお美しいのも納得です」

「ははは…」

VTシステムの一件以降、ラウラは今まで以上に素直になった。

皆の前で思いつきり泣いたのが功を奏したのか、今ではラウラはクルスのマスコットの存在にまで格上げされている。

ラウラが皆に好かれるのは私としても嬉しい限りだけどね。

「弥生、ラウラ。少し早いけど、一緒に朝食を食べに行かないか？」  
おっと、ここで箒さんのご登場です。

思った以上に大人しいので、今のところは安心して付き合える仲間。  
「もうちよつと……だけ……待って……て……」

「姫様。廊下で待たせるのもアレですから、部屋に入って貰ったらどうでしょうか？」

「そうだ……ね……」

ラウラの提案を受け入れ、私達は扉の向こうにいる箒に部屋に入つて待つように伝える。

すると、箒はすぐさま扉を開いて入ってきた。

けど、なんでか私達の姿を見た瞬間に固まってしまった。

「お……」

「お……」

「お母さん……？」

「なんでやねん」

箒のまさかの一言に思わずツツコみ。

部屋に入つての第一声がソレかい。

「す……すまない。ラウラの髪を梳いている弥生の姿が一瞬だけ私の母さんとダブってしまった……」

本物の母親と姿が似るって……私ってそんなにも老けてるの？

一応、体はまだまだピチピチ（死語）の女子高生のつもりなんですけど？

「しかし……」

なによ？ あんましジロジロ見ないでほしい。

「弥生がそうしている姿に違和感が無さ過ぎて逆に凄い」

……マジで？ 嘘でしょ？

いやいや……箒は普段からあまり冗談とか言わない子だから、これは本心……？

だとしたら、ちよつぱりショックかも……。

「やっぱり、弥生は『お母さん』なんだなあ……」

やっぱりって何!? やっぱりって!!

その意味を小一時間ほど問い詰めたい!!  
けど、その時間が無い!!

その後、私達は少しだけ急いだから準備を済ませてから、箸と一緒に食堂へと向かった。

・  
・  
・  
・  
・  
・

今日の朝食は、箸に合わせて私も和食にする事に。

そんな訳で、本日最初のご飯は『焼き魚定食(勿論超大盛り)』です。  
なんと、お魚さんはでっかい尾頭付き。

テーブルの中央で、その強烈なまでの存在感を放っています。

(こうして魚を食べていると、家にいる農林水産大臣を思い出すなく)  
かと言って、別に悲観しているわけじゃないけどね。

それはそれ、これはこれ。

「メニュー自体は普通なのに、その量で全てを台無しにするな……」  
「そう……?」

「魚の目には栄養が豊富に含まれていると聞きます。姫様は普通に食べるだけではなくて、栄養もちゃんと考慮なさっているのですね」  
それは当然だ。

お腹いっぱい食べる事も大事だけど、それ以上に栄養配分はもつと大事だ。

『貧乏よりも健康! 生きてさえいれば明日は来る!』と言う名言もあるぐらいだし。

因みに、ラウラはコッペパンとコーンスープ。

箸は私と同じ和食の定食だけど、私とは違っておかずは煮魚とほう



れん草のお浸し。

うん。これも悪くないかも。

鉄分は大事だしね。

「今日の板垣さんは魚か〜……」

「あれ、テレビの漁師さんのドキュメントとかに出てくる超でっかい魚じゃないの?」

「それを朝から尾頭付きで食せる……。驚きを通り越して、もう普通に尊敬できるわ……」

「あんだけ食べて、あのスタイルなのよね……。ほんと、世の中って理不尽……」

流石の私も、自分の食事風景がすっかりこの学園の名物になってきている事は分かりますよ?」

だって、道行く皆がこつちを見るんだもん。

ま、今更そんな事を気にはしないけどね。

「ハア〜……。正夢にならないかな〜……」

私を横目で見える集団に交じって、シャルロットが食堂に入ってきた。

けど、なんで朝っぱらから溜息なんて吐いてるの?

そのまま彼女は販売機で適当に食券を買って、カウンターに向かった。

その道の背中からも、元気は全く感じられない。

注文の品を受け取ってからこつちに気が付いたようで、真っ直ぐ一直線に私達がいるテーブルへとやって来た。

「お：おはよう。弥生、ラウラ、箒」

「「おはよう」」

なんでこつちを見た途端に顔を真っ赤にする?

(あんな夢を見た直後に弥生に会うなんて〜! 嫌でも意識しちゃうじゃないか〜!)

よく分からんけど、なにやら混乱しているのは分かる。

だって、さつきから百面相してるし。

「お前も苦勞してるんだな……シャルロット」

「そ…そう？ アハハ…」

んでもって、箒はシャルロットに共感してるし。

これが女子同士の会話なのか……！

「や…弥生」

「な…に…？」

「し…幸せに…なろうね？」

「うん…？」

人間である以上、幸せを求めるのは当然の事では？

シャルロットの言いたい事が本気で分からない。

一応言っておくと、私達は遅刻はしていない。

一夏は遅刻ギリギリだったけど。

本人曰く、『今回は単純に目覚ましをセットする時間を間違えた』らしい。

朝一から、一年一組の教室に凄まじい炸裂音と一緒に一人の男子高  
校生の悲痛な叫びが木霊した。

・  
・  
・  
・  
・  
・

頭からプシュ…と煙を出している一夏をよそに、朝のSHRが始  
まった。

教壇には一夏に一撃を加えた張本人である担任の織斑先生が立っ  
ている。

「さて、今日は通常授業の日だった筈だな。いくらISS学園が専門校  
に近い場所とは言え、名目上はお前達も立派な高校生だ。言わずとも  
分かると思うが、このクラスから赤点なんて出すなよ？ 特にそこで

痛みに悶絶している男子」

「だ…誰のせいだと……」

「何か言ったか？」

「ナンデモナイデス……」

「よろしい」

相変わらず、織斑家におけるヒエラルキーは先生の方が上のよう  
だ。

一夏があの人に対して優勢になれるのは家事全般をこなす時だけ  
だな。

「それから、来週からは校外特別実習期間が始まる。小難しい言い方  
をしているが、ようは臨海学校だな。勿論、忘れ物などは絶対にする  
なよ？ 僅か3日間だけとは言え、完全に学園から離れる訳だから  
な。自由時間であまり羽目を外しすぎないようにしないように」

臨海学校……！ 序盤での最大の難所……！

顔はいつも通りのポーカーフェイスをしているつもりだけど、心  
中はドキドキしっぱなしだ。

だって、この臨海学校は本当に大変な事のオンパレードなんだもん  
!!

あの『天災兎』がいきなりやって来て、これまたいきなり箒に専用  
機を渡す。

そんでもって、『福音』の暴走事件。

シリアスに次ぐシリアスのオンパレードじゃないか!!

私みたいな奴は絶対に役に立たないイベントばかりだ!!

(そう言えば……箒はあの人に専用機を強請ったのか?)

原作では本人に直接電話をして専用機を欲していたけど、ここでは  
どうなんだろう？

少なくとも、私を知る限りじゃ今の彼女は専用機を欲しがっている  
ようには見えない。

(仮に箒が何も言わなくても、無理矢理な理由をつけてやって来そう  
だよな……)

あの人物の破天荒さは私が最も苦手とする部類のものだ。

出来れば彼女には私の事はそこら辺の石ころと同じように思ってくれていると本当に助かる、パスカル。

「では、これでSHRを終了する。お前達、今日もちゃんと勉強に励めよ」

それは勿論。

勉強こそが学生の本分ですからね。

最後に一夏の後ろの席の子が山田先生の不在について質問をしていた。

あの人は原作と同じように、臨海学校の視察に出かけているとの事。

教師の仕事はなにも授業をするだけじゃないってことね。

あ、水着どうしよう。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

放課後になって、私はラウラとシャルロットと一緒に図書室で勉強をする事に。

他の皆も来たがっていたけど、それぞれに用事があつて来れなかった。

因みに、代表候補生ではない筈は部活で、一夏は普通に補習。

ここに来る途中でロランさんにも掴まりかけたけど、間一髪でダリルさんとフォルテさんの上級生コンビに助けられた。

今度、なにかお礼をしないと。

「ね……ねえ……弥生」

「ん……？」

ラウラが横で参考書を読んでいる時、シャルロットがそつと耳打ち

してきた。

「臨海学校つてことは、必然的に海に行くんだよね……？」

「そうな……るね……」

「そうなるよヤバくない？ 海つて事は水着になるんだよね？ 弥生はまだ体の事を話すつもりはないんでしょ？」

それね。確かに私にとって水着は最大級に懸念すべき事だ。

「大丈夫……」

「え……？」

「手……は打つてる……から……」

こんな事もあるうかと、私は密かにおじいちゃんに『ある物』を送ってもらおうように頼んであるのですよ。

アレさえあれば、海であっても無駄に肌を露出しなくても問題ナッシング。

「弥生がそう言うなら信じるけど……」

あ、念の為に言っとくけど、私は別にカナヅチじゃないからね？

インドア派な私でも、ちゃんと泳ぐことは出来るんだから。

「そ……それじゃあさ……」

「ん？」

急にモジモジし始めちゃって。今度はなんですかね？

「僕……さ、フランスから日本に来る時に水着とか持ってきてきてないんだよね……」

そりゃ、一度は男として潜入したんだし、女物の水着とか持って来れないよね。

で、この流れはもしかしてとは思うけど……まさか……？

「今度の日曜日に、僕と一緒に買い物に行かない？」

だと思っただよ。

「買う……のは……」

「勿論、水着だよ」

デスヨネ。

「ラウラ……も一緒……に来たがる……かも……」

「別に構わないよ。……あの夢が再現出来るし……」

なんか最後の方、声が小さくてよく聞こえなかったけど、なんて言ったの？

夢って聞こえたような気がするけど。

「ダメ……かな？」

そんな風に捨てられた子犬みたいな目で見られて『嫌です』とは言えないでしょ。

「私……でよけれ……ば……いいよ……」

「ホント!？」

ちよ……! 声大きい!

「あ……ゴメン」

「図書室……では静か……にね……?」

「うん……」

マナーはちゃんと守らないとね。

「と……とにかく、一緒に行くことはいいいんだよね?」

「ん……」

何の因果か、私は原作での一夏の代わりにシャルロットと一緒に買い物に行くことに。

でも、今回の場合はラウラも一緒だし、特に問題は起きない……よね? ね?

## ここが一番の勝負時

待ちに待った週末の日曜日。

今日は僕と弥生のデートの日！（ラウラも一緒についてくるけど）空は快晴……とはいかずに、今にも雨が降りそうな曇り空。

晴れた時はそこに暑いのに、太陽光が無いだけで心なしかひんやりとした空気が辺りを漂う。

でも！ そんな空気なんて、弥生と一緒にいればどこかに吹き飛ばさ！

僕は先に校門の所に行つて弥生の事を待っている。

弥生の私服つて見るのは初めてだから、凄く楽しみだよ！

「お待…たせ……」

来た！！

「おおお〜……」

弥生の姿を見て、僕は思わず身動きを止めてしまった。

襟や手首の部分に僅かなフリルがついた白い服を着ていて、胸からお腹の辺りに掛けて黒い紐がバツ印を描くように結ばれていて、赤と白と黒のオーバーチェック柄のロングスカート。

長い髪は黄色いリボンで纏められていて、歩く度に左右に揺れていた。

勿論、その手は腕袋で、足はタイツで隠れている。

結論。

冗談抜きで可愛いと思いました。

（弥生の全身から『お嬢様オーラ』が漂つてる気がする……）

一応、僕も立場上は『お嬢様』なのかもしれないけど、弥生には絶対に負ける……。

「あれ？」

隣に立って弥生と手を繋いでいるラウラ（不思議と嫉妬心は沸かなかった）も、珍しく私服を着ている。

前に聞いた話だと、学園の制服以外では祖国の軍服しか持つてなかったんじゃない？

「ラウラのその服は……」

「虚さん……に貰った……」

「虚さんって確か、本音のお姉さんで三年生……だよな？」

「ん」

そっか。

本人は恥ずかしそうにしているけど、僕はとても似合っていると思う。

服装自体は至ってシンプルで、首元に小さな黒いリボンがついた薄紅色のシャツと、フリルがついた膝下まである紺色のスカート。

ラウラのスカート姿自体が物珍しいから、凄く新鮮に見える。

「姫様……なんだかスースーします……」

「気持ち……は分かる……けど……これも慣れ……だ……よ……」

「りよ……了解しました……」

なんて言いつつも、モジモジしながら顔を赤くしているラウラ可愛すぎ。

「なんだか天候が不安定だから、早く行こうか？」

「うん」

「そうだな」

僕達は一路、モノレールに乗る為に移動をする。

私服の弥生と一緒に外を歩ける……。

それだけでもう僕は大満足だよ〜！

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

無事に時間に間に合ってモノレールに乗り込んだ僕達。



休みの日なのに席が空いているのは、今日の天気が悪いから？

モノレールの席は丁度良く三人ぐらいが乗れる大きさになっていた  
たので、僕達は一緒に並んで座った。

因みに、弥生が窓側、ラウラが真ん中、僕が通路側の順になっている。  
る。

「今日…は…ラウラ…の服…も買いたい…って思ってる…」

「本当ならば私一人ですべきことを、申し訳ございません…」

「気…にしない…で…。私…は好き…でしてる…だけ…」

微笑みながらラウラの頭を撫でる姿は、間違いなくお母さんだよ…  
弥生…。

「じゃあ、先にラウラの服を見に行く？」

「後…でもいい…よ…？」

「いいの？」

「ん。時間…はタップリ…とある…から…お昼…を食べた後…で  
ゆっくり…と見て回れ…ばいい…でしょ…？」

「そうだね。時間は有効活用しないと」

まずは当初の目的である水着を買いに行つて、それからお昼を食べ  
て、その後ラウラの服を見に行く…と。

向こうに着いてからの予定はこれで決まりだね。

「にしても、折角のお出かけなのに、この曇り空は無いよね…」

「梅雨…が明けた…とは言っても…まだま…だ天候…は不安定…だ  
か…ら…」

「日本は四季を楽しめる国とは聞いてはいますが、それはメリットば  
かりではないのですね」

それは僕も思った。

あくまでネットや本での情報だけど、日本は季節ごとに咲く花もあ  
るようで、特にサクラとか言う花がとても綺麗だったのをよく覚えて  
いる。

今はもう夏に差し掛かっているから、季節的にも見れないけど。

「念…には念…を…と言う…ことで…折り畳み傘…を持って来た  
…」

「流石は姫様。用意周到ですね」

そのセリフが出るって事は、自分は傘を持ってきてないって言うてるようなものだよ？

僕？ 僕は実際に雨が降ったらコンビニとかで買おうって思ってるけど。

「あ。そろそろ着くよ」

モノレールが僕達の目的地である駅前『レゾナンス』前に到着しようとしている。

天気……本当に大丈夫かな？

・  
・  
・  
・  
・  
・

駅前に到着し、三人並んで歩く弥生達の背後に、複数の人影が現れる。

ポニーテールにツインテール、ブロンドの髪に青い髪に袖がダボダボの服。

言わずもがな、箒に鈴にセシリアに簪に本音の五人組である。

「シャルロットめ……！ 一体いつの間に弥生と一緒に外出する約束なんぞしていたのだ……！」

「最近までなりを潜めていたから、完全に油断していましたわ……！」  
「でもね……このままで終わると思ったら大間違いなんだからね……！」

「まだまだ逆転のチャンスは残されている……！」

各々に決意を胸に燃え上がる少女達だったが、その中で一人だけ、本音がぽつりと言葉を零す。

「みんなく、ラウラウのことはいいの〜?」

当然の疑問に全員が本音の方を向いた。

「ラウラはく…その〜…:」

「不思議と嫉妬のような感情は沸きませんわね〜…:」

「なんつーか…:あの子の場合は弥生の事を本当の母親のように慕って  
るから…:」

「そう言った事からは完全に除外してる」

「そ〜なんだ〜」

知らない所で身の安全が保障されたラウラであった。

「でも、ここに楯無さんが来なかったのは意外だったわね」

「あの方も弥生さんをお慕いしていますからね」

「実際の所はどうなんだ?」

「お姉ちゃんは…:」

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「はい! まだまだ書類は山のように有りますからね!」

「なんでよお〜〜!? 今日日は日曜日なのにい〜〜!!」

「お嬢様が今までサボって溜め込んだからでしょうが! 弥生さんの  
力になりたいと思う事は素晴らしいですが、だからと言って生徒会の  
仕事をサボっていい理由にはなりません!!」

「本音ちゃんは出かけてるのにい〜〜!?!」

「あの子は最初から戦力外通告してますから」

「うわあああああん!! 弥生ちゃ〜ん! 簪ちゃ〜ん!!」

お願いだからお姉ちゃんを助けて〜〜!!」

.....

.....

.....

.....

.....

「……的な事になってる」

「「哀れな……」」

後輩に本気で同情される生徒会長。

ある意味でもう末期である。

「っーか、本音はそれでもいいわけ？ 戦力外通告って……」

「ん〜？ 私ならだいたいじよ〜ぶだよ〜？ 別に気にしてないし〜」

この時、全員が同じ事を思った。

((この子は鋼の精神の持ち主だ……))

もしかしたら、本当の意味でIS学園最強は本音かもしれない。

「ところで、さっきまで一緒にいたロランはどこに行った？」

「あそこで女の子をナンパしてる」

簪が指差した所で、ロランがお得意のイケメンスマイルで女子高生

をナンパしていた。

「ふふ……。君の美しさに私はもうクラクラだよ……」

「キャ〜♡」

傍から見ると、完全に馬鹿丸出しである。

「あのバカ!!」

見るに見かねた鈴が飛び出して、ロランの腕を掴んでから連れ戻してきた。

「おいおい、君も思いのほか強引な子だね」

「アンタがアホなだけでしょうが!! 弥生達を追いかけてる時に何をやってるのよ!!」

「私は幼少期からずっと『可愛い少女を見たらナンパをしたくなる病』に掛かっていて……」

「んなアホな病気があつてたまるか!! ほら、弥生達が行っちゃうでしょ!!」

「おっと。我が麗しの姫の可憐なる姿を見失つては、まさに一生の不覚。急いで追跡しなくては!」

「あたし達も行くわよ!」

いつの間にか鈴がパーティーのリーダー役に収まっていて、皆も彼女の指示に従っていた。

余談ではあるが、今回ダリルやフォルテは候補生としての仕事の都合で一緒に来れなかった。

しかし、思った以上にしっかりしている後輩達にロランの手綱を任せることにしたのだ。

彼女達の目の前で、弥生達三人は横断歩道を仲良く渡っていった。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「ここがレゾナンス……。本当に大きな場所なんだね」

「日本は色々な物資が一堂に会する国とは聞いてはいたが、ここはまさにそれを体現したかのようなモールだな……」

弥生曰く、この駅前のショッピングモール『レゾナンス』は、あらゆる種類のお店が全て並んでいて、食事においても和・洋・中の全てを完備。

果ては僕でもよく知っている海外の一流ブランドのお店もあるらしい。

交通の便においても問題が無く、バスや電車は勿論、タクシーや僕達が乗ってきたモノレールからもアクセスが可能。

弥生も昔はよく通っていたらしく、IS学園の生徒達も場所柄、よく利用しているとの事。

「まずは水着専門店に行くんでしょ？」

「ん……。で……。も……。歩きな……。がら……。ウインドウ……。シヨッピング……。をして……。もいい……。と思う……。」

それ最高！

なんだか本格的なデートみたいになってきたね！

なんだかテンション上がっちゃうよ！

案内図によれば、目的地である水着専門店は二階の真ん中辺りで、午後の目的地であるレディースシヨップは5〜6階にある模様。

実はこれも地味に楽しみだったり。

僕もラウラは可愛いんだから、もっと着飾ればいいと日頃から思っていたし。

移動ルートを確認した後に、僕達はゆっくりと時間を掛けてから様々なお店を見て回った。

ラウラにとっては見るもの全てが珍しく見えるようで、何を見ても目をキラキラさせていた。

そして、それを見ながら弥生が一つ一つ丁寧に説明をしていく。

そんな弥生も、所々で立ち止まったりしていたっけ。

本屋さんやゲームシヨップとかを見てジッと凝視していた。

そう言えば、弥生の部屋って矢鱈と色んなゲームや漫画とかが並べられていたな。

簪が言うには『弥生は私と同じ人種の人間』らしいけど、それってどういう意味なんだろう？

そうして歩いていく内に、僕達は最初の目的地である水着専門店へと到着した。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「あの三人……どうやら真っ直ぐと水着売り場へとは向かわないみたいね」

「少しでも弥生と共に過ごす時間を堪能しようと言う算段か……」

「羨ましいですわ……羨ましいですわ……羨ましいですわ……羨ましいですわ……羨ましいですわ……」

未だに後ろからコソコソと後を着けている謎の集団。

第三者目線からすれば、怪しいことこの上ない。

よく警察に話しかけられないものだ。

そんな箒達が話している間も弥生達は着々と歩みを進めていく。

その途中でゲームショップに立ち寄った際、箒の目がキラッと光った。

（あれは最新作の対戦格闘ゲーム……！ 確かオンライン対応だから、例えば部屋が離れていても弥生と一緒に楽しめる！ よし、後で絶対にあれを買おう。そして、同じ物を弥生にも勧めよう！）

こけてもめげないのが更識の血の成せる技か。

箒はこの状況で既に次の一手を考えていた。

「ふむ……。弥生は漫画やゲーム、所謂『オタク文化』が好きなのか……。これは新たな発見だ。早速メモをしなくては」

ロランはロランでちやっかりと弥生の好きなものをメモしていく。

彼女が手にしているメモ帳には『弥生の攻略本』と書かれていた。

「まるで、本当の家族みたいだね。もぐもぐ」

ここでもまだ余裕を見せる本音は、いつの間にか買ってきてきたおでんパンを口にしながらお茶を飲む。

その姿は完全に王者の風格。

「……なあ……皆……」

「どうしたの、箒？」

「私は今……とんでもない事実思い至ったのだが……」

「なによそれ？」

ゴクリと唾を一飲みして、箸はゆつくりと口を開ける。

「今回、弥生達は水着専門店に行くんだよな？」

「そう聞いてますわ」

「それがどうかしたの？」

「水着専門店に行くと言う事は……」

顔から汗を出しながら、その場にいる全員を戦慄させる一言を放った。

「弥生も……水着を試着するのではないか……？」

「……はっ!?!」

その瞬間、確かに全員の体に電撃が走った。

「や……弥生の水着……」

「や……やはり、弥生さんはスタイルがいいからビキニなどがお似合いですわ……♡」

「いやいや。ナイスバディだからこそ、セパレートな水着が映えるって事も……」

「パレオの隙間から除く生足とかセクシーだよね」

「フフ……フフフ……! 弥生の水着姿となれば、かの美の女神達でさえ嫉妬を覚えるに違いない……。これは是非とも写真に収め永久保存にしないで……!」

あろうことか、全員が揃って鼻血を垂れ流していた。あの本音ですらも。

更に言えば、ロランは自分の言った事を有言実行しようと、その手にデジカメを構えていた。

どこに持っていた、とか野暮なツツコみはご勘弁願いたい。

「ロラン……貴様……!」

「まさか、弥生の艶姿を写真に収めるつもり？」

「貴女と言う人は……!」

「ぐぬぬ……!」

「ロラっちゅ……!」

ロラン以外の全員の手がプルプルと震えだし、そして……

「……私達にも一枚ください!!!」



一斉に自分達の財布から千円札を取り出してロランに差し出した。だが、そこに謎の存在が姿を現す。

「私なのよ」

「……誰ですの？」

現れたのは一人の中年女性。

髪が無駄に長いのが特徴的だ。

「私が来たのよ。ここ。パリに」

「パリじゃないし……」

呆れる鈴を余所に、簪と箒は彼女の正体に気が付く。

「ふ……」

「<sup>フナバ</sup>船婆……」

「知っているのかい？」

「ま……まあ……」

【妖怪船婆】

昔は幕張メッセのワールドビジネスガーデン近辺に、最近ではこのレゾナンス付近でよく出没する低級妖怪。

よく『10円ちよーだい』と低額の金銭を要求してくる。

彼女の所望する金額を渡すと『どうもね。どうもね。どうもね』とジエット・ストリーム・アタックのように言い放ってくる。

「船婆。今の私達は貴様に構っている暇は無いだ」

「早く千葉県に帰りなよ」

「帰らない。ここ私の楽園」

「なんで日本語が片言なのよ」

鈴が思わずツツコむと、いきなり船婆が箒に寄ってきた。

「箒ちゃん。暫く会わない内に可愛くなったらわね〜」

「お前は親戚のおばちゃんか」

あまりにもしつこい船婆に痺れを切らせた鈴は、思わず大声を上げる。

「いい加減にどっか行きなさいよ！ アタシ達は今、忙しいのよ!!」

だがしかし、そんな事には微塵も怯まず、船婆は冷静に言葉を紡ぐ。

「あら、そこのお嬢さん」

「な…なになかな？ マダムフナバー」

「もしかしてそのデジカメ。水着専門店の試着室を覗いた上に写真に収めるつもり？ それって普通に犯罪よ？」

全員の心に言葉の剣が突き刺さる。

「その盗み取った写真を皆が寝静まった夜中に、こっそりとベッドの中で見て『ハァーハァー』しようとしてるわね？」

船婆の更なる追撃。

しかしここで怯まないのが彼女達。

起死回生の一手を打つ為に、箒は自分の財布から1000円玉を取り出して船婆に見せた。

「船婆」

「!!？」

それを見た途端、船婆の顔色が変わる。

箒は1000円玉を親指でピンと弾いて飛ばす。

「はううっ!!」

それをそのまま追いかけていく船婆。

地面に落ちてくるくると回転する1000円玉を見て興奮し、その動きが止まってから嬉しそうに両手で包み込む。

「ありがとね。ありがとね。ありがとね」

「1000円だと『どうもね』ではなくて『ありがとね』に変化するんだな」

「新発見だね」

1000円を貰って満足したのか、船婆は嬉しそうにその場から去っていく。

「箒ちゃんって美少女よね〜」

「わかったから、さっさと行け」

船婆の姿が遠くに消えてから、全員はほっと胸を撫で下ろした。

「どうやら……」

「行った……」

「ようですね……」

邪魔者が消えてから急いで弥生達の姿を探すと、既に彼女達は水着

専門店へと入る直前だった。

「し…しまった！」

「急いで後を追わなくては!!」

「行くわよ!!」

「撮影は任せたまえ！」

「弥生の水着…弥生の水着…」

「なんだかワクワクするね〜」

興奮を隠しきれないまま、少女達も弥生達を追って水着専門店の近くまで移動する。

だがしかし、ここで彼女達は『信賞必罰』と言う言葉の意味を身を持って思い知る事になる。

いつの世も、邪な考えが本当の意味で成功した試しは無いのだ。

悪い事は出来ないね」

レゾナンスに来て色々を見て回った僕達は、最初の目的地である水着専門店へと辿り着き、そこへ並んで入っていった。

「こ…これが全て水着なのか…?」

「そうだよ。ラウラはこんな場所に来るのは初めてなの?」

「あ…ああ…」

ラウラは軍の中で育ったって聞いてたけど、どうやら、弥生が前に言っていた通り、想像以上の世間知らずみたい。

一緒に暮らしている弥生の苦勞がしのばれるよ…。

お店には所狭しと色とりどりの水着が数多く並んでいて、とても賑やかなイメージがする。

店頭にも何体ものマネキンに水着を着させていたし、日本が先進国だってことを改めて実感させられる。

「あ…」

「ん?」

弥生が何かに気が付いたかのように声を出して立ち止まった。

「ラウラ…」

「いかがなされましたか? 姫様」

「水着……って持って…る…?」

「いえ。別に学園指定の水着で充分なのでは?」

そ…そうか! 私服すらも碌に持っていないラウラが、プライバシート用の水着なんて持つてる筈がない!

どうしてこの事に今まで気が付かなかったんだろう!

今の反応を見る限り、弥生もたった今思い出したみたい。

「どうやら、ラウラは他にも買う物があるみたいだね?」

「な…なに?」

「水着……買お?」

「ひ…姫様がそう言われるのであれば…」

ほんと、弥生の言う事なら何でも聞いちゃうんだね。

このままいくと、本当に親子になっちゃったりして。

(流石にそれは無いか)

幾ら絵になるとは言え、この二人は同じ年だもんね。

逆を言うと、同級生同士なのに親子に見える方が凄いなだけ。

「まずは弥生の水着を見繕おうか？」

「わ…私…？」

「当然。ここまで来た以上、ちゃんと弥生にも水着を購入して貰うんだからね？」

「で…でも…私…は…」

「大丈夫。そこに見えるけど、ここの更衣室は足元までちゃんと隠れているから、仮に試着をしてもカーテンさえ開けなければ問題無いよ」

「う…う…う…」

本当は、僕が弥生の水着姿を見てみたいだけなんだけどね。

恥ずかしそうにしている弥生も可愛くて眼福です。

「そんなわけだから、店内を見て回りながら弥生とラウラに似合いそうな水着を探していこう」

「シャルロット…は…？」

「僕もちゃんと探すよ？ でも、優先順位が高いのは二人なの」

「は…はあ…」

全く同じリアクション。

本当に血の繋がりとか無いんだよね？

・  
・  
・  
・  
・

「もう着たく？」

「ま……まだ……」

あれから10分ぐらいお店を探索し、途中で出くわした店員さんに二人に似合いそうな水着をチョイスして貰って、今は弥生が試着室にて水着を試しに着てみる最中。

勿論、念の為に店員さんには余所に行つて貰い、仕切りであるカーテンはしっかりと閉じてある。

これならなんの問題も無い筈！

「弥生の次はラウラだからね？」

「な……何?! わ……私は結構だ！」

「え〜?」

ラウラが手に持っているのは、少し小さめの白いフリルがついた黒いビキニ。

ゴスロリっぽくて、銀髪のラウラにはとてもよく似合うと思う。

流石は専門店で働いている店員さん……見事なチョイスだ！

「き……着まし……た……」

この時を待ってました!!

「み……見てもいい!?!」

「は……恥ずかしい……から……それ……は……勘……弁……」

ああ〜！ そんな事を言われちゃうと、増々見てみたくなっちゃうよ〜！

「ちよつとだけ！ ちよつとだけでいいから！」

「……………少しだ……けな……ら……」

「やった！」

僕はカーテンの端の方にほんの少しだけ隙間を作つてから、そこに顔だけを入れて中を覗いた。

因みに、ラウラには『弥生は恥ずかしがり屋だから、見ないようにしてあげようね』と予め言っておいた。

少しは渋るかと思つたけど、彼女は快く言葉を受け入れてくれた。

どうやら、普段の生活でも細心の注意を払いながらラウラに肌を見せないようにしているみたい。

僕にも弥生と同じぐらいの注意力と警戒心があれば、あんな恥ずか

しいバレ方だけはしなかったんだろうな……。。

「ど……どれどれ……」

興奮を抑えられないまま、僕は試着室の中にいる弥生の姿を見る。

「……………」

そこには……『女神』がいた。

一見すると唯の白いビキニのように見えるけど、ほんのりと薄いピンク色になっていて、胸の真ん中辺りにある結び目の部分の小さくも可愛らしいリボンがアクセントになっている。

幾ら水着であるとは言え、可能な限りは肌を出したくないと言う思いの表れなのか、腰から足元に掛けて真っ赤なハイビスカスが描かれたパレオをつけていて、そこから見える脚線美が何とも言えない色気を醸し出している。

僅かに見える足の付け根の部分から察するに、この水着は思っているよりも角度が際どくなっているみたい。

体中に傷があるとか無いとか関係無しに、僕は弥生の美しい水着姿に目を奪われた。

(胸の谷間とか、パレオから僅かに見える太腿とか、エロすぎるよ弥生!!!)

心臓はさつきからバクバクで、僕は今すぐにでも弥生に抱き着いてキスをしたかった衝動に駆られたけど、必死に自分の欲望を抑え込んだ。

もしかしたら、今までの人生で一番頑張った瞬間かもしれない。

「は……鼻血……」

「はっ!!」

頭では抑え込んでいるつもりでも、鼻からは『愛』が溢れ出てしまっただみだ。

どんなに頑張っても、本能には勝てないって事か……。

「凄くよく似合ってる！ とつても可愛いよ！ 弥生！」

「お……お世辞……はいい……です……」

お世辞なんかじゃないよ〜！

僕の真っ赤な『愛』がその証拠だよ！

「も……う……脱ぎた……い……」

「そ…そうだね！ ゆっくり着替えていいからね！」

急いで試着室から顔を戻して、ティッシュをくるんでから鼻に詰める。

「ど…どうした？ 何があった？」

「な…なんでもないよ」

「そ…そうか…？」

ちゃんと僕の脳内フォルダに保存はしておいたから、帰ってからも繰り返し使用可能だ。

もしかしたら、夢にも出てきてくれるかもしれないな〜♡

「む？ お前達、こんな所で何をしている？」

「え？」

なにやら聞いた事のある声が聞こえたから振り向くと、そこにはいつもと同じスーツ姿の織斑先生と、それに随伴する山田先生がいた。

「もしか、水着を買いに来たのか？」

「はい」

「少しだけ会話が聞こえたが、試着室には板g…弥生もいるのか？」

「そうですけど…」

あれ？ 織斑先生って弥生の事を名前で呼んだりしてたっけ？

「でも、よく板垣さんが水着をかう事をOKしてくれましたね〜」

「ラウラの水着をかうなら、弥生も買わなくちゃ…って言ったたら、渋々ながらも了承してくれました」

「ああ〜…」

この答えで納得しちゃう辺り、二人も弥生とラウラが親子みたいに見えるんだろうな…。

「……………デュノア」

「はい？」

織斑先生が僕に耳打ちしてきた。

「弥生の水着姿はどうだった？」

「控えめに言っても…最高です」

「そうか…」

織斑先生のこんなにも嬉しそうな顔、始めて見た。



「弥生は今、中で着替え中か？」

「そうです」

「ならば……」

徐に織斑先生が試着室に近づいて行って、小さな声で呟いた。

「あく……弥生。聞こえるか？」

「お……織斑先生……!？」

「別に返事はしなくてもいい。ただ聞いてくれさえすればな」

何を話すつもりなんだろう？

「着替え終わったら、しゃがみながら下の方からそつとカーテンをし  
たまま出てきてほしい」

「??？」

は……はあ？ なに？ どういうこと？

「教官。それは一体……?」

「少し……な。真耶、アイツ等はまだいるか？」

「はい。バツチリと」

あいつ等つて……まさか皆も来ているの!? ど……どこに!?

「あのバカ共には大人として灸を据えてやらねばな。……お願いしま  
す」

「任せておいて。千冬ちゃん」

つて! いつの間にか見知らぬおばさんが足元に座つてたんだけ  
ど!?

この人は誰なのさ!?

その後、弥生は織斑先生に言われた通りに下からそつと水着を持っ  
たまま出てきた。

本人も本気で混乱していたけど。

・  
・  
・  
・  
・  
・

「くっ……! ここからではよく見えんぞ!」

「先程、確かに弥生さんが水着らしき物を持って試着室に入つていくのを目撃したと言うのに……!」

「でも、下手に近づいたらラウラとかに勘付かれる可能性が高いわよ?」

「それは分かつてる……!」

「どくしよくか?」

箒達ストーカーヒロインズは、店の前まで来てはいたが、そこから中に入ることが出来ずに立ち往生を強いられていた。

ラウラと言うある意味で最強のボディガードがいる以上、安易に接近する事は死を意味する。

彼女達は今、選択を迫られていた。

「あ! なんか千冬さん達も来たわよ!」

「なんだと!」

ここにきてまさかの増援。

これで弥生の（水着姿を守る）防衛網が更に強化された。

「なんか話してるけど、よく聞こえない……!」

千冬と真耶とシャルロットとラウラが何か話し込んでいるが、箒達の位置からでは喧騒に紛れてよく聞きとることが出来ない。

「フツ……」

「ロラン?」

「虎穴に入らずんば虎兇を得ず……とはよく言ったものだ」

ロランのいきなりの発言に、鈴は嫌な予感が背中に走る。

「私はもう我慢の限界だ! 姫の……弥生の水着姿をこの目で拝まなければ、一生後悔する!!」

「ちよ……ちよっ!」

デジカメを構えた状態でロランが店の中へと全力疾走する。

それを見て、慌てて追いかける箒達であったが、そこで丁度、千冬

達が更衣室の傍から離れていった。

「チャンス！ この機を逃しはしない!!」

すかさずロランはシャッターポーズになって、その背後に他の面々もズラツと並ぶ。

その時だった。唐突に試着室のカーテンが開かれた。

そして、彼女達は試着室の中の光景を見て戦慄する事となる。

「「「「ああああああつ!?!」「「「「」

試着室の中にいたのは……

「うつぶん♡」

「「「「ふ…船婆……」「「「「」

先程まで弥生が試着していた水着の色違いの黄色いビキニ（パレオ無し）を着てセクシーポーズをしている船婆の姿だった。

「ぐはああああああああつ!?!」

「目が……目がああああああああああああつ!?!」

「あ……ああああ……」

「……………」

「ブラックジャック先生~~~~!! お金はあるんです~~~~!!」

どうか私の記憶を消してください~~~~!! お金はあるの~~~~

~~~~!!」

「……………死のう」

箒と鈴は目を押えながら倒れ、セシリアは白目を剥き気絶。

ロランに至っては、デジカメが完全に壊れ、本人は真っ白になって

石化していた。

簪はいる筈のない闇医者に記憶の除去を懇願し、本音は心の底から絶望し、死を望んだ。

これこそが千冬の制裁。

後からコソコソとストーカー紛いの事をしていた彼女達に対する

『お灸』だった。

その精神的ダメージは計り知れないが。

余談だが、船婆はその水着をちゃんと買っていったらしい。

・  
・  
・  
・  
・  
・

後ろから聞こえてきた箒達の断末魔を聞きながら、僕達は別のコーナーに足を運んできた。

「これであいつ等も少しは凝りるだろう」

「なんて残酷な……」

あの船婆つて人には申し訳ないけど、僕もあの場にいたら精神的に死んでたかもしれない……。

「さて、アイツ等が倒れている間に私達も選ぶか」

「ですね」

織斑先生達の水着姿か……。

二人共、揃ってスタイル抜群だから、何を着ても似合いそうだけど。

「ふむ……」

織斑先生はすぐに二着にまで絞ったみたいで、白と黒のビキニを手にとって悩んでいる様子だった。

「弥生」

「はい……?」

「お前はどつちがいいと思う?」

「え……!?!」

いきなりのご指名に驚く弥生。

でも、僕も弥生がどつちを選ぶか知りたいかも。

今日の服装からも分かる通り、弥生ってファッションセンスはあると思うから。

「え……つと……」

悩んでる悩んでる。

弥生はどつちを選ぶのかな?

「黒……がいい……と思います……」

「何故だ？」

「織斑先生……は普段……から黒いスーツ……を着ている……から……そう言うイメージ……が定着し……ている……って言うか……」

「成る程な」

それって僕も分かるかも。

白でも似合いそうではあるけれど、僕もここは黒がいいと思うな。

「分かった。ならば黒いほうにしよう」

多分だけど、これって弥生がどっちを選んでも関係無かつたんだろ  
うな……。

織斑先生も弥生の事を好きみたいだし……。

それから、僕と山田先生の水着も決めてからレジへと向かった。

「二人とも……ここ……は私……が払う……よ……」

「えっ!? 流石にそれは悪いよー!」

「そうです! これぐらいの値段ならば全く問題ありません!」

自分が選んだ水着ぐらいは自分で払わないと、僕だつてそれぐらい  
のお金は持つてるんだよ?

「大丈夫……だよ。私……が払いたい……の」

そう言つて弥生が財布から出したのは、一枚の黒いカードだった。

「そ……それは!?!」

噂に聞く超がつくほどのお金持ちだけが持つ事を許された最高の  
クレジットカードである『ブラックカード』!?

それがまさか、同級生の財布の中から出てくるなんて思わなかつた  
よ!?!

「先生達……のも払い……ましょう……か……?」

「い……いや、流石に生徒に奢つて貰うのは……」

「そ……そうですよ!」

「はあ……」

あれ? ……なんか残念そうにしてる?

結局、僕とラウラは弥生の押しに負けて、彼女に水着を奢つて貰う  
事になった。

ある程度の予想はしてたけど、弥生ってどれだけお金持ちなのさ  
……。

・  
・  
・  
・  
・  
・

弥生達が水着を買っていて、箒達が船婆から壮絶な精神攻撃を受けている頃、今まで出番が無かった一夏はと言うと……？

「9997……9998……9999……10000！」

IS学園内にある誰もいない剣道場にて、一人で剣道着を着て竹刀の素振りをしていた。

(もう後悔はしたくない!! 強くなるんだ……俺は!!)

彼の前には確かな決意と覚悟が満ちていた。

汗だくになりながら一心不乱に竹刀を振り続ける彼の姿を見れば、弥生も少しは見直すかもしれない。

(もう二度と弥生の悲しむ顔を見たくない! もう二度と弥生を危ない目にあわせたりはしない!! 俺は……俺は!!)

歯を食いしばりながら竹刀を握る一夏の手の皮は破れていて、そこから血が滲んでいた。

「俺が!! 弥生の事を絶対に守ってみせる!!」

もうそこには、『皆を守る』と妄言する少年はおらず、愛する少女の為に全てを捧げると誓った一人の『漢』がいた。

一夏はいい意味で自分の殻を破ってみせた。

彼はもう二度と、分不相応な事は言わないだろう。

この瞬間、織斑一夏の中で最優先に守護すべき存在が入れ替わった。

## 今度こそそのんびりと

水着専門店にて水着を選んでいる最中に箒達が船婆さんに返り討ちに遭ったり、途中で織斑先生達がやってきたり、弥生の財布からブックカードが飛び出したりと、驚きの連続だったけど、僕は無事に当初の目的である水着をゲットすることが出来た。

水着を買ってから織斑先生達とは別れ、箒達はまだあそこで意気消沈しながら真っ白に染まっている。

先生達は放っておけて言っただけど、本当に大丈夫かな？

「もぐもぐもぐ……」

「なんと……！ このスピードは尋常ではない……！」

そんな僕は今、昼食を食べる為にレゾナンス内にあるお食事処『衛宮』に来ていた。

僕は箸の使い方の練習も兼ねて焼き魚定食を、ラウラはオムライスを注文していた。

そして、肝心の弥生はと言うと……

「あの『超大盛りビビンバ』をこうも簡単に食べていくとは……！」

「ねえ……見た感じ、あの子って私達と同年代よね？ あの細身の体の何処にあれだけ入る訳？」

「私に聞かれても知らん！」

厨房にいる褐色肌で白髪のお兄さんと、赤い服を着た黒髪のサイドテールの女の子が何か揉めてるけど、そんな事にはお構いなしと言わんばかりに弥生は箸を進めていく。

「これほど気持ちのいい食べっぷりを見たのは初めてです！ 私も負けてはいられません！ 土郎！ お代わりをお願いします！」

「まだ食うのか!?!」

って言うか、弥生の隣で食べている金髪くせっ毛の女の子も同じぐらいの量のカレーをバクバクと平らげてるんですけど!?!

あれ？ 僕がおかしいのかな？ 今時の女の子ってあれぐらいをペロリと食べるのが当たり前なの？

そんな事は無いよね？ だって、厨房にいるもう一人の男の子だっ





・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

人生初めての別の意味で胃が痛むお昼ご飯を食べてから、僕達は午後からの目的地であるファッションショップに足を運んでいた。

「凄いね……見渡す限りのブランド物の服が並んでるよ……」

レゾナンス……と言うよりは、日本で揃わない物はないんじゃないかと思わせる程に、この店に並べられている商品は凄かった。

「これが経済大国日本……！」

「僕と弥生で決めて行くか？」

「ん」

僕の言葉に頷きながら、弥生はその手に持っていたジャンボクレープの最後の一口を口に入れた。

さつきあれだけ食べたのに、どうしてまだ入るのさ……。

本人曰く『食後のデザート』らしいけど……。

「わ……私に似合う服など本当にあるのだろうか……」

「大丈夫」

「姫様？」

「ラウラ……は可愛い……から……どんな服……もきつと似合う……よ……」

「!!？」

あらら。ラウラの顔が真っ赤になっちゃった。

無理も無いけどね。僕だって、弥生にあんなセリフを言われた同じように照れちゃうよ。

弥生がラウラの手を引くようにして、お店の中へと入っていくことに。

「見て……あの子達……」

「あの金髪の子、かなりの美少女ね……」

「銀髪の小つちやい子、すつごく可愛い♡」

「その子と手を繋いでる子も相当な美人ね……。顔もいい、スタイルもいい。何より……」

「全身から溢れ出している『お母さんオーラ』は、それだけで彼女が並の美少女じゃないって証明しているわ……」

「なんか僕達……注目されてる？」

でもそっか。IS学園から来る人間が多いとは言え、まだまだ日本人にとって海外の人間は珍しい存在なんだろう。

逆の立場なら、僕だって似たようなリアクションをしたらろうし。彼女達の気持ちはとてもよく分かる。

「どれがいいかな？」

「う〜ん……」

弥生と一緒にあって、ラウラに似合いそうな服を探す。

ラウラは普段からスカートを全く穿かないから、ここはスカート系を中心に探す事にしよう。

今回も思ったけど、ラウラは彼女が思っている以上にスカートがよく似合う。

しかも、いつもはズボンばかりを穿いているから、そのギャップでインパクトも絶大だ。

「これ」

僕と弥生が悩んだ末に決めたのは、似たようなデザインのワンピースで、違いがあるとすれば色だけだった。

僕が選んだのが白いワンピースで、弥生は黒いワンピース。

きつと、専用機の色で決めたんだろう。

「ラ〜ウラ♡」

「試着……お願……い……」

「うぐ……！ 本当ならば断りたいが、姫様とシャルロットの頼みとあれば断れない……」

あっけなく観念したラウラは、僕達がそれぞれに選んだワンピースを持って試着室へと入っていった。

「あ……あの、お客様？」

「ん？」

いつの間にか店員さんが近くまで来ていて、数着の服を手持っていた。

「お二人にはこれ等なんかがよくお似合いかと」

「どうやら、僕達に商品を見繕ってきてくれたようだ。」

「後では非とも試着をしてみてください。きっとお似合いになりますよー！」

「あ…ありがとうございます」

心なしに笑顔が眩しい気が……。

「き…着たぞ……」

「ほんと!? 見せて見せてー！」

試着室のカーテンが開かれると、そこには僕が選んだ白いワンピースを着たラウラが羞恥心に悶えながらそこに立っていた。

「「可愛いー！」」

もう、お世辞とか抜きで本当に可愛いよ！

僕の見立てに間違いは無かったね！

「どう？」

「悪くは無い……とは思いが……」

「思うが？」

「制服以外の白い服と言うのは……あまり慣れないな……」

うくん……僕はいいと思うんだけど……。

けど、本人の好みを無視するのは一番いけない事だし……。

「今度は姫様が選んだ方を着てみる……」

素早くカーテンを閉めると、中からゴソゴソと着替える音が聞こえた。

「白も似合うと思ったんだけどなく……」

「着慣れている色と言うのもありますからね」

それもそっか。

普段から暗い色の服を着ている人が、いきなり明るい色の服を着たら違和感しかないもんね。

「弥生には敵わないなあ……」

弥生はラウラとルームメイトってだけじゃなくて、ちゃんとラウラの事を心から分かっている。

なんとなくだけど、そんな気がする。

「よ……よし……完了だ……！」

着替え終わったラウラが再びカーテンを開ける。

「「おお……！」」

白が黒に変わったただけなのに、凄く違和感なしに似合っている。

可愛いのはそのままに、ラウラの白い肌と銀色の髪、黒いワンピースが見事なコントラストを描いていた。

「ラウラ自身はどうなの？」

「う……うむ……。矢張り、白い服よりは黒い服の方がいいな……。それに……」

スカートの裾を掴みながら、ラウラが可愛らしくはにかんだ。

「姫様が選んでくれた服……だしな……」

だよね。

弥生に言ったら恥ずかしがるだろうけど、ここはこの言葉が相応しいと思う。

「母は強し……か」

「え？」

こりや、最初から僕よりも弥生が選んだ方がよかったかもしれない。

その代わりに、僕が弥生のコーディネートをするけどね！

「それじゃあ、最初の一着はそれにして、次のを探そうか？」

「な……なんだと!? これで終わりじゃないのか!？」

「勿論。たった一着だけじゃ足りないでしょ？」

「そ……それは……」

僕は弥生とラウラを引き連れて、お店の中をぐるりと回りながら、色々な服を探していった。

ラウラの服は弥生に任せて、僕は僕で弥生に似合いそうな服探し。

弥生もスタイルがいいから、どんな服がいいか迷っちゃうよ。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「沢山買ったね〜」

「う…うん……」

お店を出ると、弥生とラウラの両手には大きな紙袋が握られていた。

その中身は当然、二人の為に買った服類だ。

「けど、本当に良かったの？ またお金を出して貰って……」

「気にし…ない…で…。こういう機…会…でもない…と…使…う…事…  
…つ…て…な…い…か…ら…」

そりやそうだろうね。

普通、一介の女子高生の財布にブラックカードなんて入っているわけないんだし。

「にしても、来た時以上に雲行きが怪しくなってきたね」

「今にも雨が降りそうな天気だな」

なんて言った矢先に、ポツポツと雨が降ってきてしまった。

「本当…に降…つ…て…き…た…ね…」

こんな時は、そこら辺のコンビニで安い傘でも買って……。

「傘…を出…す…ね…」

弥生が手持ちのカバンの中から小さく折りたたまれた紺色の傘を取り出して、それをバサッ！と開いた。

「つて、大きい!？」

なに、この巨大な傘は!？」

僕達三人が余裕で入れるぐらいの大きさがあるんですけど!？」

「行…く…」

「う…うん」

「し…失礼します」

傘の中に入って歩き出すと、雨を弾く音が上から聞こえてくる。多少の隙間を開いて歩いているけど、それでも全く濡れない。

日本って、傘一つとつてもこんなにも凄いんだな…。

(確かに驚きはしたけど、弥生と相合傘が出来たからいいや♡)

雨が降ると本当なら嫌な気分になりがちだけど、今日ばかりは雨に感謝だね。

こんな事、これから先あるかどうか分からないし。

そのまま僕達は一緒に傘に入ったまま、モノレールの駅まで歩いて行った。

こんなにも楽しい雨の日は、生まれて初めてだった。

・  
・  
・  
・  
・

地球のどこかにあるとある天災の移動式ラボ。

そこでは、束が一体のISの最終調整を行っていた。

「束さま。少しご休憩をなさってはいかがですか？」

「お！ ありがとね〜！ クーちゃん！」

クロエがお盆に乗せて持って来たコーヒーをグイッと一気飲み。

「これが妹君にお渡しすると言う機体…ですか？」

「そうだよ。箒ちゃんも欲しがらないと思うけど、これはどうしても必要な事なんだよね〜」

眼前にあるISの真紅の装甲を撫でるように触り、腕を組む。

「いっくんも決意を固めて特訓を始めたようだし、着々と『因子』は揃いつつある」

「そして、東さまの夢を叶える為の最後の1ピースが……」

「この『紅椿』と箒ちゃんだよ」

近くにある椅子にドカツと座ってから、足を投げ出す。

「全ての条件と準備が整った時、やっちゃんが私の夢を叶えてくれる」  
「弥生様は了承してくれるでしょうか？」

「この場合、やっちゃんの意味は関係無いよ。その時が来れば、自動的に『発生』するから」

ふとモニターを眺めると、そこにはモノレールの席に座ってから頭を傾けて眠っている弥生の姿があった。

彼女の膝に頭を乗せるようにして、ラウラも静かに眠っている。

「……………」

「羨ましい？ 自分の『妹』がやっちゃんと仲良くしている」

「……………そんな事はありません」

そう言うてはいるが、クロエの口はとんがっている。

「ふふふ…………。大丈夫だよ、クーちゃん。その内、嫌でもやっちゃんに会う日が来るんだから。その時になってから思う存分やっちゃんに甘えればいいじゃない」

「そう上手くいくといいのですが…………」

東がその辺に適当に置いてあるポテチの袋に手を伸ばし、一枚掴んで口に入れる。

「さて…………と！ もう一頑張りしますかね〜っと」

「では、私はお夕飯の準備をしておきます」

「お願いね〜」

奥の部屋に消えていったクロエを見届けてから、東は作業を再開した。

鼻歌交じりに手を動かす彼女の姿は、どこまでもものんびりとしたものだったが、その瞳の奥にはクロエすらも気が付かなかった『狂気』が見え隠れしていた。

篠ノ之束…………彼女は一体どこへ向かおうとしているのか…………。

それは、本人しか知らない…………。





## 始まりました、臨海学校

僅かに揺れる座席に身を委ねながら、私は窓の外に映る景色を眺める。

太陽光が眩しく、どこまでも澄みきった青空。

「いや〜！ 最高の臨海学校日和だね〜！」

少し後ろに座っている子が言った通り、今日は例の臨海学校の初日だ。

私の座っている席は右側の一番前で、通路を挟んだ反対側には先生達が座っていた。

それでもって、私と一緒に座っている子は……

「むぎゅ〜……」

私の癒しの一人である本音なんだけど、なんでかさつきからずっと私の胸に顔を埋めながら抱き着いてるんですよね……。

「な……んで……抱き着……くの……？」

「やよつち分の補給」

「は？」

いきなり意味不明な成分を生み出さないでほしい。

『『やよつち分』』とは、やよつちの香りから分泌される癒し効果を持った成分で、これを毎日摂取することで私はとってもいい気持ちになれるのです」

説明しなくてもいいから。

「私も弥生さん分を補給したいですわ……」

「私もだ……。あのショッピングモールでの一件以降、時々、あの悪夢が脳裏に蘇ってくるからな……」

ショッピングモールでの一件って……船婆とか言う人の事？

そんなに凄まじい衝撃だったんだ……。

「いいなあ〜……本音。僕も弥生に……♡」

私の後ろの席にはシャルロットとラウラが並んで座っている。

その隣に箒とセシリアが位置している。

因みに一夏はと言うと……。

「ぐぐ……すく……」

一番後ろの右端で爆睡中。

あいつの周囲にいる皆も、流石に起こすのは忍びないと思ったのか、声のポリウムを落としている。

「なあ……真耶」

「なんですか？ 織斑先生」

「教師が生徒に抱き着くのって絵的にアリか？」

「……時と場合によると思いますけど」

「そうか……」

なんかその教師二人がこそこそと話してるけど、気にしたら負けの精神で無視することに。

「あゝ！ 海だあゝ!!」

誰かが叫んだ事で寝ている一夏以外の皆が窓に注目する。

そこには、透き通った綺麗な海が一面に広がっていた。

「日本の海って本当に綺麗だよね」

「全くだな。見ているだけで心が洗われるようだ」

そういえば、ラウラはこれまでに娯楽目的で海に行ったことが一度も無いんだとか。

流石に海自体には何回か行った経験はあるけど、そのいずれもが訓練などが目的だったらしい。

これを機に、海の楽しさを知ってくれると嬉しいな。

「そう言えば、弥生さんはとても大きなお荷物を持っていらしてましたわね？」

「私も見たぞ。あれは一体何なんだ？」

「秘密……だよ♡」

誤魔化すために人差し指を口に当てながらの笑顔攻撃。

これが想像以上に効果絶大だった。

「そ…そうですわね♡ ここで全てを聞いては後の楽しみが無くなりますものね♡」

「セシリアの言う通りだな♡」

「僕もそう思うよ♡」

箒とセシリアとシャルロットがほんわかとした顔でこつちを見つめ、ラウラは顔を真っ赤にし、私に抱き着いている本音は……

「やよつち」

「な……に……?」

「キスしてもいい?」

「ダメです」

鼻血を出しながら超真剣な顔でキスを迫ってきた。

勿論、速攻で断ったけど。

「ラウラは弥生の荷物の事は知ってるの?」

「残念だが、私もよくは知らない。姫様は朝早くから準備を済ませていたからな」

別に知られても問題は無いんだけど、ちよつと皆を驚かせたいと言う悪戯心が芽生えまして。

アレを見た時の皆のリアクションが本当に楽しみだ。

「因みに弥生は泳げるのか?」

「……………人並み程度……………には……………」

基本的に運動が苦手な私は、当然のように水泳もあまり得意じゃない。い。

流石にカナツチと言う訳じゃないけど、早く泳ぐとか長時間泳ぐとか絶対に無理。

泳法だってクロールしか出来ないし。

「そ……そうか。もしよかったら、私が泳ぎ方を教えて……………」

「もうすぐ目的地に到着する。ちゃんと椅子に座っているように」

箒が全てを言い終える前に、それを遮るかのように織斑先生が言葉を被せてきた。

「お……織斑先生……………」

「抜け駆けは許さんぞ……………」

……………なんでこの二人は睨み合っているの?

そういうしている内に、バスは宿泊予定地である旅館に到着した。

……………

・  
・  
・  
・  
・

複数のバスから生徒達が一斉に降りてきて、旅館の前に綺麗に整列する。

私達の前には旅館の従業員の人達が数名と、真ん中に美人女将さんらしき人が立っていた。

「ここが本日より3日間の間お世話にある『花月荘』だ。お前達、従業員の方々にご迷惑をおかけしないように心掛けるよ」

「「「よろしくおねがいします!!」」」

あれ……? 花月荘? なんかどこかで聞き覚えがあるような気が……。

「いえいえ、こちらこそよろしくお願ひしますね。今年の一年生も元気があつて羨ましい限りです」

今年も……つて事は、IS学園は毎年、臨海学校でこの花月荘を利用してゐるのか。

つまり、常連さんつてことになるんだな。

「それで、そこにゐる男の子が例の……?」

「はい。ほら、前に出て挨拶をしろ」

「ご指名を受けて、ちよつと気恥ずかしそうにしながら一夏が列の前に出てきた。」

「え……えつと、織斑一夏です。よろしくお願ひします」

「清州景子と申します。こちらこそ、よろしくお願ひしますね」

清州景子……。

この名前もどこかで聞いた事があるような……。

「今年は男子が一人ゐるせいで浴場分けに面倒を掛けさせてしまい、申し訳ありません」

「お気になさらないでください。これもお仕事ですから」

割り切ってるなく。

正に『大人の女性』って感じ。

普通に憧れるわ。

「ところで、こちらに『板垣』と言う子がいると聞いているのですが……」

「板垣……と言うと、私のクラスの板垣弥生ぐらいますが……」

「弥生ちゃん！ 本当にIS学園に入学していたのね！」

え？ え？ なんで女将さんが私の事を知ってるの？

「あゝ……板垣？ 知り合いか？」

「い……え……」

完全にこれが初対面なんですけど。

「あ……ごめんなさい。つい燥いじやって。別に彼女と私がお知り合  
いって訳じゃなくて、その子のおじいさまと私が顔見知りなんです」

お……おじいちゃんとその人が!?

あゝ……なんか段々と思いだしてきたかも……。

「そ……そうなんですか？」

「はい。よく弥生ちゃんのおじいさまとそのお友達がここに宿泊をし  
に来てくれて、完全に常連客になってるんですよ。よく義娘さんのこ  
ともお話してください……」

そう言えば、前におじいちゃんが酔った勢いでとある高級旅館に泊  
まった時の事を嬉しそうに話していた記憶が……。

その時に『花月荘』と『清州景子』って単語を聞いたんだ……。

「お……おじいちゃん……と皆……がお世話……になって……ます……」

「これはこれはご丁寧に。弥生ちゃんも、この3日間の間、楽しんで  
いって頂戴ね」

「ありがと……う……ご……います……」

意外な場所で意外な繋がりを発見してしまった……。

世の中、どこで何が起こるのか分からないな。

その後、私達は従業員の人達に案内される形で各部屋へと案内され  
る事に。

海に行く場合は別館にある更衣室にて着替える事が可能らしい。

一日目は基本的に自由時間。

殆どの生徒が海へと直行するだろうが、その前に私は荷物を持っていききたいので、まずはおじいちゃんも気に入ったって言うお部屋を見させてもらいましょうか。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

私と同じ部屋なのはラウラと本音と箒の三人。

ラウラはいつも通りのリアクションだったけど、本音と箒はガッツポーズをして喜んでいた。

そこまで嬉しいか？ と呆れてしまったけど、今更だと思つてスルーした。

同じ部屋になれなかったセシリアと簪と鈴はとても悔しそうにしていたけど、シャルロットだけは『仕方が無いよね』と言つてサツパリとした反応だった。

これが普通なんだよね、多分。

因みに、ロランさんはまたまた爽やかな笑顔を振りまきながら私に抱き着こうと試みたが、寸前の所で三組の担任の先生が来て部屋まで連行。

床を引きずられながらもこちらに手を振る姿は、なんとも滑稽だった。

「おおく……」

「なんと美しい景色だ……」

「これは本当に凄いな〜」

皆が感動するのも無理は無い。

窓からは見事なオーシャンビューが広がり、部屋の内装も隅から隅

まで綺麗に整っていた。

「ここは間違いなく高級旅館に属する場所のようだ。

「弥生の父上が常連になるのも頷けるな……」

「全くだ……。ここならば、何回も来たくなってしまおうだろう」

「お風呂広〜い！ あ、テレビも大きい〜！」

箒とラウラは純粹に部屋と窓からの景色に感動しているけど、本音だけは早々に部屋の散策をし始めた。

あまり変な所を触っちゃ駄目だからね？ 特に旅館特有の有料チャンネルとか。

「ところで、一夏の部屋はどこになったんだ？」

「それなら〜、さつき織斑先生と話してたよ〜」

「どこ…になる…の…:…?」

「ん〜とね〜:織斑先生と同じ部屋だつて〜」

あ、そこは原作と同じなのね。

「最初は個室にするつもりだったらしいけど、それだと就寝時間を無視した子達がやって来る可能性があるからつて言つてたよ」

「成る程な。アイツは未だに女子達に持て囃されているからな」

唯一の男子と有名人の血縁者と言う肩書は伊達じゃないようで、それなりに月日が経った今でも一夏には一定の人気があるようで、少しでもお近づきになろうと試みる女子達が結構いる。

私には別に関係無いけれどね。

「む？ どうやらもう海に行っている連中がいるようだぞ」

「気が早い奴等だ」

窓から浜辺の方を見てみると、もうポツポツと水着に着替えた子達が出てき始めていた。

ここからでも分かるほどにテンション上がってるな〜。

「私達も行くか？」

「そうだな。折角、姫様に選んでいただいた水着があるのだ。ここで着ない訳にはいかんだろう」

「決まりだね〜」

私としても海に行くことに異論は無い。

満場一致と言う事で、私達は必要な荷物を持って別館にある更衣室へと向かう事に。

・  
・  
・  
・  
・  
・

更衣室へと行く途中で一夏、セシリア、シャルロットと合流した。別にそれはいい。何も文句は無い。けれど……

「なんだこれは……」

中庭の地面にブツスリと突き刺さっている機械的なウサ耳。

しかも、ご丁寧に傍には『引っ張ってください』と言うメッセージが書かれた紙が添えてあった。

「なあ……箒。これって……」

「言うな。そして聞くな。関わるだけ時間の無駄だ」

嫌っていると言うよりは、本当に呆れている表情だ。

非常に大きな溜息を吐きながら、箒は一人で更衣室へと向かって行った。

「……どうするの？ これ……」

「抜くしかないんじゃないか？」

「馬鹿か。こんなあからさまなトラップに態々引っかかってやる必要は無い」

ラウラからも御尤もなお言葉を頂きました。

「ね……え……」

「どうしたんですの？」

「あれ……」

私が指差した方向には、ワクワクした顔でウサ耳を引っ張ろうとしている本音がいた。

「言った傍から引っ張ろうとしてるし!？」



「くきしんには勝てないのだよ」

「言ってる場合か!？」

猛烈に嫌な予感がしたので本音を止めようと思ったけど、時すでに遅し。

ウサ耳は簡単に抜けてしまい、その反動で本音はその場に尻餅をついてしまった。

「何にもないよ〜?」

「罨ではない……だと? だとしたらこれは一体……?」

皆は頭を捻って考えているけど、私には分かる。

これは間違いなくあの『天災鬼』のウサ耳だ。

原作通りならば、この後に待ち受けているのは……

「……ねえ、何かが落ちてくるような音が聞こえない?」

「……気のせいじゃありませんのね」

「私にもハッキリと聞こえるぞ……」

「避難避難〜!」

「もしかして……ここに落ちてくる!？」

本音が急いでこつちまで来た直後に、薄い赤色の大きな謎の物体がさつきまでウサ耳が刺さっていた場所に落下してきて、その衝撃で土煙と風が舞った。

「二「キヤアアアアアアアアアアアアツ!」「二二」

私を含めた女子達は片手で髪を押え、もう片方の手で急いでスカートを押えた……けど、私だけ一瞬遅れてしまい、スカートが思いつきり捲れあがってしまった。

幸い、他の皆は目を瞑っていたから見られていなかったけど、その中で一夏だけがこつちを凝視していた。

「きよ……巨大な人参?」

落ちてきたのは、機械的なデザインながらも少しデフォルメされた可愛らしい人参。

その大きさが軽く3〜4メートルも無ければ、普通に私も可愛いと思っていただろう。

そんな事よりも、私には気になる事があるし。

「一夏……」

「な……なんででしょうか？ 弥生さん……？」

「見た……？」

「何を……？」

「……スカート……の中……」

私が低い声で問いかけると、一夏は一瞬で顔を真っ赤に染め上げて、必死に首を振って否定した。

「み……見てない見てない!! 弥生の可愛い水色の縞パンなんて全く見てな……あ」

こいつ馬鹿だ。自分から白状しやがった。

「二……き……さ……ま……」

「二……ニンジャ……」

四人の顔が瞬時に般若に変わり、同時に一夏をボコボコにし始めた。

「貴方と言う人は!! なんで写真に収めなかったんですの!! この役立たず!!」

「姫様に不埒をする輩はどんな奴でも絶対に許さん!! 教官の弟でも例外では無い!!」

「ウフフフ……♡ やよつちのおパンツを見ちやった悪い目はこれカナ？ アハハハハ!!」

「これに関しては全面的に俺が悪かったです!! すんませんでした〜~~~~!!」

どうして、この男はこうもラッキースケベをする星の元に生まれてるんだ……!

めっっちゃ恥ずかしくて未だに顔が熱いですけど!

って言うか、今しれつとセシリアがとんでもない事を言っただけなかつた!?

「にやははははははは〜! 私もバッチリと見てしまったよ! やつちちゃんの可愛いパンツ♡」

一夏が皆に『制裁』を受けている横で先程の巨大人参（人工物）が真ん中からパカッと割れて、そこから、この世界における最大最凶最

悪の超要注意人物が姿を現した。

「やつほく！　いつくん！　久し振りく！　そして……」

彼女——篠ノ之束はこつちを向いて無邪気に笑った。

「ずっと会いたかったよ！　やつちちゃん！」

その時、私の背筋がとてつもない悪寒が走った。

## 天災兎と夏の海

簡単に今起きた出来事を説明しよう。

青く綺麗な空を眺めながら皆と一緒に花月荘の別館にある更衣室に向かっていたら、いきなり上空から明らかに人工物と思われる巨大な人参が落下して来て、私は一夏に下着を見られて、人参の中から例の天災兎が現れた。

この展開は知っていたけど、だからと言って防ぐことは絶対に不可能だ。

何故って？ それは、私が何の能力も無い凡人であり、相手がこの世界における最高の頭脳の持ち主だからだよ。

ま、今はそれよりも気になっている事があるんだけどね。

(……この人、さっきなんて言った?)

基本的に身内以外の人間を路傍の石ころ程度にしか見ていないこの女が、私の事をよりにもよって『渾名』で呼んだ？

なんで？ どうして？

私と彼女が会うのは間違いなく今日が初めての筈なんだけど……。

「いや〜、いっくん。相も変わらずはっちゃけてるね〜」

「俺のこの恰好を見て、そんなセリフが吐けるって……そっちこそ相変わらずですね……」

篠ノ之束のいきなりの登場に一夏以外の全員が完全に硬直しているが、女子達の中央で一夏は見事にボコボコになっていた。

私のパンツを見た代償だと思えば、これも安いもんだろ？

何事も『等価交換』が大事なんだよ。

女の子の下着はそれだけの価値があるって事さ。

いい教訓になったな？ 一夏。

「でも、今回はやっちゃんに用があるんだよね！」

「やっちゃん……?」

満面の笑みを浮かべながら篠ノ之束が私と真っ直ぐに向き合った。

その際に自然と視線が合ってしまった。

「どうも！ 初めまして、板垣弥生ちゃん！」

「は…初めまして……」

なんでこんなにも好意的な反応をするのかは全くの不明だけど、ここで下手に機嫌を損ねる訳にはいかない事もまた事実。

言葉選び一つとっても慎重に選択しなくては……！

「ずつとこうして直接会う日を楽しみにしてたよ！ うん！ やつぱり東さん好みの美少女だね！」

これほどまでにグイグイ来るキャラは初めてなので、どう反応していいのかわからない……。

ウイングゼロでも黒の騎士団のゼロでもマジンガーZEROでもいいから教えて欲しい。

私はこの状況でどうしたらいい？

「あ…あの東さんが弥生の事を渾名で呼んでる……？」

一夏も彼女の異常性を理解しているから、この状況がどれだけおかしいのかわかっているみたい。

そう思うのならば今すぐにでも止めて欲しいんだけど。

「え…えつと……その……」

「お!? こうして直に見ると、想像以上にオツパイが大きい!? これは是非ともこの身で色々確かめねば！」

こつちが戸惑っているのをいい事に、篠ノ之東はいきなり私に抱き着いてきて、その顔をこつちの胸に埋めると言う暴挙に出た。

力が強い事もあるが、それ以上に逆らってはいけないと言う思いが強くて身動き一つとることが出来ない。

「ん〜♡ プニプニでポヨポヨで、とつてもいい匂いがするね〜♡

あ〜…癒される〜♡」

人に勝手に抱き着いて癒されなくてください。

こちとら緊張でガツガチになってるんですから。

「プハ〜♡ 満足した〜♡」

さつき以上の笑顔に顔をテツカテカさせた篠ノ之博士は、周囲を少しキョロキョロとし始めた。

「今気が付いたけど、箒ちゃんは一緒じゃないの?」

「今頃!? 箒なら……」

「あ、言わなくても大丈夫。この『ウサ耳型箒ちゃん探知機』を使えば一発だから。それじゃあね！　また必ず会いに来るから、元気でね！　やっちゃん！」

チュツ！　つと私の頬にキスをしてから、自分が乗ってきた巨大人参を両手に抱えてどこかへと去っていった。

「あ…あの方は一体…？」

「箒の實の姉…って言えば分かるか？」

「それって、あの人が篠ノ之束博士!？」

「は…始めて見たよ…」

「あまり人前には姿を現さない人だからな…」

「色んな意味で凄い人物だったな…」

……あまりにもさりげなかったけど、私…初めて他人にキスされちゃった…。

ほっぺただけだ。

「で…でも、その篠ノ之博士がどうして弥生を知っていたの？」

「俺にも全く分からねえ…」

「どういう事だ？」

「束さんは基本的に俺や千冬姉や箒以外の人間とはまともな会話すらしようとしなんだ。自分の両親にですら冷たい態度を取るのに、どうして弥生にはあんな風に…」

一夏は本気で理解不能らしく、さっきからずっと頭を捻っていた。

「ここで考えても仕方があるまい。今はとにかく水着に着替えるのが先決ではないのか？」

「そ…それもそうですわね」

「先に行った箒に置いて行かれちゃうかもだし。急ごうか」

「そ…だね」

少し呆けながらも皆は揃って更衣室へと改めて向かった。

天下の篠ノ之束に出会った衝撃が強すぎたのか、誰からもほっぺにキスされた事を指摘されなかった。

・  
・  
・  
・  
・  
・

た。  
弥生を除く面々は一緒に浜辺に向かい、海を見つめながら立っ

「姫様は遅いな……」

「少し時間が掛かるから先に行っていて欲しいとしましたわね……」

「早くやよつちの水着見たいよ」

「そうだな……」

そう呟く少女達の水着はと言うと、セシリアは自身の専用機の機体色を意識したのか、ブルーのパレオ付きのビキニ。

ラウラは以前に購入したフリル付きの少し露出が高めのビキニで、シャルロットはセパレートとワンピースの中間のようなデザインの黄色い水着、箒はどこで手に入れたのか、純白のビキニを着ていた。

因みに本音はデフォルメされたキツネの着ぐるみのような水着(？)を着ている。

「本音さん……それ、暑くはありませんの？」

「だいじょぶだよ。これ、通気性は抜群だし、この下にはちゃんと水着を着てるしね」

「「意味が無い!?!」」

全員が思わずツツコむほどに本音の姿は明らかに浮きまくっていた。

余談だが、一夏はネイビーのトランクスタイルの水着だ。

「お待……た……せ……」

「やっと来たか。待ちくたびれ……た……ぞ……」

少し遅れてやって来た弥生の恰好を見て、その場にいた全員が凍りついた。

何故ならば、弥生がしている姿と言うのが……

「二」「ダイビングスーツ!」「二」

あろうことか、プロのダイバーが御用達にしているメーカーのダイビングスーツ一式だったからだ。

ちゃんと手の部分にはゴム製の手袋が着けられていて、足には既に水かきが履いてあった。

(確かにこれなら傷跡を隠したままで海を堪能できるけど、なんか本格的すぎじゃない!?)

事情を知っているシャルロットでさえも、弥生のこの恰好だけは全く予想が出来なかった。

弥生の手にはちゃんと酸素ボンベなどのダイビングに必要な道具が握られている。

もう海に潜る気満々である。

「よ……よくそんな物を持ってたな……」

「前……に何回……か……おじいちゃん……と一緒に……海にダイビング……をしに……行った事……がある……か……ら……」

「お……泳ぐのは人並みだと仰っていませんでしたか?」

「泳ぐの……は……ね……。でも……潜る……のは……得意……になった……」

「なった?」

「一番最初……のダイビング……の時……に……プロ……の人……に指導……して貰った……」

「そ……それは凄いですね……」

いつもならば真つ先に弥生を褒めるラウラでさえも、この姿には驚きを隠せないでいた。

同時に、あの大荷物 of 正体がなんなのか判明した瞬間でもあった。

「あの無駄に大きな荷物の中身はそれだったんだね……」

「おじいちゃん……に頼んで……家……から送って……貰った……」

弥生は最初から臨海学校の備えて予め準備をしていたのだ。

本来ならば休みたいと思っていたが、それを言えば色々理由をつけられて強制的に連行される事は自明の理。



どうせ行くことが確定しているのならば、それを想定した準備をすればいい。

その答えこそが弥生が今、身に纏っているダイビングスーツだった。

「それじゃ……あ……行つてきます……!」

「「「い……いってらっしやい」」」

ドヤ顔でサムズアップをして、海へと向かって行く弥生を手を振りながら見送る一夏達であった。

「まさか……あのような姿で来るとは夢にも思いませんでしたわ」

「僕もだよ……」

「やよつちの水着……見られなかったね……」

各々が残念そうにしている中、一夏だけは諦めていなかった。

「でも、ダイビングスーツを着ているって事は、勿論、あの中にはちゃんとした水着も着ているって事だよな？」

「「!!!」」

完全な盲点。

下に何も着ずにそのままスーツを着ることは有り得ない。

ああしてダイビングスーツを着ていると言う事は、それはつまり、中に他の水着を着ていると言う事と同義だった。

「やっぱり、中に来ているのはあの時購入した水着なのかな……?」

「その可能性が高いだろうな。姫様は物を大事にするお方だ」

弥生が一体どんな水着を中に来ているのか。

それは本人のみぞ知る。

しかし、妄想とは人間だけに許された最高の特権の一つ。

彼、彼女等はその特権をフル活用して、弥生のダイビングスーツの中を妄想していた。

因みに、この後にセシリアは原作通りに自分の体にサンオイルを塗ろうと思ったが、折角なら弥生が上がってくるのを待って、彼女に塗って貰おうと画策し、そのまま準備だけして弥生の事を待ち続けたと言う。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

海は広いな大きいな〜と。

バスの中から見た通り、この海の水はかなり透き通っている。

私についてくるように周りには多数の熱帯魚が一緒に泳いでいる。

まるでファンタジーの世界に迷い込んだような錯覚さえ覚える光景。

いや、ある意味では私は立派に架空の世界に迷い込んではいるんだけどね。

(皆には悪いけど、今は少し一人で考えたい気分なんだよね……)

本当は考え事をする為にダイバー装備一式を持って来たわけじゃないんだけど、こうなったら利用できる物はなんでも利用したい。

美しい海や魚たちや珊瑚を眺めながら、私はずっとさっきの事を考えていた。

(なんで今日初めて会う筈の篠ノ之束が私の事を知って、しかも渾名で呼んできたんだろう……)

さっきも同じ事を考えたけど、今なら冷静になって分析が出来る。

(これはあくまで勝手な予想だけど、あの女はずっと何らかの手段でIS学園……と言うよりは、自分のお気に入りのお気入りのお身内である一夏や箒、唯一無二の親友である織斑千冬の事を監視するようにモニタリングしていたんだろう)

クラス対抗戦の時に介入してきた無人機は十中八九、あの女の差し金だろう。

そして、原作通りに無人機ことゴーレムが箒に攻撃しようとしたのを私が身を挺して防いだから、そこを評価された……？

(そう考えれば一応の納得はできる。けど、あの時の箒は別に一夏に對して叫んだりとかはしていなかったし、あの場には私も一緒にいた。彼女の事だから、そこまで想定した可能性は非常に高いけど……)

『会う日を楽しみにしていた』『私に用がある』

あの時、確かにそう言っていた。

けど、私には彼女にそれだけ執着される理由が見当たらない。

(それとも、私の『知らない過去』に關係しているのか……?)

もしそうだとしたら、それこそお手上げだ。

だって、知らない事が理由だなんて、こつちにどうしろつて言うんだ。

あ、あのシャコ貝デカッ!?

(ハア……。どつちにしても、『また必ず会いに来る』と宣言した以上、間違いなく有言実行するだろうな。少なくとも、明日には絶対に会う事は確定しているわけだし)

私が知らない所で箒が姉に専用機紅椿の事を懇願したのか、それとも、向こうから勝手に渡しに来るのかは分からないけど、それでも、来ることだけは確実と言える。なんせ、福音の事もあるんだから。

(馬鹿の考え休むに似たり……か。どれだけ考えても、これからどうすればいいのか分からない。いや、あの相手に理屈で対抗しようとすること自体が間違いなのかもしれない。全てを理論的に考える相手に有効なダメージを与えることが出来るのは、計算すらも出来ない程の天然馬鹿ぐらいか。少なくとも、私の周りには一人もいないタイプだな)

これまで私は原作におけるトラブルに巻き込まれないようにしてきたけど、結局は巻き込まれるような形になった。

紆余曲折はあったけど、それらのトラブルはなんとか無事に解決する事は出来た。

けど、今回ばかりはあまりにもトラブルの規模が違いすぎる。

相手はあの『天災』篠ノ之東。

頭脳、身体能力の両方において超がつくほどのチートであり、その

思考は常人には全く理解出来ない程に明後日の方向にぶっ飛んでいく始末。

原作知識があるとは言え、彼女の行動の予測なんて出来ようもない。

(こうなったら、場の流れに身を任せるしかないのか……)

今はそれしかないかも……。

(ん?)

背中を下にして泳いでいると、海面の方に見覚えのあるシルエットが見えた。

(あのツインテールは……鈴か?)

海にいるって事は、原作みたいに足がつって溺れるかもしれない。

ちよつと上に行つて様子を見に行こうか。

私は鈴の方に向かう為、海面に向かって浮上し始めた。

## インドア派だつて海は好き

水着に着替えてから弥生に自分の水着姿を披露しようと思気込んでいた鈴だったが、先に来ていた一夏や箒達に先に海に行ってしまったと聞かされて、若干の落ち込みを紛らわせる為に彼女も海でのんびりと泳いでいた。

因みに、箒に指摘されてから、ちゃんと泳ぐ前に準備運動は済ませておいた。

「あくあ……。若干の出遅れがここまで大きく響くとは思わなかったな……。つか、あのインドア派の弥生が海に潜るって、あんまし想像出来ないんですけど」

鈴の中では、弥生は机に座って優雅にお茶を飲みながら高級そうな本を読んでいるイメージが強い。

弥生がお金持ちのお嬢様と知ってからは、特にその傾向が顕著になった。

「ん？」

海水のいい具合の冷たさをその身で感じながら泳いでいると、ふと、足元から何かがやって来るような気配を感じた。

「な……。なに？ まさか……。鮫とかじゃないでしょうね？」

普通、人が泳ぐことを許された海域には鮫などの危険な海洋生物は近寄らないようにしてあるのだが、慌てている鈴にはそれを考える余裕が無いようだ。

「どんどん浮上してくる……。これって逃げた方がいいわよね？」

急いでその場所から移動しようとするが、鈴が動き出すよりも早く、海中からの来訪者の方が早かった。

「きやあああああ……。つて……。アレ？」

バシヤツ！つと言う水音と共に現れたのは、専用のゴーグルを初めとした装備を顔に付けた見覚えのある少女だった。

「も……。もしかして……。弥生？」

鈴の言葉に応えるように、少女はゴーグル類を外して素顔を見せた。

「驚か…せて…ごめん…ね…?」

「う…うん！ 全然気になんてしてないから！ 仮にも代表候補生なんですよ。これぐらい、へっちゃらよ！」

なんて言いながらも、さつきまで本気でビビっていたのは何処の誰なのやら。

「なんか言った？」

ナンデモアリマセン。

（あれ？ さつきゴーグルを取り外す際に、弥生の顔の左半分がビニールのなヤツに覆われていたような気が…）

既に知っているとは思うが、弥生の顔には非常に大きな火傷の跡が存在している。

幾らダイビングスーツでも顔の傷だけは隠せない。

だから弥生は、普段から彼女が使用している包帯の代わりに、密かに自分専用で作って貰った顔の半分を覆い隠す防水加工のされた顔面マスクを装着している。

これならば、例え海でも顔の傷を隠す事が可能になる。

実に金持ちらしい解決法である。

「それにしても、かなり本格的な装備じゃない？ それってプロの人とかも使ってるメーカーでしょ？ 前にテレビで見た事があるわ」

「うん…。どう…せ…使うな…ら…丈夫…で長持ちする…の…がいい…っておじいちゃん…が言って…これ…を買ってくれ…た…」

「丈夫で長持ちするのがいいのは分かるけど、だからって高級なダイビングセットを買ってあげるなんて、弥生は相当に愛されてるのね」

「そ…それほど…でも…」

（うん。今日も照れる弥生は超可愛いわね！）

僅かな波間に揺られながら、鈴は心の中で照れ顔の弥生の顔を脳内にバッチリと記録した。

「あたしはそろそろ一旦、浜辺に戻ろうと思ってるけど、弥生はどうするの？」

「私…も一度戻ろう…かな…」

「だったら一緒に行きましょ？」

「そうだ…ね……」

結論が出た所で、二人はすぐに浜辺に向かって泳ぎ始めた。

元から運動神経がいい鈴の泳ぎに普通についてこれている弥生。

本人はなんとも思っていないが、これは地味に凄い事である。

「すごい…えは……」

「どうしたの？」

「鈴…の水着……似合ってる…ね……」

「そ…そう？」

普通に返事をしたつもりだが、思わず声が裏返る鈴。

それ程までに水着を褒められたことが嬉しかったのだろう。

鈴の着ている水着は、オレンジとホワイトのストライプ柄のスポーティーなタンキニタイプである。

活発な印象が強い彼女を体現しているかのような水着である。

「や…弥生のそのスーツも似合ってるわよ？　かなり様になってる感じ」

「着慣れ…てる…から…ね……」

「って事は、割と頻繁に海に来たりしてるの？」

「中学…の時……は夏休み…に…おじいちゃん……が休み…を取ってくれて……一緒に海…に来てた……よ……」

「家族水入らずで海…か。いいわね……」

殆ど一家離散に近い状態である今の自分を鑑みて、本当に羨ましそうに呟いた。

その反応を見て、原作知識で鈴の家族の状況を知っているが故に失言だったと思った弥生だが、ここで下手に掘り返せば逆効果だと判断したのか、そのまま何も言わずに会話を続けた。

その何気ない優しさに、鈴はまた弥生に対して惚れこんでいくのだが、その事には全く気が付いていない、鈍感ヒロインな弥生ちゃんであった。

余談だが、浜辺に到着するまでの間、鈴は一度も足を攣らせることは無かった。

・  
・  
・  
・  
・  
・

浜辺まで辿り着いた私達は、並んで浜に上がる事に。

「少し疲れたけど、気持ちよかったわね♡ やっぱ、暑い日は海に限るわ♡」

それに関しては同感。

なんかかんだ言っても、海が嫌いな人間はあまりいないと思う。

だって、全ての生物はこの海から誕生したのだから。

「これからアタシは少しそこら辺の木陰で休もうと思ってるけど、弥生はどうするの?」

「私…も…少しだけ休も…う…かな…」

結構長い間海に潜ってたからな。仮にもう一回海に行くとしても、少しぐらいいんターバルが必要だ。

「そう。あたしはちよつと飲み物を買ってきてから休む事にするわ」  
「ん。分かつ…た…」

そう言くと、鈴は自分の荷物が置いてある場所まで小走りで行った。

(さて…と。こっちはこっちで休ませて貰いますか)

丁度、目線の先にいい感じの木陰を発見したから、あそこで体を休める事にしよう。

水かきをつけたままだから歩きにくいけど、足の傷を見せない為に、こればかりは仕方が無い。

「ふう……」

背に背負ったボンベなどを外してから、木を背凭れにして座り、ホッと一息。



座った直後にいい風が吹いて、体の疲れを癒してくれる。

「ぬおっ!? い…板垣さんのあの恰好って……まさかダイビングスーツ!?」

「すごっ!? かなり本格的じゃん!!」

「なんか……すっごい色気があるんだけど……」

やっぱり、この姿は水着だらけの集団の中じやかなり目立つか。

分かっているけど、注目されるのは慣れそうにない。

「ほらよ」

「っ!?!」

いきなりほっぺに冷たい感触が。

反射的に振り向くと、そこには爽やかな笑顔を浮かべて、こっちに

ペットボトルを差出している一夏がいた。

持っているのはスポドリの類のようだ。

「疲れてるんだろ? そんな時はお茶やジュースよりもこっちの方がいいからな」

確かに、疲労した体にはこういった飲料水がベストだけど、なんでそれを一夏が持つてくる? しかも……

(不覚にも、一瞬だけ本気でドキッってなっちゃったじゃないか……)

ほんの一瞬だけとは言え、まさか私が男にときめいてしまうなんてな……。

もう完全に精神が女性寄りになってきてますな。

「隣、座るな?」

おいこらそこ! 私はまだ了承してないのに勝手に隣に座るな!

しかも、距離が近いんだよ! なんでこっちにくつつくように座るんだ!

「海……綺麗だな……」

「そう……だ……ね……」

なんだこの甘ったるい空気は……。

いつから私は青春ドラマのヒロインになった?

それとも、夏の陽気で頭がおかしくなったか?

「でも、俺的には海よりも弥生の方が綺麗だと思うけどな」

なんでそんな歯が浮くようなセリフを普通に吐くんだよ!!

本格的に頭がどうにかなったんじゃないのか!?

「なんて言ったら、弥生はどうする?」

んなこと知るか!!

お前は私をどうしたいんだ!!

「やっぱり、あの二人って付き合ってるのかなく……」

「そうでしょ。じゃなきゃ、あんな風と一緒に座ったりしないって」

「そっか……。一応、織斑君の事、狙ってたんだけどなく……」

「一応って何よ、一応って」

ほらあく! そこら辺でいらぬ誤解が発生してるしく!

と言うか、その手の噂って前にもしてなかったっけ?

もしかして、まだ収束してないの?

それと、私とこいつは一切、全く、全然、これっぽっちも付き合っ

たりとかしてませんからね〜!

まだ君達にも希望はありますからね〜!

「はは……なんかカップルに見られちゃったな」

「みたい……だ……ね……」

照れくさそうに頬を掻くな!

こつちからしたらいい迷惑なんですよ!

なんか空気が変な感じになってきたので、それを誤魔化すために一

夏がくれたスポドリを飲む事に。

「……美味しい」

「だろ? 疲れた時はソレに限るよな」

爽やか笑顔でこつちに笑いかけんな!

女としての本能が働いて……その……照れくさいんだよ!

今すぐにもこの場を立ち去りたいけど、どうもここに漂う空気が

それを許してくれない。

誰でもいいから、この空気をぶち壊してくれる存在がいてくれれば

……。

「あ〜! やよつち発見〜!」

うをつ?! ほ……本音?! いつの間に目の前に!?

「ラウラウたいちよ〜！ ターゲットを発見しました〜！」

「よし！ すぐに姫様を保護するのだ！」

「ぶ〜らじや〜！」

「わ…わっ!？」

着ぐるみ装備の本音が私の手を掴み、一緒に来ていたラウラと一緒に私をその場から連れ出してくれた。

去り際に急いでこの場においた道具を持った時に一夏が何かを言っていたけど、あまりよく聞こえなかった。

まさか、私を助けに来たお助けマンが本音になるうとは……。

世の中、一秒後にどうなるか分からないな……。

・

・

・

・

・

本音とラウラに連れてこられたのは、海の家だった。

そこには簪とシャルロットも一緒にいた。

簪の水着は薄い緑と白の水玉模様のワンピースタイプ。

大人しい性格の簪によく似合っている。

「やつと来たあ〜。すぐに海に入っつちやうから、ずっと待ってたんだよ〜。」

「(…ごめんなさい?)」

ちゃんと海に入る旨は伝えた筈なんだけど、なんだろうか……この言い知れぬ罪悪感。

「先程まで、姫様は織斑一夏と一緒におられた」

「えっ!？」

か…簪? なんでもそんなにも驚くの?

「何かされなかった? 胸を揉まれたりとか、お尻を触られたりとか、

いきなり抱き着かれたとか」

「な…なんに…も…されてない…よ……」

「ほんと？ 言いたくても言いにくくて我慢とかしてない？」

「してない…よ……？」

今日の簪はグイグイ来るな……。

海に来ているから？ それともこの陽気だから？

「さつき、あの男にパンツ見られたって聞いたから、心配で心配で……」

ああ……そーゆーことね。

「大丈夫だ。確かに一緒にはいたが、本当にそれだけだ。何かをされた形跡は無かった」

「そつか……本当に良かった……」

心配してくれるのは純粹に嬉しいけど、彼女達の中で一夏の株が順調に大暴落していつてるな……。

「万が一、あの男が何かをしても、私がすぐに『制裁』を与えるから問題無い」

その『制裁』の内容を詳しく聞きたいけど、怖くて聞けません……。

「それよりも、先程まで姫様は海に潜っておられた。お体を休ませなくては」

「そうだね。弥生、ここに座りなよ」

シャルロットが示してくれたのは、海の家の前に設置された木製のベンチ。

ここもいい具合に木陰に入っているから、休むにはいい場所だ。

別に断る理由も無いから、遠慮無く座らせて貰う。

腰を掛けながらスポドリを一口。

「さつき本音達に聞いたんだけど、その着ているスーツが弥生の大きな荷物の正体なんですよ？」

「うん……」

「凄いね……。私はあんまりダイビングに詳しいわけじゃないけど、それでも、これが高級品だって分かるよ」

「姫様だからな」

「なんでラウラが嬉しそうなのか？」

「雑談をしながら皆も私と一緒にベンチに座りだす。

なんか、一気に女子高生っぽい雰囲気変わったな。

「僕達はまだ海に行っていないんだけど、どうだった？」

「透き…通っ…ていて……凄く……綺麗だ……った……。魚たち…と一緒……に泳いだ……よ……」

「お魚と一緒に泳ぐなんて、まるでやよっちは人魚姫みたいだね」

「なんと!?! 姫様は人魚の姫でもあったのか!?!」

「ラウラ。物の例えだから」

「ここでもラウラは純粋で可愛いな」

「自分の体が海水塗れじゃなければ、すぐにでもハグしたいよ」

「…あれ?」

「今更ながら気が付いたけど、ラウラの髪型が原作の時みたいにツインテールになってる？」

「海に入る直前までは普通に流してたよね？」

「あ。もしかして気が付いた？」

「うん…。ラウラ…の髪型…」

「そっだよ。折角、可愛い水着を着てるんだから、いつそのこと髪型も変えちゃおうと思って。簪と本音にも手伝って貰ったんだよ」

「いい仕事をした…♡」

「髪を弄ってる時のラウラウ、可愛かったよ♡」  
「だろうね。」

「私も寮の部屋でラウラの髪を梳いてる時の事を知ってるから、よく分かるよ。」

「あまりジロジロと見ないでください…」

「ラウラ…可愛すぎか!」

「皆…ぐっじよぶ」

「私は皆に向けて、自分なりの最高のサムズアップを送った。」

「「どういたしまして」」

「水着のラウラはツインテール。これはもう鉄則だね。」

「あ、もうスポドリが空になってしまった。」

「もう少し休んだら、また海に行くの？」

「どうし…よう…かな……」

まだ酸素には余裕があるし、お昼まで時間もある。

別にあと一度ぐらいなら海に潜ってもいいとは思うけど……。

「見つけましたわ!!」

「「「え?」」」

いきなりの叫び声。

振り向くと、そこには肩で息をしているセシリアがいた。

(今度はお前さんか……)

先の展開がなんとなく予想出来てしまう自分だけど、臨海学校の時ぐらいは皆に流されてもいいと思う自分もいる。

先の事は忘れて、今だけは女子高生らしく海を満喫しますか。

## 今年の夏は今年しかない

現在の状況。

海で泳いでいると鈴と出会って浜まで一緒に移動して、それから何故か一夏と一緒に甘酸っぱい雰囲気になって、その後にラウラと本音とシャルロットと簪と一緒に雑談をしていると、いきなりセシリアが大声を出しながら目の前に現れた。

以上、説明終わり。

「ずっと弥生さんが海から上がってくるのを待つて、つい先程になつて戻つてこられたと聞いて、今まで探していましたわ……」

ちよつと汗を掻いて、大きく肩で息をしているセシリア。

「どんだけ私の事を探し回つてたんだよ。」

「弥生さん！」

「は……はい……？」

「ちよつとこちらにいらしてくださいな！」

突如、セシリアに腕を掴まれて、そのままどこかに連行されるような形になった。

「わゝ（棒読み）」

なんとなく、この後の展開が読めてるから何の心配もしていないから、取り敢えず形だけでも悲鳴を上げておいた。

「なっ!? 貴様……セシリアっ!?!」

「セツシーにやよつちが連れて行かれちゃった……」

ちゃんとした反応をしているのはラウラと本音だけ。

後の二人はと言うと……

「まあ、セシリアなら大丈夫でしょ」

「その前に、彼女に弥生をどうこうする根性があるとは思えない」  
信頼しているのか、もしくはバカにしているのか。

セシリアつて実に微妙な立場にいるな。

(あ、ボンベとかゴーグルとか置いてきちゃった)

あの四人がいるから大丈夫だとは思うけど、念の為に後で回収に行かないとな。

セシリアに手を引かれて行く中、冷静な頭でそう思う私であった。

.....  
.....  
.....

「到着しましたわ！」

セシリアに連れてこられたのは、一本のパラソルが砂浜に突き刺さった状態で立っている場所で、パラソルの下には一枚のシートと、サンオイルと思われるオレンジ色の容器が置かれていた。

「弥生さん！ 一つお願いがあるんですけど、よろしいですか!？」

「ど……どうぞ……?？」

セシリアの迫力に負けて、思わず首を縦に振ってしまった。

「その……私の体にサンオイルを塗ってくださいませんか？」

はい、そうだと思います。

原作だと一夏に塗って貰っているこのシーン。

何故か私の知っているセシリアは一夏とあまり仲がいいとは言えない。

と言うか、仮に仲が良くても異性に対して無防備に体を預けるとか、普通は有り得ないんだけどね。

(異性よりは同性に塗って貰った方がいいだろうしな)

私がセシリアの立場でも、きつと同じように同性の相手にオイルを塗って貰っていたら。

この体じゃ、そんな事は夢のまた夢だけ。

「私……でいい……の……? 誰か……にオイル……を塗る……なんて初めて……だよ……?？」

「そんなの全く気に致しませんわ。弥生さんだからこそ塗って貰いたいのですから」

あら。嬉しい事を言ってくれるじゃない。



「それに……多少はぎこちない方が色々と……ぐへへ……♡」  
「……………今のは聞かなかった事にしよう。」

私は何も聞いてない。イギリス貴族でお嬢様であるセシリア・オルコットが目の前で涎を垂らしながらイヤらしい顔で『ぐへへ』なんて言っていた事なんて、私は全然聞いてない。

「頑張る……けど……下手だった……ら……ゴメン……ね……?」

一応の予防線を張ってから、私は置いてあるオイルの容器を手にとった。

容器の蓋を開けて中身を手の上に出そうとしてから、ピタッと止まった。

（これは……素手でした方がいいのかな？ それとも、このまま手袋をした状態でしても……?）

下手に素手ですると、傷の感触とかが肌に触れてバレる可能性もあるけど、手袋越したと上手く出来ずにオイルにムラが出来るかもしれない。

私が些細なようで些細じゃない事で頭を回転させていると、いつの間にかセシリアの方はパレオと上の水着の紐を外して、シートにうつ伏せになっていた。

（エ……エロい……）

元々スタイル抜群のセシリアの豊満な胸がシートと彼女の体の間に挟まって、かなりとんでもないことになっている。

少なくとも、鈴辺りが見たら発狂しそうな光景ではある。

こんな時だけは、つくづく女に転生してよかったと思うよ……。

もしもこれが男だったら、間違いなく変態の烙印を押されるから。

「……………こっち……も恥ずかしい……から……出来れ……ば……そのま……ま……向こう……を向いててくれる……かな……?」

「分かりましたわ」

見られなきや大丈夫だよな？

そう判断して、私は意を決して手袋を外し、素手でする事に。

勿論、周囲に誰も来ていない事を確認した上で手袋は外した。

傷だらけの掌にオイルを垂らし、自分流に揉んでいく。

(こうしてオイルを温めるといい……んだよね?)

本当にこんなんでオイルが温まるかは疑問だけど。

「い……いきます……」

「いつでもどうぞ……ですわ♡」

あ……ドキドキする……!

セシリアの肌つてめっちゃ綺麗なんだよ!

私とは雲泥の差なんだよ!

こんな絹のように美しい肌に私が本当に触れていいのか?

震える手を理性で押さえつけながら、そつとセシリアの腰の辺りに触れた。

「あん♡いきなり腰だなんて……弥生さんつてばダ・イ・タ・ン♡」

そんな事を言うなっつーの!

却つて緊張しちゃうから!

家にある時価数千万円の超高級なツボを掃除する時みたいに神経を使いまくつて、慎重に慎重に手を動かしていく。

「ちゃんとオイルを温めてくださっているんですね……。初めてなんて言いながらも、とてもお上手ですわ……♡」

「あ……ありが……とう……」

心臓をドキドキさせながらオイルを背中に塗っていく。

お世辞でも上手と言われると、やっぱり嬉しいものだ。

(あら? なにやら弥生さんの手から変な感触が……。いえ、きつと気のせいですわね)

調子を崩さないようにオイルを塗っていくと、あつという間に背中が塗り終わっていた。

「背中……は終わった……よ……」

「では、お次はもつと下の方もお願いしますわ」

「し……下……?」

下つて……まさか……。

「はい。弥生さんの手で私の足やお尻なんか塗ってくださいると、とても嬉しいですわ……♡」

冗談キツイよ!

背中を塗るだけでも相当に神経を摩耗させたつてのに、ここから更にエロティックな場所に踏み込めと!?

「弥生さんが塗りたいと言うのでしたら、前の方も……♡」

「ごめん。それは絶対に無理。」

逆にこつちが恥ずかしくなつて悶絶するわ。

「なくにやつてんのかしらねく……このエロイギリス貴族さまは……!」

「……この声はっ!?!」

「鈴……?」

ついさつき別れた鈴が、その手に缶ジュースを持った状態で現れて、鬼の形相でセシリアの事を睨み付けている。

幸いにもこつちは見ていないようだったので、急いでオイルを拭いてから手袋を再び装着。

「そんなにオイルを塗ってほしかったら……」

缶ジュースを地面に置いてから、鈴が徐に自分の手にオイルを垂らした。

本能的にこの場から少し離れた方がいい気がして、私は二人から僅かに距離を取った。

「あたしが塗ってあげるわよ!!」

「いきなり何を言つて……キャ~~~~~!!?」

私の目の前で二人の美少女がオイル片手に揉みあいに。

男からしたら天国のような光景かもしれないが、私からしたら大変困る状況だ。

割と仲がいい二人が喧嘩に近い事をしているのだから、止めないといけないんだらうけど、どう止めたらいいのかが分からない。

(あくあ……もみくちやになつて二人の水着が外れそうになつてるし……)

こつちがオロオロあたふたしていると、どこからともなく甲高い笑い声が聞こえてきた。

「あ——はっはっはっ! 隙あり!!」

「……この声は……まさか……!」

「とうっ!!」

「きゃっ!?!」

いきなり誰かにお姫様抱っこされて、またまた拉致。

「弥生(さん)っ!?!」

二人の叫びが遠くに聞こえる中、私は自分を抱えて走っている人物の顔を見る。

「やあ……姫。呆けている君も可愛いね」

はい。安定のロランさんでした。

さつきまでずっと姿を見てなかったら、どこかのタイミングで出て来るとは覚悟していたけど、まさかこの状況での乱入とは恐れ入るよ。

(私……今度はどこに連れて行かれるんだろう……)

色んな所に行っている割には、殆ど自力で動いてないよな…私つて。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「この辺りなら大丈夫かな?」

そう言うと、ロランさんは私を適当な木陰のある場所にそつと優しく降ろしてくれた。

「ああして他の何かに気が逸れれば、彼女達も少しは大人しくなるだろう」

「あ……」

ロランさんは、鈴とセシリアを止める為に敢えて私をさつきの場所から連れ出したのか……。

こんな風な姿をずっと見せてくれているならば、彼女とも普通に仲良く

なりたいと思わせるんだけど……。

「困っている君も、可愛らしくて微笑ましかったけどね」

その一言で全てが台無しです。

ロランさんの水着は周り白い縁がある赤い水着で、中々に露出が高い。

少なくとも、女子高生が着るような水着じゃないけど……。

(ロランさんって他の皆に負けず劣らずのナイスバディだから、凄く似合ってるんだよね……)

つくづく、私の周りの女の子達は高校生とは思えないスタイルの子達ばかりだ。

え？ 私も十分に高校生離れしたスタイルだって？

それを言われると否定は出来ない……。

「だが！ 海で優雅に泳いでいる君はそれ以上に可憐で美しかった!!」

……は？ 泳いでいる君？

「ま……まさか……ロランさん……も海……に……?」

「ああ。弥生が海に行つたと聞いて、急いで後を追つたんだ」

マジかよ!?! 海にまでストーカーですか!?!

「青く澄みきつた海を軽やかに泳ぐ君の姿は、まるで物語に登場する人魚姫マーメイドのようだった!!」

アンタもそれを言うんかい。

私は人魚って言うよりも、寧ろウツボ辺りが妥当じゃない？

「本当は水着姿も見てみたかったが、君のダイビングスーツ姿もまた素敵だよ。弥生のスタイルがとてもよく分かる」

そ……そんな事言うなよ〜!

ずっと自分に言い聞かせて気にしないようにしてたのに〜!

意識しちゃうと急に恥ずかしくなっちゃうじゃないか〜!

「ああ……! 恥ずかしそうに顔を赤らめるなんて……弥生はどこまで私の事を魅了すれば気が済むんだい? このままでは、私は理性と言う鎖を解き放ち、一匹の獣になつて君に襲い掛かってしまいたい……」

解き放たなくていいから！　なんとかして理性を保ってください

!!

「ん？」

息が荒くなってきたロランさんに危機感を覚え始めていると、私達の傍にビーチボールが転がってきた。

「ごめくん！　そのボール取って……って、板垣さんにロランさん？　なんで二人が一緒に？」

ボールを追いかけてきた女子が、私達の組み合わせにキョトンとなっていた。

確かに、私とロランさんが二人つきりているのは珍しいだろうな。

「ビーチバレーでもしているのかい？」

「うん。海の家で道具とか借りてきて、皆で向こうに即席のコートを設置したの。結構集まってきたよ」

「そうか……」

ん？　今度は何を考えている？

「いい機会だ。我が麗しの姫に私の勇姿をお見せしよう」

「麗しの姫って……板垣さんの事？」

「そうだが、それが何か？」

どうしてそんなにも真つ直ぐな目で答えられるんですかね、彼女は……。

（確かに板垣さんは私から見てもかなりの美少女だけど、姫って……。　って言うか、板垣さんも困ってない？）

あゝ…見られてるよく。絶対に変な奴だって思われてるよく。

「では行こうか。君、私達をコートまで案内してくれないか？」

「い……いいけど……」

私の手を取って立ち上がらせてくれたのはいいけど、その手は放してくれませんかねえ？

私達はそのまま、やって来た女子の後を追う形でコートまで歩いて行った。

.....

.....

.....

.....

.....

「お？ 弥生も来たのか？」

「くっ……！ 織斑一夏……！」

コートまで行くと、なんと、一夏がビーチバレーの審判をやっていた。

「なん……で一夏……がここ……に……？」

「いやな。弥生がラウラ達に連れていかれた後にこの子達に誘われてさ、少しだけやってたんだけど、その後に女子だらけの中に男が片方のチームにだけいるのは戦力バランス的にどうかって話になって、それからはずっとこうして審判をやってた」

私があそこを離れた後にそんな事になったのか……。

ここでビーチバレーするぐらいなら、私の事を追いかける甲斐性ぐらい見せるよな……。

(……あれ？ なんで一夏に少しだけムカついたんだ？)

な……なんか変だぞ、私……。

「なんだ。弥生もこっちにいたのか」

「やよつちと再会だ〜」

「姫様あ〜……」

一夏と話していたら、今度は箒と本音とラウラがやって来て、その後ろからはシャルロットと簪が歩いてきた。

ラウラに至っては、走って来て私にギュツと抱き着いてきた。

「よしよし」

毎度の如く、ラウラの頭を撫でてあげる。

一日一回はこれをしないと始まりませんな〜。

「あ、こんな所にいた」

「どうして一日に何回も弥生さんを見失いますの……？」  
疲れ果てた顔をしながら、鈴とセシリアもやって来た。

「あく！ ロラン！ あんたね……！」

「ははは……。君とオルコット嬢の諍いに姫を巻き込むわけにはいかなかったからね」

「だからって、弥生を勝手に連れて行くな〜！」

「そうですね！ まだ弥生さんに塗って貰ってない個所が……」

「まだ言うか!! もう諦めなさいよ！」

「嫌ですわ!! 弥生さんには私の体の隅から隅までオイルを塗って貰うと決めていきますの〜！」

「いつもの英国淑女はどこに行ったのよ！」

「次元連結システムで粉々に消し飛びましたわ!!」

「んな訳あるか〜!!」

この二人のやり取りって、もう完全にコントだよな……。

鈴とセシリアって、実は物凄く仲がいいでしょ？

にしても、地味に皆が集まってきたな……。

このまま行くと、あの二人も来そうな気が……。

「なにやら妙に騒がしいな」

「皆さん、楽しそうですね〜」

噂をすればなんとやら。

仕事を終えたのか、水着に着替えた織斑先生と山田先生も浜辺までやって来た。

(もう…マジでオールスター大集合だな……)

まさかとは思うけど、このメンバーでビーチバレーをするとか言わないよね？ ね？

けど、私はよく知っている。

こんな時の私の予想ほど、かなりの高確率で当たるって事を。  
人、それを『フラグ』と言う。



激闘？・死闘？・ビーチバレー！

他の子供達が遊んでいるビーチバレーのコートにて皆とまさかの合流を果たした直後、水着に着替えた織斑先生と山田先生がやって来た。

「ん？ どうした？」

「皆さん？」

ほあく……。

前々から知ってはいたけど、こうして二人の水着姿を見てしまうと、先生達が女性としてかなり高スペックだと言う事を嫌でも実感してしまう。

織斑先生は想像以上に黒のビキニがよく似合っているし、山田先生に至っては……

「……あの人、歩く度に揺れてるわよ」

「もう、あそこまで行くと反則級」  
全くだ。

胸が余りにも大きすぎて、今にも水着から零れ落ちそうな迫力の爆乳。

少し歩いただけでも激しく上下している。

「……………」

「姫様？ いかがなされました？」

はっ!? 冗談抜きで織斑先生達に見惚れてしまった。

いかんいかん……。幾ら綺麗だと言っても、相手は担任の先生であり同性。

それに見惚れるとか、ちよつとヤバいだろ……。

「む？ 板垣」

「は……はい……？」

ど……どうした？ ジツと見ていたことがばれたか？

「お前のその恰好は……」

「あ……」

そう言えば、二人にも説明はしてなかったっけ。

出発の際にも、荷物が大きさにビツクリはしていたけど、特に追及はしてこなかったしな。

「あの大荷物の中身はそれだったのか？」

「は……い……」

「成る程……。考えましたね」

「ここで感心されても困るけど、まあ……いつか。」

「ふむ……」

「千冬姉？」

「な……何故に私の体を舐め回すように見つめるんですかね？」

「何か変な物でもついてるかな？ ヒトゲとか。」

「体のラインが強調されていて、ある意味で水着よりも扇情的だな」

「えっ!?」

「皆の前で堂々とそんな発言はしないでください！」

「他の皆にも散々と言われてきたけど、この人が言うとうと重みが違って

くるんだよ！」

「自分の発言力を少しは自覚しているんですか!？」

「よく似合ってますよ、板垣さん」

「あ……りがとう……ござい……ます」

「こんな風に普通に褒めてくれればいいのに、どうして敢えて変な言葉を使ってくるのかな？」

「ところでお前等、ここで何をしている……って、見れば分かるか」

「はい！ 皆でビーチバレーをやっていました！」

「ビーチバレーね……」

「確か、普通のバレーとは少しルールが異なってくるんだよね。」

「詳しい事はサッパリだけどき。」

「ビーチバレー……ね……」

「お……おお？ なんか鈴の目が怪しく光ってるんですけど？」

「不気味な笑みまで浮かべちゃって、何を考えてるの？」

「丁度いいわ……！……ここで雌雄を決してあげようじゃない……!」

「し……雌雄って？ 何かここにいるメンバーに因縁でもあるの？」

「鈴。あなたの考えている事……分かるよ」

「そう……。アンタならそう言ってくれてくれるって信じてたわ。簪」

か…簪も鈴と同じ顔になった!?

二人してマジでどうしちゃったの!?

「簪!! セシリア!! そしてロラン!!」

「な…なんだっ!?!」

「はいっ!?!」

「何かな?」

いきなりの大声で指名を受けた三人。

ロランさん以外は鈴の迫力にかなりビビってた。

「今からビーチバレーで勝負よ!! 私達……『持たざる者達』の恨みと悲しみを今こそ思い知りなさい!!」

「一体何の話だ!?!」

簪が実にまっとうなツツコみをしてくれた。

割とマジで『持たざる者達』って何の事よ?

「別にビーチバレーの試合をするのは構わないが、そっちは二人じゃないのかい?」

「大丈夫よ。三人目ならそこにちゃんというから」

そう言ってこっちを見る鈴。

え? 三人目って私?

「ラウラ! とつとどこつちに来なさい!!」

「三人目って私の事か!?!」

……。あく……。そう言う事か……。

最近はずつかり鳴りを潜めていたから大丈夫だと思っていたけど、やっぱりまだ胸に対するコンプレックスはあったのね……。

「一夏!!」

「は…はひっ!」

「ちゃんと審判しなさいよ……! もしも誤審とかしたら、その時は……」

「その時は……?」

「……………振じ切るわよ」

「どこを!?!」

具体的な場所を告げない辺りが逆に怖い……。

元男なだけに、鈴がどこを振り切ろうとしているのか、一発で分かっちゃった……。

「弥生はそこで大人しく見てなさい！ この試合でアタシに惚れ直させてあげるから！」

いや、別に最初から惚れてないし。

仲のいい友達程度には思っているけど、それ以上には発展しようがないでしょ。

「アイツ等は無駄に元気だな……」

「あはは……」

呆れますよね？ 分かります。

私は先生達や残ったシャルロット、本音と一緒に近くにある木陰に移動。

その際に、シャルロットと本音が二人一緒に何かを持ってきてくれた。

「はい、これ。セシリアに連れて行かれた時に置いて行ったでしょ？」

「これ凄く重かったよ……。こんな物を背負って海に潜るなんて、やよっちは凄いね」

二人が運んできてくれたのは、私のボンベやゴーグルなどの潜水道具。

後で自分で取りに行こうと思っていたのに、わざわざ運んできてくれたのか……。

「ありがとう……二人……とも……」

ちゃんと笑顔でお礼を言えたかな……？

「う……うん！ 気にしなくてもいいよ!! 僕達が好きでやっただけだし!」

「どういたしまして。えへへ♡」

お？ こうして話している間に、試合が始まるみたいだぞ？

「なら、アタシ達が先攻ね！」

「ちよつと待て！ 本来ならばコイントスとかで決めるんじゃないのか!」

「うつさい!! 色んな意味でこつちが不遇なんだから、これぐらい優遇させなさいよ!!」

「なんだそれは?」

「滅茶苦茶ですわね……」

「これは……下手に彼女に逆らわない方が良さそうだな……」

なんかすつごい事を言ってるんですけど。

最悪、これって真ん中にコートがあるだけのバトルロワイヤルに発展とかしないよね?」

「くらえ!! 愛と怒りと悲しみの!! シヤイニングフィンガーサーブ!!!」

「そこはソードじゃないのか!?!」

もうさつきから箒はツツコんでばかり。

こりや、シャルロットに続く第二のツツコミ係の誕生ですな。

「名前はアレだが、実際には普通のサーブだ! これならば……!」

お? ロランさんが見事にボールを拾ったぞ。

「ゴラアツ!! なに胸を揺らして動いてんのよ!! あれか? あたし達に対するあてつけか!?!」

「そんな訳ないだろ!?! いきなり何を言い出すんだ君は!?!」

流石のロランさんも、鈴の理不尽な文句には大声を出さざるを得ないみたい。

まあ……無理も無いよな。

「何を鈴はあんなにも怒り狂っているんだ……?」

「ラウラもいつの日か分かる時が来る」

「そうなのか……?」

なんか簪がラウラをソツチの道へと引きずり込もうとしてるし!?!

ラウラ〜! お願いだから、君だけは純粋なまままでいてね〜!?

「元氣を通り越して、ただの馬鹿だな……」

「あれも若さなんですかね〜?」

「言うな……空しくなる」

いや。二人ともまだまだ十分に若いでしょうよ。

少なくとも、男にすつごくモテるような顔と体はしてるでしょ。

「だが、時にはあれぐらい体を動かして、ストレスを発散するのも悪くはない」

鈴の場合は、ストレス発散と言うよりは、個人的理由での嫉妬と八つ当たりだと思うけど。

「鈴と簪が完全に主導権を握ってるね……」

「ラウラウが困った顔で右往左往してるよ」

多分、生まれて初めてのビーチバレーのラウラ。

その人生最初のビーチバレーがこんなカオスな試合になるなんて、なんだか可哀想だ……。

よし、後で思いつきり頭ナデナデしてあげよう。

「板垣さんはバレーとかつてした事はあるんですか？」

「中学……の時……の体育の授業……だけ……でしか……」

「普通はそうだろうな。私も、学生時代に部活の助っ人ならやった経験はあるが、本格的な試合となるとあまり経験は無い」

織斑先生は剣道のイメージが強いからね。

でも、運動神経抜群のこの人なら、大体のスポーツは万能にこなせそうな気がする。

「試合自体は一進一退の攻防に見えるけど……」

「篠ノ之さん達のチームが凰さんと更識さんの迫力に押されてますね……」

あの鬼気迫る動きは尋常じゃない。

この怒りをISの試合でぶつけられれば、かなり強くなるだろうな。

「しかし、この試合で一番哀れなのは、間違いなく……」

「一夏……です……ね……」

さっきの鈴の発言に相当な恐怖を覚えたのか、顔を青くしながら必死に目配せをして誤審をしないように審判を頑張っている。

一つの間違いが自分の分身の命運を分けるんだから、そりや必死にもなるわな。

「あれもあれでいい経験だ。偶には悪くあるまじ」

で、私の隣にいる実姉さんは弟さんを敢えて谷底へと叩き落とす方針のようです。

男の子だしね。これぐらいの困難ぐらいは乗り越えて見せないとかこんな時ぐらい、根性がある所を見せてよね。

「あれ？ 板垣さん……さつきからずつと織斑君の事を見てませんか？」

「「えっ!?!」」

そ…そうかな？ 一夏の事を視界に入れていたのは事実だけど、そんなにもジツと見つめ続けてたっけ……？

(ま…まあ……これで弥生と一夏がくつついても、私には得しかないがな。弥生が私の義妹になる可能性が増えたと言う事だしな)

(ここにきてまさかの一夏の好感度が上昇!?! なんてっ!?!)  
(む………。なんでここでおりむ…が来るのかな…。)

なんだか山田先生以外の三人がこつちをジツと見てくるし。

私なんか見たって面白くないですよ？

そうこうしている間も、試合は増々ヒートアップ。

正確には、鈴と簪だけが無駄に熱くなっていた。

ラウラは完全にチームメイトである二人に翻弄されていて、対戦相手の三人も、迫力にはもう慣れた様子だが、それでも二人の形相に若干ドン引きしていた。

「も…もう体力の限界ですわ……」

セシリアがフラフラになりながらタイムを掛けて、その場に座り込む。

「なんだか私も疲れてきたぞ……」

それと同じタイミングでラウラもペタリと尻餅をつく。

「ならば、選手交代といこうか。真耶」

「はい！ 腕が鳴ります！」

お…つと！ ここて意外な乱入者のご登場だ〜！

「オルコット。私とチェンジだ」

「お…織斑先生……？」

セシリアが織斑先生とバトンタッチしてから、こつちへと戻ってき

た。

「ボーデヴィツヒさん、お疲れさまでした。後は私に任せてください」

「山田先生……後は頼みます」

ラウラも弱々しく山田先生とタッチして交代。

「姫さまあ〜…」

両手を広げながらこつちやつて来たラウラを出迎えてから、私はその場に座る。

「こ〜…に寝てもいい…よ……」

「お邪魔します……」

私の膝枕にラウラが頭を乗せる形になった。

そよ風を感じながら、ラウラの頭をそつと撫でていく。

「頑張った…ね……」

「姫様……♡」

部屋じゃラウラを膝枕するなんて日常茶飯事だしね。

もう今更って感じ。

「ここで織斑先生の加入とは、なんて心強い……ってっ!?!」

「弥生の膝枕だどっ!?!」

「なにいつ!?!」

おいこら。試合はどうした。

早く前を向かんかい。

「山田先生が加わったけど……」

「心境としては何とも言えないわね……。でも、それよりも……」

なんで鈴達もこつちを見る?!

(試合の後に『疲れた〜』って言えば……)

(私も弥生の膝枕を堪能できる!?!)

二人から怒りの表情が消えて、その代わりに邪な感情を感じたような気がする。

一体どんな目で何を見ているのやら。

「別の意味でやる気がアップしたわね……!?!」

「負けられない戦いが、そこにはある……!?!」

急に二人のテンションがヒートアップっ!?!



「それはこちらのセリフだと言わせて貰おう……!」

「これはまさに千載一遇の大チャンス……!」

「絶対に勝つ……!」

「こっちもこっちで妙に顔がギラギラしてるし!」

「板垣さんの膝枕ですか。気持ちよさそうですね」

「「「はっ!」」」

別に山田先生にならないつもりでもしてあげるけどな。

普段からお世話になってるんだし。これぐらいで恩返しになるなら、いくらでもしますけど?」

「つーか、試合に参加出来ない俺には最初から(膝枕の)権利すらないじゃねえか……」

なんの権利かは知らないが、一夏……哀れな奴。

「確か、こちらからのサーブだったな。では……いくぞ!!」

そう言っつて織斑先生がボールを高々を上げてからの……

「ふんっ!!」

その時、コートに一陣の風が吹いた。

「いつ!」

「嵐さん!」

凄まじいスピードのサーブに、鈴は咄嗟に反応してボールをレシーブするが、その衝撃で少し吹き飛ばされてしまった。

「な……何よ今の……。スピードもそうだけど、威力も半端じゃないんですけど!!」

いきなりの事でボールが明後日の方向に飛ばされてしまったが、それになんとか追いついて簪がボールを上げる。

「ナイスですよ! 更識さん!!」

そこですかさず山田先生がアタックの体勢に入る。

そうになると、必然的にあのでっかい二つのメロンがたゆんたゆんする訳で……。

「ていつ!!」

可愛らしい声とは裏腹に、そのボールは殺人的なスピードで反対側のコートに迫る。

「ぬあっ!?!」

「ロランっ!?!」

辛うじてロランさんがボールを弾く事に成功したが、それでも彼女の体はかなり後ろに下がってしまった。

「完全に外見に騙されたよ……! 山田先生……想像以上の強者のようだ!」

笑ってはいるが、その顔は完全に引きつっている。

ここから見ても分かる。

山田先生の身体能力も、十分にチートの領域に足を踏み込んでます……。

そこからはもう両教師のチート祭りだった。

二人の先生のアタックの応酬がひっきりなしに行われ、途中からは心なしかボールにオーラののような物まで見え始めた。

これじゃあもう、『少林サッカー』ならぬ『少林ビーチバレー』だよ!

十数分後。

立っていたのは織斑先生と山田先生だけになっていた。

他の4人は完全に精も根も使い果たし、砂浜に横たわっている。

「「はあ……はあ……はあ……はあ……」」

あの二人が入った瞬間から、なんとなくこの結果は読めてたな……。

「流石は教官……見事なプレイです……」

「それについてこれる山田先生も恐ろしいですわ……」

その後、流石に二人だけでは試合が成立しないと判断されて、勝者なき試合はここに幕を閉じた。

今回の一番の被害者は間違いなく、この色んな意味で常識と言う物から逸脱した試合の審判を半ば無理矢理やらされた一夏だろう。

……これからは少しだけ優しくしてやってもいいかもな。

あ、因みに、その後に食べたお昼ご飯はとても美味しかったとだけ追記しておく。

また食べたいにゃ♡ あの『超大盛り海鮮丼』♡



## 旅館での一時

海での楽しい(?)時間も終わりを告げ、今は夜の19時30分。大広間を三つも繋げた大きな大宴会場にて、私達は揃って夕食を楽しんでいた。

そうそう。なんでかこの旅館での食事中は浴衣の着用が義務付けられているみたいで、今は生徒達も教師達も皆揃って浴衣姿にコスチュームチェンジしている。

私の場合は、普通に浴衣を着れば首元や胸元、足や腕の一部が露出してしまっているので、首元にはバンダナを巻いて、浴衣は可能な限りギョツと締めて、いつもと同じように手には手袋、足にはニーソックスを特別に着用する事が許された。

この事は女将さんも了承済みで、どうやら、おじいちゃんから既に私の体については教えられていたみたい。

「美味し……い……♡」

「……………」

「おいおい……………」

「なんと……………」

ん? どうして皆して私に注目する?

早く食べないと、夕食の時間が終わっちゃうよ?

因みに、夕食のメニューは、お刺身と小鍋、それから今朝獲れたての山菜の和え物に赤出汁のお味噌汁とお新香のセット。

お刺身に至っては、なんとカワハギ。

なんでも、このカワハギは漁港から直送で運んできているみたいで、それが美味しくない訳がない。

実際、さつきからずっと私の箸は止まる気配が無い。

「い……いつ見ても、姫の食べっぷりは凄いな……………」

「まるで椀子蕎麦を食べてるみたいだ……………」

「これでもう何杯目だ……………」

私の右に座っているラウラと、左に座っているロランさんが目を丸くして箸を止めている。

正面には一夏が座っていて、同じように口がポカ〜ンと開けっ放しにしている。

他の皆はそれぞれにバラバラの場所に散ってしまったって、特にセシリアが悔しそうにしていた。

「おかわり……」

「早っ!？」

「板垣さんの周りに空の御茶碗が山のように重なっていく……」

「まるで、テレビに出てくる大食いの人みたい……」

なんか周りが騒いでいる間に、従業員さんがやって来て私の目の前にお茶碗におかわりをついでくれた。

流石にお刺身などはおかわり出来ないが、それでもここのご飯は本当に美味しいから、十分に満足している。

「と……ところで、ラウラ君はここで本当に良かったのかな？ 日本人ではない君には正座は辛いのではないか？」

「それならば心配無用だ。ドイツにいた頃から教官から似たような訓練は受けてきたし、姫様と一緒に暮らすようになってからも、正座に少しでも慣れておくようにと、普段の生活から正座を多用してきたからな」

「千冬姉……ドイツで何を教えてきたんだよ……」

IS学園は基本的に多国籍な学校だ。

それは生徒も教師も同じ事で、中には宗教上の理由や正座をする事が辛いと言った生徒だって少なくない。

そう言った人達の事も考慮して、旅館側で特別にテーブル席も用意して貰っている。

最初はセシリアも意地で正座をしていたけど、数分後には限界に達してしまっただけで、箒の勧めで大人しくテーブル席に移動していた。

「おや？ なにやら向こうが騒がしいね？」

「どうやら、シャルロットが間違っって山葵の小山を丸々口に入れちゃったらしい」

「ワサビとは、この緑の香辛料の事だな？ よく姫様も様々な料理に

使っていた」

「この山葵はそこら辺に流通している一般的なヤツとは違い、新鮮な生山葵を厨房にて直接摩り下ろしている。」

「だから、物凄くお刺身と合って超美味しい！」

「この鼻に来るツーンって感じが最高だよね〜♡」

「確かにこのワサビの味は独特だが、嫌いじゃないな。日本に来て初めて和食と言う物を口にしたが、個人的にはとても気に入ったよ」

「それ…は…よか…った…」

「故郷の味を美味しいと言われると、やっぱり嬉しいよね。」

「だから、原作第一巻の時の一夏のように、他国の料理を貶めるような発言はしてはいけません。」

「って言うか、私が許さん。」

「料理には、国それぞれの良さがある。」

「皆違って皆いい。」

「お前達。ちゃんと静かに食べているか？」

いきなり後ろの襖が開いて、私達と同じ浴衣姿の織斑先生が姿を現した。

「なんつーか……色っぽいです。」

「先生が来た途端に皆が静かになって、彼女に視線を集中させる。」

「ん？ 板垣……ソレはなんだ？」

「お茶碗……」

「いや、そうじゃなくて……」

「弥生がお代わりをした形跡……だよ」

「そ…そうか。ある程度の予想はしていたが、まさか本当にわんこ蕎麦みたいな状況になっているとは思わなかったぞ……」

「まだまだいけますからね〜。」

「この程度じゃ、まだ腹八分目にも満たないし。」

「で…では、あまり騒がずに食事をするんだぞ。それと、あまり食べ過ぎないようにな、板垣。主にこの旅館の為に」

「は……ん……」

「……はIS学園とは違うからね〜。」

あまり食べ過ぎたら、ここの経営を圧迫してしまうかもしれない。今回は大人の広い心で我慢をするべきか。

なら……あと20杯食べたら止めましょう！

少し顔を引き攣らせながら、織斑先生は食事に戻っていった。

「姫の胃は、もう既にブラックホールと言う言葉すら生温いな……」

何杯食べても全然飽きないな♡

よし！ おかわり!!

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

夕食後。

生徒達は思い思いの場所で夜の時間を過ごしていた。

かく言う私はというと、旅館内にあるお食事処でさっきの夕飯の続きをしていた。

だつて〜！ あれだけじゃどうも物足りないんだもん！

私と同じ部屋であるラウラと本音と箒の三人は、他のメンバーと一緒に温泉に行っている。

最初は私も誘われたけど、まだ食べ足りないから何か食べてくると言ったら、何故か速攻で納得された。

こっちの事情を知っているシャルロットがさり気無く私の事をフォローしてくれたのが大きかった。

彼女にはいつかお礼をしなくては。

で、今の私が何を食べているかと言うと……。

「替え玉……ください……」

「はいよ！ 替え玉一丁！」

ラーメンです。

しかも、これは唯のラーメンじゃない。

油が浮くほどにこってりしているように見えて、その実、口に入れたら凄くあっさりとしているとんこつスープ。

いい具合に縮れた麺がスープと絡み合って、いくら食べても飽きが来ない。

シャキシャキのもやしときくらげもいい味を醸し出している。

なにより、食べた途端に淡雪のように溶けて消えてしまうチャーシューが最高です!!

「板垣さん……と言いましたか。何度見ても、貴女の食べっぷりは見事の一言に尽きますね」

「小泉さん……も……気持ち……のいい……食べ方……だね……」

「それほどでも。あ、私も替え玉をください」

このラーメン屋で知り合った、謎の美少女の小泉さん。

金髪に見えて、実は黄色い髪をしている女の子で、どう見ても同い年ぐらいの女子高生に見えるんだけど、どうしてかこの花月荘にいる。

一見するととてもクールに見えるけど、ラーメンを食べている時は本当に美味しそうな顔をしていて、思わず見とれてしまう。

「おい……あそこのポニーテールにしている美少女二人組……」

「さつきからスゲー食ってないか……?」

「あれでもう何杯目だ?」

「分からねえ……」

なんかまた注目されている気がする。

あ、あれか。小泉さんが可愛くて皆が見惚れてるんだな。

確かに可愛いよね、小泉さん。

「いつか機会があれば、また今回のように板垣さんと一緒にラーメンの食べ歩きをしてみたいですね。後で番号の交換をしてくれませんか?」

「喜ん……で……」

小泉さん程のラーメン通と一緒に行く食べ歩き。



きつと、どこもかしこも名店揃いに違いない。

「想像しただけで涎が零れてしまいそうだ。」

おっと。もう無くなってしまうた。

では、ここでもう一声いきますか。

「替え玉ください」

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

ぷは〜♡ 食った食った♡

あんなにもラーメンを食べたのは久し振りだよ♡

特に、最後のラーメンライスが最高だった♡

やつぱ、締めは絶対にラーメンライス一択だよね！

とき卵をかけて少し煮込んで食べると猶よし！

しかも、小泉さんと言う『食友』まで手に入れて、私は大満足なのです♡

「ん？ 板垣か？」

いい気分で部屋に帰ろうとしていると、廊下でばったりと織斑先生と出会った。

でも、今の私はとてもいい気分なので、この人に対しても何にも思わないのデ〜ス！

「……………何か食べてきたのか？」

「向こう…のお店……………でラーメン…を食べてきま…した……………」

「そ…そうか……………。（その店、潰れたりしないだろうな……………）」

おや〜？ もしかして、先生もラーメンを食べたいのかにや〜？

そう言えば、この人ってかなりの酒豪だつて一夏が言っていたっ

け。

お酒とラーメンの愛称（相性？）もまたいいんだよね〜！

サラリーマンの人とかは、よく酒の締めとしてラーメンを食べる人もいるって聞くし。

「温泉には……まだ入れないか」

「はい……」

温泉となれば必然的に大勢で入る事になる。

そうなれば嫌でもこの体の傷跡を晒す事になってしまう。

可能な限り、それだけは避けたいと思っっているから、私は温泉に入りたくても入れないのだ。

ちよつぱり残念ではあるけど、こればかりは仕方が無いと諦めている。

「ふむ……。ならば、もう少ししてから入れればいい」

「え？」

もう少ししてから……とな？

「入浴時間が終了する少し前ならば、誰も入ろうとはしないだろう。念の為に私から女将さんにも伝えておこう」

おお〜！ これは実に嬉しいサプライズ！

偶には先生らしいこともするんですね。

「何か言ったか？」

「なに……も……」

出ました。お得意の読心術。

ほんと、この人って間違いなく超人の類だよね……。

「今はまだ他の連中が入っているんだったな……」

顎の手を当てて何かを思案する先生。

何を考えているかは知らないけど、今の私ならば大抵の事は許せる自信がありますよ〜。

「板垣……いや、弥生。今から時間はあるか？」

「別……に大丈夫……です……けど……」

「そうか。ならば、私の部屋まで一緒に来てくれないか？」

「はい……っ？」

織斑先生の部屋まで一緒に……？

一体何をする気なんだ？ 全く目的が分からない。

でも、ここで断る理由も無いし、この人が何を企んだのか興味もある。

ここはひとつ、行ってみるもの一興か。

「いいで……すよ……」

「そうか！ ならば、早速行くとしよう！」

「わ……」

いきなり私の手を掴んで、嬉しそうに歩き出す先生。

ラウラとおじいちゃん以外の人と手を繋いで歩くなんて、初めての経験だな……。

でも、なんでだろう……嫌な気分はしない。

・  
・  
・  
・  
・

確かに私は言ったよ？

今ならば大抵の事は許せる自信があるって。

うん……まあ……別に嫌じゃないよ？ 嫌じゃないけど……。

(どうしてこうなった……)

現在の居場所は旅館内に与えられた織斑先生(と一夏)の部屋。

一夏の姿は無く、どこかに行っているみたい。

で、重要なのはここから……

「どうした？」

部屋の中で正座をしている私の膝の上で、織斑先生がまるで生娘のような顔をして頭を乗せている。

先程、織斑先生が私に頼んできた事とは、なんと、耳掃除をしてほ

しいと言う事だった。

私に耳かきなんてされて何が嬉しいのか分からないが、折角の担任様からの頼みだ。

なんかかんだ言っても、私だってこの人に世話になってるのもまた事実。

この機に少しでも恩を返しておくものいいかもしれない。

「ジツとして……てください……いね……？」

「分かっているよ」

そつと織斑先生の頭に手を当てて、右手に耳かき棒を持ってから彼女の耳の中を覗きこむ。

勿論、傍にティツシュを一枚敷いておくことも忘れてはいけない。

(思ったよりもきれいにしてるじゃないか)

耳垢は殆どと言つていい程に無い。

でも、よく観察したら、細かな耳垢が見て取れる。

「で……は……いきま……す……よ……」

「ああ」

静かに耳の中に耳かき棒を入れていって、表面をなぞるように棒を動かしていく。

「おお……」

「痛かつ……た……です……か……？」

「い……いや。そんな事は無いぞ。少しくすぐったかっただけだ」

成る程。もう少し気を付けて動く事にするか。

(これは……聞いていた以上に気持ちがいい!! 一夏の奴め……!)

こんな気持ちのいい事を弥生にして貰ったのか……!)

先生の髪ってサラサラしてるなく……。

この肌触りは、同じ女としても羨ましいと思ってしまう。

(あ。少し奥の方に大きな取り残しと思われる垢があった。ちゃんと取れるかな……)

角度を考えながら、そつと奥の方まで棒を侵入させていく。

「んん……♡」

……なんか、艶めかしい声が聞こえた気がするけど、気のせいだよ

ね？

決して喘ぎ声とかじゃないよね？

「そこ……いいぞぉ……♡」

変な声を出さないでよ！ 集中できないじゃんか！

こつちも気恥ずかしくなってるし……。

「弥生は上手だな……。本当に気持ちがいいぞ……」

「それで……すか……？」

もう少しで取れる……。取れた！ 後はこのまま外まで持って

これれば……。

「……弥生には色々感謝しているんだ」

「……………」

い……いきなりどうした？

「一夏に勉強を覚えてくれたお蔭で、アイツもなんとか授業に追いついてこられるようになった」

最初の切っ掛けはアレだったけどね。

まあ、流石の私も、クラスメイトから落第生を出したくは無かったしね。

それが例え、あまりいいイメージを持ってない原作主人公でも。

「それに加え、お前は箒達の事を命懸けで守ってくれた」

あの時は、ああするしか選択肢が無かったしね。

じゃなきゃ、私の命も危なかったし。

「更には、弥生はラウラの事をいい意味で変えてくれた。無責任と思われるかもしれないが、私には出来なかった事をしてくれたお前に、私はとても感謝している」

ラウラに関しては、私が好きでやってるだけだし。

今では寧ろ、進んでやっている感が大きいしね。

「あのラウラがあそこまで弥生に懐くとは思わなかった……。ありがとう」

「どうい……たしま……して……？」

お？ やつと取れましたよ。

では、この戦利品をティッシュの上に置いて……つと。

「反対……を向いてください……い……」  
「よし」

おや？ 反対側を向く際に、なにやら織斑先生の顔が愉悦していた  
ような気が……。

(どうやら、アイツ等が来ているみたいだな。今はこのままにして反  
応を窺ってやるか……)

……気にしてもしょうがないか。

今は先生の耳かきに集中しよう。

おや。こつちも綺麗にしてるじゃないのさ。

これなら、さつきと同じ要領でなんとかなるかな。

さて、それじゃあ始めますか。

## 夜の女子会？

温泉でゆったりとして心も体も癒されたヒロインズは、揃いも揃って旅館内の廊下を歩いていった。

「温泉……本当に気持ちよかつたね♡」

「うむ。あれ程の温泉に入る機会など、これから先あるかどうか……」  
「ジャパニーズオンセン……しかと堪能しましたわ……♡」

彼女達の顔が僅かに火照って赤らんでいて、少しだけ体から湯気も出ている。

表情もとてもほんわかとしていて、まるで、今にも蕩けそうな感じだ。

「姫が……弥生が来なかつた事だけが唯一の心残りだったな……」

「し……仕方ないよ。まだ弥生はお腹が空いていたみたいだし……」

「あれだけ食べても、まだ胃袋に余裕があるなんて……。どんな構造をしているのかしら」

「あれが真のフードファイター……」

「なんと……!! 姫様は戦士でもあられたのか!？」

「いや、あれは単純に大食漢なだけだろ……」

「夜風が気持ちいいね♡」

他愛のない話をしながら歩くその姿は、多国籍と言う事を除けば、どこにでもいるごく普通の少女達の姿だった。

彼女達の内の殆どが、国の旗を背負った代表候補生だと、誰が信じるだろうか。

そんな彼女達が教師達の泊まっている部屋の辺りまで差し掛かった時、廊下の向こうから誰かが歩いてくる姿が見えた。

「お？ 皆揃って温泉に行ったのか？」

「一夏じゃない。アンタこそどうしたのよっ」

その手に缶ジュースを持って現れたのは、毎度お馴染みの織斑一夏だった。

既に缶は開いており、飲んでいる途中である事が窺える。

「いや。俺は普通に喉が渴いたから、そこら辺にある自販機でジュー

スを飲んでただけだよ」

「ふうくん……」

別に興味無さそうに頷く鈴だったが、その顔はすぐ傍にある扉から聞こえてくる声によって、一瞬で変化することになる。

「……ねえ……今、この部屋から何か聞こえなかった……？」

「ええ……確かに聞こえましたわ……」

「今のは……姫様の声？」

「ここは先生達の部屋……？　ここに居るのは……」

「千冬姉だよ。俺も一緒の部屋だけど」

一夏の何気ない一言で、少女達の顔がすぐに驚きに変わる。

「お……織斑先生だって……？」

「ま……まさか……私達が温泉に入っている隙を狙って……？」

「い……いや……私達の聞き間違いだと言う可能性も……」

などと言いつつも、少女達は既にドアにその耳を当てて、中の様子を窺おうと試みていた。

因みに、ラウラはなんとなく場の流れで聞き耳を立てているだけで、特に中での様子に興味は無い。

「なにやっつてんだよ……」

そんな彼女達を呆れた目で見つめる一夏。

本当なら今すぐにでも部屋に戻りたいが、目の前にいる少女達がそれを許してはくれないだろう。

『入れま……すね……』

『ああ……頼む』

(入れるっ!!　入れるって、ナニをどこに!!?)

扉の向こうから聞こえてきたのは、弥生の意味深な言葉と、千冬の気持ちよさそうな声。

普通の状態じゃないのは明らかだった。

『ちよつと……厄……介……』

『そこ……いい……』

『ここで……すか……？』

『そこだ……そこをもうちよつと……んんっ♡』



(ソコってどこですか?! もうちよつとってなんなんですか?!)

彼女達の頭の中で、妄想だけが一人走りしていく。

声だけを聞けば、明らかに女教師と女子生徒の一線を越えた体のやり取りである。

『……とっころで』

急に千冬の口調が変化した。

まるで、誰かに問いかけるような感じに。

『その小娘共はいつまでそうしているつもりだ?』

(ば……バレてる!?)

よもや、ドア向こうの事を完全に看破されているとは夢にも思わなかった為、ヒロインズは動揺のあまり、ドアを蹴破るようにして部屋の中へと流れ込んでしまった。

「み……皆……?」

驚いて思わず動きを止めた弥生の手に握られていたのは……。

「み……耳かき棒?」

部屋の中では、正座をしている弥生の膝の上に頭を乗せて、呆れた顔で少女達を見据えている千冬がいた。

その耳からは、弥生の所持している耳かき棒がによきつと生えている。

「んな事だろうと思ったよ……」

この事態を予め予想していたのか、一夏は頭を抱えながら溜息を吐いた。

「教官と姫様はとても仲良しなのだな……」

ラウラだけが一人だけ、場違いな発言をしたが、誰もそれにツッコむ余裕は無かった。

・  
・  
・  
・  
・  
・

耳かきを終えた弥生と千冬は、二人並んだ状態で乱入してきた少女達と対面していた。

一夏だけはどっちにつけばいいのかわからずに、両者の中間ぐらいの場所に座っている。

「まずは、ご苦労だったな、弥生。お蔭で耳がスッキリした」

「どうい…たしま…して…」

まるで最高級エステの帰りのように非常に清々しい顔になっている千冬を見て、心の中で羨ましいと思わずにはいられないヒロインズ。

しかし、下手に表情に出せば必ずからかわれると思っっているのと、緊張で上手く表情を崩せない哀れな彼女達だった。

約数名、例外もいるようだが。

「私もいつか、やよつちの耳かきを体験したいな」

「本音…なら…何時で…もいい…よ…?」

「やった〜♡」

「ひ…姫! 私も頼めるだろうか? 噂に聞く君の耳かきを、私も是非とも堪能したい!」

「ひ…暇…な時…:…:…:」

「分かった。その日を楽しみに待つとしよう」

顔が強張っている彼女達を余所に、目の前で先制攻撃を放つロランと本音。

この豪胆さを見習ってほしいものだ。

「ラウラ…:…:…:は戻っ…:…:てから…:…:またし…:…:てあげる…:…:ね…:…:」

「はい!」

ラウラも昔からのからの間柄故に千冬には特に緊張はしていないようだ。

逆に、弥生の目の前と言う事もあって、無邪気な子供のような顔を見せている。

「ま……またって……？」

「まさか、ラウラはいつも弥生に耳かきをして貰っていたのか……？」

「そうだが、それがどうかしたか？」

盲点だった。

弥生とラウラは同じ部屋。

耳かき等をして貰おうと思えば、いつでも機会はあったのだ。

本人に全く自覚は無いが、ラウラは今、確実にこの中で最も優位な立場に立っていた。

「こいつ等がここにいると言う事は、もう温泉も空いている頃だろう。そろそろ行ってきたらどうだ？」

「分かりま……した……」

この場において欲しいと言う一部の少女達の願いも空しく、弥生は立ち上がって部屋を出て行くとする。

「たっぷりと浸かって、日頃の疲れを癒してこい」

「はい……」

少しでも笑顔を見せてから、弥生は静かにこの場を後にした。

残されたのは、一夏と少女達と千冬のみ。

急に室内はシ～ンと静寂に包まれた。

「ん？ いきなり静かになつてどうした？」

「いや……幾ら大勢で押しかけたとはいえ、こうして千冬姉と向き合っているのは緊張するんじゃないのか？」

「そう言うものか？」

「まあ、俺みたいに普段から話し慣れている連中は別だろうけど。実際にラウラとか普通にしてるしな」

一夏の指摘通り、ラウラは弥生が去っても先程と同じ風に振る舞っている。

伸び伸びと足を広げて座り、のんびりとした様子だ。

「どうしてお前達は緊張しているのだ？ 教官とはいつも学園で顔を合わせているではないか」

「そうは言うけどね……」

「それとこれは別と言いますか……」

苦笑いをしながら顔を引き攣らせるシャルロットとセシリア。

簪も同様にガチガチになっていて、手に汗を握っている。

「つーか、簪と鈴は昔から俺を通じて千冬姉とも話してたじゃねえか。なんで今更緊張なんてするんだ？」

「いや、私がそんな風に話していたのは、もう随分と前の話だしな……。あの頃と今では状況も立場も違うと言うか……」

「そうか？」

「いまいち箒の心境が理解できない一夏。

「こんな所はまだまだ修行がいるようだ。」

「鈴は……そういや、前から千冬姉の事が苦手だったっけ」

「なに？ そうなのか？」

「ぼつ……！ 一夏！ 余計な事を言うんじゃないわよ！」

「いや、事実じゃんか」

「だからって、それを今ここで言うっ!? 少しは空気を読みなさいよね！」

「意味分からねえ……」

彼としては別に悪意を込めて言ったわけではないが、それでもKYな事は否めなかった。

「ふう……仕方のない。一夏」

「はいよ」

徐に立ち上がり、一夏は部屋に備え付けの冷蔵庫に向かい、中から予め購入していた人数分の飲料水を取り出して、それを持って畳の上に並べた。

ラムネとオレンジジュースとスポドリにアイスコーヒーにアイスココアに紅茶にアップルジュースにウーロン茶にコーラ。

それらをずらりと並べて、千冬は全員を見渡す。

「私の奢りだ。どれでも好きなものを飲むといい」

「んじや、俺はこのウーロン茶を貰おうかな」

「ならば、私はアイスコアを貰う。姫様がよく私に淹れてくれたからな」

「私はこのアップルジュースを頂こう」

「じゃあ〜…私はコーラをも〜らい！」

迷わずジュースを選んだのは、一夏とラウラと本音とロランの4人。

他のメンバーはいきなりの事に動揺して、どうすればいいのか分からないでいた。

「いらないのか？」

「「「い…いただきます…」」」

おずおずとジュース群に手を伸ばし、ようやく全員の手でジュースが渡った。

「では、私も飲むとするか」

「りよーかい」

まるで『分かってました』と言わんばかりに、一夏はいつの間にか取り出しておいた缶ビールを千冬に手渡した。

それを迷わずプシュツつと開けて、中身を喉に流し込む。

「ふう〜……。矢張り、一日の最後はこれに限るな……」

「あまり飲みすぎるなよ？」

「分かっているさ」

と言いつつも、千冬の手には二本目の缶が握られている。

「あ…あの……」

「よろしいんですの……?」

「何の事だ？」

「いや……その……」

「私達の前で…その…飲酒は流石に……」

そう言われて『ああ』と得心がいった千冬は、急にニヤリと笑った。

「そう固い事を言うな。もう私はお前達に『口止め料』は払ったぞ？」

「だな。今更って感じだよ」

『口止め料』と言われ、すぐに反応したのはロランと本音。

他の面々は頭の上に『?』を浮かべた。

「ま、下らない話はこれぐらいでいいか。そろそろ本題に入るとしよう」

座り直しながら缶ビールを畳の上に置き、一夏を含めた全員を改め

て見渡す。

「お前等、弥生の事はどう思っている？」

「「「「「「!!」」」」」」

弥生の名前が出た途端、全員の目が大きく見開かれた。

「わ……私は……最初はその可愛らしさに惹かれましたが、今は違いま  
す」

「と……言うとう？」

「弥生にこの命を救われた時からきつと、板垣弥生と言う少女に心か  
ら惚れているんだと思います」

「そうか……」

真剣に弥生の事を話す筈の顔からは、どれだけ弥生の事を思ってい  
るかが窺えた。

「私は勿論、弥生さんの可愛らしさは勿論、その優しさと温かさに惹か  
れましたわ!」

「ふっ……。私に対してその問いは愚問だな。私が弥生に惹かれる事  
は運命であり必然だった。それだけだ」

「あく……お前等にはこれ系の答えは期待していない」

ジト目になりながら千冬は手を振ってセシリアとロランに適当に  
対応した。

「あたしは……八つ当たり気味に悩み相談をしたあたしの事を真っ直  
ぐに受け入れてくれた弥生に、いつの間にか惹かれてたつて言うか  
……」

「その気持ちは私も理解出来るがな」

恥ずかしそうに自分の気持ちを吐露する鈴に同調する千冬。

優しげに笑いながら、ビールを口に運ぶ。

「ぼ……僕は……弥生や皆に救って貰って……それで……」

「お前の場合は言わずもがなだ。その瞬間をこの目で見ているから  
な」

ある意味で千冬も当事者と入れるので、シャルロットの言葉に敢え  
て言及はしなかった。

「私は……今まで友達がいなかったって言う弥生の友達になりたく

て、それで……」

「気がついた時には……か？」

「はい……」

顔を真っ赤にして俯く簪に初々しきを感じながら、ニヤニヤと笑顔を浮かべた。

「布仏も同じか？」

「はい……。私もやよっちの『特別』……になりたいです……」

いつものテンションがなりを潜め、急に大人しくなった本音。

これが彼女の本来の姿なのかもしれない。

「で、ラウラは……聞くまでも無いか」

「はい！ 今ならばハッキリと断言できます！ 私は姫様と一緒にいたい、姫様が大好きです！」

一切の迷いのない瞳でそう言うラウラの顔を見て、彼女の心の成長に喜びを隠せない千冬。

歳相応のこの姿こそが、ラウラになって欲しかった姿でもあった。

「お前達の気持ちはよく分かった」

缶の中に残ったビールを全部飲み干してから、最後に一夏と向き合った。

「ラストはお前に聞こうか。一夏、お前は弥生の事をどう思っている？」

「俺は……」

僅かな間だけ目を瞑ってから、静かに語りだした。

「俺は弥生が好きだ。冗談抜きで心底惚れている。弥生を護る為ならなんでもするし、どんな努力も惜しまない」

密かにテーピングされた自分の手をグツと握りしめながら、真っ直ぐに千冬を見据える。

「これからの人生の全てを、弥生を守り、一緒に過ごすために使いたい。俺はそう思っている」

「ふっ……そうか……」

『漢』の顔になった弟の成長ぶりを見て、『皆を守る』と馬鹿の一つ覚えのように言っていた頃を思い出し、微笑を浮かべた。

「だ…そうだぞ?」

挑発的にニヒルな笑みを見せながら少女達を見渡す。

その顔にはある言葉が書かれていた。

「一途になった男ほど厄介な奴はいないぞ? うかうかしていると、思わぬ伏兵に足元を掬われるかもな?」

「そ…そう言う織斑先生はどうなんですの!?!」

「私か? そうだな…」

ボクツと天井を見つめてから、三本目の缶ビールを開けた。

「…少なくとも、小娘共に遅れを取るつもりはない…とだけ言っておこう」

「「「「「!!」」」」」」

「??」

千冬の爆弾発言に、ラウラと一夏以外の全員が戦慄し、二人は小首を傾げている。

「精々頑張れよ? 私はそう甘くは無いぞ?」

恋するヒロインズの目の前に『織斑姉弟』と言う最強の障害が現れた瞬間だった。

…ラウラだけは例外かもしれないが。

今回もまた、弥生本人が預かり知らないまま、彼女を中心に人の輪が回っていく。

無自覚の内に様々な人々を引き寄せる。

これが『板垣弥生』と言う少女の本質なのかもしれない。



## 温泉に入ろう

織斑先生（と一夏）の部屋で耳かきをして、他の皆と入れ替わるようにして部屋を出てきた私は、先生に言われた通りに温泉に向かう為の準備をする為に、自分の部屋で入浴の準備をして、その足で温泉のある場所まで歩いていった。

（この温泉ってどんな場所なんだろうなく？　こんな事なら、おじいちゃんに予め色々聞いておけばよかった）

事前情報は本当に大事だ。

特に、今回のような旅行のような事になる時は特に。

柄にもなく心の中で浮かれながら歩いて行くと、『温泉入口』と書かれた入口っぽい場所に着いた。

その前には待つてましたと言わんばかりに、女将さんがニコニコ笑顔で待つていてくれた。

「待つてたわよ、弥生ちゃん」

「女将……さん……」

「あら。女将さんなんて他人行儀な呼び方じゃなくて、私の事は別に名前と呼んでくれてもいいのよ？　彼の義娘さんなんですもの」

「はあ……」

そう言われても、今日初めて会った大人の女性をいきなり名前で呼ぶような度胸は私には無い。

織斑先生だって、未だ嘗て名前と呼んだことが無いのに。

なかでか向こうはプライベートだと私の事を普通に名前と呼んでくるけど。

「次の機会があれば、その時は是非ともおじいちゃんと一緒に来てくれると嬉しいわ」

「おじいちゃん……に伝え……ておきま……す……」

この様子から察するに、おじいちゃんや皆はこの花月荘の常連さんを見た。

もしかしたら、ここでよく『会合』とかもしているのかも。

「って、ここで長話をしていたら入浴時間が終わっちゃうわね。ささ、

誰も来ない内に入るといわ。貴女の体の事は予めおじいさんや先生方から聞かされていたから」

「ありが…とう…ござい…ます…」

こう言った配慮が行き届いている所が、この旅館が人気ある所以なのかもしれない。

女将さん、もとい景子さんに軽くお辞儀をしながら、私は暖簾をくぐって温泉の待つ空間へと足を踏み入れていった。

・  
・  
・  
・  
・  
・

カポーン。

そんな音が実際に聞こえてきそうな石造りの温泉が、そこにはあった。

(ある程度は想像していたけど、まさか本当に露天風呂だったとは…)

これでも、それなりに色々な温泉には入ってきた私だけど、実は何気に露天風呂は初めてだったりする。

だって…なんか恥ずかしいじゃん…。

そんな私の恰好は、真っ白なバスタオルを胸まで体に巻いて、頭には髪を纏めたタオルを同じように巻いてある。

勿論、普段から傷を隠すために使用している包帯や腕袋などは全て取り外している。

つまり、バスタオルを除けば、今の私は文字通りの一糸纏わぬ姿なのだ。

どうだ？ 世の男共よ。私の裸体でも想像して興奮でもしたか？

……そんな奴がいたら、間違いなくリョナ属性の持ち主だろうよ。自分でも、この体がお世辞にも色気ある体であるとは言い難いのは誰よりもよく知っている。

(いやいや。こんな下らない事を考えている暇があったら、さっさとお湯に浸かるとしよう)

ここには私しかないんだ。何を恥ずかしがる必要がある。

と言う訳で、バスタオルを取ってから、体を洗い、その後に頭のタオルも外してから髪も洗った。

私の髪はかなり長い方なので、全て洗い終わるまで結構な時間が掛かる。

多分、この辺りは同じように髪が長い筈達も同様だと思う。

慣れればそうでもないんだけどね。

「ふう……」

頭と体を全て洗い終わり、またタオルで髪を纏めてから、ようやく念願の温泉に入浴。

私はこの時を……この瞬間を待っていたんだ！

「はふうく……♡」

足からゆつくりとお湯に入っていく、段々と体を浸していく。

肩まで体を浸からせると、全身の力を全て抜いた。

(これは……別に死んでないのに『生き返るうく♡』って言いたくなる気持ちがよく分かる……)

転生者である私は、ある意味では生き返っているから、この言葉は言っても問題無いかもしれないけど。

パシャつと体にお湯を掛けて、ふと、頭上に広がる夜空を見上げる。

「綺麗……だな……」

この辺は民家などが非常に少ないから、都会よりもよく星が見える。

よく星空の事を『カーテン』と描写する人がいるけど、これは本当に光り輝く星空のカーテンと言っても差し支えないレベルの美しさだ。

星座とかはあまり詳しくは無いけど、これを機に少しだけ勉強して

みようなな……。

ブクブクブク……。

「??」

な…なんだ？ 急に私の背後から泡が吹き出たような……？

い…言っておくけど、私はお風呂場でお湯に浸かりながら屁を出すようなお下品な女の子じゃありませんからね！

そんな真似をするのは一夏だけで十分でしょ！

(別に俺も風呂場で屁なんて出さねえよっ!?)

どこかで一夏の空しいツツコみが聞こえてきた気がしたけど、気のせいに違いない。

(にしても、本当になんなんだろう……?)

まさか、私の前に誰かが密かに入って来てた？

いやいや…それは無いわ。

だって、入り口の前には景子さんがいたんだし。

入ろうとすれば、確実に彼女に見つかってしまうだろう。

少し警戒しながら周囲を見ていると、いきなりお湯の中から何かが飛び出してきた！

「や~~~~~つちちゃん♡」

「きやあああああああああああああつ!?!」

後ろから誰かに胸を揉まれ

たあああああああああああつ!?!

っーか、今の声ってまさか!?

「あ…:…:やつちちゃんの生オツパイをこうして直揉み出来るなんて、頑張つて温泉の中で潜水していた甲斐があつたよ♡」

やつぱり篠ノ之束か!!

なんでこいつがここにいるんだ!? って言うか、今確かに『潜水』つて言ったか!?

まさか、今までずっとお湯の中に潜んでいたのか!? 冗談だろっ!?

「いい匂〜い♡ 体も柔らか〜い♡ 髪もサラサラだよ♡」

「ちよ……! 離れ…て……! 胸…放し…て……!」

なんとか彼女の拘束から逃れようともがくが、文字通りビクともし

ない。

力技でこいつから逃げる事は不可能か……！

(つーか、これだけ騒いでいるのに、どうして誰も来ないの!? 景子さんがそこにいる筈でしょ!?)

「あ。あの女将さんなら仕事があるからって、すぐにどっかに行ったよ」

マジですかっ!?

こっちの心を読んだかのように発言しないでくれますっ!?

織斑先生と云い、この女と云い……私の周りの大人の女性(一部だけ)はどうして、どいつもこいつも読心術の使い手なんだ!

「あれ〜? やっちゃん……もしかして『先っぽ』が勃ってる?」

「!?!」

まだまだ青春真つ盛りの子高生に向かって、なんつー事を言うんだこいつは!!

この……淫乱変態天災兎め!!

「本当はもうちよつとだけ、やっちゃんの魅惑のボディーを堪能したかったけど、やっちゃんの折角の温泉タイムを邪魔しちや悪いし、今はこれぐらいにしておこうか」

今っ!?! 今はって言ったかっ!?!

って事は、次回もあるって事なのか!?!

宣言通りに私から少しだけ離れてからお湯に浸かりだした篠ノ之束だが、その顔は凄くほくほくしていた。

その理由は……聞きたくないからスルーで。

「ううう……」

胸……揉まれた……。

一夏の時みたいに服越しじゃなくて、直に揉まれた……。

いくら同性とは言え、割とシヨックがデカイ……。

しかも、思いつきり体の傷も見られたし……。

「一応言っておくけど、やっちゃんの体の傷なら、最初から知ってたよ〜?」

うそ〜んっ!?! なんでっ!?!

「天災科学者の束さんは、なんでも知っているんだよ？」

「知って…いる…：…ことだけ…：…じゃなく…：…て…：…？」

「そのとくり。どこぞの怪異が出てくるロングセラーの人気アニメみたいなのに、知っている事だけ知っているって訳じゃなくて、本当になんでも知っているんだよ？」

なんでも…：…か。

不思議と意味深に聞こえるけど、気にしたら負けだよな…：…。

「もしかして、私にオッパイを揉まれた事がショックだったり？」

「当然…：…です…：…！」

あんな風に胸を揉まれて喜ぶのは、媚薬漬けにされたAV女優だけだったの！

「じゃあ、お返しに私のオッパイも揉む？」

「結構です!!」

なんでそうなるっ!?

普通に謝って、二度しないって誓えばいいだけだろうが!!

「オッパイ揉み揉みされて、顔を真っ赤にして…：…本当にやっちゃんは可愛いなく♡」

ニヤニヤしながら、また私に抱き着くなく!

美人のアンタに言われても、皮肉にしか聞こえないんだよ!

「あの…：…」

「んん？ どうしたのかにやん？」

「なん…：…で…：…こ…：…に…：…？」

「それは勿論、やっちゃんと一緒に温泉に入りたかったからだよ！」

本当にそれだけが目的だったのっ!?

「どうや…：…って…：…入って…：…きて…：…？」

「普通に上から来たけど？」

上って…：…空あつ!? 空から来たって言うのかっ!?

「ははは〜! 空締りはしっかりとしないとね〜」

空締りなんて言葉、初めて聞いたわ!

「にしても、本当にやっちゃんにこうして抱き着いていると、落ち着くねえ〜♡」

……それは私も感じていた疑問だ。

何故かは知らないけど、篠ノ之束に抱き着かれて驚きはしたけど、嫌悪感はなく感じたりはしない。

寧ろ、安堵感すら感じてしまうほど。

それは織斑先生も同様で、手を繋いで貰ったり、さつきみたいに耳かきをしている時も、不思議と安らかな気持ちに包まれていた。

これは一夏と筈にも言える事で、最初は恐怖感などしか感じていなかった二人も、今では普通に接している。

それは他の皆も同じなだけで、この二人だけは例外だった。

だって、一夏に勉強を教えている時は別に嫌な感じはしなかったし、無人機の時に至っては、絶対に筈の事を守らないといけないと言う謎の使命感に駆られた。

原作を知っている自分ならば、あそこで自分が行動しなくても、最終的にはどうにかなる事は知っている筈だったのに。

「そうだ。私の事は『束さん』って、名前で呼んでくれると嬉しいな〜?」

「え…つと……」

「嬉しいな〜?」

「あ…う……」

「う・れ・し・い・な〜?」

これは……言わないと離して貰えない流れだ……。

「……………束……さん……………」

「なあに〜? ふふふ……………」

今……分かった。

私はこの人には絶対に勝てない……。

この女と『親友』でいられる織斑先生をマジで尊敬するわ……。

「ねえ……やっちゃん?」

きゅ…急にどうした? いきなり声のトーンが変わって、シリアスな空気になったんですけど……。

「やっちゃんはさ……ISは好き?」

ISは好き……か。

いきなり、そんな事を言われてもな……返答に困るって言うか……。

「嫌い……じゃない……です……」

「嫌いじゃない？」

そこでオウム返ししますか。

よござんしよ。ここは一つ、私の持論を言いますか。

「IS…は人類…に可能性…を示した…と思いま…すか…ら……」  
「可能性？」

「人類…が遠い昔…から…夢見た…『空を飛ぶ』…こと…を実現させた…から……。空…を飛ぶ事…が出来る…の…なら…いつの日…か…もつと凄い…こと…も出来る…かもしれない……」

ISはその名の通り、人類と言う種に『無限の成層圏』に行ける可能性を示してみせた。

それでも、『人類には過ぎた代物』とか『オーバーテクノロジー』とか言われると何も反論出来ないけど、私的にはそれがどうしたって思う。

いつの世も、当時では考えられないような革新的な発明や理論や発見は数多く出てきた。

エジソン然り、ダ・ヴィンチ然り、ガリレイ然り、ニュートン然り。某戦士な機動でZのラスボスが言っていたセリフに『いつの世も世の中を動かしてきたのは一握りの天才だ』と言うものがある。

少し語弊があるけど、これはある意味では正しいと思う。

世の中を動かすと言うよりは、人類を一段階次のステージに上げたって言った方が正しいけど。

今回は、それがたまたま目の前にいる『篠ノ之束』だったに過ぎない。

要はそれだけの話でしょ？

かと言って、彼女の精神構造までは流石に全肯定は出来ないけど。それはそれ、これはこれだ。

「だから……私…は……IS……を発明…した貴女……を科学者…として…尊敬…して…ます……」



人としては全く尊敬の欠片も無いけどね。

あくまで『科学者』としてだからね！『科学者』として！そこ重要だからね！

勘違いとかしないでよね！

……いつから私はツンデレキャラになったんだ？

「やっちゃん……」

うおっ!? 束さんが急に目尻に涙を溜めだしたんですけど!?

あ…あれ？ 私なにか拙い事でも言った!?

「信じてた……やっちゃんなら、きつとISを……私を肯定してくれるって……」

あまり力が入っていないが、束さんが先程よりも深く私の事を抱きしめた。

「やっちゃん……私……」

そっと私の顔を両手で包み込み、そして……

「ん……」

いきなり、束さんにキスされた。口に。

「んちゅ……」

一切の遠慮も無く舌まで入れてきて、私の口内を蹂躪する。

なすすべなく、されるがままにされている。

けど、ここまでされていると言うのに、篠ノ之束と言う人間の事を嫌いになれない自分がここにいる。

「やっちゃんに出会えて……やっちゃんを見つけることが出来て……本当に良かった……」

「束……さん……?」

「この世界に生まれてきてくれて……ありがとう……」

この人は……何を言ってる……?

「これで人類は……救われる……」

不思議な空気に包まれて、キスされた衝撃なんかがどうでもよくなるぐらいに、束さんの言葉が脳裏に鳴り響いた。

それから少ししてから、束さんは入ってきた時と同じテンションに戻って、私ができる前に何処からか取り出したバスタオルを体に巻い

てから、まるで特撮ヒーローのように飛び跳ねて夜空の向こうに去っていった。

明日もまた出会うと分かっているにも、私はこの時の不思議な出会いをこれから先も忘れる事は無いだろう。

束さんの言った言葉の意味が理解出来る時、初めて私の：『板垣弥生と言う少女の体に刻まれた記憶』が初めて明らかになるのかもしれない。

不思議と……そう思った。

## 天災兎と催眠術師

臨海学校二日目。

今日はほぼ一日中を使ってISの各種装備試験運用とデータ取りを行う事に。

特に、自国から多数の装備などが送られてきている専用機持ちの皆はかなり大変だろう。

まあ、昨日あれだけ遊んだんだし、これぐらいはしないとね？

他の生徒達はそれぞれに早朝から皆で運び込んだ訓練機の前に待機をしていて、それとは別に専用機を所持している面々は別の場所に集まっている。

意外な事に、この専用機持ちの集団の中に箒の姿は無く、彼女は他の生徒達に交じって訓練機の前にいる。

(やっぱり、箒は束さんに紅椿の事をお願いしてないのか……？ でも、昨日ここにいたのは紛れもない事実だし……。だとしたら、向こうが勝手に持って来た……？)

一応、箒が専用機を持つ大義名分なら存在はしているが、彼女がそれを普通に利用するような殊勝な性格をしているだろうか？

否、それは無いと断言できる。

それは、昨日散々と彼女につき合わされた結果、この身を持って思い知った。

「……………ん？」

なにやら、妙な視線を感じるような……。

「う…美しい……………」

視線の正体はロランさんでした。

この人も代表候補生である以上は専用機を所持していて、当然のように私達の中に混ざっている。

何気に彼女のISスーツ姿を見るのって初めてな気がするが、別に気にする程の事でもないでのスルーしよう。

と言うか、下手に絡んだら絶対に碌な事にならないのは目に見えるので、何もしたくないと言うのが本当の気持ち。

しかし……出るとこは出ていて、引っ込んでいる場所はちやんと引っ込んでるよな……つて、なんでこの人、鼻にティッシュを丸めて突っ込んでるんだ？

「ああ……これかい？ 別に、姫のISスーツ姿が余りにもセクシーで興奮のあまり鼻血を出してしまったとか、そんな事は無いから安心したまえ」

モロに答えを言ってるじゃねえか……。

「さて、これで全員が揃ったな」

私達の前にいる織斑先生が私達全員を見渡し、満足そうに頷く。

昨日の夜とは違い、完全にお仕事モードになっています。

その隣には、山田先生がいつものように並んでいる。

「なにやらボーデヴィツヒが眠たそうにしているが、昨日はよく眠れなかったのか？」

「いや、そうではないようです」

比較的距離が近い場所にいた箒がこつちを見ながら言ってきた。

「逆に熟睡しすぎて、朝上手く起きれなかったみたいです」

「それでよく起きたな……」

「姫様に起こして貰います……ふあああ……」

本当に、今朝は危なかったよ。

でも、この私の目が黒いうちは、同室の子から遅刻者なんて絶対に出したりはさせませんよ？

原作と同じようにラウラを遅刻させなかった功績で、私は少しだけご機嫌なのです。

「近くで初めて弥生とラウラの朝支度を見させてもらったが……」

「本当の親子みたいだったよね♡」

それは仕方が無いじゃない。

ちやんと布団から起こしてから、寝ぼけたラウラの髪を整えて、歯を磨かせて、服を着させて、今日はいつもにも増して大忙しだったよ……。

「……話には聞いてはいたが、本当にお前も苦労してるんだな……」

「恐縮……です……」

これぐらい、もうどうって事無いけどね。  
完全に慣れちゃったし。

「寝慣れない布団故に遅刻しそうになったのは分かったが、二度目は無いと思え。あまり板垣に手間を掛けさせるなよ?」

「了解でありまああああ……」

言い終わる直前にまた欠伸が出ちゃった。

さつきから欠伸ばっかしてないか?

「では、これより各班ごとに予め振り分けられた機体の装備試験を行って貰う。お前達、専用機持ちは各種専用パーツのテストだ。それでは、素早くて的確にするように」

先生の言葉が終わると同時に皆が一斉に返事をし、一斉に作業に取り掛かった。

「あれ? 俺はどうしたらいいんだ?」

「織斑の白式には元々から他の機体のような換装パッケージは存在しない。だから、お前は他の連中の作業の手伝いをし、少しでも多くの知識を吸収しろ」

「分かりました」

成る程、そう言う手で来たか。

何もする事が無い一夏を助手にして、彼に勉強の機会を作ってあげた訳ね。

私的にも、そのアイデアはとて面白いと思う。

ISを動かすだけが全てじゃないからね。ちゃんと整備をしながら、ISもパイロットも十全に実力を発揮できない。

「弥生は何か届けられているの?」

「フレームと言う特性上、換装パッケージだけならリヴアイヴと打鉄の両方を利用出来そうですけど……」

むふふ。他の皆と同様に、ちゃんと私のアーキテクトにも色々なパーツが届けられているのですよ。

「色々……と届い……てる……」

「へえ。ちよつと興味があるわね」

そんなに大したものでもないと思うんだけどね。



「ここまでギリギリと言う擬音が聞こえてきそうです……。」

「ね……姉さん……?」

箒も尋常じゃない驚きようを見せている。

「やっぱり、何にも連絡とかしていなかったんだ。」

「ちーちゃん……ギブギブ。このままじゃ本当に束さん、頭蓋骨骨折しちゃう……。」

「別に死ななきや大丈夫だろう」

「なんと言う暴論!」

「すげー……織斑先生スゲー……。」

「この天災と付き合うには、これぐらいの豪胆さがないとダメなのか……覚えておこう。」

「もがいた末になんとかアイアンクローから解放された束さんは、数回ほど頭を振ってから、箒の方を見てこちらに手招きをした。」

「箒ちゃん、こつちこつちー!」

「……………」

「無言でこつちに来る箒だったが、その顔はお世辞にも姉に再会できて喜んでいようには見えなかった。」

「やっ! 箒ちゃんとも久し振りだね! 元気だった?」

「おかげさまで……。」

「姉妹間でテンションが違いすぎる……。」

「この差は余りにも激しいな……。」

「それと……。」

「ギクリ。」

「彼女がこつちを見た途端、猛烈に嫌な予感がした。」

「昨日振りだね! やっちゃん!」

「「なあっ!」」

「昨日の事を知らない箒と織斑先生が、目が飛び出しそうな勢いで驚いた。」

「ね……姉さんが弥生の事を渾名で呼んでいる……?」

「しかも……昨日振りとは何の事だ……?」

「そんなの決まってるじゃん。私とやっちゃんは、昨日沢山イチャイ

「チャしたんだも〜ん♡ ね〜？ やつちゃん？」

「私……に振らない……で……ください……い……」

その笑顔が眩しくて、別の意味で直視できません……。

「イ……イチャイチャ……？」

「あれ……？ 昨日は午前更衣室に行く途中であっただけじゃ……」

「そうだよね！ それだけだよね！ 何も余計な事を言うなよ!? 絶対だぞ!？」

「姉さん……」

「何かな箒ちゃ……いたたたたたたたたたたつ!? やめてっ!? そこら辺に落ちていた巻貝の先端で束さんのプニプニほっぺをグリグリするのはやめてっ!？」

い……痛そく……。

今にも頬を貫通しそうなんですけど……。

「弥生が困っているじゃないですか。少し離れてください」

「で……でもお〜……」

「幾ら姉さんでも、弥生を困らせるのだけは絶対に許しませんよ……!

もしも、これ以上弥生を困らせると言うのであれば、この場で姉妹の縁を切ります」

「それだけは勘弁してください」

速攻で謝った。

流石の我儘姫でも、妹と親友には勝てないようだ。

「束さん……」

「あつ！ じっくりん！ ちーちゃんと箒ちゃんが私をいじめるよ〜!」

「弥生とイチャイチャってどういう事ですか……？」

い……一夏の目にハイライトが無いんですけど〜っ!？」

なんか殺意の波動に目覚めとりますがな〜っ!？」

「そうだ……雪片の試し切りついでに束さんの髪を切ってあげますよ

……。スキンヘッドとモヒカン、どっちがいいですか？」

「ある意味で究極の二択っ!？」



東さんがここに来ただけで一気に場がカオスになった……。

「ただ破天荒なんだよ、この人は……。」

「よし、私が許可する。思いっきりやれ」

「了解」

「私に味方はいないのっ!?!」

寧ろ、いると思っていたのか?

「やっちゃんっ! やっぱり、東さんの事を一番分かってくれるのはやっちゃんだけだよ!」

「「「「「「あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝっ!?!」「」「」「」」」」」」

どさくさに紛れて私に抱き着くなくっ!!

しかも、しれっとお尻に手が当たってるんだよ!!

「東……さん……。なにか…用事…があつて……。来た…んじやない…んです…か……?」

「おっと、そうだった。やっちゃんが余りにも可愛くて、ついつい燥いじやったよ」

「ついつてなんだ、ついつて。」

「弥生の言う通りだ。東、一体何をしにここに来た。ここは基本的に関係者以外立ち入り禁止だぞ」

「いや、私はある意味で滅茶苦茶関係者じゃない?」

「それもそうだな……」

「そこで納得しちゃうんですか?」

「いやまあ……別に間違っちゃいないけど。」

「い……いいんですか?」

「ここまで来てしまった以上は仕方があるまい。昔から、こいつの行動を止められる者はいない。私でさえもな」

「はあ……」

山田先生が凄く困った顔をしてる。本当にご愁傷様です。

「実はね、今回は箒ちゃんにプレゼントを持って来たんだよ」

「プレゼント?」

「当人は小首を傾げているが、私にはその『プレゼント』の内容は分かっている。」

この世界において、これ以上にド派手な誕生日プレゼントも無いだろう。

「それはく……箒ちゃんの専用機でくす!!」

その瞬間、場の時が止まった。比喩でなく。

「「「「「えつゝゝゝゝゝゝゝゝゝ?!」「」「」「」」」」」

今度は専用機持ちの皆だけじゃなくて、この場にいる全員が驚いた。

私も一応、顔だけは驚いた振りをした。

「そ…そんな事、なにも聞いてませんよっ!? それに、私の実力じゃ専用機なんて……」

あの箒が謙虚な考えになってる。

この子もこの子で成長している……のかな?

「ま、箒ちゃんがそう言うのは分かってたんだけどね」

あら意外。こちらもまた普通の反応。

「でも、箒ちゃんには専用機が必須である理由が存在している。それはなんででしょうか? はい、やつちゃん」

「え……?」

わ…私? 答えろと? うわ……なんか全員の視線がこっちに集中してるし……。

うくん……箒が専用機を必要とする理由? 別にこの箒は力に溺れているわけじゃないから、その答えは論外として……。

いや、ここは私の原作知識を活かす時では?

まず、箒は言わずと知れた篠ノ之束の妹である。

束さんはISを開発した張本人で、世界的な超重要人物であると同時に、全世界指名手配をされている人でもある。と言う事は、つまり……

「あ……」

そっか……そーゆーことか……。

「分かった?」

「はい……」

「んじや、答え合わせ」

多分、この答えであっている筈……！

「筈……に専用機……が必要……な理由……それ……は……」

「それは？」

「自衛の為……です……ね……？」

「自衛……？」

「うん……。束さん……の頭脳……を自分達……の物……にする為……に……その妹……である筈……が狙われる……可能……性……があるか……ら……」

実際、筈やその家族を護る為に彼女はこれまで各地を転々としてきたと聞いている。

確か……政府のなんちゃらプログラム……だったっけ？ よく覚えてないや。

「そんな事が……「無い……とは言い切れんな」千冬姉……？」

一夏が何かを言おうとしたら、織斑先生がそれを遮った。

「私としたことが、その可能性を全く考慮していなかった……」

「そうですね……。IS学園にいれば安全かも知れませんが、一度外に出れば……」

そこには危険が一杯だ。

ISは指定された場所以外で展開してはいけないと言う規則があるが、それでも、専用機を所持しているだけでも充分に抑止力にはなりえる。

決して問題が無いわけじゃないけど。

「言いたい事は理解した。学園の上層部には私から後で報告をしておく。で、その専用機はちゃんと持ってきているんだらうな？」

「勿論！ 早速お披露目をして「いやあく……相変わらず、弥生ちゃんは頭がいいなあ〜」……はい？」

今度は束さんの言葉が誰かによって遮られた。

でも、今回聞こえてきた声はこの場にはいない人の声だ。だって、明らかに男性の声だったし。

ついでに言えば、私はこの声に聴き覚えがある。

さつき束さんがやって来た方向から、一人の男性が歩いてきた。

一言で言えば『髭眼鏡』なその人は、私がよく知っている男性だった。

「数か月振りだね、弥生ちゃん」

「鬼瓶……さん……？」

その人物の名は『鬼瓶久吉』

おじいちゃんの古くからの知り合いであり、私もよくお世話になった……催眠術師だ。

## 紅い椿と高速の襲撃者

超ハイテンションな状態の束さんのあとにいきなり登場した男性。私は彼の事をよく知っているけど、他の皆としては、全く見知らぬ男が突然現れたので、ポカーンと口を開けて驚いている。

「お…鬼瓶さん……」

「や。元気そうだね」

につこりと笑った鬼瓶さんは、手を振りながらこつちにやって来た。

それにいち早く反応したのは山田先生で、すぐに鬼瓶さんの前に立ち塞がった。

「あ…あの……何方かは存じませんが、ここは関係者以外の立ち入りは……」

「ああ、それなら心配ご無用。ちゃんと学園側から許可を取ってここにいますから。疑うようでしたら、今すぐにでも学園に連絡をしてみてください」

それを聞いて、即座に少し離れた場所に行き、そこで携帯を出してどこかに電話をし始めた。

多分、鬼瓶さんが言った通り、学園に確認の電話をしているんだろう。

一分もせずに山田先生はこつちに戻ってきて、その顔は驚きに満ちていた。

「れ…連絡を試してみたところ……学園側もきちんと彼の来訪を了承しているらしいです……」

「なんだと……?」

またまた驚く織斑先生。

今日は驚いてばかりだな。

「ね? 言った通りでしょう?」

「はあ……」

疲れ切った山田先生は、項垂れながら織斑先生の隣に戻った。

「失礼ですが、貴方は一体……」

「おっと。俺としたことが、自己紹介がまだでしたね」

「コホンとわざとらしく咳払いをして、鬼瓶さんは口を開けた。

「俺の名前は『鬼瓶久吉』。そこにいる板垣弥生ちゃんのおじいさんの古い知り合いで、今日は、そこにいらっしやる篠ノ之東博士と同様に、弥生ちゃんに色々届け物を持って来たんです」

「爽やかに自己紹介をする鬼瓶さんだが、それよりも気にかかる言葉が聞こえた。

（私に届け物がある……？）

「一応、こちらにも既に色々な武装は届いてはいるが、それ以外にも何かを届けに来たと？」

「これ以上、何を私にくれるって言うんだ？」

「鬼瓶久吉……もしかして、お前は……」

「俺がどうかしましたか？ 篠ノ之博士？」

「え？ え？ いきなり鬼瓶さんを睨み付けて、あの人つてば束さんに何かしたの？」

「いや……なんでもない」

「気のせいかもしれないけど、束さんの目からは憎しみとかの負の感情は全く感じなかった。

「寧ろ、何か警戒をしていると言うか、そんな感じが見て取れた。

「や……弥生！ あの人の……お前の知り合いって……」

「ほ……本当なのですか？」

「一夏とラウラが顔を近づかせて質問してきた。

「うん。気持ちには分かるけど、そこまでグイグイと来なくていいから。」

「本当……だよ……。私……も昔……に……お世話になっ……た事……があるか……ら……」

「そうそう。一応これだけは言っておく。

「鬼瓶さんはまだ20代だからね。」

「ヒゲのせいで少し年上に見られがちだけど、織斑先生や束さんや山田先生とは同年代なんだよ？」

「でも、弥生の知り合いの人がここに何を持って来たっていうのかし

ら？」

「ここに来たと言う事は、少なくともISに関係していると思うけど……」

普通に考えればそうだよね。

私もそうだとは思っているけど、この人が何を持って来たのかは皆目見当がつかない。

「それで？ 君はやっちゃんに何を持って来たって言うのさ？」

「それはですね……」

少しワクワクしながら鬼瓶さんの言葉を待っていると、いきなり変な事を言い出した。

「どうせなら、一緒に出しません？ 俺と貴女が持って来た物」

「一緒に？ ふくん……」

だよね。そんな事を言われたら、そりやジト目にもなりますよね。

「別にいいよ。どっちにしろ出す事には変わらないんだし。それに、君がやっちゃんに何を持って来たのか、興味が無いわけじゃないしね」

怒っているわけじゃない。かと言って、別に鬼瓶さんのことを蔑にもしていない。

なんて言えばいいのかな……？ この二人の間に流れている空気は、どこまでも相互不干渉な感じがある。

「では、いきますか」

東さんがポケットからスイッチのような物を取り出して、それをポチッと押すと同時に、鬼瓶さんが指をパチンツ！と鳴らした。

すると、さつきまで何も無かった上空から二つのコンテナらしき物体が降ってきた。

片方は二つのピラミッドが上下にくっついているような形をしていて、もう片方は横長の形をしていた。

二つとも綺麗な銀色をしていて、こっちの顔を見事に反射している。

「まずは私から見せるね。これが、私が箒ちゃんの為に用意した箒ちゃんだけの専用機。その名も……」

ピラミッド状のコンテナの分解、変形して行って、その中身が露わになる。

そこから出てきたのは、私もよく知っている真紅に輝く一体のIS。

「紅椿!!」

紅椿。

その名の通り、まるで紅く輝く一輪の華を彷彿とさせるISで、とても華美な機体だった。

でも、このISが決して見た目だけじゃない事は、この中でも束さんの次くらいによく分かっている。

「これが……私の専用機……?」

「そうだよ。さ、私は出したんだから、そっちもさっさと出しなよ」「分かっていますって。では……」

鬼瓶さんがコンテナを数回コンコンと小突くと、それに呼応するかのようにコンテナが展開していく。

「あれは……?」

「IS……なのか……?」

漆黒の装甲に二つのタイヤ。

あれ? あれってもしかして……?

「これが今回、僕等が用意した弥生ちゃんへのプレゼント。機体名は『ラピッド・レイダー』だよ」

それは、一台のバイクだった。

鋭敏な形状をしていて、こんな装甲を持つバイクは見た事が無い。

「これ……は……」

「随分と待たせたね。君がずっと欲しがっていた物だよ」

今度は私が冗談抜きで驚かされた番だった。

まさか、ここでバイクを持つてくるとは……。

「ちよ……待ってくれ! じゃなくて……待ってください! なんで弥生にバイク……? いや、それ以前に免許とか……」

皆の驚きを代弁するかのようには、一夏が一步だけ前に出て鬼瓶さんに詰め寄っていた。



「あれ？ 弥生ちゃん。何も話してないのかい？」

「忘れ……てた……」

「そういや、まだ説明をしてなかったっけ。」

「私とすることが、うっかりしていたよ。」

「弥生ちゃんは、こう見えてもバイクの運転免許を持っているんだよ」

「「「「ええ………」」」」」

再びこの場に驚きの声が木霊する。

ここに私達以外に誰もいなくて本当によかったね。

「じゃないと、絶対に迷惑になっていたよ。」

「あれ……？ 千冬姉達やラウラとシャルロットが驚いてない……？」

「何を言っている。教師である以上、生徒のプロフィールぐらいは把握していて当然だ」

「私達も最初は驚きましたけど、今時は十代で二輪の免許を持っている子も珍しくは無いですしね」

かく言う私もその手の人間だったりします。

苦労はしたけど、その甲斐はあったと思っている。

「僕もこっちに来る前に父さんから弥生に関する資料を貰っていたから知ってたよ」

「私もだ。姫様ならば、バイクの免許ぐらい持っていたても不思議ではないからな」

流石に、この二人も知ってたのは驚いたけど。

まあ、今更隠すような事でもないし、気にしてないけどね。

「でも、免許は持つていても、肝心のバイクを持っていなかったんだよ。それを可哀想に思った彼女のおじいさんが、弥生ちゃんの為に手製のバイクを製作したんだ。それが……」

「ラピッド……ライダー……」

これ……おじいちゃんが作ってくれたんだ……。

うわあ……めっちゃ感動してる……。

私一人だけなら、ここで間違いなく嬉しくて泣いてるわ……。

「む……！ やっちゃんがバイクを欲しがっているって知っていた

ら、私が作ったのにい〜……!」

「ははは……。でも、これは『あの人』が弥生ちゃんの為に作って初めて意味を成すんです。こればかりは貴女でも譲れませんよ」

「それぐらいは分かってるよ……」

「うらうら。そこでぶーたれない。」

東さん、まるで自分の我儘を聞いて貰えなかった子供みたいになっ  
てるよ。

「お披露目はそれぐらいにして、早く調整に移れ」

「りよ〜か〜い。んじゃ、箒ちゃん。こつちに来て紅椿に乗ってくれ  
る?」

「はい」

そこからは原作と同じように、箒が紅椿に乗り込んで東さんが超絶  
的な指捌きで空中投影型キーボードを操って、見る見るうちに紅椿の  
調整を終わらせていく。

その途中で『自動支援装備』とか『近接向きの万能型』とか言っ  
ていたから、性能自体は原作と同じと見ていいだろう。

「この機体……相当に高性能なのでは? 私の技量では……」

「大丈夫。箒ちゃんがそう言うと思って、ちゃんと機体の方にリミッ  
ターを設けてあるから」

「リミッター?」

そんなものを設置していたのか……。

でも、それならば、この紅椿は原作程チートじゃない?

「他のISのように形態変化する訳じゃないけど、箒ちゃんの成長と  
共に機体の性能が随時アップデートされていくようにしたから。今  
の性能は打鉄の上位互換ぐらいに思ってくれていればいいよ」

「打鉄の上位互換……?」

「もつと分かりやすく言えば、今の紅椿は第2・5世代つてところか  
な?」

本来の紅椿は第4世代型IS。

その性能を大幅に制限した結果、2・5なんて事になったんだろ  
う。

「向こうも盛り上がってるから、こっちも始めようか。弥生ちゃん、少し説明するから、ラピッド・ライダーに乗ってくれるかな？」

「は……い……」

大きく足を開いてから、私は待望の自分だけのバイクに跨った。  
うん。乗り心地は悪くないな。

「おおう……」

「弥生のISスーツがISスーツだから……」

「バイクに乗っている姿に微塵も違和感を感じないわね……」

「と言うか、ISスーツがまるでライダースーツに見えるんだけど」  
言われてみればそうかもしれない。

私のISスーツとよく見るライダースーツってよく似てるから。

「まず、メーターとかのデータは前方に投影型のディスプレイになって表示されるから」

お、ホントだ。これはまた新鮮だ。

「そして、これは従来のガソリンで動くんじゃないかって、アーキテクトのSEを利用して動くようになってるから」

「え？」

アーキテクトのSEを燃料にしている？

「簡単に言えば、アーキテクトの待機形態を身に付けた状態で乗って、機体内にあるSEを抽出するように使用するんだよ」

「なんでそんな面倒くさい事を……」

鈴の疑問も尤もだ。

けど、私はその理由がすぐに分かった。

「こうすれば、いざという時の防犯対策にもなるから。それに、これはただのバイクじゃない」

「それはどういう意味ですか？」

今度は織斑先生が質問した。

それは私も疑問に感じていた。

態々この場に持って来た以上、何らかの形でISと関わっている筈だ。

「このラピッド・ライダーの装甲の一部は、そのままアーキテクトに装

着して強化パッケージとして使用可能なのさ」

「なんと……！」

「それはまた……」

このバイクが、そのままアーキテクトを強化させるパッケージになっっているなんて……。

その発想は全く無かったわ。

「その証拠に、ラピッド・レイダーには武装も取り付けられているしね」

「あ、本当だ」

「二丁の回転式の拳銃に、あれは……」

「刀……か？」

そう。このラピッド・レイダーには丁度取りやすい位置に銃と刀が収納されている。

しかも、こつちから手を伸ばさなくても、装甲が開いて向こうから寄ってくるようになってるみたい。

なんじゃこりゃ。まるでクラウドの愛車のフェンリルみたいなバイクだ。

「お？」

隣で調整中だった紅椿が飛び上がり、私達の頭上で高速飛行をしている。

どうやら、調整が終わって試運転に移ったみたい。

束さんも箒に武装の説明とかをしながら、色々と聞いている。

(そう言えば、他の子達が嫉妬するセリフを言おうとしなかったな……)

さっきの束さんと私の問答を聞いたお蔭で、変な嫉妬心を起こさなかつたのかな？

下手に恨まれるよりはずっとマシだから、気にはしないけど。

「箒ちゃんが試運転をしている間に、ちよつといっくんのお白式を見せて貰ってもいいかな？」

「え？ 分かりました……」

いきなり自分に話が振られて虚を突かれた一夏は、慌てて白式を身

に纏った。

「ほう……あれが噂に聞く白式か……」

お……鬼瓶さん？ 今度は貴方の顔が怖くなってますよ？

「プスつとな」

どこから出したか分からないコードを白式に取り付けて、またもや投影型ディスプレイを出して何かを調べ始めた。

「ふむふむ……成る程ね……」

「あの……東さん」

「何かな？」

「なんで男の俺がISを動かせたりしたんでしょうか？」

「さあ〜ねえ〜？ そこの辺は現在調査中ってところかな〜」

知ってるな。絶対に一夏がISを動かせる理由を知ってるな。

この投げやりな反応は、本当に分からないんじゃないやなくて、答えるのが面倒くさいって感じた。

織斑先生も同じ事を思ったようで、渋い顔をして東さんを見つめている。

「よし。取り敢えず、今のデータは取り終えたよ」

コードをピンツ！と抜いてから、今度はこっちに来た。

その後ろで一夏は白式を待機形態に戻して、ホツと一息ついていく。

「次はやっちゃんのISを見させて貰ってもいいかな？」

「私……の……？」

私のアーキテクトは特別珍しい機体でもないでしょうに。

物珍しく見えるかもしれないけど、あれってフレームですからね？

その事は貴女が一番よく分かっているでしょうに。

「別にいいんじゃないかな？ 見せてあげても」

「鬼瓶さん……？」

「彼女なら大丈夫だよ。ね？」

あの鬼瓶さんがそう言うなら、ちょっと怖いけど、いいかな……。

ラピッド・レイダーに跨ったままで集中すると、アーキテクトが私の体に纏われていた。

「どう…ぞ……」

「それじゃ、遠慮無く」

アーキテクトの装甲にさっきのコードを突き刺して、またディスプレイで何かを見始める。

「ふふ……そっか、そっか……。ふくん……へえ……」

目の前で言われる科学者の独り言ほど怖い物は無いって自覚しましょう。

「ほお……。どうやら、予想以上に順調みたいだね……」

小声で呟いたから皆には聞こえなかつたみたいだけど、私の耳にはちゃんと聞こえた。

（順調……？ 何が『順調』なんだ？ ISには自己進化機能も備わっているから、その事を言っているのか？ でも、フレームであるアーキテクトの第二形態<sup>セカンド・シフト</sup>移行ってどうなるんだろう？）

仮にも専用機と言う物を所持している以上は、僅かながらも想像してしまふセカンド・シフトしたアーキテクトの姿。

フレームであるこの機体がどんな風に変化するのか、私には全く想像が出来ない。

やっぱり、フレームに装甲とかつくんだろうか？

「よし。こっちも終わり……っと」

多くの疑問は残ったが、この人が素直に話すとは到底思えないので、ここは黙っている事にする。

「本当はこっちも試運転をした方がいいんだろうけど、今は流石に無理だからね。それは戻ってからしてくれるかな？」

「それ…:はいい…:です…:けど…:…:どうや…:って持ち…:帰れば…:…:？」

「そのまま、アーキテクトの拡張領域に収納すればいいよ。ラピッド・レイダーはバイクの形をしたISみたいなものだからね。収納自体は可能だよ。アーキテクトにもそれぐらいの余裕はあるだろ？」

「一応……」

リヴァイヴもビツクリなくらいに拡張領域は広いからね。

確かに、その気になればバイク一台ぐらいはなんとか入れることは

可能だ。

「勿論、きちんと公道も走る事は出来るから。ナンバープレートもつけてあるんだよ」

降りてからラピッド・レイダーを後ろから見ると、ちゃんとナンバープレートが設置してあった。

近未来的なこのデザインに普通のナンバープレートって……なんかシユールだな。

「試しに収納してみてごらん」

「ん……」

ラピッド・レイダーに手を当てて精神を集中させると、車体が光り出してから粒子となって消えた。

拡張領域内を調べてみると、ちゃんとバイクが丸々一台収納されていた。

「すごい……！」

「拡張領域にバイクを入れるなんて、前代未聞だよ……」

「それだけアーキテクトの拡張領域が大きいと言う事でしようけど……」

私は全く自覚していなかったけど、他からするとバイクをISに収納すること自体が凄いつぽい。

いやまあ……冷静に考えれば驚きではあるよな。

「ふう……」

試運転を終えたと思われる筈が降りてきて、その両手に握っている二対の刀を腰に収納した。

「どうだった？ 乗り心地は」

「悪くはありません。打鉄の上位互換と言われたのも領けました」

使い勝手は打鉄を大差無かったみたい。

東さんの事だから、それすらも最初から計算に入れていたに違いない。

「え……？」

これでようやく本来やるべき事に取り掛かれる。

そう思った矢先に、山田先生の持つ携帯がポケットの中で震えだし

た。

「少し失礼します」

携帯を持ったまま織斑先生に一言言ってから、岩陰に向かった。

「山田先生に電話……」

「恋人とか？」

「まさか……とは言い難いよね……」

山田先生って可愛いから、絶対にモテるよね。

私も、あの人なら喜んで嫁にしたいもん。

(でも、あの電話はそんな呑気な内容じゃないだろうな……)

このタイミングで来る連絡と言えば、一つしかない。

「た……大変です!! 織斑先生!!!」

「いきなりどうした？」

「実は……」

私達に聞こえないようにして、二人が小声で話し始めた。

けど、この場で唯一ISを展開したままの私には二人の声が聞こえてしまった。

「なんだと……! ハワイ沖で試験稼働していたアメリカ・イスラエルが共同開発したISが突如として暴走したっ!」

「はい……。特務任務レベルA……現時刻より直ちに対策を始められました……とのことです」

「そうか……!」

遂に来てしまったか……!」

手袋の中で汗を滲ませて、心臓の鼓動が激しくなるのを感じながら、私は体が震えるのを必死に抑えていた。

この震えが武者震いなのか、それとも恐怖なのか、それは私にも分からなかった。

そんな私を、束さんがジッと見つめていたが、この時の私にはそれに気が付く精神的余裕は無かった。



## 角の生えた緑の防人

東さんと鬼瓶さんがやって来て、私にラピッド・レイダーを、箒に紅椿をくれて、和やかな空気だったのが一変し、急に超シリアスモードになった私達。

いきなり今日の予定が全て中止になり、急遽、IS学園は作戦行動に移る事になった。

この時点ではまだ詳しい事は話されてはいないが、私だけはその理由を明確に知っている。

他の生徒達は全員がこの場を片付けた後に旅館の自室にて待機を命じられ、それとは逆に代表候補生を初めとする面々は、織斑先生に呼ばれて一緒に着いて行くことに。

その際、候補生ではない専用機持ちである私と一夏と箒の三人も念の為と言う事で一緒に呼ばれる事になった。

突然の予定変更に、何も事情を把握してない生徒達はかなり混乱していたが、織斑先生の喝で大人しくなり、静かに旅館へと戻っていた。

本音は私達の中で唯一の一般生徒であるが故に、皆と一緒に旅館へと帰っていったが、彼女の場合は同室である私と箒とラウラの三人が一気にいなくなるため、特別に他の子の部屋で待機をする事を言われた。

私もそうだが、他の皆も目に見える緊張を隠しきれないようで、普段は余裕の表情を見せている、あのロランさんですらも滅多に見せない真剣な顔をしていた。

それを見て、私は改めてこれから起きるであろう戦いの大きさを思い知った。

さつきから手に汗が滲んで止まらない。

私はちやんと皆の役に立つことが出来るのだろうか……。

.....

・  
・  
・  
・  
・

数時間前 アメリカ ハワイ沖 米軍所属大型空母

甲板の上で悶えながら倒れている二つの人影があった。

二人共女性で、ISスーツを着ている事から、アメリカ所属のIS  
操縦者である事が分かる。

「う……チクショウが……！」

「ク……！」

そして、それを冷たい目で見下している二人の女。

これまでにフランスとドイツに姿を現した、ラケシスとアトロポスの  
姉妹だった。

今回は、この二人もISスーツを身に付けている。

ラケシスは黒地に白、アトロポスは白地に黒と、姉妹で真逆のデザ  
インになっていて、彼女達の性格を表しているようだ。

「随分と呆気なかつたですね。アメリカ代表とその相棒と聞いて、少  
しは期待をしていたのですが……」

「……………」

「そうですね。彼女達と『彼等』を同列で比べてはいけませんね」

今回もラケシスは一言も喋らないが、それでも何故か意思の疎通は  
出来ている。

そのラケシスの傍には、一体の白銀のISが聳え立っていた。

「返して……返しなさい!!」

『返せ』と言われて素直に返すようでしたら、最初からこんな場所ま  
で来て強奪なんてしませんよ」

「テメエ……！」

「アメリカ代表イーリス・コーリングに、この『銀の福音』シルバリオ・ゴスベルの正規の  
パイロットのナターシャ・ファイルス。確かに貴女方は優秀な軍人

だ。しかし、それはあくまで『人間』の尺度で考えた結果に過ぎない」  
「それは……どういう意味……」

「そのままの意味です」

苦しそうにしながらも目だけは二人を睨み付けているイーリス。

その周辺にはISの装甲の破片と思われる金属片が散乱している。

「このアタシが、あんな小娘にISで圧倒されるなんて……!」

「私に勝てないようでは、姉さまに勝つなんて一生かかっても不可能ですよ」

ナターシャとイーリスに興味が無くなったのか、アトロポスは二人から目を逸らして、手元にある端末を使って何かを操作し始めた。

すると、ラケシスの隣にある銀の福音の装甲がいきなり開かれて、搭乗体勢になった。

「ま……まさかっ!?!」

「そのままかです。姉さま、準備は出来ました。いつでもどうぞ」

コクンと頷き、ラケシスは慣れた動きで銀の福音の操縦席へと乗った。

「やめなさい!! そもそも、正式なパイロット以外が専用機を動かす事は出来ないのよ!! それぐらい分からないのっ!?!」

「馬鹿にしてるんですか? その程度の知識ぐらい知ってますよ。だから、ちよつとした『裏ワザ』を使うんじゃないですか」

「裏ワザって……もしかしてっ!?!」

二人の脳裏に最悪の状況が過った。

「ふざけんなっ!! んなことしたら、コアにどんな負担が掛かるか分かんねえぞ!!」

「そうですね。でも、これは私達のISじゃありませんので、別に知った事ではありません」

相変わらず、冷たい氷の視線を見せつけながら、なにやら端末を操作し続けるアトロポス。

「よし……これで……」

彼女が何かを呟いた瞬間、なんと、ラケシスが乗った銀の福音が起動して、中に浮遊し始めたのだ。

「そ……そんな……」

「嘘……だろ……」

自分以外の操縦者を愛機が受け入れた。

その事実が信じられないナターシャは、その目に涙を浮かべた。

「少し強引ではありませんでしたが、コアのハッキングには成功しました。これで、その機体は姉さまの思うがままに動きます」

妹の言葉を聞いて、ラケシスは試運転のつもりで付近の空を高速移動して、体と機体を馴染ませる。

「首尾は上々のようですね。ならば、後は作戦通りに」

一回領いてから、ラケシスはバイザーに隠れた目を海の向こうに向けて、凄まじい速度で飛び去って行った。

「スペックデータは知っていましたが、直に見ると、中々の高性能機のようにですね」

「……………」

アメリカ代表と現役の軍人が揃いも揃っているにも拘らず、目の前で最需要機密とも言うべき軍用ISを強奪された。

その事実、ナターシャとイーリスの心に確実なダメージを与えた。

（後は、アメリカ軍のコンピューターにハッキングをして、銀の福音が『強奪』ではなく『暴走』した事にして、IS学園に救援を要請するよう仕向ければ、全ての作戦は完了する。こちらの情報が正しければ、IS学園の一年生は臨海学校とやらで、姉さまが向かった方角の旅館に宿泊していると聞きます。そして、そこにタバネ・シノノも向っているとも。あの女はどのような動きを見せてくれるでしょうかね……）

ここでの仕事を終えたアトロポスは、姉に続いてこの場から去ろうとするが、そこに傷ついた体を振り絞って立ち上がったナターシャとイーリスの二人が立ち塞がった。

「テメエだけは帰すかよ……!」

「貴女だけは……絶対に許さない……!」

「別に許す、許さないは勝手ですが、そんな風に風下に立ってでもいいん

ですか？」

「は？」

そう言うと、アトロポスは拡張領域から一個の手榴弾を取り出して、二人の間に放り投げた。

「ちっ！」

「しまったっ!？」

しかし、手榴弾は爆発はせずに、その代わりに大量の煙を吐き出した。

「こ…これはっ!？」

「人間にだけ効果がある特殊な催眠煙幕です。では、おやすみさない」完全に油断をしていた上に、精神的にも肉体的にも疲弊していた二人は、その煙を思い切り吸いこんでしまった。

「い…意識が……」

「クソがあ……!」

意識が段々と遠ざかり、自身の体が甲板に倒れる中、ナターシャは一つの疑問を感じていた。

（人間にだけ効果があるって言ったのに、どうして…あの子には通用…してない…の…?）

その考えを最後に、ナターシャの意識は真っ黒になった。

誰かがどこかへと歩いて行く靴音が、静かな海に響いた。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

花月荘の最奥に設けられた宴会用の大座敷である『風花の間』では、私達全員が揃って正座をした状態で織斑先生の説明を聞いていた。

部屋には各種モニターや機器が持ち込まれていて、簡易的な会議室兼司令室となっている。

実際に、山田先生がコンソールを操作しながらデータを整理を行っていた。

「ところで……」

「ん？」

「どうして……二人がいる……!?!」

眉間に血管を浮きだたせながら、説明途中の織斑先生が私達の後ろにいる部外者である二人、束さんと鬼瓶さんを睨み付けていた。

「私なら、色々と役に立つと思うけど？」

「それ以上に、お前は周囲に迷惑と混乱を撒き散らすだろうが」

「ひどくいい！ やっちゃくん！ 束さんを慰めて〜！」

「むぎゅ……」

「姉さん!!」

この空気の中で、よくそんな発言が出来るなっ!?

って、私に後ろから抱き着くな!! 胸に手を伸ばそうとするなよ!!

「ほらほら。若い子達の間前で刺激の強い行為は控えた方がいいと思いますよ?..」

「ええ〜？」

「それに、弥生ちゃんにセクハラもよくありません。彼女に何かあれば、『あの人』が黙ってませんよ?..」

「それを言われると……ね」

鬼瓶さんが言ってる『あの人』って、おじいちゃんの事だよね……?

え?.. 何?.. 束さんっておじいちゃんには頭が上がらないの?

マジで?

「それで?.. 貴方は何故いるのですか?..」

「俺?.. 俺はですね……」

いつの間にか手に持っていた端末を操作して、ある映像を私達に見せつけた。

「ここにいる全員に、作戦なんか立てなくてもいいって言いに来たん

ですよ」

「なんだと……う？」

訝しげに鬼瓶さんの見せる映像に視線を向ける織斑先生に合せて、私達も一緒に映像を見る事に。

そこには、綺麗な青空が映っていて、下には海らしき水面が見えたから、これはどこかの海域周辺を映した映像なんだろう。

どうやってこれを映しているとか、そう言ったツツコみは野暮なので誰も言わない。

勿論、私も言わない。

「この空がどうかしたのか……？」

ラウラが私達全員の言葉を代弁してくれたが、それに答えるように鬼瓶さんは映像をズームさせた。

拡大された映像を見て、私は我が目を疑った。

「う……そ……!?!」

そこには、どこかで見た緑色の恐竜(?)を模したキグルミのような物体が宙に浮き、見事なガイナ立ちを披露していた。

「もう既に、この国における『最大防衛戦力』が出撃しているんですよ」

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

緑色の着ぐるみ——『スペースガチョビンスーツ』は、沈黙を保ちながら何かを待ち続けていた。

「……………来たか」

その視線の先から、光り輝くナニかが高速飛行でこちらへと向かってきた。

ナニか……『銀の福音』は、スペースガチョビンスーツの眼前で静止し、互いに対峙するような形になる。

「成る程。あの『銀の福音』が暴走して、この海域を高速で飛行中だと聞いていたが、どうやら本当だったようだな」

『……ザザ……』

ノイズのような音が聞こえた後、福音からボーカロイドのような合成音声が届いてきた。

『ココデ待ち構エテイタト言ウ事ハ、貴様ガココデ私ヲ食イ止メルツモリ……ト言ウ事力?』

「そうだと云ったら?」

『決マツテイル』

福音が構え、臨戦体勢を取る。

『押し通ル』

……が、福音の目の前にいた筈のスペースガチョビンスーツはどこにもいなかった。

「出来るのか? お前に」

『!!?』

突然の声に反射的に距離を取る。

スペースガチョビンスーツは、福音の背後に回っていたのだ。

『貴様……!』

「ここは何があっても絶対に通さん」

そこで初めて、スペースガチョビンスーツは腕組みを解いて構えを取る。

(情報では『暴走』と言っていたが、こうして会話が成立すると言う事は、間違いなく何者かによって福音が『強奪』されて、何らかの方法で半ば強制的に運用されていると見るのが普通だな……)

全く表情が変化しないキグルミの中で、冷静に状況を整理する。

両者の間に潮風が吹き、緊迫した空気が流れる。

二人の下で魚が跳ねて、ポチャン……と海に落ちる。

瞬間、両者の姿が消え、激しい音と共に激突した。

激突の衝撃だけで海面に波紋が生まれ、その壮絶さを物語る。



福音は僅かに上空に昇り、そのウイングスラスタから無数の光弾の弾幕を展開する。

それ光景はまさに光の雨であり、一つ一つが羽のような形状をしている。

その圧倒的な火力は、それだけで見る者を戦慄させる。

だが、スペースガチョビンスーツは微塵も怯む様子を見せず、降り注ぐ光の雨に向かって突撃した。

『ナニッ!?!』

一発でも被弾すれば、そこから一気に倒される。

そんな状況であるにも関わらず、スペースガチョビンスーツは全ての光弾をギリギリで回避していく。

まるで物理法則を無視したかのような、急停止、急加速、急旋回を駆使して、緑の軌跡を青空に描いていく。

『クッー!』

相手の圧倒的な回避力を見て、下手に射撃戦に持ち込むのは逆効果だと早々に判断した福音は、すぐに光弾を止めて、その出力をスラスターに回し、射撃は必要最低限にしながら、高機動戦闘へと移行した。勿論、スペースガチョビンスーツもそれをすぐさま察し、相手を追撃するように超高速で福音を追尾する。

遥か上空で、白と緑の軌跡が何度も激突し、その度に大気が震え、紫電が迸る。

国家代表でも不可能な人知を超越した死闘が、この海域で繰り広げられた。

見た目からは想像も出来ない超高性能を発揮するスペースガチョビンスーツ。

これが現在、日本を守る最強にて唯一の希望である事を、大多数の人達は全く知らない。

緑の恐竜と銀の機械天使の死闘は、加速する。

## 宇宙恐竜大換装

弥生の知り合いだと言う男の人『鬼瓶久吉』さんが俺達に見せてきた映像に、俺達は目を奪われた。

何故なら、そこには俺達がつい先程説明された、暴走したと言われているアメリカとイスラエルが共同開発した軍用IS『銀の福音』シルバリオ・ゴスベルと壮絶な戦いを繰り広げている一体の着ぐるみがいたからだ。

「なあ……あれって……」

「言わないで、一夏……。あたし自身も我が目を疑ってるんだから……」

唯一、話が分かりそうな鈴に声をかけたが、すぐに封殺されてしま  
う。

けど……アレって……アレだよなあ……。

「嘘……でしょ……?」

「や……弥生さん? どうしましたの?」

「姫様?」

「姫……? 少し様子が変だぞ?」

ロランの言う通り、弥生は映像を見た途端に俺達以上に驚いていて、さつきからずっと目を見開いて、口を開けっ放しにしている。

こんな驚いている弥生を見るのは初めてだ……。

「お……鬼瓶……さん……これって……ま……まさか……」

「その『まさか』……だよ。弥生ちゃん」

「そんな……」

まさか? まさかってなんだよ?

「スペース……ガチヨビン……スーツ……。完成……してい……たの……?」

「は……?」

スペース……なんだって?

「い……板垣は、アレがなんなのか知っているのか?」

「は……はい……」

千冬姉の質問に、体を強張らせながら頷いた弥生。

その顔には汗が滲み出していた。

「スペースガチョビンスーツ……。私の……。おじいちゃん……。が長い年月……を掛け……て……製作……した……。パスワードスーツ……。です……。」「パスワードスーツって……」

それってつまり、ISに近い存在なのか……？

「ちよ……ちよつと待って。やつちちゃんのおじいちゃんかアレを製作したって事は、今アレを着て戦っているのって……」

「勿論、製作者である弥生ちゃんのおじいさんですよ」「なっ……!?!」

じよ……冗談だろ？ 弥生のおじいさんが、アレを着て暴走した軍用ISとたった一人で互角以上の戦闘を繰り広げているってのかつ!?! そんなこと急に言われても、にわかには信じられないぞ……。

そう思っているのは俺だけじゃないようで、他の皆も同じ様に声を出さないまま、無言で顔だけ驚いていた。

特に千冬姉と束さんと山田先生の驚きようは尋常ではなく、俺すらも見た事が無い程に動揺していた。

唯一の例外は弥生と鬼瓶さんだけで、弥生は心配そうにしながら胸の辺りで祈るように両手を組んでいて、鬼瓶さんはずっとニコニコしている。

「おじいちゃん……」

……そうだよな。

弥生にとって唯一の肉親である人が、画面の向こう側で一人で戦っているのを見て、不安にならない筈がない。

俺だって、同じように千冬姉が戦っていたら、同じ顔をしていたに違いない。

弥生を少しでも安心させる為に、俺は隣にいる彼女の傍に寄り添った。

「さつきから福音が、弥生さんのおじいさまの頭部を集中的に狙っているように見えますけど……」

「相手は暴走しているISの筈だが、そんな器用な事が可能なのか……?」

セシリアと箒の疑問を聞いて、俺も画面に改めて注目する。

すると、確かに福音はおじいさん、正確にはスーツの頭部にある角を狙って攻撃をしているように感じた。

「弥生ちゃん、気が付いたかい？」

「はい……………」

気が付いたって、二人は何に気が付いたんだ？

「あのISは、間違いなくスーツの唯一の弱点である角に攻撃を集中させている。それが意味する事は……………」

「福音……………は暴走して……………いな……………」

「……………え？」

今……………なんて言った？ 福音が暴走してない？

「暴走し……………たIS……………に……………ピンポイントアタック……………が出来……………るとは……………考え……………にく……………い……………」

「そうかもしれないけど、だとしたら福音は……………」

「誰か……………に『強奪』……………され……………て……………正規……………のパイロット……………じゃない……………人……………が乗……………って……………いる……………」

「……………!!……………!!……………!!……………」

マ……………マジかよ……………!!……………! 軍の専用機を誰かが奪って操縦するなんて、そんな芸当が本当に可能なのか!?

幾ら弥生の言葉でも簡単には納得出来ないぞ……………。

「そんな事が……………いや、でも……………」

束さんは顎に手を当てるブツブツと考え込んでいるし、千冬姉は怖い顔をして画面を見つめている。

そんな二人を見て、俺達は戸惑う事しか出来なかった。

「……………でも、なんで角が弱点なのよ……………」

「もし仮……………に角……………が取……………れて……………しま……………ったら……………ただ……………のガチャピン……………にな……………っちゃう……………から……………」

「……………は……………は……………あ……………」

いや……………なんでそうなる……………?

弥生、自分がおかしな発言をしてるって自覚ある……………?

「別にガチャピンになっても問題無いんじゃない……………」

そうだ箒……………! 弥生に言……………って……………やって……………くれ……………!

「ある…よ…。だって…世間…が黙って…でも…ピエール瀧…  
が黙って…いない…！」

何故にそこでピエール瀧の名前が出てくる？

「つまり…角…が取れる…もしくは…破壊…された時点…で…  
…おじいちゃん…は敗北…を認めざる…を得ない…んだよ…  
…」

冗談抜きで意味が不明なんですけど…。

「それ以前に、あの角にはスペースガチョビンスーツの中枢機能、IS  
で言う所のコアが内蔵されていますから、どっちみち角が破壊された  
ら終わりなんですよ」

弥生の発言を全否定するように鬼瓶さんが普通の事を言ったし!!

それならそうと、最初から説明してくれよ!!

「あの福音の戦闘能力は私達の想定を遥かに凌駕している。悔しい  
が、あのまま出撃を許していたら、間違いなく全員揃って返り討ちに  
遭っていただろう…。」

千冬姉が、おかしくなりつつあった空気を元に戻す為に発言した。  
(確かに、千冬姉の言っている通りだ…。どんなに頑張っても、今の  
俺じゃ、あの福音を倒すどころか、一撃を当てるビジョンすらも浮か  
ばない…!)

結局、俺達はここで想い人のおじいさんの戦いを指を咥えて見てい  
るしか出来ないって事か…! クソっ…!

「おじいちゃん…負けないで…！」

俺からも頼む…!

この国を護る為とか、皆の為とかじゃなくて、彼女を…弥生を悲  
しませないために勝ってくれ!!

アンタがいなくなっちゃったら、弥生が一人ぼっちになっちゃう!

「頑張れ…！」

思わずそう呟いた俺は、いつの間にかスペースガチョビンスーツが  
とてもカッコよく見えていた。

きつと、あれこそが俺の真に目標にすべき姿なんだ…!

・  
・  
・  
・  
・  
・

海上にて壮絶な死闘を続けているスペースガチョビンスーツと福音。

完全に人知を超えた戦いが、そこにはあった。

『コノ……キグルミ風情ガ……!』

「その着ぐるみ風情に徐々に追い込まれているのは、どこのどいつかな?」

『クツ……!』

弱点である角さえ破壊できれば、それで終わる。

頭では分かっているけど、現実はその易々とさせてはくれない。

当然のように自分の光弾は全弾完全回避されて、向こうの打撃は着実にダメージを蓄積させていく。

こちらでも決してダメージを与えていないわけではないが、向こうと比べればその差は歴然だ。

事実、福音の装甲には多くの損傷が見て取れる。

「お主……何者じゃ?」

『ナニ……?』

高速の攻防を繰り返しながら、スペースガチョビンスーツがいきなり問いかけてきた。

いきなりの言葉に、思わず福音も素の表情が出る。

「ワシも少なからずアメリカ軍とは個人的に親交があつての。それ故に、福音の操縦者であるナターシャ・ファイルスとも仲がいいんじやよ。彼女の模擬戦はこれまでに何回も見せて貰ったが、明らかにお主の戦い方とは違っている」

『……………！』

どんなに表情を隠し、感情をコントロールしているつもりであつても、目の前で堂々と真実を告げられれば、少なからず何らかの変化が起ころるもの。

それは福音……否、ラケシスも例外では無かつた。

そして、その僅かな変化をスペースガチョビンスーツは見逃さなかつた。

「矢張りのう……そうだと思わつたわい」

膝蹴りを放つて、その衝撃で少しだけ間合いを開ける。

「元々ナターシャの戦い方は、福音の機動力と火力を最大限に駆使したヒット&アウェイ。それなのに、お主は福音最大の攻撃である『銀の鐘』シルバー・ベルを多用せず、近接戦を主軸としたオールレンジ戦法。ナターシャとは何もかもが真逆なんじゃよ」

『……………』

ラケシスも、お世辞にも自分の最も得意とする戦法と、福音の武装がマッチングしていない事は分かつていた。

どんなに高性能でも、相性が良くなければ機体の性能を十全に発揮は出来ない。

作戦を重視するあまり、子供でも分かりそうな簡単なミスを犯してしまつた。

だが、ラケシスは表情を崩さない。

『…………ソレガ分かつたカラト言ツテ、ココデ貴様ガ無様ニ敗北スル事ニ変ワリハ無イ』

「それはどうかのう？」

突如、スペースガチョビンスーツが構えを解き、両手をブランとさせた。

一見すると無謀な格好だが、ラケシスはその場から動く事が出来なかつた。

何故ならば、スペースガチョビンスーツの全身から、なにやらオーラのような物が浮き出ていたから。

真の強者にだけ分かるオーラ『闘気』が周囲の空気すらも歪めてい

くように見えた。

「最初はナターシャが洗脳でもされたかと思っただが、お前が彼女でないと分かった以上、こつちも手加減をする必要が無い」

『手加減……ダト……!?!』

先程までの戦闘でも、充分すぎる程の戦闘能力を誇っていたが、それでも『手加減』と言ってしまおう。

ラケシスは、目の前にいる緑の恐竜の潜在能力を計れないでいた。「アメリカとナターシャには後でワシから詫びを入れればいいとして、今は多少強引であっても福音を奪取する事が先決」

次の瞬間、スペースガチョビンスーツの姿が徐々に歪んでいくように見えた。

まるで、別のナニカに変化していくように。

「では……いくぞ。耐えろよ」

迫力ある声に、ラケシスは反射的に構える。

「コードー・アグレッツィブ・ダイナソー・チャージ!!」

スペースガチョビンスーツがラケシスに向かって突撃し、その途中でその姿が完全に変化した。

刺々しい西洋の鎧のような純白の装甲に、有機的なデザインのパーツ、その背にはまるで悪魔の翼のようなウイングが二対四枚装着されていた。

読者の諸君に分かりやすく説明すると、ぶっちゃけ、ライン・ヴァイスリッターの姿に変化した。

唯一、変化していない所と言ったら、その目だけがガチョビンのままだった。

『ナツ……!?!』

「では行くぞ!! ハウリング・ヲウガリランチャー!!」

今までとは比較にならない程の超高機動を行いながら、無数の残像を生み出しながら真紅のビームを撃ちまくる。

先程までのお返しと言わんばかりのビームの弾幕が、ラケシスの眼前に生み出された。

「圧倒的な弾幕は、なにも福音だけの専売特許ではない!!」



『コノ……老イボレガアアアアアアッ!!』

ラケシスの放つ銀の鐘とライン・ヴァイスガチョビンの攻撃が衝突し、壮絶な爆発が起こる。

間髪入れず、両者は二本の線となつて青空を駆け抜ける。

「撃てるのはビームだけではないぞい!!」

『実弾も発射出来ルノカ!』

激しく火花を散らしながら幾度となく交差していく中、ラケシスは銀の鐘を収束させ、最大出力で放とうとする。

それに真つ向から応戦する為に、ライン・ヴァイスガチョビンも手に持つ『ハウリング・ヲウガリランチャー』を變形させる。

『喰ラウガイイ!!』

「ハウリング・ヲウガリランチャーXモード!!」

白と紅の一撃がぶつかり、二つのビームが超絶的なスパークを起こした。

その影響で空が真つ白に染まり、瞬間的に何も見えなくなる。すぐに視界は晴れるが、そこにはガチョビンの姿は無かった。

圧倒的な殺気を背後から感じ、振り向くと、そこには真紅の重装甲『アルトガチョビン・リーゼ』に変化しているガチョビンが右腕についている固定式のパイルバンカーを構えていた。

『シマツ……!』

「踏み込みの速度ならば負けん!! ゼロ距離……取ったぞい!!」

回避する間も無く腹部にバンカーが直撃し、そこから連続で撃ちこんでいく。

一撃一撃が重く、一気に福音のSEを削っていく。

最後の一発でラケシスが吹き飛んだ瞬間、肩部のハッチが開き、そこにあるベアリング弾が発射される。

「特注のベアリング弾じゃ!! 全弾受け取れい!!」

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!』

咄嗟にクロスアームブロックで防御するが、それでも衝撃は受け流せず、そのまま吹き飛ばされていく。

全てのベアリング弾を撃ち尽くすと、全身から紫電を放ち満身創痍

な福音があった。

『幾ラ高性能トハ言エ、借り物ノI Sデハコレガ限界力……』

機体の方は完全に戦闘不能だが、肝心のラケシスは微塵も披露した様子は無い。

彼女もまた、彼らと同じ『規格外』と言う事を身を持って示していた。

「福音を返して貰おうか」

『……勝ツタ気ニナルナヨ。私ノ専用機ガアレバ、貴様ナド敵デハナイ』

「世間では、それを『負け惜しみ』と言うんじゃ」  
『抜カセ』

ラケシスは悠然とした立ち姿で、どれだけ傷ついても彼女の優美さは損なわれていない。

『今回ハ素直ニ負けヲ認メヨウ。ダガ、次ハ無イ。次ハ私ガ勝ツ。コノ屈辱ハ絶対ニ忘レンゾ……！』

どこからか取り出した閃光弾を投げて、ガチヨビンの視界を塞ぐ。  
「くっ……待っんじゃ!!」

『待テト言ワレテ、待ツ奴ハイナイ』

光が止んだ後、そこにはもうラケシスの姿は無く、青空と雲だけが只管に広がっていた。

「逃げられた……か。結局、奴の正体は分からず、福音も……」  
意気消沈しそうな所に、謎の物体が頭上から落ちてきた。

それに気が付いた彼は、すぐに手を伸ばしキャッチした。

「これは……」

手の中にあるのは、白銀の羽を模したペンダント。

それこそが福音の待機形態だった。

「結果オーライ……かの」

そう呟くと、ガチヨビンは元の姿に戻って、静かに旅館の方に飛んで行った。

「ロケットパンチ……使えなかったのう……」

残念そうに言っているが、もしもロケットパンチを使えば、確実に

福音は消し飛ぶので、これもまた結果オーライなのかもしれない。

こうして、謎は一切解けないまま、福音を巡る戦いは主要人物達を完全に無視して集結した。

## 宣戦布告

旅館内に設けられた即席の司令室にて、私達はスペースガチヨビンスーツを身に纏ったおじいちゃん、何者かに強奪されたと思われる福音との激闘を画面越しに見ていた。

「か…勝つちまった……」

「まさか……軍用のISに勝利してしまうとは……」

「なんと言う強さだ……」

皆もかなり驚いているが、一番驚愕しているのは私自身だ。

だって、私のおじいちゃんがあんなにも強いなんて、微塵も思わなかったんだもん！

確かに、おじいちゃんも他の人達も凄いけど、ここまでだなんて誰が予想する？

それに……

(スペースガチヨビンスーツの性能が凄すぎる……)

福音と言えば、専用機達が束になって掛かってもまともな勝負にすらならない程の強敵だ。

しかも、今回は暴走しているわけではなくて、操縦者が自分の意思で動かしていた。

そんな相手に、おじいちゃんはまさかの完封に近い勝利を収めた。これを驚かずに何を驚くと言うんだ。

(でも、福音が強奪されたって事は、今回の事件は束さんの仕業じゃない……?)

原作では、福音の暴走事件は紅椿の踏み台にする為に起こされた事だったけど、あの他者を極端なまでに拒絶する彼女が何者かに福音の強奪を依頼するとは思えない。

ならば、今回の真犯人は別にいる……?

「弥生！ やったな！」

「うん……うん……！」

いや……考えるのは後にしよう。

今はとにかく、おじいちゃんの勝利を素直に喜ぶべき場面だ。

「あ！」

「今度はどうした？」

「え……えつと……。板垣さんのおじいさんが戻って来てます。到着予想地点は、花月荘の近くの浜辺です」

おじいちゃんがここに来る……？

そう思ったら、いても立つてもいられなくなって、私はその場から駆け出していた。

「い……板垣さんっ!？」

「弥生っ!？」

おつと、山田先生に一夏、引き止めてくれるなよ？

「行かせてやれ」

「織斑先生……う？」

「たった一人の身内が死闘を終えて帰ってくるんだ。ここでジツとしているなんて、アイツには出来ないだろうさ」

はい、織斑先生の許可を頂きました！

んじゃ、おじいちゃんの元へレッツラゴ〜！

「……さて、俺も行きますか」

・  
・  
・  
・  
・  
・

私が浜辺まで全力疾走して、砂の上に立って待っていると、遠くの方に緑色の物体が見えてきた。

ソレは段々と大きくなってきて、こちらへと近づいてきた。

そして、腰の部分にあるブースターを噴かして、ゆっくりと浜辺へと降り立った。

「おじいちゃん……！」

「ただいま……弥生」

「おじいちゃん!!」

久し振りに聞くおじいちゃんの肉声。

それを聞いた途端、私はおじいちゃんの身を包むスペースガチヨビンスーツに抱き着いていた。

「おじいちゃん……おじいちゃん……おじいちゃん……おじいちゃん……！」

「ははは……。いつの間に弥生は寂しがり屋になったんじや？」

私はいつでも寂しがり屋だよ！

大好きなおじいちゃんに会えないなんて、辛いに決まってるじゃん！

抱き着いている私の頭を、そつと優しく撫でてくれるおじいちゃん。

それが凄く嬉しくて、思わず涙が零れそうになった。

「おや？ どうやら、弥生の友達も来たようじやぞ？」

「ふえ……？」

おや、旅館から他の皆もそろそろとやって来たではありませんか。

「まさか、弥生の足があんなにも速かったなんて……」

「思ったよりも弥生はアウトドア派なんじゃないのか……？」

何を仰る箒さん。

私はどこに出しても恥ずかしくない立派なインドア派ですよ？

他の子達の前に織斑先生と山田先生が立ち、私達の傍に鬼瓶さんが来た。

「この度は本当にありがとうございます。本来ならば我々がしなければいけない事を……」

「なに。あのような危険な戦いに未来ある若者達を送り出すなど、我々のような大人がすべきことではない。この子達に必要な業を背負わせることは無い」

「はい……そうですね……」

先生達が背を伸ばして屹立している。

まあ……無理も無いのかな？

「ところで、もうそろそろスーツを脱いではいかがですか？　ちゃん  
と弥生ちゃんのお友達に自己紹介もしないと」

「おっと、そうじゃったな。これは失敬」

スーツの頭の部分が前に倒れ、そこから私のよく知っているおじい  
ちゃんの顔が出てきた。

少し白髪交じりの髪を掻き上げて、皺がある渋い顔に眼鏡を掛けて  
いる。

そのレンズの奥には鋭い眼光があつて、見るものを圧倒するけど、  
その瞳には優しさが見え隠れしている。

「……この人は……!?」

「まさか……!?」

おや？　箒や簪には分かつちやつたかな？

でも、まずはおじいちゃんの自己紹介を聞いてね。

「私が……」

来るぞ来るぞ……。――

「内閣総理大臣!!! 板垣平松であ  
るっ!!!」

おじいちゃんの総理大臣宣言キタ―― つ!!

やっぱ、これが無いと始まらないよね！

「「「「「「「」」」」」」」」」

あ……あれ？　皆の目がキョトンってなってるんだけど……。

「「「「「「「え―――― つ!?」」」」」」」」

うわあっ!?　その人数での大声は反則だよー！

鼓膜が本気で破れるって思ったじゃないか！

「ど……どこかで見た事があると思ったら……」

「前にこの顔……お父さんがよく見てた国会中継で見た……」

あ、だから二人は知ってたのね。

「内閣総理大臣って……つまり、弥生は総理大臣の娘って事なのか  
……っ？」

「そ……そうなりますわね……」

「ちよ……ドツキリよね？　だって、幾ら弥生がお嬢様だからって、総

理大臣の娘って……」

そうそうには信じられないよね。うん、分かります。

おじいちゃんの事を知った人達は、その殆どが似たり寄ったりの反応をするから。

「いや、事実だ」

「ち…千冬姉は知ってたのか…?」

「無論だ。以前に会った事もある」

え? そうなの?

「い…いつ…?」

「私がまだ現役で国家代表をしていた頃だ。モンドグロツソに出発する前日に総理官邸に呼ばれてな。そこで直に応援をして貰った」

「そんな事もあったのう。いやはや、あの時のお嬢さんが、今はワシの愛娘の担任をしているとは。凄い偶然もあったもんじゃ」

「全くですね」

おじいちゃんと織斑先生に意外な接点が……。

人と人の繋がりには、どこでどんな風になっているか分からないもんだな。

「総理。まだまだ話し足りないでしょうが、まずは……」

「そうじゃな。織斑先生、先程の戦闘で分かった事などを報告させて貰いたい。案内を頼めるかな?」

「分かりました。こちらです」

先生の先導で、私達は再び旅館に戻る事に。

その間も、私はずっとおじいちゃん抱き着いたまま。

だって、今は一時も離れたくないんだもん。

けど、何か足りないような気が……なんだっけ?

「あれ……? 姉さんはどこに消えた?」

.....  
.....  
.....



板垣総理が降り立った浜辺とは別の場所にある浜辺。

そこに、先程の戦闘から帰還したラケシスが降り立っていた。

「ラケシス姉さま!!」

そこに、どこからやって来たのか、アトロポスも慌てるように駆けつけてきた。

「大丈夫ですか!? おのれ……よくも姉さまを……! 絶対に許さ……」

砂浜の上に膝を立てて座っているラケシスを見てから、激怒した顔で立ち上がるアトロポス。

だが、そんな彼女を手で制して、落ち着かせた。

「え? 今の私達では分が悪い? そ…それはそうですが……」

悔しそうに歯を噛み締めながら、そつとラケシスに寄り添う。

「はい……そうですね。どうやら、私達は吉六会と言う存在を過小評価していたようです。まさか、ISに乗った『今の』ラケシス姉さまを完全に圧倒するなんて……」

「……………」

「仰る通りです。今回の事で認識を改めました。吉六会を最優先警戒対象に指定します。今日のような事は、もう二度と起こさせはしません……!」

拳から血が滲み出るような勢いで握るアトロポス。

その褐色の手から血が滴り落ち、砂浜に赤い染みを作った。

「どうやら、今回は手痛くやられたようだね」

「!?!」

いきなりの声に振り向くと、そこには息を切らせている束が木に手を添えて寄りかかっていた。

「タバネ・シノノノ……。矢張り、私達に接触しに来ましたか」

この状況がある程度、予想はしていたのか、姉妹に動揺の色は見えない。

いつも通り、何も感じさせない無機質な目で彼女を見つめていた。「吉六会でも充分に打倒が可能と言う事は、『こちら』にも勝機はあるって事だよな」

「あまり凶に乗らない方が身の為ですよ。大言壮語は後々に恥を晒すだけですから」

「なんとも言いなよ。可能性が見えただけでも私的にはここに来た甲斐はあったから」

「ほう……？」

目を細めて束を睨み付けるアトロポス。

その間にラケシスは砂浜に座り込み、息を整えていた。

「私は絶対に諦めない。例えば何を犠牲にしても、必ず『世界』を解放する」

「出来るのですか？ たかが人間である貴女に」

「人間だから出来るんだよ。人類の底力……侮らない方がいいよ」

「それはもう、身を持って知りましたから」

体力が回復したのか、ラケシスが立ち上がり、それに合わせるようにアトロポスも一緒に立ち上がった。

「今日は確かに我々の敗北です。ですが、二度目はありません」

「くっ!？」

突然、二人の体が輝きだし、束の網膜を刺激する。

「次に我々が会う時は恐らく、私達と貴女とで雌雄を決する時になるでしょう」

「ま……待てっ!!」

光が止んだ時には、もう二人の姿は無かった。

「逃げられた……!」

腹いせに自分の傍にある木を蹴ると、木の幹に罅が入る。

「八つ当たりはよくありませんよ」

「……来てたんだ」

束が振り向くと、金色の髪を潮風に靡かせた一人の美女が立っていた。た。

「ええ。彼女達を止めるのは『姉』である私の使命ですから」

「でも、今回は『あの人達』が食い止めてくれたよ?」

「分かっています。彼等には感謝しかありません。今回、暴走したのはISではなくて、あの子たち自身」

「そうだね。私から見ても、アイツ等の精神状態は明らかにおかしい。だって、あの姉妹は私以上に目的の為に手段を選ばない節が垣間見える」

「…………私達姉妹は、一体何処ですれ違ってしまったのでしようね…………」

「そんなの、私に分かるわけないじゃん」

金髪の美女は悲しそうに目を伏せてから、背中を向けた。

「もう行くの?」

「はい。あの子達の事を追わなくては」

「それはいいけど、いつも後手後手に回ってない?」

「あまり、追跡とか得意じゃないもので」

「貴女つてさ…………時々、天然なのかそうでないのか、よく分からない事があるよね」

「そうでしようか?」

小首を傾げながら、ゆっくりと歩き出す。

「余計なお世話かもしれないけどさ…………気を付けてよね。貴女だつて、アイツ等を止める大事な戦力なんだからさ」

「それはお互い様でしょう」

首だけ束に振り向いてから、優雅に微笑んで、彼女は消え去った。

「本当に…………本当に気を付けてよね…………クロトさん」

…………

…………

…………

…………

…………

さつきまでいた即席司令室におじいちゃんを案内して、そこで報告会のような物が始まった。

おじいちゃんは、先程までのスペースガチョビンスーツを脱いで、今は仕事着として普段から着用しているスーツ姿に変わっている  
「やっぱり……弥生の予想通り、あの福音は何者かによって強奪されたものだったんだな……」

おじいちゃんの事後報告に、皆がしつかりと耳を傾けて、箒がそつと呟いた。

「なんと。弥生も奴が暴走していない事を見抜いたのか？」

「ええ。福音の動きをよく観察し、総理と同じ結論に至っていました」

「そうかそうか！ 流石はワシの自慢の弥生じゃ！」

皆の前で頭を撫でられるのは少しだけ恥ずかしいけど、今だけはいいや。

「弥生の別の一面を見た感じだわ……」

「大好きな義父に頭を撫でられて嬉しそうにしている弥生……。なんて可愛らしく、そして、感動的な場面なんだ……」

ロランさん。別にここは泣くようなシーンじゃありませんよ？

「弥生の傍にいる銀髪の子が、報告に聞いていたドイツ軍の少佐殿かの？」

「は……はい！ ドイツ軍特殊部隊『シュヴァルツェ・ハーゼ隊』の隊長を務めております、ラウラ・ボーデヴィツヒと申します!!」

いきなり立ち上がってビシッ！つとした敬礼を見せるラウラ。

その立ち姿はとても勇ましいけど、いつもの可愛い姿を見られた私から見れば、小さな子が背伸びをしているようにしか見えない。

「うむ。弥生ととても仲良くしてくれていると聞いている。これからも、弥生の傍にいてやってくれ」

「りよ……了解しました！ 姫様は私が絶対に守ってみせます!!」

「うんうん………姫様？」

おじいちゃん。そこにはツツコみは無しでお願い。

多分、気にしたら負けだから。

「お主達も、弥生と仲良くしてくれて、心から感謝する」

おじいちゃんが頭を下げて皆に礼を言う。

見る人が見れば、凄い光景なんだろう。

「あ…頭をお上げください！ 板垣総理!!」

「そ…そうですわ!」

「あたし達は好きで弥生と一緒にいるだけで、そんなお礼を言われるような事は……」

普通はそうだよねえ。

でも、私のおじいちゃんはとても義理堅いから、私からすれば見慣れた光景だ。

「だからこそじゃ。弥生には中学まで友達が一人もいなかった。そんなこの子が、多くの友達に囲まれて、一緒に笑い合っている。それを見られただけで、ワシは嬉しくて仕方がないんじゃないよ」

……私が中学までずっとボツチを貫いていたせいで、おじいちゃんにはいらぬ心配を掛けさせていたっけ……。

その事はずっと心苦しかったけど、ここでやっとおじいちゃん孝行できたかな……。

「織斑先生。 山田先生」

「は…はい!」

おう……あの二人が緊張している。

凄く珍しい姿を見れた気がする。

「これからも、ワシの大切な義娘の事をたのんだぞい。これは総理大臣としてではなく、一人の養父ちちとしての頼みじゃ」

「お任せください。担任の教師として、一人の人間として、彼女の事を支えていきます」

「板垣さんは色んな子に好かれていて、慕われているんですよ」

「そうですか……。それはいい事を聞いたのう」

なんだか、私だけ授業参観な気分……。

「奪取に成功したと言う福音はどうさなるおつもりですか?」

「ワシの方から、直接アメリカに返還しようと考えておる。向こうの大統領とも、個人的に親しくしておるしな」

「弥生の養父殿は非常に顔が広いのだな……」

ロランさんの言う通り。

おじいちゃんは日本の総理大臣として、世界各国のお偉方と凄く懇意にしている、とても友好的な関係を築いている。

「あのスーツは……」

「アレに関しては、今はまだ何も言えん。すまん」

「い……いえ。こちらこそ済みませんでした」

やっぱり、スペースガチョビンスーツの存在は、まだ公にするつもりはないんだな。

それは妥当な判断だと思う。

だって、あの戦闘能力は冗談抜きで規格外だしね。

「お二人はこの後、どうなさるおつもりで？」

「一応、ここに後でチェックインをして、一晩だけ泊まっていこうと思っっています。偶には総理にも骨休めが必要ですから」

「そうですね」

私的にも鬼瓶さんの意見には全面的に賛成だ。

幾ら総理大臣とは言え、おじいちゃんはいつも頑張り過ぎなんだよ。

時には思いっきり羽を伸ばして休んでほしい。

これは義娘として切実な願いだ。

「ところで、織斑一夏と言うのは……」

「お……俺です」

ん？ おじいちゃんが一夏をご指名？

何の用なんだろう？

「そうか……お主が……」

おじいちゃんが、まるで一夏の事を品定めするように見ている。何か気になる事でもあるのかね？

「一夏くんとやら」

「は……はい！」

「後で……ワシの所まで来てくれんかの？」

「わ……分かりまし……ええっ!?!」

え……え？ な…なに？ おじいちゃんが一夏を呼ぶ？  
これって………どういう事？

## それぞれの決意

福音を巡る一件が私達が全く関与する事無く集結した日の夜。

私達は昨夜と同じように大宴会場にて夕食を食べていた。

けど、今の私は昨日以上にテンションが高い！

その理由は、言わなくても分かるよね？

「ねえ〜…結局、昼間のアレってなんだったの？」

「悪いが、機密事項だから言えん」

「ええ〜」

案の定、何も知らない皆は、昼間の件について聞いてきた。

けど、聞いた相手が間違っていたな！

普段の様子からは忘れがちだけど、ラウラは立派な現役軍人！

例え何をされても機密事項を言ったりはしない！

「他の皆も全く教えてくれなかったしな〜……」

「うう〜…気になる〜！」

「その気持ちは痛いほど理解出来るけど、世の中には知らない方がい  
いって事もあるんだよ？」

「デュ…デュノアさん…ちよつと言い方が怖いよ……」

「だが、純然たる事実だぞ」

「もしも知ってしまったら、裁判沙汰になったうえで二年間もの間、監  
視されますのよ？」

「さ…裁判っ!?! 監視っ!?!」

「しかも、二年はあくまで『最低年数』らしいぞ」

「って事は…それ以上の年数の可能性も……？」

「充分、有り得る」

シャルロット、セシリア、ロランさん、箒の四人が一気に畳み掛け  
る。

あそこまで脅されれば、もう何も聞いてこなくなるだろう。

「とこころでさ……」

「さつきから、板垣さんのテンション高くない？」

「ずっと笑顔のまままで食べ続けてるし」



「笑いながらご飯を食べる板垣さん……可愛い……♡」

え？ 私つてば笑ってる？

そんな自覚は無かったんだけどなあ。

無意識の内に笑っちゃってたか。

「えつと……なんて言ったらいいのかしら……」

「ここは私に任せてくれたまえ」

お？ ロランさん？

「ついさっきの事なんだが、弥生のおじいさまがこの旅館に偶然にも宿泊をしいらしたんだ。向こうも弥生もここで会うとは思っていなかったようで、予想外の再会に喜びを隠せないでいるのさ」

おお！ なんかそれっぽい事を言って誤魔化してくれた！

確かに、今の言葉ならば、半分は真実で半分は嘘になっている。

「そつかく。それなら嬉しそうにしているのも納得だね」

「よかったね、板垣さん！」

「ん……♡」

あゝ♡ 心なしか、昨日よりも御飯が美味しく感じて、食が進むにやゝ♡

「い…板垣さんの隣にお茶碗の塔が建設されてる……」

「今にも倒れそうなのに、絶妙なバランスで頑張ってるわね……」

む？ もうご飯が無くなった。おかわり!!

「そう言えば、織斑君の姿が見えないけど……」

「アイツなら、今日だけは別の部屋で食べてるわよ」

「きつと、ガツチガチに緊張してるだろうね」

その通り。

今回だけ、一夏は特別に許可を貰って、おじいちゃん達が宿泊する部屋で一緒に食事をしている。

でも、一夏に一体何の用があるんだろう……？

……  
……  
……

どうも、織斑一夏です。

早速ですが、俺は大ピンチになっています。

「どうした？ 食べんのか？」

「このお刺身とか、脂がのっついていて美味しいよ？」

「あ……はい」

何故なら、俺の目の前で弥生のおじいさんである板垣総理と鬼瓶さんがいるからだよ！

いやね、鬼瓶さんだけならまだ大丈夫だよ？

でもさ、この人はあの弥生の一番大好きなおじいさんであり、この国の内閣総理大臣なんだぞ！！

よりにもよって、総理大臣と一緒に部屋で食事をするとか、一生に一度あるかないかだぞ！！

俺みたいな一市民に、この状況で緊張するなって方が無理あるだろ！！

「い……いただきます……」

震える手で箸を持ち、お刺身に醤油をつけて食べる。

（うう……昨日は物凄く美味しかったのに、今は緊張しすぎて味がよく分からない……）

手に力を入れていないと、箸すらも落としそうだ……。

「うんうん。若い内は沢山食べて、英気を養うもんじゃ」

「総理だつてまだまだお若いでしょうに」

「鬼瓶さんには負けるわい」

「はっはっはっ……」

どうして鬼瓶さんは総理と仲良くお話なんて出来るんだよ！

幾ら昔馴染みだからと言っても、この人は総理なんだぞ！ 滅茶苦茶偉い人なんだぞ！

つーか、アンタと総理は一体何処で知り合ったんだ！

俺的にはそれが非常に気になるんですけど!?

「さて……と。織斑一夏君」

「は……はいー!」

つ……遂に来た!

俺を名指しでここに呼んだ理由は、大体の想像がついている。

思わず背筋が伸びて、手に汗を握ってしまう。

前に千冬姉が総理官邸に呼ばれた時も、今の俺みたいに緊張してたのかな……。

「単刀直入に訪ねよう」

心臓がドキドキして止まらねえ……!!

「お主……弥生の事を好いておるな?」

「ブツ!!」

分かってはいたけど、ここまでストレートに聞いてくるか!?

冗談抜きで心臓が跳ね上がりそうだったぞ!!

「ど……どうして……」

「さっきの簡易司令室にて話しておった時の、お前さんの弥生に向ける視線を見れば一目瞭然じゃ」

たったそれだけで!? 今時の内閣総理大臣って、ここまでチートじゃなきや勤まらないのか!?

「別に緊張しなくてもいいよ。ここには男しくないんだし、ちよつとした男子会みたいなのりで構わないって」

無茶言うな!! ここで素直に白状できるほど、俺は度胸が据わってねえんだよ!!

でも……言わなきやいけない流れなんだろうなあ……きつと……。

ええい! 気合を見せろ! 織斑一夏!!

どうせ、弥生を嫁に貰いに行く(予定)の時、嫌でもこの人に挨拶をしに行かなきゃいけないんだぞ!!

それが早いか遅いかの違いじゃないか!!

「……………はい。俺は彼女が……板垣弥生さんが好きです」

「おお……言うねえ」

そつちが言うように仕向けたんだろうが!!

「そうか……」

総理の鋭い眼光が俺を捉える。

『蛇に睨まれた蛙』とはよく言ったもんだぜ……。

「一夏君」

「な……なんでしょうか……」

「お前さんは……弥生の為に全てを擲つ覚悟はあるか？」

「総理……？」

覚悟……か。

そんなもん……とつくに出来てる!!

「当然です!!」

「ほう……？」

「俺はもう、弥生が悲しむ姿を見たくない。弥生の大切に思っている全てを守りたい。初めて弥生と出会って、彼女の色んな顔を見た時から、俺の全部を弥生の為に使うと決めたんです！」

それが俺の決意。

俺は『皆を守る』んじゃなくて、『弥生に属する皆を守る』。

「言うほど簡単ではないぞ」

「分かっています」

「茨の道なんて言葉すら生温い地獄が待っておるかもしれん」

「その地獄の先に弥生がいるのなら、俺は喜んで地獄に行きます」

「織斑くん……君は……」

今の俺の偽らざる気持ち。

この決意は、これから先も絶対に変わらない自信がある。

「それに……」

「ん？」

「惚れた女を守るのに、理由なんていらないうしやう？」

……なんか勢いで色々と言っちゃったけど、俺……大丈夫だよな……？

「惚れた女を守るのに理由はいらないうしやうか。くくく……」

「そ……総理？」

や…やっぱ、調子に乗りすぎたか!?

「ははははははははははははははははっ!! 気に入った! 気に入ったぞい!!」

うおっ?! びつくりしたく……。

でも、どうやら怒らせてはいないみたいだな……。

「一夏くん。夏休みの予定は空いておるかな?」

「夏休み……ですか? えっと……今のところは特に予定は無いですけど……」

と言うか、基本的に俺の夏休みは家での家事全般で潰れるからなあ。

「総理……まさか?」

「その『まさか』じゃ。一夏くん、夏休みはワシ等の所で特訓をしてみんか?」

「と…特訓?」

「そうじゃ。今の自分がお世辞にも強いとは言えないと、自覚はしておるんじゃない?」

「……はい」

ISの知識や操縦もそうだが、今の俺は単純に身体能力がかなり劣っている。

自己流や千冬姉が暇な時に訓練をして貰っているけど、まだまだ自分が未熟だと思っている。

「いいんですか?」

「構わんじゃないろう。小栗君や兵庫君もいるし、夏休みならば『あの6人』も来てくれるじゃろう?」

「あの子達にも特訓を手伝わせる気ですか!?!」

「そうじゃが?」

え……えくつと……? 小栗君って? 兵庫君って? あの6人ってなんだよ?

「織斑君……」

お…:鬼瓶さんが同情するような目で俺の肩を掴んだ。

「無事に二学期を迎えられるように、祈ってるよ」

「はあっ!?!」

ちよつと待てえい!! その言い方だと、下手をすれば無事に二期を迎えられない可能性があるように聞こえるんですけどおおおおおっ!!

で…でも、この人達の元で特訓をすれば、総理のような桁外れの強さにほんの少しでも近づく事が出来るのか……?」

「で? どうする? 特訓を受けるか? それとも……」

「受けます。弥生と一緒に歩いて行く為なら、どんな特訓もやってみせます。あらゆる困難も乗り越えてみせます!」

「よく言った! それでこそ日本男児じゃ!」

「どうなっても知らないぞ……」

それから、俺は総理と鬼瓶さんと携帯の番号を交換して、いつでも連絡が出来るようにした。

まさか、天下の総理大臣の携帯の番号が、俺の携帯に登録される日が来るとは思わなかった。

鬼瓶さんの危惧するような言葉が気にはなったけど、もう俺は止まらないと決めたんだ!

弥生の為なら、どこまでもやってやるぜ!!

一通りの話が終わってから、部屋の空気が一気に緩和して、男三人で弥生談義で盛り上がった。

主に話していたのは、俺と総理だけだ。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

旅館から少し離れた場所にある岬。

その柵に腰かけながら、東は投影型ディスプレイとコンソールを出

して、何かをしていた。

「にしても、あの人にあれだけの戦闘能力があるとは、いい意味で予想外だったよ。吉六会……あれだけの戦闘能力があれば、万が一の時の保険にはなる……か」

普段は決して見せない真剣な顔で、福音とスペースガチョビンスーツの戦闘の光景のプレイ映像を眺めている。

「このスーツ……。見た目はふざけているけど、性能は全能力を完全開放した紅椿をも完全に凌駕してる。悔しいけど、あの総理は戦闘能力だけじゃなくて、技術力も私より上だ……。嬉しい誤算だけど、素直には喜べないな……」

一人の科学者として、自分よりも上の技術を見せつけられて、あまりいい気分は出来ない束だった。

人格破綻者の烙印を押されていても、科学者としてのプライドだけは一人前らしい。

「途中で姿を見せなくなったと思ったら、こんな場所にいたのか」  
「おや、ちーちゃん。よくここが分かったね」

「もうお前とも長いからな。束が行きそうな場所はなんとなく予想出来る」

腕組みをした恰好で千冬がスーツ姿で後ろからやって来た。

その顔は束に負けず劣らずの真剣さがあった。

「総理がやって来た直後、お前はどこに行っていた？」

「ちよつとした野暮用」

適当に誤魔化す束だったが、それを素直に聞き入れる程、千冬は馬鹿ではなかった。

だが、同時に束がそう簡単に本当の事を言わない事も、また知っていた。

「ねえ……ちーちゃん」

「なんだ」

「やっちゃんって……本当にいい子だよね」

「そうだな。弥生は誰にも分け隔てなく優しい子だ」

だからこそ、多くの人間達が彼女に惹かれた。

千冬も束も例外では無い。

「何故、お前は弥生と身内のように接する？」

「あの子が箒ちゃんを命懸けで守ってくれたからだよ」

確かに、束にとって大切な妹である箒を救った功績は、彼女にとって弥生を好意的に見るには充分すぎる理由にはなる。

しかし、千冬は持ち前の勘の鋭さで、これだけが本当の理由ではないと察していた。

「いい機会だから聞いておきたい。なんでいきなり箒に専用機を持ってきた？」

「その理由は昼間に言った筈だけど？」

「本当にあれだけか？」

簡単に白状しないと分かっていても、聞かずにはいられなかった。今回の束の来訪は、余りにも突然すぎた。

千冬でなくても疑うのは当然だろう。

「……まあいい。お前が秘密主義なのは今に始まった事じゃないからな」

「いい女は、沢山の秘密を持っているものだよ♥」

「抜かせ」

昔に戻ったかのような会話に、少しだけ千冬が微笑を浮かべた。

「ここでちーちゃんに質問です」

「なんだ？」

笑いながら千冬の方を振り向いているが、その目は決して笑っていない。

「問題。白騎士は今、どこにあるでしょうっ？」

白騎士。

千冬にとって、切っても切れない存在。

束の質問の答えは、一瞬で浮かび上がった。

「白式を『しろしき』と呼べば、おのずと答えは導かれるんじゃないのか？」

これで束がどんな反応を見せるか。

だが、彼女は千冬の予想とは全く違う反応をした。



「ククク……。ちーちゃん、きちんと人の話は聞かなきゃ駄目だよ。」  
「なんだと？」

「私は『白騎士はどこにある？』って聞いたんだよ？ ただの一言も『白騎士のコアがどこにある？』なんて言っていないよ？」

「!!？」

完全に自分の答えが正解だと確信していた。

ならば、一夏の白式は一体何なのか。

「ちーちゃんが考えている事に、答えてあげようか？」

「束……」

「白式自体は、倉持技研で製作された普通の第三世代機だよ。ちよつと私の手で改造や調整は施したけど、それ以外は本当に何もしてないし、コアだってそのまんまだよ」

「ならば……あの零落白夜は……」

「ISに関する事で、私に不可能があると思う？」

それが全ての答えだった。

つまり、束は白式を改造し、コアに頼らず、意図的に零落白夜を発動出来るようにした。

その媒体として、彼女は千冬の愛刀に酷似した『雪片式』を製作した。

普通に考えれば一笑に伏すような事だが、目の前にいるのはISの生みの親である篠ノ之束その人。

他の事ならいざ知らず、ISに関して束に不可能な事などある筈も無かった。

「ならば……白騎士は一体どこに……」

「ちーちゃん」

千冬の目を真っ直ぐに見つめる束の視線に、彼女は初めて目を逸らした。

「ISの姿形は千差万別あれど、その内部にある物は何も変わらない。そう、肌の色や顔の形などが全くが違う人間の骨格の基本的な形状が同じであるように」

「お前は……何を言っている……」

考えたくなかった。否定したかった。

しかし、千冬の中にある『十二カ』が、最も考えたくない可能性を示唆している。

「幾ら白騎士と言えど、その肌とも言うべき外部装甲を取ってしまったら、その姿形はそこら辺にあるISとなんら変わらなくなる。何故なら、ISのフレームは全てが例外なく同じ姿をしているんだから」

汗が出て、チリチリと喉が渴く。

千冬は自分が動揺している事に気が付き、必死に歯を食いしばり、表情を抑えようとする。

「そう言えば、一体だけいるよね。外部装甲を取り外した、フレームだけのISが」

「それ……は……」

千冬の脳裏に浮かんだのは、自分も想っている一人の少女の顔。

だが、その事を信じたくなく、自然と地面に視線を向けてしまう。

今になって初めて、千冬は篠ノ之束と言う人間を恐ろしいと感じた。

「偶然って本当に怖いよね。流石の私も、初めて知った時は驚きを隠せなかったよ」

「……………」

「いや、これは『偶然』と言うよりも『運命』に近いかな？ ま、私は運命論者じゃないから、そんな下らないものは微塵も信じちゃいないんだけど」

投影型ディスプレイを消し、束は徐に立ち上がり、スカートについた汚れを手で叩いた。

「お前の目的はなんなんだ……？ お前は何を知っている……？」

表情をスツ……と消し、何かを憂うような目で星空を見上げる。

「古き神話に終止符を打ち、世界に光を取り戻す」

「なに……？」

今にも泣きそうな、悲しそうな笑顔を浮かべながら、最後に束は真っ直ぐに千冬の目を見た。

「大丈夫。『私達』が『全て』を解放するから」

その時、風が吹いた。

千冬の髪が彼女の視界を覆い、一瞬だけ何も見えなくなる。

「気を付けて……。今回の事件を切っ掛けに、亡霊に身を隠した連中が本格的に動き出すから……」

その言葉を最後に、束はこの場から完全に姿を消した。

残されたのは、未だに呆然としている千冬だけだった。

「お前の悪い癖だぞ……。いつもいつも、たった一人で全てを背負いたがる……」

千冬の中から一筋の涙が零れて、地面に静かに落ちる。

「私の事を親友だと言うのなら……私にもお前の荷物を少しでもいいから背負わせてくれ……」

袖で涙を拭い、顔を上げた時には、もういつもの千冬に戻っていた。

「お前が何を考えているかは知らんが、これだけは言っておく」

千冬も星空を見上げ、強気に笑った。

「弥生は私達が全力で守ってやる。だから、お前はお前がやるべき事をやれ」

笑顔を浮かべる千冬の顔に、もう迷いは無かった。

決意を新たにした千冬がふと崖下を見ると、そこには見覚えのある少女が白いビキニを着て浜辺に立っていた。

「あれは……弥生？」

まだまだ、夜は終わらない。

## ラブエス

折角、海まで来たのに水着を着らず仕舞いで終わりそうだなあ…と考えていたら、ふと、あるシーンが頭をよぎった。

それは、原作での福音との戦いが終わった後の夜の海でのシーン。そう、一夏と箒が水着姿の状態で向き合って、いい雰囲気になったアレだ。

あのシーンを思い出して、あの二人がいいんなら、私だって行ってもいいんじゃないかね？って思ったわけですよ。

でも、誰にも何も言わず無許可で夜の海に出るなんて大胆な事、私は到底不可能な芸当。

だから、私の体の事を知っている数少ない理解者である山田先生に相談をしに行ったら、なんと、すぐにOKを貰ってしまった。

あの人ってかなり真面目な人だから、本気で反対されるって思ってたんだけど、意外と話を通じる人だったみたい。

私の中で、山田先生の評価が爆上げした瞬間だった。

そこから更に、一年生の女子で唯一、私の体の事を知っているシャルロットにも協力して貰って、こっそりと更衣室まで移動し、そこで水着に着替えた。

更衣室から水着で出てきた瞬間、シャルロットが鼻血を噴射した時は本気で驚いたよ。

ただ出たんじゃなくて、噴射だからね、噴射。これ大事。

まるで人間ロケットのように真っ赤な鼻血を出して、何故か最高の笑顔でサムズアップまでしてきた。

その直後にしれっと自分の携帯で撮影までしていったけど。

かなり恥ずかしかったが、そこは代表候補生。

こっちの僅かな隙を狙って撮影しやがった。

で、そこからは誰にも見つからないように、そおくと海まで出てきた次第でございます。

山田先生からは、あまり長居はしないでくださいねって言われたから、早めに戻るように心掛けないとな。

・  
・  
・  
・  
・  
・

「あ〜……」

この冷たい海水が肌に直接触れる感覚がたまりませんにや〜♡

傷跡を見せないようにするためとは言え、ダイビングスーツを着てくるのは、かなりの苦渋の選択だった。

もうちよつと考えれば、なにかいいアイデアがあつたかもしれないけど、私の頭じゃあれが限界。

ま、終わった事をグチグチと言つても仕方がないので、もう気にはしないけど。

過去は忘れて、未来に生きる女なのですよ、弥生ちゃんは。

なんて考えながら、私は真っ黒に染まった夜の海に、一人でプカプカと浮いている。

本当なら、ここで浮き輪とかあればいいんだろうけど、生憎と私はそんな物は持ってきていないし、かと言って、どこかで借りる事も出来ない。夜だしね。

(星空が綺麗だなく……)

こうして、海に浮かびながら眺める夏の夜空も悪くないなく。

都会じゃ決して見る事が出来ない豪華絢爛な星空が光り輝いて、思わず魅入ってしまう。

(今日のおじいちゃん……凄くカッコよかったな……♡)

夜の海に揺蕩っている内に心に余裕が生まれ、私は今日の事を振り返っていた。

ずっとビクビクしていた福音との戦いが、まさか私達の誰もが微塵

も戦闘せずに終了してしまった。

見事なまでに白式のパワーアップフラグがボツキリとへし折れてしまったけど、アイツの事だから、どこか別の機会でご都合主義満載の状態で白式を進化させるに違いない。

(……って、なんで一夏に期待するような事を考えるんだよ、私……) どうも最近の私はおかしい。

ついでに言うと、一夏もおかしい。

妙に体が引き締まってきてるし、ISの腕もほんの僅かではあるけど上達してきてる。

その上、ふと一夏の事を目で追っていたりもするし、時々『ドキッ』って思わせるような顔をするんだよな……。

ああ……もう！ くそ！ なんなんだよ一体！

織斑先生や束さんにも似たような感じになる事はあるけど、それはまだいいんだ。

あの二人は本当に美人だし、色々性格に癖はあるけど、思ったよりは好感が持てる人物達だった。

原作でのイメージが先行しすぎて変な先入観を持っていたけど、そろそろ彼女達をそんな風に見るのをやめるべきかもしれないな……。それでも、まだまだ警戒は止めないけどね。

原作知識に頼りつきりにするのは止めると言っても、一部の例外を除いて、皆の性格が原作に酷似しているのは事実なんだし。

まだまだ油断は禁物だ。

けど、一夏はなあ……。

アイツも、原作みたいに憎悪を覚えるレベルのウザさは無くなってるけど、ラッキースケベは未だに健在なんだよな……。

しかも、そのターゲットの殆どが私だったりするし。

正直言うとな、別に悪い奴とは思わないんだよ。

さつきも言ったけど最近の一夏は本当に頑張ってるし、授業も真面目に聞いている。

明らかに原作よりも努力をしている姿は、非常に好感が持てる。けど、それが恋愛に直結するかと言ったら、それは無いと断言でき

る。

だって、アイツと私が付き合うとか、普通に有り得ないでしょ？  
(つーか、そもそも私はそんな展開とか望んでないし)

最初はポツチ生活を満喫する気だったけど、今は周りの皆と一緒にのんびりしたスクールライフを楽しめればいいと思っている。

第二の人生にて、ようやく友達の大切さを理解したんだ。

絶対に無くしたくない。

一夏とだって、今のままの関係が一番いい。

友達……かどうかは微妙だけど、少なくとも嫌いって感じじゃないし。

(……なんか、私も変わったな……)

入学当初にあった、あの恐怖感はどこへやら。

皆と一緒にいる日常が当たり前になっていて、それが楽しくて仕方がないとおもっている自分がある。

変われば変わるもんなんだな……。

ぼくっとしてる内に、月が真上に来ている事に気が付いた。

どうやら、考え事に没頭しすぎたみたいだ。

そろそろ浜辺に戻り始めますか。

横になっている体を起こして、立ち泳ぎの状態になってから、少し離れている浜辺に向かって泳ごう……とした時、私の真下で何か黒い影が蠢いているのが目に入った。

「え……う？」

ちよ……マジ？ 冗談でしょ？

「ひ……ヒレ……っ!？」

なんかどこかで見覚えのあるようなヒレが私の近くをグルグルと回っている。

まさか……本当に？

嘘だと言ってよバーニーー!!

黒い影は段々と上まで昇ってきて、そして……

・  
・  
・  
・  
・  
・

「あの二人、完全に酔っぱらっていたな……」

すっかり出来上がってしまつた総理に、『今から海に行つてきなさい』と言われて、渋々やって来た俺。

ちゃんと水着に着替えて来たんだけど、途中でシャルロットと山田先生に出くわした。

二人とも、何か焦っている様子だったが、なんだつたんだ？

「総理と言ひ、山田先生達と言ひ、今夜は皆おかしいぞ……」

いや、総理の場合は酔つたのが原因か。

それでも、いきなりの夜に行けはおかしいと思うけどな。

一体、どんな思惑があるんだ？

「んん？」

なんか……遠くの方から水飛沫が聞こえてきたような……。

「きやあああああああああああああああああああああつ!!」

あれえ〜？ 今度は弥生の悲鳴が聞こえてきたぞ〜？

急いで周囲を探索すると、少し離れた海の上で、何かが跳ねているのが見えた。

「あ……あれはっ!!?」

浅瀬に入つて近づいてみると、俺の目に映つたのは……

「と……まつてえええええええええええええええええええええええつ!!?」

「弥生さああああああああああんっ!!?」

弥生がイルカの背に乗って、思いつきり跳ねてるううううううううううつ!!?

月明かりに照らされて、凄く神秘的だ……って、んなこと言ってる場合じゃない!!



「えつと……どこからツツコめばいいんだ？」

なんで弥生がここにいるんだ？

イルカってこんな夜に活動するような生き物だったっけ？

弥生がイルカの背に乗るって、何をどうしたらそんな状況に陥るんだ？

気のせいかな、イルカも弥生を背に乗せて嬉しそうじゃね？

弥生の水着姿……可愛いな……。

「あ〜！ 色んな考えが一気に吹き出て、訳分からん!!」

自分の頬を叩いてから気を引き締め直すと、イルカが今までで一番のジャンプをして、空中に舞い上がる。

だが、その拍子に弥生の体がイルカから投げ出されてしまった！

「弥生!!」

落下地点を予想して……ここだ!!

俺は弥生が落ちてくるであろう場所に先回りして、彼女を受け止められるように手を広げた。

すると、弥生の方も俺に気が付いたのか、慌ててこっちに回避するように言ってきた。

「どい……てえええええええええええええええつ!!」

この状況でどくとか、絶対に嫌だ!!

俺が弥生を受け止めてみせる!!

「うわあああああつ!!」

けど、落下のスピードが想像以上に早く、俺は弥生を抱き留めながら海にそのままダイブしてしまった。

と言っても、俺がいる場所は浅瀬だから、溺れるような事は無かったけど。

「うろう……」

「だ……大丈夫かつ!!」

俺が下になったお蔭で、弥生に目立った外傷（最初からあった傷跡以外）は無いようだ。

本当によかった……。

弥生がいきなり落ちてきた時は、生きた心地がしなかったぜ……。

「い……夏……う？」

「おう、俺だ」

不可抗力とは言え、こうして超至近距離から見る弥生の顔って、本当に綺麗だよな……。

俺じゃなくても、この顔を見たら大抵の男は惚れちまうんだろうな……。

「なん……で……ここ……に……う？」

「ん……ちよつと気晴らし……にな」

別に正直に答えてもよかつたけど、何故か適当に誤魔化してしまった。

まあ、何を言っても別に変わらないだろうけど。

「ま……た……助け……られ……ちやつた……ね……」

「また？」

「前……に……実習……の時……に……」

思い出した。

山田先生がISに乗った状態で落下してきたところを、間一髪で助けた時だ。

「あ……ありが……とう……」

「あ……ああ……」

照れくさそうにしながら顔を赤くする弥生が可愛くて辛い。

「あ……」

十数秒の時間を置いて心を落ち着かせてから、俺達は自分達がどんな格好になっているか気が付いた。

弥生が上から覆いかぶさるような形で、俺達は抱き合っていた。

彼女の顔が目の前にあつて、少し近づくだけでキスが出来そうだな。

前にもこんな事があつたな……。

あれは確か、俺が初めて弥生に勉強を教えてもらった時か。

「……………」

思わず無言になる俺達。

弥生の豊満な胸が俺の胸板に当たっているせいか、彼女の心臓の鼓動が俺にまで響いてくる。

互いの視線が交わり、俺にはもう弥生しか見えていない。

思わず己の欲求に従いそうになり、弥生の体を引き寄せそうになつてしまおうが、俺は嘗ての過ちを思い出し、ギリギリの所で踏み止まれた。

「に……にしても、驚いたよな。まさか、イルカがいるなんてさ」  
「そ……そう……だね……」

慌てて弥生の体を放して、照れ隠しに適当に話しをして誤魔化しつつ、手元にあつた布で自分の顔を拭く。

「……………あれ？」

俺……ハンカチなんて持ってたっけ？

いやいや、水着を着ているのにハンカチとか持っているわけがない。

じゃあ、俺が今手に持っているのは……？

「げっ!？」

どっかで見た事のある、この形状は……もしかして……？

弥生が身に付けていた水着のブラの部分っ!?

「……………っ!？」

弥生も、俺が手に持っている物に気が付いて、急速に顔を沸騰させた。

僅かに髪に隠れているけど、その大きな胸の中央部分にはピンク色の可愛らしい……

「……………」

あ、ヤバ。

この展開は、お約束の……。

「このエロガッパ

!!

「ありがとうございます

!!

胸を左腕で隠しながらの、最高の右ストレートいただきました

!!

あはは……俺の体がパンチの威力で宙に浮いてる……。

IS無しで宙に浮くってこんな感覚なんだ……。

頬が超痛いけど、最高にいいものを見れたからいいや……。  
にしても、いい右持つてるじゃん……。世界狙うかい……。？

・  
・  
・  
・  
・  
・

一方その頃、鬼瓶と総理は……。？

「何やら、海の方から織斑君と弥生ちゃんの叫び声が聞こえてきたよ  
うな気が……」

「グゴ〜……グオ〜……」

「総理は完全に寝てしまったし……」

窓の淵に腰かけながら、お猪口の中にある日本酒を傾ける。

「青春だなあ〜……」

現役高校生たちの甘酸っぱい青春の声を酒の肴にしながら笑顔を  
浮かべる、鬼瓶久吉28歳であった。

・  
・  
・  
・  
・  
・

翌朝。

ISを初めとした全ての機器の撤収作業を行い、全てが終わった頃

にはもう午前10時を回っていた。

織斑先生の特別な計らいで、おじいちゃんと鬼瓶さんは私達の撤収作業を見学した。

笑顔を浮かべながら頷くおじいちゃんの姿は、とても微笑ましかった。

そう言えば、鬼瓶さんが昨日はおじいちゃん、かなり飲んだって聞いたけど、二日酔いとかしてないのかな？ 流星はおじいちゃんだ。全ての荷物をバスに乗せた後、皆は来た時に搭乗したバスに乗り込んでいく。

私はおじいちゃんに挨拶する為に、まだバスには乗っていない。

え？ 一夏？ あんなエロガツパの事なんて私は知りません。

「この度は本当にありがとうございました」

「なんのなんの。ワシはワシがすべきことをしたまでじゃよ」

「この人は自分の功績には頓着しませんからね」

この場にはまだ他の生徒達もいるので、おじいちゃんが総理大臣だと言う事は内緒にしてある。

と言っても、顔を見て気が付いた子達が何人かいるみたいだけど。

そのいい例が本音だったりする。

おじいちゃんの顔を見て、速攻で気が付いてみせた。

「ワシらはもう少ししてから帰るが、気を付けて帰るのじゃぞ？」  
「ん……」

おじいちゃんの頭ナデナデは、一番気持ちいいな……。

「昨日も言ったけど、ラピッド・レイダーの試運転は学園に戻ってからやってね。それぐらいは出来ますよね？」

「ええ。アリーナで行えば問題無いでしょう」

おおく！ 戻ればちゃんと運転出来るんだ！

そうと分かると、結構テンション上がるなく！

「アレはどうなさるおつもりですか？」

織斑先生が言う『アレ』って、間違いなく福音の事だよな。

確か、おじいちゃんが福音の待機形態を持つてるんだっけ？

「ワシが責任を持ってアメリカに、本来の操縦者に返すと約束しよう」

「そうしてくれると助かります」

おじいちゃんはアメリカにも友人が多いからね。

その伝手を使えば、福音を返還する事も簡単だろう。

「む……そろそろ出発の時間か」

「おっと。話し込んでしまったようじゃな」

腕時計を見ながら、織斑先生がまだバスに乗っていない生徒達に、早くバスに乗るように促す。

「では、私達はこの辺で失礼します」

「うむ。これからも義娘の事を、よろしく願いますぞ」

「了解しました。お任せください」

今度は織斑先生の頭ナゲナゲ。

おじいちゃんはいいいけど、なんでこの人はいつもいつも私の頭を撫でたがる？

皆が乗り込んでから、最後におじいちゃんに挨拶をして、私と織斑先生がバスに乗り込んだ。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

ううう……未だに頬が痛いぜ……。

でも、これは俺が悪いから、甘んじて受け入れるしかない。

「一夏の奴、あの頬の赤い拳の跡はなんだ？」

「あの大きさと形は……やよっちの拳だね」

「本音さん、分かるんですの!？」

これを見ただけで俺が誰に殴られたか分かるとは、やるな……布仏さん……。

「大方、弥生に何かしたんだろう」

「で、そのまま殴られた……と」

「おのれ……よくも姫様に不埒な真似を……！　もしもここが戦場ならば、迷わず撃ち抜くものを……！」

ラ……ラウラの殺気が半端ない……。

気を付けないと、本気で俺の命が危ない……。

（あの時、聞こえてきた弥生の悲鳴は、やっぱり一夏に何かされたものだったんだ……。僕も急いで駆け付けて、一緒に制裁すればよかったな……）

んで、シャルロットの俺を見る目が純粹に怖い。

殺気を通り越して、怨恨の念が見え隠れしてるんですけど……。

「姫様と教官が来たぞ」

や……弥生か……。

昨日の今日だから、ちよつと顔が合わせにくいな……。

「あ………」

通り過ぎる際に弥生と目が合った。

「……ふんっ」

顔を赤くしてから、そっぽを向いてしまった。

でも、そんな顔も可愛いと思えちまう辺り、俺って弥生にゾッコンなんだなあ……つてつくづく思う。

（もしも昨日の事が総理や千冬姉に知られたら、絶対に俺の命は無かったな……）

それに関してだけは、本気で運がよかつたって思う。

バスが出発し、移動中や途中で休憩で立ち寄ったサービスエリアでもずつと弥生には話しかけられなかった。

サービスエリアではいつものメンバーがバリケードを作つて弥生に近づく事すら出来なかった。

でも、この程度じゃへこたれたりはしない！

俺の決意はそう簡単に折れたりはしない！

これからある夏休みで、俺は弥生を守る男になる！！

「なにやら、あの男が笑いながら拳を握ってますわ」

「また変な事でも考えてるんだろ？」  
「……最後まで締まらねえくなあ……俺って……。」



## 板垣弥生の中学生日記（一年生編）

セント  
聖マリアンヌ学園。

中高一貫の女子校で、在学している殆どの生徒が超のつくほどのお嬢様である。

学園全体の偏差値も非常に高く、入学試験もかなりの難関とされている。

規律が多少厳しくもあるが、それでも、ここを入学しようとする人間は後を絶たない。

完全男子禁制の女子の花園とも言うべき学園の門を、一人の少女が潜ろうとしている。

少女の名は『板垣弥生』

この物語の主人公であり、神によって第二の人生を歩む事を義務付けられた転生者。

そして、内閣総理大臣である『板垣平松』の義理の娘である。

これは、そんな彼女の中学生時代の物語。

舞台は、今から約3年前に遡る。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

桜舞い散る並木道。

綺麗に舗装された歩道を歩く、紺色のブレザーにグレーのスカートを履いた一人の少女。

その黒く長い髪を美しく靡かせて、長い前髪によって顔の左半分が完全に隠れている。

傍から見ると分かりにくいだが、前髪の下には包帯が巻かれている。その手には真っ白な手袋が嵌められていて、足には真っ黒なストッキングを穿いていた。

首から下の肌が全く露出していなかったが、それが逆に彼女の美しさを引き立てていた。

「見て、あの子……」

「うわぁ……凄く綺麗……」

彼女と同じ制服を着た少女達が立ち止まり、まるで道を開けるように端に避けて視線を向ける。

これから同級生となる少女達の視線を一身に集めている者こそが、板垣弥生その人である。

学園から支給された鞆を体の前で両手で持ち、ごく自然な足取りで歩いている。

その瞳はどこまでも真っ直ぐに前だけを見つめていて、その顔には喜怒哀楽のいずれの感情も浮かんでいない。

それもその筈。何故なら、弥生の心の中は……

(ちよつとおくっ?!) なんて皆して私の事を見ているの!? やっぱ……こうして前髪で目を隠しているのが怖く見えてるのかな……。自分でも暗く見えるしなく……。でもでも、だからと言って、横に逸れてひそひそ話をしなくてもいいんじゃないっ?! 私のハートはガラス以上に壊れやすいんですけどく!!)

周囲の視線を完全に勘違いしていた。

弥生は自分が美少女である事を全く自覚していない。

それどころか、薄気味悪いとすら思っている始末。

それはIS学園にいる時も変わらないのだが、この頃はその思い込みが更に酷かった。

(まぁ……私の事をどう思おうが別に気にしないんだけど。こっちに干渉さえしなければ、何も文句は無いよ)

これである。

周囲は弥生を出す『お嬢様オーラ』に魅了されて近寄りがたくなっているのが真実なのだが、当の弥生本人は、それを完全に自分を避け

ていると勘違いし、自分から近づく事もしない。

マイナスとマイナスが合わさった結果、微塵もプラスにはならず、逆にボツチがひどくなった。

一番の問題は、その事を弥生が気にしておらず、寧ろそれを望んでいる節がある事。

この頃の彼女は、色々な相乗効果が組み合わさった結果、孤高の美少女と相成ったのだ。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

聖マリアンヌ学園の門を一人で潜る弥生。

他の子達は保護者が同伴しているのだが、彼女は一人である。

それもその筈。弥生の義父は内閣総理大臣。

そう簡単に国会を抜け出せるはずもなく、仕方なく一人で入学式に赴かなくてはいけなくなったのだ。

しかし、弥生は転生者であるが故に大人の事情はちゃんと把握している為、義父が入学式に来れなかったからと言って癩癩を起すような心の狭さは持っていない。

入学式を緊張のまままで終えた弥生は、そのまま自分が配属される教室に向かう事に。

普通の中学校ならば、ここでガヤガヤと騒ぐところだが、そこは流石お嬢様学校と言うべきか。

一切の私語を慎んだ状態で生徒達は教室に足早に向かつて行った。

弥生の場合、普通に話しかける勇氣も度胸も無かったただけだが。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

弥生にとって、自己紹介ほど苦手なものはない。

唯でさえ自己表現が苦手だと言うのに、何が悲しくて自分の事を紹介しなくてはいけないのか。

少なくとも、弥生はそんな風に考えている。

そんな苦手な自己紹介が、今日の前に迫ってきている。

入学式の直後に教室に入り、自分達のクラスの担任の紹介と、学園の規律などに関する簡単な説明。

その後各教科書の配布などが行われ、最後にクラス全員の自己紹介が行われた。

「はい、次は……」

一人の生徒が自己紹介を終えて席に座り、担任が次の生徒を指名する。

この過程が弥生にとって死神の足音にしか聞こえていない。

(じ……じ……じ……自己紹介って何を言えればいいんだ……！ 趣味……はストレートに言ったら普通に引かれるわ!! 下手に目立つのは得策じゃないし、ここはやっぱり当たり障りのない事を言うのが妥当か……)

板垣弥生の『い』の番はすぐにやって来る。

弥生は自慢の頭脳をフル回転させて、この窮地を乗り切る方法を模索していた。

「あの子……校門の所で見かけた……」

「うん……あの綺麗な子……だよな……」

「同じクラスだったんだ……」

「なんて美しいお顔なのかしら……」

このようなひそひそ声も、今の弥生には微塵も耳に入ってこない。そんな余裕が無いのだから、仕方がない事なのではあるが。

「はい。では次は板垣さん。お願い出来るかしら？」

「……………」

「板垣さん？」

「……………」

「板垣さくん？」

そこまで来て、ようやく弥生は自分が呼ばれている事に気が付いた。

「あ…………はい…………」

本気で混乱している時ほど、意外と噛んだりしないものだ。

変な声を出す事無く、弥生は普通に（周りから見たら優雅に）立ち上がった。

「い…板垣…弥生…です…………」

まずは名前は言えた。

問題はここからだ。

「趣味…………は…………アニソン鑑賞…………と…………漫画やラノベ…………です…………」  
ものは言いようとはよく言ったもんである。

本当はここに『ゲーム』と『プラモ製作』も加わるのであるが、流石にそれは言わずに飲み込んだ弥生であった。

「音楽…………。やっぱり、クラシックとかお聞きになさるのかしら…………」

「きつと、シエイクスピアや夏目漱石とかお読みになるのでしょうかね…………」

んなわけねーだろ。

生粋のオタクである弥生とは縁も所縁も無い単語を言われても、困惑しかない。

「ありがとうございました。では、次は…………」

何もツツコまれずに自己紹介が終わった。

これさえ終われば、後はどうとでもなる。

ホッと肩を撫で下ろしながら、弥生は静かに椅子に座った。

当たり障りのない自己紹介を終え、後は目立たぬように学園生活をエンジョイするだけ。

せめてもの幸いは、弥生の席が窓際の一番後ろである事か。

偶然にも、ここは後に入学する事になるIS学園での弥生の席と全く同じ位置だった。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

超がつくほどのお嬢様学校と言う事は、即ち超がつくほどのエリート学校である事と同義である。

聖マリアンヌ学園は中一の段階からかなりレベルが高い授業を行っているが、それについてこられないような生徒はここにはいない。

それは弥生も例外では無く、彼女は普通に授業についていけていた。

ここまで読破した読者の諸君ならば既に知っているとは思いますが、弥生はかなり頭がいい。

あのIS学園でも次席になれる程の頭脳の持ち主であり、その明晰っぷりは中学時代から健在だった。

中学に入つての初めての中間試験。

学年別に成績上位者が廊下に順位付けされて張り出され、生徒達が目に見られる。

事実、順位が張り出された廊下には、多くの生徒達が集まっていた。

「えくとう…私…無いかあ…」

「当たり前じゃない。貴女、古文でかなり苦戦していたし」

「そうだけどさく…」

「学年一位に輝いたのは……板垣さん？」

「板垣さんって、あの……？」

「みたいね。新入生の中でも特に注目された、容姿端麗の美少女」

「同じ一年生とは思えない程にスタイルも良かったし、神に二物を与えられた人って、本当にいるんだね……」

実はこの時、弥生は全ての教科で満点を取っているのだが、弥生本人は『ここに通っている子達なら、これぐらいは当たり前だよ』と思っただけで、別に気にはしていない。

そんな全教科満点を取った本人はと言うと……

（お腹空いたなく……。早く食堂に行こう）

少女達の後ろを気配を消しながら通過して行って、頭の中で食事の事だけを考えていた。

頭脳だけでなく、その大食漢っぷりも、この頃から健在だった。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

通常、中学での昼食と聞くと、大抵は給食か弁当を持参するのが普通だろう。

だがしかし、ここは天下の御嬢様学校。

校舎以外の施設もIS学園に負けず劣らずの充実っぷりで、これまたIS学園に匹敵する程に広く綺麗な食堂が見事に完備されている。

入学以来、弥生の昼食は主にここでとられていた。

勿論、端の方の席に座って。

（本当は別の場所で食べたいんだけど、中庭も屋上も人が多くて居づらいんだよね……）

別に食堂があるからと言って、弁当を持参しない生徒がいなわけ

ではない。

中には家から弁当を持ってきて、弥生が言ったように屋上や中庭で陽の光を浴びながら食べる者も少なくない。

だが、この頃の弥生に、そんなリア充な事は出来ないし、そもそも、自らその輪に飛び込むような愚行はしない。

結果とて、こうして食堂の端の方で一人寂しく（とは微塵も思っていない）食事をしている。

だがそこに、食事と言う弥生にとって数少ない至福の時間を邪魔する存在がいきなり現れた。

「ごめんね。ここ、いいかな？」

「え？」

自分の分の食事をトレーに乗せてやって来たのは、セミロングの髪を三つ編みに纏めた少女。

宝具『水流豊胸機』モデル・バストを所持している狂戦士のサーヴァント、桜井美保。

容姿だけなら美少女と言っても差し支えないが、その中には猛獣を飼っている。

まだこの頃は巨乳ではない。

「あ？　なんか言った？」

ナンデモアリマセン……。

「で、いいい？」

「え……えつと……」

中学に入つて、まともに他人と会話をした弥生は、いきなりの事で戸惑っていた。

（なんだろう……ここで傍に逆らえば、命に関わるような気がする）

桜井から何かを感じ取った弥生は、本能的に危機を悟った。

ここで弥生に掲げられた選択肢は『YES』の一択しか残っていない。

「ど……うぞ……う？」

「ありがと〜♡」

満面の笑みを浮かべながら、弥生の隣に座る桜井。



その顔は弥生が食べているものを見た瞬間に凍りつく事になるが。

「な……なにそれ……」

「……………」

弥生が食べているのは、超大盛りのビビンバ。

石造りの容器が熱を持っていて、未だにジューズと音を立てていて、食欲をそそる。

「美味しそうだけど……この量は……」

確実に弥生の体の殆どを覆い隠す大きさの容器の中身は半分以上が空になっていて、桜井の視線を気にしながらも、弥生の手を持つレングは止まる気配が無い。

「普通にすぎ……」

この時のことが切っ掛けになり、これから桜井と微妙な腐れ縁になっていくとは、この時の弥生は思いもしなかった。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

この聖マリアンヌ学園はお嬢様学校である。

まるで一昔前の百合系の漫画やアニメに登場しそうな校風で、別に校則で決められていないにも関わらず、何故か先輩の事を『お姉さま』と言うようになっていた。

「あ！ 高等部の銃磨お姉さまよー！」

「凛々しくて、今日も素敵だわ……♡」

中庭を歩く高等部1年生の少女。

名を『落合銃磨』と言う。

生まれつきの茶色い髪を腰の辺りまで伸ばし、頭頂部からは二本の

くせつ毛が飛び出している。

目が鋭く、額から一筋の傷跡が見えるが、それが却って彼女の凛々しさを強調させていた。

多少は男つ気が強く感じるが、それでも立派に美少女と呼べる容姿をしている。

そんな、中等部、高等部の隔てなく後輩たちに人気のある彼女だが、実は、自他ともに認める典型的な同性愛者<sup>レスビアン</sup>だった。

(新入生たちの中に、私好みの美少女はいるだろうか……)

高等部に上がってからこっち、こうして新入生の中から自分の好みに合った少女を探すのが、彼女の日課になっていた。

顔には決して出さないが、その内心はドキドキワクワクしている。

その銃磨がふと、視界の端にある姿を捉えた。

「あ……あれはっ!?!」

姿はすぐに曲がり角を曲がって消えてしまったが、急いでその後ろ姿を追いかける。

そこには、自分と同じように、周囲の羨望を集めている一人の少女が歩いていった。

「彼女は……?」

「あれ? 知らないんですか?」

彼女の傍まで来ていた後輩が、目の前にいる少女に関して説明した。

「あの子は中等部一年の板垣弥生さんと言って、容姿端麗で成績優秀、間違いなく今年の中等部の新入生で注目の人ですよ」

「彼女が噂に聞く……!」

銃磨の耳にも弥生の事は聞こえていた。

中学一年生とは思えない程に大人びていて、成績も常に一番をキープを続けている。

銃磨も一度は会いたいと思っていた新入生の一人だった。

「そうか……あの子が……ふふふ……♡」

「お……お姉さま?」

本人が全く知らない所で、弥生は厄介な人物に目をつけられてしま

う。

中学の頃から、弥生の日常は波乱に満ちていた。

## 板垣弥生の中学生日記（二年生編）

時間の流れとは残酷なまでに早いもので、弥生が周囲から四苦八苦しながらボツチを貫いて（いるつもり）、学園生活を頑張っていると、あつという間に一年が過ぎ、弥生達は二年生に進級した。

進級すれば、当然のように新しく新入生が入ってくるわけで、そうになると、必然的に弥生達にも後輩が誕生することになる。

毎度の如く、弥生は自分の評判を完全に勘違いしていて、周囲からの視線を自分に対する蔑みと捉えている。

実際には、非常に教師や生徒達からの評判も良く、中等部の先輩達や高等部の生徒達にも弥生の噂は広まっている。

人の口には戸が立てられないが世の常で、弥生の評判は生徒達の口コミから広がっていき、やがては外にまで浸透していくことになった。

中には、弥生の噂を聞きつけて聖マリアンヌ学園に入学を希望する者まで出る始末。

板垣弥生と言う少女の評判は勝手に独り歩きしていき、当然のように尾ひれ背びれが追加されていくことに。

知らぬは当人ばかり也。

中学での弥生の勘違い生活は、まだまだ終わらない。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

諸君は『四十院神楽』と言う少女を知っているだろうか。

IS学園一年一組の生徒で、原作ではお世辞にも出番が多いとは言

い難い少女。

そんな彼女だが、実は弥生と意外な接点がある少女だったのだ。

本編においてもセリフは愚か、存在すら示唆されていなかった彼女だが、その理由は中学時代に起きた『ある出来事』に起因している。

弥生と神楽。

この二人の初めての出会いは、中学二年生の桜舞い散る春のことだった。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

それは、神楽が渡り廊下を一人で歩いていた時のこと。

彼女のポケットからハンカチが落ちてしまうのだが、その事に神楽は全く気が付かず、そのまま歩いて行ってしまふ。

そこに、偶然にも後ろからやって来た弥生が落ちたハンカチの存在に気が付いて、迷わずソレを拾い上げてから、手の中にあるハンカチが目の前を歩いている少女が落とした物だと勘付くが、それを渡す時の言葉が思いつかない。

(ど…どうしよう…。これがないとあの子も困るだろうし、かと言って、私みたいな得体の知れない女がいきなり自分のハンカチを持って現れたりしたら、確実に怪しまれるよね…。下手すれば、先生がやって来て生徒指導室に連行されるかも…)。

などと考えている間にも神楽は悠々と歩いて行く。

それに焦りを覚えた弥生は、もうなりふり構わずにストレートに行くことにした。

何か起きた時は、全力で土下座して謝る覚悟を持って。

「あ……あの……」

「はい？」

声を掛けられて神楽が振り向くと、そこには自分のハンカチを持って立っている弥生の姿が。

神楽も弥生の学園内での評判は知っていて、彼女に対して悪感情など微塵も抱いていない。

それどころか、一人に女として尊敬の念すら抱いているぐらいだ。

その有名人が、今、自分の目の前にいる。

しかも、見覚えのあるハンカチを持って。

「ど……どうしたんですか？」

「これ……」

緊張しながら返事をする、弥生がハンカチを差し出した。

それを見て、神楽はハツとなり、急いで制服のポケットを探る。

しかし、幾らポケットを探しても、入っている筈のハンカチは無い。

だとすれば、導かれる答えは一つだけ。

「お……落とし……まし……たよ……」

自分が何か言う前に弥生が答えを言ってくれた。

自分の不手際で、学園の有名人に迷惑を掛けたと思った神楽は、急に恥ずかしくなって顔を赤くする。

（お……怒ってるっ?! やっぱり、ちゃんと考えてから渡すべきだったか……）

だが、弥生がそんな思春期の少女の感情の機微を読み取れるはずもなく、毎度のように盛大な勘違いをしていた。

「あ……ありがとうございます。このお礼はいずれ必ず……」

慌てず騒がずの精神で、そつと弥生の手からハンカチを受け取る神楽。

その心の中は、有り難さと申し訳なきで一杯になっている。

これでこの話は終わり……と思いきや、実は続きがあったりする。

神楽にハンカチが渡る直前、弥生は僅かではあるがハンカチが汚れている事に気が付く。

渡り廊下の床に落ちた拍子に汚れてしまったのだ。

(あ……なんか汚れてる。このまま使うのは衛生上よくないよね……  
そうだ!)

この時、弥生の頭に閃きが走った。

「ちよ……つと……待って……」

「え?」

いきなり止められて神楽が困惑している間に、弥生は自分の制服のポケットを弄る。

数秒で目的の物を見つけて、ソレを神楽に手渡す。

「これ……使つ……て……」

「あの……これは……」

弥生が出したのは、真っ白なレースのハンカチだった。

「そのハ……ンカチ……落ちた時……に汚れ……たみたい……だ……から……」

「汚れ……あ」

ここで、ようやく汚れを発見する神楽。

確かに、このまま使う訳にはいかないだろう。

「し……しかし、それを私に渡したら、板垣さんがお困りになるのでは……」

「同じ……のをもう一枚……持って……るから……大丈夫……夫……」

「でも……」

普段はコミュ症な癖に、こんな時だけ強情な弥生。

このままでは埒が明かないと判断し、半ば無理矢理に近い形でハンカチを渡した。

「ちよ……ちよつとっ!」

「それ……あげる……」

そのまま、脱兎の勢いで早歩きで去っていった弥生。

彼女の背中を見つめながら、暫しの間、神楽は呆けていた。

(ただ落ちたハンカチを拾ってくれただけでなく、御自分のハンカチを渡して、アフターフォローもするなんて……)

時間にして十数分の出来事。

だがしかし、この僅かな時間の中に起きた事は、神楽の心の中に

しつかりと刻み込まれた。

「板垣弥生さん……………素敵……………♡」

弥生のくれたハンカチを顔に当てて、ポツと顔を赤らめる。

今までの人生の中で他人を必要以上に意識してこなかった少女が、初めて誰かの事を強く意識し始めた。

(き…緊張した…でも、間違えて同じハンカチを二枚持つてきていてよかったよ)

去りながら、弥生は心からの安堵を感じていた。

ポツチを謳いながらも、結局は他人に優しくしてしまう弥生であった。

因みに、その後の神楽は一日中、機嫌がよくて、終始笑顔のままだったと言う。

余談だが、この時のハンカチは神楽の手によって額縁に入れられ、彼女の自室に飾られていると言う。

後々にIS学園で弥生と再会する神楽だったが、弥生はその事を全く知らなかった。

と言うのも、神楽にとっては掛け替えのない一時でも、弥生にとっては何気ない日常の1ページに過ぎなかったから。

神楽の名前はおろか、顔すらも覚えていないだろう。

だが、それでも神楽は影から弥生の事を想い続ける。

それはきつと、これからも変わる事は無いだろう。

少なくとも、互いに卒業をするまでは。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・



聖マリアンヌ学園の食堂にはテラス席が存在している。

流石に夏の暑い時や冬の寒い時は私用する生徒は少ないが、春や秋の心地いい陽気の時には、多くの生徒達が使用する。

そんなテラス席の一角に、奇妙なサークルが出来ていた。

そのサークルは人ばかりで出来ていて、その中心には毎度お馴染みの弥生が座っていた。

弥生の座っている席はテラスの一番左端。

本来ならば、最も目立たない場所にある筈の席なのだが、この時ばかりは非常に目立っていた。

と言うのも、弥生が髪をかき上げながら本を読んでいたから。

傍には一杯の紅茶があり、全身から謎のオーラを発していた。

「あれが噂に聞く弥生お姉さま……」

「なんで優美な読書姿なのかしら……♡」

「きつと、何かの文学作品を読んでいるに違いないわ……」

カバーをしているから周囲には分からないが、弥生が今読んでいる本は完全なラノベで、タイトルはまあ……男装をした一人の少女と、言葉を話す一台のバイクの旅物語……と言えば、賢明な読者諸君は分かるだろう。

本に夢中になっている時の弥生の集中力は凄まじく、ちよつとやそつとじやびくともしない。

少なくとも、周囲の喧騒ぐらいでは彼女の集中は乱せないだろう。

(バイク……いいな……。おじいちゃんに頼めば、免許を取らせてくれるかな……)

そして、この時の本が後に弥生がバイクに目覚める切っ掛けでもあった。

流石に、ラピッド・レイダーはエルメスのように喋ったりはしないが。

弥生がページを捲ると、そこに一つのショートケーキが運ばれてくる。

そこで初めて弥生は我に返るが、彼女はケーキなど頼んだ覚えはない。

「えつと……」

「あちらのお客様からです」

「は……？」

店員が後ろを指し示すと、そこには笑顔で手を振っている銃磨がいた。

勿論、弥生は彼女の事なんて全く知らない。

分かる事と言えば、制服から相手が高等部の先輩だと言う事だけ。

「あ……ありがと……う……ご……ざ……い……ます……？」

「どういたしまして」

爽やか笑顔で応える銃磨だったが、その心の中は興奮の坩堝にいた。

（これでさり気なく『優しい先輩アピール』が出来た！　ここから慎重に攻略を進めていかなくては……！）

弥生の角度からは死角になって見えないが、銃磨の手には彼女のお手製のデフォルメされた『弥生ちゃん人形』が握られていた。

人形の口の部分が妙に湿っているのはご愛嬌。

使用目的を深くツツコンではいけない。

「は……？」

いきなりのケーキに困惑しつつも、フォークを手にとってケーキを一掬い……しようとしたところで、初めて自分の周囲が変な空間になっている事に気が付いた。

（な……なんで皆してこっちを見て……？）

弥生にとつて、ここは数少ない穴場のつもりだったが、今日に限って何故か目立ちまくっている。

弥生がここに来た頃には、まだ人の姿も疎らで、のんびりと読書が出来ていた。

しかし、今の弥生はものの見事に晒し者と化している。

こんな状況で正常でいられるような、鋼の精神を持っていない。

弥生の精神は、鋼どころか障子紙レベルである。

「……………あむ」

取り敢えず、半端に口に運ぼうとしたケーキを食べる。

(あ、美味しい……。これ、ワンホールで食べたいな……)

口の中に広がる生クリームを味わいながらの現実逃避。

そこに、弥生を更に追い詰める存在が姿を現す。

「あ、ここにいた〜」

弥生を一方的に友達認定している桜井美保である。

周囲の状況など気にせずに、屈託のない笑顔を浮かべながら弥生の座る席に近づいて行く。

「弥生お姉さまと同じクラスの、美保お姉さまよ……」

「あの方も素敵だわ……♡」

サバサバした性格が幸いし、桜井は弥生とは別のベクトルで人気が出ていた。

「それに加え、高等部のアイドルである銃磨お姉さまもいるし……」

「私……ここに入学してよかった……♡」

学園での人気者が揃ったこの状況は、憧れを持って入学した新入生たちには、とても輝いて見えた。

だが、当の本人達は彼女達の羨望の眼差しを微塵も気にしていない面々。

桜井は元々から気にしていないし、銃磨は弥生に夢中でそれどころではない。

弥生に至っては、緊張と混乱のあまり、頭がぐるぐるとなっていた。

「いきなり消えて、どこに行ったかと思ったわよ？　ここ、座るわね」

「あ……」

弥生が何か言う前に桜井は遠慮無く座る。

この性格が弥生は非常に苦手だった。

「何読んでるの？　あ、これ私も持ってる。面白いわよね〜」

横から覗き込むようにして本を見て、コミュ力が高い事を存分にアピール。

そんな様子を見て、弥生の事を特に想っている少女達が黙っているわけがない。

「なんなんだ彼女は……！　まさか、板垣さんの恋人……!?」

銃磨は桜井と弥生の関係を深読みしすぎて、静かにライバル意識を





## 板垣弥生の中学生日記（三年生編）

月日は流れ、弥生達ももう中学三年生。

中等部限定ではあるが、最上級生ともなれば、嫌でも後輩達から注目される立場となる。

それが、学園内で有名となっている弥生を初めとする面々ならば猶の事。

「おはようございます。弥生お姉さま」

「お…おはよう……」

「今日もいいお天気ですわね。弥生お姉さま」

「そう…だ…ね……」

「実は、お姉さまの為にクッキーを焼いてきたんです！ 是非とも食べてくださいー！」

「あ…りがとう…ね……」

このように、少しでも廊下に出て歩けば、その瞬間に彼女に強い憧れを抱いている女子生徒達に囲まれてしまう。

（うう…：…どうして私に近づいてくるのかなあ…：。別に私に関わったって何も面白い事なんて無いのに…：。それと『お姉さま』って何？ 前々からずっと気になってたけど、どうして上級生の事をそんな風に呼ぶんだらう…：。まあ、クッキーは普通に美味しかったけど）

入学してもう三年目に突入しているにも関わらず、未だに自分の立場と言う物を正しく理解していない弥生。

それと言うのも、実はこの頃の彼女は原作開始時よりも警戒心が増していて、幾ら原作に登場していない人間でも、どこでどんな風に原作ヒロインと繋がっているか分からない為、必要以上に他人に対する警戒心が強くなっているのだ。

（もうすぐ…：…原作開始…：…か……）

自分が転生者である以上、否が応でも原作に関わらされると思っている弥生は、一日一日が憂鬱で、それ故に自分の気持ちを悟られないように、必死に仮面を被りながらも、自身のストレスを発散する事に

全力を注いでいた。

こうして、弥生の中学生生活最後の一年が幕を開けた。

・  
・  
・  
・  
・  
・

三年生ともなれば、嫌でも『受験』と言う言葉と関わってくる。

厳密に言えば二年生の後半辺りから進路相談などで受験の言葉は耳にするだろうが、本格的に関わってくるのは三年生になってからだろう。

弥生とてそれは例外では無く、彼女は放課後に図書室にて自主的に勉強を行っていた。

「……………」

完全集中モードに入っている弥生は、只管に目を動かして、ノートの上でペンを走らせる。

ノートにはびっしりと公式や文法などが書かれていて、弥生の本気度が窺える。

真剣に勉強に取り組む弥生の姿を見て、図書室に訪れた殆どの生徒が彼女に見惚れていた。

本来なら注意すべき立場である図書委員ですらも。

だが、そんな図書室にて約一名だけ、普通にしている少女がいた。

「ここをこうして……と。出来た」

勉強をしている弥生の隣で、桜井が笑顔で彼女の髪を弄って、色んな髪型にしていた。

今の弥生の髪型はポニーテール。

頭を動かす度にポニーテールが揺れて、周囲の少女達を萌えさせ

る。

「今度は……つと」

ポニーテールを解いてから、次に変えたのは三つ編み。しかも、二つに分けて桜井と同じ髪型に。

「お揃い♡ なんちゃって」

だが、それでも弥生は全く反応しない。

これで眼鏡でもかけていれば、瞬く間に委員長キャラの一丁あがりだ。

「お次は……」

完全に桜井の玩具となっているが、それを止める者は誰もいない。何故なら、次はどんな髪型にするのか気になって仕方がないから。

「サイドテール。一気にイメージが変わるわね」

ここまでできれば普通は嫌でも気が付きそうだが、弥生の集中はこの程度では崩せない。

だから、桜井は更に調子に乗る。

「まだ粘りますか♡。そっれっなっら……」

サササツ……つと櫛とヘアゴムを使って手早く弥生の髪型が変わっていく。

今度の髪型は……

「王道にして魅惑のツインテール♡ やっぱ……このツインテールの弥生って可愛すぎ……♡」

ここは図書室。

大声を上げるなどもつてのほか。

だから、生徒達は声を立てずに鼻から『愛』を噴き出した。

そんな生徒達の中に、あの二人も勿論いる訳で……。

「ナイスだ……ナイスだぞ！ 桜井さん！ まさか、図書室で板垣さんの色んな姿を見れるとは……♡ ちゃんと携帯で撮影したし、家に帰ってからプリントアウトして部屋に飾らなくては……」

ある意味で弥生よりももっと深刻な状況にあると思われる、高校三年生になった落合銃磨。

お前も立派に受験シーズンだろうに。



こんな所で油を売っていいののか。

「弥生さん素敵♡ 弥生さん可愛い♡ 弥生さん最高♡ 弥生さん萌え♡ あ……濡れちゃった……♡」

完全に目をハートマークにした弥生のストーカーの四十院神楽。

弥生のハンカチの匂いを嗅いだけで興奮してしまう彼女が、弥生の髪型七変化を見せられて、我慢が出来る筈がない。

結局、神楽は音も無く図書室を名残惜しそうに去っていき、そのまま女子トイレに直行。

そこでナニをしたかは……読者諸君のご想像にお任せする。

閉鎖時間ギリギリまで弥生は勉強を続けて、それまでずっと桜井は弥生の髪で遊び続けていた。

勿論、最終的には元に戻してバレないようにしたが。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

月日が流れるにつれて、進路に関する三者面談や二者面談が徐々に増えてくる。

弥生は会釈をしながら生徒相談室から出てきて、廊下で待っていた桜井に目配せをする。

「お待た……せ……」

「ん」

別に弥生の方は桜井の事を友達認定してはいないが、それでも、学園内で数少ない気の許せる存在であることは確かだった。

桜井は弥生の前に二者面談をして、その後にかこうして彼女を待っていてくれたのだ。

「弥生ってさ、どこを受験するの?」

「IS学園……」

「えっ!? マジでっ!?」

「うん……」

桜井が驚くのも無理は無い。

世間でのIS学園のイメージは、聖マリアンヌ学園と同じ男子禁制の女性の花園であると同時に、世界中を賑わせているISの専門学校。

入学倍率だけでもとんでも無い数値を誇るのだが、それでも毎年、世界中からIS学園の門を潜ろうとする少女達が後を絶たない。

「まあ……弥生は中等部で一番の成績を誇ってるし、勉学の面に関しては大丈夫でしょうね」

一年生の時からずっと無自覚のまま成績を一番でキープし続け、それが三年間続いた。

それに加え、普段からの生活態度も申し分なく、教師達の中では『最も模範的な生徒』としてIS学園に密かに推薦状を送ったほど。

「そう言えば、この間あった『簡易IS適性検査』をした時、どんな結果が出たの?」

「それは……」

「あく……そうだった。今はまだ家族以外の人に言っちゃいけないだった。ごめんね」

仮に高い適性値が判明し、それを口外して外部に漏れた場合、どんな連中がやって来るか分からない。

だから、学園側は生徒達に検査結果を言わないように呼びかけていた。

(そうじゃなくても、最初から言う気は無いんだけどね……)

廊下の向こうからやって来た後輩とすれ違いながら挨拶を交わし、弥生は頭の中で自分の適性値を反芻していた。

(まさに)都合主義だよな……。私にIS適性がSだなんて。これも絶対に『神』が仕組んだ事だろう……)

『S』ランクと言う破格の結果が出た時、検査員は驚きを隠せなかった。

しかも、それが内閣総理大臣の義娘ともなれば猶更だ。

慌てて検査員は弥生に結果を言わないように言つて、表向きは別のランクにするようにした。

それでもしないと、これからどうなるか分からないからだ。

「でも、なんでIS学園に？ 何か理由でもあるの？」

「おじいちゃん……に薦め……られた……の……」

「おじいちゃんって、弥生のおじいちゃんに？」

「ん……」

総理大臣の義娘ともなれば、存在自体が超VIPだ。

それに加え、適性検査でSなんて結果を出せばどうなるか、想像に難くない。

だから、総理は弥生にIS学園行きを強く薦めた。

あそこならば、セキュリティがしっかりしているから大丈夫と。

来年から新しい校則も作られ、少なくとも三年間は安全が保障される。

総理の義娘であることや、Sランクの事を誤魔化しながら、その旨を桜井に説明すると、意外とそっけない返事が返ってきた。

「ふくん……そっか」

（もうちよつと反応してくれても……つて、別に友達じゃないんだから、これが普通か）

しかし、弥生は知っている。

IS学園は決して安全ではないと言う事を。

例の校則にも穴がある事を。

でも、だからと言つて、ここで自分の事を心配してくれた養父の優しさを無下にするなど、弥生には絶対に有り得ない。

（私がこんな風に思う事も『神』の掌の上なんだろうな……）

これが転生者である自分の宿命なんだと諦めて、最終的に弥生はIS学園を受験することを決めた。

勿論、受験をすると決めた以上は全力を尽くす。

受験日当日まで、やれる事は全部やるつもりでいる覚悟だ。

「桜井さん……は……ど……を受け……るつもり……なの……？」

「私は、ここから少し離れたところにある『幕南高校』に行くつもり」  
幕南高校。

正式名称は『県立 幕張南高等学校』。

一見するとごく普通の県立高校のだが、実は裏にはIS学園に匹敵する秘密が隠されている謎の多い高校。

「中高一貫と言っても、私みたいに別の高校に行く子も結構多いみたいよ?。」

「そう…な…んだ……」

別に、そのまま高等部上がるだけが全てではない。

中高一貫教育を謳っておきながらも、意外とその辺に関しては柔軟な学校であった。

「ここを卒業したら、お互いに楽には会えなくなっちゃうわね……」

別に桜井とはプライベートで関わりを持った事は無い。

それなのに、自分との別れを惜しんでくれている。

弥生は、初めて桜井に対して不思議な感情を抱いた。

(なんだろう……。桜井さんの寂しそうな顔を見たら、胸が締め付けられるように痛かった……)

この時に感じた感情がなんなのか、弥生は後になっても分からないでいる。

これが分かるようになった時、弥生はまた一つ成長するのかもしれない。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

受験シーズンも終わりを告げ、今日は聖マリアンヌ学園中等部の卒

業式。

何事も無く卒業式は幕を閉じ、今は講堂の外で卒業生たちが中学生最後の会話を楽しんでいた。

「ん〜！ 複数の意味で終わった〜！」

「複…数…つて…」

「複数じゃない。受験と中学生生活と卒業式」

卒業式で号泣する生徒が多い中、弥生と桜井だけは全く泣かなかった。

桜井は生来の性格ゆえだったが、弥生はこの後に控えている原作開始が心配で心配で、泣いているような心の余裕が全く無かったのだ。

「『弥生お姉さまあ〜!!』」

「うわあっ!?! な…なんなのっ!?!」

後輩の1・2年生たちが一齐に弥生の所に押し寄せてきた。

彼女達は全員が泣きまくっていて、目が真っ赤に腫れている。

「お姉さまと過ごした日々は絶対に忘れません!!」

「弥生お姉さまは、永遠に私達のお姉さまです!!」

「この思い出を胸に、私達はこれから頑張ってください!!」

「だから、お姉さまもIS学園で頑張ってください!!」

もうどうしたもんやら。

こんな経験は初めてな為、どう対応したらいいか困り果てていた。

(と…取り敢えず、頭でも撫でてみるか…?)

なんでそこで頭を撫でると言う発想に行きつくのか。

何気に弥生も天然である。

「ありがとう…ね…」

一人一人の頭を丁寧に撫でていき、それぞれに感謝の意を述べる。

その際に、自然と笑顔を浮かべていたのだが、それが彼女達のハ-

トを直撃した。

「お姉さま…なんて優しいの…」

「この髪…一生洗わないわ…」

「もう…何も悔いがありません…」

「お姉さまと同じ時代に生まれてよかった…」

大げさ過ぎる反応に、増々困る弥生。

何をしても堂々巡りになるのは目に見えていた。

「あの……最後に一つ、お願いをしてもいいですか？」

「なに……？」

「お姉さまの制服のボタンを一つください!!」

「え……？」

「ここでそれを言いますか。」

でも、ボタンを渡すだけで収まりがつくのであれば安いものだ。

そう判断した弥生は、二つ返事でボタンを渡す事にした……が、それが弥生の運の尽きだった。

「えっ!? 弥生お姉さまの制服のボタンっ!?!」

「私も欲しい!!」

「弥生お姉さまとの思い出、私にも頂戴!!」

今日限定で地獄耳を發揮した後輩たちが一斉にやって来て、たちまち弥生の周りは後輩達で一杯になってしまう。

因みに、桜井はしれつと退避して、遠くからその様子を眺めていた。

「あわわわわ……」

見る見るうちに弥生の制服からボタンが無くなっていき、気がついた時にはブレザーから全てのボタンが無くなっていた。

「!!」  
「ありがとうございます!!」  
「弥生お姉さま!!」  
「!!」

「ど……どういた……しまし……て……」

この一連の騒動だけで、かなり体力と精神力を使い果たした弥生。肩を落として、近くの柱に体を預けて楽な姿勢になる。

「ご苦勞様。弥生お姉さま」

「うう……」

「ははは……」

恨めしそうに桜井を見つめる弥生。

そこに、一つの影が近づいてきた。

「あ……あの……板垣さん!!」

「ん……？」

やって来たのは、弥生と同じように卒業する筈の四十院神楽。

彼女も顔を真っ赤に染めながら、目尻に涙を溜めていた。

「私にもボタンを頂戴してもよろしいでしょうか!!」

「いや、アンタも同じ卒業生でしょうが」

「そんなの関係ありません!! 欲しい物は欲しいんです!!」

「我儘お嬢様かよ……」

桜井が呆れている中、弥生も困っていた。

もう制服にボタンなんて一個もない。

渡したくても渡せないのだ。

「あ………?」

何気なくポケットを探っていたら、奥の方に何かを発見した。

試しに取り出してみると、それは袋に入った制服用の予備ボタンだった。

「これ…でよか…つたら……」

「いいんですか?! ありがとうございます!!」

差出したボタンを一瞬で取って、まるで宝を持つように慎重な手つきで眺める。

「これは四十院家の家宝にするべきだわ……」

「しなくていいから」

弥生と桜井のダブルツッコみ。

卒業式にて初めて息が合った二人だった。

「では、私はこれで失礼します!! お母様〜! お父様〜! 神楽はやりましたあ〜!」

去り行く神楽をジト目で見つめながら、桜井と弥生は大きな溜息を吐いた。

「あんな子が同級生にいたなんて、初めて知ったわ……」

「私……も……」

本当は弥生は過去に一度、神楽に出会っているのだが、完全に忘却の彼方に行っていた。

「そういや、弥生のおじいちゃんはどうしたの?」

「おじいちゃん……なら……同級生達……や……後輩……との話……を邪魔す……る訳……にはいかない……って言って……保護者……の人達……が集

まあって……場所……に行つた……よ……」

「そつかく。何気に空気を読む、いいおじいちゃんね」

「自慢……のおじいちゃん……」

舞い散る桜吹雪を眺めながら、弥生は青く透き通つた空を見上げる。

雲一つない快晴で、最高の卒業式日和だった。

(ここから……全てが始まる)

今日、弥生は中学を卒業し、一か月後にはIS学園へと入学する。

そこで、自分の想像を遥かに超えた波乱に満ちた学園生活を送る事になろうとは、まだこの時の弥生は想像すらしていなかった。

板垣弥生15歳。

真の意味で人生の分岐点に立つ。

そして、『インフイニット・ストラトス原 作』が始まる。

.....

.....

.....

.....

.....

余談だが、意外な事に卒業式に姿を出さなかつた銃磨はと言うと……。

「まさか、板垣さんがIS学園に行くとは……。彼女の可愛い姿も、これで見納めなのか……」

「落合さん。何してるの?」

高等部の生徒と言う事で中等部の卒業式には参加できず、こうして自分の教室から双眼鏡を使って遠くにいる弥生の姿を観察して嬉しそうな悲しそうな顔を浮かべていた。

最後まで、彼女は彼女のままだった。





夏休みは何をする？

臨海学校が意外な形で終わりを告げて、それからすぐに、生徒達の誰もが待ちに待った一大イベントがやって来た。

「……と言う訳で、夏休みだからと言って羽目を外しすぎないようにするように。いいな？」

一学期最後のHRにて、織斑先生が夏休みにおける注意事項などを伝えている。

普段ならば一人の例外も無く静かにしているのだが、今回ばかりは違った。

(皆、明らかにソワソワしてる……)

私も気持ちは理解出来るが、だからと言って少しだけ気が早いように思える。

せめて、コレが終わるまではいつも通りにしていようよ。

他の子達は当然のように、箒やセシリア達ですらニコニコ顔が止まらない様子。

箒はもう少し真面目な子だと思っていたのに……。

(でも、一夏だけはなんか違うな……)

完全に浮かれ気分になっている他の皆とは違って、一夏だけは何かを決意しているような表情をしている。

夏休みに何かをしようと企んでいるのかな？

アイツの事だから、きつと碌な事じゃないと思うけどね。

「では、これでHRを終了する」

一夏が『起立!』と言った後に皆が立って、『礼!』で腰を曲げる。

見慣れた光景だけど、これが暫くの間、見られなくなると思うと、それはそれで感慨深いものがある。

織斑先生と山田先生が教室から出ていく僅かな間だけ教室は静寂が支配していたが、二人が完全に教室を後にした瞬間、一気に皆の興奮が爆発した。

「よおおおおおおおし!! この瞬間から夏休み開始だあああああつ!!」

「なにしようつかなく？　まずは〜……」

夏休み……ねえ〜……。

ま、私が主にやる事と言ったら、ある程度決まっているんだけどね。「皆、完全に浮かれてるなあ〜……」

「当然だよねえ〜。なんとたつて、高校生になって初めての夏休みだもんねえ〜」

つて、また私の所に全員集合かよ。

毎度毎度飽きないねえ〜。

「セシリアは夏休み、どうするんだ？」

「私は取り敢えず、色々な報告や機体の本格的な整備も兼ねて帰国することになりますわ」

そつか。セシリアはイギリスの代表候補生。

夏休みだからと言って、日本に留まって遊び呆ける訳にはいかないのか。

あれ？　そうになると、他の代表候補生の皆も……？

「やっぱりセシリアもなんだ」

「と言うと、シャルロットさんも？」

「うん。僕の場合は会社に戻って報告や機体の整備をするんだけど」

会社の問題が片付いてからもシャルロットはちよくちよくと電話をしているようだけど、一度はちゃんと顔を合わせて家族で話した方がいいしね。

「私もだ。くつ……！　僅かな日数だけとは言え、姫様のお側を離れなければいけないとは……！」

ラウラの場合は代表候補生であると同時に、現役の軍人だからね。他の皆以上に忙しいに違いない。

私も力になってあげたいけど、私じゃ何も出来ないしなく……。

「僕も同じ気持ちだよ。だから、父さんと義母さんには悪いけど、可能な限り早めに終わらせて、日本に戻ってくるつもり」

「ですわね」

いやいやいや。別にそんな事しなくてもいいから。

祖国での夏をちゃんと満喫してきな？

「しののんはどうするの〜?」

「私は実家に帰る事になっている」

「実家……って言うと、篠ノ之神社か」

「ああ。一応、寮に持ってきてきている荷物以外は、全て向こうに運び込んであるからな」

「そーいや、箒の実家って神社と剣道場を兼ねているんだっけ。前に本人から聞いた事があるけど、実際にどんな場所かは知らない。」

「学校の剣道場なら見た事はあるけど、本格的な道場となると、雰囲気からして違ってくるんだろーうなあ。」

「弥生さんは夏休みはどうなさるんですの?」

「私……は……」

「基本、なる事さえやってしまえば暇人になってしまうからね。」

「特に何かをするって事はないんだけど……」

「それは私も興味があるな」

「確かにね。アタシも知りたいわ」

「右に同じく」

「うわっとなっ!」

「ロランさんと鈴と簪がいきなり現れたっ!」

「全く気が付かなかったぞっ!」

「別……に……大し……た事……はしない……よ……?」

「と言うと?」

「家……の掃除……をして……ペット……の皆……のお世話……をしなが……ら……過ごす……感じ……だよ……?」

「ね? 至って普通でしょ?」

「そ……掃除っ!」

「え? なんでそこで一夏が驚くの?」

「お……おい? いきなりどうした?」

「何を驚いてるのよ?」

「いやだって……」

「別に何もおかしい事は言っていないと思うけど?」

「あの凄い家を一人で掃除するのか？」

「うん……」

「いやいやいや！ どう考えたって一人じゃ無理だろっ!？」  
む……。

そこで無理って決めつけるのは気に入らないなあ。

「え？ なに？ 弥生の家ってそんなに凄いわけ？」

「凄いなんてもんじゃねえよ！ 豪邸も豪邸、超豪邸なんだよ！」

「そりゃ……仮にも内閣総理大臣の家だし……。貧相であるわけがないが……」

「いや、箒も実際に見たら、そんな余裕な態度は取れなくなるぞ」

「そ……それ程なのか……？」

私の家を見た大抵の人が似たようなリアクションをするんだよな。

もう完全に見られた今では、なんとも思わないけどさ。

「しかし、それ程の屋敷に住んでいるのであれば、メイド的な人間の一人や二人は雇っているもんじゃないのか？」

「おじいちゃん……がその手……の人……をあまり好まない……から……それ系……の人……は一人もいない……なんだよ……」

「ほ……ホントですよっ!？」

「じゃあ、家事とかって……」

「私……がしてる……」

当然じゃない。何を今更。

「姫様がお一人でっ!？」

「それ……冗談じゃない……よね？」  
「うん」

おじいちゃんは普段から忙しいし、他の吉六会の人達も時々、家に来て簡単な掃除とかをしてくれるけど、本格的な掃除ともなると話が違ってくる。

「何日か……に分けて……少しずつ……やってる……」

「それは流石に大変だよお……」

それは私も重々に承知してるんだけどね。

でも、こればかりは仕方がないんだよ。

「じゃあ、私が弥生ちゃんのお手伝いをしてあげるわ!!」

.....

(なんで.....)

(楯無さんが.....)

(一年の教室にいるんですの.....?)

もうツッコむのもアホらしくなってきた.....。

だから、ここは敢えてスルーの形で。

「何をやってるんですか.....お嬢様.....!」

「げっ!? 虚ちゃんっ!」

楯無さんに続くようにして現れたのは、本音のお姉さんである虚さん。

鬼の形相で髪が逆立ってるけど、気にしたら負けだと判断します。

「仮にも生徒会長ともあろう者が、いきなり一年生の教室に押し掛けるなんて、何を考えてるんですか!!」

「だつてえ〜! 私の中にある『弥生ちゃん分』が完全に枯渇しちゃつて、少しでも弥生ちゃんの香りを.....」

「馬鹿な事言つてないで、行きますよ!!」

有無を言わさずに楯無さんの首根っこを掴んで、そのまま外まで連行していった。

「ちよ.....虚ちゃん?」

「全く.....貴女には生徒会長としての自覚が足りなさすぎます!! 大  
体.....」

引きずりながらもお説教が開始された。

あれを公衆の面前でされるのは、普通に羞恥プレイだな.....。

「お前も苦労してるんだな.....簪.....」

「そんな事を言ってくれるのは、弥生と箒だけだよ.....」

同情の瞳で簪を見つめつつ、そつと肩を叩く箒。

君のお姉さんも破天荒全開だからね〜。共感出来る部分はいっぱいでしょう。

「逆に、本音のお姉さんは凄い人だね.....色んな意味で」

「ん〜？」

自覚無いんかい。

もしかして、あれが虚さんの素だったりするのかな？

「でも、楯無さんの言う事も尤もですわ」

「そうだね。僕達で弥生の家の掃除を手伝いをしてあげたいよね」

それは非常に嬉しい申し出だけど、国には帰らなくてもいいの？

「しかし、お前達は一度、祖国に帰らなくてはいけないんだろう？」

「そうなのよね〜。アタシも、中国政府から一度戻って来いって催促が来てるのよ」

「それはこちらも同様だよ。国が違えども、代表候補生のやる事なのは、往々にして似たようなもんなのさ」

まだ学生なのに、皆は凄いな〜。

割と本気で感心するよ。

「ならば、皆が丁度戻って来る頃を見計らって、掃除をすればいいんじゃないか？」

「それが一番理想的だけど……」

「やよつちはそれでもいいの〜？」

「別……に……それぐ……らいなら……」

特に急いでしなくちゃいけないって訳でもないし。

少しぐらい遅れても問題は無い。

「では、そのようにするとしましょうか？」

「賛成だ。本当なら日本に残る私達だけでも先に行った方がいいんだろうが、こつちもこつちでやる事があるしな……」

「私も、日本の代表候補生として色んな所に呼ばれてる」

「実は私も〜、おうちでしなくちゃいけない事があるんだよね〜」

本音がそう言うと言われたいんだけど、彼女も一応は暗部の家系。

その手の関係でやる事があるんだろう……と信じたい。

「そう言う一夏はどうなのよ？ アンタの事だから、てつきり真つ先に弥生の家の掃除を手伝いに行くって言い出すかと思ったけど」

あ、それは私も思った。

「そうしたいのは山々なんだけど、今年の夏休みは丸々全部に予定が

入ってるんだ」

「なんだと？ お前にしては珍しいな……」

「そうね。てつきり、家の掃除を終えた後は、弾と一緒に遊んでばかりだと思っただわ」

「お前が俺をどんな風に見てるのか、その一言で全部分かっちゃったよ」

いや、高校一年生の男子なんて、そんなもんでしょ？

まだまだ遊び盛りなんだし。

「でも、夏休みを丸々使うなんて、一体どんな用事なの？」

「ちよつとな」

そこで言葉をぼかすって、本気で何をやる気なんだろう？

「兎に角、俺は手伝いは出来ない。ゴメンな、弥生」

「気にし……てない……よ……」

掃除に関して、一夏程の戦力が外れるのは純粹に残念だとは思うけど、彼のプライベートを潰してまで手伝ってほしいとは思わない。

一夏には一夏だけの夏休みがあるんだから。

(一夏が外れる……)

(これで、最大の障害の一角が潰れましたわ！)

(千冬さんは教師と言う立場上、来ることは出来ないから……)

(ここが僕達の正念場!!)

(チャンスはここしかない!!)

(この機会に弥生と距離を縮め、そして……)

(やよつちのおうち、楽しみだなあ♡)

あの……みなさくん？ なんか急に周囲の気温が上昇してるよ  
うな気がするんですけど……？

ラウラだけが一人だけハテナマークを浮かべてるし。

「つーか、ちよつと気になったんだけど」

「な……なんだよ？」

「一夏つてさ、前に弥生の家に行った事があるの？」

「家の前までだけだな。流石には入ってねえよ」

「あつそ」



そっけなくしている風に見えるけど、鈴ってば安心してない？

「先程の弥生さんの言葉で気になったんですけど、弥生さんはペットを飼っていらしてるんですの？」

「うん」

「どんなペットかは気になるけど、ここは敢えて何も聞かない方が吉と見た」

「楽しみが増えるからね」

外務大臣と財務大臣は普通だけど、文部大臣と農林水産大臣を見た時の皆のリアクションが気になる。

セシリアとか特に驚きそう。

「ところで弥生……」

「ん？」

皆の間を見計らって、簪がそつと耳打ちをしてきた。

「夏休みは勿論……」

「行く……よね……？」

実は密かに私と簪は『ある約束』をしていて、もう既に一緒にお出かけをする予定を組んでいるのだ。

行く場所は勿論、私や簪のような人種にとって、夏の最大のイベントにして、最大の戦場。

ここまで言えば、勘のいい人達は分かる筈だよね？

それから暫しの間、夏休み談義に花を咲かせ続けた。

こんな会話をするようになって、私も本格的に女子高生になってきたんだな〜って実感する。

でも、気のせいかな？ 妙に後ろの方から視線を感じるような気がするんだよね……。

「フフフ……♡ 今日も素敵だわ……弥生さん……♡」

・  
・  
・  
・  
・  
・

IS学園の校門前。

ラピッド・ライダーに跨った状態で織斑先生と向き合っていた。

「出発の準備は終わっているのか？」

「はい……」

「荷物はどうした？」

「拡張領域……の中……」

「そうか。ISの私的利用は禁止されているが、私物を拡張領域に収納する事は禁止されていないからな」

その辺って結構曖昧だよな。

だからこそ、この手が使えるんだけど。

お蔭で手ぶらで家に帰れます。

「私も、お前がバイクの免許を持っていると知った時は驚いたぞ。普段のお前からは想像も出来ない程にアグレッシブなスキルだからな」  
それは私もそう思っている。

でも、これはこれで便利なんだよね。

長距離の移動がすつごく楽になるから。

「にしても……」

ん？ なによ。別におかしいところなんじゃないでしょ？

ラピッド・レイダーを貰った時にスカートを少し改造して、乗りやすいようにチャックで開け閉めが出来るようにスリットを作ったけど。

（スリットが入ったスカートでバイクに跨っている弥生は……エロすぎるぞ……）

エンジンは良好。エネルギーも問題無し。

ちゃんと武装は外してアーキテクトの中に入れてあるから大丈夫。

「二応、大丈夫と分かっている以上は、教師としては教え子がバイクを使つて帰宅しようとしている以上は、こうして対面上でもこの目で送る義務があるからな」

そりやそうだよね。

少なくとも、バイクの運転免許を持った生徒なんて今までいなかっただろうし。

前例がない以上は、こうして見るだけでもしなくちゃいけないって事か。

何度も言うようだけど、本当に教師つて大変だ。

「じゃあ……行き……ます……」

「ああ、気を付けてな。総理に……義父殿にもよろしくと伝えてくれ」

「分か……りまし……た……」

織斑先生の言葉に頷いた後、私はラピッド・レイダーに付属していた真つ黒なヘルメット（何故か猫耳付き）を被ってから、バイクを噴かした。

「じゃあ……二学期……で……」

ラピッド・レイダーが一筋の風となって、私と共に疾走し、学園を後にする。

目指す場所は私の家。

さて、家に帰ったらまずは何をしようかな？

「二学期……か。仕事さえなければ弥生の家まで迷わず行くと言うの  
に……。住所なら知ってるから」

……変な悪寒がしたけど、夏風邪でも引いたかな？

## 一夏の特訓 その1

臨海学校にて板垣総理から特訓の申し出を受けてから、一夏は総理と鬼瓶と携帯の番号を交換して、いつでも連絡が出来るようにした。

そして、本格的にIS学園が夏休みに突入してから、すぐに鬼瓶から連絡が入り、レゾナンスにて彼と待ち合わせ。

その後、鬼瓶の運転する車である場所へと向かった。

一夏が特訓に赴く事は既に姉である千冬にも知らせ、本人から直接の了承を得ている。

今まで自分から積極的に何かをしようとしてこなかった弟が、己の口から『特訓をしたい』と言い出した時は、思わず心の中で歓喜をした。

勿論、下手に顔に出せばまた何かを言われるから、決して表情には出さなかったが。

ともかくにも、千冬はいつの間にか頼もしくなりつつある弟の背中を見送りながら、鬼瓶に彼の事をよろしく頼むと伝えた。

鬼瓶も、一夏に対してスパルタ的な事はするつもりは毛頭ない……と言うよりは、仕事が忙しくて特訓に参加しようがないので、一応はちゃんと見ておくと伝えてはおいたが、実際の話、どうなるかは気が気でなかったのが実情のようだ。

この特訓で何を掴み、何を得るのか。

それは全て彼に掛かっている。

更に、この特訓にて一夏に新たな出会いが待っているのだが、それが彼にどんな影響を与えるか、それは誰にも分からない。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

ベーカリー鬼瓶。

千葉県幕張市にある、嘗ては鬼瓶の両親がパン屋を経営していた店舗のだが、彼の両親がパン屋を引退して実家に帰ってからは、中身を改装してから彼が一人で住んでいる。

何故かまだ表には『ベーカリー鬼瓶』と書かれた看板があるのだが、『ベーカリー』の部分には黒いテープでバツ印がしてある。

そんなベーカリー鬼瓶の裏手にはそこそこの広さを誇る空き地があり、その場所に吉六会の資金で様々な施設が建設されていた。その施設の一つである道場から、勢いある叫び声が何度も聞こえてくる。

「おらあっ!!」

「ぐあっ!!」

道着を着た一夏が板張りの床に叩きつけられた。

それを成したのは、彼の目の前にいる一人の美少女。

「おいおい……もうダウンか?」

「くそ……まだだ!」

非常に長く綺麗な金髪を靡かせて、その目は青く染まっている。

肌も白く、パツと見では明らかに欧州系の人間のように見えるが、彼女は日本育ちの立派な日本人である。

汗を袖で拭いながら、一夏は立ち上がり、再び彼女と対峙する。

「もう一回頼む!! 塩田さん!!」

「割と根性あるじゃん。いいぜ……来いよ!!」

そんな少女の名は『塩田鉄人』。

格闘技の達人であり、幕張南高校の一年生。

そして、フランス人と日本人のクォーターでもある。

(この子……物凄く強い! 単純な強さなら、間違いなく千冬姉クラスだ!)

鋭い目で塩田を威嚇するが、一瞬だけその恰好に視線を奪われてしまふ。

「ん？ どうした？」

「な…なんでもない……」

(どうして、よりにもよって体操服なんだよ!! しかもブルマ!!)

美少女コンテスト優勝者も顔負けする程の美貌を持ち、更にはスタイルも申し分ない塩田の生足は、まだまだ純情な一夏には刺激が強すぎた。

この体操服は、幕南高校指定の体操服である。

ちゃんと男心を分かっている高校だ。

そんな二人を道場の壁に寄りかかりながら見つめる五つの影が。

「頑張るなく……彼」

塩田とは対照的に、足首まで伸びた銀髪を持つ少女『叶親彩愛』

「暑苦しいつたらないな。折角のクーラーも意味無いじゃん」

バンドナで前髪をかき上げている、長い茶髪の少女の『吉崎真由美』

「そう言うなって。私はいいと思うけど？ あんな風に頑張っている

姿勢は個人的には好感が持てる」

黒いショートヘアで、少しボーイッシュな感じの少女『鳴鳥朱美』

「あれで通算30回目だよな、倒されるのって。あ、またぶっ飛ばされ

た」

眼鏡を掛けて、グラビアクラスのスタイルを誇るくせつ毛のある長

い黒髪を持つ女子『鷹橋涼香』

「彼ってば、なんか面白いね〜!」

さつきからニコニコ笑顔を絶やささない、ツンツンで長い髪をうなじ

で纏めている一夏よりも背の高い少女の『植村茜』

IS学園にも決して引けを取らない程の美少女達が一堂に会し、塩

田によって叩きのめされている一夏を見ていた。

「ほおくれ、もう一発!!」

「ぶああっ!?!」

今度は顔面から落下し、板張りの床とダイレクトなキスをする。

真っ赤に腫れた顔を擦りながら、ゆっくりとまた立ち上がる。

「い…痛え〜……」

「なら、少し休憩するか？」

「いや……俺は……」

「お言葉に甘えて休憩しちやいなよ」

このままでは、文字通り体力が尽きるまで塩田に向かって行きそうなので、叶親が止めに入る。

「アイツの言う通りだ。無理をしたって意味ねえし、これはあくまでお前の今の実力を測る為にやってる事なんだぞ？　そこで力を使い果たしちや、特訓にならないじゃねえか」

「御尤もです……」

同い年の少女に正面から論破されて、我に返る一夏。

負けず嫌いな性格が災いし、塩田に倒される度に、いつの間にか自棄を起こしていた。

「ほれ。まずは水道で顔でも洗ってサツパリしてこいよ」

「そうさせて貰うよ……」

疲れ果てた様子でトボトボと道場を後にする一夏。

その姿を見送りながら、塩田は他の皆の所に行く。

「で？　どうだった？」

「筋は悪くないと思う。ブランクが長いと言っても、体には剣道をしてきた時の体捌きが染み着いていた……少しだけだけどな」

「それはここから見てても分かったけどね」

叶親が頷きながら答えると、横から吉崎が発言する。

「I Sの技術とか、武道の実力とかよりも、まずは完全に衰えた体力を取り戻す事から始めるべきだろうな」

「同感。幸いな事に基礎はしっかりとしたから、当面はそれを課題にすべきだろう」

「だが、そうなると……」

「かなりのスパルタになりそうじゃない？　夏休みの時間は限られているし、私達だっていつまでも暇じゃない」

吉崎、嶋鳥、鷹橋、植村の四人がそれぞれに意見を出す。

特訓をする際に当たって、この六人は予め一夏のこれまでの経緯と、特訓をする理由を聞いていた。

「にしても、あの弥生を護る為に……ねえ……」



「惚れてるんだっけ？ 彼」

「らしいな。鬼瓶さんがここに連れてきたって事は、総理も認めているって事なんだろうけど……」

「初々しいねえ〜」

この六人、総理を通じて弥生とも知り合っていて、六人とも弥生の事は大切な親友だと思っている。

だからこそ、弥生に想いを寄せる一夏に対しては複雑な思いがある。

「ま、別に応援とかはするつもりはないけどな。強くなる事と、惚れた女を落とすことは全くの別問題だ」

「だあくねえ〜。こればかりは私達が介入しちやいけないでしょ」

「当人達の問題だしね」

何やら大人びた言葉を言っているが、彼女達もまた特別な立場にいる人間で、決して普通とは言い難い人生をこれまで送ってきている。

故に、嫌でも体よりも精神の方が先に成熟してしまうのだ。

「もうそろそろ、小栗さんと兵庫さんも来るんだっけ？」

「みたい。さつきメールが来たから」

小栗と兵庫。

この二人もまた、彼女達とは縁が深い相手であり、特に叶親と吉崎には無下には出来ない男達でもある。

「さて、これからどうするかねえ〜……」

太陽光がさんさんと降り注ぐ空を窓から見上げつつ、腰に手を当てながら塩田は静かに呟いた。

・  
・  
・  
・  
・  
・

道場の外に設置された水道の蛇口を捻って、そこから勢いよく流れ  
てきた冷たい水を頭から思い切り被る。

冷たい水道水が俺の火照った頭を冷やして、冷静にしてくれた。

「滅茶苦茶強かったな……」

まさか、俺が夏休みに他の高校の女子と交流をする事になるとは思  
わなかった。

確か、幕張南高校……だったっけ？

「俺……ここまで弱かったんだな……」

塩田さんの実力はずば抜けて凄かった。

でも、あれから自主的に体を鍛えたりはしていたから、少しぐらい  
は可能性があると思っていたけど……。

「まともに近づく事すら出来なかった……!」

塩田さんと俺とじゃ、余りにも実力が違い過ぎた。

今の俺でも、彼女が相当に手加減をしていた事ぐらいは理解出来  
る。

恐らく、真の実力の100分の1も出していないだろう。

「塩田さんであればなら、他の五人も凄いんだろうな……」

間違いなく、あの六人は武道の達人だ。

それも、世界に通用するレベルの。

「塩田さんと叶親さんが一年生で、吉崎さんと嶋鳥さんと鷹橋さんと  
植村さんが二年生……だったよな」

凄く仲が良さそうにしていたから、あの6人はもしかしたら幼馴染  
とかなんだらうか。

それに、弥生の事も知っていた様子だったし。

少しだけ思案に耽ってから、俺は蛇口を締めてから頭を上げた。

「ふう……スッキリしたあ……」

これだけでも随分と違うなあ……!

今年の夏はかなりの猛暑だって聞いてるから、熱中症とかにならない  
ように気を付けないとな。

「お疲れさん」

「うわあっ!?!」

いきなり頬に冷たい感触がっ!?

思わずその場から飛び跳ねると、そこには白いTシャツとジーンパンを履いた、耳にピアスをしたチャラい感じの青年がペットボトルを持って立っていた。

「君が織斑一夏君だろ?」

「あ…アンタは…」

「俺は『小栗又一郎』またかずろう。吉六会の幹部の一人で、幕南高校一年。つまりは君と同じ年って訳だ。よろしく」

「ど…どうも…」

本気でビックリしたく…。

あれ? 吉六会って総理や鬼瓶さんも所属している組織的なもの…だよね? 詳しくは教えて貰ってないけど。

俺と年代でその幹部って…凄くねっ!?

「いきなり彼を驚かしてどうするんだ。小栗君」

「あ、兵庫さん」

小栗と言う人の後ろからやって来たのは、眼鏡を掛けた落ち着いた雰囲気きずなの男。

見た感じは高校生に見えなくはないけど…。

「済まなかったな、彼が驚かしてしまっ」

「あ…いえ。別に気にしてませんから」

「そうか」

お…大人だあ…。

この落着きよう、めっちゃ大人って感じがする。

「俺は『兵庫吉晃』きくつひょう。幕南高校の二年生で、小栗君と同じ吉六会の幹部をやっている」

この人も幹部っ!?! しかも二年生って…先輩かよっ!?!

たった一年でここまで大人びてしまうものなのか…高校生って。

(いや…楯無さんって例もあるしな。一概にそうとは言いきれないか)

あの人も兵庫さんと同じ高校二年生だけど、明らかにこっちの方が

大人な感じがする。

(ちよつとっ!? それって酷くないっ!?)

どこからか楯無さんの悲鳴が聞こえたような気がしたが、気のせい  
気のせい。

「インテリ系に見えて、実は兵庫さんは高校ボクシングの世界チャン  
プなんスよ」

「世界チャンプっ!」

この大人しそうな人がボクシングをして、しかも世界一だつてっ!?

昔の話さ。今はもうボクシングは引退したしな」

「え? なんで……」

「吉六会としての活動に専念したくてね」

世界の頂点にまで上り詰めたのに辞めてしまうなんて……。

吉六会って、そんなにも大事な組織なのか……。

(でも、千冬姉もI Sで世界一になってから引退したし、こういった話  
は割とよくある事なのかもしれない)

千冬姉の場合は、完全に俺のせいなんだけどな……。

「にしても、なんでここに?」

「ほら。総理と鬼瓶さんが仕事で来れないだろ? だから、俺達が代  
わりに来たんだけど……」

「我々もまだ未成年。矢張り、ちゃんとした成人がいた方がいいだろ  
うな」

「となると、必然的に頼れる人は一人だけツスね」

一人だけって……誰だ?

「織斑君は暫くの間はこっちに泊まっていくんだらう?」

「そう聞いてますけど……」

総理からは、泊まり込みで特訓をすると聞かされて、それなりの量  
の着替えとかを持ってきた。

かなり重かったけど、それもまた訓練の一環だと思つと、なんとか  
頑張れた。

「店を改装しただけに、ここはそこそこの広さがあるからな」

「それに、基本的に住んでるのは鬼瓶さん一人だけだし」

え？ あの人って一人暮らしだったのか？

「そう言えば、鬼瓶さんってなんの仕事をしてるんですか？」

「あれ？ 聞かされてないの？」

「全く」

「っーか、普通に聞くのを忘れてた。」

「あの人は普段は、集英社でとある漫画雑誌の編集者をしているよ」

「とある漫画雑誌って……」

「愛と友情と勝利……って言えば分かると思う」

「そ…それってまさかっ!？」

あの……超有名な週刊漫画雑誌のことかっ!？」

鬼瓶さんってスゲー!!

「表向きの顔とは言え、冗談抜きで凄いな……」

「隠れ蓑になっているのかどうかは疑問ツスけどね……」

表向きの顔って……隠れ蓑って……。

「で、こんな場所で君は何を？」

「えつと……」

俺はさつきまでの事を、出来るだけ事細かに二人に話した。

「成る程な。それは仕方がないよ」

「ですよね……」

「塩田さんの強さは、あの6人の中でも最強だから」

「え？」

さ…最強とな？

「なんせ、三日間何も食べずに飢えて殺気ビンビンの雄ライオンと電流の流れた鋼鉄製の檻の中でタイマンデスマッチをして普通に勝ちちゃったしね」

「ええええええええええええええええええええええええつ!？」

ライオンとタイマンをして勝ってるのかよっ!？」

しかも、おおよそ考えうる最悪の状況で!!

「彼女には絶対に勝とうとは思わない事だ。伊達に『鉄人』の異名を持つてないって事さ」

異名の事は知らないけど、俺……ちゃんと生きて家に帰れるのかな

……。

塩田さんがライオンに勝てるって事は、他の皆も同レベルの実力があるって事だよな……?」

「でも、実戦型の訓練をするには最適の相手だろうな」

「塩田さんに限らず、他の五人も規格外ですしね」

「ですよ。」

「ま、頑張れ」

「THE・他人事!」

そんな慈愛に溢れた目でこつちを見ながら肩を叩かないでええええつつ!!」

「取り敢えずは、戻った方がよくないか?」

兵庫さんの言う通り、少し長居しすぎたかもしれない。

そろそろ戻らないと、どうなるか……。

「俺達も一緒に行くから」

「泥船に乗った気でいてくれよ」

「泥船じゃダメじゃん!!」

特訓でも女の子だらけだったら、こうして同性が来てくれるのは凄く助かるけど、妙な二人組だなぁ……。

悪い人達じゃなさそうではあるけど。

この夏休みは、今までで一番大変な夏休みになりそうだ……。

弥生の為ならどんな事でもする覚悟はある……けど、一日目にして早速、弥生の事が恋しくなってきた……。

## ヒロインズの御宅訪問

一夏が千葉県幕張市にあるベーカリー鬼瓶にて、吉六会の面々と塩田達によって猛特訓を受けている頃。

それぞれの故国にて代表候補生としての仕事をする為に帰国していた少女達が次々とIS学園へと帰って来ていた。

その際に箒や本音と言った日本残留組とも連絡をして、途中で合流で出来るようにしておいた。

弥生の自宅の場所は、予め担任である千冬から聞かされていた為、行くこと自体は不可能ではない。

その気になれば、スマホの地図系のアプリで調べればいい話だし。だが、今回はそれだけでは終わらなかつた。

まず、当然のように楯無も同行してきた上に、そんな彼女と自身の妹が心配になって虚がついて来て、更にはロランがまた弥生に何か変なちよつかいを出さないようにと、半ばお目付け役のような形でダリルとフォルテも追加。

最終的に、箒にセシリアに鈴にシャルロットにラウラに楯無に簪に本音に虚にロランにダリルにフォルテと、総勢12人と云う大所帯になつてしまった。

お前等はどこの黄道12星座を司る金色の鎧を纏う戦士達だ。

全員が見目麗しい美少女揃いなので、道行く人の殆どが目を奪われていたが、ダリルが一睨みすれば、すぐに蟻の子を散らすように去っていく。

流星は我らがダリル姉さん。凄く頼りになる。

そんなこんなをしつつ、12人の美少女達は非常に広大な敷地面積を誇る板垣家の屋敷へと到着するのであった。

・  
・  
・  
・  
・

「……………おい、デユノア」

「なんですか……………ダリル先輩」

「本当にここであつてるんだよな……………」

12人の目の前には、恐ろしく巨大な木製の門が立っている。

そして、その門の上からも見える程に巨大な屋敷が覗き見ることが出来た。

「……………ここが弥生の自宅……………なのか……………」

「きよ……………教官の仰られていた住所は確かにここだが……………」

「大きすぎツスよ……………」

首が痛くなる程に見上げなければ屋敷全体を見る事が叶わないぐらいに大きく、完全に彼女達の度肝を抜いていた。

「私の屋敷よりも大きいですわ……………」

「日本家屋とは、もっと温かみのある雰囲気だと思っていたが、これは温かみと言うよりは迫力があるな……………」

いつもは余裕の顔を崩さないロランでさえ、苦笑いを浮かべながら額に汗を掻く。

「ちよ……………ちよっと箒。こんな時つて、何かお土産的な物を持って来た方がよかつたんじゃないの?」

「土産つて、何を持ってくるんだ?」

「例えばほら……………北海道産の一個1万円ぐらいする高級マスクメロンとか……………」

「気持ちは分かるが、今からソレを買いに行けど?」

完全に庶民の感覚を持っている箒と鈴は、頭が混乱して意味不明な事を言いだした。

「お姉ちゃん……………」

「なにかしら……………簪ちゃん」



「これ……間違いなく、ウチよりも大きいよね……？」

「うん……そうね」

「ウチも割と大きくて広いとは思ってたけど……」

「どこにでも、上には上がいるもんなのね……」

ある程度の御屋敷なら見慣れている更識姉妹ですら、板垣家の威容には気圧されている。

そんな中、この姉妹だけはいつもと同じ感じでした。

「やよつちのおうちは大きいねえ〜」

「これは……やり甲斐がありそうです……!」

本音はいつもと同じ口調を崩さず、虚に至ってはやる気120%になって、メイドとしての血を騒がせている。

「つーか、これってどうやって開くんだけ？」

「そ…そんなの、ウチに聞かれても分からないツスよ!?!」

門の何処にも取っ手のような物は見当たらない。

ならば、どうやってこの門は開くのか。

それを知っている存在が、彼女達の横から静かにやって来た。

「皆……?」

聞き間違える筈のない声を聞いて、少女達は一斉に振り向く。

そこには、白いロングTシャツとGパンを穿いた弥生が、彼女の愛犬である外務大臣と一緒に立っている姿があった。

外務大臣の首輪にはリード線があり、弥生の手に握られている事から、先程まで外務大臣の散歩に行っていた事が窺えた。

「おお〜! 弥生!」

「お久し振りです! 弥生さん!」

「ああ……夏の陽気に晒される君も、また美しい……」

「久し振り〜、やよつち〜♡」

「お元気そうだなによりです! 姫様!」

それぞれに弥生に挨拶をしていく少女達。

暫く会えなかったが故に、その嬉しさも一塩のようだ。

「ところで、この子が弥生が言っていた……?」

「ん。柴犬……の外務大臣……だよ……」

その場に座って、元気に『わんっ!』と返事をする。  
それを見た途端、少女達の目が輝き始めた。

「か……か……」

「」「可愛い♡」」

全員がそう叫んだわけではないが、それでも、外務大臣の可愛さに心を奪われてはいるようだ。

「これが噂に聞くジャパニーズ・シバイヌですね! とっても可愛らしいですわ♡」

「このつぶらな瞳が溜まんないわ♡ お手!」

鈴が手を差し出すと、すぐにそこに手を載せる外務大臣。

この程度の芸ならば、彼女にとっては朝飯前だ。

「おお〜! いい子ね♡」

「賢いんだね♡ 僕も実際に見るのは初めてだけど、凄く可愛いよ♡」

「う……うむ……そう……だな……」

なんとか耐えているラウラだったが、実際には外務大臣に触りたくてしょうがないようだ。

その証拠に、ラウラの手は凄くプルプルしている。

「流石は弥生の愛犬。とても賢いね」

「いい面構えをしてやがる。こいつは雄か? それとも雌か?」

「雌……です……」

「名前は個性的だけど、女の子なんスね〜」

「多分、板垣総理が名付け親なんじゃないかしら……」

「正解……です」

「本当にそうだったのっ!」

楯無が驚いている最中も、簪が笑顔を浮かべながら外務大臣の頭を撫でている。

「とつてもフサフサしてる……♡」

夏の暑さも吹っ飛んでしまったかのような空気になり、一気に場が賑わった。

お犬様万歳である。

「つて、ここで油を売ってる暇じゃなかった」

「ん？」

「そうでしたね。弥生さん、この門はどうやって開くんですか？」

虚の質問に対し、弥生はそこで待つようにとジェスチャーをしてから、外務大臣のリードを一時的に箒に預けた後に門の柱へと向かった。

「弥生さん？」

セシリアが小首を傾げていると、小さな木の蓋が開き、そこから黒いパネルが出現。

それに弥生が手を当てると、次は門の屋根の部分から近赤外線が放射され、弥生の体にある静脈をスキャンしていく。

それらの確認が全て終了した後、ようやく板垣家の門が重々しく開いていった。

「す…凄いセキュリティね……」

「総理大臣の家は伊達じゃない……」

またまた驚いている彼女達の前で、弥生は皆を手招きしながら先を歩いて行く。

それを見て慌てた面々は、急いで彼女に追いつくように歩いて行く。

「うわあ……。そこからじゃ分かりにくかったけど……」

「屋敷の周囲も凄いわね……」

明らかに高級だと分かる石灯籠が数多く立ち並び、人工的に作られたと思わしき清流が涼しさを演出している。

前回の弥生の帰省の時には描かれなかった光景が、そこにはあった。

石砂利を踏みしめながら歩いて行くと、次第に屋敷の玄関が見えてきた。

「さっきまで弥生はどこに行っていたんだ？」

「外務大臣……の散歩……」

「そうか…そうだよな。こんないい天気の時には外で元気に散歩したくもなるよな？」

ダリルが歩きながら腰を低くして外務大臣の頭を撫でると、彼女も元気よく『ワンツ！』と答えた。

「まるで、こつちの言葉が分かるように吠えますわね」

「柴犬は非常に頭がいいとは聞いた事はあるが、どうやら本当みたいだな」

「それでこそ、姫様の愛犬に相応しい」

何故にラウラが自慢げなのか。

玄関前についてから、弥生が電子キーを使って鍵を開ける。

ガラガラ……と、古めかしい音を立てながら玄関扉を開けて、中へと入る。

「どうぞで……」

「……………」おじやまします！……………」

．．．．．  
．．．．．  
．．．．．  
．．．．．  
．．．．．  
．．．．．

「ほあ〜……」

中から見ても板垣家は非常に広大で豪華だった。

案の定、こう言った屋敷を見慣れていない箒と鈴は、大きく口を開けた状態で固まっている。

「これ……もしかして檜?」

「は……」

「もしかして……お風呂は檜風呂とか?」

「ん」

檜風呂。

箒と鈴には最も縁遠い言葉の一つだった。

「もう、何を聞かされても驚かない自信があるぞ……」

「奇遇ね。あたしもよ」

だが、この程度で終わるような板垣家ではない。

まだまだ、ここは序の口なのだ。

「さつき、外務大臣をどこかに連れて行ったけど、どこに行ったの？」

「リード……を直し……てから……中庭……に……」

「中庭……。当然のように広いんでしょうね」

当たり前だ。

板垣家の中庭は、ちよつとした学校の校庭程の広さがある。

外務大臣も思い切り走る事が可能だ。

「ちよつと行ってみてもいい？」

「いいよ……」

別に断る理由も無い為、弥生は快く皆を中庭に面した縁側へと案内する事に。

その間、虚はキョロキョロと室内を見渡し、どこから掃除をするべきが考えていた。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

中庭に面した縁側に着くと、そこには先程の外務大臣が日陰で静かに座っていた。

流星の彼女も、散歩の後では少し疲れてしまったようだ。

「涼しそうにしているね」

「それはここも同じだけどな。別に冷房とかつけてねえのに、どうなってるんだ？」

「確かにそうツスね。いい風が入ってきて、気持ちいいツス」

板垣家の屋敷も、伝統ある日本家屋の例に漏れず、とても風通しのいい作りになっている。

夏は涼しく、冬は暖かい。

大きさや高級感だけではなく、とても住みやすい家でもあるのだ。

「あれ？ あそこに何か……つて？」

シャルロットが何か、大きな毛玉のような物を発見する。

すると、彼女達の事に気が付いたのか、毛玉が顔を上げてこつちを見た。

「あ……あれつて……」

「「にゃんこだ〜♡」」

またまた可愛い動物を見つけ、一気に駆け寄ってきたヒロインズ。

「外務大臣ちゃんも可愛かったけど、この子も可愛い♡」

「こいつつてアメリカンショートヘアだよな？ 名前はなんて言うんだ？」

「財務大臣……です」

「また大臣……？」

「大臣シリーズ好きね……」

別に弥生が名付けた訳ではない。

文句があるならば、板垣平松に言っしてほしい。

言う勇気があれば……だが。

「あれ？ なんで簪はこつちに来ないのよ？」

「私……猫アレルギーなの」

「え？ そうなの？」

簪の意外な弱点に、弥生も驚いた。

「簪ちゃんは、猫自体はとっても大好きなのに、猫には触れないのよ」

「難儀な体質をしているんだな……」

「割とよくテレビでは見かけるパターンだけど、近くにそんな人がいるとは思わなかったわ……」

簪も、財務大臣を撫でたくてしょうがないが、自分の体がそれを許さない。

せめてもと、携帯で何枚も写真を撮っていた。  
その時だった。

「わ……わわわ……！」

いきなり、財務大臣が座っていたラウラの膝の上に乗ってきて、そこで丸くなった。

「ひ……姫様……わ……私はどうすれば……！」

突然の事態に柄にもなく慌てるラウラ。

だが、銀髪美少女の膝の上で眠る猫の姿は、非常に絵になった。

「珍しい……！」

「え？ そうなの？」

「ん。財務大臣……は、私……とおじいちゃん……以外の膝……の上……には絶対……に乗ろう……とはしない……から……！」

「へえ。つてことは、らうらうは猫ちゃんに懐かれたのかな？」

「かも……しれない……！」

どうすればいいかわからないラウラは、取り敢えず財務大臣の体をそつと撫でた。

すると、財務大臣は気持ちよさそうに『にゃくお』と鳴いた。

「体に触れられても、特にこれと言ったアクションを起こさない。弥生が言った事は本当かもしれないな」

「この猫がラウラちゃんに懐いたってことツスカ？」

「だろうな。見てみるよ、体を撫でられて目を細めて、凄く気持ちよさそうにしてやがる」

いつの間にか、ラウラも優しく微笑みながら財務大臣を撫でていた。

その光景を見て、全員の心が癒されていた。

（財務大臣を膝の上に乗せているラウラ超可愛い♡ あく……絶対  
に永久保存にしてこの絵を飾りたい!! 私の一生の宝にするよ〜！）

特に弥生が、心の中で猛烈に悶絶していた。

ラウラの事を娘のように慈しんでいる弥生から見て、ラウラと財務大臣の組み合わせはドストライクだったようだ。

「はあ……皆さん。弥生さんのペットを可愛がるのもいいですけど、

私達がここに何をしに来たのか、忘れた訳じゃないですよね？」

ここにきて痺れを切らせたのか、虚が重い口を開いて皆に注意を促した。

でも、そこですかさず楯無がブロックに入る。

「まあまあ。弥生ちゃんもついさつきお散歩から帰ってきたばかりだし、私達だって暑い中をずっと歩いてきたのよ？　ちよつと一休みしてからでもいいんじゃない？　ね？」

「しかし……」

「おねえくちやくん……」

トドメに本音の甘えた声攻撃。

「ここまでされれば、流石の虚も折れざるを得ない。

「はあ……分かりました。私も別に疲れていないわけではないわけではありませんしね」

「話が分かるう♡　流石は私の虚ちゃん♡」

「はいはい」

呆れたように溜息を吐きながら肩を落とす虚。

急に脱力をしたかのように、その場に座り込み、疲れを癒す。

「あれ？　弥生はどこに行つた？」

「先程までここにいましたのに……」

虚と楯無が話している間に、いつの間にか弥生が姿を消していた。

が、心配をする間も無く弥生は少し大きめのお盆の上に人数分の冷たい麦茶を載せて戻ってきた。

「喉……が渴いた……と思つた……から……持つてきま……した……」

「や……弥生さん！　一言言つてくだされば、私がやつたのに……」

「いえ……虚さん……もお客さん……だし……」

「弥生さん……なんて立派な人なんでしょう。あの板垣総理の御息女なだけがありますね……」

心から感心した虚の中で、弥生の評価が急上昇した。

彼女が弥生にゾッコンになるのも時間の問題かもしれない。

「弥生ちゃんはきつと、最高のお嫁さんになれるわね♡」

「「「「「お嫁さん……」」」」」」



楯無が言った何気ない一言に、ヒロインズが同時に妄想をした。当然、その内容は弥生と自分達との結婚生活。ダリルやフォルテすらも、弥生を嫁にした妄想をしてしまう。夏の太陽が眩しく輝く中、乙女達の妄想は止まらない。大掃除をするのは、もう少しかかりそうだ。

## 一夏の特訓 その2

夏休みも8月に突入し、俺の特訓も本格的になってきた。

塩田さん達が、今の俺に必要な課題を出してくれて、俺はそれをこなす事に集中する事にした。

そんな俺が今、やっている事は……。

「おらおらあつ！ そんなチンタラ走ってたら、朝飯食えねえぞ!!」

「はっ……! はっ……! はっ……!」

まだ早朝の涼しい時間帯に、俺は塩田さんの激励を受けながらベーカーリー鬼瓶の近くにある川沿いの道をランニングをしている。

彼女曰く、『太陽が完全に上がりきった昼間とかにランニングとかしたら、太陽の暑さにやられて、却って効率が悪い』だそうだ。

同じ外でやるにしても、こうして涼しい時間にすれば効率も上がるしやる気も出る。

なにより、最近になってかなり深刻化してきている熱中症の予防にも繋がる。

俺と同じ年の女の子なのに、こんなアイデアを思いつくなんて、本当に頭が上がらないよ……。

「いいペースじゃんか。この調子だ」

「おうー!」

塩田さんは俺の後ろから自転車に乗って追従しながら声を掛けてくれる。

一人で黙々と走るのも悪くは無いけど、こうして誰かが傍で声を掛けてくれるのもいいもんだよな。

(一つ問題があるとすれば、それは……)

塩田さんの恰好が、またもやセクシーである事ぐらいか。

白いタンクトップに黒のスパッツと言った格好なんだけど、塩田さんはスタイルがいいから、正直目のやり場に困る。

(俺には弥生がいる…俺には弥生がいる…俺には弥生がいる…俺には弥生がいる……!)

弥生の事を頭に思い浮かべながら、俺は必死に煩惱と戦った。

「あと1キロ！ 最後まで油断すんなよ！」  
1キロ……！ 長いような短いような……。  
とにかく、今は走る事だけに集中だ！

・  
・  
・  
・  
・  
・

早朝ランニングを終えてベーカーリー鬼瓶に帰ってくると、既に朝食がある程度は出来上がっていた。

基本的に、俺の食事内容は健康志向になっていて、これもまたトレーニングの一環らしい。

「今日の朝食当番は……」

「私だよ」

「鷹橋か」

キツチンからヒョコつと顔だけ出したのは、今日の朝食を作った鷹橋涼香さん。

なんだかクールで飄々としているが、不思議と塩田さん達とは波長が合うらしく、とても仲良くしている。

「他の皆は？」

「まだ寝てる」

「そっか」

実は、俺の特訓に合わせて、彼女達6人も俺と一緒に寝泊りをする事になった。

本当ならこの間会った小栗さん（なんでか敬語で呼んだ方がいい気がする）と兵庫さんも泊まる予定だったが、彼らは吉六会の用事があるとかで、宿泊は出来なかった。

その代わりに、定期的にここに様子を見に来ると言っていた。

多分、俺が彼女達に何かしてないかをチェックをしに来るのが目的なんだろうけど……。

(俺よりも圧倒的に実力が上の女の子達に対して、一体何をしろと?)

下手に手を出せば、一瞬で返り討ち確定だろ。

幾ら俺でも、そんな無謀な真似だけは絶対にしないから。

「完全に出来上がるまでにはもう少し時間が掛かる。その間に二人共、シャワーでも浴びてきたらどうだ?」

「そうだな。ここはお言葉に甘えようぜ」

「分かった。それじゃあ……」

「先にお前から行けよ。汗、凄い事になってるぞ?」

「うげ……」

自分が着ているランニングシャツをよく見たら、汗でびっしりと濡れていた。

道理でシャツが体に纏わりつくはずだ。

「遠慮無く行かせて貰おう……かな」

「そうしろ。ちゃんと洗濯物は籠に入れとけよ!」

「りよ〜かい」

まるで母親みたいなことを言うんだな……。

少しだけ弥生を彷彿とさせる子だ。

んなことよりも、今はシャワーを浴びてスッキリしますか!

・  
・  
・  
・  
・  
・

シャワーを終えて、夢の中から起きてきた他の4人と、俺と同じよ

うにシャワーで汗を流した塩田さんや鷹橋さんと一緒に朝食を食べ終えた俺は、6人が普段から使っていると言う、吉六会提携のトレーニングジムに来ていた。

今更ながら、吉六会ってどんな凄い組織なんだよ……。

こんな大きなジムと提携して、しかも貸し切り状態にするって……普通じゃないぞ。

その上、しれっと俺までこの会員にされちゃったし。

まあ……それに関しては別にどうこう言うつもりはないんだけどさ。

え？ 塩田さんのシャワーシーン？

そんなのを描写したら、絶対に殺されるぞ。俺が保障する。

俺は他の皆と一旦別れて、更衣室でジャージに着替えを済ませる。案の定と言うべきか、俺の方が先に着替え終わったけど。

やっぱ、根っこの部分は女の子なんだな。

は？ 彼女達の着替えている姿を事故で見たかだつて？

俺がんなことする訳ねえじゃん。 何言つてんだ？

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

床が板張りになって、壁の一つが鏡になっているトレーニングルーム。

普段はダンスのレッスンとかに使われていそうなこの場所で、俺はスクワットをしている。

少し離れた場所には、俺と同じタイプのジャージを着た皆がいる。

「197……198……199……200！」

「よし！ 小休止！」

吉崎さんの言葉を聞いて、俺はその場にベツタリと座り込んだ。

「はあ……はあ……はあ……」

早くも汗びっしょりになってしまった。

けど、ここは冷房が効いてるから、そこまで不快じゃない。

普通、夏場のトレーニングと言えば外での練習を思い浮かべるかもしれないが、実はそれは非効率で、あまりよくないらしい。

理由は朝のランニングと同じで、体を動かした事による体力の消費よりも、夏の暑さによる体力の消費の方が上回っているらしく、下手に行おうとすれば、逆効果なんだと。

これは冬のトレーニングにも言える事で、寒い場所で無理矢理にでも体を動かそうとすれば、それが靭帯の損傷などの原因になりかねない……らしい。

だから、夏は涼しい場所で、冬はある程度暖かい場所で体にあまり負担をかけないような環境で効率よくトレーニングをする事が一番望ましい。

これ全部、塩田さん達の受け入れなんだけどな。

「ほら、足出して。少し揉んであげるから」

「ぐ……ごめん……」

「別に気にする必要は無いよ」

下のジャージを捲り上げて、俺の脹脛をしっかりと丁寧に揉んでくれる叶親さん。

これはまた気持ちがいい……随分と手慣れてるな……。

「そう言えば、どうして塩田さん達は態々、貴重な夏休みを使っても俺の事を鍛えてくれるんだ？」

「あ。やっぱりそこ（こ）気になるか」

そりやそうだ。

俺としては非常に有難いけど、彼女達がこうしてくれる理由が思いつかない。

「簡単に言えば、恩返しだな」

「恩返し？」

「そ。私達は全員が吉六会の人達に恩があるし、あそこには私達の身内もいるしね」

「身内……」

俺の足を揉みながら叶親さんが答えてくれたが、この子の身内って誰だ？

「それに、あそこの元締めは俺等の同級生でもあるしな」

「同級生!？」

塩田さん達と同級生って事は……俺と同じ高校一年生で一つの組織の頂点にいるって事か!?

「本なら家でぐくたらしてたかったんだけど、総理達の頼みじゃ断れねえしな」

「だから、こうしてお前の事を鍛えてやってるんだよ。感謝しろよ!」

「そ…それは勿論……」

感謝しまくってますよ! 超感謝だよ!

皆に足を向けて寝れないよ!

「はい。叶親が足を揉んでる間に水分補給しておきなよ」

「ど…どうもツス」

植村さんが眩しい笑顔を見せながら、俺にスポドリを手渡してくれた。

この人を見た時のインパクトは凄かったな。

俺よりも背の高い女の子なんて初めて見たし。

「ぶは〜……」

いい具合に冷えたスポドリが体に染み渡る〜!

「次は左脚」

右足のマッサージが終わり、今度は左脚を揉み始める。

この子も剣道をしているらしいけど、どれほどの実力なんだろう……。

箒よりも強い……よな、やっぱり。

叶親さんも、剣の腕なら千冬姉とほぼ互角かもしれない。

なんせ、あの塩田さんが絶賛するレベルだし。

「それが終わったら、次は腕立てだからな。勿論、回数は200回で」

「うす」

最初は1000回ぐらいだったが、そこから徐々に回数を増やしていく予定らしい。

今はまだ2000回だけど、ここから3000回、4000回と増やしていくのだろう。

けど、それぐらいの回数をこなせないと、弥生を守るなんて夢のまた夢だ。

だから、俺は絶対にやる！ やってみせる!!

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

叶親さんのマッサージが終わってから、次は腕立て2000回をこなす。

その後にもまた小休止を挟み、今度は腹筋2000回。

回数的にはまだまだ少ない方だけど、体が完全に鈍っている俺の体にとって、いきなり多くの回数をこなすのは意味が無い……と、嶋鳥さんに言われた。

まずは少ない回数からして行って、そこから段階的に回数を増やしていく。

……似たような事をさつきも言ったな。うん。

「178……179……180……181……182……!」

何も余計な事は考えず、ジツと床だけを見つめ、只管に腕立てに集中する。

そんな時に、このトレーニングルームにあの人達がやって来た。

「お？ 頑張ってるね」



「いい調子みたいだな」

小栗さんと兵庫さんか……。

いつ見ても、同じ高校生とは思えないような雰囲気醸し出す二人だよな。

「おつす。もう向こうの方はいいのかわ？」

「今日の所はな。時間も空いたし、こっちの様子を見に来ようと思っ  
てな」

「わかつてるじゃ〜ん♡」

吉崎さんが兵庫さんの腕に抱き着いた。

そういや、鷹橋さんが言ってたつけ。吉崎さんと兵庫さんは付き合ってるって。

「けど、今日はもう一人、特別ゲストが来てるツスよ」

「特別ゲスト？」

塩田さんと叶親さんがハモった。

心の中で密かにそんなツツコみをしている内に、俺は200回の腹筋を終了させていた。

「ふう〜……」

脱力して床に寝そべる。

あ〜……冷房で冷やされて、気持ちがいい〜……。

「ふ〜ん。彼が噂に聞く『織斑一夏』君ね〜」

「うわあっ!?!」

見た事のない三つ編みの女の子が俺の事を除きこんでるっ!?

「ゲストって桜井さんの事だったのか」

「よつす。アンタ達がなんかしてるって二人に聞いたから、ちよつと様子を見に来ちゃった」

「ソ〜ナノカ〜」

桜井さんって……この子も塩田さん達の知り合いなのか？

なんかこのままだと失礼だと思って、急いで半身を起す。

「初めまして。私は『桜井美保』。塩田達と同じ幕南高校の一年生で、  
叶親君とはクラスメイトなの」

「ど…どうも。織斑一夏…です」

初対面の相手にいきなり呼び捨てとかはしちやいけないって、箒達に散々言われてるんだよな……。

俺は少しでも早く仲良く出来ればいいと思ってやってるんだけど、相手もそうとは限らないしな。

体だけじゃなくて、こうした対人関係に関する事も勉強しなくちゃな。

「君の事はよく知ってるよ。世界的な有名人だし」

「だよな……」

俺がISを動かした当初は、よくニュースとかで俺の名前が報道されていたらしい。

あの頃は自分の事で精一杯で、周りの事を気に掛ける余裕が無かつたしな。

「んでもって、弥生の中学時代の友人でもあるんだぜ」

「えっ!？」

弥生の中学時代の友人って……昔の弥生の事を知ってるって事かっ!？」

「あの頃の弥生は学園内ですつごく有名人だったのよね」

「らしいな。確か、三年間ずっと中等部でトップの成績だったんだろ?」

「しかも、一番の有名人だったらしいな」

「有名人?」

「うん。後輩の子達からは『弥生お姉さま』って呼ばれて、滅茶苦茶尊敬されてたわね」

なんだろうか……容易に想像が出来る。

(中学時代の弥生か……)。きつと、昔から可愛かったんだろ(うな……)

今とは違う制服を着た、少しだけ幼い弥生。

どんな姿をしてたんだろう……。

「見てみる? 中学の頃の弥生」

「見れるのか!？」

「私の携帯に写真があった筈……」

そう言うと、桜井さんは自分の携帯を操作して、画面をこっちに向けた。

「ほらこれ」

画面に映っていたのは、恥ずかしそうに顔を赤くしているブレザーを着た弥生と、その隣で彼女の肩を抱くようにして寄り添っている桜井さんの写真だった。

「「「「おおく……」」」」

って、いつの間にか塩田さん達も一緒に見てるし！

「へえ〜…これが昔の弥生か〜」

「今とあんまり変わらないようにも見えるけど……」

「これはこれで可愛いな……」

「ブレザーを着た弥生も、なんだか新鮮だ」

「これ……私も欲しいな……」

「可愛い〜♡ 今よりも2センチぐらい小さいね〜」

まだあどけなさが残る弥生……可愛すぎるだろ!!

くそ……！ 弾達もこの頃の弥生を少しだけ見に行つた事があるんだよな……。

なんで俺も一緒に行かなかつたんだよ!! もしも、この頃に弥生と出会つていれば、絶対に告白してたのに!!

「どう？ この頃の弥生も可愛いでしょ〜？」

「確かに……。もしも共学の学校に行つてれば、間違いなく男子たちから告白されまくりだったツスね」

「男子だけでなく、女子達も虜にしそうだがな」

「実際に虜にはしてたけどね。後輩達だけじゃなくて、高等部の先輩達からも可愛がられてたし」

もう確実に学校のアイドルと化してるだろ、弥生……。

けど、だからいい!!

「休憩のついでに、少し昔の弥生の事を話してくれよ」

「お。それナイスアイデアだよ塩田」

「いい暇潰しにはなりそうだな」

「別にいいけど、その前に……はい」

桜井さんが俺達にスポドリをそれぞれ配ってくれた。

さつきも飲んだけど、とつくに体が喉の渴きを訴えている。

俺からしたら非常に有難い。

「サンキューな、桜井」

「ありがとうございます」

「いいってことよ。それじゃあ、話しますか」

壁に寄り掛かるようにして皆で座り、桜井さんの話を聞く事に。

ヤバイな……かなりドキドキしてるぞ……。

## 板垣家の大掃除

板垣家の大掃除を手伝う為に、まさかの全員集合を果たした代表候補生&国家代表+αの面々。

ついて早々に弥生の愛犬の外務大臣と、愛猫の財務大臣の可愛さの虜になって、いつの間にか大掃除の事を忘れて普通に今時の女子高生らしい談笑に耽っていた。

だが、そこに待ったをかけたのが、本音の姉である布仏虚。

しかし、楯無の説得と本音の訴えによって、小休止の後に掃除をする事になった。

「それにしても、この家って本当に大きくて広いわよね〜」

「そうだな。弥生、見た限りではこの家は三階建てのように見えるが……」

「本当……は四階建て……」

「だと思ったよ……」

仮にも内閣総理大臣の邸宅が、ただ広いだけの三階建てで終わる筈がないと、訪れた全員が思っていた。

「でも、四階建てって事は、もしかして……」

「ん。地下室……がある……よ……」

「地下室……ね。有事の際の地下シェルターの的な物でも設置してあるのかしら?」

暗部故に、どうしても物騒な考えに至ってしまう楯無。

だが、弥生は首を横に振って、その意見を否定した。

「シェルター……じゃなくて……ムービールーム……がありません……」

「ムービー……と言う事は、簡易上映室か……?」

「正解……」

自宅の地下に映画を視聴する施設があるなんて、誰が想像するだろうか。

特に、箒と鈴の驚きが大きかった。

「お……おい鈴……」

「な……なによ……」

「今時の金持ちは、家に映画館を持つ事が出来るのか……？」

「んな事あたしが知るわけないでしょ！　いくら代表候補生だからって、そんなに贅沢な生活をしているわけじゃないんだし！」

この二人が持つ庶民的な感覚は、ある意味でとても大事な事かもしれない。

「掃除……をやる前……に……軽く……家を案内……します……」

「それは助かります。ちゃんと家の構造を把握しておかないと、効率よく掃除が出来ませんからね」

弥生の気遣いに、増々やる気を増幅される虚。

本職のメイドである彼女にとって、この広い家は実に掃除のし甲斐のある場所に見えるに違いない。

「ふにゃ〜……」

「ん？　眠たいのか？」

財務大臣が大きな欠伸と共に、ラウラの膝の上で丸くなり、静かになつた。

よく見ると、外務大臣も木陰にて気持ちよさそうに寝息を立てていた。

「どうやら、こいつ等はお昼寝タイムになつちまつたみたいだな」

「この子達のお昼寝を邪魔しちゃ可哀想ツスね」

「じゃあ、休憩はこの辺にしておこうか」

ロランの言葉に全員が頷いて、ラウラはそつと優しく財務大臣を起こさないように畳の上に移動させた。

「それじゃあ、案内をお願いしますか？」

「ん……任せ……て……」

弥生先導の元、板垣家の案内が始まつた。

・  
・  
・  
・  
・

恐ろしく広いリビングや、まるで花月荘を彷彿とさせる客間などを見ていって、ヒロインズ達は驚きの連続だった。

「こ…今度はどこを案内してくれるのかな…弥生…?」

「外務大臣…と財務大臣…の仲間…の所…だよ…」

「あの二匹の仲間…他のペットって事？」

「ん。こつち…に来て…」

弥生の背中に着いて行くと、かなり広い部屋へと辿り着いた。

空調施設や水を流動的に動かすシステムが配置されているが、それよりも目立つのは、部屋の真ん中にて、その絶大な存在感を放っている非常に大きな水槽だった。

水槽の中には、例の超巨大マグロの姿がある。

「ほえ〜……」

「な…なんだこれはっ!？」

「マ…マグロ…なの…?」

「それにしても大きすぎじゃない…?」

「軽く3メートルぐらいはありそう……」

案の定、年頃の女の子達には刺激が強すぎたのか、全員が目を見開いて驚いていた。

「こ…この魚もペット…なのか？」

「はい…。マグロ…の農林水産大臣…です」

「マジかよ……」

あのダリルでさえ冷や汗を掻いている。

フォルテや鈴のような小柄な少女達に至っては、農林水産大臣の威容に完全に圧倒されている。

「こ…これも総理が…?」

「そう…だよ」

「どこで見つけてきたんですの…?」

「それ…は流石…に知らない……」

「でしようね……」

因みに、農林水産大臣は、総理が御蛇ヶ池おじゃがいけと呼ばれる場所で発見し、その後矢禿との壮絶な死闘の末に捕獲され、板垣家に迎え入れられた経緯がある。

「この水槽の掃除は……」

「私……が事前……にしておいた……」

「」「ほっ……」「」

掃除をするつもりで来た彼女達も、流石に超巨大なマグロがいる水槽の掃除は勘弁だったようだ。

いや……それが普通であるのだが。

「最後……は家の裏……にある馬小屋……を案内……する……ね……」

「う……馬小屋だとっ!？」

「馬まで飼ってるんですね……」

「もう驚きつかれたわよ……」

げんなりする彼女達を余所に、弥生は一人、水槽の中にいる農林水産大臣に手を振る。

「それじゃ……あ……また後……で来る……ね……」

「あの子……弥生ちゃんの方を向いて口をパクパクさせてるわよ……」

「まさか、人の言葉が理解出来るんスか……?」

密かに謎が増えた農林水産大臣だった。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

家の裏手に訪れて、小さいながらもしつかりとした造りの馬小屋へとやって来た板垣家大掃除メンバー御一行。



「この結構な広さがあるわね」

「ちゃんと柵とかもしてあるし、もうちよつとした牧場になってるわね」

「そして、ここにるのが……」

馬小屋の中で大人しくして弥生達を見つめている、一頭の雄のサラブレッド。

とても雄大な姿で、見る者を魅了する。

「なんて立派なサラブレッドでしょう……。毛並みも申し分ないですし、とても大切に育てられている証拠ですわね」

「そうだな。この筋肉も程よくついていて、無駄な贅肉が殆ど無い。これは間違いなく名馬と呼ばれるに相応しい」

セシリアとロランの二人が、目の前にいる馬の事をべた褒めする。それを聞いて、弥生も少し照れくさそうにしていた。

「で？ この素晴らしい名馬の名前はなんて言うのかな？」

「文部大臣……だよ……」

「ここまで『大臣』を貫き通すと、もう清々しさすら感じるツスね」

「このお馬さんも可愛いね♡」

何気なく本音が文部大臣の頭を触ろうとすると、それに合わせて文部大臣の方から少しでも触りやすいようにと頭を下げてきた。

「おおく！ いい子いい子♡」

本音の手を大人しく受け入れる文部大臣。

その光景は、不思議な神秘さを醸し出していた。

「昔から本音ちゃんって動物には好かれやすいけど……」

「馬とも仲良くなれるんだね……」

「本音ったら……」

驚きを隠せない更識姉妹に、呆れながらも少し嬉しそうな虚。

「こうして馬がいるという事は、弥生は乗馬も出来るのか？」

「少しだけ……ね。おじいちゃん…に教え…て貰った……」

「乗馬をする弥生さん……♡」

「なんだか見てみたいね……♡」

セシリアとシャルロットの金髪コンビが妄想に耽っている中、ラウ

ラはまたもや明らかにになった弥生のスキルに純粹に感心していた。

「姫様は乗馬すらも御出来になられるとは……。私の想像以上に凄  
お方なのだな……」

この純粹さを少しは見習ってほしいと、切に願わざるを得ない。

それが無理ならば、せめてラウラの爪の垢を煎じて飲むぐらいはし  
てほしい。

「それじゃあ……。一度……家……に戻りま……しょうか……」

「文部大臣ちゃん。またね♡」

本音が去りながら手を振ると、それに反応して文部大臣も一言吠え  
た。

まるで、彼女に挨拶をしているように。

「基本的に、この家の動物は人の言葉が分かるって思った方が良さそ  
うね……」

「もしかしたら、私達よりも頭がいいかもな……。ははは……」

自分で言っただけ自分が傷つく筈。

板垣家の全てのペットと顔合わせをして、一同は家の中へと戻って  
いった。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「さて……。と。では、手分けして行いましょうか」

倉庫から掃除道具一式を持ってきて、弥生が予め買い揃えておいた  
人数分のエプロン（何故か12人全員分があった）を着用し、虚によつ  
て場が仕切られる事に。

「先程、案内をしている最中に仰っていましたけど、私達が来る前に既  
に掃除をしていた場所が何か所かあるんですけどよね？」

「はい。さつき…の馬小屋…や水槽…に…自分の部屋…とかも…しておきま…した…」

少しでも皆が楽になるようにと、自分で出来る範囲は予め済ませておいた。

この辺りの気遣いが、自分の人気を不動のものにしていると全く気が付かない弥生。

ここまで鈍感だと、あまり一夏の事を言えなくなってくる。

「そうですね。ならば、チーム分けも容易になりそうですね」

そんな訳で、虚の主導の元で掃除の班決めが行われた。

「まず、篠ノ之さんと凰さんは廊下の壁を拭いたり、床の雑巾がけをお願いします」

「分かりました」

「任せといてください！」

雑巾片手にバケツを持つ二人が、元気よく返事をする。

「オルコットさんとデュノアさんは、リビングの方をお願いします」  
「了解しましたわ」

「はい！」

正直、セシリアには不安が残るが、そこはシャルロットが上手くフォローをしてくれる…と信じたい。

「ケイシーさんとロランさんは、一緒に二階の客間をお願いします」

「ふっ…任せられた」

「おう」

この組み合わせは、単純にダリルをロランの御目付け役にしたかったからだ。

この中でロランを止めることが出来る人物は必然的に限られてくるから、自然とこのコンビになった。

「お嬢様と簪様は、三階にある倉庫の整理と掃除をお願いします」

「合点承知の助よ」

「倉庫か…。大変そうだけど、頑張らないと」

返事一つとっても、なんだか姉よりも妹の方がしっかりしているように見える。

この姉妹を一緒にしたのは、少しでも仲直りの切っ掛けになればいいと思ったが故か。

「で、ラウラさんとサファイアさんは三階の廊下を頼みますね」

「了解！」

「頑張るッス」

このチビツ子コンビは、意外といい組み合わせかもしれない。

三階は一、二階と比べてあまり広くないから、この二人でも充分に掃除が出来るだろう。

「最後に、私と本音と弥生さんは、一階の和室を掃除しましょう」

「お姉ちゃんと一緒だ〜♡」

「分かった……です……」

この組み合わせも、単純に妹がちゃんと掃除をするか心配だったから。

弥生は、この家の住人だから、一番広い一階を担当して貰い、色々分からない事を聞くために配置した。

「最初に言った場所が終わったら、私の所まで来てください。また違う指示を出しますから」

虚の言葉に全員が頷き、それぞれが掃除用具を手にした。

「では、大掃除を始めましょう」

こうして、夏休みの板垣家の大掃除が幕を開けたのであった。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

楯無は、妹の簪と一緒に虚に言われた三階にある倉庫の整理を行っていた。

整理と言っても、そこまで派手に散らかっているわけではなく、主に僅かに積もった埃を絞った雑巾で拭いていく作業が主になっていた。

「にしても、噂に名高い板垣総理の自宅が、ここまで広大だったとは思いませんかったわ」

「さつきもそんな事を言ってたけど、お姉ちゃん、ここに来た事無かったの?」

「まあね」

僅かにはにかみながら、楯無は雑巾で窓際を拭いてく。

「簪ちゃんは……『吉六会』って知ってる?」

「ううん……」

姉の口から聞かされた、まるでヤクザの組のような単語を耳にして、簪は顔を横に振った。

「私も詳しく知っているわけじゃないんだけどね。なんでも、この国の闇の頂点に君臨して、かなり昔から裏から日本を守ってきた組織……らしいわ」

「らしい?」

水分が無くなってきた雑巾をバケツの水に浸して、思い切り絞りながら小首を傾げる簪。

「言ったでしょ? 私も詳しくは知らないって。知っていること言えば、弥生ちゃんの養父である板垣平松総理が、その吉六会の幹部だって事ぐらいね」

「えっ!? 総理大臣が『幹部』なの!?!」

「そうよ。私も初めてお父さんから聞かされた時は、簪ちゃんと全く同じ反応をしちゃったわ」

苦笑をしつつ、楯無も雑巾を濡らして絞る。

「でも、それとこの家とどう関係があるの?」

「これもお父さんから聞かされたことなんだけど、吉六会の幹部の邸宅は、基本的に不可侵の場所らしいの」

「不可侵って、進入禁止って事?」

「そうなるわね。だから、何か用がある時は向こうからこっちに来る

らしいわ」

「でも、私達はこうして弥生の家に入ってきているよね……?」

「多分、それは私達が弥生ちゃんによって誘われたからでしょうね」

「つまり、私達は例外的に認められたって事?」

「恐らく、これまでも弥生ちゃんのお友達は数少ない例外として認められて、今日の私達みたいに入る事を許可されてきたんじゃないかしら?」

「私達って、知らず知らずのうちに相当にレアな経験をしてたんだね……」

簪も暗部の家系として生まれた故に、色々と普通では知ることが出来ないような事を教えられてきたが、吉六会の事は初めて聞かされた。

しかも、現当主である姉ですら、その全貌を知らないと言う。

それだけで、吉六会という存在がどれだけ強大なのか窺い知れた。

「それと、これもあくまで噂らしいけど……」

「なに?」

「吉六会は下部組織で、その上には更に強大な存在がいるらしいわ」

「まだ上がいるの?」

「あくまで『噂』よ。その名称すら誰も知らないんだから」

「お父さんも?」

「みたい」

暗部として長い間、仕事をしてきた父ですら知らない組織。

簪が想像している以上に、この国の暗部は大きいらしい。

「……で? なんでお姉ちゃんはさつきからずつと隅の方や陰になっ  
ている場所を掃除してるの?」

「いやね。もしかしたら、こんな狭い場所に弥生ちゃんの下着や服が  
偶然にも落ちているかも……なんて思ってた?」

「お姉ちゃん……」

さつきまでの真面目な雰囲気完全に台無しだ。

楯無は優秀な暗部の人間ではあるが、本質的にシリアスな雰囲気が  
長続きしないようだ。

声と言い、シリアスブレイカーな部分と言い、まるでどこぞの良妻賢母を目指すお狐様な魔術師の英霊のようだ。

いずれ、楯無もあんな風になるのだろうか？

「下手な事をするよ、虚さんにバレるよ？」

「虚ちゃんなら、普通に有り得そうだから怖いわね……」

よく知っている仲だからこそ、虚の恐ろしさを理解している姉妹だった。

まだまだ、板垣家の大掃除は終わる気配はないようだ。

## 一夏の特訓 その3

兵庫さんと小栗さんと一緒にやって来た女の子『桜井美保』によって、休憩がてらのちよつとした思い出話が始まる事になった。

と言っても、内容は弥生の事だけだ。

桜井さんが中央に座って、その周囲に皆が座っている形だ。

「で、何から話そうつか？」

「適当に、中学の頃の弥生がどんな風だったか言えればいいんじゃないか？」

「それもそっか」

塩田さんの提案で、中学の時の弥生のイメージを聞く事に。

今とは何か違ったりしてらんだろうか……？

「そくねく……。昔……ってほど時間が経過してるわけじゃないけど、中学の頃の弥生を一言で言い表すと、『大人しい子』ね」

「大人しいって、別に今と大して変わらないじゃんか」

確かに。

鷹橋さんの言う通り、弥生が大人しいのは別に今でも同じ事だ。

「まあ、今でもかなり大人しい子だけど、昔はそれ以上に大人しかったのよ」

「例えば？」

「まず、余程の事が無い限りは自分から話しかけたりはしなかったわね」

「あの弥生が積極的に会話に参加している姿も、想像しにくいけどな」  
自分から寄る事もしない……か。

俺の知っている弥生は、大人しくはあるけど、ちゃんと自分の意見はハッキリと言う子だから、あんまし想像しにくい。

「別に周囲に嫌われたり、虐められたりしてるわけじゃなくて、自分から離れていってる感じだったわね」

「弥生ちゃんは、かなりのコミュ症だからな」

「……あれ？ 今思ったけど、どうして塩田さん達や兵庫さん達は弥生の事を知ってるんだ？」



「あ…あの、ちよつといいかな……」

「んあ？ オレ達と弥生がどこで知り合ったか聞きたいのか？」

「なんで分かったんだっ!？」

「いや、普通に顔に書いてあったし……」

「え？ マジ？」

「マジ。って言うか、お前は表情が顔に出過ぎだぞ？」

塩田さんと吉崎さんの指摘で愕然となった。

まさか、俺がそこまでポーカーフエイスの出来ない人間だったとは……。

道理で、ババ抜きで誰にも勝てない筈だ……。

特に、弥生にはいつも完封負けをしまっからな。

「オレ達6人は、今年に入ってから総理に紹介されて知り合ったんだよ」

「存在自体は前々から知ってたんだけどね」

「こつちもこつちで色々忙しくて、中々会う機会が無かったんだ」

あ…あの総理直々に……。

それって何気に凄い事じゃないのか？

「俺達も同じ様な感じだったな」

「まさか、あの総理にあんな可愛い娘さんがいるとは思わなかったけど」

だよな。それには激しく同感。

「って、なんか話が逸れちゃったし」

「あ……ごめん」

「別にいいけどね。どこまで話したっけ？」

「弥生がコミュ症だったところ」

「そーだったね」

コミュ症の弥生……か。

不謹慎かもしれないけど、それはそれで見てみたいな。

「弥生は、誰かを怖がって人に近づかないんじゃないやなくて、他人を必要以上に気遣ってしまうが故に誰にも近づこうとしないのよ」

「そ…それって……」

まさか……体の傷跡が原因で……？

「それってさ、弥生の体の傷跡が何か関係してんのか？」

「って！ 俺が言おうとしたことを塩田さんに思いつきり言われたんですけど!？」

「と言うか、今なんて言った？」

「し…塩田さん。弥生の体の事……」

「当然知ってるよ？」

「な…なんで……？」

「総理から聞いた」

「あの人が言ったんかい！」

「立場上、私達には隠し事出来ないからね」

「立場上って……」

「君達は本気で何者なんだよ……」

「最初は少しだけ驚いたけど、それがどうしたって感じだったよな？」

「だな。誰にだって言いたくない事の一つや二つあるもんだ。それを知ってしまったからと言って、別にどうこう言うつもりはないよ」

「この人達は…弥生の事をちゃんと見てくれているのか……」

「体の事とか全く気にせずに、あの子の本質を分かってくれている。」

「一応聞いておくけど、桜井さんや兵庫さん達も……」

「「知ってるけど？」」

「デスヨネ」

「俺達は塩田さん達と同じタイミングで総理にな」

「そういや、この二人って総理と同じ組織の一員だったっけ。」

「同じ高校生だから、地味に忘れそうになる。」

「私は、中学を卒業して高校に入ってから総理に教えて貰ったわ」

「その時……どう思いました？」

「別に？ 『そ〜なんだ』 ぐらいの感想しか抱かなかったわよ」

「それだけ？」

「それだけよ。あの子がどんな体をしていようとも、弥生が私の大切な親友である事には違いないし、全身の傷跡ぐらいで弥生の可愛さは陰ったりしないのよ」

「桜井さん……」

す……すげ……これが女同士の友情ってやつかよ……。

中学の時から、弥生は友達に恵まれてたんだな。

「きつと、弥生は自分の傷跡を見られて拒絶されるのが嫌なんじゃないよ、傷跡を見て皆が悲しくなるのを一番嫌がってるのよ」

「ほんと、変な方向に優しさが偏ってるよね……」

傷を見た皆が悲しむのが嫌……か。

だから、弥生は未だに皆に体の事を話さないんだな……。

きつと、あの体の傷を見ても、誰一人だつて拒絶したりはしないだろう。

でも、弥生の事をとても大切に思っている彼女達だからこそ、あの傷跡を見て泣きそうになるんじゃないだろうか。

弥生が最も危惧しているのは、その事なんだろう。

（なんで……弥生だけがそんな苦労を背負いこまないといけないんだよ……！）

皆の事を想つて、一年中肌を露出しない服装をして、皆と同じようなオシャレも出来ない。

弥生だつて女の子なんだから、他の子達と同じような可愛い服とか着たいと思つているに違いないんだ。

それなのに……。

「こればかりは、私達じゃどうしようもないしな……」

「弥生の意識改革を信じるしかない……か」

そうだよな……。

俺達が横から何か言つても、それは弥生の為にはならない。

あの子自身が自分から立ち上がる努力をしなくちゃ駄目なんだ。

俺に出来る事と言つたら、そんな弥生の身を守る事だけ。

でも、それでいいんだ。

どんな形でもいいから、俺は弥生の傍にいて、あの子の力になってやりたい。

それからの事は、これから考えるぞ。

「そんなんでも、弥生つてかなりモテモテだったんだけどね」

「女子校でモテモテって……」

「さつきも言ったけど、当時は本当に凄かったわよ。高等部の先輩達からは、まるで本当の妹のように可愛がられてたし、後輩の子達からはこそぞって『弥生お姉さま♡』って呼ばれて、後ろから女の子達が行列を作って歩いて来てたし」

「うわあ……」

「本当にお姉さまって言う女の子が実在したなんて……。フィクションじゃなかったのか……」

植村さんと嶋鳥さんがドン引きする気持ちも理解出来るけど、俺としては、その時の弥生を本気で見てみたかった。

きつと、その頃から大人びた印象だったんだろうなあ……。

「ならば、ラブレターとかバレンタインのチョコとかも貰いまくってたり？」

「よく分かったわね」

まさかの大正解っ!?

「ラブレターが下駄箱に詰まっっていて、開けた途端にドサクッて」

「漫画やアニメとかでよく見るシチュエーションだけど……」

「実際にあるんだな……」

でも、やられた方は洒落にならないよな。割と切実に。

「バレンタインも下駄箱に？」

「せーかい。入れ過ぎて、本来入っている筈の上履きが下駄箱の上に移動してたりしてたし」

「それって、地味にイジメじゃね……?」

本人達には悪気は一切無いんだろうけどな。

ラブレターの時と同様に、された方は溜まったもんじゃない。

上履きの代わりにチョコの詰め合わせとか、普通に驚くわ。

「一番凄かったのは卒業式の時だったっけ」

「ここまで来れば、なんとなく予想がつくツスよ」

実は俺も想像できる。

「じゃあ小栗さん。言ってみて」

「制服のボタンを全部後輩達に取られたりしたんじゃないんすか？」

「よく分かったわね」  
「やっぱりか。」

「正面のボタンだけじゃなくて、袖についている飾りのボタンに、最後は予備のボタンも渡してたわね。予備のは何故か同級生が貰いにきてたけど」

何故に同級生？

「そう言うのって、普通は共学の学校で起きる現象だよな？」

「しかも、大抵は高校で起きることだと思っただけ……」

そうだよな。俺も、中学でそんな事が起きるなんて事は初耳だ。

「中学での話はこれぐらいね。楽しんで貰えたかしら？」

「そうだな。根本的にはそれほど変わってないと思うけど、今よりももっと大人しかたって事だけはよく分かった」

「同じく」

けれど、俺が知らない弥生の話は純粹に面白かった。

桜井さん以外にも、総理とかに聞けば、もっと別の弥生の話が聞けるんだろうか？

「おっと。ちよつと休憩し過ぎちまったか」

「ほんとだ。いつの間にか、かなり時間が経ってる」

話を聞くのに夢中になり過ぎたか……。

充分に体を休める事は出来たから、俺としてはよかつたけど。

「そんじゃ、そろそろ私は行くわね」

「もう行くんですか？」

「うん。私がここにいても役に立たないでしょ？」

叶親さんが名残惜しそうにしてる。

クラスメイトだって言ってたから、寂しいのだろうか。

「特訓、頑張ってるね。生半可な覚悟じゃ、弥生の傍にいるのは難しいわよ」

去り際に凄い事を言ってたけど、どういう意味だ……？

いや、総理大臣の娘を守ろうって言うんだから、確かに生半可な覚悟じゃダメだよな……。

「よー」

気を引き締める為に顔を叩いて、気分を一新する。

「十分に休憩も出来たし、続きをやるぞ！」

「うすー！」

ここからは気合を入れ直して頑張るか！

待っててくれよ弥生！ 俺……絶対に強くなるからな！

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

今日の全ての訓練メニューが終了し、終わった頃にはもうすっかり夕方に。

お風呂で汗を流した後に夕飯を食べて、今は完全な自由時間。

今回の夕食当番は塩田さんだったけど、かなり美味しかったな。

あれはかなり料理をやり慣れていると見た。

「夏とは言え、この時間帯は涼しいな……」

半袖に短パンと言った格好で、俺はベランダにて夜風に当たっていた。

爽やかな風が体をなぞって、とても気持ちがいい。

「こんな場所で何をしてるんだ？」

「吉崎さん……」

後ろから声を掛けてきたのは、黒いTシャツとジャージを着た吉崎さんだった。

いつもつけている頭のバンダナが無いせいか、少し違った印象を受ける。

「ほら、これ」

「あ………ありがとうございます」

くれたのは、昔懐かしの瓶に入ったコーヒー牛乳。既に蓋は開いていて、後は飲むだけの状態になっていた。

「ん……ん……ん……ん……ん……」

腰に手を当てての一気飲みと、定番の飲み方をする吉崎さん。

体を思いつきり後ろに沿ってるから、割と大きめの胸が強調されて……。

「プハア〜！……飲まないのか？」

「の……飲みます！」

ヤバイヤバイ。

一瞬、本気で吉崎さんの体を凝視してたし……。

「にしても、お前さんも物好きだよなあ〜」

「そ……そうですか？」

「そうだよ。普通なら有り得ないだろ。折角の夏休みの殆どを特訓に費やすなんて。常識的に考えても、現実の学生の考えじゃないでしょ」

「そりや……まあ……」

俺だつて、弥生と出会わなければ今頃は弾と一緒に遊び呆けてたんだと思う。

でも、俺は弥生に会って、彼女の事を本気で好きになった。

だから、この選択に一切の後悔は無い。

「俺は結構楽しいですけどね。例え少しずつでも、目標に近づいているのは嬉しいですから」

「目標って……弥生を守るようになるってヤツか？」

「はい」

暗くなりかけている空を見ながら黄昏ている吉崎さんは、とても綺麗に見えた。

この人も間違いなく、正統派の美少女だよな……。

弾が見たら、きっと狂喜乱舞したに違いない。

「別にさ、誰かを守りたいって気持ちも否定する気はないよ。私や塩田達もそうだけどさ、この世に何も守る物が無いって人間は一人もいないんじゃないかな」

「……………」

いつもはクールで飄々としている吉崎さんが、珍しく真剣な顔をしている。

ここで口を挟むのはよくないと思って、俺は敢えて口を閉ざした。「どんな悪党にだって守りたい物がある。よく漫画やアニメとかで悪役の奴に向かって『守る物があるから戦える』的なセリフを言う事があるけどさ、その気持ち自体には正義も悪も関係無いと思う。それでも違いがあるとすれば、それはきつと……」

その時、大きな風が吹いた。

「どっちの『守りたい』って気持ちがより強かったか……それが互いの勝敗を分けたんだよ」

彼女の髪が靡き、思わず胸が高まった。

（って、そうじゃないだら俺！）

ちゃんと人の話は聞けよ俺！

なんでちよつぴりときめいちゃってるんだよ！

「だからさ、頑張つてここで男を磨きな。そうすりゃ弥生もお前に惚れるかもしれないし、織斑のねーちゃんも少しは安心できるんじゃないのか？」

そう……だな。

弥生が俺に惚れる云々は少し置いといて。

俺は今までずっと千冬姉の世話になりっぱなしだった。

別に、俺達は姉弟の間柄なんだから、互いに頼るのは構わないと思う。

だがしかし、このままずっと千冬姉におんぶに抱っこって訳にもいかないだろう。

俺だっていつかは自立したいと思ってるし、そうなった時は千冬姉が一人で家事を……。

「あ~~~~~」

「うわあっ!? い……いきなり大声出すなよ! ご近所迷惑だろうが!」

す……すっかり忘れてた……。



なんてこった……パンナコッタ……!

「よ……吉崎さん! 今日つて何日でしたっけ!」

「はあ? そんなの自分の携帯で確かめればいいじゃん」

御尤も!

俺は慌てて、ポケットの中に入れてある携帯を取り出して、今日の日にちを確認する。

「8月4日……」

確か千冬姉が言ってた……。

8月の初頭には一度家に帰るって……。

いつもなら、俺は家を掃除して千冬姉を出迎える準備をしている筈だった。

でも、今の俺は千葉県にいる。

とてもじゃないが、今すぐに自宅に戻る事は不可能だ。

白式を使えば可能かもしれないが、それは規律違反になるから速攻でNOだ。

「どうするどうする……!」

こうなったら、俺の代わりに誰かに家の事してもらおうしかないんだけど……。

俺の家を知っているのは箒と鈴だけ。

でも、箒も鈴も千冬姉には苦手意識を持つてるみたいだし、千冬姉だってそんな相手と二人つきりなのは辛いだろうし……。

(家事がちゃんと出来て、千冬姉にも信頼されていて、頼りにもなつて、俺と千冬姉の共通の知り合いと言えば……)

もう選択肢は一つしか無くね?

一瞬だけ束さんも考えたけど、あの人が家事を出来るなんて話は聞いた事が無いし、それ以前にどこにいるか分からない。つーか、携帯の番号とか知らねーし。

「今の時間帯ならまだ起きてるよな……?」

急いで目的の人物に掛けるために携帯を操作する。

問題は俺の家の場所を知らないって事だけど、それは単純に俺が教えれば済む話だ。

「頼むから出てくれ……！」

「何をそんなに慌ててるんだ？」

何回かのコール音の後、ようやく繋がった。

「よかった……い・あ、もしもし！ 俺、一夏だけどき。実はどうしても頼みたい事があつて……」

これでなんとかなる……。

後はこっちの頼みを聞いてくれるかどうかだけど、そこら辺は大丈夫だろう。

俺はそう信じてる。つて言うか、信じたい。

こうして、俺は後顧の憂いをなんとか払拭することが出来たのだった。

とつても綺麗になりました」

楯無と簪が自分達に割り当てられた場所を掃除している頃、他のメンバーもそれぞれに掃除を頑張っていた。

その様子を少しだけ覗いて見る事にしよう。

まずは、箒&鈴のコンビ。

「……これはなんとも……」

「凄まじいわね……」

雑巾片手に呆気にとられている二人の目の前に広がっているのは、端の方が霞んでしまうほどに長い木製の廊下だった。

割と綺麗になっていっているように見えるが、座り込んでよく見れば細かい埃があるのがよく分かる。

「これを弥生はいつも一人で掃除してるのか……」

「あたし……本気で弥生の事を尊敬するわ……」

IS学園の廊下に匹敵するほどの長さを誇る板垣家の廊下。

床が長いと言う事は、必然的に床に面している壁も長いと言う事だ。

「……やるか？」

「そうね。今回のアタシ達は、弥生の負担を少しでも減らすためにここにいるんだもの。やってやろうじゃないのよ」

気落ちしそうな心を奮い立たせ、二人は気合を入れ直し、バケツに溜まっている水に雑巾を浸す。

「アタシが廊下を拭くから、箒は壁をお願い」

「分かった。任せてくれ」

丁寧ながらも素早く廊下と壁を拭いていく二人だったが、20分を過ぎた辺りから心が折れかけたのは言うまでもない。

それでもなんとか頑張って一階の廊下を壁をなんとか拭き終えた

二人は、後にこう語る。

『もう二度と廊下の雑巾がけは御免だ』と。

.....

・  
・  
・  
・  
・

リビングを担当したセシリアとシャルロットは、非常に高そうな調度品に触れないように心掛けながら、慎重に掃除を行っていた。

「流石は弥生の家のリビングだよ。僕の想像以上に広くて、高そうな家具ばかりだ」

ソファーにテーブル。棚や窓に至るまで、その全てが間違いなく高級品だと見て分かる代物ばかり。

トドメは、国内最大に大きな80V型液晶テレビが堂々と置かれていた。

畳一畳分とほぼ同じ大きさのテレビは、それだけで迫力満点だ。

二人にとってはそれなりに見慣れた物ばかりではあるが、だからこそ掃除の仕方もそれなりに理解している……つもりだった。

「ちよ……ちよつとセシリア！ そんな風に磨いたら、壊れちゃうよ！」

「え？ そうなんですの？」

セシリアが磨いていたのは、リビングの端の方にインテリアとして置かれている有田焼の大きな壺で、とても美しい文様が描かれていた。

しかし、完全に力任せに磨いているセシリアのやり方では壊れる可能性がある。

シャルロットは急いで彼女の暴挙を食い止めた。

「ひ……罅とか入ってない……よね？ よかつたあ……」

「お掃除って難しいんですね……」

「いや、難しいって言うか、なんて言うか……」

弥生の為に頑張りたいと言う気概はあるのだが、セシリアの場合、それが完全に空回りしている。

結果として、シャルロットの負担が倍増していた。

「シャルロットさんはお掃除がお上手なんですのね」

「僕の場合は、趣味も兼ねてるから」

シャルロットは料理や掃除などと言った家事全般を好んでいて、学生寮の彼女の部屋もとても綺麗にしてある。

一夏とは趣味が共通していることから、友達としてはそれなりに仲が良かったりする。

一方のセシリアは、シャルロットとは完全に真逆で、家事全般がからつきしだった。

今までずっとメイドに任せっきりだったせいもあって、料理だけじゃなくて掃除も碌に出来ていない。

「えっと、セシリアはあまり勝手な事はしない方がいいかも……」

「残念ですけど、今回はそれが良さそうですわね……。シャルロットさん、出来れば私に指示をしてくれませんか？」

「了解。それじゃあ、まずは……」

シャルロットが実働部隊と指揮官を兼任することで、ようやく掃除がまともに動き出した。

だが、スロースタートだったせいもあって、掃除が終了するのは一番遅かった。

・  
・  
・  
・  
・  
・

二階にある客間を担当することになったダリルとロランであったが、この場所を安請け合いました事を早くも後悔し始めていた。

「まだ二部屋目か……」

「先は長そうだね……」

板垣家にある客間は、非常に高級感に溢れ、花月荘と見比べても遜

色無い和室で、敷かれた畳がとてもいい香りを放っていた。

「客間だからと言って侮ったつもりはないんだけどよ……」

「このクオリティの部屋が、まだあと2つもあるなんてね……」

この板垣家の客間は、一部屋一部屋がそれぞれに違う風貌になっている。

彼女達が先程掃除した部屋は和洋折衷になっていて、次の部屋は完全な洋室となっていて、色んな好みに合うように揃っていた。

住んでいる者だけでなく、訪れた客の事もちゃんと考えている親切設計だった。

「ここで嘆いていても仕方がない。今は口よりも手を動かそうじゃないか」

「お前にしてはいい事を言うじゃねえか。そうだな。弥生はこれをつも一人でやってんだ。二人がかりで出来ませんとは言えねえよな」  
「その通り。では、さっさと始めよう」

この二人、意外と息の合ったコンビネーションで掃除を進めていき、あつという間に部屋が綺麗になっていく。

ロランとダリルの予想外の女子力が明らかになった瞬間だった。

・  
・  
・  
・  
・  
・

楯無と簪が掃除をしている倉庫のすぐ傍にて、ラウラとフォルテのチビツ子コンビが着々と掃除を進めていた。

「家の外観から見ても、三階の廊下はあまり長くないと思ってたんですけど……」

「流石は姫様が在宅している家だ。廊下一つとっても凄い出来栄え

だ」

廊下の構造自体は箒達が掃除をしている一階と大差無いのだが、一階とは違って廊下の端々に飾り付けがなされていた。

別に高級品という訳ではないが、花瓶やちよつとした絵画などが、いいアクセントとなっていた。

「恐らくではあるが、この飾り付けは姫様がしたものだろう」

「弥生ちゃん、そういうのが好きそうツスもんね。いいセンスをしているツス」

話しながらも、ちゃんと手は動かしている辺り、二人の根っからの真面目さが垣間見える。

廊下は見違えるように綺麗になっていき、拭いている二人の顔が反射して見えるレベルになっていた。

「む？　ここは……」

「弥生ちゃんの部屋……みたいツスね」

廊下を拭いていると、二人の目の前に『弥生の部屋』と書かれたドアがあった。

「ここは流石に手を出しちゃ駄目ツスよね」

「うむ。自室は姫様が既に掃除したと言っていたし、姫様の許可無しに入るなど論外だ」

ここで少しでも『覗いてみよう』という選択肢が生まれない二人は、今回のメンバーの中で虚の次に生真面目なのだろう。

この二人が来てくれたことは、間違いなく弥生にとって幸運だったに違いない。

「続きを早くやっちゃうツス」

「だな。まだまだ掃除する場所はあるからな」

会話を止めて掃除を再開する。

範囲もそうだが、二人の連携ならば、次の場所に移るのも時間の問題だろう。

・・・

そして、一階の和室を掃除している布仏姉妹と弥生はと言うと……。

「やよっちはお掃除上手だね〜」

「そ…それほ…どでも……」

「謙遜する必要は無いですよ。本当に手慣れていますね」

本職のメイドと言う事もあって、虚はかなりのハイペースかつ効率よく掃除を進めていき、見る見るうちに和室の汚れが消えていく。

当初は本音は戦力にならないと思われるが、想い人である弥生が傍で一緒に掃除をしていると言う事もあって、本人なりにキビキビと掃除をしている。

傍から見れば、かなりスローだが。

「ちゃんと畳の上での掃除機の掛け方も熟知しているようで安心しました」

掃除機で畳の上を掃除する際には、目に沿って掃除機を動かさなければいけない。

もしも適当に動かしていけば、畳が傷んでしまうからだ。

「では、窓の縁などは『コレ』を使いましょうか」

「そ…それ…は……！」

虚が徐にポケットの中から取り出したのは、ゴムで縛られたティッシュが装着された一本の割り箸。

(掃除婦スワイバーの英霊サーヴァント『マツイ・カズヨ』の宝具『狭い汚れを取り除く手作り棒』キタ———！！)

家の掃除をする時の強い味方。

部屋の隅などの狭い場所の汚れならば、これにお任せ！

「それ……ちゃんと持ってきてたんだね……」

「当然です。これなくして掃除は成り立ちませんから」

(この発言から予想するに、虚さんは普段からコレを多用してるんだ



ろうなく…)

なんとなく、布仏の家庭事情が垣間見えた弥生だった。

「あ……そう……だ……」

「どうしました?」

「ちよつと……」

徐に弥生が立ち上がり、どこかに向かい始めた。

「掃除……をしてい……たら……体……も汚れる……だろうし……汗……も掻く……と思う……から……今……からお風呂……を沸かし……ておこう……と思っ  
て……」

「いいんですか?」

「は……い。今回……は私……の我儘……で来て貰った……ようなもの……だし……これぐ……らい……はしたく……て……」

「わ~い! 大きいお風呂だ~♡」

年頃の女子としては、大きな檜の風呂と聞かされれば、喜ばずには  
いられない。

それは本音だけでなく、姉である虚も同様だった。

(ひ……檜のお風呂……ですか。ちよつと興味はありますね……)

心の中で密かに虚もワクワクしていたり。

なんだかんだ言っても、彼女も立派な乙女だった。

弥生が風呂を沸かしに行った後も掃除は進んでいき、彼女が戻って  
きた頃には完全に和室の掃除は完了していた。

・  
・  
・  
・  
・

「「お……終わったあ~……」」

全員で手分けして家全体の掃除を行った結果、終了した頃には夕方

になっていた。

「マジで大変だったぜ……」

「普段からこれを一人で全部やってるなんて……」

「弥生は本当に凄いなんだな……」

全員が疲れまくり、リビングにて椅子に座ったり、床に座り込んだりしている。

その体にはうっすらと汗が浮かんでいる。

「皆……」

「どうしましたの?」

「ご苦労様……そし……て……ありがとう……。お風呂……を沸かし……である……から……遠慮……なく入って……いいよ……」

「「お風呂っ!?!」」

風呂と聞いて、即座に反応したのは鈴とシャルロットとフォルテと本音の四人。

疲れていた心も一気に回復したようだ。

「も……勿論、弥生さんも一緒に入るんですのよね!」

「え……えくと……」

気まずそうに目を逸らす弥生を見るに見かねた、事情を知っている三人が急いでフォロローに入る。

「ま……まずは箒ちゃん達で入ってきたらどう? ほら、幾ら広いと言っても、ここにいる全員が入れるほどじゃないんでしょ?」

「そ……そうで……すね……」

「僕と楯無さんと虚さんと弥生は、皆が入ってきた後に入るから! 最初は皆が行って来ていいよ!」

「それがよさそうですね。ここで変に渋って弥生さんのご厚意を無下してはいけませんから」

とつてつけたかのような説明に不満が零れかけた一年生組だが、言っている事も尤もだったので、大人しくお風呂に入らせて貰う事に。

「でも、着替えはどうしましょうか? 流石に持つてきては……」

虚が言いかけた時、彼女以外の全員がバックから自分用の着替えを

取り出し始めていた。

「……………え？」

「お姉ちゃん……………持ってきてないの？」

「と言うか、どうして皆して持ってきてるんですか……………？」

「いや……………別に？ あわよくば弥生ちゃんのおうちにお泊りとか出来ればいいかななんて、これポツチも考えてなんかいなかったわよ？」

うん、絶対」

「はあ……………」

どうやら、考えている事は全員同じだったようだ。

「あ……………あの……………お客さん…用…の浴衣…ぐらい……………ならありま…すよ……………？」

「……………お借りします」

変に遠慮するのも失礼な話なので、ここは大人しく借りることに。

「では、浴場をお借りします。姫様」

「ん。ゆっくり……………入ってきて……………ね。バスタオル……………は更衣室……………の棚……………の中……………に入ってる……………から……………」

「分かったわ。ありがとね」

ゾロゾロと集団でお風呂へと向かった面々。

それをジツと見送った弥生達。

「行ってみたね」

「よかったです」

ホツと胸を撫で下ろす楯無達。

だが、シャルロットはともかく、楯無達が自分の体の事を知っているのが気になった。

「あの……………楯無さん…達……………はどうして……………」

「ん……………私は、前に弥生ちゃんが寝込んだ時にうつかり……………ね。今まで言えなくてごめんなさい」

「私はお嬢様から聞かされました。今まで言い出せずに、申し訳ありませんでした。シャルロットさんはどうして？」

「僕は……………前に少し……………」

……………で『一緒にお風呂に入って、その時に見ちゃいました』とは

言えないシャルロット。

この状況でそれを言う勇氣は無かった。もしも言えばそうなるか、容易に想像がついた。

「とにかく、少しでも事情を知っている人間が身近にいれば、弥生ちゃんも安心でしょ?」

「そうで…すね…」

気が付かない内に楯無達が自分の秘密を知っている事に驚きはしたが、その事で彼女達を恨むような事はしなかった。

寧ろ、安心感すら覚えていた弥生。

(この人達なら…大丈夫かな…)

心にも余裕が生まれ安心したのもつかの間、突如として弥生のスマホに着信が来た。

「ん?」

「あら、誰かしら?」

「ちよつと…失礼します…」

一度断りを入れてから、少し離れた場所にて通話に出る。

「もし…も…し…? え? い…きな…り…どうし…たの…?」

通話相手は相当に焦っているようで、捲し立てるような言葉にタジタジになってしまう。

「うん…うん…事情…は分かった…よ。そ…れで…私…はどうす…れば…いい…?」

弥生は急いで周囲を見渡して、適当なメモ紙とペンを手に取って、何かを書き始めた。

「……了解。私…なら大丈夫…だよ。気持ち…は分かる…し…」

通話相手は弥生の言葉に安心したのか、礼の言葉を言ってから通話を切った。

「アイツ…も苦勞…してる…んだな…」

静かになった自分のスマホを見つめながら、ポツリと呟いた弥生だった。



## 一夏の特訓 その4

なんで……。

「う〜ん……むにゃむにゃ……」

なんでこんな事に……。

「しゅぴゅ……」

こんな事に陥ってしまったんだ……。

なんて言っても、ぶつちやけ意味不明だと思うので、まずは今の俺が置かれている状況を説明したいと思う。

俺は今、塩田さん達6人と同じ部屋にて就寝している。

そう、あの美少女6人組と一緒にの部屋で、だ。

別に、俺だつて好き好んで彼女達と一緒にの部屋で寝ているわけじゃない。

そりゃ、こんな女の子達と一緒にいて、何も思わない訳じゃないけど……。

就寝時、俺は基本的に鬼瓶さんから与えられた部屋にて寝るようにしている。

今日も今までと同じようにその部屋で寝ようと思っていたのだが……。

・  
・  
・  
・  
・  
・

俺の特訓は主に昼間に集中して行い、夜は体を休める事にしていく。

だからと言って、決して何もしないと言う訳じゃなくて、今が夏休

みである以上は学生として絶対にやらなくてはいけない事がありまして……。

「ほらそこ、文法間違ってるぞ」

「え？ どこですか？」

「ここだって、ここ」

「あ、本当だ」

俺は、リビングにて体を休ませながらも、夏休みの宿題と睨めっこしていた。

隣には嶋鳥さんがいて、宿題を見てくれている。

因みに、俺が今しているのは古文。

IS学園だからと言って、決してIS関連の宿題ばかりじゃない。

こんな風に、普通の学校と同じような基本5教科の宿題もちやんと出題されるのだ。

「そういうえば、嶋鳥さん達は宿題、大丈夫なんですか？」

「あゝ…私達ならモーマントイ」

「それって……実はもう終わってたり……とか？」

「んな訳あるかい。それは塩田達だけだよ」

「へえゝ…そうなのかゝ……って、塩田さんは終わってんのか!？」

「まあな。塩田と吉崎と植村は7月の間に全部終わらせてるよ」

「マジか……。じゃあ、嶋鳥さん達は？」

「私と叶親と鷹橋は、ちゃんと計画を立ててからやってる。だから、別に焦る必要は無し」

7月中に終わらせたって言う塩田さん達も凄いけど、ちゃんと計画を立てて、それを実行できてるってのも地味に凄いよな。

だって、夏休みの計画程、破綻しやすい計画ってないだろ？

問題を一問一問確実に解いていくと、扉がノックされた後に叶親さんがお盆に二人分の麦茶を乗せてやって来た。

「お疲れ様。少し休憩したら？」

「そうだな。ちよつち小休止するか」

「うす」

お盆を床に置いてから、俺と嶋鳥さんにそれぞれ麦茶を手渡してく

れた。

幾ら涼しい夜とは言え油断は禁物。

ちやんと水分補給はしておかないと、後で自分が困る羽目になる。

「どこまで進んだ？」

「もう少しで古文は終わるかな？　そうしたら、次は英語だ」

「じゃあ、今度は塩田の出番か」

「塩田さんが？」

「うん。アイツ、小さな頃にアメリカ留学してたから、英語超ペラペラだし」

「って言うか、英語だけじゃなくて、中国語に韓国語、フランス語にドイツ語にロシア語、他にも色々喋れたよな？」

「前に、よく分かんない言語を話してた時もあったっけ。古代ノルド語にラテン語とかもいけるって聞いた事があるような気が……」

幾らなんでも凄すぎだろ。

そんなにも沢山の言語をマスターして、一体何処に行くつもりなんだ？

「まあ…兎に角、英語なら塩田にお任せって事だ」

「下手に間違うと拳が飛んできそうだけど」

……ちやんと俺は宿題を終わらせられるんだろうか。

「おくい……って、叶親もいたのか」

「鷹橋さん。どうしたんだ？」

今度は、携帯を持った鷹橋さんが入ってきた。

短パンにTシャツと言った普通の格好だけど、彼女の場合は千冬姉と同等クラスのスタイルを誇るから、それだけでもかなりエロい。

「やっぱし、織斑の部屋のエアコン、ダメだったわ」

「そうか……」

鷹橋さんの言う通り、俺が普段から寝泊まりしている部屋のエアコンが見事な御臨終をなされたのだ。

機械にあまり強くない俺には、壊れた原因がサッパリわからない。

勿論、修理なんでもってのほかだ。

「私達じゃ対処のしようが無いから、明日にでも桜井さんに来てもら



うごことにした」

「おおー！ それならもう安心だな！」

は？ なんてそこで桜井さんの名前が出る？

「あの……桜井さんって、昼間会った……」

「そ。あの三つ編みの子」

弥生の中学時代の友人で、塩田さん達と同じ高校に通っている女の子。

気が強そうな印象が強かったが、だからこそ引っ込み思案の弥生とは相性が良かったのかもしれない。

「私達も少し前に知ったんだけど、桜井さんって機械にめっちゃ強いんだよ」

「なんせ、前に私達の部室のエアコンが壊れた時も、桜井さんがチョクチョクイってすぐに修理しちゃったし」

「あれは本当に凄かったな……」

「あまりの暑さに、塩田がいきなり浴衣を取り出して、それを鷹橋に着せたぐらいだしな」

学校の部室で浴衣を着せたっ!?

どうやら、幕南高校って所も相当にカオスみたいだな……。

「ところで、嶋鳥さん達って何の部に入ってるんですか？」

「『女子野球部』」

まさかの野球部っ!?

この人達からは最も縁遠いスポーツじゃないか!?

「んでもって、吉崎がキャプテンで塩田が副キャプテン」

「叶親が四番バッターだったりする」

「ブイ」

あの吉崎さんがキャプテンで、塩田さんが副キャプテンって……。

叶親さんはあれか？ 剣道してるからバッターなのか？ つーか、なんで剣道部じゃないの？

「桜井さんはマネージャーをやってる」

こんな個性豊かな面々が部員だと、桜井さんも苦勞してるんだろうな……。

「あ、鬼瓶さんはどうだった？　ちゃんと電話はしたんだろ？」  
「うん。また向こうに泊まるってさ」

「今日も徹夜確定か……。編集者って想像以上にハードな職業なんだな……」

鬼瓶さん……本気でご苦労様です！

帰ってきた時は、美味しい料理でも振舞ってあげよう。

「んでき、織斑は今晚はどうする？」

「どうするって？」

「だくかくらく。あの暑い部屋で寝るのかって聞いているの」

あ、それか。

「俺は別に構いませんけど？　今晚はそこまで暑いつて訳じゃないし」

「その慢心が熱中症の原因になるんだぞ？」

「夜だからと言って、油断は禁物だぞ？」

「人間は寝てる間にコップ一杯分の汗を掻くって言われてるしな」

それは俺も前にテレビで聞いた事があるような気がする。

流石に実際に確かめた事は無いけど。

「つーわけだから、織斑は今晚、私達と同じ部屋で寝ること」

「はあああああつ!!」

なにがどうしたら、そんな結論に至るんだっ!!

「部屋自体はそこまで狭くないから、一人位増えても問題だろう」

「はい決定」

「ちよ……ちよつと待って！」

「「なに？」」

そんな純粋な目で小首を傾げないでくれよ！

まるで俺が間違った事を言ってるみたいじゃないか！

「お……俺は男ですよ!!　女の子が大勢いる場所で一緒に寝るってのは倫理的に問題があるんじゃない？」

「そんな下らない心配をしたの？」

「そんなの、私達からすれば今更だよね」

「「ね？」」

今更って……。

彼女達は、普段からどんな学校生活をしてるんだよ……。

「因みに、織斑に拒否権はありませんのであしからず」

「だと思いましたよ!!」

ちくしよ〜! どうして俺の周りの女子は、こうもアグレッシブな子達ばかりなんだ〜!

お淑やかな女の子って弥生ぐらいしかいないじゃないか〜!

あ〜……急に弥生が恋しくなってきた……。

・  
・  
・  
・  
・  
・

そんな訳で、有無を言わさず俺はこの部屋に強制連行されて、こうして彼女達と一緒に寝る羽目になったのです。

しかも、なんでか俺が真ん中に寝てて、全員が横並びになってるんだよな……。

「す〜……す〜……」

女の子の寝息がすぐ傍で聞こえて、物凄く落ち着かない!

こんな状態で寝れるわけないだろ〜が!

俺の両隣りには植村さんと塩田さんがいる訳で。

二人共ラフな格好をしてるから、凄くアレなんだよ!

「んん〜……」

ちよ……ちよつとっ!? 塩田さんっ!?

(きゅ……急に腕に抱き着かれた……!)

かなり力を入れて抱き着かれたから、思いつきり胸が腕に当たってるんですけど〜!

や…柔らかな感触をモロに感じて……。

(いやいやいやいや！ 俺には弥生と言う、心に決めた女の子がいるじゃないか！)

塩田さんは寝相が悪くてこうなっただけで、彼女には何の悪気も無いんだ！

変に意識をする方が失礼つてもんだらう！

(で…でも、出来れば助けて欲しい……)

音を立てずに周りを見渡すと、他の子達はすっかり熟睡していた。鷹橋さんは横を向いて寝ていて、その大きな胸がかなり強調されている。

吉崎さんと叶親さんも静かな寝息を立てながら寝ていて、その寝顔に少しだけドキツとした。

嶋鳥さんは顔を向こう側に向けていて分かりにくいけど、ちゃんと寝息が聞こえることから、ぐっすり寝ている事が窺える。

(もう…朝まで我慢するしかないのか……?)

この煩惱だらけの状態で朝まで耐久とか、どんな拷問??!

いや……弾刃りには天国のような場所かもしれない。

少なくとも、彼女達が見目麗しい美少女である事には違いないから。

「あゝむ♡」

ぱく。

「いっ!?!」

み…耳を噛まれたっ!? 誰につ!? 何故っ!?

「お肉……」

う…植村さくんっ!? ちょ…ちよつとっ!? 俺の耳を甘噛みするのは止めてくれませんかねっ!?

いつもは結んでいる髪が解けて、凄く色っぽくなってるから、かなり刺激的になってるんだよ!!

(ちくしょう……悔しいけど……悔しいけど……植村さんの甘噛み、めっちゃ気持ちいい……!)

心が幾ら拒絶しても体は正直なようで、見事に体の『とある部分』が

元氣ビンビンになっている。

(い……いや！……こんな誘惑に負けちゃ駄目だ!! 俺が好きなのは弥生！ 俺は弥生を守ると決めた!)

こんな時は、何か別の事を考えるんだ！ え……と……。

(日本国民は正当に選挙された国会における代表者を通じて行動し、我等と我等の子孫の為に諸国民との共和による成果と……)

この間やった宿題に出てきた憲法の前文を必死に心の中で暗唱して、今の自分の心を紛らわす。

ついでに、弥生の頭を脳裏に思い浮かべる。

(とにかく、今は寝る事に全力を尽くそう！ 確か、羊を数えればいいとかよく言うよな……)

でも、今の俺の場合は羊よりも数えたいものがあるわけでした。

(え……と……制服姿の弥生が一人。ISスーツ姿の弥生が二人。私服の弥生が三人。夏休みだから、きつと今も私服姿なんだろうな……)

おっと、弥生が可愛すぎるせいで思考が逸れてしまった。

(ビキニ姿の弥生が四人、あの時の姿は一生忘れないな……。スク水姿の弥生が五人、学園指定のスク水も絶対に似合って可愛いに違いな……)。体操服姿の弥生が六人、ああ……いつの日か弥生の体操服姿(ブルマ)も見てみたいぜ……)

一度始まると、もう妄想は止まらない。

後から後から、湧き出る泉の水のように弥生の色んな姿が思い浮かばれる。

(スーツ姿の弥生が七人、弥生はああ見えて大人っぽい所もあるからな、凄く様になってるんだろう。エプロン姿の弥生が八人、家事もかなり上手だっけ聞いたから、エプロンも絶対に似合うって。ネグリジェ姿の弥生が九人、いつの日か、そんな恰好をした弥生と一緒にベッドで寝てみたいな……)

あ……段々と眠気が出てきて、瞼が重くなってきた……。

(ウエディングドレス姿の弥生が十人……)

ウエディングドレス……か。

(子供は男の子と女の子がそれぞれ一人ずつがいいな……。それで

もって、俺が新聞を読んでいる横で弥生がキッチンでご飯を作って、  
それで……)

そこまで妄想が達した瞬間、俺は自然と眠りについていた。

この時見た夢は、弥生との幸せな結婚生活だったのは言うまでもない。  
い。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「ん……んん……」

急に来た尿意に促され、嶋鳥は目を覚ました。

「……………」

枕元に置いた自分のスマホで時間を確認すると、まだ午前3時半。  
半。

いつもならば余裕で夢の中にいる時間帯だ。

「……………トイレ」

誰に言うわけでもなく、嶋鳥は小さな声でポツリと呟いてから、  
そつと部屋から出てトイレに向かった。

この時の嶋鳥は、まだ寝ぼけていて、近くにいる一夏がどんな状況  
になっているのかよく分からないでいた。

数分後に、少しだけ目が覚めて目が暗闇に慣れた嶋鳥が戻ってき  
て、その時になって初めて一夏の置かれた状態を見る事になった。

「弥生……俺も愛してるぞ……」

右側に植村、左側に塩田を侍らせた状態で弥生の名前を呼ぶ一夏。

傍から見ると、普通に最低野郎である。

「そんなに腰を振らなくても……俺がちやんと気持ちよくしてやる

ぞく……」

お前は一体どんな夢を見てるんだ。  
しかも、ご立派に股間を膨らませて。

「……………キモ」

鳴鳥朱美、心からの一言だった。

次の日の朝、当然のように鳴鳥の一夏を見る目が軽蔑に染まっていた。

一夏に抱き着いていた塩田と植村はあまりよく分かっていない様子だったが。

余談ではあるが、ちゃんとエアコンは桜井によって修理されました。

## 夏の思い出

弥生を含めた、総勢13人がかりで半日を費やして板垣家の大掃除を無事に終えた少女達。

現在の家主である弥生の厚意によって、楯無と虚とシャルロットを除いた9人でまずは檜の風呂を堪能する事に。

準備を終えて、全員がその裸体にバスタオルを巻いてから、風呂場に行く扉を開く。

すると、全員の目の前に広がった光景は、まさに『凄い』の一言に尽きた。

「これは……」

「ちよ……マジ？」

鈴と箒が本気で戦慄を覚える程に、そこにある檜で出来た風呂は凄かった。

構造自体は非常にシンプルで、長方形で出来た風呂なのだが、その大きさが尋常ではなかった。

分かりやすく説明すれば、市民プールにある子供用のプールぐらいの大きさ、と言えば分かりやすいか。

少なくとも、二人暮らしの家にあるような大きさの風呂ではない。

因みに、この風呂場は彼女達が訪れる前に弥生が既に掃除をし終えていた為、ヒロインズ達はこの風呂を見るのはこれが初めてとなる。

「これがジャパニーズ・ヒノキのバスか……」

「樹の香りが何とも言えないですわ……♡」

「そうだな……」

外国組の面々は、初めての檜風呂に感動していた。

特にラウラなどは、まるで幼い子供のように目を輝かせている。

「これが姫様が普段から利用なさっている風呂場か……。なんと言う広さだ……」

「これ……確実にウチの風呂よりも大きい……」

一応、簪も暗部の家系であるが故に、一般的にはかなりの金持ちに入るのだが、それでもこの風呂は衝撃的すぎた。



「わ〜♡ 私いつちば〜ん!」

「あつ!ズルいツス〜!」

興奮を抑えきれない本音が我先にと湯船に入ろうとし、それに続くようにフォルテも向うが、それに待ったをかけたのが意外や意外、ダリルだった。

「ちよつと待てい、そこのバカ二人」

「はい?」

「湯船に入る前に、ちゃんと体を洗いやがれ。それぐらい常識だろうが」

流石はこの場で唯一の三年生。

後輩たちに対して、ちゃんと先輩をしている。

「ダ…ダリルって、こんな真面目キヤラだったツスカね…」

「お前喧嘩売ってんのか? こう見えても、学園じゃ優等生で通つてんだよ。代表候補生舐めんじゃねえ」

いくら制服を着崩していても、いくら口調が悪っぽくても、根っこ部分はかなり真面目なダリル・ケイシー候補生でしたとき。

「た…確かに、ここはダリル先輩の仰ることが正しいな」

「うん。お風呂でのマナーはとても大事」

そんな訳で、ダリルの提案でまずは体と頭を洗う事に。

風呂場自体がかなり広いので、全員が一齐に洗い出しても何も問題は無い。

ちゃんとシャンプーなども複数用意してあって、弥生が最初からこの状況を予期していたことが窺えた。

「やつぱり、髪が長いと洗うのも一苦労よね」

「そうだな。切ればいいと言われればそれまでだが、これはこれで愛着があるしな……」

「そうですね。手入れなども大変ですが、その価値はあると思いますし」

箒や鈴、セシリアと言った長髪組は、長く綺麗な髪を丁寧に洗っている。

と言っても、この場においてショートヘアなのはロランだけなのだ

が。

そのロランはと言うと、そそくさと頭と体を洗い終わり、今はラウラの頭を洗ってあげていた。

「目に泡が入っていたりしてないかい？」

「うむ、問題無いぞ。前に姫様から、この『シャンプーハット』なる物を頂いてからは、髪がとも洗いやすくなった」

いつの間になんな物を渡していたのか。

シャンプーハットをつけた状態でロランに頭を洗って貰っているラウラはとても上機嫌だった。

「ラウラちゃんって……本当に15歳ツスよね……？」

「その筈だけど……」

「あんな顔を見ちまうと、どうしても小学生にしか見えねえよ……」

同じように頭を泡立たせているフォルテと簪とダリルは、その手を止めてラウラをジト目で凝視している。

そんな中、一人だけマイペースで体を洗っているのが本音だった。

「やよつちのお風呂は大きいな〜♡」

即興の歌を歌いながら体を洗うその姿を見て、鈴と簪とフォルテは、とても複雑な表情を浮かべる。

「そう言えば……あの子も結構な隠れ巨乳だったわよね……」

「胸にコンプレックスを持っていないラウラが、ちよつとだけ羨ましい……」

「大丈夫。いつかきつと、あの子もこつち側に来てくれる筈ツスから」

いつの間にか肩寄せあっていた鈴と簪とフォルテ。

ここにラウラも来れば、本当に貧乳同盟が完成するかもしれない。

そうして、全員が体と頭を洗い終わり、ようやく待望の湯船に浸かる事に。

「「「「「「はあ〜……♡「「「「「」」」」」」」」

湯に浸かった途端、全員が揃って恍惚の笑みを浮かべ、体から力を抜く。

「これは……気持ちがいい……」

「花月荘の露天風呂もいいけど、これも悪くないわね〜……」

「IS学園の大浴場にも檜風呂がありますけど、あそこは他にも色々  
とあってごちゃごちゃとしてますから、こことは違ってゆったりは出  
来ても、のんびりは出来ないんですのよね〜……」

「ああ……全くだぜ……」

あまりの気持ちよさに、自然と感想が口に出る者もいれば、無言で  
笑顔を浮かべて檜の湯を堪能している者もいる。

「ふにゃ〜……とろけるにゃ〜……♡」

「この心地よさは……反則ツスよ……」

「姫様のお美しさの秘訣も……この湯にあるのかもしれない……」

「それ……同感……」

心も体もほっこりとして、大掃除の疲れもすっかりと取れた少女達  
は、夢心地のまま名残惜しむように風呂から上がった。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「人参の千切り、終わりました」

「僕も、下拵えは終わったよ」

「こつちも完了よ」

「ありがとう……」

皆がお風呂に入っている間、何もする事が無くて暇だったので、夕  
飯の下拵えをする事にした。

もうここまで来たら、皆はウチに泊まる気満々だと判断し、人数分  
の食事を用意しようと思いついたのですよ。

そしたら、シャルロットと楯無さん、虚さん達も一緒に手伝ってく  
れると言うではありませんか。

シャルロットの調理スキルの高さは前々から知っていたし、楯無さんも虚さんもかなり料理が上手だ。

特に虚さんの腕前はかなり凄い。

私よりも手際がいいし、作業の効率化もちゃんと出来ている。

やっぱ、本職のメイドは伊達じゃない。

「おや？ この音は……」

ん？ この声はロランさんか？

だとしたら、皆がお風呂から上がってきたのか。

「あら皆。お風呂はちゃんと堪能できたかしら？」

「うん。凄く気持ちよかったよ」

「それはよかったです」

皆のほこした顔を見れば一目瞭然だよな。

確かに、あのお風呂は我が自宅ながら気持ちがいいし。

「弥生。こんないい風呂に入らせて貰って感謝する」

「別…に気にしない…で……。大掃除…を手伝っ…て貰った…から

……これぐ…らい…のお礼…は当然…だよ……」

「そう言われると、なんだか照れるな……」

それに、お客様をおもてなしするのは当然の事でしょ？

「ところで、弥生達は何をしてたのよ？」

「夕飯の下拵えよ」

「え？ 夕飯ツスカ？」

「姫様の料理……じゅるり」

『夕飯』と言う言葉に真っ先に反応したのはラウラ。

「この子は学園の寮でも私の料理を沢山食べてきてるからね。

「まあ！一言言ってくだされば、このセシリア・オルコットがいつでもお手伝いしますのに！」

「二「お願いだから、それだけは勘弁してください」」

「なんで皆揃って言いますのっ!？」

自分の料理の腕をちゃんと把握してから言ってください。

「弥生の手料理……今日は最高の夜になりそうだ」

それは大袈裟じゃありませんかね？

「でも、お風呂はどうするの？ まだ料理の途中なんですよ？」

「大丈夫よ。さつきも言ったけど、まだ下拵えしかしてないし。お風呂から上がってから続きをしようと思ってたの」

「そうなんスね」

「じゃあ、こいつ等が上がってくるまでは楽しみに待ってるでしょうや」

「ですね」

「やよつちのご飯、楽しみだな〜♡」

私達は、入浴の準備を素早く済ませてから、お風呂に向かった。

今日は本当に疲れたから、ゆっくりと浸かりたいな〜。

.....

.....

.....

.....

はい。来ました我が家のお風呂。

完全に見慣れた光景なのに、他の人達と一緒に入るってだけで、不思議といつもととは違って見える。

「これが弥生の家のお風呂……？」

「これはまたなんとも……」

「本当に凄いわね……」

三人も心から驚嘆してくれたようで、この家の人間として鼻が高い。

「ん？」

虚さんと楯無さんがこつちを見てる？

あ……体の傷を見てるのか。

(想像はしていたけど……)

(こうして生で見ると、本当に凄惨ですね……)

今にして思えば、こうして自分の素肌を誰かに見せるなんて、前は

想像もしてなかったなあ。

それだけの出会いがあった……って事なのかな。

「さて……と。皆も待たせてるんだし、早く体を洗って、湯船に入りましょう」

「そうですね」

「そんな訳だから……」

な……なんだか嫌な予感が……。

「弥生ちゃんの体は、お姉さんが洗ってあげる♡」

「ええええ……」

なんとなく、この発言が予想出来てしまった自分がいる。

でも、ここには虚さんも一緒にいるんだし、きっと大丈夫だと信じたい。

「何言ってるんですか、お嬢様」

そうだそうだと！ 言ってやってくださいよ！

「ここは皆で洗えば早いでしょう？」

虚さあくんっ!? 普段の冷静な貴女はどこに行っちゃったんですか?!

「ぼ……僕も洗ってあげる……ね？」

シャルロットも仲間に入るなく!?

なんて抵抗しても、この私が抗えるはずもなく、結局は三人の言いなりになって体と頭を洗って貰う事になった。

「弥生ちゃんの髪はサラサラしていいわね」

私の髪を泡立てながら楯無さんがなんか言ってるけど、髪の艶具合なら貴女だって負けてないでしょうに。

「こうして触ると、弥生さんの肌が綺麗なのがよくわかりますね」

虚さん。お世辞でもちよつと嬉しかったです。

「や……弥生の体を僕が触って……洗って……」

シャルロット。そんなにも目を血走らせながら私の体を凝視するのは止めてもらえませんかね？

後、その鼻から出てる赤い液体をとつとお湯で流してしまいなさい。

成すがままにされながらも、地味に気持ちよさも実感してしまつた。

一応言っておくけど、ちゃんとデリケートゾーンだけは自分で洗いましたからね？

体を全て洗い終わった後で、楯無さん達も自分達の体を洗って、そうしてようやく湯船に浸かる事になった。

「今日の疲れが全て取れていくようね〜…」

「はい……これは癖になりそうです………」

「花月荘の露天風呂とは、また違った気持ちよさがあるね〜…」

この風呂の気持ちよさだけは、何年経っても飽きることが無い。

まさに『至福の一時』ってやつだね。

「こんなお風呂に毎日入ってくれば、弥生ちゃんが美白になるのも頷けるわね〜…」

「全くもってその通りですね………」

「あ〜………」

また変な事を言ってるし。

こんな体で美白とか関係無いでしょうに。

肌が綺麗云々以前の問題だろう。

「皆には悪いけど、これはもうちよつとだけゆつくりしていききたいわね………」

「これは……冬場のコタツの発する魔力に酷似していますね………」

「ふにゃ〜………」

虚さんは言িয়েて妙な言い方をするなあ〜。

でも、その気持ちはなんとなく分かる。

って、シャルロットが逆上せてないっ!?

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「「お待たせ〜」」

「おう。疲れは取れたか？」

「おかげさまで」

リビングのソファで駄弁っていたダリル先輩がこっちを向く。他の皆も思い思いに過ごしていた。

「それじゃあ、夕飯作りの続きでもしましょうか？」

「「はい」」

もう下拵えは済んでるから、後は調理をするだけだ。

楯無さん達も手伝ってくれるし、早く終わらせることが出来るだろう。

「や…弥生！ よかったら私も手伝わせてくれないだろうか？」

「箒……？」

これは意外な申し出。

箒も結構、家事スキルはある方だし、戦力の増加は純粹に有難い。

「じゃ…じゃあ、アタシも手伝うわよ！ これでも元中華料理店の娘なんだから、役には立つわよ！」

「じゃあ……お願…いしよう…かな……？」

「まっかせといてー！」

そういや、鈴も料理が上手だったな。

中華料理限定かと思っていたけど、この様子を見る限りはそうでもないようだ。

どこかで密かに他のジャンルの料理の勉強でもしてたんだろうか？

「それじゃあ、本音も手伝いなさい」

「は〜い♡」

「本音がするなら、私も手伝うよ」

「簪ちゃん……」

またまた大所帯になりそうだが、ウチのキッチンはかなり広いか



ら、これぐらいの人数なら大丈夫。

「料理かく……。流石にこれは役に立てそうにないわく……」

「私もツス。簡単なやつならなんとか出来るんすけど、ああ言った本格的な家庭料理となると……」

「ふつ……。私は弥生が愛を込めて作ってくれる料理ならば、なんでも食べるよ」

「偉そうに言ってるんじゃないやねえよ。要はお前も作れないんだろうが」

「そうとも言うかな」

「そうとしか言わないツスよ……」

まくた、あの三人はコントしてるし。

実はダリル先輩とロランさんって仲がいいでしょ。

「ひ……姫様！ 料理の手伝いは出来ませんが、配膳などはお任せくださいー！」

お？ それは助かるな。

後でラウラはいい子いい子してあげよう。

「オレ達もそれぐらいは手伝うか」

「賛成ツス」

「同じく」

「じゃあ私も……」

「しかしセシリアはダメだ」

「なんですのっ!？」

多分だけど、私と皆は同じビジョンを想像したんだと思う。

何かに蹴躓いて、皿ごと料理を落とす光景が……。

「お前はそこでジツとしてろ。それが一番の手伝いになるから」

「わ……分かりましたわ……」

こうして、調理組と配膳組に分かれて、私達は夕食の準備を行った。人数がいるお蔭で、いつも以上に楽しく、素早く料理が進んでいた。

え？ セシリア？ えくつと……見学組？



後片付けすらも楽しいと思っただのは生まれて初めてだよ。  
皆で料理をするって、結構いいもんなんだな……。

・  
・  
・  
・  
・  
・

「本当にいいのか？」

「ん」

外がすっかり暗くなり、私は皆をそれぞれ客間へと案内していた。  
今晚はここに泊まってもらうために。

一応、ここに来る際にちゃんと外泊届は出してきてたらしい。

何とも用意周到な皆さんですこと。

「で、ラウラは寮と同じように弥生と一緒に寝る……と」

「その通りだ。私は姫様のお側に仕える義務があるからな」

なんて言いながらも、顔が笑ってるよ。

私もラウラと一緒に寝れて嬉しいんだけどね。

「弥生の手伝いに来たのに、結局は立場が逆転しちゃったね」

「でも、弥生ちゃんらしいわ」

皆が割り振られた部屋に入っていく、私とラウラも三階に上がって  
自分の部屋に行くことに。

「ここが姫様の自室……」

自室なんて言ってるけど、これと言って特に見るような物は無いと  
思うけど？

本棚には漫画やラノベがびっしりだし、様々なゲーム機が各種取り  
揃えられてる。

他にも、ディスプレイが3つほどある高性能なパソコンぐらい。

後はもう、普通に広いだけの部屋だよ。

「今日…は疲れた…し…もう寝よう…か…」

「了解しました。早寝早起きは大切ですからね」

少し前の私とは縁も所縁も無い言葉をありがとう。

私はラウラと一緒にベッドに入り、薄手のシーツを体に掛ける。

リモコンで部屋の灯りを消して、そつと横で寝ているラウラに近づく。

「それじゃあ…おやすみ」

「おやすみさない…姫様…」

思っている以上に疲れていたのか、私はすぐに瞼が重くなり、眠りについた。

ラウラの寝息を聞きながら寝たせいかわ、自分の部屋なのに、まるで学園の寮にいるような気分になった。

今日の出来事は、きつと一生忘れることがないだろうな…。

それ程までに、とてもいい夏休みの思い出になった。

こんな夏休みも…悪くない。

## 一夏の特訓 その5

「はあく……つい慌てて『あんな事』を頼んじまったけど、本当に大丈夫かなく……」

「過ぎた事をいつまでもウジウジと言ってんじやねえよ。男らしくねえぞ」

「言われてるなあ、織斑少年」

「少年って……一個しか歳は違わないでしょうに」

「買い物袋を提げている俺の両隣を、塩田さんと鷹橋さんが同じように買い物袋を引っ提げて歩いている。」

「今日は、午前の特訓を急遽中止にして、食料品や消耗品の買い出しになつている。」

「一応、鬼瓶さんの家を間借りしているような立場なので、こういった事はちゃんとしておきたい。」

「これは、俺達全員の総意だった。」

「勿論、ちゃんと電話で鬼瓶さん本人に許可は取っている。」

「かなりの量を買いましたね……」

「そりゃ、夏休みの間の分に加えて、詫びの分も少し入れてるからな」「なるほど」

「言われてみればそうだ。」

「俺達の方だけ買えばいいってもんじやない。」

「あそこは鬼瓶さんの住んでいる家なんだ。」

「俺達が帰った後の事もちゃんと考慮しておかないといけない。」

「他の連中も、今頃はオレ達みたいに買い物を買って済ませて帰ってるんじゃないか？」

「まさにその通りみたいだぞ。たった今、吉崎と叶親、嶋鳥の三人からメールが来た」

「内容は？」

「『言われた分の買い物は完了して、今しがた帰宅の途中』的な内容の文だよ」

「そっか。んじや、こっちも少し急ぐか」

今回は俺達だけじゃなくて、全員揃って買い出しに出かけている。途中でやって来た小栗さんと叶親さん、兵庫さんと吉崎さん、それに嶋鳥さんと植村さんに俺達の班に分かれて、それぞれ別の店に買い出しに行っている。

買い物は本当に多くて、こうして手分けした方が手っ取り早いと判断したのだ。

「午前の特訓は無しって言っても、こうして重い荷物を持って炎天下の中を歩いていれば、それだけで結構なトレーニングにはなりそうだな……」

「効率はあまりよくないけどな」

「その通り。ほら、ドリンク」

「あ、どうもっす」

汗が額から滴り落ちそうになっていた時に、鷹橋さんからスポドリのペットボトルを貰った。

丁度、喉が渴き始めた頃だったから、凄く助かる。

「こんな時は、喉が渴いてからじゃ遅いからな。前もってちゃんと水分補給をしておかないとダメだぞ」

「了解です」

俺は真正面を向きながら返事をした。

決して、汗で塩田さんと鷹橋さんの服が透けて、ほんの少しだけブラが見えそうになってるとか、そんなんじゃないからな。

………鷹橋さん、思ったよりも清楚な色を身に付けてるんだな。

「い……夏？」

「え？」

俺が自分の心をなんとか制御しようとして集中していると、目の前から聞き覚えのある声が聞こえてきた。

思わず顔を上げると、そこには赤い長髪がよく知った顔が。

「だ…弾？　なんで幕張に？」

「それはこっちのセリフだってーの。っーか……」

弾の視線が俺の両隣りに向けられる。

なんか嫌な予感が……。

「ん？ 織斑、このロン毛野郎はお前の知り合いか？」

「えつと……中学の時の親友で……」

俺が弾の事を紹介しようとした矢先、声が急に遮られた。

「一 夏 テ

メエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエツ！！！！」

「うをつ!!? いきなりなんだよつ!!?」

「弥生ちゃんと言う子がありながら、金髪碧眼に巨乳眼鏡つ子と言う二大巨頭な美少女を侍らせやがつてえええええええええええええええええつ！！！！」

「お前は何を言ってるんだっ!?!」

確かに、塩田さんも鷹橋さんも美少女である事は認めるけど、血涙を流しながら叫ぶような事かっ!?!

ほらく、二人もどうリアクションしていいか困ってるし〜!

「なんとも賑やかな奴だな」

「高一の男子なんて、こんなもんじゃやない?」

大人! 鷹橋さんの大人の発言きましたよ!?!

「つたく……どうして毎回毎回お前ばかり………んん?」

「んあ?」

きゅ……急に弾が塩田さんの事を見て固まったんだけど………?

さつきとは打って変わって、急速に顔が青褪めていき、まるで腰が抜けたかのように地面に尻餅をついてしまった。

アスファルト……熱くないのか?

「こ……この金髪美少女は……間違いない……『鉄人』だ………!」

「は?」

鉄人? いきなり何言ってるんだ?

「いや、鉄人って。この子の名前は『塩田鉄人』って言うんだぞ?」

「殺される………。コンクリート詰めにして海に沈められる………」

「人の話ぐらいちゃんと聞けよ」

何をそんなに怯えてるんだよ? 本気で意味不明だぞ?

「あ……彼は塩田の『あの話』を知っているのか?」

「あの話？」

何の話だよ？

「お前、マジで知らないのかっ!? 鉄人が起こした大虐殺を！」

「大虐殺〜？」

「そうだ！ お前の隣にいる、その女の子はな……」

おい。なに急に語りだしてるんだよ。

あ、ここから回想シーンに入りますよ。

・  
・  
・  
・  
・  
・

それは、今から約一年前。

高校受験を控えた塩田は、夜の自室にて静かに受験勉強に明け暮れていた。

この塩田と言う少女、実は近年稀に見る勉強大好きっ子で、三度の飯よりも机に座って勉強をしている方が好きと言う徹底っぷり。

そんな塩田にとって、勉強に集中出来る『夜』と言う時間帯は、数少ない至福の時間帯だった。

だが、そんな彼女の幸せな時間をぶち壊す存在がやってきた。

「……………この五月蠅い音は……」

複数のバイクのエンジン音に、大勢の男達の叫び声。

おまけに、何か固い鉄製の棒状の物を柱的な物にぶつけるような音。

完全に近所迷惑な騒音に、塩田の集中は完全に途切れ、同時に一瞬で怒りゲージがMAXになった。

「あのクソどもがああ……………」

歯を食いしばり、米神に血管を浮き上がらせた塩田は、怒りに身を



任せて部屋の窓から道路へと飛び降り、騒音の原因である暴走族に向かって堂々と立ち向かった。

「お？ なんだあのメスガキは……」

暴走族のリーダーと思わしき男の声が最後まで聞こえる事はなかった。

何故なら、全部言い終わる前に、塩田が全力ダツシユで現在進行形で走行中の暴走族のバイクの群れに突っ込んで行き、そのまま一番前にいた男に対して飛び蹴りをかましたから。

この時の塩田の恰好は、薄手のネグリジェに『鉄人』と書かれた茶色い羽織、そして眼鏡を掛けて、髪型は二つに分けた三つ編み。

こんな格好で蹴りなんてすれば、間違いなく下着が丸見えになるのだが、この時の塩田はそんな事はお構いなしに暴れまくっていた。

因みに、この時の塩田のパンツの色は黒だったりする。

「うっさいんだよ!! このクソボケどもが!!」

まずは一人を倒し、次の標的を瞬時に見定める。

「お前達のせいだな!!」

パニックになって慌てている連中を余所に、塩田は近くにいた男に向かって腹パンをしてぶっ飛ばす。

「ちつとも受験勉強が……」

何かを溜めるように、拳を腰に当てて構える。

この時の塩田の拳は、何故か眩しく光を放っていた。

「抄らねえじゃねえかあああああああああああああああつ!!!!」

たった一発のパンチの筈なのに、その一撃で残りの暴走族全員が派手に吹き飛ばされた。

「全員正座!!!」

気絶をしている連中を無理矢理起こし、揃って地面に正座させた。固いコンクリートの上での正座は、さぞかし足が痛いだろうに。

「つたく……君達はね……いくら阿呆でやる事が何も無いからと言って、こんな真夜中に二輪を転がすのだけは止めなさい。冗談抜きで五月蠅いから」

なにやら女口調になっている塩田だが、この口調になっている時の彼女は本気で怒っている証拠なので、安易に話しかけたりしてはいけない。

遠くからそっと見守るのが吉である。

「せめて、分数の掛け算が出来るようになってからしなさいよね」  
「分数って……」

どうして分数の掛け算が基準になっているかは不明だが、彼女の中で何かがあるんだろう。

「大体ね、メットも被らないでバイクを走らせて、もしも転倒とかしたらどうなるか、アンタ達はちゃんと分かってんの？」

至極まっとうな正論だが、それを暴走族をたった一人でボコボコにした彼女が言っても説得力に欠ける。

「ハイ！　そこにいる、最近の流行に乗っちゃって友達とかに『ひよっこりはん』のギャグをしてそうな顔をしてる君！　答えて!!」

「お…俺？」

いきなりのご指名に戸惑う暴走族の男。

やった事はかなり暴力的だが、見た目は間違いなく美少女なので、近くに來られてちよつと顔を赤くして緊張している様子。

「お…大怪我をします」

「全っ然違う!!」

そう言うと、いきなり塩田は答えた男の襟首を持って、無理矢理に立ち上がらせてかくらくのく……

「こうよ!!」

まさかの延髄蹴り!!

後に、蹴られた奴の後ろにいた男はこう語っている。

『真っ黒でした。ありがとうございます』と。

「転ブー！　ソシテ死ヌ！　ワカタ社長サン!!」

(どうして日本語が片言なんだろう……)

下手に突っ込むと確実に殺されるので、心の中でそつと呟いたりーダーだった。

「はあ……そもそも、アンタ達はこれからどうする気よっ」

「へッ……。俺達は今がよければそれで充分なんだよ」  
「フフフ……」

なんとも馬鹿な発言に、思わず塩田は微笑を浮かべる。

『今がよければそれで充分』……ねえ……。もしも本当にそうならば……」

次の瞬間、塩田は怒りの表情で思い切り叫んだ！

「もし仮に『世○ふし○発見』が終了したら、野々○真はどうするの!!!」  
「!!!」  
「!!!」

いきなりの意味不明な発言に、何故か暴走族たちは一斉に戦慄する。

「どうやら、やっと理解出来てきたようね……。さあ……。どんどんいくわよ?」

怪しく笑みを浮かべ、更に追い打ちをかける。

「もしも、世のお笑いブームが完全に終了したら、今頑張っている若手お笑い芸人達はどうするの!!」

「やめてくれ!!」

「聞きたくない!!」

男達の断末魔が木霊するが、それでも塩田は止まらない。

「もしも、た○し軍団が解散でもしたら、ラッ○ヤー○前さんはどうするのよ!!」

「そんな事は考えたくない!!」

ここで、塩田はとっておきのダメ押しをする事に。

「もしも!! ダ○ン○ウンの松ちゃん引退したら、月亭○正はどうするの!!!」

しかし、塩田の予想とは裏腹に、場はいきなりシ〜ンと静まり返った。

「誰? 月○方正って」

「さあ……。知らね」

「何よアンタ達、○亭方正の事も知らないワケ?」

呆れた塩田は、ここでの馬鹿な連中に手を差し伸べる事に。

「それでは、ここにいるおバカさん達が思い出すように、今から私が月

○方正はまだ山○方正だった頃にやっていたネタの『ま〜』をやりたいと思いま〜す」

この時、誰もが後に起こる展開を予想出来た。

「ま〜」

蟹股になつて、両手を大きく広げる。

場の空気が一気に凍りつき、全員が文字通りドン引きした。

「「「「.....」」」」

誰も何も言わない。

あまりの居た堪れなさに、塩田は徐々にその顔に冷や汗を掻き始め、顔も歪んでいく。

最終的に、痺れを切らしたのは塩田の方だった。

「し〜ず〜ま〜る〜な〜!!!」  
四神流符術秘奥義『鳳翼熾天翔』  
!!!!!!

「ギャ~~~~!!!」

「助けてくれ~~~~!!」

「こいつはおかしい~~~~!!」

己の周囲に真っ赤な気の空間を作り出し、燃える羽のような物体を伴いながら、色んな意味で満身創痍だった暴走族たちにトドメを刺した。

.....  
.....  
.....

「こうして、その暴走族グループ『烈火』は、『鉄人』と文字が入った羽織を纏ったたった一人の金髪美少女によって完全壊滅したと言う話だ」

あのままでは流石に暑かったので、近くにあった日陰になっている

ベンチに座ってから、チビチビと冷たいドリンクを飲みながら弾の話  
を聞いていた。

「そ…それ程までに塩田さんは強いって事か？」

「そうだ！ 確かに見た目は超絶可愛い美少女かもしれないが、中身  
は封印を解き放たれたゴジラだぞ!!」

「人を勝手に怪獣扱いすんなってーの」

「いで!？」

いつの間にかガリガリ君クリームシチュー味を食べている塩田さ  
んに軽くと突かれた弾。

余計な事を言うからこうなるんだよ。

「でもまあ、確かにそんな事があったのは事実だな。あん時の俺はマ  
ジ切れしてたから、記憶は曖昧になってるけど」

「塩田は怒ると何をするか分からないからねえ」

鷹橋さん、笑いながら言ってますけど、割と洒落になってないです  
よ？

「その後、その暴走族はどうなったんだ？」

「噂では、全員揃って仲良く病院送りになったらしい」

「マジか……」

「その内の何人かは、PTSDになったって聞いた」

「もう普通にヤバイじゃねえか」

PTSDって、よくは知らないけど、精神疾患の一種だよな？

「あれって、塩田の正当防衛が成立して、御咎め無しだったんだよな  
？」

「うん。確かに『家』の力が働いてると思うけど」

もしかして、塩田さんの家も弥生と同じで超大金持ちだったり……  
？

「なんで……なんでこんな可愛い子が鉄人なんだよ……。黙っていれ  
ば、清楚なイメージの可愛い美少女なのに……。はあ……。可愛いのに  
……」

「可愛い可愛い連呼すんな」

なんて言いつつも、顔が真っ赤になってますよ、塩田さん。

「で？ さつきは聞きそびれたけど、どうして弾はここにいるんだ？」

「今日、幕張メッセでA課長の公開収録があったんだよ」

「A課長って、あの？」

「そう。あの課長だ」

俺も何回か見た事あったけど、公開収録なんてのがあったのか……。

「なんのゲーム？」

「スーパーマリオブラザーズ3。かなり苦戦してた」

「結果は？」

「最後の最後でなんとかクリア。ギリギリだったなあ」

だと思った。俺にもなんとなく予想は出来た。

「そう言う一夏は、どうして幕張にいるんだよ？ しかも、鉄人やこんな美人と一緒に」

「ん〜……ちよつとした自主的な合宿みたいな事をしてて、そんで、今日は食料品とかの買い出しをしてるんだ」

「自主的な合宿ってなんだよ……」

「そうとしか表現出来ないんだから、仕方ねえだろ」

実際、なんて言えばいいか分からないし。

「と……とにかく気を付けろよ？ 少しでも何かあれば、すぐに俺に連絡しろ？ な？」

「お……おう？」

弾の申し出は有難いけど、ちよつと大袈裟じゃないか？

「俺はもう行くけど、怪我とかしないように気を付けろよ」

「分かってるって」

「えつと……鷹橋さん……でしたっけ。一夏の事、よろしくお願いします」

「はい。お願いされました」

「オレにはお願いしないのかよ」

いやいや、俺は塩田さんを頼りにしてますよ？

教え方は上手だし、何気に真面目だし。

「んじやな」

「おう。またな」

去つていく弾の背中を見て、少しだけ遊びに対する欲求みたいのが生まれそうになった。

つて、ダメだダメだ！ 今回の特訓は何の為だ!? 弥生を守れる強さを身に付ける為じゃねえか！ ここで誘惑に負けてたら、強くなるなんて夢のまた夢だ！

「こっちも帰るか。他の連中もとつくに戻ってるだろうし」  
「そうですね」

いい休憩にもなったし、ここから少し歩くペースを上げるか。それから、俺達は早歩きでベーカリー鬼瓶に戻った。

案の定、皆は先に戻って来ていて、のんびりと涼んでいたけど。弾の話を聞いてから塩田さんを見る目が変わる…なんてことは無く、これまでと同じように接した。

だって、過去に何をしようとも、それが塩田さんの全てって訳じゃないし。

その代わり、午後からの特訓で死にそうな程に疲れたけどな。今日はぐっすりと眠れそうだ……。

酒は飲んでも飲まれるな

弥生が学園の友達と一緒に家の大掃除を終えた次の日。

賑やかな朝食を終えた後に、弥生は皆を門の前で見送っていた。

「結局、朝食まで御馳走になつてしまったな」

「何から何まで、本当に申し訳ありません……」

「気……にして……ませんよ……？ 皆……で食べ……るご飯……は楽しかつ

……たです……し……」

申し訳なさそうにしている筈と虚に対し、弥生は珍しく笑顔で応えた。

久し振りに、心から楽しいと思えたなによりの証拠だろう。

「やよつちの作つてくれたベーコンエッグ、とつても美味しかったよ  
♡」

「うむ。姫様の手に掛かれれば、シンプルな料理でさえも美味に変えて  
しまうんだな」

「あ……りがとう……」

料理を褒められた事なんて滅多に無いので、少しだけ照れくさそう  
にしている。

それを見て密かにセシリアが悶絶しているが、ここは敢えて無視。

「今度は、大掃除とか関係無しに遊びに来たいわね」

「そうだね。日がな一日を思いつきり遊びに費やすのも悪くないか  
も」

皆で一緒に笑いながら遊ぶ光景を思い浮かべ、弥生も思わず笑みを  
浮かべる。

「それじゃ、これ以上長居しちゃ悪いし、ここらで失礼するわね」

「今度は学園か、それとも普通に校外で会えるかしら？」

「私なら、いつでも弥生の元に駆け付けるよ」

「お前はいいから」

折角いい感じの別れになりそうだったのに、ロランの余計なひと言  
でぶち壊しになりそうだったので、急いでダリルが首元を掴んで引つ  
張っていった。



去り際にロランが引つ張られながら『愛してるよ〜弥生〜!』と言っていたが、当の弥生は完全にそれを右から左へと受け流した。

「あたし達も行きましようか?」

「ああ」

「弥生ちゃん。またねッス」

「姫様。それでは失礼いたします」

皆とそれぞれに言葉を交わし、去っていく。

あつという間に弥生は一人になってしまった。

「ふう……」

何とも言えない虚しさ。

まるで、体育祭や学園祭が終わった直後の心境によく似ている。

何も言わずに弥生が踵を返して家に戻ろうとした時、家の前に黒光りの一台の車が停車して、中から誰かが出てきた。

「弥生? こんな場所で一体どうしたんじゃ?」

「おじいちゃん……」

皆と入れ違うようにして、板垣総理が帰宅してきた。

車自体は総理の所有物では無い為、彼が降りた途端にどこかへと走り去っていった。

「……本当にどうかしたのか? なにやら寂しそうに見えるが……」

「うん……実……は……」

家に向かって歩きながら、弥生は昨日までの事を総理に話して聞かせた。

頷きながら真剣に、かつ笑顔を浮かべながら聞いている彼は、とても柔らかな雰囲気醸し出している。

「そうか……弥生の友達が家の掃除を手伝ってくれたか……」

「ん……」

「楽しかったか?」

「ん……♡」

「そうかそうか」

優しく弥生を頭を撫でて、照れくさそうに俯いている彼女を可愛がる。

その光景は、誰が見てもおかしくない、立派な家族の絵だった。

「あ……そう……だ……」

「ん？ 今度はどうした？」

「あの……ね……」

家のあがった直後に、昨日の電話の事を思い出し総理に話した。

「成る程……彼からそんな電話が……」

「うん……。折角……おじい……ちゃんが帰っ……てき……てくれた……のに……」

「なあに、気にする事は無いぞい。ワシももう暫くは家にいるつもりじゃからな」

「ほ……ホントっ!？」

「うむ。少し遅めの夏休みと言う奴じゃ」

総理大臣が夏休みとはこれいかに、と思うが、彼だつて人間なのだ。偶には纏まった休みが無いと、体よりも心の方が先に参ってしまった。

「じゃから、家の事はワシに任せて、気にせずに行つてきなさい」

「分かつ……た。ありが……とう……おじいちゃん……♡」

「ほっほっほっ。気にせんでいいぞ。なんせ、弥生のボーイフレンドの頼みじゃからな」

「ボっ……!？」

まさかの言葉に絶句する弥生。

言葉通りの意味ならば別に気にする必要は無いが、彼は間違いなく『ソツチ』の意味で言っている。

(ま……まさか……おじいちゃんとは私とアイツをくつつけようと……？ いやでも……おじいちゃんには悪いけど、私がアイツを異性として見る事はかなり難しいんだよな……)

当人達の思惑とは裏腹に、弥生本人の気持ちは冷めていた。

未だに、自分が異性とくつつくビジョンを想像出来ないでいる。

「準備が出来次第、出かけるんじゃないろう？」

「うん」

「そうか。お前なら大丈夫とは思うが、あまり千冬君に迷惑を掛けん

ようにな？　もしかしたら、将来的に弥生の義理の姉になるのかもし  
れんのじゃから」

「おじいちゃん〜……」

「はっはっはっ……」

顔を真つ赤にしながらリビングを離れ、自分の部屋などで準備を整  
えてから、家を後にした。

これを機に弥生が少しでも『彼』を意識する……かどうかは微妙  
なところだ。

・  
・  
・  
・  
・  
・

学園での仕事をある程度終わらせて、千冬は一人で久し振りに帰路  
についていた。

「この道を歩くのも久し振りだな……」

ここ暫くは非常に忙しく、家に帰る暇など微塵も無かった。

歩き慣れている道の筈なのに妙な懐かしさを覚えるのは、そのせい  
だろう。

「ん？」

段々と家に近づいていく内に、ちよつとした違和感を感じた。

「家に明かりがついている？　一夏は例の特訓とやらで千葉県に行っ  
ている筈。もしや、一時的に帰ってきたのか……？」

別にそこまで気にするような事は無い。

ちゃんと鍵は掛けているし、家にも特に盗まれるような代物は無い  
から。

疲れていたせいか、自分の中に生まれた違和感はすぐに払拭され、

気が付けば家の前まで来ていた。

「さて……風呂でも沸かした後には、ゆつくりと酒でも……」

などと言いながら玄関のドアを開けると、そこには彼女が予想すらもしなかった姿があった。

「あ……おかえ……りな……さい……」

「や……弥生っ!？」

千冬の事を出迎えたのは、エプロン姿の弥生だった。

・  
・  
・  
・  
・  
・

ふうく……間に合ってよかったよ。

ちやんと織斑先生を出迎える事が出来て、本当によかった。

「な……なんで弥生が私の家にいるんだ……?」

「実は……昨日……一夏……から電話……があつて……」

「アイツから電話?」

「はい……。自分……は今……遠く……にいて……すぐ……に帰れそう……にない……から……悪い……けど……適当……でいい……から……家の掃除……とか……をお願い……出来ない……か……つて……」

「あのバカは……」

ありやありや。織斑先生が頭を抱えちゃった。

「はあ……本当に濟まない。お前も色々やる事があるだろうに。面倒事を押し付けてしまつて……」

「気にし……てない……です……よ……?」

家事自体はそこまで嫌いじゃないし、他の家を合法的に掃除出来る機会って滅多に無いからね。

割と新鮮な体験が出来ました。

「ところで、鍵はどうした？　ちゃんと締めてあつた筈だが……」

「一夏……に合鍵……の場所……を教えて……貰いま……した……」

「そうか……。まあ……弥生なら問題無いか」

ちゃんと鍵は元の場所に締まつてあるから御安心を。

「ならば、ここの住所も一夏に教えて貰ったのか？」

「はい……」

流石に聞いただけじゃ分からなかったから、後でスマホのナビで調べたけどね。

「それよ……りも……お疲れ……でしょう……から……上が……て……さ……い……」

「あ……ああ。そうだな」

少しオドオドしながら先生は家に上がった。

ぶっっちゃけ、緊張してるのはこっちの方なだけだね。

そのままリビングに入ると、先生の目が急に見開かれた。

「おお……！　これが本当に我が家か……!?!」

床も壁も窓もピツカピカに磨きました。

大掃除の時に虚さんから沢山の掃除テクを吸収したお蔭だね。

勿論、廊下や台所のシンク、お風呂も綺麗にしておいた。

「一夏でもここまで綺麗には出来んぞ……」

お褒め頂き光栄の至り。

「まず……はお風呂……はいかがで……すか？」

「沸いているのか？」

「はい……。時間……を予想……して湯……を張り……ました……から……」

ま、適当だったけどね。

(なんて気遣いが出る子なんだ……！　一夏には絶対に勿体ない……！　私の本気で嫁にしたい……)

今度は体を震わせてる？

やっぱ、勝手に家を掃除されて怒ってるのかな？

「で……では、遠慮無く風呂に入らせて貰おうか……」

「どう……ぞ……(ゆっくり……)」

そう言うと、織斑先生はゆっくりと二階に上がっていった。恐らく、自分の部屋に着替えを取りに行ったんだろう。

ちやんと先生の部屋も片付けておいたよ？

勿論、机の上とかは全く触ってないけど。

床に散らばった服とかを畳んだりするだけでも相当に苦勞したなあ〜。

まさか、寮の部屋以上に散らかっているとは思わなかった。

・  
・  
・  
・  
・  
・

「あ…上がったぞ」

私が台所でおつまみを作っていると、織斑先生がお風呂から上がってきた。

髪は濡れて艶々になって、体は僅かに赤らんでほっこりとしている。

それはいい…いいんだけど…。

「ん？ どうかしたか？」

「いえ…」

タンクトップに半パンって、幾らなんでもラフすぎるだろっ!?

確かに自分の家かもだけど、私もいるんだし、もうちよつと普通の服でもよかつたんじゃない!?

(フッフ…自分で多少しやり過ぎだと思うが、これで弥生に少しでも大人の女の魅力を見せてやれば…)

うう〜…唯でさえこの人はスタイル抜群なのに、この恰好は破壊力抜群過ぎるよ〜!

「そう言えば、私の部屋も弥生が片付けたのか？」

「あ……ダメ…でした…か……?」

「い…いや、別にそうじゃないんだ。普通に気になっただけさ」

そ…そうなんだ、よかった……。

(ちゃんと服とかだけを片付けて、机の上には一切手が付けられていなかった。こんな気遣いも出来て…弥生、お前はどこまで私を骨抜きにする気だ?)

さて。なんか先生がこっちを見てるけど、気にせずにおつまみでも出しましょうかね。

「先生…はテーブル…に座っててください…い……」

「そ…そうだな。そうさせて貰おうか」

台所に戻って、お盆に瓶ビールとコップ、おつまみを乗せて先生の元まで行く。

「ど…うぞ」

「す…すまないな」

コップを持たせてから、私がビールを注いであげる。

今回は先生を労うのが目的だし、これぐらいはね?

「このつまみは弥生が作ってくれたのか?」

「はい。焼ねぎナムル…です」

短い時間で簡単にできる料理で、あと一品足りない時やお酒のおつまみにピッタリな一品だ。

家でもよくおじいちゃんに作ってあげている。

「では、いただきこうか…」

味はどうか…? ちゃんと出来てるよね?

「ん! これは美味しい!」

よ…よかった…。

「このねぎのシャキシャキ感がたまらん! しかも、ごま油がいい香りを引き出しているし、この鷹の爪の辛味がまた食欲をそそる! 更に……」

お、ここでビールをいけますか。

しかも、一気飲みしてるよ。

「ぷは〜! ビールとよく合う!! 弥生は本当に料理が上手なんだな

！」

「そ…それほどでも……」

少しだけ先生に付き合ってから、丁度おつまみが無くなる頃を見計らって台所に戻り、次のおつまみを作る事に。

きゅうりはへたを切ってから乱切りにして、クリームチーズを1cm角に切る…と。

んでもって、ボールに食べるラー油と醤油と白いりごまを入れて混ぜる。

お皿に盛りつけてから、最後に糸唐辛子をトッピングして完成！

5分ほどで出来上がったこれを、早速先生の元まで持っていくことに。

「次…も出来ま…した」

「もうか!?! 早いな……」

さつき作ったきゅうりとクリームチーズの簡単おつまみをテーブルの上に置く。

「これもまた美味そうだ……いただきます」

一応、ちゃんと味見はしたけど、お味はいかがかしらん……?

「うん! 予想通り、こいつも美味しい! きゅうりとチーズの組み合わせも存外バカにはできんな! しかも、このラー油がまたいい味を出している!」

またまたご好評なようになにより。

こつちも作った甲斐があったってもんですよ。

「こんなにも美味いつまみを作ってもらったら、嫌でも酒が進んでしまうな!」

「飲み過ぎ…はダメ…ですよ……?」

「分かっているさ。だが、今日ぐらいはいいだろう?」

「それは……」

疲れて帰ってきた人に対して、そこまで強く言えるような精神は持ち合わせておりません。

なにより、なんだかんだ言っ、この人には本当にお世話になつてから、こんな時ぐらいいは好きなようにさせてあげたい。



「次の…も作ります…ね…?」

「ああ！ じゃんじゃん持ってきて構わんぞ！」

酒が回ってきたのか、テンションが上がってるなく…。

念の為に、ここに来る前にスーパーとかで食料品を大量に購入してきて正解だった。

このままだと、湯水のように消費してしまいそうだ。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

それから、『枝豆のスパイシーエスニック炒め』や『春巻きの皮で包んだ納豆キムチーズの一口おつまみ』、それから『豚バラとトマト串』とかを出していった。

そして、『ごぼうの梅おかか和え』を出した頃には、完全に織斑先生は出来上がっていた。

「ん〜♡ これもまた美味しい!! 辛いのも好きだが、酸っぱ美味しいのも最高だ！」

もう既に瓶が3本も空いている…。

ゴメン…一夏。私にはこの人の酒を止める事は出来ないっポイ…。

「本当に…弥生はいい子だなあ〜…」

「ふえ？」

い…いきなりどうしたですか？

「弥生…」

「せ…先生…?」

うつとりとした目でこつちを見ないでよ〜!

同性とは言え、すっごくドキドキしちゃうんですよ〜!

「ここは学園じゃない。私の事は名前でも呼んでくれ」  
「でも……」

「いいから……呼んでくれ」

酔っているこの人に下手に逆らうのは避けた方がよさそうかも……。

べ…別に、年上の女の人を名前でも呼ぶくらい、どうってことない……よね？

「ち…千冬さん……？」

「ふふ……それでいい」

ほっ……。これで解放される……と思った私は、とつても甘々でした。

完全にこつちが油断した隙に、いきなり千冬さんに腕を掴まれて、ギョツと抱きしめられた。

「弥生は……いい匂いがするな……」

(く…苦しい……！ ギブギブ……！)

大きな胸に顔を押し付けられて、息が出来ないです……。

「弥生……私はもう……自分の気持ちを抑えられそうにない……」  
(だったら……まずは私の顔を抑えるのを止めてもらえませんかね……)

あ……冗談抜きで意識が朦朧としてきた。

ヤバイと思い始めた時、少しだけ腕の力が緩んだ瞬間に顔を上げて、思い切り息を吸った。

「ぶは〜……んんっ!？」

再び油断した。

顔を上げたら、そこに千冬さんの顔があって、抵抗する時間も与えないままキスされた。

「んん……♡」

「んうう……」

舌が……絡まって……なんだか気持ちが悪くなって……。

千冬さんの口に残ったアルコールが私の口に入ってきてるのかな……。

「んちゅ……♡」

「ちゅうう……」

あれ……なんで私も舌を動かして……？

「……………ここでは手狭だな」

「ふああい……う？」

私が本気で混乱していると、いきなり体を持ち上げて、どこかに移動を始めた。

酔っているとは思えない程に足取りはよくて、軽々と階段を上がっていく。

そのまま、どこかの部屋へと私を連れ込んだ。

(ここは……千冬さんの部屋……？)

変な冷静さを発揮して部屋を見渡す私を、千冬さんはベットに押し倒す。

声を出す事も無くベッドの上に横たわって、その上に覆いかぶさるように千冬さんも倒れ掛かってきた。

「あ……の……………」

「もう……我慢の限界だ」

「な……にな……………」

今度は首筋に舐めるように舌を這わせて、それが段々と下に向かっていく。

「心配するな……私も初めてだ」

「ち……ふゆ……さ……………」

私の言葉は最後まで紡がれなかった。

その日の夜は、私が経験した中でも一番長い夜になった。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「ん……んん……う？」

強烈な頭痛に苛まれながら、私は目が覚めた。

「痛っ……！」

二日酔いか……。昨日はかなり飲んだからな……。

なんせ、途中から記憶が完全に飛んでるぐらいだし。

「昨日は確か……家に帰ってきたら弥生が出迎えてくれて……そして……」

昨夜の弥生との一時は最高だった……♡

あいつが作ってくれた数多くのつまみを食べながら飲む酒は、今まで一番の美酒だったな……。

ふに。

「なんだ……う？」

手になにやら柔らかい感触が……？

「んん……むにゃむにゃ……」

「んなっ!？」

な……なんで私のベッドに弥生と一緒に寝ているっ!?

しかも……裸だとっ!?

って、よく見たら私も裸になっているしっ!?

「ま……まさか私は……弥生を……!？」

その瞬間、頭が真っ白になった。

## 一夏の特訓 その6

いつもはベーカリー鬼瓶の裏手にある道場や、今や完全に行きつけになっているトレーニンングジムで基礎体力の向上を図っているのだが、今回は少し趣旨が違った。

「はあく……これは気持ちがいいなあ……」

俺が今いる場所は、ジム内にあるプールの中。

なんでも、今回はここで体を動かすらしい。

「偶には、こうして体をクールダウンさせないと、長続きしないからな」

お？ 塩田さん達もやってきたようだ……？

「ん？ どうした？ オレの魅惑の水着姿に萌えたか？」

塩田さんが、まさかのジムに備え付けの競泳水着でご登場ですよ!?

これはちよつと予想外だった……。

彼女の事だから、てつきりかなり気合の入った水着で来るものかと。

「なんだ？ そんなに俺の体を見て、今夜のオカズにでもするつもりか？」

「しねえよ!!」

お：女の子がいきなりなんちゅーことを言ってるんだ!!

少しは慎みつけてヤツを持ってよ!

「なんだ。これじゃあオレの立てた作戦『織斑がオレの水着姿に興奮してエロい顔を晒している姿をスマホで撮影した後に、自宅にあるパソコンに転送、家族総出で織斑の恥ずかしいポスターを作成して町中に張り出すぞ大作戦』が御釈迦になっちゃったじゃねえか」

「うおおおおおおつ!! マジで危なかった——!! つー

か、アンタはなんつー事を思い付くんだ!! と言うか、やろうとしてる事がバレバレになってるし!!」

はあ……はあ……はあ……

思わず連続でツッコんでしまった。

「お前は何を企んでるんだよ……」

呆れ顔をしながら、他の皆もやって来た。

「お……おおく……」

叶親さんは薄いレモンイエローのホルター・ビキニで、鍛えられたスリムな肉体美が綺麗に表現されていた。

吉崎さんは赤い三角ビキニで、トップの布地にはハイビスカスが描かれていて、普段は大人っぽい彼女の可愛らしさが見え隠れしている。

嶋鳥さんは薄いグリーンのタンキニ。美人と言うよりは可愛らしいと言った感じで、ちよつとだけ幼く見えてしまったのは内緒。

鷹橋さんが凄くて、着ているのは真っ白な紐ビキニなんだけど、そのスタイルが凄まじかった。マジで、大学生やOLとかって言われても違和感が無い。

植村さんは、その背の高さに反して、大人しめの水色のオフショルダー。でも、彼女も鷹橋さんに負けないぐらいにスタイルが抜群なので、逆に魅力が増している。

「おい……織斑」

「な……なんでしようか……?」

なんか塩田さんがこつちをジト目で見ていらつしやる……。

「オレの時はそんなに凝視しなかったくせに、なんで叶親達の時はジツと見てやがんだ!! このエロ斑助兵衛!!」

「俺の名残が『斑』しかない!!」

人を勝手にスケベ認定しないでくれ!!

それと、せめて名前の方も加工してくれよ!!

「どうした織斑。もしかして勃つたのか?」

「素の表情でとんでもない事を言っただけですけど?」

前々から思ってたけど、吉崎さんって言葉の一つ一つがアダルトすぎないかっ!?

本当に高校二年生なのかっ!?

「ま、冗談はこの辺にして」

その冗談で、俺の精神は疲れまくったんですけど……。

「今日はプールで特訓……と言っても、実際には塩田も言ったとは思

うけど、ちよつとした体のクールダウンが目的だ」

「らしいですね」

実際問題、こうしてプールに入れるのは本当に有難い。

臨海学校で海に行つたとは言え、プールにはプールの良さがあるしな。

「でも、水中で体を動かすのは割といいトレーニングだったりするんだぞ?」

「具体的にはどう良かったりするんだ? 鷹橋」

「ほら、水中って水の抵抗力が働くから、体が嫌でも鈍くなるだろ?」

そんな中で腕や足を動かすって事は、体に重りをつけている事と同義なんだよ。実際にとあるプロ野球選手は、小学生の時から風呂に入る時に湯の中で足を動かす訓練をずっと繰り返していたらしいぞ」

そうだったのか……。

ぶつちやけ、俺は泳ぐ事しか考えてなかった。

「別に泳ぐのも悪くは無いけど、潜水をしてから泳いだりしてもいいかもな」

潜水……ね。

やろうと思えば出来るけど、そんなに息が続くかな?

「折角のプールなんだし、私達も遊んでいいんだろ?」

「遊ぶって……ハッキリと言うなあ……鳴鳥は」

「え? 今日は遊びに来たんじゃないの?」

「植村もか……」

鳴鳥さんと植村さんは羽目を外す気満々だったのかよ。

気持ち分かるけど、それを目の前で言われると反応に困る。

「鷹橋さん。プールで体を動かすって、さっき言ってたみたいに水泳だけなんですか?」

「うくん……叶親にそう言われると、何かしなくちゃって気になるなあ〜」

い……いや、何も無理に何かを思い付かなくてもいいですよ?」

「そうだ! 水球とかってどうかな?」

「水球? 水球って、あのハンドボールのプール版的なヤツか?」

「その通り！ あれならいい運動になるんじゃないかな？」  
水球ね……。

悪くはなさそうに聞こえるけど、それをやるには問題が一つあるんだよな。

「え〜？ 私、水球のルールとか全然知らないんですけど〜！」

嶋鳥さんが俺のセリフを取ってしまったが、つまりはそう言う事だ。

水球なんてマイナーなスポーツのルールを全く把握していない。

これでは水球をしたくても出来ない。

「いや、そこら辺は気にしなくてもいいんじゃないか？ これは公式な試合とかじゃなくて、あくまでトレーニングの一環だし。それに……」

あ、鷹橋さんの眼鏡が怪しく光った。

これはよくない事の前兆だと、これまでの事で学んだ。

「単純にボールを投げようにも、足腰の力や大地の反発力が使用出来ない分、純粹な『背筋力』だけでボールを投擲しなければいけない運動が、ウエストを引き締めて体がスリムになるかもしれないし、それが最終的にバストアップに直結する可能性も……」

「やろうぜ皆!!」

「急にやる気100%?!」

いきなり塩田さんと嶋鳥さんがプールにダイブ!!

しかも、その際に叶親さんと吉崎さんの体を掴んでたから、必然的に二人も巻き添えに。

「ぬあああああああああああつ?!」

「いきなりなにをするだあああああつ!! ゆるさ……ぶぼおつ!」

吉崎さんが溺れたあああああつ!?

けど、速攻で浮かび上がってきた。

「ほい、ボール」

「サンキュー!!」

鷹橋さんも二人を焚き付けんなよ!

「私も混ぜる〜♡」



「これ以上カオスになるから止めてください!!」

俺と叶親さんと吉崎さんが同時に叫ぶも、全く聞く耳を満たずに植村さんも飛び込んできた。

「おらあつ!! いくぞ織斑ああああああつ!!!」

「超剛速球っ!?!」

明らかに本気で投げてるだろおおおおおつ!?!

あんなボール取れるかあああああああつ!!

「はいキャッチ」

「なんですとおおおおつ!?!」

なんか涼しい顔をして植村さんが、あの超剛速球を掴んだんですけどっ!?!

この人も塩田さんに負けず劣らずの規格外かよっ!?!

「次はこっちからいくよ〜! とりやあ〜!」

なんか可愛らしく言ってるけど、投げつけられたボールは殺人的な速度で飛んで行ってるし!!

あんなの取れる奴がいるわけが……。

「こうなったら意地だつ!! ふんっ!!」

はい。いましたね。

叶親さんも全く動じずにボールをキャッチしましたよ。

忘れてました。この子達全員がチート級の身体能力の持ち主だったことを。

「負けるかああああああつ!! 特に吉崎にだけには!!」

「それはこっちのセリフだ!! 人を勝手に巻き込みやがって!! この貧乳チビが!!」

「よおおおおし……それは『私を殺してください』と意識してもいいんだな?」

巻き込まれちゃ堪らないので、俺はそつと端の方に避難。

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラアツ!!」

「無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄アツ!!」

「ドラララララララララララララララアツ!!」

「アリアリアリアリアリアリアリアアツ!!」

「ボラボラボラボラボラボラボラボラボラアッ!!」

気が付けば、少林水球ならぬジョジョ水球になっていた。

やってる事は、ラッシュのセリフを叫びながらの投擲だけ。

「もう完全に俺は蚊帳の外じゃねえか……」

でも、下手に介入すれば間違いなくあの世行きは確定だしな……。

「ははははははっ！ やっぱり、美少女達が動き回る姿を見るのは最高だな！」

さつきから静かだと思ってたなら、いつの間にか鷹橋さんがデツキチエアに横になりながらジュースを飲んでるし。

この人だけ優雅にしちやってるな！

「どうするんですか……アレ」

「なあに。暫く放置しておけば、疲れた頃に自然と止めるさ」

「なんて適当な……」

それでいいのか……この人達は。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

いきなりの水球(?)が始まってから、かれこれ小一時間が経過した。

「ゼクハク……ゼクハク……そろそろ降参しろよな……」

「それはこっちのセリフだ……」

幾ら水球に詳しくない俺でも分かる。

これもう……水球じゃなくね？ 完全にドツヂボールになってね？

「もうそろそろ終わるかな？」

「完全に他人事ツスね……鷹橋さん」

「あまり褒めるな。流石に照れる」

「褒めてません!!」

俺もプールから上がって、鷹橋さんの隣に座って少しずつ沈静化しつつある皆を見ていた。

その時だった。更衣室から見知らぬ男の人がやって来た。

「お〜！ 相変わらず元気だなあ〜！」

「しまった……。今日は兵庫や小栗君の代わりに矢禿さんが来てくれる予定だったのをすっかり忘れてた」

「おいしいiiiiiiiiiiiiっ!?!」

それって何気に酷くないですかっ!?

このアフロヘアが圧倒的な存在感を醸し出すこの人は『矢禿康介』さんと言うらしく、彼もまた吉六会のメンバーで、なんとナンバー2の地位にいるとの事。

って事は、間違いなく総理レベルの実力者ってことだよな……。

「いや〜、本当にゴメン。本来ならもっと早くに来るつもりだったんだけど、向こうの仕事が想像以上に忙しくてね、ここまで遅れちまった」

「大丈夫ですよ。小栗君達が色々お手伝ってくれましたし、割と順調に訓練は進んでますよ」

「そっか。それならよかった」

見た感じだと、とても人当たりが良さそうな人だな。

体もかなり鍛えてるっポイし。

「で、君が噂の織斑一夏君か」

「あ……はい！」

割と慣れたつもりではあったけど、やっぱり初対面の大人ってのは、それだけで緊張するもんだな……。

「成る程。良い目をしてるじゃないか」

「ど……どうも……」

「惚れた女の子の為に頑張るって姿勢は嫌いじゃないぜ？ 俺で良かったら幾らでも協力するよ」

「あ……ありがとうございます〜！」

これは強力な助っ人が味方に付いた……ってことでいいのか？

「なあ、鷹橋ちゃんよ」

「どうしました？」

「来週辺りって時間空いてるか？」

「来週ですか？」

来週？ 矢秃さん、鷹橋さんに何か用があるのか？

「空いてるって言えば空いてますね。基本的には彼の特訓を手伝う毎日ですから」

「そうか！ それはよかった！」

「で？ 一体どうしたんですか？」

「実はさ……来週になって急にメンバーが足りなくなっただ」

「ああ……そーゆー事ですか。納得です」

は？ え？ 何が納得なんだ？

「勿論、あそこでバーサーカー化している五人も一緒に……ですよね？」

「そうしてくれると、こつちも助かる」

「ついでだし、織斑も一緒に来させましようか？」

「おお！ それはいい！ あそこで一日頑張るだけでも、かなり鍛えられると思うしな！」

あそこ？ 頑張る？ 何を？

「あの……さつきから全く話が見えないんですけど……」  
「あ」

おいこら。俺の存在をまるっと無視してやがったな。

「あ……織斑君」

「はい？」

「ちよつとだけ……バイトしてみないか？」  
「……………はっ」

『バイト』と言う単語に猛烈に嫌な予感がした俺だが、ここで断るよ  
うな勇気はまだ無かった。

俺は来週……どうなるんだろうか……？

やっちまった!!

「……これは一体どういうことだ……?」

私自身、全く状況が飲み込めていないが、取り敢えずこれだけは言える。

「私は……もしま、とんでもない事をしてしまったのでは……!」

私と弥生が一緒のベッドに入り、一糸纏わぬ姿になっている。

あの鈍感神と揶揄されている一夏ですら、この状況を目撃すれば、一発でナニがあつたのか容易に想像してしまうだろう。

「何が……何があつたんだ……! 思い出せ私……!」

くっ……! 思い出そうとすると頭が痛む……!

これがもしもファンタジー小説などであれば、記憶を封印されたとか真つ当な言い訳が出来るが、これは間違いなく、そんな御大層なモノじゃないと断言できる。

「二日酔いか……! しかも、いつも以上に頭が痛む……! どうやら、昨晩はかなりの量を飲んでしまったようだ……!」

弥生が作ってくれたツمامミが本当に美味しくて、思わずガンガン酒が進んでしまったのだけはよく覚えているが……。

「完全に途中からの記憶が無い……!」

いや待て……ここは冷静になって考えろ織斑千冬。

幾ら一緒のベットに裸で入っているからと言って、それがそのままアレに直結するとは限らないじゃないか。

「そうだ……そうに決まっている。きつとそうだ!」

隣で寝ている弥生を起こさないように、静かに呟きながら自分に言い聞かせる。

「いかに酔っていたとは言え、教師としての本分を忘れるなど有り得な……!」

「ん……ん……?」

窓から差し込む陽光に網膜を刺激されたのか、弥生は目を強く瞑りながらモゾモゾと動く。

その時に思わず弥生の裸体を見てしまった。

「ゴ……ゴクリ……」

以前に佐藤先生に教えて貰った通り、その小さな体には無数の痛々しい傷跡があった。

情報として知っていても、実際に目にするのとは衝撃の度合いが違う。

「弥生……」

そつと彼女の頭を撫でる。

静かな寝息を立てている弥生の寝顔を見て、自分の心の中に確かな想いが生まれるのを感じた。

弥生が愛おしい。弥生が可愛らしい。弥生の傍にいたい。弥生の事を守ってあげたい。

「もしかしたら……これが私の初恋なのかもしれないな……」

よりにもよって、初めて恋心を抱いたのが同性の教え子だとは……。

普通に考えたら絶対にあってはいけない事だろうな。

「む……う？」

こ……この角度からだ、弥生の胸がよく見える……。

普段から服の上からでも分かるぐらいに大きいとは思っていたが、一度服を脱げば更に大きく感じる。

もしや、弥生は着痩せするタイプなのか？

（くう……！ こんなエロい体を前にして、私は本当にナニをしたって言うんだ!! どんな些細な事でもいいから、思い出せ私の脳みそ野郎!!）

私の体も十分にエロいだと？

自分の体に欲情する馬鹿がどこにいる？

「ん……？ 朝……？」

「あ……」

お……起こしてしまったか？

目を擦りながら、弥生がゆっくりと半身を起す。

「ち……ふゆ……さん……？」

「お……おはよう……弥生……」

き…気まずい……。

こんなにも気まずい朝は初めてだ……。

「あ……！」

自分の姿に気が付いたのか、弥生が慌ててシートで体を隠した。

恥ずかしそうにしながら体を隠す弥生も可愛い!!

「そ…その……だな……昨夜のこと……なんだが……」

「昨夜……」

「あ…あ……。私はその……お前に……」

こつちが全てを言い終わる前に、弥生の顔が急沸騰した。

「ち…千冬さ…ん……」

「な…なんだ？」

「……激しかつ…た……で…すね……」

「激しかったっ!？」

ナニがっ!? 私のナニが激しかったって言うんだっ!?

「わ…たし……は別……に気に……したり……とか……はしてませ…ん……から……」

……

お前が気にしなくても、こつちが気にするんだ!!

や…やはり私は弥生の事をく……!

「その……私……も気持ち……よか……った……で…すし……」

私を安心させる為だろうか。

はにかみながら視線を逸らす弥生を見て、初めて『萌え』と言う感

情を知った気がした。

(これが『萌え』か……)

悶絶したくなる程に弥生が可愛い。

いや……もうやることをやってしまったのであれば、この場で抱き

しめても問題無いのでは？

ふと、私の脳裏で悪魔がそう囁いた気がした。

「え…つと……朝御飯……を作……て……ます……ね……」

床に散乱している自分の服を手にとって、弥生はそそくさと部屋か

ら出て行った。

「まるで……新婚初夜みたいだな」

自分で自分の言った事に密かに感動してしまった自分を鑑みて、地味に落ち込んでしまったのは内緒だ。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

あく……さつきは驚いたなく。

さつきもだけど、一番驚いたのは昨夜の出来事だった。

完全に酔っぱらった千冬さんが、私の事を抱き上げて、いきなり自分の部屋のベッドにシュートインしたからね。

あの様子を見る限りでは、昨日の事は何にも覚えていないみたいだけども。

リビングに移動して、自分の服を着ながら昨日の事を思い出す。

(私……またキス……しちやった……)

前回の束さんに引き続き、今回で二回目のキス。

今度もまた年上の大人女性で、しかも自分のクラスの担任教師でクラスメイトの姉だ。

(でも……どうしてだろう……。全然嫌な感じじゃなかった。無理矢理キスされたに等しいのに、嫌悪感とか怒りとか、全く無かったし……)

なんて言えばいいのかな……。

まるで家族に包まれているような安心感があったって言うか……。とにかく、あの時の私に拒絶するって選択肢が無かったのだけは事実だ。

それ以前に、千冬さんの腕力が強すぎて抜け出せなかったんだだけども。



(ほんと……なんで『あんな事』になっちゃったんだろう……)  
あ、ここから回想シーン入るから。

・  
・  
・  
・  
・  
・

それは、私が千冬さんの手によってベッドに放り込まれた時の事だった。

「あ……あの……その……」

「もう……辛抱たまらん!!」

いきなり叫ぶと、その腕力と巧みなテクニックにて、ポポポポ〜ンと私の着ている服を全部脱がせて、床に放り投げてしまった。

「きやああああああああああああつ!?!」

「ならば、私も……クロスアウト!!」

こつちが悲鳴を上げている間に千冬さんも素早く服を脱ぎ去り、私と同じ裸状態に。

(うわ……うわ……! こんな時にアホな事だと思うけど、千冬さんの体って綺麗だな……)

窓から入る月明かりに照らされて、千冬さんの裸体がよく見える。私みたいな傷だらけの体とは大違いの、本当に美しい体をしていました。

(束さんの体も綺麗だったし……私の周りの女の子ってこんなんばかりだ……)

増々自分が惨めに思えてしまうが、今はそんな事を行っている場合じゃない。

だって、この完全に泥酔した担任教師に、私は貞操を奪われる危機

的状况なんだから。

「弥生……私はお前を……」

「千冬……さん……」

再びのキス。

またもや舌が入ってきて、私の口の中を蹂躪していく。

「んちゅ……れろ……」

「ふふあ……」

二人の間に輝く細い橋が形成されて、すぐに切れる。

そして、三度のキスになり、今度はより深くまで舌が侵入してくる。

「んん……んん……んぐっ……!?!」

千冬さんの唾……飲んじやった……。

いきなりの事に動揺していると、千冬さんの口が私の口から離れていき、首筋を舐め始めた。

「んあああ……♡」

舌は段々と下がっていき、鎖骨の辺りまできた。

更に、千冬さんの手はしれつと私の胸に当てられていた。

「これが弥生の味か……。これも美味しいな……。♡」

まるで傷跡を一つ一つ舐めて癒すように、丁寧かつイヤらしい舌使いで私の体が侵略されていく。

「弥生……は……私……の……」

と、ここまでしておきながら、千冬さんはまるで電池が切れてしまったかのようにバタンと倒れてしまった。

「ち……千冬……さん……?」

「グ……グ……」

肩をポンポンと叩いても、一向に起きる気配が無い。

相当に酔っていたし、完全に熟睡しているみたいだ。

「どうしよう……」

取り敢えず、このままだと動けそうにないし……。

「う……ぐぐぐ……!」

床に落ちた自分のスマホになんとか手を伸ばし、メールでおじいちゃんに今日はこつちに泊まる事になりそうな旨を伝えた。

「ふう……これ……で……」

一応は安心……じゃないから!!

泊まること自体は別にいいとして、このままの状態は拙すぎるで  
しょ!!

「弥生……♡ むにやむにや……」

千冬さくん! その手を離してえく!

このままじゃ服も碌に着れないんですけどおく!!

「う……」

さっきのキスでアルコールが口移しの形で私の口にも入ってき  
ちやつたのか……?

なんかこつちも急に眠たくなってきて……。

(着替え……なくちや……)

自分の意思とは裏腹に、瞼は重くなる一方。

眠気が段々と私を支配していき、気が付いた時には私も眠りにつく  
体勢に入っていて、千冬さんの体に抱き着くようにして夢の中へと  
入っていた。

・  
・  
・  
・  
・  
・

結果的に何も起きなかったとはいえ、その直前までいった上に、二  
人で一緒に裸で一つのベッドに入って寝たのは紛れもない事実。

これは明らかに教師と生徒の関係じゃない。

まるでこれじゃあ……。

(恋人同士みたいじゃないか……)

って! 私こそ何を考えてるんだよ!!

仮にも担任教師と教え子の関係だぞ!?

それがなんで一気に飛び越えて恋人とかに発展するんだよっ!?  
常識的に考えても有り得ないでしょうが!!

「はあく……」

ダメだダメだ。

こうしてジツとしてると、それだけで変な事ばかり考えてしまう。  
こんな時は体を動かすに限る!

と言う訳で、さっさと朝ごはんを作ってしまったおう!

ここはスタンダードに、トーストに目玉焼きにモーニングコーヒー  
とかでいいかな?

どうやら千冬さんは二日酔いっぽいし、あまり重いのは入らないだ  
ろう。

「早く……つく……ります……か……」

時計を見たら、もう7時30分を回っていた。

千冬さんもきつとお腹を空かせているだろうし、急がないとね!

あれ……?　なんかこれって、まるで新妻みたいな思考じゃね?

……

……

……

……

……

自分の部屋で暫く自己嫌悪に陥っていた私は、このままでいても仕  
方がないと判断し、適当に服を着てリビングに降りていった。

すると、なにやらしい匂いと一緒何かを焼くような音が聞こえて  
きた。

「弥生が朝食を作っているのか……?」

邪魔をしないように、そっとキッチンを除くと、そこでは弥生がエ  
プロンをつけてから鼻歌を口ずさみながら、軽やかな手つきで包丁を

使って野菜を切っていた。

「あ……もう少し……で出来ま……すから……テーブル……で待って……てくれま……すか……？」

「あ……ああ……」

なんか……本当の夫婦みたいな会話だな。

何かを言えるような雰囲気でも無かったので、大人しくテーブルで待つことに。

「ちゃんと新聞も持ってきてある……」

弥生のしてくれる一つ一つが心にくるな……。

心がピヨンピヨンするとはこういう事か。

新聞を読みながら、のんびりと朝の時間を過ごしていると、キッチンの奥から弥生が朝食を持ってきた。

「お待た……せまし……た……」

朝のメニューはトーストにレタスが盛られたハムエッグ、それからコーヒーか。

丁度、今はパンとコーヒーの気分だったので、私は朝からいい気分になれた。

「ちゃんと弥生の分もあるんだろう？」

「はい」

なんだか申し訳ない事をしてしまったな。

本来ならば弥生は昨日の内に帰る予定だっただろうに、ここに泊まらせることになってしまった。

着替えとかもしていないだろうに、風呂にも入っていない筈だ。

「いただきます」

二人分の朝食が並べられたテーブルにて、向かい合うようにして私は食事を始める。

……なんて声を掛ければいいんだ……。

いや、まずは昨夜のことを真っ先に謝罪するべきだろう。

「その……弥生」

「はい……っ」

トーストにバターを塗ろうとしていた弥生が、その手を止めてから

こつちを見る。

うぐ……その小首を傾げて呆けた顔も可愛い……。

「昨夜は本当に済まなかった！ 幾ら酔っていたとは言え、私はお前にとんでもない事を……」

「さつき……も言いました……けど……別……に気に……してませ……んよ……っ？」

「しかし！」

「そ……れに……嫌……じゃ……なかった……で……すし……」

「なんだと……っ？」

嫌じゃなかった……だって……っ？

それはつまり、弥生が私の事を……っ？

(……もう限界だ。我慢はここまでにしよう)

今までは大人や教師としての体面を考える余り、ずっとこの気持ちを抑え込んできた。

しかし、もう止めに行こう。

これからは、自分の気持ちに素直になろう。

(悪いな……お前達。これからはもう遠慮はしない事にする。だから……覚悟しておけよ)

自分の気持ちを受け入れた途端、急に胸が軽くなった。

そこからは、弥生と何気ない事を話しながら朝食を楽しんだ。

簡単なメニューではあったが、本当に美味しかった。

・

・

・

・

・

朝食を食べ終えた後に、私は弥生と一緒に後片付けをした。

流石の私も、皿洗いぐらいは出来るんだぞ？

出来ないのは料理と掃除だけだ。

「これ…で最後……」

「分かった」

弥生に手渡された皿を、私が布巾で乾拭きし籠に並べる。

「終わった……」

「弥生」

「はい………っ!？」

不意を突いて、そつと弥生の唇に自分の唇を重ねる。

本当に一瞬の出来事だったが、今はそれで充分だった。

「ち…千冬…さん……？」

「昨夜は酔っていたが、これが今の私の偽らざる気持ちだ」

「え………っ……」

また弥生の顔が真っ赤になる。

どんな表情をしても、弥生は可愛いな。

「今はまだ返事をしなくてもいい。ただ、お前にそんな感情を抱いている女がいるって事を知っていてくれればな」

「は………いいいい……」

まるで頭から湯気が出そうな程に赤くなって、俯いてしまった。

「どうせなら風呂にでも入ってきたらどうだ？ 昨夜は入ってないんだらう？」

「どうだ？」

「それで…すけど……」

「昨日の残り湯がまだある筈だ。それに継ぎ足して沸かせば問題無いだらう」

「分かりま…した……」

小走りにキッチンを出て行く弥生を見ながら、これからの事に思いを馳せていた。

今日から真剣に同性婚の出来る国とかについて調べてみるか……。

出来れば弥生には大学とかも行って欲しいし、となると、婚約は矢張り二十歳辺りが妥当か……？

この日、弥生は昼までいてくれて、昼食も作ってくれた。

あの特製親子丼は実に美味かった……。

その帰りに、案の定と言うか、弥生はとある中華料理店に立ち寄って、毎度のように超大盛りメニューで今までの飢えを満たし、店の店員に悲鳴を上げさせたとか何とか。



## 一夏の特訓 その7 (バイト)

どうも、織斑一夏です。

今回、俺は割と本気の大ピンチに陥っています。

「織斑あつ！ 3番テーブルのお客さん、エビピラフとビーフカレー、それから牛カルビ丼だ！」

「了解です！」

「12番テーブルが追加でチョコレートパフェだよ！」

「わかりました！」

後から後からと、ひっきりなしに注文がやってくる。

冗談抜きでキリが無い。

これじゃあ、休みたくても休めないじゃないか！

前にも同じ事を言った気がするけど、もう一度だけ言わせてほしい。

……どうしてこうなった？

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

事の始まりは、この間のプールにおいて矢禿さんにバイトに誘われた事が切っ掛けだった。

『バイト』と言う単語を聞いて、最初はかなり甘く見ていた。

高校生にさせるバイトなんだから、それほどキツくは無いだろう……と。

だが、そんな甘々な幻想はバイト先に行った瞬間に粉々に打ち砕かれた。

「ここは？」

「ファミレス『HIROUSE』。吉六会が提携している店舗の一つさ」

「はあ……」

午前9時頃に、俺は塩田さん達と一緒に矢禿さんに連れられる形で、とあるファミレスの前まで来ていた。

見た目だけなら、どこにでもあるごく普通のファミレスなんだけど……。

「ここでバイトすんのも久し振りだなあ」

「そうなのか？」

「ま〜ね。小遣いがピンチになった時とかは、よくここでバイトをして臨時収入を得たりしてる」

「塩田ちゃん達には、本当に毎回毎回助けられてばかりだよな」

「気にしないでくださいよ、矢禿さん」

「私達だって、吉六会の皆にはいつもお世話になってるんですから」

「どうやら、彼女達と吉六会は、持ちつ持たれつの関係のようだ。」

互いに協力し合う仲つてのは、とても好感が持てるな。

「それじゃあ、裏のスタッフ専用の入り口から入るから。ついて来てくれ」

そう言われ、俺達は店の裏側まで行き、そこにあつたドアから直接スツタフルームへと入る事に。

「おお〜……」

ファミレスの裏側つて始めて見たな〜…。

一見すると、普通のロッカールームつて感じだけど、なんだか新鮮に映る。

「はい、織斑君はこれに着替えてくれ」

「え？」

矢禿さんに手渡されたのは、店員さん達が着ている制服じゃなくて、何故か白衣だった。

「君、料理が得意なんだつて？ 鷹橋ちゃんから聞いたよ」

そーゆーことか!!

でもまあ……ホールで接客をするよりかは、こっちの方が俺の性に合ってるとは言えるな。

「オレ達は向こうで着替えてくるから」

「覗くなよ〜?」

「覗きませんよ!!」

アンタ等の中で、俺はどんなキャラになってるんだよ?」

「もしも覗いたりしたら〜……」

「したら……?」

「粉々にするからな」

「どこをつ!」

具体的な場所を言ってくれよ!!

無駄に怖いじゃないかよ!!

「仲がいいね〜」

「このやり取りを見て、どうしてそんな感想が出て来るんですか……」

仕事をする前から、もう疲れちまったよ……。

俺が肩で息をしている中、6人は女子更衣室へと入っていった。

「今回は本当に悪かったね。こっちもまさか、この夏一番の掻き入れ時に限って、主力のスタッフが軒並み休んでしまっ……」

「災難でしたね……」

「全くだぜ……。家の用事だったり、夏風邪を引いてダウンとか、まるでタイミングを合わせたかのように……」

「うわあ……」

マジで災難だったみたいだな……。

こりゃ、俺も気合入れて頑張った方がいいかもしれない。

「後から小栗君や兵庫君も援軍として来てくれる予定になってるか  
ら」

あの二人も来てくれるのか!

それなら、なんとか乗り切れそうだ!

「お?」

矢禿さんがドアを開いてホールを覗く。

すると、ドアの隙間から複数の声が聞こえてきた。

「もうお客さんが来てるのか……」

「みたいだな。着替え終わったら、すぐにでも厨房に入って貰うから。分からないことがあったら、遠慮無く他のスタッフに聞いてくれ」

「はいー!」

よぉーし! 訓練じゃないけど、ここで頑張つて、少しでも仕事の出来る男を目指すぜ!!

・  
・  
・  
・  
・  
・

なんて、息がっていた時期が俺にもありました……。

「大丈夫か? 織斑君」

「だ…大丈夫です……」

隣でオムハヤシを作っている小栗さんが、心配そうに話しかけてくれた。

小栗さんだつて、かなり疲れた表情をしてるのに……。

「なんでこんなにもお客さんが多いんですかね?」

「あれだろ? 今は時期的にお盆だから」

「あぁ……」

お盆の帰省ラッシュユツてやつか。

唯でさえ夏休みは、こう言った店はお客さんでごった返している印象が強いのに、お盆休みが重なる事でそれが倍加しているのか……。

「それに加えて、アレの効果もあるからね……」

「アレ……?」

手元で完成した中華風野菜炒めを盛り付けながら、ホールの方に目をやる。

すると、男性客の殆どがウエイトレスの恰好をした塩田さん達に目

を奪われていた。

「あの子達がバイトをする時って、大抵があんな事になるんだよ。モデル顔負けの女の子達がウエイトレスの恰好で接客をしてるんだから。そりゃ、客も入るよな」

あいつら……ここをメイド喫茶か何かと勘違いしてるんじゃないのか？

中には明らかに塩田さん達を目当てにしてる連中もいるみたいだし。

あ、眼鏡を掛けたキモオタから鷹橋さんがカメラを取り上げて、目の前で壊した。

しかも、なんか言ってプレッシャーを掛けてるし。

「ありがとうございました」

遂には店から追い出しちゃったよっ!!

迷惑な客の方が明らかに悪いけど、あそこまでやっていいのかわっ!!

「よくやった涼香ちゃん!」

「俺等の涼香ちゃんを許可なく撮影しようなんぞ、一億年早いわ!!」

「別にアンタ等のものになった記憶は無いんですけど」

鷹橋さん……人気あるんだな。

でもそっか。性格はアレだけど、可愛いのは事実だしな。

「SNSとか口コミとかで、瞬く間に情報が拡散していつてるんだろうな……」

今はもう、色んな方法で情報を入手したり、発信したり出来るからなく。

この中の誰かが拡散しているに違いない。

「おい織斑! 9番テーブルの中華風野菜炒めはもう出来たかつ!!」

「吉崎さんっ!?! は…はい! たった今出来上がりました!」

「よし! それじゃあ持つていくからな!」

テキパキとした動きで、吉崎さんが料理を運んでいった。

「なんか、吉崎さんが一番張り切ってますん?」

「兵庫さんに良い恰好見せようとしてるんじゃない?」

「へえ……」

普段から下ネタを連発する吉崎さんも、根っこの部分は恋する乙女ってことか。

「織斑君。小休止が終わったら、次の注文に取りかかってくれるか？」  
「了解です」

今度は確か……ビーフシチューか。

暑い時に熱い食べ物を食べるのも、ある意味で風流なのかな……。

「悪い！ 小栗君はいるかっ!?!」

「兵庫さん？ どうしたんですか？」

「客の入りが予想以上になってきてる。皆も頑張ってくれているが、このままじゃ捌ききれない。いきなりで申し訳ないが、小栗君もホールに入ってくれないか？」

「マジですか……分かりました」

エプロンを畳むと、小栗さんは更衣室の方へと歩き始める。

「ごめん！ ここは任せてもいいかな？」

「こればかりは仕方がないですよ。俺には構わずに、行ってきてください」

「助かるよ！ ありがとう！」

さて……貴重な戦力である小栗さんが抜けた穴は大きいけど、だからと言って泣き言を言ってる暇は無い。

他のスタッフさん達も頑張って手を動かして注文を作り続けてる。

俺だって頑張らなきゃいけないよな！

・  
・  
・  
・  
・

一方その頃。

完全に戦場と化しているホールは、ウエイトレスになった塩田達が店の中を東奔西走していた。

「はい！ ご注文を繰り返させていただきます！」

「もう少々お待ちください！ 今すぐに持って来ますので！」

「お客様、こちらへどうぞ」

「お待たせしました。ご注文のカツ定食セットになります」

「では、お皿を下げてでもよろしいでしょうか？」

「喫煙席はこちらになります」

普段は絶対に使わない口調を駆使して、塩田達は完全なお仕事モードになっていった。

しかも、客たちの大半は、そんな彼女達を見てほんわかとした顔になって癒されている。

何故なら、忙しそうにしながらも、営業スマイルだけは決して忘れてはいなかったから。

六人の美少女達が汗水垂らして笑顔で働いている姿を見て、気持ちが高ぶらない男がいいるだろうか？ いやない。

「鉄人ちゃん……王道の可愛さがあるよな……」

「彩愛ちゃんも、あの一生懸命なところが可愛いな……」

「あの眼鏡のイケメンが彼氏……！ 悔しいけど、それでも俺は真由美ちゃんのファンだけはやめないぜ！」

「はあ……はあ……朱美ちゃん萌え♡」

「見ろよ……涼香ちゃんのあの胸にある巨大なメロン……歩く度に揺れてるぜ……」

「茜ちゃん！ 俺だ！ 結婚してくれ！！」

どうやら、六人それぞれに根強いファンが存在するようだ。

実際、この六人は学校でも中々に人気者だったりする。

だが、ファンが多いのはこの六人だけではない。

ここにいるのは塩田達だけではないのだから。

「きゃー！ 兵庫さーん！ こっち見てー！」

「ちよ……ちよつと！ 今、小栗君がこっち見なかったっ!？」

兵庫と小栗もまた、数少ない女性客に大人気だった。

同じようにホールにいる矢禿だけが、なんだか居た堪れないような顔をしている。

「……別に悔しくないけどな。俺……彼女いるし」

目尻に涙を溜めながら言っても、説得力は皆無である。

店内は慌ただしくも穏やかな雰囲気が流れている。

しかし、どんな場所にもトラブルというのはやって来るのが世の常な訳で……。

「おいゴラアツ！ いつになったら注文とりに来るんだよ!!」

「テメエの店、あまりにも不親切じゃねえかつ!!」

「いえ、僕は親切君です……」

明らかにガラの悪い三人組が痺れを切らせて、近くにいた小栗に絡んできた。

他の客たちは表情を曇らせて迷惑そうにしている。

「おっと。小栗君が刺青君に絡まれている」

「どうする?」

「別に大丈夫でしょ? 俺達が特に何かしなくても、どうにかなりますよ」

「そうだな。今日は彼女達がいるんだし」

密かに兵庫と矢禿が話し合っていると、小栗の近くに一つの影が現れる。

「おいテメエ……」

「あん? なんだゴラア……?」

「なに小栗さんに手えだしてんだよ……クソが……!」

米神に血管を浮かび上がらせている塩田が、鬼の形相で不良達に向かって行った。

「おい嬢ちゃん。怪我したくなかったら引っ込んでな」

「引っ込むのは貴様等の方だ」

「いつ!?!」

今度は、不良の背後に気配を消した状態で叶親が出現し、いつの間にか手にしている日本刀の切っ先を不良の首筋に当てている。

「よくも私の大切な又兄いに暴力を振るつたな……! その薄汚い体



を細切れにして、豚の餌にしてやろうか……!」

「ひ…ひいいいいいい!!」

叶親の全身から発する殺気にビビりまくりの不良達。

その中の一人が、ある事に気が付く。

「あ……もうダメだ。お前……確実に死んだわ」

「え?」

「あの金髪美少女……噂の鉄人だよ……」

「げっ!」

塩田の正体を知った途端、不良達の顔が見る見るうちに青褪めていく。

「お前……よりもよって鉄人の男に絡んじまったから……」

「ま……まだ死にたくない……」

「別にオレの彼氏じゃないし。唯の親友の兄貴っただけだよ」

塩田の訂正も全く耳に入らず、不良達は只管に恐怖に震えて涙している。

「な……なんとか謝って許して貰えないかな……」

「今更、謝罪なんて通用する訳ないだろ!! 鉄人は殺人マシンなんだぞ!!」

「ゆ……ゆるじでください……」

とうとう、マジ泣きをしながらの土下座をし始めた。

そこまでされると、流石の塩田もドン引きした。

ついでに言うと、周りの客たちもドン引きした。

「いいからとつと店から出て行け。それと、誰が殺人マシンやねん」

「「ずびばぜんじだく!!!」」

見栄も外聞もかなくなり捨てて、不良達は無様に逃げ去っていった。

連中がいなくなった途端、店中が歓声に包まれた。

「「「おおおおおおお!!!」」」

「な……なんだっ!」

「び……びっくりした……」

いきなりの事に驚いた塩田達であったが、すぐに持ち直した。

「鉄人ちゃん！ めっちゃカッコよかったよ！！」

「よくやってくれた!! 二人はウエイトレスの鏡だ!!」

「彩愛ちゃんも凄かったぜ!!」

「俺……これからもこのファミレスに通い続けるよ……」

不良達から店と客を救った美少女ウエイトレス。

これで人気が出ない筈がない。

「なんか……」

「私達が出る幕……」

「全然無かったな……」

「頼もしい一年生達だ」

「つーか、誰も俺の心配はしてくれないのね……」

タイミング悪く店の奥の方に行っていた吉崎と嶋鳥と鷹橋と植村は、少し離れた場所から喧騒を眺めていて、いつの間にかそこに小栗も合流していた。

「さて、仕事仕事」

「ちよつとした休憩にはなつたけどな」

場が収束し始めた頃、またまた客が来店した。

「また来た。私が行ってくるよ」

「頼むよ、植村」

植村が早歩きで店の入り口まで向かうと、なにやら聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「ここ、知ってるお店なの？」

「ん……。私……の知り合い……が働い……てる……ファミレス……なの……」

「あれ？ もしかして……」

そう、店に入ってきた客とは、なんと……。

「あ……植村……さん……?」

私服に身を包んだ弥生と簪の二人だった。

## 決戦　く夏コミく

遂に来た……決戦の日が！

この時が来るのを、一体どれだけの間、待ちわびてきたことか……。でも、それももう終わりだ。

今日は……今日だけは！　絶対に一片の悔いも残さないようにしなくては！！

「……行くのじゃな？」

「うん……」

玄関先でおじいちゃんが腕組みをしながら、靴を履いている私の事を見つめる。

「ここまでくれば、もう何も言う事は無い。思う存分に暴れてくるがよからう」

「うん……」

今日の為に、色々と計画は立ててきてる。

効率的な移動ルートや、緊急時の対処法等々。

「では……行ってくるがよい！　夏コミへと！！」

「いってきます……」

心の内に決意を秘めながら、私はゆっくりと玄関をくぐっていった。

「ちゃんと、ワシの分もお願いするぞ」

「了解」

おじいちゃんは立場上、安易に外出が出来ない。

だから、こんな時は私がおじいちゃんのリクエストを元に得物をゲットしてくる。

「それと、帰りにお土産のベルギーワッフルを頼んだぞい」

「お任……せ……」

おじいちゃんは甘いものが大好きだからね。

ついでだし、私の分も買ってこようつと。

・  
・  
・  
・  
・  
・

私は今、弥生と一緒に夏コミに行く為に、レゾナンスの入り口付近にて待ち合わせをしている。

弥生と二人っきりのお出かけ……。

これって間違いなくデートだね？

行く場所が夏コミで幕張メッセで女の子同士だけど、立派にデートだね？

「ちよつとドキドキしてきた……」

今にして思えば、こうして弥生と二人っきりになる機会って全く無かった。

いつも、他の皆と一緒にいるから……。

下を向いて俯いていると、近くから車の音が止まる音が聞こえてきた。

「お待た……せ……」

「えっ？」

弥生の声が聞こえてきたので、不意に頭を上げると、そこには……

「ええっ!？」

なんと、例の真っ黒なバイク『ラピッド・レイダー』に乗っている弥生がいた。

(か……カッコいい……♡)

可愛い弥生も素敵だけど、ワイルドでカッコいい弥生もいいな……

♡

あと、その猫耳の黒いヘルメット……可愛い♡

「って……あれ？今日はソレで行くつもりなの？」

「ん。その方……が電車賃……と……かが浮く……から……」

「で……でも、流石にバイクの二人乗りは……」

「それなら大丈夫……夫……」

「へ？」

弥生がバイクの反対側を指差すので、なんなのかと思いつつも足を動かしてみる。

すると、そこには前には無かった追加パーツがあった。

「サ……サイドカー？」

「今日……の為……に……おじいちゃん……が用意……し……てくれ……た……」

「うそ……」

板垣総理……なにやってるんですか……。

「これなら問題……無し……」

「まあ……確かに……」

一応、道路交通法には抵触してないけど……。

「じゃ……あ……乗って……」

「う……うん」

あ、よく見たら私の分のヘルメットもちやんと用意してある。

デザインは何故か真っ白なウサ耳のヘルメットだったけど。

「ちゃん……とベルト……も締めて……ね……」

「うんしよ……つと。よし、締めたよ」

「じゃあ……出発……」

弥生がエンジンを拭かすと、バイクはゆったりとしながら出発していった。

女子高生二人がサイドカーのついたバイクで道路を疾走している姿はかなり目立つようで、道行く人たちの殆どが私達の事を見ていた。

弥生と一緒にドライブが出来るのは凄く嬉しいけど、なんとも複雑な気分……。

……

・  
・  
・  
・  
・

「着いた……」

「着いた……ね……」

目の前には大きなドームがあり、周囲にはリユックや鞆を持った人達が大勢ひしめきあっている。

「運命の決戦の地！ 幕張メッセ!!」

ラピッド・レイダーを密かにアーキテクトの拡張領域へと収納し、私と簪は眼前にあるドームをまじまじと見上げる。

今年もここにやって来たんだな……。

そう思うと、なんだか感慨深いよ。

「もう並んでいるみたいだね」

「割……と早め……に来たつもり……だった……のに……」

矢張り、幾戦の修羅場を潜り抜けてきた猛者達は、必然的に己がやるべき事を本能で察しているようだ。

「だがしかし、私達だって負けてはられない！」

「行こう……弥生。私達も戦の準備をしなくちゃ」

「だね……」

私達も急いで列に並び、逸れないように体を密着させる。

なんだか簪の顔が赤い気がするけど、ここは敢えてスルーします。

「……で、ここ……のサークル……は人気が高い……けど……部数……が少ない……から……」

「最優先項目に追加だね」

「基本的……に……部数……を多め……にして……所……は後回し……にして……も支障……はない……と思う……」

「そうだね。こういったサークルは、多くの人達に本が渡る事を目的としている場合が多いから、午後から回っても問題無いだろうね。途

中で追加で刷るだろうし」

簪もちやんと分かっているな。

彼女も相当の猛者と見た。

「む……そろそろ始まるみたい」

「……………っ！」

二人で中に入ってからの事を相談していると、係の人がメガホンを  
持って台の上に立った。

「それでは！　これより今年度の夏コミを開催したいと思います！！

皆さん、慌てず騒がずにお入り下さるようお願いいたします！！」

スローモーシヨンのようにドームの扉が開かれ、中から光が差し込  
む。

さあ……私達の戦争夏コミを始めましょう。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「これ……もしかしてジヨナサン×ジヨセフ本っ!?　うわあ……  
ちよつと欲しいかも……」

「よかつたら手に取ってご覧になりますか?」

「いいんですか?　ありがとうございます!」

笑顔で本を受け取り、ペラペラとページを捲っていく簪。

その隣で、私は隣のサークルの本を見つめていた。

「これは……クラウド……とセル……のカップリング……」

「試しに読んでみます?　こっちは別のもありますよ?」

「なっ……!?!　まさか……のウォーリアー・オブ・ライト……とライト

ニング……だと……っ!?!」

王道のようで王道じゃない、絶妙なカップリングを描くとはっ……!!?

今年の夏コミは、一味も二味も違うぜ……!

「はうあつ!? や…弥生! こっち来て!!」

「ど…どうし…たの…?」

さつき手に取った本を慌てて出して、お金を払った後に簪の所に急ぐ。

「この本……」

「なん…で…すと…?!」

テイルズの全主人公のカップリング本だと……!?

表紙は何故かユーリとヴェイグになってるし……。

あつ!? その隣には表紙違いの同じ本があるっ!?

こっちの表紙はベルベットとミラの百合ですとおおおおつ!?

(百合……か)

ふと、この間の千冬さんと過ごした一時を思い出した。

一緒に裸でベットに入って、キスを沢山して……。

(つて!…なんで自然と千冬さんの顔を思い浮かべてんだ私!!)

最初の頃を恐怖心はどこへやら。

今では完全に普通に接してるし……。

「弥生? どうしたの? ボーッとして」

「え? あ…なんで…もない…よ……」

少し妄想が過ぎたか……。

結局、私達はテイルズ本を互いに購入することにした。

簪はスタンとカイルの親子が表紙のヤツを、私はベルベットとミラが表紙の本を買った。

私もう……普通の恋愛、出来ないかも。

……



最優先で購入すべき対象を粗方買い漁り、私達は小休止をする為に、端の方に設置してある休憩スペースのベンチにて体を休めていた。

「ふう〜……」

人込みに塗れてかなり疲れたけど、それだけの戦果はあつたなあ。

予想外のいいものも沢山あつて、お財布が軽くなっちゃうにや〜。なんて、本当はまだまだ重いですよ？

この日に備えて、お金はちゃんと降ろしてきたからね。

「ちゃん…と…おじいちゃん……の一押し……のサークル……も回れて…よかつた……」

「板垣総理が夏コミで本を欲しがっている事にも驚いたけど、そのターゲットがかなり目敏かったのが凄かったよ……」

おじいちゃんは、ちゃんとメモを書いて私に購入して欲しい本を売っているサークルのリストを作成していた。

その全てが最近になって人気が出始めているサークルばかり。いつの間にかこんな情報を仕入れたんだろう？

「こうやって、喉を潤さないで脱水症状になっちゃうよ」

「だね……」

さっき自販機で買ったジュースを飲みながらまったりしていると、どこからか怒声が聞こえてきた。

「お客様あああああああああ!! 申し訳ございません!! その商品は先程を持ちまして完売いたしましたしまったあああああああつ!!!」

このやかましい声は……。

「今年もメイトはお店を出してるんだ……」

「みたい…だね……」

真つ赤なサンバイザーにツンツンヘアー、無駄に熱いテンションが目立ちまくるよね。

実はしれつと過去に何回か会った事があつたりして。

「なんか店員さんと揉めてるね」

「余つて…る在庫……でお客さん……を満足させ…ろ…的…なことを言ってる…ね……」

なんつー無茶振り。

本当にそんな事が出来るのかな……？

店員さんも言いくるめられて、やる気に火が着いちやつたみたいだし。

「おお…探してる探してる」

「何…が出てく…るの…かな……？」

あ、なんか後ろから持って来た。

「お客様っ!! こちらの銀さんやキヨンやジョセフやブリットやラグナのプロマイドはいかがでしょうかっ!!」

「でしたら!! こちらのドモンやイザークや宗介やギルガメッシュやスタンや翼完二などはどうですかあああああああっ!!」

うわあ…どつちも男性客には殆ど売れないようなラインナップ。

「いやね? 神楽やハルヒや徐倫やクスハやノエルとかは即座に無くなったのに、こっちはかなり売れ残ってるんですよ?」

「こつちだつてな!! アレンビーやルナマリアや大佐殿やセイバーやルーティーやりせちーは即日完売して、なんでか、こんなんばかりが売れ残ってるんだよっ!!」

これもう…どうリアクションしたらいいの?

「あれ? 背広を着た人が来たよ?」

「社長タカハシ……」

「あの人か?」

やって来た途端に二人をぶん殴って、説教始めちゃったよ。完全にお客さんが置いてきぼりくらってるし。

「……………行こうか」

「ん……………」

これは……………見てはいけないような気がする。

店長……………今度、予約した新作ゲームを受け取りに行くから、その時  
についてに何か一緒に買ってあげるよ……………。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

一休みの後に再びサークルを見て回っていると、簪があるサークル  
を見て動きを止めてしまった。

「簪……………？」

なんか腕を振るわせながら指差してるんだけど、どこを指して……………  
？

「サークル『MUGENDAI』……………？」

ムゲンダイとは、こりやまた御大層なサークル名なこと。

どんな人達が本を出してるのかな？

「あ……………あの人達……………」

「……………？」

あのサークルの人達がどうかしたのか？

「あれって……………IS学園の漫画研究会の人達だよ……………」

「うえあつ!?!」

ア……………IS学園の人達ですとっ!?! なんでもまたそんな人達がっ!?!

「噂で、今年の夏コミに出店するとは聞いてたけど、まさか本当だった  
なんて……………」

ムゲンダイ……………つまりは『無限大』と『インフィニット』を掛けて

るんだらうな……。

なんて安直なネーミング……。

「あっ！　そこにいるのは更識さんに板垣さん！」

「え？　どこどこっ!?」

「ほらあそこー！」

「ホントだ！　おおい！」

バレた。

こうなったら行くしかあるまい……。

この状況で無視は出来ないしね……。

「ど……どうも……！」

「いらっしやうい！　ゆっくりして行ってね！」

あんたはどここのゆっくりだ。

「いやあく、まさか二人も来てるとはね〜」

「お！　私服姿の弥生ちゃん！　これは貴重なお姿ですなあ〜」

あまり見ないですよ……。

ジロジロと見られるのは、あまり好きじゃないんだからさ。

「ど……どんな本があるんですか？」

「ここにあるの全部よ」

「どれどれ……っ？」

ブツ!!

実際にはしてないけど、心の中で思い切り吹いた。

「な……なに……っ……これ……」

「何って、同人誌」

いやいやいやいやいや！　その同人誌の中身がどうして私メイン

なのかって聞いているんですけどっ!?

「これって……いつも周りにいる皆と弥生とのカップリング本っ……

!?

「どう？　凄いでしょ〜！　IS学園の母とも言うべき弥生ちゃん

と、その周りにいる皆との美しくも爛れた日々。最高じゃない？」

「最高です!!」

最低ですよ!!

つて、そこ！ 簪!!

なにしれつと全種類買おうとしてるの!?

「因みに、一番の売れ筋は？」

「弥生ちゃん×織斑先生のカップリング。第二位は弥生ちゃん×ラウラちゃん」

千冬さあああああんっ!? ここでも貴女が出て来るんですかあああああっ!?

ラウラはまあ……その……いいんじゃない？

「弥生ちゃんもいる？」

「う……うう……」

不覚にも、ちよつとだけ欲しくなった自分がいる……。

「そ……れじゃあ……い……一位……と二位……をください……」

「はい！ 毎度あり〜！ おまけに弥生ちゃん×ロランちゃんのカップリング本を入れてあげるね」

「それは結構です」

あ、一息で言えた。つてこらあああっ!! 言ってる傍から入れようとすんなっ!!

はあ……何が悲しくて、自分がネタにされている同人誌を買っちゃうんだよ私……。

……夜にこつそりと千冬さんとの本だけ見ようかな……。

・

・

・

・

・

午前の部が終わり、ドーム全体が一時の休み時間に突入する。

この時ばかりは幾多の猛者達も大人しくなり、午後に向けての補給に入っている。

「お腹空いたね〜……」

「私達……もご飯……を食べ……に行こう……か？」

「それはいいけど、外に出ても大丈夫なの？」

「モーマンタイ……」

簪の心配にサムズアップで答える。

大手のサークルや部数が少ない所は全部回り尽したし、後はゆつくりとしながら掘り出し物でも探せばいいと考えている。

その旨を伝えると、簪も納得してくれたようで、外食をする事に賛成してくれた。

「でも、この時期だとどこも混んでそうだよ。どこに行くつもりなの？」

「この辺……に知り合い……のファミレス……がある……から……そこに行く……つもり……だよ」

「ファミレスか〜……。弥生がそう言うなら、行ってみようか？」

「ん」

外に出てから、ちよつと隠れた場所でラピッド・レイダーを展開しながら説明する。

ヘルメットを被つてから、一緒にお昼を食べにレッツらゴ〜！

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「ファミレス『HIROUSE』。ここがそうなの？」

「うん……。ちよ……つと馴染み……のお店……」

「千葉県に馴染みの店があるって……」

そう思うよね？ 私も気持ちは分かる。

けどこれ、事実なのよね。

「本格的にお腹空いてきた……。早く入ろう？」

「だね……」

さつき、ここから不良みたいな三人組が泣きながら出てきたような気がしたけど、気にせずに入りましたよ。さつき、何を食べようかな？

## 交差する物語

「う…嘘だろ…?…」

厨房にて必死に注文された料理を作っていると、店の入り口から弥生が更識さんと一緒に入店してくる姿が見えた。

え? どうして厨房からそんな遠くの光景が見えるのかだって?

それこそ、愛の成せる技でしょうが。

「お? どうした坊主。急に固まったりして」

「あ…いやその…」

「こいつの好きな女の子が店にやって来たから、思わず石化しちまったんですよ」

ちよ…塩田さん?! 急にカウンターから顔を覗かせて何言ってるんですかね?!

いや…事実だけど、事実だけど! それを今、この状況で言うか?!

「ほう? それはそれはまた…」

「なんとも初々しいねえ!」

案の定、厨房の人達が俺の事をからかいだすし。

「あ、そうだ。ちよつと織斑を借りることって可能ですか?」

「おう! ピークも過ぎて、少し客足も少なくなってきたしな。今なら問題無いぞ」

「やった!」

「その代わり、出来るだけ早めに戻してくれよな。人手が多いに越したことはないんだからな」

「了解です! おら! 織斑! とつとどこつちに来い!」

「俺の意思は?!」

で…でも、俺も本当は弥生に会いに行きたかったんだよな…。

ひよつとして塩田さん、俺の気持ちに勘付いて…?」

「いや! お互いにどんな反応するか楽しみだな!」

んなことは無かったか。

少しでも彼女が他人の恋心を理解してくれる人物だと思った俺が



間違いでした。

でも、皆の好意を無下にはしたくないし。

早く弥生に会いに行きますか！

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

H I R O S U Eに入ると、そこには懐かしい顔があつた。

この無駄に高い背と、それにふさわしいグラマラスボディ。

おじいちゃん経由で知り合つた同年代の女の子の一人である『植村茜』さん。

割とウェイトレス姿も似合つてるな。

「久しぶりだね。元気だった？」

「お蔭さ……ま……で」

いつも元気ハツラツな人だよ、全く。

「植村さん……がいる……ってこと……は……他……の皆……も……？」

「勿論！ 塩田に叶親に吉崎に嶋鳥に鷹橋もいるよ！」

「勢揃い……」

そう言えば、前に聞いた事があつたっけ。

お小遣いが少なくなつてくると、この六人はいつも、ここでバイトをして稼いでるって。

今は夏休みだし、どこか遊びに行くのにお金が必要になつたのかな？

「え……えつと？ 弥生……この背の高い人は……」

「あ！ なんか一人だけ置いてきぼりにさせちゃったね！ ごめんごめん！」

一人だけ追いつけないでいた簪の手を取って、激しく上下する植村さん。

この人、かなりパワーがあるけど、大丈夫かな？

「私は植村茜！ 幕南高校の二年生！ よろしくね！」

「あ…IS学園の一年生の更識簪です……」

「IS学園って事は、弥生のお友達だったり？」

「は…はいい……」

完全に植村さんの勢いに振り回されとるがな……。

どうにかして止めないと……。

「こら植村！ なに案内もせずにくっちゃべってるんだ！」

「あら、吉崎」

「ここで吉崎さんのご登場。」

ちよつとチャライ印象があるけど、割と真面目だったりする人。

「悪かったな二人共。今案内するから」

「あ…はい」

後ろで植村さんが手を振っているのを見ながら、私達は吉崎さんに空いている席へと案内される。

「私は吉崎真由美。あのバカと同じ幕南高校の二年。よろしく」

「さ…更識簪です」

「更識簪……ねえ……」

あ、簪が吉崎さんにロックオンされた。

(この子があの『更識』の家の子か……。簪って子は確か、現当主の妹だって聞いているが、大人しそうな彼女も、実は凄い特技を持っていたり……)

「あ…あの……？」

完全に舐め回すような目線で簪を見えますよ？

ちよつと困惑しちゃってるじゃない。

「君……結構可愛いね。もしよかったら、お姉さんが大人の付き合い方を伝授して……」

「やめい」

「あだ」

今度は嶋鳥さんがやって来て、簪をナンパしようとした吉崎さんをトレーで叩いた。

軽くだったので、本当は全く痛くないんだろうけど。

「つたく……油断も隙もあったもんじやない。植村の事を言えないじやないか」

「面目ない……」

って言いながらも、顔は笑ってますよ。

「お……面白い人達だね？」

「まあ……いい……一応……」

個性豊かだとは思うよ、うん。

なんだか席に着くまで凄く長く感じたけど、それでも席に座る事は出来た。

「それじゃあ、注文が決まったらこのボタンを「やつほく。手伝いに来たぞく」……この声は……」

吉崎さんの声を遮って入り口から現れたのは、なんと、私の中学時代の同級生の桜井さんだった。

「あ」

ふと視線が合ってしまった。

「………予定変更。私、あそこで弥生と一緒に食べるわ」

「おいっ!？」

嶋鳥さんの抗議を無視して、桜井さんがこっちに来た。

「よっ! 久し振りね、弥生!」

「ひ……久し……振り……だね……」

相も変わらず、明るい女の子だねく。

「ちよつと、ここ座るわね」

「へ?」

少し強引に簪の隣に座っちゃったよ。

簪、大丈夫かな?

「にしても、まさかここで弥生と再会するなんてねく。本当に奇遇よねく」

「う……うん」

「ね…ねえ、弥生。この子は…?」

また置いてきぼりをくらうと思ったのか、今度は簪から話しかけてきた。

「あ、まだ自己紹介をしてなかったわね。私は桜井美保。弥生とは中学でクラスが一緒だったの。勿論、私にとっては弥生は一番の大親友よ」

え? 私と桜井さんって親友同士だったの? 今初めて聞かされたんですけど?

私的には、少し仲がいいクラスメイトだったんだけどな……。もしかして、私って思ったよりもボツチじゃなかった?

「えっと……更識簪って言います。弥生とはクラスは違うけど、仲良くしてて……」

「それは見てれば分かるわよく。弥生って基本的に超インドア派だし、誰かと一緒に外出するってことは、それだけ弥生が貴女に心を許してる証拠だって思う」

「…心を許してる……」

桜井さんの鋭い観察眼は未だに健在……つと。

確かに、私は簪に心を許しまくってはいるね。

「で? どうして二人は一緒に出掛けた訳? 千葉県にまでわざわざ来る用事って、そんなにはないとは思うけど」

「今日…は幕張メッセ……に用事…があつて……」

「幕張メッセ……あぁ〜! 夏コミかく! そっかく、もうそんな時期になったんだ〜」

中学の時にも一度だけ、桜井さんと一緒に夏コミに行った事があつた。

あの時は、今日以上に大盛況で、桜井さんは完全にオタク達の迫力に圧倒されてたっけ。

「この時間帯にここにいるって事は、一休みがてらにお昼を食べに来たって感じ?」

「正解です」

「なるほどね〜。二人共、なにか収穫はあつた?」

「この通り」

「おお〜……」

一応、大っぴらには見せられないので、袋の中を覗かせるようにして見せる。

「午前中だけで結構買い漁ったわね〜。お小遣い大丈夫？　って、弥生には無用の心配か」

まだまだ財布はポカポカしてますよ〜。

午後もだけど、二日目、三日目も頑張る気満々だからね。

「あれ？」

「ふえ？」

いきなり桜井さんが横を向く。

私達もそれに釣られて同じ方向を向く。

すると、そこには私が予想にもしなかった人物がいた。

「や…弥生……」

「あら、織斑君？」

「い…一夏……？」

「げ」

驚いている私達を余所に、簪だけが一人、嫌そうな顔をした。

「織斑君もここで手伝ってるって聞いてたけど、その恰好を見るに、厨房で頑張ってる感じ？」

「ま…まあな」

厨房で…ね〜。

料理だけは凄いからね〜、一夏は。

「塩田さんに弥生の所に行ってやれって言われて……」

「あいつがね〜。意外と優しいところがあるじゃない」

いや、私的には無粋なだけなんですけど。

「ほら、そこに突っ立ってないで、そこに座りなさいよ」

「お…おう。それじゃあ失礼して」

くら〜くら〜！ 私も簪も何も言っていないぞ〜！

しれっと私の隣に座るなよ〜！

「取り敢えず、何か注文しようか？」

「喉が渴いたから、何か食べる前にドリンク系を頼みたいかも」  
「それがいいわね。んじや、ボタンを押してっ」と

桜井さんが呼び出しボタンを押すと、すぐに叶親さんがやって来た。  
た。

……皆、ウエイトレスの恰好、凄く似合ってるなく。

「お待たせ。何にする？」

「私はアイスココアをお願い」

「私は……アイスコーヒーを」

「クリームソーダ……を……一つ……」

なんとなく、今は炭酸系が恋しい弥生ちゃんです。

「ついでだし、織斑君も頼んじやえぼ？」

「え？ いいのかな……」

「これぐらいだったら別にいいでしょ」

「そっか……。だったら、俺はジンジャーエールを」

「了解です。すぐに持ってくるから待っててね」

注文を受けた叶親さんが去っていき、会話が再開する。

一応、ここにもドリンクバーはあるんだけど、私達がさつき注文したのは、いずれもドリンクバーには無いものだったりする。

「けどさ、ここに弥生と一緒に来るのって、なんだか懐かしいわよね」

「そうだ……ね……」

「あれ？ 二人って前にもここに来た事があるのか？」

「そう言えば、弥生が『ここは知り合いがやってる店』って言った

……」

いやはや、懐かしいと言うにはまだ早い気がするけど、それでもここに来るのが久しいのは本当。

……ここに来ると、自然と当時の事を思い出すよ。

「実はね、私と弥生は……中学の時に職業体験でこのHIROSUで一週間だけ働いていた事があるのよ」

「マジでっ!？」

「マジで。なんなら証拠写真でも見る？」

「見る!!」

普段は仲悪いのに、こんな時だけ息ピッタリだなオイっ？  
っーか、桜井さんの言った『証拠写真』ってなに？

「ほら、これ見て」

「おおー！」

なにやらスマホを操作して、二人に何かを見せている。

どんな写真か気になったので、私もそつと覗き込むことに。  
スマホに表示されていた画像、それは……。

「可愛い!!」

H I R O S U Eのウェイトレスの制服を着た私の姿だった。

「……これが中学時代の弥生……」

「ウェイトレスの恰好をした弥生……本当に可愛い……♡」

そう何度も可愛いって連呼しないで〜！  
恥ずかしくて悶絶しちゃうから〜！

「こんなもあるわよ〜」

「……これは……!」

今度は、お客さんから注文を取っている私の写真。

「更にはこんなまで」

いつの間に撮ったのか、初めてのレジ打ちに四苦八苦してる私の姿  
もあつた。

「あ、これは違った」

「ああ〜!」

おい……なんで私がコケそうになってる写真があるんだよ……!」

しかも、何故か後ろからのアングルで。

危うくパンツが見えそうになってるじゃないか!

って言うか、よく見たら陰になってるだけで、うっすらと見えてな  
いっ!?

「さ……桜井さん……」

「お願いします……」

「私（俺）にもその写真をください!!」

おいこらお前達〜!!

いきなり何を言つとるんじゃ〜!!

「これぐらいなら全然オツケーよ。家にデータはあるし、幾らでもコピーしてあげる」

「ありがとうございます!!」

これは……阻止したくても出来る雰囲気じゃない……!

そうしている間にも、桜井さんのスマホから、二人の携帯に画像が通信で渡されていく……!

「はい完了」

「これ……絶対に壁紙にしよう……♡」

「俺も……。間違いなく永久保存版だろ……」

そのまま、お前も永久凍土に永久保存されちまえよ。

「なんか盛り上がりつつあるね。はいよ、お待ちどうさま」

私が色んな意味で大ピンチになってる時に、叶親さんが注文したドリンク類を持ってきてくれた。

ナイスタイミング……! さあ! この三人に何か言ってやってくださいな!

「ありがとね、叶親さん」

「桜井さん、さつきから何見てんの?」

「ん? 弥生の昔の写真」

「これ、この制服?」

「そ。中学の時に職業体験でね」

叶親さんはなんて言ってくれるかな?

真面目な彼女の事だから、きつとビシツと言ってくれるに違いない。

「可愛いね、これ。後で私にもくれます?」

「いいよ。毎度あり」

叶親さあくんっ!?

ブルータス……お前もか……!

「それ飲んだら、そろそろ戻った方がいいよ。お客さん、入ってきてるみたいだから」

「分かりました」

叶親さんが他の仕事に戻った直後に、一夏は自分が頼んだジン



ジャーエールを一気に飲み干して席を立つ。

「と……ころ……で……一夏……はどう……して……ここでバイト……を……する……の……?」

実はずつと気になってた。

一夏に千葉県に来るような用事は無いと思うんだけど。

なんだか塩田さん達と仲良さげなのも気になるし。

「ん……ちよつとな」

言葉を濁すつて事は、何か隠している証拠だよな。

臨海学校でおじいちゃんに呼ばれていたことが関係しているのかな?

でもまあ、千冬さんに会った時も何も言っていなかったし、あの人が了承してるなら大丈夫でしょ。

「そうだ。弥生、この前は千冬姉の事を頼んで悪かったな。千冬姉、凄く喜んでたよ」

「そ……それ……はよかつ……た……ね……」

言えない……! 実は君のお姉さんとただならぬ関係になりかけたなんて、口が裂けても言えない!!

「織斑先生がどうしたつて……?」

「なににな……? 弥生つてば、今度は年上の女性を墮としたの……?」

簪の目は坐っていて、桜井さんの目は好奇心に満ち溢れてる。

全く正反対の二人の目に、私はどうしろと?

「んじや、俺はもう行くな。弥生、なんでも注文していいからな! 俺

が腕によりをかけて作るからさ!」

なんとも爽やかな笑顔を振りまいて、一夏も戻っていった。

その顔が他の女性客を虜にしていたのは、言うまでもない。

それから、私は二人から質問攻めにされて、精神的に疲労しまくり。

腹いせに、私だけの隠しメニューである『超大盛りチャーハン』を頼んでやった。

後から聞いた話だと、一夏は嬉々として巨大な中華鍋を振ってチャーハンを作っていたらしい。

余談だけど、午後からの収穫も上々だったと伝えておく。

今年は掘り出し物が多かったなあ。  
それに、懐かしい出会いもあったし。  
偶には昔馴染みに会うのも、悪くないのかもしれないね。  
今度からは、桜井さんとも遊ぶようにしようかな……。

## 勉強会と福音の帰還

まだまだ夏真っ盛りな八月中旬。

少女達は再び板垣邸に集合していた。

と言つても、今回は上級生組はいなくて、一年生だけの集まりになつている。

「うぐぐ……これはなんと読めばいいんだ……!」

「む……難しすぎて、さっぱり理解出来ん……!」

テーブルに広げられたプリントと睨めっこをしながら悪戦苦闘しているのは、箒とラウラ。

今回の集合の切っ掛けは、この二人だった。

IS学園は非常に特殊な学校ではあるが、それでも便宜上は高等学校に分類される。

となれば、当然のように生徒である彼女達は夏休みの宿題をしなくてはいけないのだが、箒は英語が、ラウラは古文が苦手科目だった。

他の宿題は順調に進んでいても、これだけは全く進まず、最後の手段として二人は弥生に泣きついて教えを乞うた……まではよかったのだが、それを大人しく静観するような大人しい少女達は一人もおらず、結局は鈴の提案にて全員で勉強会でもしようと言う事になったのだ。

しかも、この時の鈴は相当に狡猾な考えを持っていて、少しでもライバルを減らすために、上級生達が揃って用事で来れない日を見計らって計画した。

結果、一年生だけの勉強会が開催される事となった。

「ひ……姫様……申し訳ないのですが、この問題を教えて貰えないでしょうか……」

「い……いよ……。ど……。?」

「ここです。この文章問題が……」

「ん。……はね……」

相変わらずの教え上手っぷりをいかんなく発揮し、弥生は懇切丁寧に教えていく。

いつもは親子のような二人だが、この時ばかりはまるで家庭教師と生徒のように映った。

「仕方がない。箒には私が教えよう。ほら、どこが分からないのかな？」

「ここなのだが……」

「ふむ。この問題は……」

そして、箒にはロランが付き添って勉強を教えている。

普段のキザツぷりはなりを潜め、真面目に取り組んでいた。

流石にこの時ばかりは空気でも読んだのだろうか。

（ふふ……ここで出来る女アピールをしておけば、弥生に惚れられる事間違いなし！）

前言撤回。

どんな状況でも、ロランはロランだった。

「にしても、箒とラウラにも苦手な物があつたのね〜」

「あ……当たり前だ。お前は私の事をどんな風に見てるんだ」

「なんでも力押しで解決しそうなイメージ？」

「鈴!!」

テーブルに肘をついて明るい笑顔を見せる鈴。

何故に彼女がこんなにも余裕の顔を見せるのか？

その理由は単純明快で、とつくに夏休みの宿題を終わらせているから。

しかも、それは鈴だけに限った話ではなく、弥生は当然のように、学年主席のセシリアに、早めに自由時間を確保して弥生と遊ぶ気満々なロランも宿題を終了させていた。

逆に、シャルロットや本音や簪は、毎日少しずつ計画的に宿題を進めていて、今も箒とラウラの横で宿題を黙々と解いていた。

「♪♪♪」

「本音はスラスラと進めていくな……」

「しかも、鼻歌交じりで……」

「伊達にIS学園に入学出来たわけじゃない……って事だね」

「本音はこう見えても、意外と頭がいいから」

「こう見えては余計だよ〜かんちや〜ん」

「ふふ……」

簪と本音のちよつとしたやり取りを見て、弥生が思わず笑みを浮かべる。

それを間近で見てしまったラウラは、口を開けっ放しにて見惚れていた。

「どころでさ、弥生はいつ頃に宿題を終わらせたの？」

「七月中……に終わら……せた……よ……」

「マジでっ!？」

「と言う事は、私達が大掃除をお手伝いに来た時にはもう……」

「宿題を終わらせていた……って事になるね……」

「だから、あの時の弥生には余裕が感じられたのか……」

IS学園の夏休みの宿題には、従来の学校にはある『自由研究』などの類の宿題は一切出されない。

故に、その気になれば弥生のように八月に突入する前に宿題を終了させることも不可能ではない。

その代わり、問題の難しさは群を抜いているが。

「皆さん、そろそろ休憩しませんこと？　ずっと下ばかりを向いていては、肩が凝りますわ」

「それもそうだな……んん〜……!」

セシリアの提案に従って、上体を起こして体を伸ばす筈。

その際に、15歳とは思えない程の豊満な胸が普段以上に強調されて、それを見た鈴と簪のこめかみがピクつとなつたが、誰も気が付かなかった。

「お茶……のお替り……を持ってく……るね……?」

「わ……私も手伝うぞー!」

弥生がお茶を持ってくるために立ちあがったと同時に、箒も慌てて立ち上がって弥生の後を追ひ、二人揃ってキッチンへと姿を消した。

「あ〜……この畳の匂い……落ち着くわ〜……♡」

「もう!　鈴さん!　そんな風に寝転がってははしたないですよ?」

「別にいいじゃない。それに、フローリングの床とは違って、畳つてのは寝転がってナンボなのよ」

「リンリンの言うとおり♡」

「ちよ……本音さんまで！」

気持ちよさそうに畳の上に寝転がる鈴に釣られるように、本音も一緒に畳の上に体を投げ出した。

それを見てセシリアは怪訝な表情を浮かべているが、実際、鈴と本音は今にも眠ってしまいそうな程にリラックスしている。

「でも、実際にこの…蘭草…だっけ？ この香りは僕は好きだな♡」  
「蘭草にはリラックス効果があるらしいよ」

「成る程……。以前に来た時もあったが、この畳の上にいると心が落ち着くのは、蘭草の独特の香りが鎮静効果をもたらしていたからなのか……」

心から感心しながら畳を擦るロラン。

彼女も日本文化に多少なりとも興味を持ち始めたようだ。

完全にまつたりムードが漂い始めた時、縁側にて寝転んでいた財務大臣がトテトテと歩いて来て鈴の傍に座った。

「あら、アンタも来たの？」

「にゃあ」

本当に言葉を理解しているかのように返事をして、前足を鈴の額に押し当てた。

「ああ……財務大臣のプニプニ肉球……癒されるわ♡」

おでこから感じる冷たい肉球の柔らかい感触を堪能しつつ、鈴は完全に和んでいた。

「外務大臣ちゃんも、日陰でまつたりしてるね♡」

本音の言う通り、柴犬の外務大臣も家の日陰の下に体を横たえながら涼んでいる。

その光景を見て、なんだか肩肘を張っている自分が馬鹿らしく思えてきたセシリアは、少しでも体を楽にすることにした。

「はあ……全く皆さんは……」

「なくって言いながら、本当はセシリアも気持ちいいんでしょ？」

「まあ……否定はしませんわ」

「素直じゃないな、セシリア」

「ラウラさんに言われると、少しグサツと来ますわね……」

「ラウラはピュアの塊みたいなものだし」

「それ、分かるな」

「??」

畳の上で女子トークをする彼女達の姿からは、国を背負っている代  
表候補生としての表情は無く、一人の少女としての表情を見せてい  
た。

この一時だけでも、少女達に安らげる時間があってもいいだろう。

時には、見栄も外聞も捨てて、心のリフレッシュをする事も大事な  
のだから。

・  
・  
・  
・  
・  
・

一方その頃。

キツチンへと麦茶を淹れに行つた弥生と箒は、二人並んで人数分の  
コップに麦茶を入れていた。

(こ……こうして一緒に台所に並んでいると、少しドキドキするな……)  
キツチンと言う狭い空間に好きな女の子と二人つきり。

この状況でドキがムネムネしない箒ではない。

(い……言うなら今しかないのではないか? いや……このチャンスを見逃せば、もう二度とこんな機会は訪れないに違いない! ええい!  
今こそ勇気を振り絞る時ではないのか! 篠ノ之箒!!)

鮮やかに準備を進めていく弥生の横で、葛藤を続ける箒。

覚悟を決めたのか、箒は決意を秘めた顔で弥生の方を見た。

「や…弥生。少しいいだろうか……？」

「ん……？ どう…した…の…？」

「あ……その……だな……」

決意をしたはずなのに、実際に弥生の顔を正面から見ると、途端にへたれてしまう筈。

普段の強気な君はどこへと行ってしまったのやら。

「じ…実は今度、私が住んでいる神社でな……夏祭りが開催されるんだが……よかったら来てみないか？」

「夏祭り……」

和室にいる皆には聞こえないように、声を潜めてから弥生に夏祭りがある事を告げる。

勿論、筈は単純に弥生を夏祭りに誘ったわけではなく、あわよくば一緒に夏祭りデートをしようという魂胆だ。

最近になって劇的にライバルが増加し、筈もうかうかとはしていられなくなった。

少し気恥ずかしいが、今はそんな事には目を瞑り、一步でも前進することが最重要課題となっている。

(弥生が夏祭りに興味を示している？ これは脈アリか？)

弥生が筈の言葉を反芻した事で、これはいけると判断した筈だが、実際の弥生の心の中は全く違うことを考えていた。

(夏祭りと言えば屋台……。屋台と言えば粉もの三巨頭である焼きそばとたこ焼きとお好み焼き……。他にも、焼トウモロコシにリンゴ飴にかき氷に綿飴もある……。最近じゃ、唐揚げや餃子の屋台もあるって言うし……)

完全に脳内は屋台の食べ物で一杯だった。

今からでも遅くないから、夏祭りにて食べ物系の屋台を出そうと思っている人達は、急いで大量の食材を調達する事を推奨する。

「べ…別に弥生が嫌ならば私は…「行く」……へ？」

「行く。絶対に行く」

「や…弥生……そうか……！」

弥生が来ることを決めてくれたことに静かに歓喜する筈だったが、



彼女が完全に捕食者の目になっている事だけには全く気が付かなかった。

勿論、他の少女達にはこの事は内緒にされた。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

自宅に姿を見せなかった総理は、今は国内にはいなかった。

というのも、今までずっと預かっていた福音をアメリカへと返還する為に、総理直々に米国へと足を運んでいたのだ。

ホワイトハウスにて大統領と話をし、その後に福音の操縦者であるナターシャと、アメリカ代表のイーリスが入院している病院に來ていた。

「失礼するぞい」

ちゃんとノックをしてから病室に入っていく。

一応、護衛の名目で矢禿も一緒にいる。

「貴方は……ミスター板垣……」

「アンタが直に來たのかよ……」

「それが一番良いと思つての」

体中に包帯を巻き、ベッドの上で寝ているナターシャとイーリスは、突然の訪問者に驚きを隠せない様子だった。

日本の総理大臣が自分達の病室に訪れたのだから、当然の反応ではあるのだが。

「本来ならば、ラボに届けた方がいいんじゃないだろうか、その前にお主の手元に戻してやりたいと思つたんじゃない」

「これは……」

ナターシャのベッドの上に置かれたのは、福音の待機形態である羽の形をしたペンダントだった。

「ちゃんと、こちらの倉持技研で応急処置だけはしておいた。話によれば、コアの方にも特に異常は見られなかったそうじゃ」

「本当ですか？ あの時、確かにこの子は連中にクラツキングを受けたのに……」

「それ程までに鮮やかな手腕だった……と言う事じゃろうな。自分で相手をおきながらなんじゃが、見事なもんじゃ」

福音を受け取ったナターシャは、本当に嬉しそうにペンダントを両手で抱きしめた。

「ところで、二人が襲われた連中ってのは、どんな奴等だったんだ？」

「米軍でも屈指の手練れであるお主ら二人が、手も足も出ない相手とは、一体誰なんじゃ？」

「名前は分からねえ……。けど、姿ならバツチリと覚えてるよ」

「私もよ……」

悔しさに顔を歪める二人。

相手のいいようにやられてしまった事は、彼女達にとっては一生の不覚と言っても過言ではないのだろう。

「女の二人組で、片方は黒髪で両目を覆うような眼帯をしてやがった。そいつがゴスペルに乗って行きやがったんだ」

「そして、もう一人が褐色の肌に白い髪の毛の子ね。その子がゴスペルのコアに何らかの方法で干渉して……」

「分かった。もう言わんでもいいぞい」

二人の心境を考えて、これ以上思い出させないように促す。

「両目を覆う眼帯の女に褐色肌の白髪と言えば……」

「間違いない。ラケシスとアトロポスじゃ」

「ふ……二人共、彼女達の事を知ってるのっ!？」

外見の情報を言っただけで名前が出てきたことに驚くナターシャ。

怪我人を余り驚かせてはいけない。

「知ってるも何も……」

「あの二人は、ずっと俺等が追っている二人組なんだ」

「マジかよ……。一体何者なんだ？」

「ワシ等も詳しく知っているわけではない」

「こつちが掴んだ情報は、あの二人は実の姉妹であり、現在は  
フアントム・タスク  
亡国機業の幹部だつて事だけだ」

「なっ……!?!」

二人の口から飛び出した衝撃の事実。

自分達は、とんでもない連中を相手にしていたのだと実感させられた。

「ちよ……ちよつと待つてくれ！ 機業の幹部は確か、スコール・ミュー  
ゼルとオータムの二人だつた筈だぞ！」

「その二人ならば、少し前に組織を抜けておるよ。その理由もまた不明じゃがな」

「そして、裏切り者であるスコール達の粛清を、あの姉妹に任せているらしい」

「どういうことなの……」

「それはこつちのセリフだよ」

肩を竦ませながら息を吐く矢禿。

歴戦の勇士である彼もまた、姉妹にいいように踊らされている人間の一人だ。

「けどよ、そこまで情報を仕入れているって事は、いつかは必ず連中と全面对決するつもりって事なんだよな？」

「無論じゃ。このまま放置しておくには、あの姉妹と亡国機業はあまりにも危険すぎる」

「委員会やEUのお偉方も、最近になってようやく重い腰を上げ始めたからな」

本当の意味で危機感を覚えないと動こうとしない。

どこの国や組織でも、上にいる連中の思考は五十歩百歩のようだ。

「頼む！ その時はあたし達も戦列に加えてくれ！」

「今回の借りをどうしても、あの姉妹に返さないと気が済まないわ」

「そう言うと思った」

「じゃな」

顔を見合わせて苦笑いをする総理と矢禿。

「気持ちには分かるけどな」

「今は怪我の治療を一番に考えた方がいいぞい」

「んな事は分かっているって」

「私達だって、優先順位ぐらいいは理解しているわ」

力強く笑いかける彼女達にはもう、さっきまでの焦燥は微塵も無かった。

二人に宿るのは、紛れもない闘志だった。

「怪我が治り次第、リハビリもしないとね」

「それならば、リハビリがてらに弥生の指導でもして貰おうかの」

「弥生って?」

「ワシの大事な大事な愛娘じゃ!」

満面の笑みを浮かべながら、携帯に入っている弥生の写真を二人に見せる。

「あら可愛い」

「…………ちよつと好みかも」

小さく呟いたナタルだが、総理には聞こえていなかったようだ。

「今はIS学園にて勉学に励んでおる」

「それは丁度いいじゃねえか」

「いずれはあそこにも行かないといけないでしょうから、その時にでも実際に会ってみようかしら?」

「そうしてくれると、こちらも嬉しい限りじゃ。IS操縦者として優れたお主らに教えて貰えると知れば、弥生もきつと喜ぶじやろうて」

なんとも微笑ましい親心だが、それを本当に弥生が喜ぶかはまた別問題である。

「そう言えば、お礼をまだ言えてなかったわね。この子を……ゴスペルを取り返してくれて、ありがとうございました」

「あたしからも礼を言わせてくれ。板垣総理、本当にありがとう」

「なに、ワシは唯、自分の国と民達を守ろうとしただけじゃよ」

「それを身を持って実行できる政治家は、そうそういないと思いますけどっ。」

「そ…そうかのう？」

珍しく恥ずかしそうに頭を掻く総理。

彼としては、本当に当然の事をしただけなのだから、照れくさくて仕方がないだろう。

それから少しだけ話をした後には、総理と矢禿は病院を後にした。

帰国してから、弥生にナターシャ達の事を話した時に、彼女は苦笑いしながら頬をピクピクと引きつらせていた。

## 一夏の特訓 その8

「おらあおらあ！ ペースが落ちてんぞ！」

「お……オッス！」

夏休みも中盤に差し掛かり、折り返し地点が経過した頃。

一夏の特訓はISを使ったものに移行していた。

「お前は専用機を先に与えられちゃったから、基礎が疎かになってる。だから、この特訓ではとことんまで基礎中の基礎を叩き込むからな！」

「それ……さつきも聞いた……！」

「読者の為だよ」

さて、読者の方々も気になっているであろう、この場所はというと、吉六会が全力で持てる権利を行使して借りた、普段は日本の代表候補生を初めとした者達が訓練をしているアリーナである。

勿論、タダで借りた訳ではなく、一夏や塩田達がここを利用している間、訓練生の子達には使用期間の間、海外旅行へと行って貰っている。

因みに場所はハワイ。王道である。

「いいか。織斑はISに乗ってるんじゃない、ISに乗られてるんだ。ISの事を鎧のように見るんじゃない、自分の体の延長線上に感じる。まるで自分の体を動かすようにISを動かせるようになる、嫌でも運動性能や反応速度は上昇する」

「それは……わかるけど……」

「けど？ なんだよ」

「それとこれと……どんな関係があるんだ……」

さつきから一夏がやっているのは、アリーナの周りをひたすらに白式を纏った状態でのランニング。

無論、PICはカットしてある。流石にパワーアシストはONにしてあるが。

「剣を使うんなら、地面に足を付けた特訓が一番だからな」

「それでランニングかよ……！」

一夏の体は汗だくで、足取りもおぼつかない。完全に疲労困憊になっている。

そんな彼をジャージ姿で見ている塩田達六人。

よく人それぞれに色が違って、実にカラフルな少女達に仕上がっている。

塩田は赤。叶親は青。吉崎は黒。嶋鳥は黄色。鷹橋は緑で植村は紫だ。

色だけを見るなら『キセキの世代』である。

「ISを纏った状態で日常的な事が出来なきや話にならねーしな。走り込みの後は腕立て伏せをするからな」

「嘘だろバーニイっ!？」

「誰がバーニイだ」

別に塩田はザクに乗ってガンダムと相打ちをする気はない。

酷い言いがかりだ。

「ちよ……休憩……」

「情けねえなあ……」

「こんなの……キツすぎ……」

その場に立ち止まって、膝に手をつきながら息を整える。

だが、一向に呼吸が整う気配はない。

「しゃーない。ちつと手本を見せてやっか。植村」

「ほいほい。なんじやろほい?」

少し離れた場所で叶親と一緒に柔軟体操をしていた植村を呼び出す。

さつきから動きまくっている筈だが、全く息が乱れていない。

「そこに用意してあるリヴァイヴを使って、織斑に手本を見せてやってくんない?」

「いいよ。ちよつと待っててね」

完全に地面に座り込んだ一夏を横目に、植村は慣れた動きでリヴァイヴに乗り込む。

「ほいじゃ、いっくよ」

「おう。頼むわ」

「せゝの」

あろうことか、クラウチングスタートで走り出す植村。

重々しい音が響く中、植村は一夏以上のスピードと安定したペースで走行する。

「冗談だろ……う？」

「ピヤツホ〜！」

疲れた様子を全く見せないどころか、楽しそうに走る植村を見て、愕然としてしまう一夏。

この六人が規格外なのは知ってはいたが、ここまで明確な差を見せつけられると流石に堪える。

「加速装置オン！」

「ちよ……ええええええつ!？」

半周程走った所で、まさかのスピードアップ。

あつという間に植村は一周を走り終わり、元の場所へと帰ってきた。

「ゴ〜ル!! 植村選手、世界新記録の上に金メダル〜！」

「じゃないよ。東京オリンピックはまだ先だ」

「ツツコむのそこなのかよ……」

疲れてツツコむ気力も無いのか、代わりに鷹橋がツツコんでくれた。

ジャージの上からも大きなバストを強調する罪な少女だ。

「一応言っておくけど、俺達は全員コレ出来るぞ」

「だと思っただよ……」

もう何を聞かされても驚かない自信がついてしまった。

少なくとも、度胸だけは鍛えられたようだなにより。

「植村さん……汗一つ掻いてないし……」

「なんだ、もしかして汗フェチか？ 珍しい属性持ちだな」

「勝手に人を変態にしないでくれよ……」

「なんていいつつも、弥生の汗なら？」

「すぐにもペロペロしたいお」

急にキリつとした顔になって自分で汗フェチであることを主張す



る織斑一夏15歳。 カッコ悪さ全開である。

「ふむ……ならば、織斑のやる気を促進させる奥の手を使うか」

「奥の手とな?」

「何をする気?」

「ちよつとな」

嶋鳥と叶親を軽く受け流しながら、塩田はジャージのポケットから一枚の写真を撮りだす。

写真は一夏からは裏側になっていて、何が写っているのか分からない。

「実はここに、オレが密かに持っている弥生の隠し生着替えの写真が……」

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおつ たった今、都合よく目覚める! 俺のセブセンシズ!!!」

急に立ち上がり、先程まででは考えられない速度で走り出した。

その顔には一片の疲労も無く、とても眩しく輝いている。

結果として、一夏はあつという間にアリーナの周囲を走り終えてしまった。

「おつと間違えた。よく見たらこれ、弥生じゃなくて矢禿さんの生着替えだったわ」

「何をどうして間違えるかあああああああああつ!!!! 思春

期の 青 少 年 の 純 情 を 弄 ぶ ん じゃ

ねえええええええええええええええええつ!!!!」

「悪い悪い。許してヒヤシンス」

「ふざけるなああああああああああああああああああつ!!!!!!!」

「血涙を流しながら怒るような事?」

「アイツ、全てが白日の下に晒された八神ライトみたいな顔になっているぞ」

「塩田の奴、一体何処からあんな写真を入手したんだ?」

「知らね。アイツの情報入手先ってマジで不明だから」

怒り心頭の一夏を余所に、塩田を除いた五人は達観した顔で二人を事を眺めていた。

彼女等にとって、この程度の事は日常茶飯事だから。

「だからガモ……うっ!？」

「どうした?」

「全力疾走した後で怒りまくったから……体力が本当に尽きた……」

本当に一夏の体力は限界に達したようで、その証拠に白式がまだS Eがあるにも関わらず強制的に待機形態に戻った。

「今日はもう終わりかな」

「だね」

当の一夏が限界になってしまったので、本日の訓練はここで終了する事に。

それを聞いて一安心する一夏だが、忘れてはいけない。

今日がこれで終わるという事は、今回出来なかったメニューは次回に回されるという事を。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「ハア……ハア……ハア……ハア……ハア……」

ピットにあるベンチに横たわり、一夏は体全体を脱力させて体を休ませている。

もう一歩も動く気力が無いのだ。

「あれ? もう終わったの?」

「桜井さん」

ここで遅れて桜井が登場。

手に持っているスポーツバッグの中に人数分のタオルとスポーツドリンクを持ってきてくれた。

「どうやら、相当に絞られたみたいね」

「つーか、体力なさすぎ」

「いや、アンタら六人と比べたら大抵の人間が体力不足になるわよ……」

なんて言う桜井も、実は隠れた実力者だったりする。

少なくとも、そこら辺の代表候補生程度ならば楽に屠れるぐらいの力はある。

「ほら、飲める？」

「今……は……無理……」

「なら、ここに置いておくわね。楽になったら飲みなさい」

「あ……りが……とう……」

一夏的には一刻も早く目の前にある冷たいスポドリにありつきたいが、体がそれを許してくれない。

「んあ……？」

ふと、一夏の視線が壁に掛けてあるカレンダーに向く。

それを見た彼の脳裏にある事が思い浮かぶ。

「そつか……もうそんな時期か……」

「カレンダーがどうかしたの？」

「いや……もうすぐ夏祭りがあるなって思ってた……」

「夏祭り……」

「ええ。この時期になると、うちの近所の神社で夏祭りがあるんです。

沢山出店が出て、かなり賑やかなんですよ」

ようやく息が整ってきたのか、喋りがスムーズになっていく。

ゆっくりと起き上がってから、念願のスポドリにありついた。

「行きたいのか？」

「いや、俺には特訓があるし……」

「別に行ってもいいぞ？」

「へ？」

塩田の意外な一言に目が点になる。

「ごうも連日、訓練訓練じゃ体力よりも先に精神の方が参るだろ。時にはゆっくりと心身ともに休める事も重要だぞ？」

「塩田の言う通り。休む事もれっきとした訓練の一環だよ」  
「そ……そこまで言うなら……」

植村の後押しもあって、一夏は休みを受け入れることに。  
そうなると、途端にワクワクしてくる。

「いつその事、オレ達も一緒に行くか」

「いいねそれ」

「私は賛成」

「私も。偶には別の街の夏祭りにも行ってみたいかも」

「時にはいいかもね」

「どんな出店が出るのかな？」

この六人、完全に行く気満々である。

「桜井さんも行きますか？」

「いいの？」

「もうこの際、一人ぐらい増えても問題無いでしょ」

「そうね」

はい決定。

久方振りの里帰りは、かなりの大所帯になりそうだ。

「決まりなのかよ」

「当たり前だろ？ それともなにか？ オレ達が来ちゃ拙い事でもあ

るのか？」

「それは無いけど……」

「じゃあいいじゃん」

「はあ……別にいつか……」

人生は諦めが肝心とはよく言ったものだ。

おめでとう一夏。これでまた君は一步だけ大人の階段を上った。

「こんな形で昇りたくねえよ……」

あまり我儘は言うもんじゃないぞ。

「でも、夏祭りかく。今年もこっちの夏祭りは賑わうのかね？」

「こっちでもあるんですか？」

「当然。吉六会の皆もよく屋台とか出してるんだよ」

「へえ。例えば？」

「幕南名物『総理の焼きそば』」

「総理って、あの総理っ!？」

「当たり前だ。他に誰がいるんだよ」

「いやいやいや! なんてよりにもよって総理大臣が夏祭りで屋台出してるんすかつ!？」

実に正論。普通は絶対に有り得ない。が、彼等に常識は通用しない。

「誰も焼きそば焼いてるのが本物の内閣総理大臣だなんて信じてないって。精々、どこかで見た事があるそっくりさんぐらいにしか考えないよ」

「んなアホな……」

「実際に有名なんだぞ。総理の作る焼きそばって何気に絶品だしな」

「弥生なんて、余りの美味しさに、よくわんこ焼きそばしてるし」

「わんこ焼きそばとなっ!？」

「一人前の焼きそばを延々と只管にパクパクと……」

「容易に想像がつく自分を凄く思う」

人並みなんてレベルを遥かの凌駕する食欲を持つ弥生に掛ければ、

屋台の粉もの料理は数十人前ぐらい朝飯前だ。

それこそ、全ての食べ物系の屋台を制覇する事も出来るだろう。

「そうなるよ、本家から浴衣を取り寄せて貰わないとな」

「本家って言った?」

「言った」

「塩田さんって、やっぱりブルジョア?」

「おう。超が付くほどのブルジョアだ。オレだけじゃなくてコイツらもな」

「類は友を呼ぶか……」

実際は『類は友を呼ぶ』ではなくて、昔からの付き合いなのだ。

それこそ、先祖まで遡るほどの。

「そーいや、お前が言う夏祭りってどこであるんだ?」

「篠ノ之神社って場所だよ」

「ん? 篠ノ之ってどこかで聞いたような……」

基本的に興味のない事にはとことんまで無関心なので、神社の名前が世界一有名な人間と同じでもなんにも思わない。

仮に直接出会っても、お互いに路傍の石ころ程度にしか感じないだろう。

「さつきから普通に話してるけど、体力は戻ったのか？」

「少しだけなら」

「そいつはよかった。もしもまだキツかったら、段ボール箱に入れて運ばないといけなくなるからな」

「俺はスネークか」

「いいじゃんかスネーク。めっちゃカッコいいじゃん。男の中の男でしょ」

「それは認めるけどな」

こうして、もう一つのフラグも立った。

弥生と一夏。二人揃って夏祭りに行くことになったが、果たして二人は会場にて会う事が出来るのだろうか？

一夏よ。精々、作者に出会わせてくれるように祈るがいい。

## 楽しい夏祭り（弥生編）

「これ……で……よし……つと……」

鏡の前でクルリと体を回してから、どこにも問題が無い事を確認した。

今日は以前に箒と約束した夏祭りの日。

今日と言う日に備えて、私は押し入れから浴衣を取り出して洗ったり、アイロン掛けをしたりした。

本当は普段着で行くつもりだったんだけど、アメリカから帰ってきたおじいちゃんに夏祭りの事を話したら、『それなら浴衣でも着ていけばいい』と提案された。

私的にはどつちでもよかったので、二つ返事で了承した。  
で、今に至るって訳。

「大丈夫……夫……だね……」

ちゃんと腕も足も肌が露出しないように、いつものように腕袋などで隠してあるし、首元なんかもキツチリと締めて見えないようにカモフラージュを施していた。

かなりの重装備だけど、これなら私でも問題無く浴衣が着れる。

「もう……着いてるの……かな……」

今、家にいるのは私一人だけ。

おじいちゃんと言うと、私から夏祭りの事を聞いた途端に色々準備をし始めて、今日もそそくさと私よりも早くに出かけてしまった。  
まった。

多分だけど、今回はこっちで屋台を出すつもりなんだろう。

お蔭で、夏祭りの楽しみがまた一つ増えた。

（でも、おじいちゃんってちゃんと場所を分かってるのかな？）

夏祭りが開催されるのは、箒の実家である『篠ノ之神社』と言う場所。  
所。

ここからは少し距離があるが、そこまでじゃないので大丈夫。

（……おじいちゃんの事だから、普通に知ってそうな気がする）

伊達に歳を重ねているだけあって、おじいちゃんはかなりの物知り

だ。

この近辺の神社の場所程度なら、全て頭の中にインプットしてるだろう。

(日も暮れ始めてきたし、私もそろそろ出発しようかな?)

家の戸締りをちゃんとしてから、久し振りに草履を履く。

少し歩きにくいけど、これぐらいなら問題無いだろう。

出かける直前に、犬の外務大臣の体に寄り添うようにして、猫の財務大臣が気持ちよさそうに寝ている奇跡のツーショットを目撃したので、迷う事無く写真を撮った。

静かに寝息を立てている犬と猫のコンビは反則だよ……。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

私の実家であり生家でもある篠ノ之神社。

夏休みの間、私は少しだけここにいることになっている。

ここでこうして過ごすのは本当に久し振りで、今となっては何もかもが懐かしい。

昔よく一夏と共に通っていた剣道場もそのままの姿で残っている。

これを見ると、自然と幼い頃の事を思い出すが、今はどうでもいい。

今日、最も重要な事は別にあるのだから。

(きよ……今日はこの神社で夏祭りが開催される。それは即ち、私と弥生が夏祭りデートをする日でもあるという事!)

そう。弥生の家で勉強会を開き、その場で彼女を夏祭りへ誘った日から、ずっと悶々とした日々を送っていた。

自分でもはしたないと分かっている、色んな妄想が頭を過ってしまふのだ。



『この……たこ……焼き……美味しい……よ……』

『私の林檎飴も美味しいぞ』

『それじゃ……あ……食べさせあいつこ……する……?』  
『ええっ!?』

『はい……あくん……』

『あ……あくん……』

なにこれ最高。

弥生と一緒に食べさせあい……絶対にしたい!!!

いや、絶対にする!!! 絶対にだ!!!

「ほ……箒ちゃん? そんな所に立ってどうしたの?」

「はっ!?!」

いきなり声を掛けられて我に返る。

慌てて振り返ると、そこには私の叔母である雪子叔母さんが着物姿で立っていた。

いつ見ても優雅な物腰で、同じ女として羨ましく思ってしまう。

「す……すいません。ついボくつとしてしまつて……」

「別にいいのよ。懐かしの実家ですもの。色々と思いが蘇つたりしても仕方ないわ」

本当にすいません……。

過去の思い出よりも、弥生と過ごす妄想を思い描いてました……。  
「でも、本当によかつたの? 貴重な夏休みなのに夏祭りの手伝いなんかして……」

「それこそ気にしていません。ここは私の家ですし、手伝うのは当たり前です。それに、ジツとしているよりも体を動かしていた方が落ち着きますから」

「あらまあ。そう言つて貰えるところつちも助かるわ。でも、折角の夏祭りなんだから、誰か誘いたい男の子の一人でもいたりしないの?」  
「いえ。男は全くだませんが……」

「女の子ならいる?」

「うっ……」

バレてる……。

昔から、この人だけには隠し事が出来ない……。

「ふふ……。そうよね。今通っている場所は実質的に女子高みたいなものだものね。女の子に恋しても不思議じゃないわ」

「あはは……」

もう乾いた笑いしか出ない……。

「大丈夫よ。誰を好きになっても、私は箒ちゃんを応援するから」

「ありがとうございます……」

本当に、この人には敵わない……。

「もしかして、その子を夏祭りに誘ってたりしてるの？」

「な……。なんでそれを……」

「最近の箒ちゃん、どうも浮かれ気味だったから」

そ……そうだったのか……！

悶々としていた自覚はあったが、浮かれてもいたとは……。

「それなら、その愛しの彼女が来る前に体を綺麗にしないとね。18

時から神楽舞があるから、今のうちにお風呂に入っておくといいわ」

「分かりました」

い……愛しの彼女か……。

なんて甘美な響きなんだ……。

こんなにも素晴らしい日本語がこの世に存在してたんだな……。

それからも頭の中は弥生と回る夏祭りの事で一杯となり、弥生の浴衣姿なんかを妄想しながら風呂に入った。

弥生の浴衣姿……絶対にかわいいんだろうなあ……♡

・

・

・

・

・

「おお……」

夏祭り会場である篠ノ之神社に辿り着くと、思っている以上に賑わっていた。

人も沢山いて、暗くなりかけているにも拘らず、電飾などでとても明るい。

(ここからでも見えるのが、篠ノ之神社の境内か……)

大きいなく。

自分自身が和の家に住んでいるせいか、こういった雰囲気醸し出す建築物はとても好きだ。

木製の家が出す独特の香りは非常に落ち着ける。

(法被を着た夏祭り実行委員っぽい人達が慌ただしく東奔西走して。今から何かあるのかな?)

夏祭りである以上は、屋台以外にも色々イベントが開催されるのかも知れない。

食べ物系屋台の制覇だけを目的にしている私には関係の無い話だけど。

「いい……匂いが……そこら中から……♡」

あつちこつちから魅惑の香りが漂ってきますニヤ々♡

ほんと、どれから行こうか迷っちゃうよ♡

目移りしちゃうニヤ々♡

あ! 早速たこ焼きの屋台を発見! いざ、突撃!!

「お! 可愛いお嬢ちゃんだな! どうだい、お一つ!」

「ください……」

「毎度あり! ここらじゃあまり見かけない顔だけど、ここの夏祭りは初めてかい?」

「はい……」

「そうかそうか! それなら、初めて記念として、一つ多くおまけしといてやるよ!」

にやんと! それはラッキー!

「ありがとうございます……」

「いいってことよ! 可愛い女の子にはサービスしねえとな!」

可愛いは余計です。

でも、たこ焼きサービスは素直に感謝です。

「ん？」

なんだか境内の方が騒がしいような気が……。

「遂に始まったか！ くっそ〜！ 俺も見てえなあ〜！」

「何を……です……か……？」

「そうか。お嬢ちゃんは初めてだから知らないのも無理はねえな。この神社の巫女さんが『神楽舞』を披露してくれてんのさ」

『神楽舞』とはなんぞや。

聞こうとも思ったけど、なんか話が長くなりそうな気がしたので知ってる振りをする事に。

「なんでも、現役的女子高生が巫女さんをやってるらしいんだよ」

……まあ……おじさんも男の人だもんね。仕方ないよね。

それに、この神社で現役女子高生って言えば、私が知る限りでは該当する人物は一人しかいない。

(折角、誘って貰ったんだし……私も少し見てみようかな……)  
箒の普段とは違う一面を見てみるのも悪くは無い。

いつもはこつちが見られてるんだ。

偶には見る側になるのもいいだろう。

「はいよ！ たこ焼きお待ち！ 400円……と言いたいところだが、サービスついでに値段の方も半額にしておいてやるよ！」

「い……いんで……すか……？」

「おうよ！ 構いやしねえさー！」

なんて男気……。

これが祭りの男って奴なのか。

「それじゃ……あ……200円……」

「毎度あり！ また来てくれよな！」

おじさんに手を振られながら、私は屋台を後にした。

ん！ このたこ焼き……美味しい！

外はカリッとしてるのに、中はふんわりとジューシー！

タコもプリップリで最高♡

熱さなんて気にしなくなる程に美味しいよ♡

(よし。境内の方に向かいながら、食べ物系の屋台を攻略していこう) そうと決まれば……次は向こうに見えるかき氷屋さんだ〜！ タコ焼きで油まみれになった口の中を洗浄しないとね。その後にもた粉系の食べ物を食べに行かなくちゃ！

・  
・  
・  
・  
・  
・

「や……弥生……」

「ん」

神楽舞を終えた後、まだ弥生が来るまで時間があると思った私は、巫女服に着替えた後にお守り販売の手伝いをしようと販売所までやって来た。

すると、そこには既に待ち構えていたかのように浴衣姿の弥生が立っていた。

普段は自然な形で流している黒く長い髪を後頭部で纏めていて、浴衣の柄は淡い紫色で朝顔が描かれていた。

もうハッキリ言ってしまおう。

私の想像の100倍以上に、浴衣姿の弥生は可愛かった。

「さつき……の神楽舞……」

「み……見てたのかっ!？」

「ん」

は……恥ずかしい!!

まさか、弥生に神楽舞を見られるとは……。

嬉しさと恥ずかしさが半分半分だ。

「凄く綺麗……だった……よ……」

「そ……そうか……」

今の弥生の方がずっと可愛いわ！

いや待てよ……もしも弥生が神楽舞の装束を身に纏ったら……。

(間違いなく最強に美しい……♡)

私などよりもずっと似合うのではないか？

要領のいい弥生なら、すぐに舞も習得してしまいそうだし。

「ん？」

そう言えば、弥生の腕に幾つものビニールが掛かっているような……。

「なっ!？」

間違いない……あれは、夏祭りに出店をしている食べ物！

もう既にかなり数の店を制覇しているのか……!!

よく見たら、弥生の両手にはそれぞれに焼きトウモロコシとかき氷が握られているではないか。

「さ……流石は弥生。早くも屋台の食べ物を食っているんだな」

「うん。どれ……も美味しい……♡」

なんて幸せそうな笑顔。

やっぱり、弥生は食べている瞬間が一番幸せなんだな。

(前にも鈴辺りが言っていたが、これだけ食べて全く太らないのは本当に凄いな……)

同じ女子として、羨ましいの一言に尽きる。

よくある大食い選手達と同じ胃の構造をしているのだろうか。

「あら。もしかして、その子が箒ちゃんの待ち人ちゃん？」

「ゆ……雪子叔母さん……」

私が弥生と話している間に、後ろから雪子叔母さんがやってきていた。

全く気が付かなかった……。

「成る程ね。確かに、とても可愛らしいお嬢さんね。この子なら納得」

何が？ とは問わない事にしよう。

「えっと……?」

「ああ。この人は私の叔母に当たる人で、雪子さんと仰るんだ」

「篠ノ之雪子です。よろしくね?」

「板垣弥生……です」

「弥生ちゃんね。見た目通り、可愛い名前だわ」

「どうも……」

叔母さんナイス！

照れ顔の弥生をバッチリ脳内フォルダに保存完了だ！

「弥生ちゃんが来てくれたのなら、箒ちゃんは彼女と一緒に行ってきなさいな」

「いいんですか？」

「構わないわよ。箒ちゃんも、弥生ちゃんが来るまでの暇潰しのつもりだったんでしょ？」

「うぐ……」

どこまでこっちの思考を読んでるんだ……。

「そうと決まれば、まずはさっきの舞の汗を流してこないとね。その間に浴衣を用意しておくから」

「お………お願いします」

ここは大人しく叔母さんのご厚意に甘えよう。

これ以上、弥生を待たせる訳にはいかないしな。

「ちよつとだけ待っててね。すぐに来るから」

「大丈夫……です。待ってる間……に……また屋台……を回ってま……すか……ら……」

弥生のドヤ顔からのサムズアップ。

いつもは見れない弥生を沢山見れている!?

今日はアレか!?! 私の人生最高の日なのか?!?

「それがよさそうね。あまり食べ過ぎないようにね」

「了解……です……」

叔母さん。弥生にその心配は本気で無用です。

胃の構造自体が私達とは違いますから。

(急いで支度をして弥生の元まで戻ってこなくては……!)

だが、焦って逆に汗を流すのを疎かにしてはいけない。

弥生に汗臭く思われたくはないからな。

慌てず騒がず迅速実行の精神で準備をしよう！

だから、待っていてくれ弥生！  
私はすぐに戻ってくるからな！



## 楽しい夏祭り（一夏編）

弥生が箒と出会っている頃。

一夏も幕南から多種多様な美少女7人を引き連れて、篠ノ之神社へとやってきていた。

「ここに来るのも久し振りだな……」

小学生の時に篠ノ之家が引っ越して以降、ここには全く足を運ばなかった。

彼がこの神社を訪れるのは、実に6年振りぐらいになる。

だが、そんな懐かしい気分を一撃でぶち壊すのが彼女達だ。

「おお。結構デカイ神社なんだな」

「思っている以上に屋台がでてるな」

「これなら暇はしなくて済みそうだ」

「食べ物系以外にも色々回ろうな」

「だが、くじ引きはダメだ」

「あれは普通に詐欺だしね」

「無駄に金を消費するだけよ」

塩田達6人も以前に予告していた通り、全員が色の違う着物に身を包んでいた。

塩田は純白に桜の花びらが描かれた浴衣を、叶親は紺色に菫の柄。

吉崎の浴衣は薄い桃色に羽が描かれてあり、嶋鳥が来ている浴衣は黄色に向日葵が。

鷹橋の着用している浴衣は水色にシャボン玉が、植村のは情熱の赤にツツジの柄で、桜井は紫に紫陽花の浴衣を着ている。

嶋鳥や桜井以外のメンバーはいずれもかなり髪が長いため、後頭部で纏めてあった。

「なんつー神社なんだっけか？」

「篠ノ之神社ですよ。前に言いませんでしたっけ？」

「そうだっけ。よく覚えてないや」

神社の名前なんてどうでもいい。

要は楽しめればそれでいいのが彼女達。

「こうして入り口で話してても、他のお客さんに迷惑だ。とつと行こうぜ」

「塩田さんがまともな発言してる……」

「おい織斑。それはどーゆーこった？」

「いや……なんでもないツス」

下手にからかっても痛い目を見るのは自分だと分かりきっている為、大人しく引き下がる事を覚えた一夏。

別の意味でも彼は成長していた。

「でも、この時間帯ならもう神楽舞は終わってるかな……」

「神楽舞ってアレ？ 綺麗な服を着て、全身に装飾をしてから刀を持って舞う的な？」

「よく知ってますね、嶋鳥さん」

「正月とかに叶親もやってるしな」

叶親もまた剣士の家系である為、そういったイベントごとにはよくお呼ばれされていたりする。

他の五人もその場に出席し、彼女の舞を毎年のように見ている。

「幕南からここまでは結構距離があるからな。こればかりは仕方がないって」

「だな。夏休みで人も多いし」

なんとも達観した考えを持つ女子高生たちだ。

そんな風になったのも、全てはそれぞれの実家が原因なのだが、本人達は全く気にしていない。

「ちよつち込み合ってきたな。マジで行こうぜ」

「了解」

こうして、一夏達8人の夏祭り堪能ツアーが始まった。

.....  
.....  
.....

夏祭りの会場を歩いていると、一夏にだけ一人でいる男達の醜い嫉妬の視線が集中する。

それもその筈。本人達は全く自覚無しだが、傍から見れば一夏は間違いない美少女達を待らせているラノベ主人公体質野郎にしか見えしていない。

だが悲しいかな。お得意の鈍感スキルをいかんなく発揮し、見事に世の男共の嫉妬の視線攻撃をスルーしている。

「よし！折角の息抜きなんだ！気合入れて遊ぼうじゃねえか！」

「あまり無駄遣いはダメと思うけど……」

「織斑。金持ちを舐めんなよ？」

「うわ。嫌味だ」

桜井以外は紛れもないお嬢様揃い。

金銭的な心配は全く持って皆無である。

「まずはどの屋台に行くか？」

「カタヌキ——！！」

何故か嶋鳥の提案でカタヌキの屋台に行くことに。

流石に最初から難易度の高い物は出来ないもので、10段階中の3番目である女の子の形のカタヌキにチャレンジする事に。

「「「「「「……………」」」」」」」

さっきの大騒ぎから一転。

超集中状態になって全員が静かになった。

ちまちまちまちまちまちまちまちま……………。

「やっと抜けた……」

「地味なんじゃ——」

懸命に頑張つて抜けた一夏の『女の子』が、塩田の怒りの手刀によつて首無し死体に早変わりしてしまった。

「折角の夏祭りなのに、なんで一番最初にするのがカタヌキなんだ——

——！！」

「俺の抜けたのが——!!!」

哀れ一夏。

折角の努力が水の泡になってしまった。

「あら。二人共もう終わったの？ 私ってばぶきつちよさんだから、こんななんなつちやつた♡」

「完全完璧に粉微塵になってるじゃねえか!! なんで機械系は得意なのにカタヌキは壊滅的なんだよ桜井さん!! もうこれぶきつちよさんとかいうレベルを遥かに超越してるだろ!! フードプロセッサかあんたは!!」

「聞いてくれよ織斑! 私、こんなに上手に抜けたつてのに失格だつて言いやがった!!」

「嶋鳥さんは嶋鳥さんで、なんで無駄なデイトールアップしてんですか!! 明らかに普通にカタヌキした方が簡単でしょうが!!」

余談だが、この中で唯一まともにカタヌキが成功したのは鷹橋だけだつたりする。

成功報酬は近所の駄菓子店などで売ってるお菓子だったが、これはこれで満足だつたようだ。

・  
・  
・  
・  
・  
・

次に一夏達が訪れたのは射的場。

数々の景品が並べられている中、一番目を引くのは最新型のテレビだつた。

「射的! これこそ女のロマン!」

「ロマンつて……」

早くもツッコみ疲れてしまったのか一夏。  
なんと情けない。

「うっさい」

そんなやり取りをしていると、吉崎が金を払って射的にチャレンジすることにしたようだ。

「ま。これぐらいなら簡単だろ。ほれ」

「お〜！ 吉崎さん流石ですね！」

吉崎の撃った弾は一発で景品にヒットした。

だがしかし、店主は挑発的な笑みを浮かべて景品を取ろうとしない。

「あく。お嬢ちゃん、それじゃあダメだわ〜」

「は?」

「射的ってのはね、当てるだけじゃダメなんだよ。ちやくんと倒さなきゃ。倒しさえすればどれでも持っていってもいいんだけどお〜……今のはダメエ〜！ 倒れていない景品はあげませえ〜ん！」

この言葉にブチ切れた吉崎は、残った玉を使って店主の人中和喉と股間を撃ち抜く。

人体の急所を三連続で直撃した店主は、そのままバタリとその場に倒れた。

「倒したぞ」

「持っていく〜」

「いやいやいや！ ムカつくのは分かるけど、ちよつとやり過ぎでしよ!」

「こいつが言ったんじゃねえか。倒しさえすればなんでも持っていっていいって」

「おじさんは店の景品じゃねえよ!」

持っていくことはしなかったが、塩田が去り際に『当てるだけでもOK』を書いた紙を店に貼り付けて言った為、その後は客足が増えたという。

その代わり、あつという間に景品は無くなっていったが。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「思ってた以上に人が集まってんだな」

「ここらじゃ有名な神社なのかな？」

じゃんけんで負けた一夏が全員分の飲み物の買い出しに行っている間、塩田達はベンチに等に座って喧騒を眺めていた。

「屋台の種類が豊富で暇しないな」

「全くね。てつきり、粉もの三巨頭である『たこ焼き』と『お好み焼き』と『焼きそば』だけが締めてると思ってた」

「一応、それらの屋台もあったけどね」

「焼きそばと言えば、総理って今年も焼きそばの屋台をするのかな？」

「また食べたいなく。総理の焼きそば」

話題が総理の焼きそばにシフトした頃に、一夏が買い出しから戻ってきた。

「戻ってきました〜！ ちゃんと全員分のドリンク〜！」

「お！ 待ってました！」

「あ〜……重たかった〜……」

なんせ8人分のドリンクだ。

持ち運びするだけでも、普通に疲れるだろう。

「お〜！ これだよこれ！ この合成着色料たっぷりのドリンク！ これぞ祭りって感じだよな〜！」

「塩田さんの発言が女子高生っぽくない……」

「ツッコんだら負けだよ」

歳相応にワイワイしながら喉を潤していくと、植村の視線の先にある屋台が見えた。

「ねえ、あれって何？」

「どれだ？」

「アレだよアレ」

彼女が指差したのは、飴細工の屋台だった。

粘土のように柔らかい飴を自在に変えて、色んな形にする屋台だ。

鷹橋がそう説明すると、植村の目が急に輝きだす。

「面白そう！」

「なら、次はあそこに行くか？」

「うん！」

特に反対意見も出なかったので、次の目的地は飴細工の店に決定。

ドリンクを飲み干した一行は、早速行ってみることに。

「ほお〜……」

店には動物や乗り物の形をした飴が飾られていて、造形だけでなく普通に美味しそうでもあった。

「いらっしやい」

「これ、おじさんが全部したのか？」

「勿論さ。例えば……ちよちよいつとな」

店主のおじさんは、あつという間に可愛い女の子の飴細工を作り出した。

それは紛れもなくプロの技だった。

「すごいな。俺達にも出来るかな？」

「金髪のお嬢ちゃん。試しにやってみるかい？」

「いいのか？」

「おう。お嬢ちゃんみたいな可愛い子にはサービスしてナンボだしな」

「言うじゃねえか。さっきの射的場とは大違いだぜ」

おじさんから何も細工されていない割り箸に刺さった飴を受け取り、試行錯誤して色々と動かしていく。

「ここをこうして……こうか。んでもって、ここはこうなって……つと」

「おお〜……。結構やるじゃねえか、お嬢ちゃん」

「まあな。オレにかかれればこれぐらい……つてな」

「あれ？　なんかどつかで見た事があるような形に……」

数分後。完成したのは……。

「よっしゃ出来た！　織斑一夏飴!!」

ケツに割り箸が刺さって悶絶している一夏の姿を現した飴だった。「割り箸の存在を強調すんなよ!!」

当然の主張。

だが、それが通らないのは既に経験済み。

「中々に筋がいいじゃねえか。そいつは記念にタダでくれてやろう」

「あんがとな。んじや織斑、これ食べる」

「自分のこんな痴態を食べろと言うのか!？」

「アメちゃん……」

「ダメエエエエエエエエエ!!　幾ら植村さんがお菓子大好きっ子で

も、これだけはあげられね——!!!」

だろうな。

自分のケツに割り箸が刺さった姿を模した飴を女の子に食べられたら、普通の男は一生立ち直れないかもしれない。

結局、この飴は一夏が仕方なく食べましたとき。

食べている最中、一夏はとても悲しい気分になったとか。

・

・

・

・

・

「こんだけ回っても、まだ色々あるぞ……」

「奥深いな……篠ノ之神社の夏祭り」

飴細工屋の近くにあった焼き鳥の屋台で一本ずつ焼き鳥を購入して歩いている一夏達。

未だに男達からの嫉妬の視線は継続中だ。



「ここつて何時までやってるんだ？」

「確か……夜の八時ぐらいまでだったと思います」

「なんか曖昧だな」

「この神社に来ること自体が相当に久し振りなもんで」

「それならしやーねーか」

今はもうのんびりとぶらついている感じになっている面々。

それでも、まだ帰る気は無いようだ。

「今度はどこに行こうか………ん？」

「鳴鳥？ どうしたんだ？」

「なんか……向こうから見覚えのある奴が来てるような……」

「見覚えのある奴？」

鳴鳥が指差す方向には、二人組の浴衣を着た少女達が歩いてきていた。

その姿を見た途端、一夏が目が大きく見開かれた。

「あ……あれはまさか!？」

「お前、こつから見えるのか？」

「見間違うわけがない……！俺が間違う筈がない！」

「お……おおい？ 聞こえますか？」

完全に自分の世界に入った一夏。

もう誰の声も聞こえていない。

「弥生い~~~~!!!」

「~~~~え?~~~~」

一夏以外の全員が驚いていると、向こうの浴衣の二人組も驚いているようだった。

早歩きになったのか、段々と二人の姿が明らかになっていく。

「マジかよ……」

一夏達が発見した二人組とは、浴衣を着て一緒に歩いていた弥生と箒のことだった。

偶然か必然か。夏祭りの会場で出会ってしまった弥生と一夏。

これからどうなる？

## 幕南名物『総理の焼きそば』

なくんか見覚えのある顔がこっちに手を振ってくるから誰だと思ったら、何故か前に千葉県でバイトをしていた一夏クンじゃないですか。

しかも、また塩田さん達も一緒にいるし。

「なんでアイツがいるんだ……」

おつふ。箒さんや。気持ちは分かるけど、そこまで露骨に嫌な顔をしないでいいんでない？

流星にほんのちよびつとだけ同情しちまったのぜい。

「……行くか？」

「一応……」

ここで行かないと、向こうから走ってきそうだし。

それはそれで目立つから嫌だ。

だったら、自分から行った方がまだマシだ。

「ハア……折角、弥生と二人きりだというのに……」

「まあ……まあ……」

私も、箒と二人でお祭りを回れたのは普通に楽しかったけど、最近はいくらか賑やかなのも嫌いじゃなくなってきた。

言つとくけど、あくまで『少しだけ』だからね？

因みに、箒はさつきまで着ていた巫女服じゃなくて、彼女のおばさんが用意してくれた浴衣に着替えている。

元々が『THE・ヤマトナデシコ』って感じだったのに、浴衣に着替えた事でよりそれが強調された感じ。

簡単に言っちゃえば、絶対に私よりも浴衣が似合ってるって事です。よ。

「いや〜驚いたよ。まさか、弥生もここに來てるなんてな」

「それはこっちのセリフだ。なんで一夏がここにいる」

「ちよつち夏祭りが恋しくなってるな。ところで、箒が弥生の事を誘ったのか？」

「そうだが。それがどうした？」

「ナイス。浴衣姿の弥生を見れたから超大満足です」

「弥生。今すぐこの男から離れる。妊娠してしまうぞ」

「しないよっ!? 箒は俺の事をどんな風に思ってるんだよっ!?」

「弥生の体を狙っている変態」

「ひでえ!」

遭遇して数秒でコント開始ですよ。

やっぱ、この二人って相性いいんじゃない?

「なん……で……塩田さん達……も……いる……の……?」

「織斑がここの夏祭りに行きたいって言ったもんだからさ、ついでに俺等も一緒に行こうって話になったんだよ」

「へ……えく……」

もうさ、私に執着しないで塩田さん達の中から選べばいいんじゃない?」

あ、この人達って既にリア充だったつけ。

桜井さんは……なんかダメ。私が許さない。

「んで、さつきから織斑とコントしてる美少女は誰よ?」

「私……のクラスメイト……の篠ノ之……箒……さんだよ……」

「篠ノ之箒ね。……ん? 篠ノ之?」

「もしかしてさ、この篠ノ之さんってこの神社の子だったり?」

「正解……」

「だよな。篠ノ之なんて名字、滅多に無いもんな」

あれ? 名字繋がりで箒が束さんの妹だって気が付かなかったのかな?

それとも、気付いていて敢えて無視してるとか?

「おい織斑。コントはその辺にしとけ」

「コントって……」

傍から見たら立派なコントだよ。

「む? お前の周りにいる女子達は誰だ?」

「えっと、この人達はな……」

「あく……自己紹介ぐらい自分ですよ」

……ここで塩田さん達と箒の自己紹介タイム。

名前だけ名乗ってたので、すぐに終わったけど。

「成る程……千葉県からこっちにか……。遠かったろうに」

「特急で来たから大丈夫」

特急って……。

そこまでして来たかったの？

「それで、そこにいる桜井さんが、中学時代に弥生と同級生だったと」

「その通り。昔の弥生の事は一杯知ってるわよ」

「ほ……本当かつ!!」

「その反応……そっか。弥生はソツチでもやってるのね」

何がですか。別に私は何もやってないよ。

「後で色々教えて……あ・げ・る♡」

「よろしく頼む……!」

なんか妙な同盟が結成したし。

なんじゃこりや。

「なんか一気に大所帯になってしまったな」

「しかも、織斑以外は全員が女子だしな」

「織斑に向けられる男共の視線、明らかに殺気と嫉妬が混じってるし」

みたいね。当の本人は全く気が付いてないけど。

こんな所でも鈍感スキルって発揮されるのね。

「早めに移動した方がよさそうだな」

「とつても、どこに？」

「あ……の……」

「どうした弥生？」

「おじいちゃん……も屋台……を出してる……みたい……だから……」

行かない……?」

「「「「マジでっ!!」」」」」

うおうっ!!? そこまで反応するっ!!?

「総理の屋台って事は、勿論出してるのは……」

「焼きそば一択だな」

「すぐに行こうぜ!!」

いきなりテンション上がったね。

でも、気持ちには分かるよ。

私もおじいちゃんの作る焼きそば、大好きだもん。

「あの話……本当だったんだ……」

「そ……総理の焼きそば？」

行き先が決定したので、早速移動開始。

え？ 屋台の場所は分かるのかだつて？

そんなの、匂いで分かる!!

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「さつきは言いそびれてたけどさ、浴衣姿の弥生も凄く可愛いぜ」

「それ……は……どう……も……」

なんでそんなセリフを素面で言えるのか、マジで謎なんですけど。

同じように浴衣を着てきた箒にも言つてあげなよ。

勿論、私はちゃんと言いましたよ？

そしたら、彼女の顔が急沸騰しちゃったけど。

「つーか弥生。オレ達と会うまで、どれぐらい食べた？」

「えつと……たこ焼き……綿飴……箸卷……焼きトウモロコシ……唐

揚げ……林檎飴……アイス……焼き鳥……それから……」

「……もういい」

「聞いているだけでお腹いっぱいだわ……」

「相も変わらず、弥生の大食いは健在だつて事か」

「ガチで世界狙えるんじゃない？」

いやいや。もっと食べる人なんて沢山いるから。

私は好きで食べてるだけだしね。

「ところで、こっちで本当に合ってるのか？」

「間違い……ない……。ソース……の匂い……が漂って……くる……」

この特製ソースの匂いは絶対に間違えない！  
だから、こっちで合ってる！

「見えて……きた……」

「ホントだ……」

これまでに何度も見てきたカラフルな屋台。  
焼きそばの焼けるいい匂いがここまで来てる。

「いい匂い♡」

「食欲がそえられるね〜」

匂いに釣られて少し早歩きに。

すると、屋台の中にいたのはおじいちゃんだけじゃないのが分かった。

「お。やっと来たのう」

「いらつしやい。弥生ちゃん」

「矢禿……さん……」

吉六会ナンバー2の矢禿康介さん。

アフロなカツラが特徴的な凄い人。

まさか、おじいちゃんの手伝いをしてとは思わなかった。

「お久し振りです、総理！」

「矢禿さんも来てたんだ」

「バイトですか？」

「似たようなもんかな？」

この人はファミレスでも働いてるのに、立派な人だよ。

「ほ……本当に総理が屋台で焼きそば作ってる……」

「聞いた時は俄かには信じにくかったが……」

「それよりも、屋台に書いてあるのって……」

【幕南名物『総理の焼きそば』】

「そのまんまだ——！！」

やっぱり息ピッタリじゃん。

そのまま付き合っちゃいなよYOU達。

「おお！ 君達も来とったのか！」

「ど……どうも。じゃなくて！」

「こんなストレートな名前でいんですか!？」

「構わんよ。誰もワシが本当の内閣総理大臣だとは思わんしの」

「それでいいのか……」

それでいいんだよ。

実際、今までもどうにかなってるしね。

「ところで総理。売り上げはどうツスカ？」

「中々に順調じゃよ。じゃが、もう少し来てほしいのう……」

「だったら、弥生ちゃんに食べて貰えばいいんじゃないんですか？」

いつも美味しそうに食べてくれる彼女なら、普通に食べてるだけでも

十分に客引きになると思いますけど」

「それが最善かもしれんの。弥生にサクラをさせるようで気が引ける

が……」

「私……は別にいい……よ……?？」

美味しい焼きそばをタダで食べれるんだから、文句なんて言うわけがないですよ。

「どうせなら、他の皆にも食べて貰おうかの」

「いいんですか？」

「なあに。構わんよ。折角こうして来てくれたんじや。最初の一杯ぐ

らいは奢ってやるわい。二杯目からはちゃんと払ってもらうがの」

「よっしゃー！」

「態々来た甲斐があつたな！」

「私的には助かるわ。今月ちよつとお小遣いがピンチだったのよね」

てなわけで、ここにいる皆の分の焼きそばが作られる事に。

凄く手慣れたるから、あつという間に出来立てホカホカ焼きそばが皆の手に行き渡った。

「これが総理の焼きそば……」

「見た目はめっちゃ美味しそうだ……」

割り箸を口に咥えて割ってから……。

「「「「「いただきま〜す♡」」」」」」

ん〜♡ いつ食べても本当に美味しい♡

「い……………いただきます……………」

一夏と筭も食べ始めたみたい。

さあ、おじいちゃん焼そばの前にはひれ伏すがいい!

「ん?」

(最初は総理の焼そばと聞いて、少し不安を感じていたが…………)

(一口食べたらずり越し苦労!!)

(止まらない! 食欲が!!)

どうやら、一瞬で焼そばの虜になったみたい。

分かる。分かるよ、その気持ち。

私も最初に食べた時は同じ気持ちだったからね。

「うめ〜♡」

「これなら幾らでも食べられるわ〜♡」

塩田さん達も嬉々として食べ続けている。

あの人達もおじいちゃんの焼そばが大好きだからね。

「総理! この焼そば、めっちゃ美味しいです!! マジで尊敬します!!」

「こんなにも美味しい焼そばを食べたのは生まれて初めてです!」

「はっはっはっ! そうじゃろう、そうじゃろう」

そうして食べていると、早速効果が現れ始めてきた。

道行く人たちが足を止めてこっちを見ているから。

「なあ…………あの美少女集団が食ってる焼そば…………ちよー美味そうじゃね?」

「凄く美味しそうに食ってるよな…………ゴクリ…………」

最初の人達が立ち止まり、そこから徐々に人だかりができた。

「焼そばか…………美味しそうだな…………」

「お母さん〜。あれ食べたい〜」

「あれ…………食うか?」

「うん。なんか急にお腹空いてきたかも」

親子連れにカップルと、兎に角大勢の人達が集まってきた。



もうそろそろ、私達の出番は終わりかな。

「よし。少し横に行こうぜ」

「ん」

塩田さんの提案で、少しだけ横にずれた途端、急にお客さんが押し寄せてきた。

「あの！ 焼きそば一つください！」

「こっちも一つ！」

「俺にも頼む！」

「はいはい！ 押さないでくださいね！」

「すぐに作るから待っててほしいのじゃ！」

本領発揮と言わんばかりに、凄まじい勢いで焼きそばを作っている、それが次々と売れていく。

まるで、早送りの映像を見ているみたい。

「うんまあ〜いい!!」

「こいつはうめえ!! 最高に美味しい匂いがプンプンするぜえ〜!!」

「あああ〜くん!! 美味しいiiiiii♡」

「この美味しい焼きそばを作ったのは誰だあ!!」

多種多様な反応をするのね……。

ユニークなお客さんがいるもんだ。

「忙しそうだし、私達はそろそろ行こうか」

「それがよさそうですね」

行く前にちよつとだけおじいちゃん達に目配せをして、向こうに行く旨を伝える。

すると、軽く頷いて返事してくれた。

さして、今度はどこに行きますかね。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

おじいちゃんの屋台から離れた、少し開けた場所にて焼きそばを食べ終えた私達は、これからどうするか話し合っていた。

「なんか腹が膨れてきたな」

「ちよつち限界かも……」

そう？ 私はまだまだ余裕ですけど。

皆、小食なのね。

「じゃあ……検索……する……？」

「検索？」

「ん。私……のスマホ……なら出来……る……」

「あく。弥生のスマホって総理のお手製だったっけ」

「スマホまで手作りなのかよ……」

「あの総理、万能すぎないか？」

私の自慢のおじいちゃんだからね。

はい。そんな訳で検索開始つと。

「周辺……にある……食べ物系……の屋台……を教えて……」

「「やっぱりか」」

そこの幼馴染コンビ。やっぱりとはなんだよ、やっぱりとは。

『検索中……完了』

「早っ！」

『検索結果。焼きそば一件。たこ焼き二件。焼き鳥一件。箸焼き一件。かき氷三件。アイス一件。林檎飴一件。綿飴一件。焼きトウモロコシ一件。イカ焼き一件。唐揚げ一件。ポップコーン一件。ハンバーガー一件』

「結構あるんだな……」

「つーか、ハンバーガーって……」

「最近じゃ割と珍しくは無いけどさ」

まだまだ食べてないのがあるんだな。

なら、まずはまだ制覇してない屋台を中心に……。

『ラーメン一件』

……………は？

「ラ……ラーメンって言ったのか？」

「私にはそう聞こえたけど……」

「ほ……箒。篠ノ之神社の祭りって、ラーメンの屋台も出してたっけ？」

「いや……そんな記憶はないが……」

「それ以前に、夏祭りにラーメンの屋台って……」

ラーメン……ラーメンだと……。

「それ……は豚骨……？」

『はい』

とんこつ……とんこつラーメン……。

「食べる」

「え？」

「食べる。食べる。食べる」

「お……おう。分かったから、落ち着け。な？」

夏祭りで食べるラーメン……中々に乙じやないのさ。

暑いからこそ熱い物を食う。

そんな人間に私はなりたい。

「弥生の食欲エンジンに火が着いたな」

「こうなった時の弥生は止められない」

「大人しく従いませよ」

早く行きたい！ 早く行こう！

「あれ？ もしかして……一夏さん？」

「蘭？」

！  
なんだかどっかで聞いた事のある声で、僅かにしようきにもどった

でも、一夏の事を知ってる赤毛の女の子は誰？

なんか見た事があるような……思い出せないなく……。

## ラーメン大好き板垣さん

弥生達が蘭と遭遇している頃。

絶賛、夏祭りの真つ最中の篠ノ之神社の片隅に、明らかに場違いな一台のラーメン屋台が強烈な存在感を放っていた。

その屋台で働いているのは、二人の見目麗しい女性達。

「へいらっしやい!!」

「いらっしやいませ〜」

スコール・ミューゼルとオータム。

以前にも名前が出てきた二人が、どうしてこんな場所でラーメンを売っているのか。

それには、海よりも高く、山よりも深い（誤字に非ず）理由がある。

そもそも、二人は嘗て『亡国機業』ファンタム・タスクと呼ばれる、一種のテロ組織の

ような団体の一員だった。

しかし、ある時突然やって来た姉妹『ラケシス』と『アトロポス』によつて、あつという間に組織が掌握されていった。

二人共、歴戦の強者だったが故の勘の良さで、すぐに姉妹がかなりの危険人物だと察して、自分達の上の存在に掛けあおうとしたが、彼等も既に姉妹によつて懐柔済みだった。

もうこの組織は終わりだ。

そう判断したスコールとオータムは、最悪の事態になる前にもう一人の仲間である少女と共に組織を離脱し、裏切り者の烙印を甘んじて受け入れた。

それから三人は、少女の本来の目的を手伝いながら、なんとか反撃をしようと試みたのだが、姉妹の行動は想像以上に早かった。

まず、銀行口座やカードなどを全て使用不能にし金銭面で追い詰め、更にはスコールが経営していたホテルまで買収し、自分達の支配下に。

完全に後ろ盾と金が乏しくなった彼女達は、辛うじて逃亡生活を続けながら金稼ぎに勤しんでいるわけなのだが……。

「なんで……よりもよつてラーメンなのよ……」

「別にいいじゃんか。夏祭りでラーメンの屋台を出して何が悪い！」  
「いや……私が言いたい事はそんな事じゃなくて……いや、いいわ……」

今まででも色んな仕事をしてきたが、まさかラーメンの屋台をする羽目になるとは。

スコール・ミューゼル。初めての屋台である。

そんな二人の屋台にお客さんがやって来た。

「お？ ラーメン？」

「へい！ 何にしましよー」

「何があるんだ？」

「これっす」

そう言っただけなのは、独特の香りが漂うとんこつラーメン。

「……他、無いの？」

「無いっけ？」

「バリエーションの事？ 今出来る事って言ったら、精々が玉子を足すとか、チャーシューの増量程度だけ……」

「しまった。ちゃんとお品書きをプロデュースするのを忘れてたわ。なんせ、この店舗を確保する経緯がかなりドタバタだったからなく」

……

……

……

……

……

「え？ ここに置いてトイレに行っている間に屋台が無くなっていた？ 随分と大胆な泥棒やね〜」

「ううう……俺の屋台……どこに行っちゃったんだよ……」

・

・

・

・

・

「まいど〜！ ありがとうとごごいやすたく〜！」

ラーメンを食べ終わった客が満足そうに去っていく。

どうやら、味の方は大丈夫のようだ。

「なあスコール。ラーメン屋の屋台ってそんなに珍しいかね？」

「知らないわよ。私、生粋のアメリカ人だし」

「それもそっか」

さっきの客が食べた器を洗いながら、麺の確認をするオータム。

その手つきは完全に熟練者のソレであり、もしかしたら昔、どこかでバイトでもしていた経験があるのかもしれない。

「夏の夜に響く祭りの音！ 宴の声！ むせ返すような豚骨臭！！ い

やく〜！ マジで癒されるな〜！」

「それは絶対に貴女だけよ」

アメリカ人にはとんこつラーメンの素晴らしさを理解するのは難しいかもしれない。

いつの日か、彼女もラーメン好きになるのを期待しよう。

なんて言っていると、またお客さんが。

「おう。二枚くれないか」

「へい！・ らっしやーせー！」

最早、完全にプロと化したオータムは僅か一分足らずで見事なラーメンを作り上げた。

「ねーちゃん。中々にいい手並みだね〜」

「はっはっはっ！ これぐらい朝飯前だぜ！」

「お？ 結構いけるな」

「こんな所にラーメン屋とはな」

「珍しいけれど、偶にはいいかもな」

「普通は見えないですよ。夏祭りの会場には」

「いやはや。何事も冒険が大事だよ」

言いたい放題であるが、これはこれで読者諸君の心の声を代弁しているのではなからうか。

「スコールく……。なんか勝手に冒険呼ばわりされてるんだけど」

「実際にかかなりの冒険してるんだから、否定は出来ないじゃない」

「それはそうだけど……」

「そう言えば、買い出しに出かけたマドカはまだかしら？」

「この辺は初めてだから、迷ってるのかも。ま、アイツなら大丈夫だろう」

「それもそうね」

なんて、呑気な事を話しながら、二人はラーメンを作り続けるのであった。

.....

.....

.....

.....

.....

「蘭？ 来てたのか」

「お久し振りです。お兄から千葉県に合宿に行ってるって聞きましたけど」

「合宿ね……。ある意味、間違ってるけど」

合宿とな？ そんな事をしてたの？

自主的に合宿なんて……。なんて物好きな奴だ。

私には到底真似出来そうにないや。

っーか、この子って誰だったっけ？

どこかで見た事があるような気がするんだけど……。

「おい織斑。誰だよ、この子は」

「あ。この子は俺の親友の妹の……」

「あ〜！もしかして、あの時ウチに来てた弥生さんですか!？」

「え？」

いきなりこっちに矛先が向きましたよっ!？」

私、過去にこの子と会った事なんてあったっけ？

「……………親友の妹の『五反田蘭』です」

「お前、一瞬でアウト・オブ・眼中になったな」

そこは言わないであげようよ、吉崎さん。

「弥生。知り合いか？」

「ううん……。会った事……は無い……と思う……よ……?」

「そっか。あの時はご飯を食べに来ただけでしたもんね。知らないのも無理はないか……」

なんか、相手だけが一方的に知ってるって変な感じ。

なんとも薄気味悪いね。

「ほら。前に弥生が外の食堂に食べに来た時があっただろ？ 五反田

食堂って……」

「ああ……」

友情セットを食べたお店ね。

うんうん。よく覚えてるよ。すっごく美味しかったからね。

また食べに行きたいな〜♡

「あそこの家の娘なんだよ。んで、この子の兄貴が俺の親友なんだ」

思い出した。確か名前は五反田弾って言ったっけ。

そんでもって、その妹の名前が確か……。

「初めまして！ 五反田蘭と言います！」

「えっと……板垣弥生……です……」

「知ってます！ 前に一夏さんとお兄に聞きましたから！」

え？ そうなの？ いつの間に。

「あはは……」

そこで苦笑いしてる男子。



勝手に人の事を言いふらさないでよね。

「五反田って……あの赤髪君の妹か。道理で似てると思った」

「なんだ。鷹橋はこの子の兄貴を知ってるのか？」

「前に塩田と織斑と一緒に買い出しに行った時に偶然会ってね。塩田の正体を知って愕然としてたよ」

「言うなっつーの。あれは向こうが勝手にイメージして、勝手に驚いただけだろうが」

ああ。きつと、塩田さんの『あの話』を聞いて、それで怖い妄想が膨らんでたけど、実際に見た塩田さんが相当な美少女だったもんでどんな反応していいか分からなかったんでしょ。

塩田さんの『伝説』を知ってる人って、大半が同じような反応するよね。

「こうして間近で見ると、本当に弥生さんって美人ですよ。なんだか憧れちゃうな」

「そ……う……？」

別に私は誰かに憧れるような人間じゃないと思うけど。

「ところで「夏さん。近くにいます美少女軍団はなんなんですか？」

「「「専属コーチです」」」

「私は単なる知り合い。んでもって、弥生の中学時代の親友」

「弥生さんの親友っ!？」

反応するのソッチ!？」

「弾はどうしてるんだ？ 一緒に来てるのか？」

「私が出る頃はまだ家にいましたけど」

「って事は来てないのか」

「多分」

お兄ちゃんの方はいないのね。

いい機会だから、一目ぐらい見ておきたかったけど。

「まやもや、私の知らない弥生の交友関係が……」

いや。今回ののは向こうが一方的に知ってただけですからね？

「あれ？ あの子達どこに行ったのかな？」

「どうしたんだ？」

「いえ。実は今日、学校の皆と来てたんですけど、どこにも見当たらないくて」

あらら。それは大変だ。

蘭ちゃんのはぐれたのか。もしくはお友達がいなくなったのか。

どちらにしても、すぐに探してあげなきゃ。

「あのさ……。それってもしかして、さつきからずっと物陰からこっち見てる、あの子達の事だったりする？」

「え？」

叶親さんが指差す場所には、浴衣を着た女の子達が物陰から頭だけを出してトータムポール状態でこっちを見ていた。

「会長に百合の花が咲いてる……。♡」

「これは大スcoopだわ……」

「つーか、あの美少女だらけの空間は何よ……」

「あれ？ 会長と話してるあの美少女、どこかで見た事があるような気が……」

……。探す必要は無かったみたいだね。

「アンタ達〜！ そんな所で何してんのよ〜！」

「きゃ〜！ 会長が怒った〜！」

「逃げろ〜！」

「ごゆっくり〜！」

「お幸せに〜！」

言いたい事だけ言って、走り去って行ってしまった……。

浴衣のまま走ったりして、こけたりしないのかな？

「はあ……。全く……」

「苦労してんだな」

「はい……。別に悪い子達じゃないんですけど、ちよつとふざけ過ぎるのが玉にキズと言いますか……」

「中学の時なんて、そんなもんよ。実際、中学時代の弥生の取り巻きの子達も似たようなもんだったし」

「取り巻きっ!?!」

懐かしいねえ〜。

名前は知らないんだけど、よく美味しいクッキーとかくれたから、割と印象には残ってるんだよね。

「そ……そう言えば、皆さんはどこに行こうとしてたんですか？」

「ラーメン屋」

「ラーメン屋っ!？」

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「いいのか？ 一緒に行かなくても」

「構いませんよ。後でちゃんと落ち合うようにメールはしておきました。今は弥生さんと一緒にいたいんです」

「ストリートに言うなあ……」

あの後、蘭ちゃんも私達に加わって、一緒にラーメン屋台へと行くことに。

道中でさつきみたいに自己紹介をしあっていたけど、何故か箒と蘭ちゃんの間で火花が散ってたような気がするのには気のせいかしら？

「あ。あれじゃないか？」

一夏の指した場所には、いい匂いを漂わせる屋台がぼつんと立っていた。

間違いない……！ あれが私達の約束の場所だ！

「へい！ いらっしやいま……」

これはまた珍しい。若い女性二人組の屋台とは。

それがラーメンともなれば、もっと珍しい。

なんか急に後ろ向いてコソコソとし出したけど。

(おい！ なんでよりもよって板垣弥生がここにいるんだよっ!?)

(知らないわよ！ こつちが聞きたいぐらいよ！)

(よく見たら、一緒にいるのって例の織斑一夏に篠ノ之箒か？)

(みたいね。一緒にクラスらしいし、この神社も……………あ)

(ど……………どうした？)

(ここの名前……………篠ノ之神社って言わなかったっけ？)

(そうだけど……………あぁっ!?)

早くラーメン食べたいなく。

まだかなく。お腹空いたなく。

(全く気が付かなかった……………)

(自分のアホさ加減に嫌気がさすわね……………)

(どうする?)

(ここは普通を装って、何も知らない振りを通しましょう)

(賛成)

あ。やつとこつち向いた。

「いや〜。悪かったな。ちよつと麵の在庫とか調べてたんだ」

「そうっすか……………」

「それで、何にする？」

「弥生」

「ん。ラーメン……………一つ……………ください……………」

「あいよ！」

おお！ この女の人、かなりの腕前と見た！

手つきが凄く手慣れてる！

「こつて匂い的にとんこつラーメンですよね。他には何があるんですか？」

「何もねえよ」

「へ？」

「ここはとんこつラーメン一つだけだ」

「な……………なんで？」

作者の名前だから

「大人の事情だ」

「はあ……………」

なんか、変なルビが見えた気がしたけど。

「あら。そこにいるのは板垣さんですか？」

「小泉さん……う？」

いきなりやって来たのは、私の食べ友である女の子の小泉さん。長い髪を後ろで束ねて、ピンク色の可愛い浴衣を着ている。

うん。最高によく似合ってます。

「知り合いか？」

「ん」

「初めまして。板垣さんの食べ友の小泉と申します」

「あ……織斑です」

小泉さんの雰囲気にも飲まれて、一夏も反射的に敬語になってるし。

「また新たなライバルが……」

箸は箸でどうしたの？ ラーメンが食べたくなつた？

「板垣さんならば、必ず来ると信じていました」

「この出……会い……は必……然……」

「その子も注文するのかしら？」

「はい。ラーメンを一つください」

「了解。少しだけ待っててね」

きつと、小泉さんもこの匂いに釣られてきたんだろう。

「この近辺のラーメン巡りをしていたら、この神社から凄く美味しそうな匂いが漂ってきたもので。まさかと思い来てみれば案の定でした」

やっぱりね。私達はラーメンで繋がった同志なのだ！

「またもや弥生さんのお知り合いが……。しかも、とんでもない美少女……」

蘭ちゃんは何を戦慄してるの？

もしかして、同じ食べ物系の店の子として、このラーメンの味が気になるのか？

「はいよー。ラーメン一丁お待ち！」  
待ってました！

それじゃあ……いただきます♡

## 特別編 弥生のバレンタイン（前編）

その日、弥生は学生寮にある食堂の厨房を借りて、ある物を製作していた。

「これ…でよし…つと……」

チョコが載ったトレイを冷蔵庫に入れてから一息つく。

そう、これはバレンタインへ向けてのチョコレートだった。

と言つても、これはあくまで友達にあげるチョコ、俗に言う『友チョコ』。

決して本命ではないことは明記しておこう。

とはいえ、友チョコだからと言つて妥協はしないのが弥生。

元々から料理が得意な彼女が製作する数々のチョコは、かなり本格的な仕上がりになっている。

普段から世話になってる皆へのお礼の気持ちを込めているので、自然とチョコ製作にも力が籠つてしまう。

「冷やし…ている間……に……もう一個……」

作業の合間にもう一つの作業をする。

少しでも時間を短縮する為に、無駄のない動きで次の工程に取り掛かっていった。

「バレンタイン……か……」

バレンタインデー。

それは、弥生にとって良くも悪くも色んな思い出がある日でもある。

あれは、彼女が中学二年生の頃だった……。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

過去の話を読んだ事のある読者諸君ならば知っているだろうが、中学時代の弥生は高校時代の時とは比較にならない程に同性にモテまくっていた。

本人にその自覚は微塵も無かったのだが。

先輩、後輩、同級生の区別なく、兎に角数多くの女子生徒から思いを寄せられていた弥生の元に、バレンタインチョコが集中するのはある意味で自明の理だった。

中学二年生の時のバレンタインデー。

その日、弥生は桜井と一緒に仲良く並んで登校していたのだが、その笑顔は下駄箱を見た途端に凍りつく事となった。

「なっ……!?!」

「うわあ……これはまた……」

普段は弥生の上履きが入っている筈の下駄箱に、溢れんばかりの包装されたチョコが入っていたのだ。

よく見たら、入りきれずに床に置いている物も幾つかある。

「ある程度の想像はしてたけど、これは凄いわね……」

「上履き……」

「え?」

「私……の……上履き……どこ……?」

ちよつと涙目になって自分の上履きを探す弥生。

桜井が下駄箱の上に乗っている弥生の上履きを無事に見つけ出して事なきを得た。

もしも、ここで弥生が泣いていたら、別の意味で大参事になっていただろう。

一応、チョコは全部回収してから教室に行くと、そこでも驚愕の光景が。

「あ〜らら」

「はあああ……」

弥生の机には、下駄箱以上に多くのチョコがあったから。

机の上には勿論、横にある左右の荷物掛けには紙袋が掛かっていて、その中にもチョコがギッシリ。

机の中にも沢山のチョコレートがおしくら饅頭をしていた。

トドメは、椅子の上にもチョコの箱が見事なタワーを形成。

凄いバランスで屹立している。

だが、その中でも一際目立つ巨大な箱が傍にあった。

「なに……あれ……」

「明らかに等身大サイズよね……」

箱の正面が透明になっているようなので、前に回って中身を確認して見ることに。

すると、箱の中には驚きの品が入っていた。

「なんじやこりやあああああああああああああつ!?」

思わず弥生も叫んでしまうが、それも当然の事。

巨大な箱の中身は、なんと、弥生の姿を模した等身大のチョコ立像だったのだ。

細部にまで拘っていて、かなりの再現度である。

明らかに女子中学生の仕事ではない。

「い……一体誰が、こんなアホな代物を……」

桜井も呆れてものが言えなくなる。

この明らかに場違いなチョコを贈った犯人は……彼女だった。

「フフフ……♡ 我が四十院家が総力を結集して製作した『等身大弥生さんチョコ』。喜んでくれるかしら……」

弥生のストーカーをしている少女、四十院神楽その人だった。

どう考えても、好意が間違った方向にぶっ飛んでいる。

「これ……どうし……よう……」

「このままあっても邪魔なだけだし、取り敢えずは教室の後ろに置いておくしかないんじゃない?」

「だよ……ね……」

弥生と桜井で力を合わせて箱を持ち上げて、後ろの方に持っていくことに。

バレンタインの日に、こんな事をしている女子中学生も相当に珍し



いだろう。

因みに、神楽以外にも弥生に夢中になっている女子である銃磨はと言おうと……？

「待っていてくれ板垣さん……！ 君には、私そのものをプレゼントだ！」

裸になった状態で自分の体にチョコを塗りたくって、巨大な箱の中で弥生の事をずっと待っていた。

誰が見ても馬鹿丸出しである。

余談だが、放課後に桜井からも友チョコを貰い、それのお返しにと弥生からもチョコをあげた。

弥生的には、桜井から貰ったチョコが一番嬉しかったらしい。

・  
・  
・  
・  
・

「今年……は普通だ……よね……？」

テンパリングをしながら、希望的観測をせずにはいられない弥生であつた。

「あ……終わっ……た……」

タイマーが鳴り、冷蔵庫に向かう。

弥生のチョコ製作は夜まで続いた。

・  
・  
・  
・  
・

そして、バレンタイン当日。

放課後になって、いつものように一組に集まる専用機メンバー。

今日は一年生だけでなく、上級生である楯無や虚、ダリルやフォルテも一緒にいる。

周りでは、他の女子生徒達がお互いに友チョコを渡しあっていた。

「弥生。えっと……だな。実は私もチョコを用意したのだが……受けて貰えないか？」

「弥生さん！ どうぞ受け取ってくださいな！ イギリスから取り寄せた特注品のチョコですわ！」

「勿論、あたしは手作りよ。やっぱ、バレンタインのチョコは自分で作ってナンボでしょ」

箒とセシリアと鈴がチョコを出したのを皮切りに、他のメンバーも続々とチョコを出して弥生に手渡ししていく。

それぞれにお礼を言いながら、快く受け取っていく弥生だが、その一方で、自分もチョコを渡すタイミングを見計らっていた。

「皆……ありがとう……。私……からもチョコ……あるから……貰ってく……れる……？」

「ひ……姫様からのチョコっ!？」

「勿論だよ！」

「弥生からのチョコ……だと……！ これは絶対に家宝にしなくては！」

「やめい。普通に勿体無いわ」

手に持った少し大きめのバスケットから、一つずつ箱を取り出していく。

「まず……は箒……に……」

「わ……私に弥生のチョコが……」

恐る恐る箒が箱を開けてくと、そこには真っ白で丸い物体が二個

あった。

「これは……餅か？」

「真ん中……から割って……みて……」

「わ……分かった」

言われるがままに餅を割ってみると、中からトロ〜りとチョコが出てきた。

「おお！ 餅の中からチョコが！」

「和菓子……的なもの……の方が喜ぶ……と思って……」

「そこまで私の事を考えてくれて……心から感謝する！」

歓喜に打ち震えながら餅チョコを食べると、モチモチとした食感と甘いチョコが口一杯に広がっていく。

「う……美味しい……！ 本当に美味しい……♡」

「羨ましいですわ……」

「心配し……なくて……も……セシリア……にもあ……るよ……」

「本当ですのっ!？」

そう言つてセシリアに渡したのはチョコは、丸い形のトリユフチョコの入った箱。

「セシリア……は紅茶……が好きだ……から……お茶請け……にピツタリ……なビター……な味……にしてみました……よ……」

「ああ……なんてお優しいんでしょう……♡ 感激ですわ……♡ 今年のバレンタインは一生忘れません！」

「もしかして、全員それぞれに違うチョコを用意したの？」

「うん……。鈴……にはコレ……」

「なにになに？」

鈴に渡つたチョコは、ネコの顔を模したものだった。

「あ、可愛い。こんなキャラ系のチョコも作れるんだ……。ほんと、弥生って器用よね〜」

「それ程でも……」

「セシリアじゃないけど、これは普通に感動するわね。ありがと、弥生♡」

「ん……」

「凄いなく。チョコ一つでここまで色んなバリエーションを考えつくなんて。先が全く想像出来ないや」

「シャルロット……には……コレを……」

シャルロットが貰ったのは、何やら茶色い容器に入った色んなチョコの詰め合わせセットだった。

「何にしよう……か……本当……に迷った……んだけど……専用機……みたい……に……色々と入れて……みたの……」

「へえ〜！ 例えばどんな？」

「これ……はアーモンドチョコ……で……これ……は抹茶味……これ……はイチゴ味……」

「ほ……本気で凄いんだけど……。まさかとは思うけど、このチョコが入っている茶色い容器も……」

「チョコだ……よ……。ちよつと……頑張った……。溶け……か……ら……早め……に食べて……ね……」

「うん……うん！ 絶対に全部食べるよ！」

喜びのあまり涙ぐむシャルロット。

ここまで凝ったものを貰えば、彼女でなくても感動するだろう。

「あ……あの……姫様。僭越ながら、私のチョコは……」

「ちゃんとする……よ……」

そう言つてラウラにあげたのは、ウサギの形をしたチョコ。

だが、鈴のチョコとは違って、このチョコはウサギの体を可愛らしくデフォルメした物になっている。

「ラウラ……にはウサギ……が似合う……と思つて……」

「私の為に……こんな手の込んだチョコを……。姫様！ 本当にありがとうございますー！」

「どういた……しまし……て……」

「だが、余りにも可愛らしくて、食べるのを躊躇してしまうな……」

「気持ちは分かるわ。下手に食べちゃうと地獄絵図だものね」

動物の姿を模したお菓子の最大のネックだった。

だが、それを補つても余りあるのが、これ系のお菓子である。

「こうなつてくると、お姉さんも期待しちゃうな〜」

「楯無さん……には……」

弥生が楯無に用意したのは、クッキーにチョコを浸した、所謂『チョコクッキー』だった。

「うわ〜……これまた予想外。別の意味ですっごく凝ってるわね。だってこれ、クッキーから作ったんでしょ？」

「は……い」

「星にハート……色んな形のクッキーにチョコがついてて、美味しそうに仕上がってるわね。ありがとう、弥生ちゃん」

「ど……どうも……」

「お姉ちゃん……いいな……」

「拗ねな……くて……も……簪……にもある……から……」

簪にプレゼントしたチョコは、楯無のとは似て非なる代物だった。

美味しそうに仕上がっているドーナツにチョコがたっぷりとかかっている。

「チョコドーナツ……ミスド以外で初めて見たかも。ドーナツってお店じゃなくても作れたの？」

「作れる……よ？」

「弥生って、料理の腕も凄かったけど、お菓子作りの腕も凄いなだね」

「まだまだ……だよ……」

「でも凄いよ。ありがとう、弥生」

「うん……」

「やよつち〜！ 私もチョコ欲しい〜！」

「ちよつ……と……待って……て……」

本音にせかされて出したのは、中くらいの大きさの箱だった。

「これはなに〜？」

「開けてみれ……ば分かる……よ……」

言われるがままに箱を開けると、中からは冷たい空気が出てきて、ある物が視界に入る。

「うそ……これって……」

「本音……にはコレ……がいい……と思って……」

「チョコチップアイスだ〜♡」

まさかの変化球のチョコチップアイスだった。  
ちやんと解けないように保冷剤も入っている丁寧仕様。

「食べてもいいっ!？」

「ん……」

「いただきま〜す! ……ん〜ん〜ん♡ 美味し〜ん♡♡」

寒い時期でもアイスを食べる人は割といる。

特に、暖房が利いた部屋で食べるアイスは、ある種の贅沢とも言えるだろう。

「また本音つたら……」

「虚さん……にも……」

「え? 私にもあるんですか?」

「ええ……」

次に弥生が取り出したのは、なんと水筒だった。

「これは?」

「ちよ……つと……待ってて……くださ……い……」

予め用意しておいた紙コップに、水筒の中身を注ぐと、出てきたのは暖かそうなホットチョコだった。

「シナモン……と……アーモンド……のホットチョコ……です……。少し……でも……暖かい……ほうがいい……と思つて……今朝作つて……魔法瓶……に入れてきました……」

「弥生さん……貴女は……」

普段からあまり交流があるとは言い難い自分に、ここまでしてくれる。

その事に感激した虚は、眼鏡を外して目を擦る。

「ありがとうございます……有難くいただきます」

「フツ……。この流れ的に、私にもあると期待してもいいのかな?」

「一応……」

困った言動も多いが、それでもロランを頼りにはしているも事実なので、弥生は忘れずに用意していた。

「ど……うぞ……」

「おお! これはなんて美味しそうなチョコケーキだ!」

ロランに作ったのはガトーショコラ。アクセントとして、バラの花びらが何枚か置いてある。

「弥生の愛が籠ったケーキ……早速頂くとしよう」

(部屋に戻ってからでもいいのに……)

「なんて美味……。このケーキには弥生の私への愛に溢れている！」  
(んなわけねーだろ)

心を込めて作ったのは事実だが、愛なんて微塵も込めていない。  
込めたとすれば、それは感謝の念ぐらいだ。

「毎度のことながら大袈裟な奴だな」

「でも、本当に美味しそうッスよ？」

「お二人……には……」

「へ？ オレ等にもあるのかよ？」

ダリルには三角チョコパイ、フォルテにはチョコマフィンをプレゼント。  
ント。

どちらも見事な出来だ。

「スゲー……弥生って女子力の塊か？」

「いや……これは単純に私達が女子としてダメダメなだけだと思うッス……」

「かもな。でも、素直に嬉しいな、これは」

「そうッスね。今まで後輩の子にチョコなんて貰った事ないし。弥生ちゃん、ありがとうッス」

「サンキューな。やっぱお前ってスゲーよ。同じ女として素直に尊敬するわ」

「ど……どうい……たしま……して……」

笑いながらダリルに頭を撫でられる弥生は、顔を赤くしながら嬉しそうだった。

矢張り、弥生からダリルに対する好感度は割と高い方らしい。

ヒロインズが和気藹々としていると、そこに疲れた顔の一夏が教室に入ってきた。

「あ……いきなり女子達の強襲を受けて大変だった……。季節的にチョコをくれるのは有難いけど、こんなに食べられないって。俺の

胃はノーマルサイズなんだぞ？」

一夏の両手には紙袋がぶら下がっていて、中には大量のチョコが。原作主人公らしく、女子達からチョコを貰いまくっていたようだ。

「俺が貰いたいのは弥生のチョコだけなんだけどなく……っつて、皆揃って何やってんだ？」

「一夏……」

ここでチョコを渡している姿を一夏に見られる弥生。

果たして彼は本命の彼女にチョコを貰えるのか？

後編に続くぞい。



## 特別編 弥生のバレンタイン（後編）

弥生とヒロインズのチョコプレゼントショーが開かれている教室に、両手に大量のチョコの入っている紙袋を持って現れた一夏。

明らかに異様な空気に、彼とヒロインズは一瞬だけ止まってしまう。

「予想はしてたけど、今年も貰ってるわね。つか、中学の時よりも多いんじゃない？」

「そうか？ いちいち数えたりとかしてないから、よく分からねえよ」「そういったところも変わらないのだな」

昔の一夏の事をよく知る幼馴染<sup>箒</sup>コンビ<sup>鈴</sup>は、一夏のぶら下げている紙袋を見て呆れている。

それを知らない他の面々は、逆に驚いているが。

「唯一の男子って肩書きは、伊達じゃないようですわね」

「ある意味で一点集中だもんね」

入学から相当な時間が経過しても、世界初の男性操縦者という称号は強いようだ。

彼の容姿や性格も相乗効果を発揮しているのだが、鈍感を司る神である彼がそれに気が付く事は永遠に無いだろう。

「ところで、皆は教室で何をやってたんだ？」

「ふふふ……これだ！」

「そ……それは……！」

ラウラが自慢げに、弥生から貰ったウサギチョコを見せびらかす。よく見ると、他の面々も色んなチョコを堪能している。

彼女達が嬉しそうに食べるチョコ。

無駄に勘がいい一夏は、一瞬で誰がチョコを作ったのか分かった。

「そのチョコ……作ったのは弥生だな!？」

「正解よ。これ、すっごく美味しいんだから」

「しかも、私達それぞれに違うチョコを作ってくれてるんっスよ」

「とても凝ってるんだよ」

「流星は弥生……ここから見ても、相当な出来栄えじゃないか……！」

弥生と同様に、料理全般を得意とする一夏にも、弥生の作った数々のチョコは輝いて見えた。

と同時に、猛烈に欲しいとも思った。

「いいなあ〜……」

「はあ……」

昔から他人の視線には敏感（と信じ込んでいる）な弥生は、すぐに一夏の思っている事に勘付いて、溜息交じりに小さな箱に入ったチョコを取り出した。

「はい」

「え………？？」

「これ……」

「も………もしかして……俺に………？」

「ん……」

（一応、一夏にも助けられてはいるからね）

事故的な事だったとは言え、過去に弥生が一夏に救われた事があるのもまた事実。

例え鬱陶しく思っているとしても、その借りはちゃんと返すのが弥生流だ。

「……………!!」

急いで箱を開けて中身を確認する。

箱の中にあつたのは、少し大きめのハートの形をしたホワイトチョコで、チョコソースで大きく「義理！」と書かれてあつた。

「……「なあ〜んだ」……」

ハートの形を見た時は本気で戦慄したヒロインズだが、「義理」の字を見た途端に安心の溜息を零す。

だが、そんな事は一夏には関係無いようで、チョコを見たままのポーズで完全にフリーズしている。

「い………一夏？」

「ちよ………大丈夫？」

「生きてるか〜？」

流星に心配になった彼女達が声を掛けるが、全く反応が無い。が、

次の瞬間にとんでもない事が起きる。

「世界人類が平和でありますように……」

「成仏したっ!？」

感動のあまり、一夏の体から魂が抜けだして成仏し始めた。

「しつかりしなさいよ一夏!」

「弥生のチョコが貰えて嬉しいのは分かるが、成仏しちゃ駄目だ〜!」

「悪い……箒……鈴……どうやら俺はここまでみたいだ……。弥生の

超絶美味しい手作りラブラブチョコを貰えるなんて超級の奇跡を起

こしてくれたから、神様に俺の魂を捧げなくちゃ……」

「貴方はどこの邪神と契約してるの」

簪の冷静なツツコみ。

もうこの場では何が起きてもおかしくは無いのかもしれない。

「私達も大概だったけど、一夏君の喜びようは異常ね……」

「それだけ嬉しかったのかもしれない。なにせ、彼にとって弥生さ

んは初恋の人なんですから」

「だとしてもぶっ飛び過ぎツスよ……」

「ここまで来ると、もうギャグだよな」

上級生組も容赦がない。

ぶっっちゃけ、私も<sup>作者</sup>ドン引きです。

「おい。教室で何を騒いでいる」

「上級生の子達もいる……」

ここで、今度は教師組の登場。

どうやら、通りかかった所を騒ぎを聞きつけて様子を見に来たよう

だ。

「あ……織……斑先……生……山……田先生……」

「弥生?」

「板垣さん?」

色んな意味で特別な目で見えるようになってしまった教師コンビに

も、ちゃんとチョコは用意済み。

トテトテと小走りで近づいて、二人にチョコを差出した。

「もしかこれは……!」

「私達にチョコを……？」

「はい……」

まず、千冬にはカラフルな箱に入ったチョコを。  
仄かにアルコールの香りが漂っている。

「まさか……ウイスキーボンボンか!？」

「織斑先生……はお酒……が好きだ……から……。大変だっ……たけど……」

「弥生……」

感動のあまり、千冬も涙を流しながら魂が抜けだしてしまう。

「世界人類が平和でありますように……」

「教官っ!？」

「似た者姉弟っ!？」

「織斑先生っ!？」

姉弟揃って同じ反応をするとは。

使い回しはダメだと思うのであります。

「こんな奇跡を与えてくれるとは……神に感謝せねばなるまい……」

「アンタもか」

簪、冷静なツツコミ二回目。

もう完全に目が冷めている。

「この二人は暫く放置しておけば大丈夫でしょ。それよりも、山田先生にもチョコをあげたら？」

「です……ね……」

取り敢えず、織斑姉弟の事は無視して、弥生は真耶に少し大きめの箱を差し出す。

「開けて……みてくだ……さい……」

言われるがままに箱を開けると、中には色鮮やかなフルーツと、蓋がついている器に入っているチョコソースがある。

「これって……もしかしてチョコフォンデュですか？」

「山田先生……ってフルーツ……が好きそう……だった……から……」

「わあ〜！ 本当に嬉しいです！ ありがとうございます！」

今までの中で最も凝ったチョコに、真耶は心から嬉しそうな笑みを

浮かべる。

「やよつちの頭の中はアイデアの宝庫だね〜」

「これは、ホワイトデーはこちらも気合を入れなくてはいけませんね」

「こんなに凄いチョコを貰ったんだもの。私だって頑張らないと」

「ですね。弥生、期待して待っていてくれ！」

「ん……」

本当にいい友達を持った……。

弥生は改めて、友達との絆を再確認したのであった。

「そ……うだ……」

「どうしたの？」

「ちよ……つといい……箒……」

「ん？ 私か？」

「束さん……と連絡……つて取れる……かな……？」

「姉さんに連絡？ まさか、弥生は姉さんにもチョコを用意してるの

か？」

「ん……」

破天荒な言動が多い束であったが、それでも弥生は彼女にも世話になっっている。

だから、ちゃんと彼女にもチョコデザートを用意していた。

「そうか……。だが済まない。私でも姉さんとは滅多に連絡が取れな

いんだ。一応、私の携帯に番号は入っているのだが……」

「そう……」

残念そうに呟く弥生の手には、少し冷たい箱が握られていた。

・

・

・

・

・

「むむ!!」

「どうしました? 東さま」

「どこかでやつちゃんが『東さん大好きラブラブオーラ』を出しているのが分かるー!」

「はあ?」

「そんな訳で、今から行ってくるね! クーちゃん!」

「い……行ってらっしゃいませ……?」

「いってきまっす!!」

……

……

……

……

……

「ふう……」

教室でのチョコ騒動から少し経ち、弥生は今日渡せなかったチョコを寮の食堂の冷蔵庫に直す為に廊下を歩いていた。

別に自室の冷蔵庫でもいいのだが、間違って食べたら大変なので、念には念を入れて食堂の冷蔵庫を一時的に借りる事にした。

少し立ち止まって、何気なく外に面した窓を見ると、そこに何か嬉しそうな東の顔があった。

「わあっ!」

「やつちゃん! なんだかい予感がしたから、会いに来たよ!」

「はあ……」

確かに会いたいとは思っていたけど、まさか向こうからやって来るとは思わなかった。

しかも、あまりにも見計らったかのようなタイミングで。

どこかで見えていたんじゃないだろうか。

「よつこいしょつと」

窓から無理矢理、寮に入ってきた東。

よく見たら、足の部分だけISらしきパーツが装着されている。  
どうやら、部分展開をさせて宙に浮いていたようだ。

「まあ……い……いか……」

彼女に関しては、何が起きても仕方がないと思って諦めること。  
それが、千冬に教えて貰った東の対処法だった。

「東……さん……」

「ん？ なにかな？」

「これ……ど……うぞ……」

「お？ なにやら甘い匂いがするね」

嬉々とした顔で箱を開けると、そこには保冷剤と一緒にチョコ味のプリンが。

ちゃんとスプーンも入っている。

「チョコプリン！ もしかして、やつちゃんの手作り!？」

「です……」

「にやんと！ チョコ味って事は、バレンタインのチョコだったり  
……？」

「はい……」

この時！ 東の無駄に明晰な頭脳が、ある結論を導き出した！

(バレンタインのチョコ＝本命チョコ(勝手に確定)＝やつちゃんが私の事を好き＝カップル成立！＝結婚!!)

東の超ポジティブなマインドが超ぶっ飛んだ考えに至った。

「ここまで頭がお花畑だと、逆に尊敬できる。」

「やつちゃん!!」

「は……はい？」

「私も同じ気持ちだよ!!」

「そうで……すか……」

「絶対に幸せにするからね！」

「??？」

東の言いたい事が微塵も理解出来ない。

だから、弥生も何も考えずに答えることにした。

「このチョコプリン、美味しく食べるからね！ やっちゃん、本当にありがとう！」

「ど……どうい……たし……ま……して……」

来た時と同様に、窓から去っていった。

空の向こうに消えながら、東は変な奇声を出して。

「……ちゃん……と……扉……から出て……行こう……よ……」

やっと出せた弥生の小さなツツコミは寮の廊下に空しく響いた。

・  
・  
・  
・  
・  
・

当然だが、弥生は学園以外の人々にもちやんとチョコを作っていた。

と言っても、距離的な事情や仕事があるから、直接手渡す事は出来ないから、バレンタインの少し前に宅急便で送ったり、人に頼んで渡して貰ったりしている。

例えば、吉六会のメンバーとか。

「これ、マジで美味しいですね〜」

「流石は板垣さん。お菓子作りも一流だな」

小栗と兵庫は普通に喜んだが、案の定と言うか、同じ学校の女子達に盛大に勘違いされた。

「うめ〜♡」

「いや〜……マジで凄いわ〜……」

「私もこれぐらい出来れば……」

「なんで市販のチョコよりも明らかに美味しいんだよ……」

「材料は同じ筈なんだけどな……」



「美味しい♡」

塩田達六人は、それぞれにチョコを味わっていた。

叶親と嶋鳥と鷹橋は純粹に驚いていたが。

「今年も、弥生のチョコは美味しいわね♡ ん♡ マジ最高♡」  
中学時代から、毎年のように弥生からチョコを貰っていた桜井は、  
今年も彼女の手作りチョコに舌鼓を打っている。

そして、弥生にとって最も大切な人である板垣総理にも、ちゃんと  
チョコは渡してある。

「あ。総理、それって弥生ちゃんの手作りチョコですか？」

「ああ。本当に美味しくて、仕事が捗るわい」

「いいですね♡」

「何を言っておる。矢禿くんも弥生から貰っているじゃろうが」  
「そうでした」

政務をテキパキとこなしながら、その僅かな合間に弥生のチョコを  
お茶請けに食べる。

総理にとつて、数少ない至福の一時だ。

その隣では、矢禿も同じ様に仕事をしながら弥生から貰ったチョコ  
を頬張る。

因みにこの男、ちゃんと自分の彼女からも本命のチョコを貰ってい  
る。

アフロのツラを付けているくせに、この作品内で一番リア充な男  
だ。

「今日も平和じゃの♡」

息抜きに窓の外に見える青空を眺める総理。

今日も世界は穏やかに回っている。

願わくば、このような日々が続きますように。

「ん？ なにやら今、空の向こうを何かが飛んで行ったような気が……」

「どこぞの天災兎が飛んで行っただけなので、特に気にしない方が賢明です。」

## ラーメンコンビと夏の花

「いただきます」

「いただきますま〜す♡」

弥生と小泉さん……だったか？ がラーメンを注文した後、その美味しそうな匂いに負けてしまったようで、結局は植村さんも同じラーメンを注文した。

んで、三人は仲良く一緒に並んでラーメンどんぶりと向き合っている。

「結構、腹は膨れてるんだけど、この匂いは普通に食欲をそそるよな……」

「ゴクリ……ラーメンか……そう言えば、久しく食べてないな……」

「そういや、箸って学園でもあまり麺料理は食べてなかったな。」

「もっぱら、定食系ばかりを食べてたっけ。」

「逆に、麺料理を食べまくってるのは鈴だな。」

本人に聞いたら『麺料理と中国は切って切れない関係なのよ』らしい。

意味分からん。麺料理以外にも美味しい中華料理は沢山あるだろうに。

「まずは麺の前にスープを一口……」

「ん……」

ラーメンに刺さっているレンゲを使って、二人は音も立てずにスープを飲んだ。

その隣で植村さんも同じ様にスープを飲んでるけど、なんつーか

……優雅さが違った。

本人に言ったら即座にぶっ飛ばされるだろうけど。

「油が浮いているからコツテリ」としていると思いきや、その実、とてもあっさりとした口触り……」

「でも……決して味……は薄くな……い……。寧ろ……私……が知って

……る……とんこつラーメン……より濃厚……」

「そうですね。そして、この見事な縮れ麺」

スープの次は、遂にメインとなる麺を食べる。

少しだけ髪をかき上げながらラーメンを食べる二人の美少女の姿は、恐ろしく絵になった。

事実、ラーメン屋のお姉さん達は完全に視線が釘付けになってる。「やっぱ……美少女つてのは、何をやっても絵になるもんなんだな……」

「そうね。今日、初めてコレをやっててよかったって思えたわ」  
うんうん。お二人の言っている事はよく分かりますとも。

箸だけじゃなくて、他の皆も同じように頷いてるし。

「素晴らしいです。ちゃんとスープが麺に絡み、絶妙な味わいを引き出している……」

「ん〜♡」

今度は植村さんと弥生が同じ顔で幸せそうに麺を噛み締めている。弥生って、何かを食べている時が一番嬉しそうな顔をしてるよな〜。

今度、俺からも何か手料理とか作ったら、喜んで貰えるかな……。

「二人共……」

「分かってます」

「もつちろん！」

ん？ いきなり三人が何かを手を取ったぞ？

あれは〜……すりごま？

「これを適量振りかけて……」

「入れ過ぎない程度に紅シヨウガも追加……つと」

「これ……で……よし……」

この組み合わせは、さつきよりも絵的に美味しさが際立ったような気がする。

なんか、マジで腹減ってきたかも。

「「ん〜♡」」

気のせいとか、三人の周りだけ漫画とかでよく使われるキラキラしたトーンが張られてるように見える。

彼女達の雰囲気かなせる技なのか？

「弥生もそうだけど、植村の奴も食には相当なこだわりがあるよな」  
「その二人と同じ域にいる小泉って子も凄いわね……」

吉崎さんと桜井さんが呆れるのも無理はない。

これが普通の店舗とかだったら、間違いなく目立ちまくってる。

唯でさえ可愛い三人なのに。

「お前等、よかつたらこれも食うか？」

「「そ……それは!？」」

なんだなんだ？ 勝気な方のお姉さんが少し大きめのタッパーを  
取り出したぞ？

中身はどうやらもやしみたいだけど、少し赤いのが付着してる。

あれって、もしかして唐辛子か？

「ここでピリ辛もやしを提供してくださるとは、本当にありがとうございます」  
「ありがとうございます」

「遠慮無くいただきま〜す♡」

「はむ……」

う〜む……あのもやしは少し気になるぞ。

「あの、ちよつといいですか？」

「ん？ どうした？」

「そのもやしだけ食べさせて貰えませんかね？」

「これだけ？ まあ、別にいいけどな。単なるトッピングだし」

「ありがとうございます」

小皿にもやしを入れてくれて、箸もつけてくれた。

では、俺も早速試食してみるか。

「こいつは……」

本当にいい具合なピリ辛感だ……。

辛すぎず、かと言って味が薄いつて訳じゃない。

本当にピリつとするいい辛さだ。

もやしは水分が多いから、水を飲まなくても口の中を油分を取って  
サッパリさせてくれるが、それだけだと味気ない。

だが、このピリ辛な味付けならば、口の中をリセットしつつも辛さ  
によって次の一口をより一層美味しく演出してくれる。

成る程な……これがプロの仕事ってやつか……マジで勉強になるぜ。

「そろそろ半分ですね。ならば、ここでコレを入れますか」  
まだ入れるのか？ 今度は……カラシ高菜？

そうか、折り返しになったから、味を引き締めるのか。

「箸が進むね〜」

「止まらない……」

「このまま一直線ですね」

見る見るうちにドンブリの中身が無くなっていく。

あつという間にスープだけになった。

「さあ、後はこれを飲み干せば……」

「……」

あれ？ なんで三人してスープを見つめる？

「替え玉有ります？」

替え玉っ!? 幻のサービスと言われている、あの替え玉かつ!?

いやいや……流石に替え玉は無いだろ……。

「あるよ」

「……あるのかよっ!?!」

おっと、俺よりも先に植村さん以外の五人がツッコんだぞ〜。

「こちとら、これ一つでやるって決めてるからな。その代わりにサー

ビスは沢山しねえと」

「そんな訳で、はい替え玉」

「……ありがとうございます」

その後、実質的に二杯のラーメンを食べた三人は、非常に満足そうな顔をしていましたとき。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「「ごちそうさまでした」」

「あいよ。お粗末様でした」

それぞれにお金を払ってから、私達は腹ごなしがてらに少しだけ歩いた。

「では板垣さん。私はここで失礼します」

「もう行……つちやう……の……?」

「はい。まだまだ行きたいお店は沢山ありますから」

流石は小泉さん……! そのリサーチ力は見事だぜい。

私も見習わなくては!

「植村さん……と仰いましたか。貴女も見事な食べっぷりでした。また今度、いつか機会でもあれば三人で一緒に食べに行きたいですね」  
「それいいね〜!」

「ん……。私……も行きたい……」

んな訳で、植村さんも小泉さんと番号交換する事に。

「それじゃあ、私はもう行きます。皆さんはどうか夏祭りを楽しんでいってください」

丁寧なお辞儀をした後に小泉さんは去っていった。

その後ろ姿も絵になります。

「嵐のように現れて、嵐のように去って行きましたね……」

「色んな意味で鮮烈な少女だったな……」

この中で最もまともな感性をしていると思われる箒と蘭ちゃんが  
咳いてる。

確かに特殊な女の子だとは思うけど、凄くいい子だよ?

「んで、ここからどうする?」

「それなら、あの場所に皆で行かないか?」

「あそこか。良いかもしれないな」

なにになに? 一夏と箒だけで納得してないで教えてよ。

「あの場所ってなんだよ?」

「実はですね、俺達だけが知ってる秘密のスポットがあるんですよ。

そこだとよく花火が見れるんですよ」

「へえ。それいいじゃん」

「蘭も一緒に行くだろ？」

「当然で……ちよつと待ってください」

完全に行く空気になった所で、蘭ちゃんの携帯にメールが来たみたい。  
い。

それを見て、彼女の顔が少しだけ歪んだ。

「はあ……どうしてこのタイミングで言ってくるかな……」

「どうしたんだ？」

「いえ。お兄からメールが来て、お母さんとおじいちゃんがそろそろ帰って来いって言ってるそうなんです」

「マジか。そりゃ残念だ」

「全くです……。もう神社の入り口までお兄が迎えに来てるらしいし……」

「あまり待たせるのもアレだしな。残念だけど、さっさと行ってやった方がいい」

「そうします。お兄が馬鹿しないように私が見張ってないと」

なんて言いつつも、ちよつと嬉しそうじゃない？

色々と文句を垂れながらも、結局はお兄ちゃんが大好きなんですよ。

「そんな訳で、私もここでお暇します。弥生さん、またいつでもうちの店に食べに来て下さいね！ 私もお母さんもおじいちゃんも、いつでも大歓迎ですから！」

「ん……」

そこでお兄さんの名前は出さないのね……。

小泉さんに蘭ちゃんもパーティー離脱ですか。

それでも10人近くいるんだよね……。

「ここですらでも残念がつても仕方がねえよ。それよりも、とつととその『秘密のスポット』とやらに案内してくれ」

「分かりました」

一夏が先頭になって、彼の言う場所に案内して貰う事に。



もしかして今から行く場所って、原作で一夏と箒が二人つきりで花火を見た場所だったり？

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

背の高い針葉樹が出来た林の裏を抜けた場所に、ポツカリと開けた場所があった。

ちゃんと二つのベンチが置いてあり、一応は休憩所的な場所なのが窺えた。

一夏曰く、ここは彼と箒と千冬さんと束さんの四人しか知らない場所らしい。

所謂『穴場』ってやつですな。

「久々に来たけど、全然変わってないな」

「そうだな。私も来るのは数年振りになるが、昔と殆ど変化してない」  
幼馴染だけが知ってる秘密の場所って、なんかいいな。

まるで秘密基地みたいで、ちよつと憧れる。

「へえ〜！ 思ったよりもいい場所じゃんか！」

「うん。この大人数で来ても、そこまで狭く感じない」

「やるじゃん織斑。ほんの少しだけ見直したぜ」

「ほんの少しだけかよ……」

そう簡単に評価が上がれば、誰も苦労はしませんぜ。

「はあ〜……」

「篠ノ之さん」

「な……なんだ、桜井さん？」

「本当は弥生と二人つきりで来たかったって思ったでしょ？」

「そ……それは……うん……」

「そうよね。気持ち、分かるわ」

「え？ まさか桜井さんも……」

そのこの女子二人組は何を話しているのやら。

皆がガヤガヤしてるから、上手く聞き取れないや。

「ところで、花火って何時からよ？」

「もうそろそろだと思っただけ……」

一夏が携帯で時間を確認しようとした直後だった。

雲一つない綺麗な夜空に、大きな花火がいきなり上がった。

「うわあ……」

私……こんな近くで花火を見たの初めてかも……。

なんか、地味に感動してるよ……。

「すげ〜……」

「なんつー迫力……」

「たくまや〜！」

あの塩田さん達ですら、近くで見る花火に驚きを隠せてない。

私は無言でずっと打ち上がり続ける花火に魅了されていた。

その時、誰かが私の手を握ったのを感じた。

ふと握られた手の方を見ると、手を握っていたのは一夏だった。

「花火……凄く綺麗だよな……」

「うん……」

「また来年も見たいな……」

「そう……だね……」

今度は来れなかった皆も一緒に来たいね。

そうすれば、また一段と楽しいお祭りになりそうだから。

「弥生……」

「ん？」

「俺さ……強くなるよ。実力的な意味だけじゃなくて、心も強くなる。

これから先、ずっと弥生の事を支えられるような男になるからさ……

その……待っててくれ」

待っててくれ……ね。

そんな決まり文句も、また珍しいね。  
でもまあ、悪くは無いんじゃない？

「頑張れ……男の子……」  
「おう」

今日は特別に手を握り返すぐらいはしてやるか。  
どうせ、すぐに放す事になるんだし。

(や……弥生と一夏が手を繋いでいる……だと……!? これは緊急事態なのでは……!)

あ……喉乾いてきたな。  
ここに来る前にちゃんと飲み物でも買ってくればよかった。  
ってか、箒が凄い形相でこっちを見てるんですけど。

「うふふ……♡ 青春ね……」

桜井さん、目がイヤらしくなってるよ。  
何を考えているのやら。

私達はそのまま、花火が終わるまでずっとそこで空を見上げていた。  
夏はまだまだ終わらない。

## 一夏の特訓 その9

楽しい楽しい夏祭りが終わり、一夏は再び塩田達と一緒に特訓の毎日に舞い戻る。

といっても、もう夏休みはとつくに後半に突入しているから、特訓が出来る日も残り少ない。

故に、今は一日一日の特訓の密度を少しだけ濃くすることで効率化を図っている。

そんな訳で、今日も今日とて吉六会運営の専用アリーナのピット内にて、一夏は塩田による簡易的な講義を受けていた。

「だから、相手の弱点を発見したらじゃんじゃん狙っていけ。特に、前はただでさえ手数が少ないんだ。下手な攻撃は逆に自分の体力や機体のSEを無駄に消耗するだけになっちゃうぞ」

「ちよっち抵抗あるけど、分かったよ」

一夏がベンチに座り、塩田が前に立ってホワイトボードの前で教師みたいな話を続ける。

それだけならばいいのだが、二人の恰好がISスーツなのでどうも緊張感に欠ける。

因みに、塩田のISスーツは専用のオーダーメイドで、白地に水色で聖獣である麒麟が見事に描かれている物だった。

「戦いってのは合わせ鏡みたいなものだ。自分が相手の立場ならどう動くか、それを自分ならどう対処するのか。そういった無数の読み合いの先に、勝利の二文字が得られるんだよ」

「合わせ鏡……か」

今まで一夏は、彼なりに戦略を練った事はあるものの、所詮は素人の浅知恵の域を超えない。

それも、彼と同じスタートラインに立っている者達ならば、それに通用したかもしれないが、歴戦の猛者である代表候補生や国家代表に、そのような見識は全く通用しない。

事実、彼は未だに一度たりとも同級生の専用機持ちに勝利した事が無い。

「俺、前に学園のイベントで2対2の変則マッチの試合を弥生としたことがあるんだけど、その時の弥生に手も足も出なかった。まるで俺達の動きを最初から読んでいたかのように全ての攻撃が裏目に出てさ……。もしかしてそれも弥生が『合わせ鏡』をしたお蔭なのかな……」

「あく……お前、弥生と試合した事があるのか。そりゃ災難だったな」「災難?」

「ああ。弥生はな、分かりやすく言えば『超理論派』の人間だ」

「ちよ……超理論派?」

「そうだ。あくまで俺の予想なんだけどな、弥生は合わせ鏡なんて生易しいレベルじゃない戦術予想をしてるんだと思う」

先程まで余裕を見せていた塩田が、急に真剣な顔を見せる。

それだけ弥生が凄い人間だと、一夏はすぐに理解した。

「あの子の行動予測は、もう完全に未来予知に近いからね。特に見知った人間に対しては無敵に近いんじゃないかな?」

「吉崎。もう準備はいいのか?」

「うん。問題無いよ」

三人分のドリンクを持ってジャージ姿の吉崎がやって来た。

彼女は塩田と一夏にそれぞれドリンクを手渡すと、そのまま一夏の隣にドカッと座った。

「前に一度、嶋鳥が弥生と軽い模擬戦をしたんだけど、その時の嶋鳥、なんて言ったと思う?」

「つ……強かった……とか?」

「ちよつとハズレ。正解は……『もう二度と戦いたくない』だ」「え?」

一夏からすれば、嶋鳥も十分すぎる程に遥か高みにいる存在で、仮に試合をすれば一太刀も振るう事が出来ずに完封される事が容易に想像出来た。

そんな人間に、二度と戦いたくないと言わせる弥生の実力が低いとは、到底思えなかった。

「試合自体は嶋鳥が勝利したけど、それは単純に技量と体力の差が

あつたからに過ぎない。もしも二人に身体能力に差が無かつたら……」

「勝敗はまた違っていたかも知ない」

二人が弥生の事を話す度に、一夏の心に過剰なプレッシャーがかかる。

果たして自分は弥生に隣に立つに相応しい男になれるのだろうか。

「あのちっこい頭の中で、オレたちが想像も出来ない程の膨大なシミュレーションをやってるんだろうな」

「弥生の場合、こつちの性格とかも計算に入れるから質が悪いんだよな。実は通信教育で『スメラギ・李・ノリエガのサルでも出来る戦術予想』的な本でも読んでるんじゃないかな？」

「有り得そうで怖いわ」

一瞬、弥生がプロトレマイオスに乗って皆に指示を出している姿を想像する一夏。

女子達が見ていないのをいい事に、しれつと鼻の下を伸ばしていた。

(あの服を弥生が着たりしたら……いい！)

この男から『煩惱』の二文字が消える事は一生ないかもしれない。

だが、それもまた人生だ。強く生きろ一夏。

「ちよつと話が逸れたけど、要は『敵を知り、己を知らば百戦危うからず』って事だ。どうも織斑は猪突猛進なところがあるからな。少しは頭を使う事を覚えろ」

「意見したいけど、否定は出来ない……」

ISに乗り始めた頃は意識していなかったが、この夏合宿にて自分がどれだけ愚直だったのか、嫌というほどに思い知らされた。

「試合中は常に頭をフル回転させろ。ほんの一瞬でも考えるのを止めたが最後、相手はその僅かな隙を遠慮無く突いてくる」

「特に、相手が代表候補生とかになると、その一瞬が致命的になる。自分が優位に立っていても、その一撃で逆転されることだって往々にしてあるんだ」

「それは身を持って知ってます……」

涙をちよちよぎらせながら一夏はドリンクのストローをチュパチュパとしゃぶる。

もう男の威厳はゼロになっている。

「そんな訳で、今日からやっと実戦形式での特訓に入ろうと思う」

「この時期から？　もう夏休みが終わるまで二週間を切ってるんだけど……」

「仕方ないだろ。まずはお前の基礎体力の増加をしなきゃ始まらないかったんだし」

「基礎トレにこれだけ時間が掛かったって事は、それだけお前さんの体が鈍っていた証拠だよ」

「うぐ……！」

今にして思えば、幼馴染の筈が小学生の時に引越してからコツチ、彼は本格的な運動を全くしていない。

気が付けば、剣道をしていた時間よりも帰宅部として過ごしていた時間の方が多くなっている始末。

これではどんな達人だって体が鈍ってしまう。

「取り敢えず、今日の相手は叶親がする事になってる」

「叶親さんが？」

一夏と同じ『剣』の使い手の少女。

しかし、その実力は明らかに世界レベルの猛者だ。

「この話をしている間に向こうは準備が済んでるからな。後はお前が行くだけだ」

「といつても、今の織斑の実力じゃ普通に試合をしても瞬殺されるのは目に見てるから、ちよつとした特別ルールを設けようと思う」

「特別ルール？」

「そうだ。それぐらいでもしないと、まともな勝負にならないからな」

昔の一夏ならば、女子にハンデをつけると言われてムツとしたかもしれないが、今の彼は己の弱さを受け入れているから、その事に対して全く異議を唱えない。

それだけでも大きく成長したといえるかもしれない。

「叶親の愛刀『五大剣』を少しでも抜かせる事が出来たら織斑の勝ち

だ」

「それだけ？」

「そう言ってられるのも今の内だけだぞ。確かに叶親の専用機の主武装は『剣』だけど、だからと言って他に何も装備してないって訳じゃないんだからな」

「デスヨネ〜」

今まで自分がずっと剣一本で戦ってきたから、少し感覚が麻痺しかけていたが、それこそが至って普通の事なのだ。

頭を振って『かなり毒されてるな〜』と改めて自覚をした。

「それから、試合中は零落白夜の使用は厳禁だからな。お前はもうアレに依存をしている節がある」

「SEをリアルタイムで消費する代償として、一撃必殺の攻撃力を持つ刃。これだけ聞けば凄く感じるけど、その性能を最大限に生かせるのは超一流の剣士だけだ。素人が気軽に振り回していい代物じゃない」

「つーか、下手に使えば逆に自分の首を絞めることに繋がるからな。自分で自分の敗北を引き寄せるとか本末転倒だろ」

一夏自身も、零落白夜の致命的なデメリットに関しては前々からどうにかしたいと思っていた。

だが、彼の足りない頭じゃ何にも思いつかなかった。

合宿中に塩田達に『攻撃する瞬間だけ発動させれば問題無いんじゃない？』と言われて目から鱗だったのは、今でも鮮明に覚えている。

しかし、言うのと実際にやるのとは大違いで、一夏は未だにその技を完成出来ていない。

「一足飛びに行く必要は無いんだ。一步一步、確実に前進していくぞ。その為に俺達がいるんだからな」

「ああー」

ステージの方を振り向くと、そこには専用機を纏った叶親が待っていた。

彼女の専用機の名は『ヴァイサーガ』

全身が刺々しい紺色の装甲に覆われた、まるで西洋の騎士のような



姿をしたISだ。

背中には真紅のマントを翻し、その手には鞘に収まった一本の剣ツルギを持って  
持っている。

あれこそが彼女の愛刀である『五大剣』なのだろう。

アレの刀身を抜かせる事こそが、今回の一夏の勝利条件だ。

「重要な事だからもう一回言っておくぞ。試合中は何があっても絶対に思考を止めるな。頭と五感をフルに使って、意地でも勝利をもぎ取るぐらいの意気込みで行け」

「じゃないと、叶親には触れることすら出来ないからね」

「分かったよ」

目を瞑り、精神を集中させて白式を呼び起こす。

（今までずっと無様な戦いをして悪かったな、白式。でも、もうあんな姿は絶対に見せない。俺は必ず強くなる。だから、一緒に強くなろうぜ！ 白式相棒！）

決意に満ちた瞳を見せた瞬間、一夏の体が白式の装甲に覆われた。それはもう完全に見慣れた相方の姿だ。

叶親がいるステージまで飛んでいき、彼女と真っ直ぐに対峙する。

「待たせて悪かったな」

「別にいいよ」

こうして真正面から見据えて、一夏は目の前の少女のプレッシャーが相当な事に気が付く。

（本当に俺と同じ年なのか疑わしくなってくるほどの威圧感だ……！

まるで、本気の千冬姉と向き合ってるみたいな感じがする……！）

間違いなく緊張はしているのだが、それと同じぐらいに興奮もしていた。

その証拠に、さつきから一夏の手が開いたり閉じたりを繰り返している。

「叶親さん。今の俺に出来る全力で立ち向かうよ」

「そんなの当たり前でしょうが。君の今の立場は『挑戦者チャレンジヤー』なんだよ

？ どんな事にも我武者羅に向かって行かなくてどうするのか」

「それもそうだな」

そこまで話して、一夏は両手で雪片式型を構える。

それを見て、叶親も逆手で鞘に入った状態の五大剣を構えた。

「……………」

目と目。手と手。足と足。

相手の僅かな動きでさえも決して見逃さないように、一夏は全力で目を動かす。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおつ!!!」

裂帛の気合と共に、一夏が叶親に斬りかかる！

その一撃を叶親は五大剣の鞘で受け止め、僅かな火花が空中に散る。

こうして、一夏の真の特訓はここから始まった。

果たして、夏休みが終わる頃には彼が望んだ強さを得られているのか？

それは誰にも分からない。全ては彼次第なのだから。

## 第25回板垣家ペット会議

夏休みも後半に突入し、世の大半の学生たちは未だに終わっていない夏休みの宿題に四苦八苦している事だろう。

だが、我等が主人公である弥生に限ってはそのような事は無かった。

学生の大敵である夏休みの宿題はとつくの昔に撃破し、今はのんびりと残りの休みを満喫中。

まだまだ夏真っ盛りで、何の対策も無しに出かけようものならば、すぐに日射病になる事は容易に想像が出来る程の陽気を前に、弥生は特にこれと言った用事もないのに出かけるなんて思考には至らない。

風通しがいい縁側に面した和室にて、弥生は薄手の薄いピンクのワンピースを着て座椅子に座りながら一人でゲーム雑誌を読んでいた。(ムム……!?) あの往年の名作である『ファイナルファンタジー』がPS4で完全リメイク?! 超美麗なフルCGを用いて、更には豪華声優陣によるフルボイスとなつ?! 発売は……再来年の冬?! その頃はもう三年生になってるじゃん!)

パタンと雑誌を閉じてから、テーブルに置いたよく冷えた麦茶を一口飲んでから、弥生の目がギュピュンと輝いた。

(絶対に予約をして買わなければ……!)

まだまだ発売は先にも関わらず、もう買う気満々である。

金銭面で全く不自由をしていないが故の余裕かもしれない。

「あ……………」

ふと携帯を見ると、もうすぐお昼に差し掛かろうとしていた。

義父である板垣総理は仕事の為不在だから、用意すべき昼食は自分の分とペット達に分だけ。

「まず……はあの子……達……の分……を用意し……よう……」

ペット達も掛け替えのない大切な家族。

こんな時でも、弥生は自分よりも他の誰かを優先するのだった。

それ程までに弥生に大切に思われている彼等はどうと……? ?

・  
・  
・  
・  
・  
・

マグロの農林水産大臣がいる水槽がある部屋。

そこに今、板垣家のペット達が一堂に集結していた。

因みに、ここからは動物の言葉を日本語に訳してお送りします。

まずは、アメリカンショートヘアの財務大臣。オス。

財『よし、これで全員集合だな』

次に、柴犬の外務大臣。メス。

外『なんでもたまたまいきなり集まるのよ?』

サラブレッドの文部大臣。オス。

彼は部屋にある小窓から顔を覗かせている。

文『ま、突然の集合はいつもの事だから、気にしてないけどね』

そして、マグロの農林水産大臣。性別不明。

農『なんで毎回毎回、ここに集まるのさ……』

財『テメエがソコに入つてて、碌に身動きが出来ないのが悪いんだ  
ろうが! ぶつくさ文句を言うな!!』

農『ひいひいひいっ! ご……ごめんなさ〜い!』

文『いや、別に彼は何にも悪くないから。魚である以上、ここから  
動けないのは仕方がないだろ?』

外『そうよ。いくら猫だからって、魚を苛めていい理由にはならな

いのよ?』

財『ちよつと待て! 俺だけが悪者かよっ!』

分・外『いや……実際に悪いし……』

財『くあく! 犬と馬が寄つてたかつて幼気な猫を苛めやがって!  
恥ずかしくはねえのか!』

外『そのセリフ、数秒前のアンタにそのまま返すわよ』  
なんで犬や猫や馬や魚で会話が成立しているとか、そんな細かい事を考えてはいけない。

この板垣家にいる動物たちは、何故か会話が成立しているのだ。そーゆーものなのだ。

そここのところはご理解いただききたい。

文『まだまだ外は暑いんだから、早く終わらせてよね』

財『わくってる。そう急かすな』

なんでか口調は江戸っ子風だが、その仕草は普通に可愛い。ある意味で猫は反則な生き物だ。

財『最近になって、妙にこの家に人間達の出入りが多くなってると思わないか?』

文『そうかな? 前からよく人間は来てたと思うけど』

財『それは、御主人の仲間達の事だろ? 俺様が言っているのはそれじゃない』

農『それじゃあ、なんなのさ?』

財『分からねえか……? 姫さんだよ』

因みに、ここで言う『姫』とは弥生のことを指している。

ラウラ、あろうことかペットと同等だった説。

外『お姫ちゃんがどうかしたの?』

財『どうもこうもないだろうが! あの一人でいることが多かった姫さんが、ここ最近になって人間共を大量に連れてきてるじえねえか!』

外『そういえばそうだね。僕も何回か見かけたよ。けど、それと今回の集会と何の関係があるのさ?』

財『大有りだ! もしかしたら、あの中に姫さんを傷つけようとする輩がいるかもしれねえだろ!』

外・文・農『ないない』

財『なっ……! なんでそう言い切れるんだよ! つーか魚野郎!

テメエまで何領いてんだゴラア!!』

農『ゴ……ゴメンナサイ……』

猫と魚と言う関係上、どうしても財務大臣には頭が上がりえない農林水産大臣だった。

外『確かに、この前なんてかなりの数が来てたけど、特に問題なんて無かったじゃない。それどころか、この家を綺麗にお掃除してくれたわ』

文『僕の小屋もちゃんとしてくれたよ。いつもは大変そうにしていろお姫ちゃんも、あの時は楽しそうにしてたっけ』

外『アナタだって、あの時は銀色の毛の子の上に嬉しそうに乗ってたじゃない』

財『そ……それは……だな……』

外『それは？』

財『アイツから姫さんの匂いがしたからつい……乗っちゃったんだよ』

外『その割には、気持ちよさそうに体を撫でられてたわね』

財『う……うっせーやい！ 昔の事を掘り返そうとすんな！』

農『そんなに昔の事じゃないと思うけど……』

財『なんか言ったか？』

農『イエナニモ』

水中なのに何故か冷や汗を掻く農林水産大臣。

演出と言えばそれまでだが、なんとも器用なマグロである。

外『姫ちゃんとおの子達の仲はとても良好みたいだし、別に気にしなくてもいいんじゃない？』

財『け……けどだな……』

文『往生際が悪いよ。君だってあの子達が悪い人間達じゃないって認めてるんだろ？』

財『あ……ああそうだよ！ 俺様だって本当は分かってるんだよ！

でも、そう思ってるのは自分だけかもしれないと思って、お前達に確認したくなってな……』

農『それならそうと最初から言えばいいのに』

外『ホント、面倒くさい性格してるわよね』

財『だああああああああ!! うっさいやい！ もうこの話は終わ

り!! 終了!』

文『力技で終わらせたし……』

この中で一番体が小さいのに、態度が一番大きい外務大臣に、呆れるしかない面々だった。

だが、ふと外務大臣がある事を思いだした。

外『そう言えば……』

財『ん? どうした?』

外『いえね……。前にお姫ちゃんと一緒にお散歩に行った時、あの子の事を妙に変な顔で見ている人間のオスがいたのよね……』

財『なんだとっ!?!』

外務大臣のいきなりの一言に、全員の顔が強張った。

外『別に害を成そうとはしてる感じじゃなかったんだけど、なんて言えばいいのかしら……。一方的にお姫ちゃんに言い寄ろうとしてる感じ?』

財『もうそれ立派に害を成そうとしてるじゃねえか!!』

文『彼の言い方は少し大袈裟かもだけど、警戒は必要かもしれないね……』

農『ううう……。心配だよお』

財『なあゝに、大丈夫だ。いざとなれば、俺様の爪で引っ搔いてやるぜ!』

外『その時は私も遠慮しないわ。思い切りお尻に噛みついてやる!』

哀れ、どこぞの人間のオスよ。君は主人想いの犬と猫にロックオンされてしまった。

今から病院の予約をしておくことを推奨しよう。

彼等が今後の事について話し合っていると、いきなり家のインターホンが鳴った。

外『この音は……。誰かがこの家に来た合図ね』

財『まさか、犬っころが言ってた人間のオスかっ!?!』

文『見てみないと分からないね。どうする?』

体の関係上、移動が出来るのは犬の外務大臣と猫の財務大臣だけ。

彼等がどうするか考えている間、弥生は……………。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「ん？」

棚からキャットフードとドッグフードを出そうとしていた時、玄関のチャイムが鳴った。

誰かと思つて門に取り付けられているカメラを覗いてみると、そこには手を振っている鈴と簪、それから本音とラウラがいた。

どうやら、四人揃つて遊びに来たようだ。

「行かな…きや…」

この屋敷の門を開けられるのは板垣家の人間と吉六会の幹部のみ。急いで行かないと、この陽気では干上がってしまう。

慌ててニーソックスと腕袋を装着し、弥生は門まで早歩きで向かった。

屋敷から門まで地味に距離があるから、それだけで少し汗を掻いてしまう。

門に着いた弥生は、慣れた手つきでセキュリティを解除して、やつて来たメンバーを迎え入れた。

「やつほく。遊びに来たわよ」

「お邪魔します、姫様！」

「こうして遊べるのも、もうすぐ終わりだから。来ちゃった」

「やよっちく！ 会いたかったよー！」

「ん…………いらつ…しゃい…………」

何気ない話をしながら屋敷まで戻り、全員を中に入れた。



「ん〜！ やっぱここって涼しく♡」

「いつ来ても本当に快適。日本家屋は最高だね」

「冷房器具も無しにこれ程の気温調整が出来るとは、驚異的の一言に尽きますね」

「お腹空いた〜」

(まさか、わざとお昼時を狙って来たんじゃないかな?)

ラウラは簪ならばともかく、鈴や本音ならば有り得そうだった。

「私……も今か……ら……お昼……を食べよう……と思つて……た……けど……一緒……に食べ……る……?」

「……いただきます!」

(だと思つた)

一人分作るのも五人分作るのも、大飯ぐらいの弥生にとっては大差無かつた。

なんせ、一人で普通の人間の数十倍は食べるから。

「でも……その前……に……あの子達……にご飯……をあげない……といけない……から……」

「あの子達つて外務大臣たちの事よね? もしよかつたら、私も手伝つていい? 一度でいいから、猫や犬に餌やりを試してみたかっただよね〜」

「別……にいい……よ……」

「私もやってみたい。勿論、財務大臣以外」

「わ……私も立候補してもよろしいでしょうか!」

「私も農林水産大臣ちゃんにご飯あげてみたい〜」

「……え?」

本音のとんでも発言に固まる少女達だった。

.....  
.....  
.....

外『あら、誰かこっちに来るわね。足音から察するに、複数みたいだけど』

財『流石は犬っころ』

文『そーゆー君だつて分かつてただろうに』

誰が来てもいいようにジツとしていると、やって来たのは弥生と、先程来た同級生の面々。

「あ……………」

「あら。まさかの全員集合?」

「これは壯観だな……………」

「珍しい光景かも」

「皆可愛いね〜♡」

猫や犬や馬はともかく、マグロに対して『可愛い』と言えるのは世界広しと言えども本音だけだろう。

実にレアな友達を持った主人公様である。

当然だが、弥生達から外務大臣たちの言葉は全く理解出来ないの  
で、彼等が何を言おうとも普通の鳴き声にしか聞こえない。

「相も変わらず素晴らしい毛並みだ……………モフモフする……………」♡

財『おいこらコイツ! 勝手に俺様を撫でるんじゃ……………にやああ〜♡』

「完全に喜んでるわね」

「私もアレギーじゃなかったら、迷わずナデナデするのに……………」

「じゃあ、代わりに外務大臣ちゃんをナデナデする?」

「そうする」

外『あら、またこの子? 嬉しくはあるけど、どうして私ばかりなのかしら?』

「あはは! しっぽ振ってる〜♡ 可愛い〜♡」

「この台を使えば、窓から顔を出してる文部大臣ちゃんにも触れるかな〜?」

「試しにやってみれば?」

「そくするく」

文『おっと。今度は僕かい? お、中々にいい手つきじゃないか』  
「本音が触ってる間、ちゃんと大人しくしてる。頭がいいのね、この子」

「ん……。私…とおじいちゃん……の言う事……をちゃん…と聞いてくれ……る……」

「流石は弥生の愛馬ね」

農『あのく……僕はく?』

それは流石に無理だ。

それからも、ペット達と触れ合いながら心が癒されていく少女達だった。

無論、ちゃんと彼等に餌やりは行つた。

初めての餌やりにおドオドしながらも、嬉しそうにしていたラウラにまたほんわかしたのはご愛嬌。

そんな今日のお昼ご飯は、夏らしく素麺を食べました。

勿論、弥生だけは大量に。

## 馬鹿なアイツの意外な成長

何故かものすごく長く感じた夏休みも終わり、今日から二学期が始まる。

始業式を終えた私達は、自分達の教室にて先生の話を聞いていた。「本日から二学期が始まる。今学期からは本格的な実習が始まる事となるから、気を引き締めて取り組むように」

夏休みに色々な事があっても、こうしてちゃんと教師として頑張っている千冬さんは、普通に人間として尊敬できるかも。

私なんて、あの朝チュン騒動からずっと変な妄想をしてしまう事があつたつてのに。

「まだ一年だからと言って気を抜いていると、すぐに足元を掬われる事になるぞ。二学期にも一学期と同様に各イベントが控えている。その成績如何で二年生以降で話し合われる進路も自ずと決まってくる。だから、実習やイベントの時でも決して気を緩めないように心掛ける。いいな?」

「「「はい!!」」」」

夏休み明けなのに、相も変わらずいいお返事ですこと。

「お前達も理解しているとは思いますが、IS学園は学期初めの日だからと言って授業をしない訳じゃない。そんな訳だから、午前中は二組との合同実習をする。HRが終わり次第、すぐに着替えてから第二アリーナに集合するように! 以上!」

やっぱそうなるよね〜。

うん。私はちゃんと分かってたよ?

でもさ、流石にいきなり気力150には出来ないかな〜。

別に気を抜くって訳じゃないけどさ。

(でも……実習か〜……)

夏休みに一夏は塩田さん達による特訓を受けてたつて聞いているけど、どれぐらい強くなったんだろう?」

少なくとも、ここから見る限りではどこも変わってないように見えるけど。

強いてあげれば、なんか表情が凛々しくなった感じ？

・  
・  
・  
・  
・  
・

「はあああああああああああつ!!!」

「こんのおおおおとおおとおおつ!!!」

午前の合同実習が行われている第二アリーナ。

そこでは一夏と鈴の二人が激しく火花を散らしながら剣戟を繰り返していた。

まずは手本と言う事で、千冬の提案により二人が各組の代表として模擬戦をする事になったのだ。

一夏的には丁度いい機会で、クラス対抗戦のリベンジに燃えていた。

千冬も千冬で、夏休みの合宿でどれだけ腕を上げたかが気になっていた。

(こいつ……一学期の時よりも明らかに動きがいい！ 機体の制御とかもそうだけど、格段に反応速度とかが向上してる！)

一夏の想像以上に、塩田達との特訓の成果は如実に表れていた。以前はまともに鏑迫り合いすらも出来なかったが、今では互角に渡り合っている。

成長しているのはそれだけではなく、その思考もまた大きく変化していた。

(俺の武器はこの雪片だけ！ ならば、それを短所に考えずに寧ろ長所と捉える！ こっちは超が付く程の接近戦仕様！ 少しでもいいから自分の距離に持ち込む努力をして、そこから一気に押し込む!!)

前は攻撃をする事に多少なりの迷いや躊躇いが存在していたのだが、今の一夏にはそれは無い。

夏休みの修行は、一夏の技術等だけではなく、その心も大きく成長させていた。

（初撃の踏み込みが驚くレベルで速い！ ちゃんと目を凝らしてないと、一気にやられる！）

一夏には一撃必殺の零落白夜が存在しているが、未だに一度も使用してこない。

今の彼は、あろうことか単純な剣の腕だけで学園で有数の実力者である鈴と互角に近い形で渡り合っていた。

ダブルブレード状態では分が悪いと判断した鈴は、双天牙月を分裂させて手数を増やす事に。

それに合わせて、一夏が間合いを取る為に一旦下がる際に衝撃砲をマシンガンのように連続発射。

威力や弾の大きさは小さくなるが、その代わりに連射が効く上に命中率も飛躍的に向上する。

前の時には使う必要も無かった技だ。

それを使うと言う事は、それだけ一夏が強くなった証拠でもある。

「ちっ！」

衝撃砲が来ると判断した一夏は、急いで高度を下げてから回避行動に専念する。

敢えて高度を下げたのは、衝撃砲を地面に当てて土煙を発生させる為。

「ふくん……意外と頭が回るじゃない……」

衝撃砲の弱点。それは『色』だった。

周囲の空間を圧縮するという特徴上、必然的に発射する際にはそこに存在する物も一緒に圧縮してしまう。

普通は空気や空間には色は存在しないが、そこに煙幕などで強制的に『色』が加えられれば話は別。

不可視の弾丸である衝撃砲が見えるようになってしまう。

あろうことか、一夏にそれを看破されるとは思わなかった鈴は、思

わず苦笑い。

「これで衝撃砲は使用不能にされたも同然って訳ね。でも、その程度で私を止められるとは思ってないでしょ？」

「当たり前だ。俺だって、これで逆転出来るなんて甘ったれた考えは持ってねえよ」

「上等!!」

今度は鈴から攻めていった。

まずは右手に持った双天牙月の片割れを一夏に投擲する。

反射的に一夏はそれを雪片で防ごうとするが、その時にはもう鈴の姿は眼前から消えていた。

その瞬間に一夏も思考を巡らせる。

(鈴が消えた!? いや、ここで動揺するな俺。思考を止めるなって塩田さんも言ってたじゃないか! 考える……俺が鈴ならどう攻める……)

その時、一夏の頭に閃きが降りた。

(そうか! この投擲は目暗ましじゃなくて……)

一夏が投げられた双天牙月を体を捻って回避した直後、斜め下から鈴が斬り上げてきた!

(俺の両腕を使用不能にする為にしたこと!)

一夏の性格なら、投げられた双天牙月を雪片で愚直に防ごうとする筈。

それで身動きが出来なくなった所に強襲を掛けて一気に仕留める。

それが鈴が即席で考えた作戦だったが、あろうことか一夏はここで『防衛』ではなく『回避』を選択した。

別にその可能性を考えていない訳ではなかったが、それでも確率は低いと思っていた。

その低い確率を見事に引き当ててしまった鈴は、咄嗟に動きを変える。

「なっ……!」

「少し驚いたけど、まだまだ甘いのよ」

雪片と双天牙月がぶつかる瞬間、鈴は武装を拡張領域に収納。

攻撃対象がその場から無くなってしまったので、当然のように一夏の攻撃は空振り。

必死に防御しようと試みるが、腕が完全に伸びきっている為に一夏が防御するよりも先に鈴の掌底が腹部に直撃する方が僅かに速かった。

「がっ……いー！」

「ここから飛ばしていくわよ……いー！」

そこからは鈴の空中コンボが炸裂する。

肘打ち、膝蹴り、裏拳。

だが、一夏とて黙ってやられているわけではない。

「くっそおおおおおおおっ!!」

いつきに不利になったにも拘わらず、一夏はまだ勝利を諦めてはいなかった。

懸命に蹴りを放つが、呆気なく避けられてしまう。

「ここでもまだ反撃を止めないなんて、根性あるじゃない。でも、これで終わりよ!!」

鈴の攻撃が更に激しさを増し、そして……。

・  
・  
・  
・  
・

・  
・

・  
・

「リベンジならず……か。はあ……」

午前の実習が終了し、私達はいつものメンバーで昼食をする事に。

この食堂も不思議と懐かしく感じるなく。

「確かに模擬戦はあたしが勝ったけど、一夏ってば相当に腕上げてない？ 一学期とは完全に別人レベルなんだけど」



「夏休みに特訓したからな。鈴がそう言うって事は、一応の成果は出てるんだな……」

実際問題、前とは比較にならないぐらいに実力が上がってる気がする。

あの塩田さん達のスパルタ特訓受けたんだから、当然なんだろうけど。

「その『特訓』とは、もしや夏祭りの時に一緒にいた彼女達が関係しているのか？」

「ああ。夏休みに入った直後に千葉県まで行ってさ、そこで総理の知り合いって子達に会って、猛特訓を受けてきたんだ」

「そう言えば、あの時も総理と親しげに話していたな……」

そっか。箒はもうあの6人とは知り合いだったね。

「「「夏祭り？」」」」

「あ……」

い……いきなりセシリア達の目が怖くなったんですけど？

急にどうしちゃったのさ？

「箒さくん？」

「まさかとは思うけど……」

「弥生と二人つきりで行った……なんてことは……」

「ないよね？」

「しののん？」

「幾ら君でも、抜け駆けはあまり感心出来ないな？」

「うぐ……！」

あの勉強会の時の夏祭りの誘い、やっぱり私だけに言ってたんだ……。

道理で他のメンツが全くないなかった訳だよ。

鈴とかは、こつちが何も言わなくても勝手に来そうなイメージあるし。

「後で少し話でもしよう……？」

「はい……」

あちら。急に箒が大人しくなってしまった。

レアな光景だからいいんだけど。

「皆は何をあんなんにも怒っているのだ？ 全く理解出来ん」

ラウラには皆の怒りの理由が分からないんだね……。

それでいいんだよ君は。このまま純粹無垢なままで成長して欲しい。

「ん？ 姫様、どうなさいました？」

「う……ううん……なんで……もない……よ……」

なんか、いつもの光景が戻ってきたって感じがするね。

コレに慣れつつある自分もアレだけど。

「でも、夏祭りの話に一夏が混ざるって事は、会場でアンタと会ったって事？」

「おう。心身共に休めるって意味を込めて、一緒に夏祭りに行ったんだよ。そしたら、会場で弥生と箒の二人とバツタリ会ってさ。本気で驚いたな」

「」「」「やっぱりか……」「」「」

「す……すまん……つい出来心で……」

証言&自白。

これはもう逃げられませんニヤ。

「けど、たった一ヶ月少して一夏さんをあそこまで鍛えあげるだなんて、一体どんな方々にコーチして貰ったんですの？」

「そうよね。あたしも気になる」

「うくん……俺もよくは知らないんだよな。分かっていることと言えば、総理の知り合いつて事と、『幕張南高校』つてとこの生徒だつてこと。後は物凄なお嬢様達だったぐらいか」

「幕張南……知らないな」

「あの総理の知り合いつて時点でタダ者じゃない気がする……」

「『達』と言う事は、お前を鍛えたのは複数の人物なのか？」

「合計で6人いた。全員が女の子で、二人が一年生で、残りの4人が二年生だったな。後は、その6人の知り合いつていう男の人達が三人、時々様子を見に来てたっけ」

「成る程。つまり君は、夏休み中ずっと見目麗しい美少女達に囲まれ

てウハウハの状態でいたと」

「めっちゃ誤解を招くような言い方はやめてくんない?」

でも、ロランさんの言ってる事も事実だよね。

実際、塩田さん達は間違いない美少女軍団だし。

「総理と言えよ、あの焼きそばは絶品だったな……」

「あれなく……。もう一回でいいから食べたいよな……」

「総理の焼きそば? あの人が焼きそばを作ってたの?」

「そうだ。あの手つきは間違いなく、これまでもずっと作り続けてきた感じだった」

「そういや塩田さん達も言ってたな。幕南の祭りによく出店を出してたって」

「総理大臣が出店?!」

「それ……本気で言ってるんですの?」

「信じられないだろうけど、マジだから。な、弥生?」

「ん……おじいちゃん……の焼きそば……は最高……♡」

年に一回だけとは言え、あの味だけは忘れられないんだよね♡

家でも作ってくれないし。本当に夏祭りの時だけ限定なんだよね。

「姫様がそこまで仰るとは……」

「私も食べてみたいなく♡」

「僕も興味あるかも。料理は普通に好きだし」

そうだったね。シャルロットは料理が趣味だった。

お蔭でいつも美味しい料理を食べさせて貰ってます。

ちゃんとお返しも作るけどね。

そこからは完全に料理の話題になって、すっかり夏祭りの話ではなくなかった。

箒が密かにホツとしていたけど、後で思い出したかのように追及されると思うよ?」

結局、そのままの空気で昼休みは過ぎていった。

因みに、今日の私のお昼ご飯は『超巨大オムハヤシ』でした。

デミグラスソースがたまりません♡

## パイルバンカーと生徒会

午前とは違い、午後からはグラウンドでの実技となった。

という事は、今回は模擬戦的な内容じゃないって事か。

「よし、全員揃っているな」

「「「はいー」」」

「よろしい。では授業を始める」

ジャージを着た千冬さんが相変わらずの威厳を見せてつけていて、その隣ではISスーツ姿の山田先生がニコニコ顔で立っていた。

うん。いつ見ても男殺しのナイスバディですな。

原作では楯無さんに絡まれて遅刻をしていた一夏だが、今回はちゃんと間に合っている。

まあ、二人はもう既に会っているから、今になって改めて接触する必要性は無いって事か。

「今回の授業もISの操縦訓練の予定だが、その前にある武器の説明を行おうと思う」

おやまた珍しい。

一体何の説明をするのやら。

「デュノア。それから板垣も前に出てくれ」

「はい」

「は……はい……」

シャルロットはともかく、私をご指名とはまた意外な人選ですと。

私達二人に何か共通する事ってあるかな？

それこそ、『性別が女』ってぐらいしか思いつかないけど？

「お前達は『パイルバンカー』と呼ばれる武器を知っているか？」

「えつと……それって、なんか釘打ち機みたいなやつですよ？」

「そうだな。その認識は間違っていない」

バンカーの話をする気なのね。

それなら私達がチヨイスされたのも納得かも。

なんか原作のイメージから『シャルロットⅡバンカー』ってなって

るし。

「これは実際に見ながら説明した方が分かりやすいだろう。二人共、ISを展開してから装備してくれ」

「はい」

言われるがままに、私はアーキテクトを、シャルロットはリヴァイヴ・カスタムを展開した。

何気にISを纏うのって久し振りだなく。

「少しよろしいでしょうか。きよ……織斑先生」

「なんだ、ボーデヴィツヒ」

「シャルロットがバンカー系である『灰色の鱗殻』グレー・スケールを所持しているのは知っていますが、姫様の機体にそれ系の武装は無かった筈では……？」

「む？ 板垣、まだ話してなかったのか？」

「あ……………」

すっかり忘れてた。

いやさ、私が自分からISの話をする機会なんて滅多に無いし。

「この際だから板垣の『インパクトナックル』についても説明しておくか」

「それがよさそうですね」

教師二人により、急遽、もう一つ説明する項目が加わってしまった。

別に私は構わないんだけどさ。

「取り敢えず、さっき言った通りに装備してくれ」

リヴァイヴの腕部に鈍く光る銀色の杭とリボルバーが付いている武器が展開されて、それに合わせて私も自分の両腕に十八番の武器であるインパクトナックルを装備した。

「お前達も既に知っているとは思いますが、この巨大な拳である『インパクトナックル』は典型的な格闘専用の武装になる。近距離戦でこの巨大な拳の一撃を受ければ、相手はただでは済まないだろう」

「でも、この武器の真価はそれだけじゃないんです」

「インパクトナックルには二つの換装武器が存在し、状況に応じて現場で即座に拳の部分を変化させることが出来る」

「それが……パイルバンカーであるか？」

「そうだ。板垣」

「はい……」

千冬さんに目で合図されて、私は拡張領域内に収納してある換装武器の一つである『インパクト・バンカー』を装備した。

「出来ま……した……」

「ありがとう。この通り、完全に別の用途の武器へと早変わりする。まだ配備数は少ないが、このインパクトナックル自体は他にも存在していて、リヴアイヴや打鉄にも装着は可能だ。その代わり、扱いは相手にシビアだがな」

換装可能と言っても、その全てが近接武器だからね。

自分から相手に接近するのは、普通の女の子にはかなり勇気があることだと思うし、それ以前に相手の弾幕を潜り抜けてから近接戦に持ち込むこと自体がかなり難しい。

「もしかして……私達が知らなかっただけで、板垣さんって本当は凄い子だったり？」

「あんな難しい武器を軽々と扱ってるしね……」

「弥生さん……素敵……♡」

あれれ？　なんか妙に評価が上がってる？

まあ……照れくさいけど、ちよつと嬉しいかな。

でも、最後の人はマジで誰？

「他には何があるんですか？」

「斬撃に特化した『インパクトネイル』だ。板垣、左手だけ換装できるか？」

「なん……とか……」

左のバンカーをネイルに変更つと。

これってまだ実戦で使った事ないんだよね。

「四本の鋭い爪……！」

「思ったよりも強そうだな……」

「つまり、弥生さんは一つの武器で『打撃』『貫通』『斬撃』と、三種類の攻撃が可能であると……」

「オルコットの言った通りだ。近接戦だけに着目すれば、かなりの汎用性があるといえる」

「「おお〜！」」

これは……素直に喜んでいいのかな？

う〜ん……なんとも微妙な気持ち。

「ここでバンカーの説明に戻るが、パイルバンカーはよく『前時代的』とか『浪漫武器』とか『釘打ち機』などと揶揄される事が多いが、決してそれだけの武器ではない」

皆にもよく見えるように、私達はそれぞれのバンカーを前に出す。

「一言にパイルバンカーと言っても、今あるように複数の種類が存在している。まずはデュノアの装備しているタイプだが、これはインパクトの瞬間にリボルバーが回転し中にある弾丸を破裂させ、相手の装甲を貫き、その内部に直接的に衝撃を叩き込む仕様になっている。これの最大のメリットは、隙さえあれば最大で6発の連続攻撃が可能な点にある」

「その代り、一発ごとに薬莢を排出する必要がある、銃火器と同様に弾数制限と使用後には補給が必須になります」

まさに漢の浪漫を体現したかのような武器だよね。

これを考えついた人は間違いなく、スパロボ好きだと言える。

「対して板垣の持つタイプは、弾数制限が無い代わりに攻撃力が少しだけ下がっている。更に、攻撃の瞬間には杭が少しだけ伸びて貫通力が向上している」

つまり、私は射程が上で、シャルロットのは威力が上って事ね。

「どちらにしても一長一短と言うわけだな。だが、どちらにも共通しているのは『射程が極端に短く』『重量が故に取り回しが最悪』で『命中率が絶望的』という点だな」

「正直、デメリットの方が多い武器なんですけど、その代わり一発でも直撃すれば、その威力はまさに『一撃必殺』なんです。当たり所さえ良ければ、量産型のISならば文字通り一撃で仕留められる可能性も秘めています」

ほんと、聞けば聞くほどトンデモ武器だよね。

だからこそマニアに愛されて、今でも採用され続けているんだろうけど。

「最後に、実際に威力を確かめてみよう」

「どうやってですか？」

「勿論、ISに向かって放つんだ」

あゝ……千冬さんの目が一夏の方に向いてるゝ。

はい、生贄決定ゝ。

「織斑。こつちに来てISを展開しろ」

「だと思つたよ……」

本人もなんとなく予想してたのね。

ま、諦めな。ある意味で男の子の宿命だよ。

溜息交じりでこつちに来て白式を展開した一夏。

巻き添えをくらつた白式も可哀想に。

「本当はどつちも試したいのだが、時間も無いしSEの問題もあるからな。ここは板垣のバンカーだけを試すとするか」

「弥生のパイルバンカーっ!？」

おいこらそこ。変な言い方すんな。

言葉だけ聞いたら読者の皆が誤解するだろうが。

「おつしやああああああああああつ!!! さあ弥生!! どんと来てくれ

!!」

「ええゝ……」

夏休みで特訓しても、一夏の変態性は治ってないんですけどゝ。

塩田さゝくん。実力だけじゃなくて、ちゃんとここも矯正しておいてよゝ。

私がマジでドン引きしていると、千冬さんがそつと耳打ちしてきた。

「弥生、遠慮はいらん。全力で叩き込んでやれ」

「でも……」

「なあに。アイツなら喜んで喰らつてくれるさ」

いや、それが一番の問題なんですけど。

「はあゝ……」



やるつきやないか。皆も期待の目で見てるし。

「い……………くよ……………」

「おうー！」

腰を低くしてから、右腕を大きく後ろに振りかぶる。

そして、仁王立ちしている一夏の腹に向かって……………突き刺す!!

「はあああああああああああああああああああああつ!!!!!!」

「ぐぼはあっ!?!」

私の攻撃を受けてド派手に吹っ飛ぶ一夏だったけど、何故かその顔は満面の笑みだった。

ガチで気持ち悪い……………。

「うむ。流石は弥生だ。見事な一撃だな」

「あの……………大丈夫ですかね?」

「気にするな。夏の間には相当に鍛えてきたらしいからな。この程度ではビクともせんだろうさ」

「あひゃ……………」

反応に困る余り、山田先生が変な声出しちやつた。

数秒間に渡り空中に放り出されていた一夏は、そのままの格好で地面に叩きつけられた。

「織斑君……………変な顔で笑ってる……………」

……………本当に大丈夫だろうね? 二重の意味で。

「弥生さん……………もう素敵すぎ!! ブシャ……………!!」

「キヤアアアア……………!!? 四十院さんが鼻血を出して気絶した……………!!?」

四十院さんって誰?

……………  
……………  
……………  
……………  
……………

「そんな事があつたんだよ」

「実力は飛躍的に向上しても、その部分は全く変わってないのね……」  
放課後になって、私は本音、ラウラと一緒に生徒会室にお邪魔していた。

他の皆はそれぞれに部活や個人的な用事などに行つて、珍しく暇になつた。

「全くだ。少しは見直していたのだが、私の中での評価はすっかり元通りだ」

「あはは……」

ラウラが呆れるのも無理ないよ。

私も素で呆れたもん。

「うむ。今日も虚先輩の淹れてくれる紅茶は美味だな」

「ありがとうございます。ボーデヴィツヒさん」

ラウラもすっかり虚さんの紅茶の虜だね。

気持ちは分かるよ。私も大好きだし。

「にしても、弥生ちゃんのISって一体どれだけの武装を積んでるの？」

「沢山……としか……」

「言えないって訳じゃなくて、多すぎて弥生ちゃん自身も把握しきれない感じ……」

「です……」

「アーキテクトの武装のセレクトをしたのは板垣総理だと伺ってますからね。あの方の事ですから、溺愛している義娘の弥生さんの為を思つて、私達が想像も出来ないような武装を多く積んでいるかもしれない」

「一度、ちゃんと確認した方がいいかもしれないわね」

楯無さんの言う通り、その方がよさそうかも。

いざって時に困らないようにしとかないとね。

「そう言えば、弥生ちゃんとラウラちゃんって部活には何か入ってるのかしら……」

「部活か……。護衛として姫様のお側にいなければいけないから、余りよく考えてなかったな……」

「このIS学園は、何らかの部活に入る事が必須になってるから、いつかはどこかに入部しないといけないわよ？」

「うーむ……」

「そういや、ラウラは私の護衛だったね。」

「最近じゃ完全に妹みたいに見てたよ。」

「弥生ちゃんは何？」

「私……も……入ってない……です……」

「そう……どこにもまだ入部してないのね……」

「この目は……またぞろ碌でもない事を企んでる顔ですな。」

「なんとなく、言おうとしてる事は予想出来るんだけど。」

「それなら二人共、この生徒会に入らない？」

「え？」

「ほらね。」

「別に適当に言ってる訳じゃないのよ？ 生徒会も一応は部活扱いになってるから、ここに所属してくれれば他の部に入る必要は無くなるし、私や虚ちゃんもいるから、可能な限りのフォローが出来る。それに、虚ちゃんの紅茶が飲み放題になるわよ？」

「お嬢様……紅茶で釣るのはどうかと思いますが……」

「虚さんの紅茶……」

「釣られてるっ!？」

「虚さんの紅茶か……」。

「部活云々はともかく、紅茶が飲み放題は魅力的だな……」

「やよつちゅ……らうらう……一緒に入ろうよ……」

「本音……」

「トドメに、本音のウルウルおめめですよ。」

「これに抗える人間がいたら、是非とも見てみたいもんだ。」

「姫様……どうしますか？」

「……入ろうか……」

「いいのっ!？」

「よろしいのですか？」

「入部……：したい部……：がある……：わけじゃない……：し……：し……：」

「姫様がいいのでしたら、私もお供します」

「本当に!? 本当に生徒会に入ってくれるの!？」

「ああ。姫様と共に入ってやろう」

「やったわ虚ちゃん!!」

そこまで喜ばれると、なんか逆に申し訳なくなってきたな。

でも、悪い気分じゃないね。

「本人達の意思を無下には出来ませんしね……。何かあれば、すぐに私に言ってくださいね?」

「虚ちやくん? それってどーゆー意味かしら?」

「そのままの意味です。学園で弥生さんの貞操が散らされたとあつては、総理に対して申し訳がありませんから」

「虚ちやくん?!」

楯無さんよりは一夏の方に何かされる方が心配なんですけど。

いや、アイツはその辺に関してはヘタレだから大丈夫か。

「それじゃあ、ラウラちゃんが本音ちゃんと一緒の書記で、弥生ちゃん  
は副会長ね!」

「書記か。悪くないな」

「副会長……? 私……?」

「そうよ。人気があつて美人でスタイルもよくて包容力もある。そして、私が卒業したら生徒会長になって貰うから」

「にやんと……」

既に二年後の未来が確定っ!?

副会長でも十分に過分な役職なのに、将来的には生徒会長になれっ  
てか!?

「今は副会長で、その後は生徒会長か。姫様ならば見事にこなすに違  
いない」

「やよっちなら、きっと皆も支持してくれるよ」

「だどいい……：けど……：」

正直、不安要素しかない気がするんだけど……。。

でもまあ、なつてしまつた以上は頑張るしかないか。

「なら早速、明日の全校集会で発表ね！ 今から楽しみだわ〜！」

私は今から胃が痛みだしてるよ……。

皆……どんな反応をするのかな……。

そんな訳で、一年生二学期にして、IS学園の副会長になつてしまつた私なのでした。

転生前も含めて、人生初の部活が生徒会って……どんだけって感じ  
です。

## 副会長に就任しました

次の日。

朝一からSHRと一時間目の半分を使って行われた全校集会が行われた。

話の内容は主に、今月に開催される学園祭の事らしい。

高校の学園祭ともなれば、かなりの規模で行われるに違いない。

それが天下に名高いIS学園ならば猶更だ。

現在、俺達はクラスごとに並んでいて、俺は比較的前の方に位置している。

だが、この一組の列の中に弥生とラウラと布仏さんがいない。

三人共、寮の食堂で朝ご飯を食べた時はいたけど、それから揃ってどこかに行っちゃったんだよな……。

ダメ元で千冬姉に聞いてみたら、『大事な用で少しだけ席を外す』らしい。

弥生一人ならともかく、ラウラ達も一緒なのは気にかかる。

あの三人が揃っていなくなるような用事って一体なんだ？

(しっかし、ここまで女子が勢揃いしている中で俺一人だけが男子って、想像以上に浮くな……)

数か月間、この学園で過ごしそれなりにこの環境にも慣れたと自負していたけど、まだまだだったみたいだ。

この疎外感マジで半端ないぞ……。

夏休み中の合宿の時も似たり寄ったりの状況だったけど、塩田さん達の場合はどこか男勝りな部分もあったから、不思議とそこまで気にならなかったんだよな……。

(そういや、全校集会って事は、前にシャルロットの件で会った生徒会長だっけって更識先輩も壇上上がったたりするんだろうか?)

その可能性は非常に高いだろうな。

いやほんと、マジで立派だわ。

俺にはこんな大勢の人間がいる前で壇上に上がって話をするとか絶対に無理だし。

多分、緊張で凍りつくんじゃないだろうか。

なんて考え事をしている間も、壇上では司会役をしているであろう生徒会役員と思われる眼鏡を掛けた三年生の先輩が話していた。

ちゃんと話に集中しないと。ここでまた聞き逃したりしたら、千冬姉の出席簿が飛んできちまう。

「では、ここからは生徒会長から説明をしていただきます。どうぞ」  
やっぱりご登場か。

俺達の前に、更識先輩が堂々とした足取りでやって来て、壇上にあるマイクの前に立った。

「はあい。みんな、おはよう♡」

.....  
.....  
.....  
.....

どーも。私の名前は板垣弥生です。

……緊張のあまり、今更な自己紹介をしてしまった。

現在、私とラウラと本音の三人は、壇上の端にある、カーテンで覆われた見えない場所で待機中しています。

楯無さん曰く『この全校集会で、学園祭について話すついでに私達の事も紹介する』らしい。

別にそんな事をしなくてもいいと思うんだけどな……。

大観衆がいるアリーナで試合をした時もかなり緊張したのに、全校集会なんてもっと緊張するじゃない！ また胃が痛くなってきた  
……！

「ふむ……これは中々に壮観だな……」

「沢山いて緊張するね」

流石はラウラ。見事に場馴れしているみたいで羨ましいです。

言葉とは裏腹に、本音は絶対に緊張とかしてないでしょ。

「彼女が出ただけで生徒達の顔色が一気に変わったな」

確かに。

楯無さんが出ていっただけなのに、皆の表情が心なしか明るくなった気がする。

それだけ人気があるって事なのかな？

「さて……と。今年は本当に色んな事が立て込んで、新入生の子達にはまだちゃんとした挨拶をしてなかったわね」

そーいやそーうだ。

唯でさえ一夏なんてイレギュラーが入学して大騒ぎだったんだし、生徒会長である楯無さんもきつと大忙しだったに違いない。

そうか。この全校集会は自分の自己紹介も兼ねてたのか。

「私は二年の更識楯無。この学園の生徒会長をしている者よ。これからどうかよろしくね」

同性異性問わず魅了するような微笑みで挨拶をした楯無さんに、不覚にも私もドキリとしてしまった。

「今月に開催される一大イベントでもある学園祭の話をする前に、まずは今年になって新しく生徒会メンバーになった子達を紹介するわ。さあ、こつちに来て頂戴」

で……出番が来た！ ど……どうする私！ まだ何も話したらいいか考えてないんですけど!?

でも、ここで渋っているわけにもいかないし……こうなったら自棄だ！

適当に喋ってやろうじゃないか!!

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・



新しく生徒会のメンバーになった子……？

まさか、それって……。

いやいやいや。そこまで都合がいい事なんてあるわけが……。

(いつ!?)

裏からやって来たのは、キビキビと歩くラウラと、いつも通りの布  
仏さん、そして最後はガチガチに緊張をしている弥生だった。

(やつぱりかよおおおおおおおつ!?)

いや、その可能性もあるかとは思ってたけど、まさか本当にそう  
だったなんて誰が想像する？

少し周りの様子を見ると、箒もシャルロットもセシリアも口をポカ  
ンと開けたまま固まっている。

よく見ると、二組の鈴も似たような顔をしているし、ここからでは  
よく分からないけど、四組の簪もそれっぽい表情をしているように見  
える。

「それじゃあ、自己紹介をよろしくね」

「は〜い」

「了解した」

「は……い……」

弥生の反応が普通だと思っただけど、どうして他の二人は平気そう  
にしているんだ？

いや、ラウラは職業柄、こういう場で緊張しない訓練とかしてい  
るかもしれないけど、布仏さんは違うだろ？

……そもそも、彼女は緊張なんてする人種なんだろうか……？

「二年一組の布仏本音で〜す。生徒会書記をしてま〜す」

うん。これは前に教えて貰ったから知ってる。

なら、後の二人はどんな役職なんだ？

「二年一組のラウラ・ボーデヴィツヒだ。本音と同じ書記をする事と  
なった。よろしく頼む」

ラウラも書記なのか。

でもそっか。生徒会の書記ってなんとなく二人いるイメージが強いしな。

って事は、弥生はなんなんだ？

「では姫様。どうぞ」

「う……………うん……………」

緊張する気持ちは分かるけど、頑張れ弥生!!

声を出す事は出来ないけど、俺は全力で応援してるからな!!

「い……………板垣……………や……………弥生……………です……………。この度……………生……………徒会……………副会……………長……………に就任し……………まし……………た……………。よ……………よろ……………しくお……………ねが……………い……………します……………」

定型文ではあるが、ちゃんと言うべき事を言い終えた弥生は、可愛らしくペコリと頭を下げた後、皆から沢山の拍手が送られた。

弥生の挨拶が終わった直後に、皆から沢山の拍手が送られた。

だが、そんな中でも一部の熱狂的な弥生ファンもいる訳で。

「きゃ……………!!! 板垣さ……………くん!!!」

「私……………IS学園に入学して……………本当によかった……………」

「我が人生に一片の悔いなし!!!」

前に桜井さんが言ってたっけ。

弥生がIS学園を受験すると決めた直後、あの子を追って同じようにIS学園を受験した連中がいるって。

多分、あの叫んでいる子達がそうなんだろう。

相当な倍率の筈なのに、弥生に会いたい一心でここまで出来るもんなんだな……………。

俺も人の事は言えないか。

「ああ……………我が愛しの姫よ!! 壇上で挨拶をする君は誰よりも美しい! 美の女神ヴィーナスですら嫉妬を覚えるに違いない……………」

これは間違いなくロランだな。

こんな宝塚のような言い回しをする人間は、この学園にはアイツ以外にいない。

「皆にもちゃんと受け入れられてなによりだわ。これからは、この子達も一緒によろしくお願いね?」



りない時などに彼を一日部員に出来る権利が与えられるって事。最初は強制入部とかも考えたけど、それはあんまりだと考えた結果、これが一番妥当だと判断しました」

「ふむ……。つまり、一夏を一位の部の幽霊部員に出来る……という事か？」

「その考えでいいと思うわ。ラウラちゃん」

普段はいないけど、呼ばれたら俺が他の部にいても絶対に行かなくちゃいけないってことか？

なんか複雑で分かりにくいぞ……。

だが、そこは優秀なIS学園の生徒達。

すぐに楯無さんの意図を理解して、一瞬で興奮MAXになった。

「おおおおおおおおおおおっ!!!」

「幽霊部員でも上等!!」

「ナイスアイデアよ会長!!」

「今日の放課後から早速、準備に取り掛かるわよ!! いいわね!」

「学園祭は弱肉強食……!」

やる気があるのはいいけど、最後のは普通に怖いよ。

どうしてしれっと志々雄真実が混ざってるんだよ。

「なあんだ……。板垣さんじゃないのか……」

「板垣さんだったら、世界征服をする覚悟で挑むのに……」

危な———!!

とんでもない危険思想の子がいたんですけど———!?

「テンション上がって来たあ~~~~!!」

「気力300よ!! 底力を見せてやるわ!!」

学園祭が盛り上がるのはいい事だと思うよ？

でもさ、一言だけ言わせて貰っていいだろうか。

「……………俺の意思は？」

俺の精一杯の抵抗は、女子達の歓声によって瞬時に掻き消された。

余談だが、箒やセシリアを初めとする『弥生を愛で隊』の面々は、100万ドルの笑顔で楯無さんに向かって見事なサムズアップをしていた。

俺……これからどうなっちまうんだ……？

ちいいいがうだろおおおおおっ!! (切実)

私の生徒会就任挨拶(正確には私だけじゃないけど)と言う、間違いなく『私の黒歴史ランキング』のトップ5にランクインするような事があつた日の放課後。

この日は特別に生徒達だけでのHRが開かれて、そこでクラスごとの催し物を決める為の話し合いが行われていた。

勿論、司会は我等がクラス代表である一夏君がやっていますのです。

「……………おい。これはなんなんだ……………」

前に立っている一夏が呆れて眉間をピクピクさせているのも無理はない。

なんせ、出された意見が意見だから。

(『織斑一夏のホストクラブ』に『織斑一夏とツイスター』ねえ……………)

後は『織斑一夏とポッキーゲーム』と『織斑一夏と王様ゲーム』。

うん。この辺りは原作と全く一緒だね。

「なんで俺を堂々と矢面に出すんだよ! 普通に考えておかしいだろっ!?!」

「そんな事は無い!!」

「全く持ってその通り!!」

「このクラスを象徴する最大の存在を使わないなんて有り得ない!!」  
「なんでやねん!!」

思わず関西弁でツツコンでるよ、一夏。

そうそう。このまま一夏モードにしてしまいなさい。

何故なら……………。

【IS学園の母。板垣弥生のお悩み相談室】

【弥生ちゃんの耳かき喫茶】

【弥生ちゃんを愛で隊。緊急特別会合】

なん で 私 の 名 前 ま で 出 て る ん だ  
よおおおおおおおおおおおおおおおおっ!!?

ここはどう考えても一夏だけをピックアップするべき場面だ

ろおおおつ!?

その為に課金するシーンだろおおおとおおおつ!?

……混乱のあまり、思わず変な事を口走ってしまった。

「取り敢えず、俺関連の意見は却下な」

「横暴だ〜!!」

「だまらっしやい!! 俺が学園唯一の男子だからって、やっていい事と悪い事があるだろうが!!」

「二ブー! ブー!」

「なんと言われようとも却下なもんは却下だ!! ったく……んな事よりも俺は『弥生ちゃん耳かき喫茶』を強く推薦する!! あれを一度味わえば、間違いなく皆が極楽浄土に行くのは絶対だ!!」

なんでだよっ!!?

そういや、一夏つてば時々、私にまた耳かきしてほしいって頼んでくることがるんだよな……。

いつもは適当に用事を作って躲すんだけど、前に一回だけそれが出来なくて、仕方なく耳かきをしてやったんだっけ……。

結果として二回目の耳かきになったんだけど、前回以上に幸せそうな顔をしたんだよな……。

二学期になってから、変態度が確実にパワーアップしてませんかね?

「板垣さんの耳かきか……」

「興味が無いと言えば嘘にはなるけど……」

冗談でしょっ!?! 私なんか耳かきをして貰って一体何が楽しいって言うんだっ!?!

「板垣さん関係なら、オルコットさんが意見を出した『板垣弥生のお悩み相談室』も気になるんだよね〜」

「フツ……当然ですわ」

お前の仕業かあああああああああああああつ!!! (血涙)

なんちゅーことを言ってくれトンのじゃああああああああああつ!!!

「ですが……一夏さんの言う『耳かき喫茶』の方が私も興味が惹かれる

のもまた事実……!」

「姫様の耳かきは天下一品だからな!」

ラウラ、そこでドヤ顔しながら胸を張るのは止めなさい。

マジで可愛いけどさ。

「私もやよつちの耳かきを体験した事あるけど……」

「本音もっ!? で、どうだったの?」

「むふふく……♡ さいこくに気持ちよかったよ♡」

「ゴ…ゴクリ……」

はいそこ! 思わず唾を飲まない!!

「皆さん。ここで私から提案があります」

「えっと……四十院さん? なんだ?」

「まずは私が試験的に板垣さんの耳かきを体験し、その感想を述べてから決めるというのはどうでしょうか?」

「賛成!!」

すんなよ!! つーか、あの四十院さんってどこかで見た事があるよ  
うな……?」

なんて考えている間にこっちまで来たし!?

「と言う事で、どうかお願いします」

「え……つと……」

今すぐここでしろってかつ!?

どう考えても特殊なプレイじゃないか!!

(よもや……ここで弥生さんの耳かきなんて史上最高の楽園を体験出来ようとは!! お父様……お母様……神楽は今日、嬉しさのあまり、天に召されるかもしれません……♡)

でも、四十院さんは凄く真剣な顔をしてる……。

そうだよね。彼女は学園祭を成功させたくてこうしてるだけであつて、本当ならしたくはない筈なんだよね。

そうだ。恥ずかしいのは私だけじゃないんだ。ここはちゃんと、四十院さんの勇気に応えないと!

「分かりま……した……。それ……じゃ……あ……」

専用ケースから耳かき棒を取り出してから四十院さんを手招きす



る。

「……？このままするのではないのですか？」

「やりや……すい体勢……がある……から……」

「はあ……」

彼女の机から椅子を持ってこさせてから、私の隣に座って貰う。

そして、そこから四十院さんの頭をそつと掴んでから、膝の上に乗せた。

「なんとっ!？」

「板垣さん……可愛い顔をして意外と大胆な子！」

「だが、それがいい!!」

「だから気に入った!!」

「はいはい。外野は黙っててね。」

「弥生の耳かき……! ここですっ少しだけ躊躇って手を上げなかったのが仇となるとは……!」

「でも、ここで採用されれば僕達も弥生に耳かきをして貰って……♡」  
箒、シャルロット。思ってる事が丸聞こえだよ。

(キヤ——♡♡♡ や…弥生さんの膝枕——)

!!! そうか……これが天国か……)

さて……と。ではやりますか。

と言っても、時間も余り無いし、するのは右耳だけだね。

ちゃんと耳垢を乗せるティッシュも用意して……つと。

「します……ね……」

「い……いつでもどうぞ……」

それじゃ、遠慮無く。

お、かなり綺麗にしてるじゃないですか。

でも、まだ端の方とかに残ってるのがあるな。

普段は一人でしてるのかな？

「まず……は……(ハハ)……」

「はふう……♡」

でも、位置がいいから簡単に取れるや。

これなら割とすぐに終わりそう。

「はにや……♡」

「ここ……も……」

「あん……♡」

あのさ……変な声を出すのやめてくれないかな？

地味に集中が途切れるんだよね。

「あの気難しそうな四十院さんが、あんなにもトロけてる……」

「板垣さんの耳かきって、そんなにも気持ちいいの……？」

「いいなく……私もして貰いたくなかったかも……」

よ……つと。

おお？ ちよつと奥の方にデカいのがあるぞ？

痛くしちゃ可哀想だし、ここは慎重に……。

「あ……そこ……♡」

「じ……つと……てて……」

「は……♡」

落とさないように……落とさないように……取れた！

「よいしょ……つと……」

後は残ったカスをコシコシして……。

(き……気持ちよすぎるうううううううう♡♡♡ 弥生さん

の愛を全身で味わっているような快感……これを独り占めするなんて罰があつてしまう!!)

仕上げはフワフワの梵天を使って……コチヨコチヨコチヨ。

(ダメよ弥生さん!! そんなにも気持ちよくしたら私……私……!)

最後にフ〜つとな。

(イクうううううううううううううううううう♡♡♡)

よし……終わり!

「終わりま……した……よ……？」

「……」

「あの……？」

もしかして……寝ちゃった？

疲れが溜まっていたのかな？

「あの四十院さんが……」

「鼻血と涙を出したまま、満面の笑みを浮かべたままで白目を剥いて天に召されている……」

「谷を守ってくれたのじゃ!!」

「誰やねん」

どうしよう……このままじゃ動けないんですけど。

「これはもう……文句のつけようがないわね」

「うん……!」

「満場一致……だね」

ええ？ ええ？ 何が満場一致？

「では皆に問おう……。弥生の耳かき喫茶がいいと思う人……挙手!!」

「「「はい!!」」」

私以外の全員かよっ!?

って言うか、さつきから黙って話し合いを見ていた山田先生も手を上げてるし!?

「えへへ……私も板垣さんの耳かきを体験したくなっちゃいました……」

貴女だけは味方だと信じていたのに……（泣）

「だがしかし、このままでは弥生一人に負担が掛かってしまうぞ」

箒!! いいこと言った!! 後で耳かきしてあげるよ!!

「それなら、取り敢えずは普通の喫茶店にして、来店したお客さんにくじ的なヤツを引かせてさ、それで当たりが出た人だけが弥生の耳かきを体験できるってすればいいんじゃないか？」

「織斑君は神かつ!？」

余計な事を言いやがって……!!

もう頼まれたって耳かきしてやんないぞ!!

「それらなばいつその事『メイド喫茶』にしたらどうだ？」

「「「それいい!!」」」

ラウラア〜!?! ここで原作通りのセリフを言わなくてもいいんだよ〜!?

「可愛いメイド服が着れるのは純粹に嬉しいし……」

「それなら織斑君の執事姿も見れる!!」

「私は板垣さんのメイド姿も気になる〜!」

「確かに! スタイルいいし美人だし! 絶対にメイド服が似合うでしょ!!」

な……なんちゅーこつちや……!」

もう私の一言程度ではどうにもならない所まで来てしまった……!

「でも、メイド服の調達はどうしよう?」

まだ希望はあった!! そうだよ! 服の調達はどうするのさ!?

これだけの人数のメイド服なんて、中々に用意は出来ないんじゃないかな?」

「それらならば私にお任せくださいまし! イギリスにある私の屋敷から、未使用のメイド服を人数分取り寄せますわ!!」

し……しまったあああああああつ!!

ここには真正正銘のメイドさんが実家にいるお嬢様がいるんだつたあああああつ!!

「流石は名家のお嬢様!! 私達に出来ない事を平然とやってのける!!」

「そこに痺れる!! 憧れるううううう!!」

痺れなくてもいいし、憧れなくてもいい!!

ああ……これで本当に希望が潰えた……。

「それじゃあ、一組の出し物は『メイド喫茶(当たり付き)』でいいな?」

「「はい!!」」

結局、私の意見は完全無視の状態で私が一部のお客さんに耳かきをするメイド喫茶に決定してしまった。

トホホ……大衆には敵わないよ。

……

話し合いで決まった事を担任である千冬姉に報告する為に、俺は職員室へと足を運んでいた。

「てな感じに決まりました」

「そうか……」

それだけを言つて、千冬姉は黙ってしまった。

つてか、なんか目が血走つてないか？

（運次第とはいえ、弥生の至高の耳かきを再び体験出来るだどっ!?  
なんだそれはっ!? 私にキュン死しろと言っているのか!?!）

物凄く真剣な顔で千冬姉がこつちを向いた。

こんな顔をするのは、大事な試合の時ぐらいだ。

「一つ聞く……」

「なんですか……?」

「これは……私も客として来てもいいのか……?」

「い……いいんじゃないかな?」

ここで敢えて『教師』じゃなくて『私』って言う辺り、心の中で思っている事がバレバレなんだよなあ。

普段は隠してるみたいだけど、千冬姉も弥生を可愛がってるのを知ってるし。

しれっと『弥生ちゃんを愛で隊』にも入ってるしな。

「……絶対に行く……!」

「そ……そうっすか……」

こ……怖え〜!! でも、気持ち的理解出来るから変に指摘は出来ない!!

「それに……弥生のメイド姿か……」

それな。耳かきと同じぐらいに俺が楽しみな事の 하나가それだ。

あの時、意見を言ってくれたラウラには心からのお礼を言いたい。

「ラウラの奴め……ナイス意見だ……」

千冬姉。顔が思いつきりニヤけてますよ。

(弥生のメイド服……絶対に見たいに決まってる!! あのスタイルだぞ?! 間違いなく可愛らしく着こなしてくれるに違いない!! そんな弥生に『お姉さま』とか『お嬢様』なんて言われた日には……死ぬな。間違いなく。死因は『萌え死』だ)

鼻血、鼻血出てるから。

その後、慌ててティッシュで鼻血を拭いた千冬姉は、事務的な事を言っつて必要な材料や食材とかを記入する書類を手渡されて、俺は職員室を後にした。

もうさ……威厳もへつたくれもないな。

……

……

……

……

「ハロ♡ い・ち・か・くん♡」

「あ、更識先輩」

職員室を出た直後、偶然にも通り掛かったと思われる更識先輩と出くわした。

相変わらず飄々とした掴み所のない人だ。

「職員室って事は、先生と話してもしてたのかしら?」

「はい。今度の学園祭の出し物について」

「それって、さつき中から途切れ途切れに聞こえてきた『喫茶店』とかに関係が?」

「あ……」

やっぱり聞かれてたか。

そりゃそつか。あれだけデカイ声で千冬姉が話してればな。

「生徒会長なら別にいいか」

どうせ、いずれは話しておく事なんだろうし。

「実は……」

まだ詳しい概要は決めてないので、取り敢えずは話し合いで決まった事だけを軽く報告した。

すると、千冬姉と同じように、途端に先輩の顔つきが変わった。

簡単に言うと、ジヨジヨ風になった。

「や……弥生ちゃんのメイド服……!!? しかも……当たりが出れば耳かきまでして貰えるですって……!!」

「まあ……一応」

うおっ!?! 急に肩を掴まれたっ!?!

「絶対行く。絶対にお客として行くから」

「そ……そうですか……」

「絶対だからね!! 弥生ちゃんに耳かきして貰える権利は誰にも渡さないわ!!」

心情は理解出来るけど、必死過ぎだから!!

なんとなくだけど、この人は弥生に耳かきをして貰う為だけに何回も来店してきそうな気がする……。

まるで重課金者みたいだな……。

弥生……今度の文化祭、俺達の想像以上にエライ事になるかもしれないぞ……。

これ・・・本当に着なきやダメ？

昼休みの食堂。

私はお昼ご飯であるビーフカレー（超大盛り20人前）を食べながら、とあるチケットを目の前でプラプラとさせていた。

「うくん……」

「弥生？」

「姫様。いかがなされたのですか？」

「こ……これ……」

「ああ。先生達から貰った招待状だな」

箒が言ってくれたが、これは学園の生徒や関係者たちに一枚だけ配られる学園祭の招待状で、普段は外部からの人間の出入りが法度であるこのIS学園に、このチケットがあれば学園祭の時限定で入る事が可能になるという魔法のチケットなのだ。

噂では、このチケットは裏では相当な額で取引されているとかなんとか。

「弥生さんはやっぱり、おじいさまをご招待するのですか？」

「最初……はそう思ってた……けど……」

「けど？」

「おじいちゃん……って……ここ……の理事長さん……と仲がいい……みたい……で……その人……から招待状……を貰った……から……大丈夫……だって……言……た……」

電話でその事を聞かされた時は本気で驚いたよ。

吉六会以外にも交友関係が沢山あるのは知ってたけど、まさかIS学園の理事長さんとまで知り合いだったなんて思わないじゃない。

「さ……流石は内閣総理大臣……！」

「来訪の仕方一つとってもスケールが違うな……」

全くだよ。でも、おじいちゃんが来てくれることが確定したのは嬉しい。

「それなら、ソレはどうするんだ？」

「そうなんだ……よね……」



パクパク……。。

他に学園外にいる私の知り合いって言えば……塩田さん達と桜井さんかな？

でも、塩田さん達は普通に『特権』を利用して入ってきそうだし、そうなるも必然的に……。

「桜井さん……でも呼ぼう……かな……」

「その人って確か……」

「弥生のミドルスクール時代の親友だったな」

「ん……」

ぶつちやけ、なんで桜井さんってIS学園に来なかったんだろ？

頭も凄くよかったし、運動神経だって抜群だった。

普通に入学とか余裕だったと思うんだけど。

「桜井さんなら大丈夫なんじゃないか？ もし仮に塩田さん達を連れて来たら、かなりとんでもない事になりそうだし……」

「一夏……お前は夏休みの間に彼女達に何をされたんだ？」

「特訓……と、その他諸々……」

「その間はなんだ」

別に塩田さん達は問題行動とか起こさないとと思うけどな。

だって、あの六人も超が付くほどのお嬢様集団だよ？

「でも……塩田さん……達……なら……普通……に入れる……かも……」

「えっ……」

「そ……その子達って、そんなにも凄い子達な訳？」

「ん……。 お嬢様……。だから……」

「一夏はどんな子達に特訓を受けたのよ……」

「俺も詳しくは知らね」

だろうね。あの人達は自分達の詳しい素性は滅多に話さないし。

それだけの重要人物って証拠でもあるんだけどね。

「それよりも……箒達から聞いたわよ」

「な……にを……？」

「一組、メイド喫茶をするんですってね」

話しちやったのね……。

まあ……うん。どことなく予想はしてましたよ。はい。

「弥生もメイド服を着るのだろう?」

「ら……しい……けど……」

「二絶対行く」

ロ：ロランさんと鈴と簪の目が血走って怖いんですけど!?

凄い必死感がここまで伝わってくるよ!?

「しかも、くじ引きが当たった人には弥生の耳かきも堪能出来るって本音から聞いた」

「そくだよ。やよつちの耳かきだよ?」

「フツ……このロランツイーネ・ローランディフィルネイ。家の名に懸けても是が非でも当たりくじを引き当てて、必ずや弥生の至高の耳かきを味わおうではないか」

そんな事に家名を懸けなくていいです!

来るなら来るで普通に来てよ!!

「いつもならここで対抗心を燃やすけど……」

「今回はくじ引き……。こればかりは運頼り」

「まさに、幸運の女神に愛された者だけが弥生と至福の一時を過ごせるという事か」

なんか表現が段々と大袈裟になってませんか?

あゝ……ビーフカレー美味し〜(現実逃避)

(まあ……)

(私達は……)

(同じクラスの特権で……)

(やよつちに耳かきして貰うけどね〜♡)

箒とセシリアとシャルと本音が超ドヤ顔で勝ち組オーラ出してるんですけど。

何がそんなに嬉しいの?

「俺は誰に出そうかな?」

「う〜む……ここはクラリツサにするのが妥当か?」

そんな中、一夏とラウラだけがさつきまでの話題で悩んでるし。

こんな時だけ、この二人って意外と仲がいいんじゃないかって思っ

てしまう。

・  
・  
・  
・  
・  
・

放課後になり、いつもならばここで各々に部活に行ったりアリーナに自主訓練に行ったりとかして過ごすんだけど、この時期だけは違った。

なんせ、文化祭まであまり時間が残されていないので、どこのクラスも放課後は文化祭の準備にあてている。

そして、それは我がクラスである一年一組も決して例外では無いわけです……。

「本番で使用するメイド服が届きましたわよ！」

「「「早っ!?!」」」

もうかよっ!?! 幾らなんでも早すぎないっ!?!

話し合ったのってついこの間だよね!?!

どんだけ超特急で届けさせたのさっ!?!

「では早速、弥生さんの試着をしましょうか……グへへ……♡」

涎! その涎拭いて!! もう完全に淑女がしている顔じゃないよセシリア〜!

いつものお嬢様然としたアナタはどこに行ったのよ〜!?

「いつもの私はイデオンソードで真つ二つにされましたわ」

地味に私の心を読まないで!?

っーか、イデオンソードとか怖っ!!

「しかし、よくもまあこんなにも早く届いたな」

「あの話し合いが終わった直後、すぐに実家に連絡をして配達準備

をさせましたの」

オルコツト家のメイドさん達……ご苦労様です……。  
本気で同情しますよ……いやマジで。

「織斑君は先生達に呼ばれて今はいないし、試着するなら今がチャンスだよね〜」

そうだった！　ここで唯一ストッパーになりえたであろう一夏は、  
クラス代表の仕事で千冬さん達に呼ばれてるんだった！

チクシヨ〜!!　どうして余計な時にはいつもいるくせに、肝心な時にはいないんだよ〜!!

「み……んなは……しない……の……?」

「私達は後でするよ。まずは板垣さんから」

「だね。なんせ、今回の主役の一人みたいなものだし」

ソウデシタ…… (泣)

本当に……どうして私まで巻き込まれちゃったのかなあ……。

「おい。あまり姫様に無理強いをさせるな」

「それはちゃんと分かっているって。あくまでお願いしてるだけだから」

お願いと言う名の命令ですけどね。

でも、ここでちよつと冷静に考えると、いずれは必ず試着はしないといけない訳だし、それなら羞恥心に耐えてでもいいから一番最初に終わらせれば後々が楽なのでは？

うん。そう思うとなんかやる気出て来たかも。

……私も随分と前向きになったもんだな。

「い……いよ……」

「いいのっ!」

「うん……」

もうこうなったら自棄だ。

少なくとも最後にするよりかははずつとマシだ。

「本当によろしいのですか?」

「大丈夫……だよ……」

「むう……姫様がそう仰られるのなら……」

フフ……♡ 困った顔のラウラも可愛いなあ♡

「それじゃ、すぐに即席の更衣室を作るから待ってて！」

「え？」

まさか……ここで着替えるの？ マジで？

「教室から更衣室は遠いし、この時間帯は他にも使ってるクラスとかいるしね〜」

「またもや私の心が読まれたっ!? このクラスの女子達は皆揃って読心術の使い手なのかっ!？」

「てなわけで、ちよちよい……とな！」

・  
・  
・  
・  
・  
・

クラスの子が予め用意しておいた紐と大きめのカーテンで即席の更衣室を作って、セシリアから手渡されたメイド服に着替える為に弥生が中に入っている。

最初は隙間から着替えている途中の弥生が見えてしまうんじゃないかと思っただけで、弥生自身の要望でちゃんと隙間なくカーテンを敷き詰められた。

足元までちゃんと隠されていて、これなら僕が心配しているような事態にはならないだろう。

それはいい……それはいいけど……。

「板垣さんってかなりスタイルがいいから……」

「絶対に似合うわよね……」

「しかし……この布一枚を隔てた場所で弥生が一糸纏わぬ姿になっていると想像したら……ゴクリ……」

「心臓が先程からドキドキしっぱなしですわ……」

「やよつち……裸……」

僕も他の皆と同じように、さつきからずっと心臓が激しく鼓動しまくってます。

皆が弥生の魅力に気が付いてくれたのは嬉しいけど、同時にライブルが一気に増えたような気分で複雑なんだよなあ。

「難し……い……な……」

「姫様？ 大丈夫ですか？」

「なん……とか……」

とは言ってるけど、かなり手こずってるみたいだね。

僕もさつき自分の分のメイド服を渡されたけど、思ってるよりも複雑な構造をしてるみたいだし。

「弥生。よかったら僕が手伝おうか？」

「え？」

ここは他の皆よりも先手を打っておかないと。

きつと、他の皆も同じ事を考えただろうし。

「それ……じゃあ……お願い……い……出来……る……？」

「う……うん！ 任せてよ！」

よし！ 弥生からもお願いされた！ これで誰も文句なんて言わないでしょ！

「くっ……！！ 妄想に浸って出遅れた……！！」

「不覚ですわ……！！」

「むむむ……でゆのつち……やるな……！！」

「うむ。シャルロットならば問題無かろう」

悔しがっても後の祭りだよ。

この即席更衣室はお世辞にも広いとは言い難いから、最大で入れても二人が限界だからね。

ここで僕が入れば、もう誰も中には入れなくなるわけだ。

ラウラだけは普通に感心してくれたけど。

「失礼するね」

「ん」

皆から見えない角度で中へと入っていくと、そこでは手を後ろに回しながら腰の部分を結ぼうと悪戦苦闘している弥生がいた。

「成る程ね。これは一人じゃ難しいかもしれないね」

「見えな…いか…ら…」

「だよね。僕が結んであげるよ」

「頼む…ね…」

これぐらいなら簡単にちよちよいと…ん？

何か固い物が手に当たったような気が…これは金属？

「弥生。服の下に何か着てるの？」

「ガ…：…ガーター…：ベルト…」

「ガーターベルトっ!？」

「!!?」

あ。今、確実に外で箒とセシリアと本音が反応した。

って、どうしてガーターベルトなんて代物がっ!?

「メイド服…：…についてた…：…から…：…これ…も一緒…：…につける…  
もの…：…だと思っ…て…：…」

「そう…：…なんだ…」

まさか、メイド服の事を詳しく知らない弥生に付け込んで、ガーターベルトなんて最高にエロ可愛いアイテムを用意しておくなんて…：…セシリア…：…君は…：…君はなんて…：…!

(最強のファインプレイをやってくれるんだく!!!)

弥生にガーターベルトとか最強最高の組み合わせに決まってるじゃないか!!

唯でさえモデル顔負けのスタイルを誇る弥生にそんなアイテムを装着なんてさせたら、まさに日本の諺にある『鬼に金棒』ってやつになるじゃないのさ!!!

ヤバイ…：…下着姿の弥生がガーターベルトを付けている姿を想像したら…：…それだけでもう…：…僕は…：…。

(愛が溢れて止まりません♡)

「シャ…：…シャルロット…：…?」

おつといけないいけない。今は弥生に魅惑のメイド服を着させる

ことに専念しなくちや。

それから簡単に整えてから、最後にメイドキャップを弥生の頭につけて……つと。

「よし完成……」

メイド服を着終えた弥生を改めて正面から見ると、本当にとてもよく似合っていた。

可愛くて綺麗で、それでいて清楚でもある。

まるで本職のメイドさんのように、見事にメイド服を着こなしていた。

もうこれは……皆にも見せるしかない!!

「皆見て!! 弥生のメイド服だよ!!」

バツとカーテンを開いて皆にお披露目。

さて、クラスの皆はどんな反応をしてくれるかな？

「ちよ……いきなり……は恥ずか……しい……よ……」

あくもう！ 恥ずかしくてモジモジしてる弥生も可愛いよ♡

「メ……メイド姿の弥生……なんて破壊力だ……」

「予想通り……いえ、予想以上に素敵ですわ……♡」

「やよつち……本当に可愛いね♡」

「姫様……可憐だ……」

箒とセシリアと本音はいつも通りの反応だけど、今回はラウラも魅了されてしまったみたい。

無理も無いよ。だって、こんなにも可愛いんだもん！

本職のメイド服だけあって、コスプレ用とは違いちゃんと足首の所までスカートが伸びていて、手には手袋まで装備済み。

弥生にとってはその方がいいんだろうけど、それが却って彼女の魅力を極限まで引き立ててる気がするのには僕だけじゃない筈。

「うわぁ……」

「これはまた……」

「元がいいから似合うとは思ってたけど……」

「これは幾らなんでも大化けし過ぎでしょ……」

「美少女って……服装一つでここまで可愛くなるのね……」



うんうん。皆も弥生の可愛さの虜になったようだなによりだよ。  
この可愛さに魅了されないなんて有り得ないからね。

「お？　なんか騒がしいけど、どうしたんだ？」

このタイミングで一夏が帰ってくるっ!?

一夏って実は何気に強運の持ち主だったりする？

「オルコットさんが用意してくれたメイド服の試着をしてたんだよ！」

「で、最初に板垣さんが試着してくれたんだけど……」

「なにつ!？　弥生のメイド服だっ!？」

相変わらず凄い反応。

気持ちちはよく分かるんだけど。

「あ……一夏……?？」

「や……弥生……?？」

一夏と弥生の目が合って、一夏が恐る恐る近づいてきた。

あれ？　なんか変な空気になってる？

って、急に弥生の両手を掴んだしっ!?

「可愛い……」

「え?？」

「ヤベえよ弥生……最高に可愛いよ……」

「あ……ありが……とう……」

ちよつと?　おくい?　お二人さくん?

「許されるなら、今すぐにでも結婚したい。いや、絶対に俺の嫁にする」

「ええっ!？」

いきなり何を言い出すんだく!?

突然の爆弾発言に弥生も驚いて顔を真っ赤にしてるよく!

……驚いてるからだよね?

「ラ……ラ……」

「ラブコメだくくく!!」

「これが青春なのね……」

あれく!？　皆もなの!?

でも、約四名は違ったみたい。

「一夏……きくさくまは……!!」

「何度も何度も何度も……!!」

「うくふくふく? おりむく?」

「貴様如きが姫様に言い寄ろうなどと……!!」

あくあ。僕知くらない。

本当は僕も同じ気持ちだけど、あの四人が代弁してくれたからいいや。

「二身の程を知れくくくく!!!」

「なんでさくくくく!?!」

四人の合体攻撃に吹き飛ばされた一夏は、クルクルと回転しながら頭から落ちた。

確か、日本だとこれって『車田落ち』って言うんだよね?

なんか鈍い音がしたけど、一夏なら大丈夫でしょ。

## みんなおいでよ学園祭

IS学園の学園祭。

この一大イベントに際し、生徒達は一枚ずつ外部の人間を招き入れる事が可能な『招待状』が配られる。

普段は決して部外者が入る事が許されない秘密の花園に一日限定で入る事が許される魔法のチケット。

巷の噂では、ネット上などで非常に高額で取引されているとかなんとか。

そんな夢のようなチケットを身内や知り合いなどから貰った者達は、どのような事を思っているのだろうか。今回はそれを覗いてみよう。

まず最初に見てみるのは……。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

世界のどこかに存在している東専用移動式研究室内。

「にやんと……！ やっちゃんがメイド喫茶で耳かきとなっ!!? どこかの誰が提案したのかは知らないけど、これは間違いなく勲章ものだね!!」

「た……東さま……?」

さつきから興奮しまくりの東の横で、銀髪の少女がなにやら困惑している。

彼女がどうしてここまでテンションを上げているのか、全く分からないから。

「でも、普通に行ったんじゃ私だってすぐバレるのは当たり前だし、

やっちゃんやちーちゃん達に迷惑も掛けちゃう……。流石の私でも、それだけは許せない。だとしたら、やっぱり変装するしかないか……？」

「まさかとは思いますが束さま。IS学園の学園祭に行かれるおつもりですか？」

「あつたりまえじゃん!! あのやっちゃんの耳かきだよっ!! 是が非でも行かないと一生後悔するでしょ!!」

「し……しかし、お言葉ですが束さま。確かIS学園の学園祭は招待状が無ければ入れない筈では……」

「私はISの開発者だよ？ 普通に顔パスでOKでしょ」

「そんなムチャクチャな……」

「それにね、実はちーちゃんから密かに学園祭の招待状を貰っているのだよ」

「はあっ!? 一体あの人はどこにどうやって招待状を送ってココに届けさせたんですかっ!?!」

「そこはまあ……ちーちゃんだし?」

「絶対にこの案件はその一言だけで納得してはいけないと思います……」

・  
・  
・  
・  
・  
・

イギリス オルコット邸

「セシリアお嬢様から送って頂いた、学園祭の招待状……か」

「あれ？ なんかチケットみたいのを持ってどうしたんですか？

チエルシーさん」

「あ……実は……」

メイド達の休憩所にて経緯を話す一人の少女。

彼女の名は『チエルシー・ブランケット』といい、セシリアの幼馴染であると同時に、若くしてオルコット家のメイド長にまで上り詰めた逸材である。

そんな彼女がピラピラとしているのは、日本のIS学園にいるセシリアから送られてきた招待状。

「へえ……お嬢様から頂いた、IS学園の学園祭の招待状……ですか」

「そうなの。興味が無いわけじゃないし、行きたくない訳じゃないんだけど……」

「けど？」

「この仕事を放りだして、自分一人だけで日本に行くのもどうかと思ってる」

「成る程……」

「あの大量に送った予備のメイド服を何に使っているのかも気になるし……」

「なんだか見てられませんか」

「うっさい」

「そんなに行きたいなら、行けばいいじゃないですか」

「それが出来れば苦労しないって話をしてるんじゃない。ちゃんと聞いてた？」

「聞いてましたよ。チエルシーさんは普段から人の何倍も頑張ってるんですから、偶には私達に仕事を任せて、ゆつくりと羽を伸ばしてきてもいいと思います」

「あなた達……」

まだまだ教育すべき所は沢山あると思っていたが、自分が知らない所で大きく成長していたのだと感じ、さっきまで確固たる決意でいた気持ちが少しだけ揺らいだ。

「じゃあ……お言葉に甘えてもいいかしら？」

「勿論！ ささ、もう仕事は終わって、今からでも準備に取り掛かって

ください！」

「ええ……ありがとう」

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

台湾 I S 専用訓練所内

「なんかいきなり招待状なんて物が送られてきたけど……」

鈴とそっくりの顔で、その黒い髪をサイドテールに纏めている少女が、ベンチに座りながら蛍光灯の灯りに送られてきた招待状を透かしていた。

「どうしようがなく。行こうがなく。止めようがなく」

少しの間だけ、そのままの体勢で思索した結果、少女は結論を出したらしい。

「……行ってみようかな。どうせ、来年辺りには嫌でも政府の連中が I S 学園に行けて言ってくるんだろし、入学した時の予行演習とオープンキャンパスを兼ねてると思えば……」

なんて言い訳染みた事を言っているが、彼女の本心は別の所にあった。

(向こうに行けば鈴お姉ちゃんとも会えるだろうし、そうしたら色々と案内とかして貰えるかな……。それに、お姉ちゃんがよくメールで言ってくる『弥生』って人の事も気になるし。メールによると弥生さんは『清楚で可憐で可愛くて真面目で超が付くほどのお嬢様』らしいけど、逆に全く想像がつかないのよね……)

いきなり立ち上がり、招待状を丁寧にポケットの中に仕舞い込んでから、どこかに向けて歩き出した。

「うだうだと考えるよりも、まずは担当官に許可を貰ってこないと。ま、私には基本的に甘いし、簡単に許可とか貰えるだろうけど」

・  
・  
・  
・  
・  
・

フランス デュノア社 社長室

「で、それが日本にいるシャルロットから学園祭の招待状なのね」

「そうだ。私としては是非とも行きたいのだが……」

「会社の事は私達に任せておいて頂戴。会社もなんとか軌道に乗って安定し始めたし、社員達も私達の想像以上に頑張ってくれている。今更、大切な愛娘に会いに行くために日本に行きたいなんて言っても、誰も文句なんて言わないわ。それどころか、逆に『行ってきてください！』って懇願されるかも」

「はは……実際に有り得そうだな」

「でしょ？」

「まあ……私が日本に行きたいのは、何もシャルロットに会いに行きたいだけじゃないのだがな」

「と言うと……」

「……今回の事で、我々はミスター板垣の御息女に非常に大きな恩義がある。どうしても、直接彼女に会って礼を言いたいんだ」

「そうね……。私もいつかお礼を言いたいわ」

「だろう？ それに、あそこに娘が通っている以上、ミスター板垣自身も必ず来るだろう。彼にも私は感謝の意を述べたい」

「だったら、猶の事、日本に行かないとね」

「そうだな。会社の事、任せてもいいか？」

「夫婦は助け合うものでしょ？ 私の分まで親子水入らずの時間を過  
ごしてきて頂戴」

「分かった。帰ってきたら、今度は夫婦水入らずの時間を共に過ごそ  
う」

「約束よ」

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

ドイツ シュヴァルツェ・ハーゼ隊 基地内

「皆聞け!! つい先程、日本にいる隊長から今度開催される I S 学園  
の学園祭の招待状が届いたぞ!!」

「「「おおく!!」」」

I S を初めとする数多くの兵器が乱立している格納庫内で、一際大  
きな声で全員の注目を集めている一人の女性。

ここにいるのは全てが女性だが、その殆どが未成年者だ。

そんな中で唯一の成人なのが彼女だった。

彼女の名は『クラリツサ・ハルフォーフ』。階級は大尉で、ラウラが  
隊長を務めている『シュヴァルツェ・ハーゼ隊』の副隊長を務めてい  
る。

つまり、ラウラの副官というわけだ。

因みに、この隊員は全員がラウラに合わせて同じ眼帯を身に付けて  
いる。

この眼帯こそが、彼女達の絆の証なのだ。

「しかも、隊長がいる一組で催される事は……なんと！ あの日本で



も大ブレイクしたと言われている伝説のメイド喫茶らしい!!」

「マジですか!!」

「って事は、あの隊長がメイド服を着るって事……?」

「なにそれ最高過ぎ」

「全員落ち着け!」

騒ぎ出した隊員達を一言で静かにした。

最年長者だからこそ成せる技だ。

「確かにあの可愛らしい隊長のメイド服姿は最高だろう。だがしかし、それとは別に私には気になっている事がある」

「それは?」

「日本にて隊長が護衛を務めている『姫様』の事だ」

「あの……内閣総理大臣の御息女……ですよね?」

「そうだ。隊長から写真付きメールでお顔を拝見したが、とてつもない美少女だった!!」

自分の携帯の壁紙を見せつけながら、クラリツサは鼻血を出していた。

何気に彼女こそがラウラに間違った日本知識を教え込んだ張本人だったりする。

中途半端に知識を得ているが故の弊害だった。

因みに、携帯の壁紙にはラウラと弥生と一緒に並んで笑っている姿が写っていた。

「片目が隠れたミスティアス系美少女……」

「けど、そこはかとなく母性も感じるような……」

「なんだろう……。この微笑みを見ていると、不思議と『お母さん』って言いたくなる……」

「そうだろう、そうだろう。お前達の気持ちはよく分かる! 私も最初に見た時は、思わず『母上』と言いそうになった」

何かに思いを馳せるように目を瞑るクラリツサ。

お前は脳内で弥生とラウラに何をしてるんだ。

「実はな……隊長たちがするメイド喫茶。唯のメイド喫茶では無いらしい」

「え？」

「どういう事ですか？」

「なんと！ このメイド喫茶に行けば、姫様の耳かきを体験出来るらしいのだ!!!」

ド————ン!!!

そんな効果音が出そうな勢いで言い放った。

「み……耳かき……だと……?!」

「美少女の耳かき……!」

「我々の業界では最高のご褒美です」

こいつ等が本当に軍人なのか怪しくなってきた。

会話だけを聞いていると、秋葉原とかに普通に居そうなオタク少女達だ。

「私は日本に赴き、隊長のメイド服姿を拝むと同時に、お前達の方まで姫様の耳かきを思う存分に満喫してこようと思う!!」

「羨ましい……!!」

「絶対に感想を聞かせてくださいね!!」

「任せておけ!! では、今から準備をしなくては! ははははは!!」

無駄に100万ドルの笑顔をしながら、クラリツサはどこかへと走り去っていった。

今日もドイツは平和です。

・

・

・

・

・

五反田食堂

五反田弾と蘭の兄弟が、二枚の招待状を前にして緊張を隠せないでいた。

「まさか……一夏から、こんなドリームチケットが送られてくるとは……！」

「私は箒さんから送られてきた。送る相手が他にいないからって」

「箒って……一夏の最初の幼馴染の子か」

「うん。弥生さんに負けず劣らずのすつごい美人」

「マジか。一夏の奴……そんな男の楽園に一人だけ行きやがって……！」

「うわあ……本気の血涙流してるし。普通にキモ……」

「お前さ……最近になつて増々、俺に容赦しなくなつたよね……」

一人で落ち込む弾を余所に、蘭は箒から教えて貰った事を思い出してウキウキしていた。

「メイド喫茶か。間違いなく弥生さんもメイド服を着るんだろうな。見てみたいなく」

「俺としては、知らない間にあのお嬢様と親しくなってる蘭の方が驚きだぜ……」

「面倒臭がつて夏祭りに来なかつたお兄がいけないんじゃないんじゃん」

「あの時の事は本気で後悔してる……。だからこそ！ この機会だけは絶対に逃せない！ 必ずや学園祭に行き、美少女達のメイド服姿をこの目に収める為に!!」

「割と普通に実の兄にドン引き」

「頼むから兄の事を不審者を見るような目で見るのだけは止めて」

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

明らかに暇そうにしながらスマホでゲームをしている塩田と、その横で招待状をヒラヒラさせている桜井がソファに座っていた。

「まさか、弥生からこんな物を貰うとはね〜」

「桜井。そりやなんだ？」

「学園祭の招待状。弥生からの」

「あぁ〜……もうそんな時期か」

「幕南って文化祭的なイベントって無いからね〜。この招待状に書いてある開催日の日って、こっちは創立記念日で休みのよね。だから、行つてこようかなって。弥生の制服姿も見てみたいし」

「いいんじゃないか？ どうせ休みの日なんて暇してるし」

「まあね。塩田はどうするの？ アンタ達6人って、行こうと思えばどこでも『特権』使つて入れるじゃない」

「いや、今回は『特権』使わなくても大丈夫だわ」

「なんで？」

「……………IS学園の生徒会長から直々に招待状を貰った。しかも、ちゃんと6人分」

「生徒会長って…………あの夏休みにHIROUSEに弥生と一緒にいた簪って子のお姉さん…………だった」

「ん。更識家と『俺達』にはちよつとした関係があつてな。多分、色々と会つて話したい事があるんだろうさ」

「ふ〜ん…………」

「それに、いずれは『元締め』にも会わないといけないだろうし」

「元締めって…………。名前知っている上に同級生で、しかも許婚でもあるんだし、普通に呼びなさいよ」

「いや、敢えてほかした言い方をする事によってネタバレを防いでだな…………」

「はいはい」

……………

・  
・  
・

総理官邸 執務室

板垣総理と矢禿の二人が仕事の合間に休憩をしながら茶を飲んで  
いた。

「そういや、もうそろそろじゃないですか？ I S学園の学園祭」

「そうじゃな」

「行くんですか？ って、総理にその質問は愚問でしたね」

「フツ……。弥生の為ならば、ワシはどんな手段を使っても必ず行くぞい」

「そう言うと思いました。スケジュールの方はこっちの方で合わせておきますから、心置きなく行ってきてください」

「いつもいつも助かるぞい」

「言いつこなしですよ。こっちもいつも総理には助けられてばかりですから」

「そうじゃな」

「でも、I S学園の学園祭って、基本的に招待状が無いと入れないんですよね。弥生ちゃんから貰ったんですか？」

「いいや。今回は別の人物から貰っておる」

「誰ですか？」

「轡木十蔵。ワシの昔馴染みであり、今はI S学園で理事長を務めておる」

「これまた、とんでもない人物との交友関係をお持ちで」

「じゃから、弥生には仲のいい誰かに渡すように言っておる。恐らく、桜井君辺りに渡しておるんじゃないかな？」

「でしょうね。二人は中学時代からの親友同士ですし」

「ああ。今から楽しみじゃな……」

・  
・  
・  
・  
・

「……………」

「え？ 偶には息抜きにどこかに遊びに行きたい？」

「……………」

「またいきなりですね。姉さま。そのお気持ちは凄くよく分かるんですけど」

「……………」

「そうですね。最近は本当に忙しかったですし。どこかでゆつくりと羽休めでもしないと、後々の事に支障をきたすかもしれない」

「……………」

「はいはい。分かりましたよ。ではまずは……………」

「そこらに転がっている『死体』を片付けてしまいましょー」

床には数えるのも億劫になりそうな程に多くの死体が転がっていた。

頭が無い者や上半身が消し飛んだ者、逆に下半身が消し飛んだ者。他にも、右半分が斬り裂かれている者や30以上のパーツに『分解』された者もいる。

夥しい程の血が周囲にはあり、まるで鮮血の絨毯とも言うべき光景となっていた。

そんな多くの死体がある中、一人だけ辛うじて息がある者がいた。と言つても、息も絶え絶えで、数秒後には息絶える事は明白だが。「ど……して……」……んな……」

「どうして？ これはまた面白い事を聞きますね。私達はただ『必要が無くなった道具』を処分しただけですか？」

「道具……処分……だと……!?!」

「はい。お前達は私達姉妹の事を従えていたつもりなのですが、実際はその逆です」

「な……に……?」

「人は自分の足りない部分を補う為に『道具』を使う。時には同じ同胞すらも道具にする。お前達『人間』もよくやっている事です」

「ま……さか……!」

「ええ。我々の体勢が整うまでに利用すべき『道具』。でも、もうその必要は無くなった」

「え……?」

「情報収集のつもりで行ってきた『任務』のお蔭で、我々の計画は想像以上に早く進んだ。残念でしたね。まさか、私達に命令した事によって自分達の首を絞めることになるとは。本当に人間とはつくづく救い難い」

「お……まえ……たちは……いったい……!」

「お前如き蛆虫がそれを知る必要はありません。ですよね、姉さま」  
「……………」

グシヤ。

先程まで途切れ途切れに話していた男は、頭を文字通り踏み潰された。

まるで中から破裂した柘榴のように、周りには骨の欠片や脳漿が飛び散っている。

「汚れた体を洗ってから、ここの掃除を済ませてしまいませんか」  
「……………」

その日、第二次世界大戦時から存在し続けていた、裏では最も名の知られている某組織が、本当の意味で完全壊滅した。

生存者は誰もおらず、後の世にその名が蘇る事は永遠に無かった。



## 文化祭は準備も楽しい

メイド服の試着を終えてからも、私達は何度となく話し合いを繰り返していき、当日の教室の内装やメニューの種類などを一つ一つ決めていった。

んで、本日は放課後に予め朝から予約をして貸し切っておいた調理実習室にて、喫茶店を出すメニューの試作品を作ってみる事に。

既に必要と思われる材料は揃っていて、後は実際に調理するだけなんだけど……。

「はい。この中で料理が得意な人」

クラスメイトの一人が死んだ目で全員に質問を投げかける。

反射的に私は手を上げ、いつの間にか私の隣にいた一夏もまた手を上げた。

そして、私達以外はシャルぐらいしか上げてはくれなかった。

「……え？　これだけ？」

ちよ……嘘でしょ？　得意とまでは行かなくとも、最低限の事ぐらいは……。

そんな意思を込めた視線を皆に向けるのだけど、全員が同時に目を逸らした。

特にセシリアが顔を真っ青にしていたけど、君の場合はここにいる全員がメシマズ属性であることは承知しているから大丈夫だよ。

「はあく……しゃーない。こうなったら、本番でも俺達が調理担当するしかないか」

「そうみたいだね……」

(こっちとしては願ったり叶ったりなんだけど)

メイド服を着ての接客なんて私には絶対に無理だし！

確かにあれは可愛かったけど、だからと言って恥ずかしい事には違いないんだから！

「すみません姫様……。私に出来るのは現地調達で作る野戦料理ぐらいでして……姫様のように見栄えも味も素晴らしい料理は作れないのです……」

「ん……気にし……ないで……いい……よ……」

所謂『漢の料理』ってやつだね。知識があるだけずつとマシだよ。ちよつぱりしょんぼりしてるから、ラウラの頭をなでなでして慰めてあげよう。

「コ……コホン。ところで今日は何を作る予定なんですか?」

「そうだな……」

話し合いで決まった大まかなメニューは、まずは妥当な『パフエ』を初めとするデザート類。

それから小腹を満たす位の量の軽食を出すつもりだ。

「ジュース類は普通に買ってくるとして、紅茶はセシリアに任せていいんだよね?」

「はい。本場イギリス仕込みの紅茶を皆さんにも堪能して貰いますわ」

「後はコーヒーやココアとかだけ……それも本番直前になってから準備すればいいか」

「今ある材料で作れるものは……」

「フレン……チ……トース……ト……と……オムレツ……とか……?」

「その辺りだな。出来ればデザートも一品ぐらい作ればいいんだけど……」

そうだね。パフエだけじゃどうしてもマンネリになってしまおうし、他にも色々なデザートがあった方がお客さんも喜ぶよね。

「それならば、プリンアラモードはどうだ?」

「ボーデヴィツヒさんの口から予想外の単語が飛び出したっ!?」

成る程。プリンアラモードなら、他の料理と並行して作っていれば時間も短縮できるし、大丈夫かもしれない。

「ラウラ、そのような事を言うということは、さては前に弥生の作ったプリンを食べた事があるな?」

「フツ……よく見抜いたな箒。その通りだ。私は以前、姫様特製のプリンを御馳走になった事がある」

そんな事もあったね。

あの時は私がしてるモバゲーで神引きしてテンションが上がって

て、その勢いでラウラにプリンを作ってあげたんだっけ。

美味しそうにプリンを頬張るラウラ……可愛かったな♡

「あ……味はっ!? どうだったんだっ!?」

「フフフ……最高に美味だったとだけ言っておこう」

「」「ゴクリ……」「」

「スプーンで突いただけでフルフルと揺れ、一口掬って口に入れば、その瞬間にまるで淡雪のように溶けて消える。それなのに、味はとても濃厚で口の中をずっと覆い尽くすんだ……」

私は普通にレシピ通りに作っただけなんだけどなく。

確かに美味しかったけど、そこまで言う?

「私も板垣さんのプリン食べたい!!」

「つて言うか、板垣さんの作った料理が食べたい!!」

「右に同じ!!」

おう……いきなりのリクエストがきましたよ。

でもまあ……悪い気分じゃないし、作りましようかね。

「よし。そんじや俺がオムレツ、シヤルがフレンチトースト、んで弥生がプリンでいいか?」

「僕はそれでいいよ。フレンチトーストは普通に得意だし」

「私……も……いい……よ……」

全員で全部作るんじゃないのね。

その方が効率がいいのは事実だけど。

別にここで作らなくても、どっちも私作れるからいいんだけど。

「試食は……」

全員が目をキラキラさせてアイコンタクトで『私がする!』つて訴えてる……。

そこまで必死にならなくても、言ってくれさえすればいつでも作ってあげるんだけど。

「……出来てから決めるか」

それが妥当だよ。クラス代表さん。

・  
・  
・  
・  
・  
・

はい。弥生ちゃんのお料理講座の時間だよ！ ドンドンパフパフ♪

今日のお料理はプリンですよ。

材料は……。

(カaramel用)

砂糖 30g

水 20g

熱湯 15g

(プリン用)

卵 2個

砂糖 50g

牛乳 250g

バニラエッセンス 適量

となっております。

まずはカaramelから作っていきましょう。

小鍋にグラニュー糖と水を入れた後に中火から強火にかけて、薄くカaramel色になるまで鍋を傾けながら焦がします。

「なんか本格的なんですけど……」

「手際いいなあ……」

なんか外野が言ってるけど、気にせずに作ります。

この時に注意しないといけないのは、下手にかき混ぜてしまうと結晶化してしまうので、こうして鍋を傾けながらゆっくりと混ぜるのとです。

あまり濃い色まで焦がしてしまったら、結晶化の原因にもなりかね

ないから、適度に薄茶色になった時点で火を止めましょう。

「は〜い！ 弥生お母さん！」

誰がお母さんか。私はまだ未成年な上に未婚じゃい。

火を止めるか、もしくは弱火にするかして余熱で好みのカラメル色になるまで焦がしましょう。

今回はラウラが大好きな少し濃いめにしようと思います。

「ありがとうございます！ 姫様！」

あつはつはつ。可愛い娘の為ならこれぐらい。

……私も少し調子に乗り過ぎたな。

予熱でじわじわと色を変えていくんだけど、ここで熱が弱いと感じた場合は弱火で加熱をしてからじっくりと色を付けていきましょう。

撥ねに気を付けながら、お湯を少しずつ加えていって、カラメルと均一になるように混ぜていきます。

ここで一気にお湯を入れてしまったら撥ねてしまうので、慌てずに少しずつ加えて混ぜ込んでいきます。

のんびりしすぎて温度が下がってしまうと固まってしまうから、素早く手早くてきはつぱと作業しましょうね。

「凄くいい匂いがする……」

「カラメルの時点で既に美味しそうなんですけど」

出来上がったら、ここに用意したプリンの器にカラメルを均等に分けて入れていきます。

入れた後は器を回しながら均一に器の底で伸ばしていきます。

これでカラメルは完成です。

「「「おおく!!」」」

お次はプリンを作っていきますよ〜。

まずは卵を丁寧割ってボウルに入れてから、こうして泡立てないように泡立て器でほぐして、砂糖を加えてしっかりと全体をすり混ぜます。

ラウラ〜。私が頼んでおいた事はちゃんと出来てるかな〜？

「はい！ 姫様の御命令通り、小鍋にて牛乳を沸騰寸前まで温めてあります！」

よく出来ました。後でラウラの事をハグしてあげよう。

彼女が用意してくれた沸騰寸前の牛乳にバニラエッセンス加えてから、これも混ぜ合わせていきます。

そして、さつき作った卵液にこの牛乳を少しずつ均等になるように注意しながら、泡立でないように混ぜていくのです。

ここで泡立ちが多すぎると、器に注いだ時に泡が多くなってしまつて『す』が入る原因にもなるから、静かに混ぜていくのがいいでしょう。

「姫様。こちらをどうぞ」

ありがとう、ラウラ。

彼女が渡してくれた目の細かい濾し器で出来上がったプリン液を濾しながら、さつきカラメルを入れた容器にちゃんと均等になるように注いでいきます。

濾し器の目が細かい程に滑らかなプリンが出来上がるから、もしもここで卵白の塊で濾し器が詰まってしまうような事態になった時は、思い切って卵白を捨てちゃいましょう。

今回はそんな事にはならなかったみたいですね。よかったよかったです。

これは大丈夫だけど、器に注いだ時にどうしても気泡が目立ってしまう場合は、火であぶると簡単に消す事が可能です。覚えておいて損は無いと思うよ。

ここまで来たら、もう後は固めるだけなんだけど、実は作り方が二種類あったりするんだよね。

一つは蒸し器で作るパターン。

もう一つはオーブンで作るパターン。

IS学園らしく、この調理実習室には高性能なオーブンがあるので、今回はオーブンを使った方法でいこうと思います。

こんな風に天板やバットに布を敷いて、アルミホイルを被せた器を並べてから、器の三分の一ぐらいの高さまで湯を張ります。

そして、160℃ぐらいまで予熱をしたオーブンで2〜30分ぐらい蒸し焼きにするんだけど……ラウラ、準備出来てる？

「はっ！ いつでも使用可能です！」  
よく出来ました。

んじや、慎重にオーブンの中に入れてからスイッチをポチつとな。  
後はのんびりと待つばかり。

「やよつちく。これが出来上がったら、その後はどうするの〜？」  
粗熱を取った後で、冷蔵庫に入れて冷やしたら完成だよ本音。  
だから、もう少しだけ待っててね。

「うん！」

さて……と。一夏達はどうなってるかな？

・  
・  
・  
・  
・  
・

「」「」「……」「」

お。こつちももう出来上がる寸前じゃん。

一夏が作ったふわふわのオムレツ、美味しそうだねく。  
シャルが作ったフレンチトーストもいい香りを漂わせてる。

「あ、弥生。そっちはもう終わったのか？」

「ん……今……はオーブン……で蒸して……」

「そっか。遠目で少し見てたけど、弥生の手際って凄くいいよな。本  
気で感心したよ」

「そう……かな……」

夢中でやってただけなんだけど。そこまで褒められると、相手が一  
夏とはいえ照れちゃうな……。

「弥生……調理中は全く迷いの無い手つきをしていたな……」

「私には一生掛かっても無理な芸当ですわ……」

なんか箒とセシリアが絶望した表情をしてるけど、一体どうした？

「織斑君もデユノアさんも料理上手……」

「女として負けた……」

「いや、俺は男だし」

今時、料理上手な男子もそう珍しくも無いでしょうに。

一夏だけが例外じゃないよ。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

一夏のオムレツとシャルのフレンチトーストの試食を終えてから、女子達が余りの美味しさに非常に複雑な表情をしていた。

悔しいが、流石は一夏と認めざるを得ない出来だった。

あのフワフワ具合はそんじょそこらの連中では決して真似出来ない。  
い。

あれは間違いなくお店で出すようなやつだ。

そして、シャルのフレンチトーストも絶品だった。

まるで紅茶と一緒に味わう事を前提にしたような味付けは、見事という他ない。

そうこうしている間に時間が経ち、オーブンから『チーン』と音が聞こえてきた。

「お！ やつと出来た？」

「まだ気が早いって。オーブンから出した後は冷蔵庫で冷やさないといけないって言ってたじゃんか。だろ、弥生？」

「そうだ……よ……」

「でも、ここにある冷蔵庫もまた無駄に高性能だから、オーブンの時ほ



どは時間は掛からないんじゃない?」

ほんと、隅から隅まで金掛けすぎだよ、IS学園。

だってこの調理器具の数々って、どう考えても一流の料理人の人達が使うような代物ばかりだよ?

なんて心の中で個人的な疑問を投げかけながら、私はオーブンからプリンの入った容器を取り出して、冷蔵庫に一つずつ入れていく。

「ここのやつなら……掛かっても15分ぐらいでいいんじゃないか?」

「そ……れなら……その間……に片付……けでもしよう……か……」

「それがいいね。時間が勿体ないし」

空き時間は有効に活用しなくちゃね。

じゃないと、帰る時間が遅くなっちゃう。

「では、私もお手伝い致します! 姫様!」

「ありがと……」

「わ……私も手伝わせてくれ! せめてそれぐらいはしなくては……」

「私もする」

ラウラや箒、本音に釣られるように皆も自主的に手伝いを申し出てくれた。

これならあつという間に片づけも終わるね。

「では、このセシリア・オルコットも微力ながらお手伝いを……」

「」「だが断る」「」

「なんでですのっ!?!」

それは自分の大きな胸に手を当ててよく考えなさいな。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

全部の片付けが終わった頃、丁度いいタイミングでセットしておいたタイマーが鳴った。

随分と長かったけど、これでようやく完成だ。

「よいしょ……つと」

4つのプリンが乗った天板を持って皆の元まで行く。

よっぽど食べたかったのか、既に本音が個数分の皿とスプーンを用意していた。

「フフフ♡ やよっちのプリン……楽しみだな♡」

そんなに慌てなくてもプリンは逃げないよ。

型から出す時は、こうして竹串みたいに細い棒で円周に沿っていく形でそつと空気を入れてから、逆さまにして……ポン！

「「おおおくく!!」」

はい、出来上がり。

弥生ちゃん特製プリン、おあがりよ!!

「いざ完成品を見ると……」

「超絶美味しそう……」

「よ……涎が……」

うん。今回ののは中々にいい出来栄えだ。

これなら私的には文句無しかな。

と、ここでいきなり調理実習室の扉が開いて、意外なゲストがご登場した。

「む？ お前達、まだいたのか」

「美味しそうな匂いがしますね」

にやんと、千冬さんと山田先生がやって来たではありませんか。

本当にいいタイミングで来るよな……。

ちゃんと今回の事は二人にも報告済みで、恐らくは担任として私達の様子を見に来たんだと思われるが……。

「ん？ その美味しそうなプリンは誰が作ったんだ？」

「これは姫様がお作りになられたプリンです！」

「や……弥生が作ったプリンだどっ!？」

そこまで驚くような事かな？

なんか集中線が入って迫力が増してるけど。

(弥生が料理上手なのは知っていたが、まさかお菓子作りまでも得意だったとは……！ これは絶対に食べてみたい!!)

うん。全身から『食べたいオーラ』を出しまくってますね。

皆には悪いけど、ここは担任の特権として割り切って貰って、一つだけ担任コンビに分けてあげよう。

「一つ……いかがですか……?」

「い……いいのか? 皆で食べるつもりだったのだろうか?」

「普段……からお世話……になつてま……すし……」

(うう……相変わらずなんていい子なんだ……！ 本気で嫁にしたい……)

(板垣さんは本当に優しい子なんだ……それに可愛いし、健気だし……はっ!? 今、私は何を考えて……)

流石に個数的に全員が食べられる訳じゃないから、残った分はじゃんけんをして勝った人たちだけが一つを食べ分けることに。

こんな時に無駄に強運を発揮するのが原作キャラなのでして。

見事に一夏を初めとするメンバーが勝ち残った。

他にも勝った子達はあるけど、こいつ等が揃って残るのは普通に凄い。

「では……」

「「「いただきます」」」

製作者権限として、私も一口パクリ。

うんうん。いい具合になつてる。申し分なしだね。

これなら学園祭に出しても大丈夫……。

「うんまあああああああい!!」

「うまつ!」

「本当だ……口の中でとろける……」

「美味しく♡ やよつちのプリン、ちよーちよー最高だよ♡」

「再びこの味を堪能出来るとは……私はなんて幸運なのだ……」

いや、ちよつと大げさすぎやしませんかね?

「くう……! プリンとはここまで美味しい食べ物だったのか……」

！」

「これ食べちゃったら、もうスーパーとかに売ってる市販のプリンは食べられませんね……。それぐらい美味しいですよ……。板垣さんのプリン……」

よ……喜んで貰えたようで何よりです……。

「板垣さんって……」

「可愛くて、スタイルもよくて……」

「優しくて、頭もよくて……」

「お菓子作りも完璧……」

「更には包容力もあるし……」

なんかそこで言ってますけど。

これぐらい、覚えれば誰でも出来るでしょうに。

「言っておくが、姫様は料理全般こなせるだけでなく、家でも家事の全てを行っていらっしやるのだぞ」

「」「女子力の塊かつ!」「」

それは褒められてるのかな？ それとも馬鹿にされてる？

「」「板垣さん結婚して!!」「」

「ええっ!？」

いきなりなにを言うだあっ!?

「もうマジで板垣さんって超優良物件じゃん!!」

「世の中の男共の目は完全に節穴ね!!」

「男共が狙わないのなら……私が娶る!!」

「女子として完璧すぎ!!」

ちよ……ちよつと？ なんか皆の目が怖いんですけど？

「これも弥生の魅力がなせる技なのか……!」

「悲しいような、嬉しいような……」

「なんとも複雑な気分だよね……」

「いや、弥生は俺の嫁だし。誰にも渡さないし」

「貴様はまだそんな戯言を抜かしているのか」

「やよつちは本当に人気者だね」

そんな事を言ってる暇があるなら、私の事を助けてくれませんか

ねっ!?

っーか、いつ私が一夏の嫁になったし!

「何を言っている。弥生は私の嫁だ。異論は認めん」

「「「「えっ!?!」「」」」

ここで超特大の爆弾を投下しないでください千冬さん!!

場がとんでもない空気になってるじゃないですか!!

あく……もう……結局はいつものようにグダグダになってしまっ  
た……。

この後、私達が試作したメニューは全てが採用されて、喫茶店です  
事が決定した。

これは、準備が増々大変な事になりそうだな。

## サブキャラ（+α） 全員集合！

遂にやって来た、IS学園の学園祭。

在校生から貰った専用のチケットが無いと入る事すら出来ないにも拘らず、学園の正門前は大勢の人々で賑わっていた。

「ふう……。まさか、こんなにも来客者が集まるとは思わなかったわ。間違いなく、これは今までで一番の来客数ね。やっぱり、織斑君の影響かしら……」

そう言いながら額に浮かぶ汗を制服の袖で拭いているのは、生徒会役員の一人であり本音の実姉でもある布仏虚。

担当の教師達と一緒に来場者の招待状を確認し、中へと通す役目を担っているのだ。

本来ならばここには弥生やラウラ、本音と言った面々もいなくてはいけないのだが、彼女達は彼女達で予想外の忙しさに見舞われて手伝う事が出来ないでいる。

それに関しては虚も連絡を貰っているので納得しているのだが、問題はもう一人の役員だった。

「この忙しい時に限って、一体お嬢様はどこに行ってしまったのやら……」

そう。生徒会長である筈の楯無が何処にもいなかったのだ。

間違いなく弥生の元に行ったのだろうとは思うが、それならそれで彼女から連絡が来そうなものだ。

それが無いという事は、それとは別の場所に潜んでいる事になる。虚は生まれて初めて、自分が仕えている少女に対してドロドロとした怒りを覚えた。

そうこうしている間にも客は着実に数を増やしていく。

そして、その中には弥生や一夏を初めとしたいつもの面々が招待した者達も含まれている。

果たして、最初にやって来るのは誰になるのだろうか？

.....

・  
・  
・  
・  
・

意外や意外。一番最初にやって来たのは彼だった。

「おく。これはまた随分と賑わっておるの〜」

内閣総理大臣 板垣平松。

弥生の義父であり、大切な家族。

矢禿の粋な計らいにより、なんとか一日だけ休みを手に入れた総理は、義娘の顔を見る為にここまでやって来たのだ。

「あ…貴方様は!?!」

「ん?」

そんな彼の存在にいち早く気が付いた虚が急いで近づいていく。

「弥生さんのお義父さまにして、内閣総理大臣であらせられる板垣平松さま…ですよね?」

「そうじゃが…おぬしは誰じゃ?」

「あ…申し遅れました。私は生徒会役員の布仏虚と申します。今はここで招待状の確認などを行ってまして…」

「布仏…そうか。あの家の人間か。成る程のおく…」

何かを知っているのか、総理は感心したような感じで頷いた。

「ここには弥生さんの御顔を見に来られたのですか?」

「うむ。可愛い娘の活躍を見たくての。しかし、弥生の事を知っておるといふ事は、おぬしはあの子と仲がいいのかの?」

「はい。私の妹が彼女と同じクラスに在籍しております、その関係でよくお話をします。最近では生徒会にも入ってくれたので、話す機会が増えました」

「なんと…あの弥生が生徒会に…。頑張っておるんじやのお  
……」

義娘の成長に感動して少しだけ涙ぐむが、すぐに袖で拭ってからいつもの顔に戻る。

「お手数ですが、招待状を拝見してもよろしいでしょうか？」

「うむ。これじゃ」

ポケットから綺麗に入っていた招待状を取り出して虚に渡した。

「……これは……！」

てつきり弥生から誘われたとばかり思っていた虚だが、招待状に書かれていた名前は彼女の完全に予想外の人物だった。

「轡木……十蔵……。総理は理事長と何か御関係が……？」

「ワシと十ちゃんは学生時代からの親友同士じゃ」

「そ……そうだったのですか……」

意外な人物同士の接点を知ってしまった。

普通に聞いてはいるが、実際にはとんでもない事実である。

日本の内閣総理大臣とIS学園の理事長が実は昔からの親友同士であると誰が思うだろうか。

「か……確認終わりました……。どうぞ……お楽しみください……」

「ありがとう。お主も頑張るんじゃぞ」

劳いの言葉を投げかけてから、総理は校舎の中へと入っていった。

その後ろ姿を、虚は呆然としながら見送った。

「せ……精神的に疲れた……」

彼女じゃなくても、総理大臣と会話をして緊張しない人間などそうはいないだろう。

これからの為に少しでも精神力を回復させる為に、虚は密かに持っていた栄養ドリンクを一气飲みました。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・



次に来たのは彼女。

普段はメイド服に身を包んでいるが、今回は流石に自重して私服でやって来た。

茶色いセーターに白いロングスカート。

恰好は至って普通だが、その美貌が周囲の人々の注目を集める。

「この招待状は……誰に渡せばいいのかしら？」

キョロキョロと周囲を探るように見渡すのは、セシリアの実家であるオルコット家に仕えるメイドの『チエルシー・ブランケット』

同僚に言われて、羽休めの為にこうして自分の主人がいるIS学園の文化祭へとやって来たのだ。

「何かお困りですか？」

「あ……」

そんなチエルシーを見かけて、役員としての仕事をする為に虚が駆け寄ってくる。

学園の制服を着ている彼女を見て、チエルシーは内心ホツとしていた。

「この招待状は貴女に渡せばいいのかしら？」

「はい。少し拝見しますね」

チエルシーから渡された招待状を見て、虚は成る程と納得した。

「セシリアさんからのご招待ですね。確かに承りました」

「お嬢様を御存じで？」

「はい。代表候補生である彼女は色んな意味で目立ちますから」

「そうですか……」

虚が言った『色んな』の意味をちゃんと読み取ったチエルシーは敢えてその先を聞かなかった。

メイド同士にしか分からない謎の感応現象だ。

「校舎に入っただけすぐにパンフレットが置いてありますから、それを参照してお楽しみください」

「ありがとうございます。では、失礼しますね」

丁寧な挨拶に丁寧なお辞儀。

そこだけ間違いなく別の空間に変貌していた。

(まさか……こんな形で再びIS学園を訪れるとは思わなかったわね……)

チエルシーは夏休みの時に一度、セシリアの従者として彼女の荷物を持つ為に供をした事がある。

その時は校舎には入らず学生寮だけしか行けなかったが、今回は違う。

久し振りに生娘のようにドキドキと胸を昂ぶらせていくチエルシーだった。

・  
・  
・  
・  
・  
・

三人目はまたもや大物。

明らかに外行き用の背広に身を包んだ白人男性。

完全に場違いな空気を醸し出しているが、本人は全く気にしていない。

「ここがIS学園か……」

何かを見極めるように校舎を見上げる彼は、シャルロットの実父でありデュノア社社長のアルベール・デュノアその人。

板垣総理程ではないが、彼もフランスではかなりの有名人だ。

「あく……その眼鏡を掛けて腕章を付けているお嬢さん。少しいいかな?」

「なんででしょうか?」

見た目とは裏腹に流暢な日本語で話すアルベールに、少しだけ驚く虚だったが、冷静に考えれば自分の周りには同じような人間がごろごろいる事を思い出し、すぐにいつもの状態に戻る。

「娘の招待でここに来たのだが、この招待状はどうすればいいのかな」

？」

「はい。招待状ならば私に渡して貰えれば結構ですよ」

「そうなのか。では、これを」

彼から渡された招待状を見て、虚はすぐに彼が誰なのか察した。

（招待状を出したのはシャルロットさん。と言う事は、この人があのデュノア社の社長であり彼女の父親でもあるアルベール氏……）

これまたかなりの大物ではあるが、一番最初に超絶的な人物と遭遇しているのです、完全に耐性が出来ていた。

「確かに受け取りました。では、学園祭をお楽しみください」

「ありがとう」

普通にお礼を言ってその場を後にするアルベールではあったが、その心の中は地味に緊張していた。

何故なら、今回の目的は愛する娘に会うだけではなく、家族と会社の恩人の父である

板垣総理に礼を言う事もあるのだから。

一会社の社長と一国の総理大臣。

似たような立場でもスケールが違いすぎる。

今日この日、アルベールはIS学園に来るまでに購入した胃薬を持参して決戦に臨む。

彼の胃に穴が開く事が無いように祈るばかりである。

．．．．．

．．．．

．．．

．

お次にやって来たのは、天下無敵の美少女軍団。

金髪に銀髪、長身に低身長と、多種多様な美少女が一堂に会している光景は、完全に周りから浮いている。

「やってきましたIS学園」

「デケ〜……。幕南とは大違いだわ」

「当たり前じゃない。使ってる金額が桁違いなんだから」

「それもそっか」

もう説明の必要もないだろう。

やって来たのは、塩田に叶親に吉崎に嶋鳥に鷹橋に植村と、弥生に直々に誘われた桜井の7人である。

いずれも見目麗しい美少女達だから、男性客の殆どが彼女達に目を奪われていた。

「あ。あそこでなんかやつてるのって虚さんじゃね?」

「ほいな」

「あの人に招待状を渡せばいいんかな?」

「そじゃね?」

よく見知った姿を見つけた7人は、すぐに彼女の元まで駆け寄った。

虚の方も、いきなり大勢でやって来たのですぐに気配を感じ、次の瞬間に塩田達を見て今まで以上に驚きを隠せずろっかくしんちゆうにいた。

「て…鉄人様?! それに他の『六角神柱』の方々まで……!」

「お久し振りつす。虚さん」

「お……お久し振りでございます……鉄人様……」

明らかに今までとは様子がおかしい。

だが、塩田達からすれば毎度の事なので気にしない。

「楯無から話は聞いてるよな? ほい、招待状」

「た……確かに受け取り致しました……」

「つーか、どうしてこの人、ここまで緊張してんのよ」

「さあ?」

どう見ても様子がおかしい虚の事を心配する桜井だったが、考えも始まらないと思っただのか、すぐに頭の中から疑問を消し去ってから招待状を渡した。

「私もいいですか?」

「え? あ……はい」

桜井から渡された招待状を見て、今度は別の意味で驚いた。

「弥生さんからの……。もしや、貴女が弥生さんの中学時代の御親友だという桜井美保さんですか？」

「そうですね……。なんで私の名前を？」

「弥生さんから伺ってるんです。彼女、貴女の事を話す時はいつも楽しそうにしてるんですよ」

「そうなんですか……」

どんなに離れていても、二人の絆は繋がっている。

それを改めて実感した桜井は、表情には出していないが、本気で嬉しいと思つた。

「お嬢様はどこにいらつしやるか分かりません。携帯を使って呼び出しましようか？」

「いや。別にそこまでしなくてもいいよ。適当にぶらついてればどこかで会うだろう？」

「そうですね……。では、お楽しみくださいませ」

「おう。サンキューな」

後ろ手に手を振りながら去っていく塩田達を見て、虚は今まで一番精神を削られた。

「もう一本……」

本日二本目の栄養ドリンク入りました。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

塩田達の次に虚が出会つたのは、明らかな不審人物だった。

サングラスにマスクをしてはいるが、着ている服はなんともメルヘンで、不思議の国のアリスに登場しそうなワンピースだった。トドメ

に頭には機械のウサ耳を付けている。

はい。どう見ても篠ノ之束です。ありがとうございます。

「これ……招待状……」

「は……はあ……」

反射的に招待状を受け取ってしまったが、本当にそれでよかったのかとちよつとだけ不安になる。

「それじゃー」

人込みを避けるようにして、見事な回避テクニックを駆使して校舎へと進んで行く束。

そんな彼女を見送ってから、虚はふと招待状に目を通す。

「織斑先生が送った招待状……？ ととなると……まさか……？」

どうにも嫌な予感が拭えないでいる虚なのであった。

・  
・  
・  
・  
・

小休止として自販機に行つてドリンクを買ってきた直後、サイドテールに髪を纏めた小柄な少女が虚に招待状を出してきた。

「なんか腕章を付けてるって事は、学園祭の実行委員的な人なんですよね？ これ、招待状なんですけど」

「え？ あ……はい。ちよつと待ってくださいね」

急いで適当な場所に自販機で買ったペットボトルを置いて、招待状を受け取る。

「招待状の送り主は……凰鈴音さん？」

「鈴お姉ちゃんを知ってるんですか？」

「一応は。IS学園では代表候補生ついでだけで目立ちますから」

「そうですか」

ぶつきらぼうに返事をしているが、内心は全く違った。

(やっぱりココでもお姉ちゃんは凄かったんだ！ ウフフ……♡)

そんな風にはくそ笑んではいるが、あくまで心の中だけなので、実際に顔には出廷はいない。

「つかぬことを窺いますが、貴女は鈴さんどのような御関係で？」

「アタシと鈴お姉ちゃんは従妹同士ですよ」

「従妹……道理で……」

似ていると思った。

そう言おうとしたが、彼女の顔がなんだか急に曇ったので言うのを止めた。

何か事情があるのかもしれないが、ここで聞くのは間違っていると思っただから。

「こう見えても、私は少し前に代表候補生になったんですけど」

「そうなんですか？」

「はい。台湾代表候補生『嵐乱音』。覚えておいてください。すぐに世界で一番の有名になりますから」

自慢げにそう語った乱音は、分不相応なニヒルな笑顔を見せた。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

乱音と別れて正門前に戻ってきた虚を待ち受けていたのは、今までで一番の強敵だった。

「おおおおおおおおつ!! ここがI S学園……隊長と姫様が通っておられる学び舎か！」

眼帯を付けた明らかな軍服を着た銀髪の女性。

虚は彼女を見た途端にこう思った。絶対に関わりたくない。

だが、現実には実に非情なもので、その銀髪の女性があるかどうか真っ直ぐに自分の方に向かって来た。

「その人！ 少してお尋ねしたいのですが!!」

「ハイ……ナンデショウカ……」

「この招待状はどうすればいいのですか？」

「ワタシニオワタシクダサレバケツコウデス……」

「そうか！ では、早速！」

目からハイライトが消え、虚が明らかなレイプ目になっている事にも気が付かないまま、銀髪の女性……ラウラの副官であるクラリツサは逆に目をキラキラに輝かせながら招待状を手渡し、そのままの勢いで校舎の中までダツシユしていった。

「隊長……♡ 姫様……♡ 待っていてくださいね♡」

本当ならここで注意をしなくてはいけないのだろうが、それをする気力も無いし、それ以前に彼女にこれ以上関わりたくなかった。

「もうヤダ……疲れた……」

この日、虚は生まれて初めて仕事をサボりたいと本気で思った。

.....

完全に精神的が疲弊しきった虚の元に、やっとまともな人間達がやって来てくれた。

「……が I S 学園……乙女の花園……」

「お兄。表現が普通にキモイ」



「お前さ、最近になつて増々俺に対して辛辣になつてね？」

赤い髪が良く映える兄妹。五反田弾と五反田蘭の二人だ。

今までとは打つて変わつて、二人は真正正銘の一般人である。

「お！ さつそく素晴らしき眼鏡美人を発見！」

「腕章を付けてるつて事は、何かの係の人かな？」

「多分そうだろう。あの人に招待状を渡せばいいのか？」

「試しに聞いてみれば？」

「そうだな」

猫背になつてげんなりとしている虚の元まで歩いていき、そこで招待状を出してみせる。

「あのくすんません。ちよつちいいですか？」

「はい……なんでしょう？」

最初は『またか……』と思つた虚だが、すぐに今回の二人は今までとは違うと思ひ直し、なんとかいつもと同じ風を装つた。

「この招待状なんですけど……」

「招待状ですね。分かりました」

もう完全にルーチンワークとなつた動作で招待状を受け取ると、なにやら妙な視線を感じた。

「……？ どうしました？」

「え？ いや……美人さんだなく……なんて……」

「はあ……」

今の虚は、この程度の言葉で照れる程の余裕はない。

弾にとつては勇気を振り絞つた一言ではあつたが、虚はそれを文字通り右から左に受け流してしまった。

「お兄。ジャブ失敗だね」

「チクシヨク!! こうなつたらせめて、例のメイド喫茶で楽しい思いをしてやるぜく!!」

「はいはい。お願いだから、恥になるような事だけはしないでよね」

兄妹仲良く話しながら校舎の中に入つていくのを見て『仲がいい兄妹だなあ』と何気なく思つた虚であつた。

・  
・  
・  
・  
・  
・

一方その頃、ラケシスとアトロポスはいとうと……。

「確かに確認しました。ようこそ、IS学園の学園祭へ、楽しんでいてくださいね」

「ありがとうございます」

虚から離れた場所にいる係の教員に招待状を渡して中に入っていた。

彼女達が渡した招待状は、裏オークションで手に入れた代物で、密かに調べ上げたIS学園の生徒名簿で適当な名前を見繕って、その人物に招待された事にして入る事に成功していた。

「招待状一つで20万もするとは思いませんでした……。二人分で合計40万……。地味に痛い出費です……」

「……………」

「え？ 早く粉ものを食べたい？ まずはたこ焼きからだ？」

「……………」

「ちよ……待ってください姉さま！ タコ焼きの次は好み焼きって！ どれだけ食べる気なんですかっ!?」

この姉妹も、どうやら何気に苦勞をしているようだ。

沢山の重要人物達が図らずも集結した学園祭。

この邂逅が何を生み出すのだろうか？

それは誰にも分からない。

忙しすぎだろ!!

別に全く待つてすらいなかった文化祭が遂に始まってしまった。各クラスが気合の入った事をしていて、学園全体の温度が上がってるんじゃないかと錯覚してしまう程に皆は熱狂している。

なんて他人事のようにでも言わないとやってられないんだよね、実際。

「篠ノ之さん！ 三番テーブルをお願い！」

「任せておけ！」

「オルコットさんは五番テーブルのお会計をお願い出来るっ!？」

「分かりましたわ！」

「ボーデヴィッツヒさん！ 廊下で並んでいる人達に少しだけ席が空いた事を知らせてきて！」

「了解だ！」

ほんと……嵐のような忙しさだよね。我等が一組の『耳かき喫茶』は。

店名に惹かれてやって来るお客さんが続出してる上に、ここには学園で唯一の男子である一夏もいる。

この二つの相乗効果で客の入りがとんでもない事になっていた。

なんせ、廊下に行列が出来ちやって、クラスの子が【30分待ち】って書かれたプレートを持って立ってるぐらいだし。

「織斑君！ 今さっき入って来たお客さんの所に行ってくれるっ!？」

「また俺かよっ!?! 頼むから少しぐらい休ませてくれよ……体が持たないぜ……」

一夏。地味にそれは死亡フラグだよ。

ガブつといかれちゃうよ。ガブつとね。

「とつても忙しいんですね〜」

「で……すね……」

そんな中、私は何をしているのかと言うと……。

「あ……そこ……気持ちいい……♡」

「ん……ここ……も……」

お会計の際に引くくじ引きで当たって耳かき券を獲得した、見ず知らずのお客さんの耳かきをしています。しかも膝枕で。

不思議な事に、今までずっと女性客しか当たりを引いてないんだよね。

メイド服を着た皆を目当てにした男性客もかなり多く来店してるのに。

「終わり……です……」

「あ……ありがとうございます……♡」

このお客さん、少しだけ名残惜しそうにしてなかった？

私が見落としてただけで、まだ取り残しでもあったのかな？

「とっても気持ちよかったです。なんだか子供の頃にお母さんにしてもらった耳かきを思い出しちゃった」

どうして皆して私の事を『母親』というフレーズと一緒にしようとするの？

そんなに私って老けてる？

「いってらっしゃい……ませ……お嬢様……」

「いってきます。可愛いメイドのお母さん♡」

可愛いメイドのお母さんって……なんじゃそりゃ。

それに対して私はどんな反応をすればいいの？

「はい。このくじを引いて当たりを引けば……あそこにいる母性の塊とも言える美少女メイド『弥生ちゃん』の最高の耳かきを体験出来ませー！」

「うおおおおおっ!! マジっすか!? あんなにも可愛い美少女の耳かきとか無敵だろっ!？」

「そうでしょう! そうでしょう! さあ、レッツチャレンジ!」

「よっしゃあああっ!!」

今、クジを引いてるのは男性客だね。

でも、欲望丸出しの時ほど、当たりは出ないものなんだよ。

「はいハズレ〜! 残念でした!」

「うがあああああっ!!」

「ありがとうございます〜!」

「ちきしょう……美少女メイドの耳かき……」

ほらね。この法則はソシヤゲのガチャで既に証明されているのだよ。

ハズレを引いた男性客は、意気消沈した感じで猫背になりながら店と化した教室を後にした。

「板垣さん。さつきからずっと座りっぱなしで耳かきして疲れたでしょ？ 少し下がって休んでいいよ。また当たりが出た時や指名が出た時はこっちから呼ぶから」

「ん……ありがと……」

私の事を心配してくれた鷹月さん（最近になって話すようになった）のお言葉に甘えるように、私は簡易的に造られたスタッフルームに入っていた。

そこではお客さんに出すお菓子やジュースの準備をしている皆があくせくと頑張っていた。

「あ、弥生。休憩に入ったの？」

「ん……」

「そっか。一夏もそうだけど、弥生の人気も凄いもんね。特に耳かきを体験した人達は」

ここではシャルロットが準備の指揮を執りながら、同時に店の方にも出るというハードスケジュールで頑張っている。

本当はここに一夏も加わる予定だったんだけど、アイツの人气がこっちの想定を遥かに超えていた為、結果として一夏は接客の方にかかりつきりになってしまった。

「はいオレンジジュース。それでも飲んでゆっくりしてて」

「ありが……とう……岸原……さん……」

これまた最近になって話すようになった岸原さんにジュースを貰ってから、傍にあった椅子に深く座った。

（ふう……なんか本気で疲れたよ。主に精神的な意味で）

たかが耳かき程度で、どうしてそこまで盛り上がるのかな？

私には全く理解出来ない領域であります。

「板垣さん。休んでいる所悪いんだけど、少しこっちに来てプリンを

見てくれる?」

「い……いよ……」

私達の開いている喫茶店では、前に私達が試作したプリンやフレンチトースト、オムレツを主力としながら、他にはスタンダードなチョコレートパフェやホットケーキやパウンドケーキを出している。

ドリンクの方は各種ジュースに加えて、コーヒーやココア、セシリア特製の紅茶なんかも出している。

特にセシリアの紅茶はかなりの人気で、口コミで噂が広がっているのか、殆どの客が注文してセシリアが忙しそうに紅茶を淹れていた。

「どうかな? ちゃんとレシピ通りに作ったんだけど……」

見る限りでは全く問題無いように見える。

形もちゃんと整ってるし、気泡なんかも見当たらない。

「大丈夫……だと思おう……よ……」

「ホントっ!」

「うん……」

「よし! 板垣さんのお墨付きなら問題無し! 次はこれを出すわよ

!」

「は……い!」

料理関係での私の信頼度が、なんか天元突破してますなく。

頼られる事自体は普通に嬉しいんだけどさ。

「板垣さん! ご指名入ったわよ!」

「了……解……」

耳かき以外で私が呼ばれるとは珍しい。

何気に指名制になってる所がリアルだね。

呼ばれたのならば行くしかない。

最初は心と体が拒絶しまくりMAXエディションだったけど、ここまで忙しければ嫌でも慣れと諦めの境地に至ってしまう。

ははは……私も別の意味で強くなったなく……。

「板垣さんは二番テーブルをお願い。なんか猛烈に板垣さん押しだったんだけど……もしかして知り合い?」

「よく……分から……ない……」

「それもそつか。んじゃ、お願いね」

「ん……」

二番テーブル、二番テーブル……つと。

「ここもまた女の子の集団4人組か。」

でも、女の子なのに一夏じゃなくて私を指名ってなんでだろう？

「お……お帰りなさいませ……お嬢様……」

「「「キャ〜〜!! 弥生お姉さま〜〜!!」」」

むむ……！ 私の事を『お姉さま』って呼ぶって事は、この子達は私や桜井さんの後輩……つまりは聖マリアンヌ学園の生徒達と見た！

あの学園って一昔前の少女向け漫画に出てくる学校みたいなのに、上級の女の子の事を『お姉さま』って呼ぶ謎習慣が根付いてるんだよね。恥ずかしいったらありやしない。

「弥生お姉さまを追ってIS学園に入学した他のお姉さま達にお願いして招待状を貰って大正解ね！」

「弥生お姉さまのメイド服姿……感無量だわ……♡」

「麗しの弥生お姉さまのお姿を見る為だけに、ここまで来た甲斐があったわ……！」

「無念にも来れなかった皆に、最高の土産話が出来たわね……」

相も変わらず大袈裟な事だ。

この子達の名前は全く知らないけど、顔だけならどこことなく見覚えがあるような気がする。よくクツキーとかプレゼントしてくれたっけ。

「ご注文……は何にします……か……？」

「そうだった！ 私達だけで盛り上がって弥生お姉さまにご迷惑を掛けられないわー！」

「注文……注文……！」

「ちよ……ちよっと待って皆！ ここを見て!!」

「何よいきなり……って！ これはあっ!？」

なに？ 何を見つけたの？ 凄く嫌な予感がするけど。

「ど……どうするっ……」

「いや。もうこれしか選択肢はないじゃない」

「だよね……」

「緊張するけど……このチャンスを逃したら、絶対に一生後悔する！」

「うん！」

なんか一致団結してるみたいだけど、早く注文してくれないかな？  
割とマジで混雑してるから。

「……………この『メイドにご褒美セット』をください……！」

え？ なにそれ？ そんなのがあるの？ 嘘でしょ？

「あれ？ 板垣さんには教えてなかったっけ？」

「何を…………？」

「その子達が注文した『メイドにご褒美セット』ってのはね、お客さんがメイドさんにご褒美をあげられるサービスの事なのよ」

なんじゃそりやつ!? 本気で意味が分からんぞ!?

そんな事をして、一体何処の誰が得をするって言うんだっ!?

「そんな訳だから、少々お待ちくださいさ〜い♡」

あつ!? ちよつとっ!? どこに行くのさクラスメイトさんよ〜!

「板垣さんは、その子達と一緒に座って待っててね〜」

マジですか…………。

でも、いきなり私が座っても、この子達だって迷惑なんじゃ…………。

「……………(『是非とも座ってください』と言っている目)」

なんか…………すっごい断りづらい雰囲気なんですけど。

はあ〜…………仕方がない…………。

「し…失礼します…………」

「「「きゃ〜〜〜♡♡」」」

一々騒がないですよ…………他のお客様にご迷惑でしょうが。

「まさか…………弥生お姉さまと同じテーブルに座れる日が来るなんて…………」

「間違いなく、今日で一生分の幸運を使い果たしたわね…………」

「でも、全く悔いはない！」

「同じく！」

大袈裟なんだよ、君達は。



私なんかと一緒に座つても、何も面白くなんて無いでしょうよ。

「はい。お待たせしました。これが『メイドにご褒美セット』でございます。では、ごゆっくり♡」

さつきの子が戻ってきてテーブルに置いたのは、氷の入ったワイングラスに刺さっているポツキー。これで何をしろと？

試しに隣の席を覗いてみると、そこでは他のクラスメイトの子がお客様にポツキーを食べさせて貰っていた。

(まさか……あれが『メイドにご褒美セット』じゃあるまいな……?)  
だとしたら、一体どんな羞恥プレイだよっ!?

これを考案した奴は本気で頭が狂ってるんじゃないのっ!?

「だ……誰から行く?」

「ここは平等にじゃんけん決めてましょー!」

「望むところだ!」

一番の被害者である私を放置して盛り上がってますな。

そうこうしている間も、次々とお客さんが出たり入ったりを繰り返している。

幸いなのは、私が仕事(?)をしている間に当たりくじが出ていない事か。

出たら出たで、間違いなく今以上のカオスになる事は確実だしな。

「決定しました! まず私から行きます!」

そうかそうか。だったら早く済ませておくれ。本気で恥ずかしいから。

「で……では……参ります……!」

「ど……うぞ……」

私の隣にいる女の子がポツキーを一本手に取って、私がそつと口を開ける。

これは仕事……ちゃんとした仕事……! 仕方がなくやっている事……!」

「あむ……」

「ど……どうですか……?」

「美味しい……よ……」

「はうん……」

ぱたりんこ。

なんか知らんけど、一人撃墜してしまった。

慣れない営業スマイルなんてしたのが拙かったんだらうか？

普段からあまり感情を表に出さない女の笑顔なんて不気味で怖かったんだらう。

「なんて幸せそうな寝顔……！」

「アコつてば、鼻血まで出して……」

「自分に向けられる弥生お姉さまの笑顔の破壊力は、私達の想像を遥かに超越しているって事ね……！」

私は一体何処の大量破壊兵器か。

流石の私でも地味に傷つくぞ。

「つ……次は私、お願いします！」

まだやるのかよ……。

こうして、私は四人の後輩全員にポツキを食べさせられるという意味不明な羞恥プレイをさせられたのでした。

せめてもの幸運は、彼女達が会計の際に引くくじで当たりを出さなかった事か。

これで耳かきでもしようものなら、どうなるか分かったもんじゃない。

・  
・  
・  
・  
・

「お疲れ様、やよつち」

「本音……」

ご褒美と言う名の羞恥プレイから解放された私を真つ先に労ってくれたのは本音だった。

今の状況でこの子の存在に心癒されるよ〜♡

勿論、ラウラにも癒されるけどね！

「さっきの子達って弥生の知り合いだったのか？ 矢鱈と名前を呼ばれてたけど」

「中学…の時…の後輩…」

「ああ〜…」

一夏の方も自分の客を捌いたのか、私と本音の会話に混ざって来た。

「つか、二人して何に納得してるの？」

「まだまだ客足は引きそうにないな…」

「やよつち、疲れてない？」

「まだ…大丈夫…」

皆と一緒にいたせいか、私もしれっと心身共に鍛えられているのかもしれない。

昔なら、とつくに疲労困憊になってもおかしくないし。

「昼まで頑張れば少しはゆっくり出来ると思うから、それまでは気張っていこうぜ」

「おう」

お昼までの辛抱か…。

でも、まだまだ時間はたっぷりとあるんだよね…。

私の体力と精神力はお昼まで持つんだろうか…。

## サブキャラメドレー再び

人混みに塗れた学園祭へと招待されてやって来た面々。

今回の最大の目当てでもある一組の喫茶店に真っ直ぐ行くことも可能ではあるのだが、その前に彼等は各々に学園祭を楽しんでいた。今回は、その様子を見ていこう。

まずは彼等から。

「いや〜。最近の学園祭は本当に賑やかなんじゃない。ワシらの頃からは想像も出来んわい」

「そうですね。でも、これはこれで活気があっていいと思いませんか？」

「そうじゃな。至る所から子供達の情熱が伝わってくるようじゃ」

大人な話をしながら歩いているの二人組は、弥生の養父にして日本の総理大臣でもある板垣平松と、彼の一番の親友でありIS学園の影の最大権力者でもある真の理事長の轡木十蔵。

彼等の正体を知っている者が見れば、驚愕のあまり気を失いかねない程の光景でもある。

「ところで、ちゃんと一組の場所は分かっていますか？ よければ私がお案内しますが」

「ふむ……そう言えば、ここに来るのは初めてじゃから、まだ正確に各教室の位置までは把握しておらんのだ。ここは十ちゃんに案内を頼もうかの」

「分かりました。私も一度、平ちゃんの御息女に挨拶をしておきたいと思っていましたので」

「十ちゃんがか？」

「はい。以前、彼女はその身を賭して生徒達の命を救ってくれました。機密故に多くの者に知らされてはいませんが、それでも彼女が成した事は参れも無い善行。この学園を預かる者として、せめて私からお礼の言葉ぐらいい送りたいのです」

「今更じゃな」

「ははは……痛い所を突きますな。本当はもっと早くに言うべきでし

たのでしようが、色々忙しくて……」

「無理もあるまい。十ちゃんの忙しきはワシと同じぐらいじゃな」

二人が話ながら歩いてみると、廊下の向こうからどこかで見た事があるような人物がやって来た。

ビシツと決まったりクルートスーツを着た白人の成人男性。

シャルロットの父親でありデュノア社の社長でもあるアルベール・デュノアだ。

「おお……ここに来れば会えると思っていましたが、よもや本当にお会いできようとは……」

「お主は確か……」

「おっと。これは失礼しました。私はアルベール・デュノアと申します」

「そうか……お主が……」

弥生の友達の中にデュノアの名を持つ少女がいる時点で予想はしていたが、まさか本人が直接、日本にまで態々出向いてくるとは思わなかった。

流石に内心では驚きを隠せないでいるが、そこは総理大臣。

表面上はいつもと同じ感じを完全に装っている。

「板垣平松。いつもならば高々と名乗りを上げる所なのじゃが、今日は総理としてではなく、一人の父として訪れておるからの」

「それはこちらと同じです。ところでそちらは……」

「私は轡木十蔵と申します。どうかよろしくお願いしますね」

「なんと……！ 貴方が噂に名高いあの……！」

どうやら、十蔵の噂は遠く海を越えて伝わっているようだ。

それだけ、彼が凄まじい人間であるという証拠なのだろう。

「ここで話すのもなんですし、込み入った話は一組の喫茶店に行つてからしませんか？ アルベールさんも行くつもりなのでしよう？」

「勿論です。自分の娘に会いたいのは当然ですが、ミス弥生にもお礼を言いたかったので」

「では、決まりじゃな」

「はい。一緒に参りましょう」

こうして、学園内でとんでもない即席パーティーが結成されたのであった。

・  
・  
・  
・  
・  
・

ラウラと弥生目当てでやって来たクラリツサは、訓練の時ですら見せない完全な本気モードの眼で周囲を観察していた。

「一年一組……一年一組……どこだ……どこなのだ……!」

クラリツサ自身が見目麗しい女性だからいいが、これがもしも男だった場合、間違いなく不審者確定で連行されるだろう。クラリツサは自分の親に感謝すべきだ。

「ねえ、あの眼帯を付けた女の人……」

「うん。なんか雰囲気是一年一組のラウラちゃんにそっくりだね」

「関係者とか?」

早速、噂になっているが、それもある意味で当然だ。

なにせ、今の彼女の服装は私服ではなく完全な軍服。

何を思っただれを着てきたのかは本気で分からないが、間違いなく悪目立ちしているのは確実だ。

「むむっ!? これはっ!」

いきなりクラリツサの額がキュピーン! と光ってから彼方の方を見た。

「こつちから隊長の匂いがする!! 間違いない!!」

一体お前はどんな嗅覚をしてるんだ。

狙いを定めたクラリツサは、目標に向かって向かい出す。

勿論、学園内の廊下は走ってはいけけないので早歩きで。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

偶の息抜きとして学園祭に来ていたチエルシーは、久々のプライベートを楽しんでいた。

彼女は名家であるオルコット家のメイド長という立場である為、他のメイド達と比べて仕事量が遥かに多い。

故に、こうした纏まった休みなど殆ど無いに等しい。

貴重な時間を噛み締めるように、チエルシーは華やかに装飾がされた廊下を歩いていた。

「日本に来たのはこれが初めてだけど……本当に凄い所なのね」

経済大国の名は伊達ではない。

特にISを開発した国というネームバリューは、今の世では非常に強大な意味を持つため、日本という国を大昔の黄金の国ジパングのように感じている外国人も少なくない。

「それに……はむ」

先程買ったクレープを一口食べて、その口の端にクリームをくつつて、それを舌でペロリと舐め取る。

「学生が作った物だからといっても侮れないわね。このクレープも中々の出来栄えだわ。それなりに売れていたし。折角日本にいるんだし、ここは飛行機内のネットで見た『オコノミヤキ』や『タコヤキ』とやらを食してみようかしら」

休みの日でも、やっぱりメイドとしての癖は治らない。

日本の食文化を少しでも学んでからイギリスに持ち帰る満々のチエルシーなのであった。

・  
・  
・  
・  
・  
・

「ま……迷った……」

意気揚々と学園内に入った乱音ではあったが、入って早々に迷ってしまった。

だからと言ってタダでは起きないのが彼女で、その手には既に戦利品であるかき氷が握られている。

現在、乱音は中庭にあるベンチに座ってから小休止の真っ最中だ。

「つたく……無駄に広過ぎなんだっつーの……モグモグ……」

文句を言いつつも、ちゃっかりとかき氷だけは食べ進める。

口では色々と言ってはいるものの、彼女なりに学園祭を楽しんでいるようだ。

「鈴お姉ちゃんの所に行ければ一番なんだけど、二組の教室がどこか分からないしな〜」

一応、校舎内で配られる学園祭のパンフレットに簡易的な学園の地図が書かれてはいるのだが、彼女はそれを受け取らずに真っ直ぐに来てしまった。

妙なところで似た者同士の従妹同士だった。

だが、そんな彼女の元に意外な救世主がやって来る。

「アンタ……こんな所で何やってんのよ？」

「り……鈴お姉ちゃんっ!？」

呆れ顔でやって来たのは、真っ赤なチャイナドレスを着た鈴だった。

普段はツイントールに纏めている長い髪も、今日はシニヨンで纏め



てスツキリとしている。

かなり際どいスリットが入っているが、本人は全く気にしてない様子だ。

「な…なんでここに？」

「それはこっちのセリフ。休憩がてらに学園祭を少し見て回ろうとしてたら、廊下の窓からアンタがブーたれながら中庭のベンチでかき氷を食べてる姿が見えたのよ」

「う……………」

一部始終見られていた。

そう思うと途端に恥ずかしくなる。

「大方、あたしのいる二組に来ようとしてたんでしょ？」

「まあ…………一応…………」

「じゃあ丁度いいじゃない。戻るついでに連れて行ってあげるわよ。その代り、ちゃんとこっちの売り上げに貢献しなさいよ？」

「それはいいけど…………一体何をやってるの？」

「中華喫茶。でも、一組の人氣のお蔭で閑古鳥が鳴いてるのよね」

「それって…………例の男子のせい？」

「原因の半分は間違いなくそうでしょうね」

「もう半分は？」

「弥生の耳かきね」

「は？」

一瞬、乱音は本気で呆けてしまった。

密かに尊敬している従姉の口から、いつもなら決して出ないような単語が飛び出してきたから。

「次の休憩の時には絶対にあたしも一組に行つて、弥生の耳かきを堪能してやるわ……………」

意味不明な事で燃え上がっている鈴を見て、どうしたらいいかわからずに乱音は目が点になる。

（鈴お姉ちゃんがそこまで御執心になる弥生さんって、どんな人なんだろ…………）

ここにきて、単純な好奇心から乱音も弥生に会いたいと思つてし

まった。

新たなフラグが建築された瞬間だった。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「おい、その見るからに怪しい不審者」

「ギクッ！」

お粗末な変装をして学内をうろついている束だったが、遂に誰かに呼び止められてしまった。

そこらの連中ならば余裕で振りきれるが、今回ばかりはそうもいかない。

何故なら、彼女を呼び止めたのが束の唯一無二の親友である千冬だったから。

「お前……まさかそれで本気で変装をしているつもりか……束……」

「ワ……ワターシ、アヤシクナ〜イ。タバネツテダレ？　ワタシワカラナイヨ〜」

「見ていて悲しくなるから、その口調だけは本気で止めろ。もしも箒が見たら本気で泣くぞ……」

「それだけは嫌だ」

急に素に戻る。

それなら最初から普通に話していればいいものを。

「はあ……どうせ、お前も一組のメイド喫茶……というか、弥生の耳かきが目当てなのだろう？」

「……バレてた？」

「当たり前だ。なんせ、私も目的は同じだからな」

「ちーちゃん……」

自分の親友が同じ穴のムジナだった件。

でも、だからと言って馬鹿にしたりはしない。

それが束クオリティ。

「行くぞ」

「はい？」

「どうせ目的地は一緒だ。ならば、お前が変な事をしないように見張るのも兼ねて一緒に行くのが一番だろう」

「ちーちゃん♡」

「バ……くつつくな！ 歩きにくいだろうが！」

なんだかんだ言って、やっぱり仲がいい二人なのでした。

「だが、一組に着けば私達は敵同士だ。弥生の耳かきは絶対に渡さん」

「それはごつちのセリフだよ……ちーちゃん……！」

前言撤回。やっぱおかしな関係の二人でした。

・  
・  
・  
・  
・  
・

幕南からやって来た美少女軍団はというと、各クラスを回りながら学園祭を存分に満喫していた。

「流石は天下のIS学園だな。学園祭一つとっても規模と気合の入り方が桁違いだわ」

「金だけはめっちゃ掛けてるからなく」

「周り中がハイテクの塊だしな」

本人達は至って普通になっているが、元々の容姿がアイドル顔負けのレベルに至っているので、嫌でも周囲からの注目を集めてしまう。

当人たちはいつもの事なので全く気にも留めていないが。

「さつき寄った美術部の爆弾解体ゲーム。桜井さんつてば微塵も容赦なかったな〜」

「向こうの子……マジで泣いてたしな」

「開始十秒でクリアはあんまりでしょ」

「そんな事言われても……まさか、あそこまで簡単だとは思わなかったんだもん」

六人の影に隠れがちだが、桜井も立派に人外級の実力は持っている。

弥生と同じように、本人は全く自覚していないが。

「腹減った〜」

「植村……お前ついさつきたこ焼きと焼きモロコシとお好み焼きと焼きそばを食ったばかりだろうが……」

「あれだけじゃ全然物足りない！ もっと食べなきゃ！」

「ほんと……弥生と同レベルの大食いだぜ……あれ？」

「どうした？」

「塩田はどこに行った？」

・  
・  
・  
・  
・  
・

廊下の端。全く人気が無い仄暗い空間に二人はいた。

塩田は背を向けた状態で立っていて、その背後では楯無が静かに跪いている。

暗部の長にしてIS学園の生徒会長である楯無が頭を下げるという事は、それだけで二人の関係が窺い知れる。

「お久し振りでございます……可憐様。勇氣様と忍様、先代様はご健

勝でございませうでしょうか」

「その名はとつくに捨てた。今のオレは『鉄人』だよ。それと、姉さんと忍と父さんは相変わらず元気だよ」

「それは何よりでございませう」

ここで会話が途切れ、場は沈黙が流れる。

「こうして顔を合わせるのは久しぶりだな。いつ以来になるかな？」

「私が『楯無』を襲名し、貴女様が『鉄人』の名を襲名した日以来かと」

「そっか……電話越しに話す事は何回かあっても、直接会うのは数年振りになるんだな……」

柄にもなく懐かしい気持ちになる。

顔を見せていないのをいい事に、思わず微笑んでしまう。

「夏休みの時、お前の妹と会ったよ」

「簪ちゃんと……？」

「ああ。弥生と仲良さそうにした。明るくなってよかったじゃねえか。弥生に感謝だな」

「はい……本当に……弥生ちゃんには幾ら感謝してもしきれません……」

妹の心を開いて癒してくれたばかりか、命懸けで生徒達の事を守ってくれた。

それ以外にも陰ながら学園に貢献してくれた弥生の事を、楯無は冗談抜きで好きになっていた。

これまでの冗談染みたセリフは、実は本心から出ている言葉だったのだ。

「他の五人もお前さんに会いたがっていたよ。だから、そろそろ堅苦しいのは終わりだ。こっからは『神』と『臣下』じゃなくて、『先輩』と『後輩』に戻ろうや」

「鉄人様がそう仰られるのであれば……」

スツ……と立ち上がり、楯無はいつもの笑顔を見せた。

「まずは皆と合流して、それから弥生がいるっていう一組に行くつもりだけど、そっちはどうするつもりッスか？ 楯無先輩♡」

「私も一組に行くこうと思ってたし、私が皆を案内してあげるわ。鉄人

ちゃん♡」

二人を覆っていた独特の空気は完全に消え去り、場に残ったのは二人の女子高生。

『普段の顔』に戻った二人は、揃って賑やかな廊下へと消えていった。

・  
・  
・  
・  
・  
・

「……………」

IS学園の中庭に設けられた屋台スペース。

その一角に、嘗て篠ノ之神社にて好評を得たオータムとスコールのラーメン屋台があった。

だが、その屋台には現在、なんとも言えない空気が流れている。

その原因は、屋台の目の前にいる二人だ。

「……………なんでここにいるんだよ……………アトロポス……………」

「それはこっちのセリフなんですけど……………どうして学園祭でラーメンの屋台をしてるんです?」

「金策の為に決まってるでしょうが……………いけしゃアシアアと……………」

「まさか……………また何か企んでるんじゃない?」

「いいえ。今回の私達は完全な休暇。プライベートです。偶には私達だつてリフレッシュしたいんです……………って、ラケシス姉さまがもう椅子に座ってスタンバイしてるっ!」

オータムとスコールとアトロポスがシリアスな空気を醸し出している中、それを完全に無視してラケシスが鼻息荒く椅子に座って割り箸を持って待機していた。

「……………」

「え？ 御託はいいから、とつととお前達のラーメンを食べさせて貰おうか？」

「食べる気満々かよ……」

「なんか色々台無しね。いいわ、ここからは追う側と追われる側じゃなくて、店側と客側になりましょうか」

「そうですね。この状態になったラケシス姉さまはもう止められませんか……無理に止めようとしても碌な事になりませんから」

「お前も苦労してんだな……チャーシュー一枚おまけしてやるよ」  
「ありがとうございます……」

「なんだか世知辛くなりそうな会話をしていると、そこに意外な来客がやって来た。」

「では、私も一杯いただけますか？」

「へいよ……って、お前は祭りの時に来てた謎の美少女っ!？」

「小泉です。まさか、こんな場所でまたあの絶品ラーメンを再び堪能出来る機会が訪れるとは思いませんでした」

「(全く気配を感じなかった……)」

「早くラーメン食べたい」

歴戦の者達相手に全く気配を悟らせずに現れた小泉。

もしかしたら、この物語で最強なのは実は彼女なのかもしれない。

・

・

・

・

・

最後に、ゲストの中で一番の一般人である五反田兄妹はというと……。

「あれ？ ここ本気で何処だっ!？」

学園の真ん中で完全な迷子になっていた。

「なにやっつてんのよ、お兄！ 完全に迷子になってるじゃない！」

「んなこと言ってもよ……」

「こうしている間に弥生さんのメイド服姿を見逃したら、お兄のせいだからね！」

「俺だって美少女達のメイド服を見たいっつーの！ よし、こんな時は壁に手をつけて歩いていけばどこかに着く筈だ！ なんか前になんかの本でそんな事を読んだ気がする！ あれ？ なんで同じ場所をグルグルと回るんだっ!? ええい！ IS学園は人外の魔境なのかっ!？」

「お兄……それタダの柱だから……」

果たして、この二人はちゃんと無事に一組教室に辿り着く事が出来るのだろうか？

少なくとも、今の状態では無理そうである。



## 最初は同級生組

IS学園の文化祭。

色んな意味で最も注目を集めている一年一君のメイド喫茶。さつきからひつきりなしにお客さんが出たり入ったりして、もう本気で大忙しなんだよね。

流石のヒロインズも私に構っている暇は無いようで、今も教室の中を東奔西走している真つ最中。

「まさか、ここまで忙しくなろうとは……!」

「これも、弥生さんが魅力的過ぎるせいですわね!」

いや、そこでしたれっと私のせいにされても困るんですけど。

これは絶対に一夏が原因でしょうに。

だってほら、この学園で唯一無二の男子な訳だし、否が応でも注目はされるでしょ?」

「俺の弥生が皆に注目されるのは悪い気分じゃないけど、それはそれで少し複雑だな」

いつ。誰が。お前の女になったんだよバカ一夏。

お前はマジでいっぺん、束さんに頼んで脳の中を洗浄して貰ってきなさい。

「不幸中の幸いは、当たりくじである『弥生の耳かき』を今の所は女性客しか体験してない事だね」

「うむ。もしも不逞の輩が姫様に手を出そうものなら、私は容赦なくネットランチャーを叩き込んで、窓から放り出してやる」

ラ：ラウラ? 気持ち嬉しいけど、ここは二階だからね?

すぐに銃器を出さない事は偉いけど(偉いのか?)、乱暴は止めましょう。

「あ。またお客さんだよ」

「またか……」

「なんだか、終わりの無い迷路を只管に走ってる気分になってくるよね……」

皆も本気で疲れてきてるみたい。

そりやそうか。誰だつて、ここまで繁盛するなんて夢にも思つてなかつただろうし。

これはアレだね。交代で休憩を取るしかないね。

「お〜？ リンリン〜？」

「まだその渾名で呼ぶのね……。まあ、アンタの場合は悪意なんて微塵も感じないからいいんだけど」

え？ やつて来たお客さんつて鈴なの？

暇を見つけて来たいとは言つてたけど、思つてるよりも早かつたんだね。

「あ……」

鈴の恰好はいつもの制服じゃなくて、真っ赤でセクシーなチャイナドレスだった。

長いツインテールもまた、お団子で纏めていて、なんだか凄く大人びて見えた。

「ところで本音。弥生はいないの？」

「ちゃんというるよ。やよっちはイツチーと並ぶ、このお店の看板娘になつてるからね〜」

「やっぱりね。当然よ」

「なんでそこで鈴が嬉しそうにしてるのさ……」

疲れていても、シャルのツツコみは健在ですな。

きつと、ツツコミ脊髄が反射しちゃうんだろうね。

「やよっち〜。〜指名だよ〜」

「ん……」

他の客ならいざ知らず、友達に指名されたのならば行かないといけないよね。

そんな訳で、トコトコトコ〜……つて、鈴と一緒に似たような顔の、サイドテールの女の子が立つてる。鈴の知り合いかな？

「い……らっしやいま……せ……お嬢……さま……」

一応、スカートの端を掴んでご挨拶。

もう何度もやつて来たせいかな、羞恥心なんて異次元の彼方へと消えてしまいました。

「ちよ……鈴お姉ちゃん」

「何よ？」

「この人がメールで言ってた『板垣弥生』さんなの？」

「そうよ。あたしの将来のフィアンセ」

誰がじやい。寝言は寝てから言ってく下さい、お嬢様。

（この人が噂の……。近くで見ると物凄い美少女じゃない！ 清楚でスタイルも良くて、なんだか優しそうだし……）

「言っておくけど、弥生に粗相したら洒落にならないから、そのつもりでね」

「ど……どゆこと？」

「あまり大きな声じゃ言えないけど……弥生は、内閣総理大臣の娘なのよ」

「な……内閣総理大臣……」「し……し……!!」「んぐ……!」

なんかさつきからコソコソと話してますな。

取り敢えず、中に入ってからして欲しいんだけど。

「プハッ！ じよ……冗談よね？」

「アタシも最初はそう思ったけど、マジなのよ。臨海学校の時、この目で総理を見ちゃったんだから」

（嘘でしょっ!!? こんなにも可愛いのに、その上で更に総理の娘えっ!!? やっぱ……世の中って不公平に出来てるのね……）

この二人、本当に似た者同士なんだな。  
ずっと顔が百面相してるし。

「え……つと……他のお……客さま……の迷惑……になる……から……まずは中……に入ってく……れる……？」

「おっと。それもそうね。それじゃ、席まで案内をお願い出来るかしら？ アタシだけのメイドさん♡」

「か……畏ま……りま……し……」「ちよつと待った!!」「……え？」

鈴達の背後から非常に見覚えのある人影が二つ並んでる。

あれは……彼女達ですね。はい。

一応、鈴達の後ろにはお客さんが並んでないから、割り込みにはならないね。

「ゲ」

「え？」

やって来たのは、いつも通りの爽やかな笑顔を浮かべている、執事の恰好をしたロランさんと、なんでか白い着物を着ている簪。

4組と5組は一体何をやってるのさ……。

「フッフッフ……鈴くん。抜け駆けはいけないぞ」

「私達を出し抜こうだなんて、10年早いよ」

「ベ……別に抜け駆けとか出し抜こうだなんて考えてないわよ……」

なんて言ってるけど、顔はめっちゃ悔しそうだよ？

（チツ！ まさか、こいつ等がここまで早くやって来るなんて！ 弥生の耳かきを独占出来る数少ないチャンスが……！）

結局、文化祭になってもいつものメンバーが集結する訳なんですね。

お約束も、ここまで行けばもう運命に近いんじゃないだろうか。

「そんな訳で、私達も一緒に案内をお願い出来るかな？ 私だけのプリンセス」

しれっとロランさんが前に出てきて、私の手を掴んできた。

その手つきはとても優しいが、その代わりに私の背後から感じる殺気が半端じゃない。

「お客様……」

「おや、箒じゃないか。君のメイド服姿も美しいね」

「当店では、店員へのお触りは禁止されています……！」

ロランさんの殺し文句を完全無視して、顔面に血管を浮かべて注意をする箒。

本気で怖すぎて、さつきから泣きそうです。

「それは残念だ。折角、弥生を抱きしめながら座ろうと思っていたのだが」

「本気でやらせると思うか？」

「そ……それもそうだな……」

ロランさんが馬鹿な発言をした途端、ヒロインズの目が赤く光って暴走しそうになってる。

一夏なんて、今にも飛びかかりそうな勢いだよ？

ここまでやり取りして、ようやく席へと案内出来た。

ここの席は念には念を入れて4〜6人ぐらいは座れる広さを設けてあるので、四人で来られても余裕だ。

「これがメニュー…になります…」

「どれどれ…むっ!？」

お願いだから、ちゃんとまともな注文をしてよね。

間違っても、他の子達がネタで仕組んだヤツを頼んだりしないでよね!

「【メイドにご褒美セット】をください!」

チクシヨ

!!!

一瞬も迷う事無く注文しやがった〜!!!

「え…ええつと…わ…私はこの【プリンアラモード】をください…」

おお! この子はまともな注文をしてくれた!

私の中で、この見知らぬ少女に対する好感度がかなり上がった!

「お! プリンアラモードを注文するなんて、お目が高いね〜!」

「え? そうなんですか?」

「うん! 元々が板垣さんが考案した品だし、今なら板垣さんお手製の超絶品のプリンが食べれるわよ〜」

「【弥生のお手製っ!?!】」

近くを通りかかった鷹月さんが何気なく爆弾を置いていく。

本人からすれば善意でやった事なんだろうけど、この状況では完全に逆効果だよ〜!

「【こつちにもお願いします!!】」

「はいはい。メイドにご褒美セットにプリンアラモード4つ頂きました〜! ご指名貰ったんだし、板垣さんも一緒に座っていいよ〜」

あ〜…行っちゃった。

私の意思はどこにあるのかしら…。

「えつと…」

鈴と簪とロランさんの『ここに座れ』オーラが半端じゃないので、仕方なく座る事に。

でも、座ったのは彼女達の隣じゃなくて、真っ先にプリンを注文してくれた女の子の隣。

「クツ……」

そこ、悔しそうにしない。

（う……うわ……隣に座られちゃったよ……！ 睫毛長っ！ 肌白っ！

しかも……すっごくいい匂いがする……）

おや？　なんか見られてる？　初対面だから緊張させちゃったのかな？

その気持ちは痛い程理解出来るから、ここはそっと笑いかけて安心させてあげますか。

「……っ！」

（笑顔……綺麗……これが本物のヤマトナデシコなんだ……）

あやや。なんか増々緊張させちゃった感じ？

うくん……マズったな。

「ううう……」

んで、その三人はどうして顔を抑えているの？

「弥生の笑顔が可愛すぎて生きてるのが辛い……」

お前達は本気でどうしたっ!?　文化祭だからいつも以上に羽目を外してるのっ!?

「ところで、さっきから気になっていたんだが、鈴くんと一緒にいる少女は誰なんだい？」

「あ。まだ紹介してなかったっけ。乱」

「う……うん」

乱？　それがこの子の名前？

「えっと……台湾の代表候補生の『鳳乱音』っていいいます。鈴お姉ちゃんとは従妹同士です」

「成る程……従妹か。道理で目元などが似ていると思った」

「うん。でも、鈴とは違って大人しい子」

「いや、こいつの場合は緊張してるだけで、いつもはもっとう……活発

な子よ?」

成る程。初めて来た異国に緊張して『借りて来た猫』状態になつて  
る訳か。

この後、ロランさんと簪もそれぞれに自己紹介をした。  
目の前にいる二人も代表候補生だと知って、かなり驚いていたけ  
ど。

「日本とオランダの代表候補生……」

「驚くのはまだ早いわよ」

「え?」

「この一組には、イギリスとフランスとドイツの代表候補生もいるん  
だから」

「……なんで一つのクラスに三人も代表候補生がいるの?」

言つちやつたよ! 誰もがツツコみたくて、でもなんでか言えな  
かつた事をこの子が普通に言つちやつたよ!

「さあ? お上の都合じゃない?」

んで、鈴も鈴でなんか適当に返してるし!

「にしても、二人のその恰好ってなんなのよ?」

「私がいる5組は1組とは対になる『執事喫茶』をやっていたんだが、  
矢張り1組には敵わないようだな。すっかり閑古鳥が鳴いているよ」

「それはこっちも同じ。2組は『中華喫茶』をやってたんだけど、場所  
が悪過ぎたわね。1組の隣じゃ、余りにも分が悪すぎるわ」

「ウチはお化け屋敷。ジャンルが違うから、そこそこお客さんが入っ  
てる」

なんか急に申し訳なくなってきた……。

でも、お蔭で今の皆の恰好にも納得が出来た。

「弥生の女神の如き魅力の前では、私達程度では塵にも等しいという  
ことか……」

「そうね。マジで弥生のメイド服姿って可愛いもん」

可愛い可愛いって言わないでよ……本気で照れるじゃんか……。

「弥生」

「簪……?」

「萌え」

超真剣な顔でサムズアップしないでくれるかなっ!?

こっちが反応に困るんだけど!

「本当に仲がいいわよね。はい、ご注文のプリンアラモード×4とメイドにご褒美セットです」

鷹月さんがキャスター付きのトレイに注文の品を乗せて戻ってきた。

確かこの子って、筈と同じ部屋だったよね?

結構、筈と話している場面をよく見るから。

「それじゃ、何か追加注文があればいつでもお申し付けください。お嬢様方」

テーブルの上に並べられたプリンをよく観察する。

うん。気泡も全く無いし、我ながら今回は本当に上手く出来た方だな。

「……これ……本当に板垣さん……が作ったんですか?」

「ん……」

乱音ちゃんが驚いた様子で私とプリンを交互に見る。

何か変な所でもあったかな?

(これ……本当に目の前の人を作ったの? 本気で美味しそうなんだけど……。私と少ししか変わらないのに、ここまで凄い人だなんて……)

あ……あれ? なんか落ち込んでる? なんで?

「鈴お姉ちゃん……」

「どうしたの?」

「完璧女子って……本当にいるんだね……」

「そうよ。弥生は、同じ女目線で見ても本当に凄いんだから。ん」

♡ このプリン、マジで超おいし〜♡」

「激うま……♡」

「これが至高の美味というものか……。まさに感動の味だ……!」

ロランさん。喜んでくれるのは嬉しいけど、少し大げさ過ぎ。

「んで、【メイドにご褒美セット】ってのは何をするのよ?」



「えと……」

なんて説明していいのか私も困ったけど、取り敢えずは前回あった事をそのまま教えた。

「そのまんまじゃない……」

「だが、ナイスアイデアと言わざるえないな」

「アイデア賞……」

いや、そんな大層なもんじゃないからね絶対。

普通に羞恥心を煽るだけのものですよ。

「ポツキーは結構あるみたいだし、まずは一人一本ずつやりましょうか」

「賛成」

しなくていいです。ほら、また乱音ちゃんが困ってるじゃない。

「そ…それでは弥生。その可愛らしいお口を開けてくれたまえ」

「あくん……あむ」

どうしてロランさんは、ツカキヤマみたいな口調じゃないと会話できないの？

「モキュモキュモキュモキュ……ぐつくん」

「はふう……♡」

なんか芝居がかった感じでロランさんが背凭れに体を預けてるし。

「これは……反則だよ……」

どこが？

「弥生……君は一体何処まで私を魅了すれば気が済むんだい？」

知らんがな。

「こ…今度は私がやる……!」

二番目は簪。

今回も私は普通に、差し出されたポツキーを食べた。そう、普通に。

「ヤバ……興奮のし過ぎで鼻血が……」

ちよつとおおっ!?

どこをどう興奮して鼻血が出ちやっただのかなあっ!?

そこの所を詳しく説明求むよ!

「んじゃ……次はあたしが。鈴、行きます」

今から君はどこに出撃するんですかね？

ま、ちゃんと食べるけどさ。

「何よコレ……。あたしのチャイナドレスで魅了して弥生を惚れ直させようと思ってたのに、逆にこっちが惚れ直しちゃったじゃない……」

なんか好き勝手に言ってますにや〜。

ポツキ〜とっても美味しいな〜♡（現実逃避）

その後も、いつも通りのやりとりを繰り返して、その度に乱音ちゃんが困惑し、他の皆がちよっかいを出して。

ほんの少しの間だけの楽しい時間が過ぎ去り、遂に運命の時が訪れた。

お会計の時に行われるくじ引き。

どうして、私なんかの耳かきにそこまで躍起になるのかなあ〜

……。

訳が分からないよ。